

君色の栄冠

. Sake

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女性しか存在しないこの世界で、かつて強豪と呼ばれた至誠高校野球部。

現在ではその強さは感じられなくなっていた。

天才的な野球センスを持った初心者投手、常に冷静沈着な安打製造機の遊撃手、分析力と采配力を兼ね備えたマネージャー。

この三名の新入部員が入部し、新たな至誠伝説の幕が上がる。

※微量ながらもJネタも入っています。

2021/2/12 完結しました。

2022/1/31〜現在加筆・訂正作業中

目次

設定集(至誠)	1
設定集(他校)	8
シーズン1	
第1球 はじまりの物語	13
第2球 マネージャー	34
第3球 初陣	50
第4球 導く者	65
第5球 反省点	79
第6球 抽選会	99
第7球 開会式	111
第8球 夏の開幕	121
第9球 勝ち抜ける	136
第10球 投手戦	145
第11球 突破口	158
第12球 休息を取ろう	174
第13球 抑えてみせる	188
第14球 負けてたまるか	206
第15球 良い投手の条件	224
第16球 終わりは唐突に	239
第17球 決戦! 蒼海大相模	252
第18球 伏兵登場	268
第19球 エースの誓い	282
第20球 祝勝会	292

第21球	抽選会、再び	301
第22球	襲来のデーバ	315
第23球	群青に染まる	330
第24球	真紅に染まれ	344
第25球	翡翠の君は	358
第26球	琥珀色の作戦	374
第27球	裏の顔	385
第28球	来年に向けて	398
第29球	新たな相棒	409
番外編	夏大総評	420
第30球	プロになるということ	425
第31球	季節よ巡れ	434

第32球	体力つける!	448
番外編	バレンタイン	460
第33球	卒業式	468
シーズン2		
設定集		475
第1球	新入部員	483
第2球	親友	497
第3球	四番の自覚	510
第4球	実力チェック	520
第5球	いざ、合宿	534
第6球	ナイスピッチ!	547
番外編	勉学に励め	561
第7球	馬子にも衣装?	571

第8球 珍しさの連鎖

580

第9球 作戦会議

592

第10球 夏大開始!

605

第11球 自分らしく

618

第12球 気持ちを切り替えて

627

第13球 流れという名の波に乗れ!

638

第14球 勝つ為に

650

第15球 ガラスのハート

661

第16球 早手の如く翔け、明かりが

灯る

673

第17球 勝ち上がれ!

685

第18球 立ちほだかる蒼き者

695

第19球 エースの背中

709

番外編 夏大総評

723

第20球 課題は明確

730

第21球 ドラフト!

742

第22球 それぞれのやるべき事

757

第23球 懐かしの3人

766

第24球 別れの季節

779

シーズン3

キャラ紹介(至誠)

792

第1球 新たな風

802

第2球	知られざる強打者	820
番外編	狙い目は誰？	834
第3球	最後のピース	851
第4球	過去を乗り越えて	866
第5球	君と私の同族嫌悪	886
第6球	弱点を克服せよ	902
第7球	勝利の方程式	919
第8球	名選手	934
第9球	エース	945
第10球	最後の夏	959
第11球	雨の中で	976
第12球	駆け抜けろ！	995
第13球	安打製造機	1001

第14球	大胆不適なサイン	1015
第15球	不穏な始まり	1035
第16球	吹き飛ばせ！	1056
第17球	伏兵、再び	1068
第18球	祝勝！	1082
第19球	新たな強敵	1092
第20球	全国無双	1106
第21球	臥竜鳳雛	1151
第22球	伏竜鳳雛	1161
第23球	鱗子鳳雛	1191
第24球	決戦の前に	1158
第25球	真紅に燃える	1170
第26球	空色の羽ばたき	1182

第27球	群青エース	1194
第28球	翡翠の輝き	1213
第29球	次のステージへ	1227
U—18編		
第30球	英傑集合	1235
第31球	魔球完成!	1249
第32球	最高のスタートダッシュ	1258
第33球	投手リレー	1270
第34球	大事な一戦	1285
第35球	無援護エース	1296
第36球	束の間のお休み	1310
第37球	立ち止まるものか	1324

第38球	頂点へ	1338
第39球	試合を決めるのは	1351
最終章		
第40球	自分の道を選んで	1365
第41球	選ばれし者	1376
最終球	君色の栄冠	1393
おまけ		
短編集		1403
悪夢のような現実		1416
短編集②		1428

設定集（至誠）

至誠しせい高校

神奈川県横浜市に位置する私立高校。

校則が緩く染髪、髪型自由で私服登校やアクセサリー着用なども許可されている。

普通科と体育科に分かれており、普通科の偏差値は56、体育科の偏差値は40。

学業、スポーツ優秀者を推薦で獲得しており、推薦を受けた者は学費全額免除。審査は年に一度。

校則の緩さと明るい雰囲気で中学生からの人気はあるが、保護者からの評判は良くない。

特にプロのアスリートを目指している家庭からはやる気のない高校だと思われる。

普通科は二年次に文理選択があり一組から四組までが文系、五組から七組が理系となっている。

体育科は成績順でクラスが決められておりA組が最高クラス、D組が最低クラス。

浜矢 伊吹 神奈川県出身 一年二組 投手／右翼手

右投右打 162cm／50kg 12月22日生まれ

類稀な野球の才能と持ち前の運動神経で凄まじい上達を見せる初心者。

投手としては速球派だがコントロールは悪い。

野手としてはライナーの処理は上手いがフライの処理は絶望的に下手。

バント失敗の小フライは普通に捕れる。

スタミナは平凡だが回復速度が異常。

片親で裕福ではない家庭なので、母を助ける為にプロ入りし多額の契約金を手にする事を夢見る。

テンションが高いせいでやんちゃに見られがちだが、実際は頭が良くて周囲のことをよく見ている。

鈴木 美希 神奈川県出身 一年二組 遊撃手

右投右打 160cm／52kg 6月22日生まれ

高い守備能力とミート力が売りの技術型遊撃手。

野球脳も高くサイン無しでも自分で考えてプレーする事ができ、特に走塁が上手い。

少し毒舌な所もあるが仲間想いの優しい子。

成績優秀、容姿端麗でクラス内での人気も高い。
今のポジションは遊撃手だが、何やら秘密があるらしい。

柳谷 真衣 神奈川県出身 三年Bクラス 捕手

右投左打 168cm/66kg 2月14日生まれ

走攻守三拍子揃った名選手で、高校No.1捕手としての呼び声も高い。

安定感のある打撃が武器で得点圏に滅法強く、チームでは主将と四番を務める。

平均以上ではあるが、守備面では少し不安も残る。

進学理由は灰原監督がいるから。

灰原からは至誠史上最強打者になれる逸材との評価を受けてスカウトされた。

中上 佳奈恵 静岡県出身 三年Bクラス 投手/右翼手

左投左打 165cm/60kg 1月1日生まれ

投げられない変化球は無いと言われるが、実はフォークとナックルは投げられない。

多彩な変化球とコントロールを武器に三振の山を築く技巧派投手。最速146km。

一応打撃面でも頼りになる先輩。

柳谷ほどではないがプロからも注目されている。

付けられたあだ名は変化球マスター。

糸賀 由美香 茨城県出身 三年Cクラス 外野手

左投左打 172cm／67kg 6月30日生まれ

高いミート力と走力を武器に相手守備を引つ掻き回す至誠の切込み隊長。

広い守備範囲と強肩の持ち主で守備でも活躍する。

実はホームランを打てる長打力も持っているが、打率重視の為に狙う事はほぼない。

柳谷、中上と同じくプロから注目されている。

金堂 神奈 東京都出身 二年Bクラス 一塁手

右投右打 160cm／54kg 11月26日生まれ

気持ち悪いと評判の体を投手に向ける独特なフォームから安打を次々と製造している。

顔付近の球やワンバウンドした球でも難なく打ち返すが、その反面パワー不足で長打は打てない。

至誠の中で唯一の木製バット使い。

山田 沙也加 山梨県出身 二年Dクラス 三塁手

右投右打 170cm/64kg 5月5日生まれ

アウトローの緩い球を流して余裕でスタンドインさせるパワーの持ち主。

三振が多く肩は強いが守備は苦手でエラーも多い。

ホームランを量産するが、鈍足でフェンス直撃の単打も量産しがち。来年度の四番候補その1。

青羽 翼 長野県出身 二年Cクラス 左翼手/投手

右投右打 169cm/62kg 10月19日生まれ

目つきの鋭さやクールな性格から元ヤン疑惑があるが、決してそんな事実は無い。

チーム内で山田に次ぐパワーの持ち主。

得点圏に強いが三振も多く守備も苦手。

山田の次に足が遅いが、高い走塁意識でカバーしている。来年度の四番候補その2。

菊池 悠河^{ゆうか} 神奈川県出身 二年Dクラス 二塁手

二塁手 右投右打 156cm/52kg 7月20日生まれ

広い守備範囲と送球技術を武器に至誠の内野を支える守備職人。

足も速く小技も上手いので二番を打つ事が多い。

打撃は苦手意識があり、三振が多く得点圏にも弱い。明るい性格で後輩に慕わやすい。

千秋^{せんしゅう}

美月 神奈川県出身 一年三組 マネージャー

左投両打 154cm／46kg 10月22日生まれ

広く深い野球知識でチームを支える戦略担当。

マッサージや栄養バランスの考えられた料理を作るだけでなく、ノックも打てる万能プレイヤー。

有名選手に会いたくて至誠に入学した。

中学時代は無名だった鈴井の隠れ大ファン。

野球のことになると暴走しがちで、その際にはアホ毛が荒ぶる。

灰原 麗衣 神奈川県出身 捕手／三塁手 26歳

右投右打 168cm／64kg 9月18日生まれ

サングラスは日光に弱い体質なのでかけている。

現役時代は高校No.1捕手としてドラ1でプロ入りし、新人賞も獲得した選手。

肩の怪我が打撃にも影響を及ぼしたのと、素行不良で5年目に戦力外通告を受ける。至誠で体罰が起きた直後だったので、トライアウトを受けずそのまま至誠の監督に就任した。

小林 周子 東京出身 27歳

右利き 157cm / 50kg 3月28日生まれ

黒髪ロングで茶色の瞳。

浜矢と鈴井のクラスの担任。

担当科目は家庭科で野球には詳しくないが、生徒と共通の話題が欲しいということでも猛勉強中。

至誠のOGというわけではない。

監督の事は年下なのに頼りになると思っているが、同時に放っておけない存在だとも思っている。

設定集（他校）

佐久間 玲 静岡県出身 一年生 投手／右翼手

右投右打 165cm57kg 3月9日生まれ

一年生ながら最速145kmのストレートが武器の速球派投手だが、壊滅的にコントロールが悪い。

四死球を連発してランナーを溜め、そのテンポの悪さで守備の乱れを生んでしまう事も多々ある。

身長と目つきのせいで怖がられるが、実際は面倒見の良い性格。

一年生とは思えないフィジカルと打撃センスの持ち主で主に代打として出場。

予選では2本塁打を含む5安打6打点と大暴れ。脚も遅くは無く、将来性の高さを窺える。

投手としては7イニングで5四死球と制球の悪さが浮き出た。

県内最速候補のストレートでこれからの活躍が期待されている。

相良 陽菜^{はるな} 大阪府出身 三年生 投手

左投左打 167cm / 59kg 3月22日生まれ

制球力、スタミナ、変化球、ストレートのノビ、全てが一級品の県内最高投手。最速150km。

一年生の秋からエースナンバーを背負い、同時に強豪校の重圧や期待も背負ってきた。

投手としてだけでなく打者としての才能もあり、高校通算15本塁打。

顔良し性格良し頭良しで野球の実力も文句無の完璧超人なので校内にファンクラブが出来るほど人気。

育ちが良く負の感情を露わにすることは滅多に無いが、中上の挑発には乗ってしまっ

た。蒼海大相模を選んだ理由はライバルの山城とチームメイトになり、実力を高め合いたかったから。

飛鷹 涼風^{すずか} 東京都出身 一年生 中堅手

左投左打 164cm 59kg 3月14日生まれ

一年生でスタメンを勝ち取りチームを全国まで導いた立役者。

打順は主に一番か三番を打つ事が多い。

走攻守三拍子揃った名選手であり、人徳もある。

バットで肩をトントンと叩くタイミングの取り方が特徴。

作中屈指の美形であり、性格も良し。

厨二病で痛い発言を多くするが、普通に喋れる。

予選では25打数8安打、1本塁打5打点の活躍。2盗塁も決め走力もアピールした。

斑鳩いかるが 雪風 奈良県出身 一年生 三塁手

右投右打 165cm60kg 9月10日生まれ

飛鷹と同じく一年生でスタメンを勝ち取り、四番打者を務めていた。

守備走塁は課題が残るが、長打力は既に全国トップクラス。

チャンスにも強く何度もチームを助けてきた。

飛鷹と同レベルの美形で性格も良い。

常にクールを気取っているタイプの厨二病。

予選では24打数7安打、2本塁打7打点と大活躍。

しかし2失策と守備では精細さを欠いた。

大鷲 千晴 栃木県出身 一年生 投手／右翼手

右投右打 154cm 49kg 12月1日生まれ

一年生ながら背番号1を奪い取った投手。

豪快なフォームとは裏腹に制球重視の投球をし、ブレーキの効いた2種類のチェンジアップが武器の技巧派投手。最速140km。

心の中に妄想を溜め込むタイプの厨二病。

投手としては26イニングと1/3を投げ防御率2.39。

しかし被本塁打4と球質の軽さが露呈した。

打者としては11打数4安打、2打点と中々の活躍。

神田 翠嵐 東京都出身 一年生 投手／中堅手

左投左打 168cm 62kg 12月28日生まれ

姉は現役のプロ野球選手でレジェンドの神田朱里^{じゅり}。

制球、変化量、球威全てがハイレベルで全ての球種を決め球として使える。最速14

5km。

頭も容姿も良く、欠点が無いとメディアには言われているが、実際は他人を見下した発言を多くする。

投手としては28イニングを4失点、防御率1.55、奪三振43と素晴らしい成績を残した。

打者としても優秀で24打数9安打、2本塁打8打点と大暴れ。盗塁も2個決め盗塁技術の高さも見せつけた。

孤塚 志黄 東京都出身 一年生 捕手

右投右打 160cm 56kg 2月3日生まれ

神田とは幼稚園からの幼馴染だが、ある時期から距離が遠くなった。

性格に難のある神田とは違い、優しい心の持ち主で神田のフォローをしている。

キャッチング力と肩は全国でもトップクラス。

予選では24打数5安打、1本塁打3打点とまずまずの成績を残した。

しかし本塁打もマグレの当たりで、打率も2割を切らないギリギリのライン。

守備面では神田のキレのある変化球をガッチリと捕り失策0。

シーズン1

第1球 はじまりの物語

日本における高校野球の歴史は、およそ百年前から紡がれてきた。日差しが照りつけるグラウンド、喧しい蝉の鳴き声すらかき消す大音量の応援歌。選手が動く度に額を伝って汗が流れ落ち、グラウンドや黒のスパイクに染み込む。

全国高校野球選手権大会決勝戦。ここでプレーする事を許されるのは、予選に参加した四千校余りのうち——二校のみ。

特別な資格を得た二校の片方——神奈川県横浜市に位置する至誠しせい高校に、新たな物語が紡がれようとしていた。

(入学式って緊張するなあ……クラスに馴染めるといいな)

短く整えられた青い髪を靡かせながら校門を通る少女——浜矢伊吹は、新たな生活の始まりに緊張している様子。彼女を始めとした新入生らは、期待と不安の入り混じった顔をしている。

ここ至誠高校は校則が緩いことで有名な私立高校。髪型と髪色は自由、制服はあるが私服登校も許可されているなど、お洒落に気を配り始める高校生にとって天国のような

環境。

(まあ保護者ウケは悪いから入学者も減ってるんだけど……)

新入生でも数ヶ月してしまえば髪を真っ赤や金に染める者が続出し、尚且つ髪型もヘアアイロンやワックスなどでアレンジする生徒が多く在籍するのがこの学校の一番の特徴だろう。

その環境は生徒にとっては伸び伸びと自分らしさを出せる最高の環境なのだが、保護者には難しい顔をされる事も少なくない。

至誠高校には未来のアスリートを育成する体育科があるのも保護者ウケを悪くする原因になっている。本気で我が子をアスリートにしたいと考える保護者にとって、髪色や髪型が奇抜な至誠を不真面目な学校だと決め付けてしまう。

実際は見た目が奇抜なだけでスポーツに關しては至極真面目に取り組んでいるのだが、それを説明しても理解してくる者は少数。

そんな訳で、至誠高校の近年の入学者数は低下の軌道を描いてしまっている。

入学者数が少なくなれば設備を維持する費用を捻出するのが厳しくなり、更に学費が高くなり、それにより更に入学者が減る……といった負のループを辿ることになるのだが、そのような学校側の事情など知らない浜矢はクラス分けの紙が貼られた場所まで辿り着いた。

浜矢は人混みの後方から背伸びをして自身の名前を確認する。彼女の身長は162cm、一年生にしては高身長の種類に入る。

それほど苦戦することなく各クラスの生徒名を確認していき、本命である自分の名前を見つけ出す。浜矢伊吹——その名前が記されたクラスは二組。

（知ってる人はいなさそうだな。ま、その方が楽しいか）

浜矢は校舎内に貼られている紙の指示に従いながら、これから一年間世話になる教室に向かう。

彼女が入室した時には既に半数以上のクラスメイトが揃っており、その殆どが緊張した様子で自分の席に座っている。

浜矢も黒板に貼ってある座席表を確認し、自分の席に座る。

（流石に話しかける勇氣は出ないな。明日の自己紹介終わってからでいいや）

浜矢はコミュニケーション能力に不安がある訳ではないが、かと言って初対面の人間に臆せず話せる程ではない。そのため、明日の自己紹介を終えて名前を知ったのちに話しかけようと決めた。

しばらく経つと担任が教室に入ってくる。

「皆さん入学おめでとうございます。二組を担当する小林です」

手入れされた腰までの長い黒髪を靡かせる、若く美人な先生。

浜矢の小林に対する第一印象はそうだった。

二組の生徒は小林から入学式の流れについて説明を受け、一年生の集まる体育館に移動する。

いい具合に緊張がほぐれてきた一年生たちは校長特有の長い挨拶を船を漕ぎながらも何とか耐え、点呼が始まった。

浜矢はここでクラスメイトの名前や顔を出来るだけ覚えておこうと、呼ばれた生徒の顔をよく見る。

「鈴木美希さん」

「はい」

鈴木美希——そう呼ばれた少女が立ち上がると、浜矢の動きが止まった。否、視線を釘付けにされたと言う方が正しい。

暗めの茶髪を下の方で一つに纏めた美人。目つきが鋭く凜とした表情も相まってキツそうな印象を与えるが、美形である事実は揺るがない。

(同じクラスになれてラッキーだな)

あわよくば友人関係になりたい、そう考える浜矢であった。

「浜矢伊吹さん」

「はいっ！」

名前を呼ばれた浜矢はよく通る低めの声で返事をし、勢い良く立ち上がり、来賓と保護者席に一礼ずつして再び着席。

長い長い入学式を終えて下校の時間。部活体験も本日から行われており、廊下を歩き交う生徒たちはどの部活に見学に行こうか悩んでいる様子だった。

(まあ、私は部活に入る気は無いけど)

至誠は運動部を中心に部活動が盛んな高校だが、浜矢は部活をするためにここに入学したのではない。つまらなさそうなの、だかどこか羨やましそうな表情をしながら教室を出ると、目線の先に何か落ちていたのに気が付く。

(なんだこれ……って、生徒証じゃん！ 誰だよ落としたの……あつ)

氏名の欄には鈴井美希と書かれていた。入学式で目を奪われた美人クラスメイト——これを機に仲良くなれるかも知れない、そう思った浜矢はわき目も振らず走り出した。

お目当ての人物は意外と近くにいた。彼女の周囲に人はいない、話しかけるにはもってこいの好機。

「鈴井さん！」

「……なんですか」

鈴井はあからさまに警戒しているようだったが、知らない人間が走って追いかけてく

ればこうなるだろう、と浜矢は気に留めなかった。

「これ、落ちてましたよ」

「あ……ありがとう、浜矢さん」

「へっ……なんで私の名前」

「同じクラスでしょ？ 覚えてるよ」

記憶力は良い方だから、と鈴井は付け加えるが、初対面の相手の名前と顔を把握出来るのかと浜矢は驚愕した。

「敬語はいいよ、同い年なんだし」

「うん、よろしく。鈴井さんは部活見学行くの？」

「うん、野球部」

「……マジ？ 野球やるの？」

鈴井は身長はあるが華奢な体つきで、とても野球をやるようには見えない。衝撃の事実に浜矢が言葉を失っていると、鈴井は更に驚く発言をした。

「一応推薦で入ってきたし」

「……へ？ すい、せん？」

「うん、野球部へ推薦入部」

「え、ええええ!!」

(野球部に推薦!)　ここつて確か古豪だろ?　そんなところから推薦つてことは有名な選手なんじゃ……)

至誠はここ数年は結果を出せていないが、かつては全国制覇を果たした事のある古豪。

そんな高校から推薦が貰える選手となれば、県内ではそれなりに知名度があつたのだろうと察せられる。

「伊吹ちゃん」

「ん?　な、なに……?」

「一緒に行く?　野球部」

「……………行く」

いきなり名前で呼ばれたことやクールな見た目からは想像出来ないちゃん付けなどに浜矢は気を取られかけたが、何とか返事をした。

だがこの時の彼女の感情は一緒に野球をしてみたいというよりも、鈴井がプレーしている姿を見たいというものだった。

二人はグラウンドに向かっていている最中に色々な会話を交わした。家までの距離や進学した理由、野球について詳しいかなど。

浜矢は家まで歩いて10分程度、プロ野球は好きだが高校野球はそこまで詳しくない

ことを伝えた。

グラウンドに到着すると、既に何人か部員がいた。

「監督、こんにちは」

「お、来たか鈴井。そつちのは？」

「同じクラスの人です、野球は好きだけどほぼ未経験らしいです」

「そつか、おーい！ 集合！」

監督と呼ばれた女性はどこか鈴井と似ている、浜矢はそう感じた。

髪型や髪色は酷似しているのだが、それ以上に纏っている雰囲気似ている。

親子と言われても違和感はないがそこまで年齢差があるように見えないことから、姉妹みたいだというのが一番近いだろう。

監督の指示によって集まった部員は七人。

「まずは私からだな、私は監督の灰原麗衣。外部コーチだから教師では無いぞ」

「あ、だから挨拶の時になかったんですね」

「そうそう。ほら、三年から挨拶してって」

灰原麗衣、その名前にどこか引つかかるものを感じた浜矢だったが、先輩たちの自己紹介の邪魔をしてはいけなれないと思ひ口を挟むことは無かった。

それに加えてサングラスを付けている灰原に若干の恐怖心を抱いたのも、口を挟めな

かった要因だ。

灰原に促され、三年生と思わしき三人が前に出る。

「キャプテンで捕手の柳谷真衣。よろしく」

「私は投手の中上佳奈恵だよ、二人ともよろしくー！」

「んで、最後に私が中堅手の糸賀由美香。ほら、次は二年」

茶髪のミディアムヘアで少しクールそうに見えるのが柳谷、黒髪のミディアムヘアで優しそうな印象を受けるのが中上、茶髪のショートヘアで見た目だけならチャラそうなのが糸賀。

三人に共通しているのは体格が良く背が高いこと。特に糸賀は172cmと至誠屈指の高身長だ。

「私は二塁手の菊池悠河！ よつろしく！」

「三塁手の山田沙也加だよ！」

「二塁手の金堂神奈です。よろしくお願いします」

「……左翼手の青羽翼」

菊池と山田の二人はとても声が大きく、一自己紹介をただけでもムードメーカーだということ分かる。

（背がちっちゃい方が菊池先輩で、色々大きい方が山田先輩つと）

菊池は156cmと野球選手にしては小さく、対照的に山田は170cm64kgと恵まれた体格の持ち主。

金堂は口調から穏やかさを感じさせるが、青羽は逆に恐ろしさを感じる。金髪ショートで身長169cm、そして無口と新入生を怖がらせるには十分な要素を兼ね備えていた。

「ほら、一年もあいさつあいさつ!」

「遊撃手の鈴井美希です。守備面で迷惑をかける事は無いと思うので、よろしくお願います」

菊池に促されて鈴井が自己紹介をする。守備面で迷惑をかける事はない、その言葉の言い方には揺るぎない自信が込められていた。

(守備に自信があるタイプか。しかもショート)

鈴井の自己紹介に聞き入っていると九人分の視線を集めているのを感じ、浜矢は慌てて自己紹介をする。

「浜矢伊吹です。小学生の頃に二年間だけ野球はやってみました、けど今はほぼ初心者です……よろしくお願います」

「よろしく、小学校の時のポジションは?」

「えっと、セカンドでした」

「なるほどなるほど」

菊池が圧をかけるように笑顔で何度も頷く。だがその直後に初対面の後輩を威圧するな、と青羽にチョップを食らっていたが。

「なら浜矢今日は私とキャッチボールしようか、残りは普通に練習して！ 鈴井にも教えてやって」

「はい！」

浜矢と鈴井の二人は部室でそれぞれ体操着とユニフォームに着替え、再びグラウンドに戻ってくる。

「浜矢、経験者なら握りは覚えてるか？」

「多分……こうですよね」

「そうそう。フォームとかは気にせずまずは投げてみて」

「はいっ」

浜矢は灰原の言う通り軽く投げてみる。彼女は胸元を狙うという意識だけ持っていたが、本人の予想以上にボールは真つ直ぐ進んだ。

「ナイスボール！」

「ありがとうございます！」

灰原は浜矢の構えた場所に正確に投げてくる。しばらくそうして軽いキャッチボ―

ルを行なっていると、灰原が座ってミットを構える。

「投げる時に左肩を投げる方向に向けることだけ意識して、コントロール考えず全力で投げてみる」

「へ？ ……はい、分かりました」

浜矢は最初は格好良さのあるワインドアップで投げようとしたが、初心者自分には難しいと判断しノーワインドアップで投げようと決めた。

足を引くのと同時にグラブを胸元を上げ、膝にグラブを一回当てて思い切り腕を振り抜く。すると構えた場所の遥か上にボールが向かったが、灰原は難なく捕球する。

「わ、すみませーん！」

「いや平気……良い球投げるな、本当に投手未経験か？」

「えっ、はい」

灰原は笑顔のまま浜矢に近づき、グラブの中にボールを入れながら問いかける。

「うちで投手やってみる気はないか？」

「え……………」

「いや、そもそも入部するかも分かってないけど、もし入部するならさ」

「えっと……………」

いきなり才能を見出されて勧誘されたというのもあるが、浜矢が入部を悩んでいるの

には別の理由があつた。

(どうしようかな。うちは裕福つて訳ではないし、野球つてお金掛かるしお母さんに迷惑が掛かるかも)

浜矢の家は裕福ではない。それだけならまだ良いのだが、野球というのはスポーツの中でもお金が掛かる競技。

これ以上、一人で支えてくれている母に迷惑を掛けたくない、それが浜矢の考えだつた。

「その、費用つてどれくらいかかりますか……?」

「クラブとかバットくらいなら貸せるよ。あとはアイツらのお古とかになるかな」

おずおずと質問をする浜矢に、灰原は柳谷たちを指差しながら答える。それを聞き、やはり色んな人に迷惑を掛けてしまうとと思った浜矢は誘いを断ろうとしたが。

「私が指導すればプロにだって入れるぜ?」

「ぶ、プロ……!?!」

「ああ、それもドラフト上位。そうなれば契約金も年俸も大金になる」

「契約金……年俸……!」

プロ野球選手、ドラフト上位、契約金、年俸。そのワードから想像するのは大金を手にした自分。

だがまるで詐欺のような誘い文句に乗ってしまったもいものなのか、しかし貧乏な家庭を助ける為にはプロ野球選手という職業は最適だ。

「……入部します」

悩みに悩んだ末、浜矢の出した決断は入部だった。

「お、浜矢も入部ー?」

「はい! これからよろしくお願いします!!」

「よろしくー、そんな固くならないでいいよ」

「そうそう、尊敬される先輩じゃないし」

「ちよつとキャプテンどういう意味ですかー!?!」

「まあ……そのままの意味だよ」

満面の笑みで浜矢を迎え入れる菊池をイジる柳谷。これも彼女の緊張をほぐす為にやっているのだろう。

(柳谷先輩って冗談とか言わなさそうだと思ってたけど、意外とノリが良い人なんだな……他の先輩たちも笑ってるし、雰囲気は良さそう)

厳しい上下関係があり、下級生がまるで上級生の奴隷かのように扱われる環境では無かったことにひとまず安心する浜矢。

「そういえば他の部員っていないんですか?」

「そう、これで全員」

「前まではちゃんと部員いたんだけどな、単純に結果出せなくなったのと体罰でさ……」
「確かに数年前そんな話を聞いた気が……」

野球部顧問による体罰の発覚。それが原因で退部した部員も大勢おり、翌年の推薦入部は取り消し。

元々保護者からのウケが良くなかったのが、さらに悪くなったというのは浜矢も耳にした事がある。

「入れ替わりで私が監督になってからは、推薦で入ってくれる奴もいたんだけど……」

「それ以外での入部が少なくてこんな人数になったんだ、あとは監督も監督で単純に練習が厳しくて」

「付いていけないって言うて退部するやつも結構いたな。その反省を活かして今は緩めたけど」

仮にも古豪だというのに、こんなにも部員が少ない理由を灰原と柳谷が説明する。

「そうだったんですね……柳谷先輩も推薦ですか？」

「というか浜矢以外全員推薦だよ」

「はっ!? え、嘘ですよね？」

「残念だけど本当のことだよ」

(九人中八人が推薦とかどんないじめだよ……)

そう言いたかったが、それを言ったところでどうしようも出来ないので口にする事は無かった。

だが一つだけ疑問に感じる点があった。

「なんで推薦で九人集めなかったんですか?」

「校則の緩さと体罰事件、あとは近くにもっと設備良いところが何校もあるのが原因かな」
いくら真面目に練習しているとアピールしていても、どうしても染髪禁止にしている学校と比べると不真面目に見えてしまう。

それに加えて体罰、更には学費が高い割には設備が飛び抜けて良いわけではないというのも入部者離れを加速させてしまった。

「浜矢が入ってくれたら連合チームじゃなくて済むから助かったよ!」

「なるほど……え、大会出るんですか?」

「もつちろん! 目指すは全国制覇のみ!!」

山田と菊池、中上の声がハモる。

浜矢も大会という言葉聞いた直後こそ驚いたものの、推薦入部が八人もいれば全国も目指せるのではないのかと思いはじめたのだった。

「というわけで、本格的な練習は明日にしよう、今日は解散! 浜矢と三年はちよつと

残って」

「はい！」

「ありがとうございます！」

他の部員が帰るのを見送ってから灰原が話し出す。

話の内容は浜矢の金銭面の事情についてだ。この話をする許可は先程本人が出している。

「なるほどなー、なら私使ってないのあるよ！ 身長いくつ？」

「162です」

「おーデカい、私のが一番いいかな」

「佳奈恵って165だっけ、ちよつと大きくない？」

「いやこの中じゃ一番マシだから……」

柳谷は168、糸賀は172。ついでに灰原も168。この中では中上が一番浜矢の体型に近い。

「アンシャとー、バッテとー、あと守備手と投手用のグラブも使ってないのあるよ」

「なんでそんなにあるんだよ……」

「セールで安くなつたのとか見るとき、買いたくなるじゃん？」

「またそうやって無駄遣いするー」

(またって事は前科があるのかな……)

それも一回ではなく何回も前科がありその度に二人に怒られているのだが、それを浜矢が知る事はなかった。

今回の無駄遣いは浜矢を助けられるので無駄ではなくなり、糸賀と柳谷も普段よりも強く言わなかった。

「じゃあ明日持つてくるから」

「色々とありがとうございます……」

「気にしないでいいよ、持つててもどうせ使わないし」

「浜矢に助けられたな」

浜矢は中上に助けられ、中上は浜矢に助けられた。

いわゆるWin-Winの関係というやつだ。

これにて一件落着なのだが、浜矢には気になる点があった。

「あれ？ 中上先輩って左投げですよ？ 何で右投げのクラブなんて……」

「あー……別にね？ 右利き用だけどデザインが気に入ったから買ってインテリアになつてるとかじゃないからね？」

浜矢は糸賀の言っていた「また」とはこういう事なのかと一瞬で理解した。

「……というより、クラブってそんなポンポン買えるものですか？」

「佳奈恵はこう見えてお嬢様だからな」

「えっ!？」

「いつも言ってるけどそんなじゃないってば」

「いやいや、あの実家の写真見たらそんな事言えなくなるわ」

「田舎は何処もあんな感じですよ」

中上は否定しているが、彼女の立ち振る舞いや仕草にはどこか上品さが感じられる。

その割にはとても親しみやすいというので、彼女はクラス内外問わず友人が多い。

「伊吹もそんな目で見ない! ほら、帰るよー!」

「そんな怒るなよ」

「長話しちゃってごめんねー、また明日!」

「はい! お疲れ様でした!」

「バイバーイ」

「おつかれー」

至誠には寮が併設されており、柳谷たちはそこに帰っていく。

だが入寮は強制ではなく、鈴井や菊池のように自宅が近い場合は通学を選べるようになっっている。

「寮ってことは県外からなんですか?」

「そうそう、柳谷と菊池と鈴井以外は県外だな」

中上は静岡、糸賀は茨城、山田は山梨、青羽は長野、金堂は東京から来ている。

(……野球をする為に県外まで行くのってどんな感じなんだろう。やっぱり不安なのかな)

体罰などの影響で人数が足りず大会に出られるかも分からない高校に県外から入学する。

その選択にどれだけの葛藤があったのだろうか。

「ま、浜矢も早く帰りな。入学式だけなのにこんな時間じゃ親御さんも心配してるだろう」

「いえ、親はまだ帰ってこないですよ」

「そうなのか？」

「はい、いつも私が寝てから帰ってきますし、私が起きる前には家を出てます」

浜矢は幼い頃から片親で育ってきた。

朝から晩まで働き、ロクに休みも取れずに働く母の背中をずっと見てきていれば、プロ野球選手になって恩返しをしたいと思うのも当然だろう。

「浜矢も大変なんだな……ますますプロにならなくちゃな」

「はい！ 目指すはドラマー！ 契約金1億ですよ！」

「おつ、言ったな？ それなりに厳しくいくから覚悟しとけよ！」

「はいつ！」

これから体験するであろう厳しい練習や詰め込まれたスケジュールを想像しても、浜矢に入部を後悔する気持ちはなかった。

むしろ早くやりたい、早く上手になりたいという気持ちの方が大きい。

(ドライバーでプロに行つて、多額の契約金を掴み取る)

それが彼女の夢であり目標だ。

第2球 マネージャー

浜矢と鈴井の入部翌日、本格的な練習が開始した。

だが周囲がキャッチボールやトスバッティングなどボールを使った練習をしている中、浜矢だけは灰原の指導のもとプランクを行なっていた。

「うぐぐ……きつ、つい……監督ー！ 私もボール触りたいですー！」

「ダメだ、基礎をしつかり鍛えなきゃピッチャーは務まらないぞ」

「たし、かに……そうですけどー！」

「……じゃああと5分！ 終わったら休憩挟んで投球練習しようか」

「ありがとうございますー！」

人間、明確に終わりを告げられるとやる気が湧いてくるものである。

文句を言いながらも何だかんだ真面目にやっていたが、あと5分で終わると分かっているから浜矢の集中力は凄まじかった。

あれほどキツイキツイと言っていたプランクに耐え、ベンチで休んでいると人が近付いて来るのが見えた。

浜矢は迷わずその人影に向かって歩き出す。

「こんにちは」

「こんにちはー、入部希望ですか？」

「いいえ、マネージャー志望です」

「へえ、マネージャー。監督ー！ マネージャー志望の人が来ました！」

浜矢と並ぶと小柄さが目立つ少女。

肩まで伸びた柔らかかそうな質感の髪に一束のアホ毛に丸くてくりつとした瞳など、彼女を形容するには可愛いという言葉が一番合うだろう。

人数的には選手が来て欲しかったが、こんな可愛い子がマネージャーになってくれるのは嬉しい、浜矢はそう心の中で考えていた。

「うちマネージャーいなかったんだ、助かるよ」

「さっそく自己紹介しましょうよ！」

「はい、一年生の千秋せんしゅう美月です。これからよろしくお願いします」

同じ一年生ではあるが、浜矢と鈴井は共に見覚えが無いため別のクラスなのだろう。

「なんでマネージャーしようと思ったの？」

「それは……………」

中上が問いかけると、そこで言い淀む千秋。

何か答えにくいことを聞いてしまったのではないか、だがマネージャーを志望した理

由を聞くのは普通なはず。

そんなどこか気まずい空気が流れた直後、千秋が勢い良く顔をあげる。

「野球選手がすつつごく好きなんです!! 至誠の選手は全員知っていますし、灰原監督の現役時代も知っています! そんな皆さんの力になりたいと思って入部しました!

あと出来ればサインも下さい!!」

宝石のように輝いた瞳で、しかもこの量の言葉を一息で言い切った千秋の圧に押される部員たちであったが、浜矢には引つかかる言葉があった。

「……監督の現役時代?」

「はい!」 灰原監督は現役時代高校No.1捕手として有名で、ドラフト1位で入団した選手なんですよ!」

「……え、まさかあの灰原選手!? 新人賞も獲得したあの!?!」

「なに伊吹ちゃん、知らなかったの?」

「いや、灰原監督と同一人物だとは思わなかったんだよ!」

灰原麗衣、東京クレモリツにドラフト1位として鳴り物入りで入団した元至誠高校正捕手。

シーズンの半分しか一軍に滞在していなかったものの、打率3割と二桁本塁打を達成して新人賞も獲得した強打の捕手。

プロ5年目である2013年オフに戦力外通告を受けたものの、まさかあの灰原麗衣が至誠の監督をやっているなど、浜矢は思いもしなかったのだ。

(なるほど、これが先輩達が至誠に來た理由か)

体罰があつてここ数年は大した結果も出てなくて設備もそれほど良くなくて。

そんな高校に越境入学しようとなるにはそれ相応の理由があり、その理由は灰原の存在だったのだ。

「本物の灰原選手……！ あとで私もサインいいですか？」

「はいはい、後でな。それより千秋だよ」

灰原の言葉を受け千秋に視線をやると、既に山田や菊池など一部選手によるサイン&握手会が行われていた。

野球選手が大好きと公言していた千秋は間近で見る本物の選手にアホ毛をピコピコと動かして大喜び、その反応を見た菊池らも嬉しそうにしている。

「おーい、せんしゅー」

「はい！ ……そういえば貴女は？」

「一年の浜矢伊吹、野球初心者だけどよろしく」

「初心者！ 無限の可能性と将来性を秘めている、あの初心者ですね！」

「お、おう……」

勝手に無限の可能性と将来性を秘めていることにされた浜矢は苦笑いを浮かべる。

更には灰原まであながち間違っていない、などと千秋の言葉を肯定するものだから彼女の涙矢を見る目が一層輝いてしまう。

「マネージャーも入ったことだし、練習再開！ さっそく仕事してもらおうよ」
「はいっ！」

高校野球のマネージャーは選手に負けず劣らずの肉体労働。

選手たちの軽食となるおにぎりを作ったり、何リットルものスポーツドリンクを用意したり、場合によっては道具の準備なども手伝う。

（心配だけど、私は自分のこと心配した方が良さそうだな）

浜矢から千秋への第一印象は小動物。

そんな彼女が肉体労働をこなす事を不安に感じながらも、これから投球練習を行う自身の体を心配した。

ノックを行なっているグラウンドの隣にあるブルペンにて、灰原は現役時代に使用していた黒と赤のミットを手にはめて座る。

「よーっ、ハイっ！」

「はい！」

(まずはストレートから……ミット目掛けて腕を振り抜くっ！)

中上と比較するとかかなり遅いが、良いスピンの掛かったストレートがミットに収まる。

初心者が全力で腕を振り抜いた割にはコントロールもされており、これには灰原もニッコリ。

「ナイスボール！ あと20球投げるぞ！」

「はい！」

灰原の言う通り20球ストレートを投げ込む。

最初のうちは全身を使って躍動感のある球を投げられたが、先程のプランクが効いたのか徐々に動きが鈍くなっていった。

「お疲れ、やっぱ足腰足りないから体幹トレーニングは多めにやるぞ」

「うっ、はい……」

「厳しくいくから覚悟しとけて言われて元気よく返事したのはどこの誰だっけ？」

「私です……」

そうは言ったがキツイものはキツイ。

そんな弱音を浜矢は口にはしなかったが、態度と雰囲気には出てしまっている。

見かねた灰原は投手の先輩である中上を呼ぶ。

「浜矢に変化球教えてやってくれ」

「え、まずフォーム固めないでいいんですか？」

「なんか知らないけどもう既に完璧なんだよ。だから頼むわ」

「分かりました、伊吹は何投げたい？」

「うーん……スライダーを投げてみたいですよ！」

高校野球の投手といえはスライダー。そんなイメージが浜矢には根付いていた。

投げる球種が決まれば早速練習開始。

「必ず真っ直ぐと同じ腕の振りで投げるようにね。変に捻ったりすると怪我のリスクが高くなるからダメだよ。高校生は特に変化を大きくしようとするけど、そんな事しなくたって曲がるから」

「なるほど……ありがとうございます」

腕の振りと同じでも振り抜く速度はストレートよりも速くするように、そうすれば自ずと変化すると中上は付け足した。

千秋に変化球マスターと呼ばれている中上は、変化球のことであれば誰よりも詳しい。

浜矢は中上から言われた事に従って軽く一球投げてみると、ボールはホームベースの遙か手前ではあったが大きく変化した。

「おお、本当に曲がった！」

「一球目から曲げられるって、伊吹って天才？」

「そんな事ないですよ、小学生の時はダメダメでしたし」

「そうなの？ あ、じゃあ次は気持ちリリース遅めにしてみて」

「はい！」

先の一球は体の真横でリリースしていたが、それを若干遅らせる意識で投げる。

今度は変化量自体は減少したものの、より打者に近いポイントで変化した。

「おお凄い。今のはストレートと同じリリースで投げて貰ったんだ」

「え、私一球目の時リリース早かったですか？」

「ちよつとね。それ直すと投げにくくなる人もいるんだけど……平気だった？」

「はい、全然なんともなかったです」

平然と浜矢が答えると中上は遠くを見ながら呟く。

「これが天才か……」

「いや、変化球なら何でも投げられる先輩の方が天才だと思いますけど……」

「あーそれね、実はフォークとナックルは投げられないんだよね」

「そうなんですか!？」

だがあくまでフォークとナックルが投げられないのであって、スプリットやナックルカーブなどは投げられるとのこと。

「高校野球つて何球種くらい投げられればいいんですか?」

「理想は3球種だけど、負担もかかるしスライダーともう1個何かあれば平気かな」

「もう一個かあ……」

「なんだつたら私の想いを乗せてフォーク投げてくれてもいいけど」

「フォークかあ……良いですね」

落ちる球と速球で次々と三振を奪っていく自分を想像してニヤけていると、灰原にそんな事よりもまずは指のストレッチからだと言われ刺される。

初心者である浜矢と経験者の中上の明確な違いは、指の開き具合。

浜矢の手は大きく指も長いが、指が満足に開かなければフォークは投げられない。

「まあ、まずはストレッチを極めないとね」

「ストレッチが良くないと変化球も意味無いですからね」

リリース、フォーム、握り。

その三つの要素でストレッチの質は上げられると中上は言う。

自分に合った握りに正しいフォーム、そしてリリース時の力の加え方、抜き方。

良いストレートを投げられるためには、脱力した状態からリリースの瞬間に一気に力を爆発させるイメージで投げる。

それを実践すると、僅かだが球の質が良くなった。

「伊吹凄いなあ、こんなすぐ良くなるんだから。教えてる方も楽しいよ」

「先輩の教え方が上手いだけですって！」

「嬉しいこと言ってくれるね〜！ このこの〜」

「えへへっ、痛いですって〜！」

中上はまるで犬を撫でるかのように浜矢の頭をわしやわしやと撫でる。

今まで先輩との関わりは殆ど無かっただけに、浜矢はこのように接してもらえることに喜びを感じている。

「うかうかしてると1番奪われるかもな」

「なっ！ 流石に一年生に遅れはとりませんよ！」

「そうですよ監督、私なんてスタミナもコントロールもまだまだですし」

現時点でのエースは問答無用で中上だ。

この人以外に背番号1が似合う人はこの場に居ない、浜矢はそんな確信を持っている

た。

「でも伊吹ちゃん凄いいよ！ 初心者なのにこんなに早く変化球も投げられて、ストレイトも良いし……」

「せんしゅー……ありがとっ」

「けどちよつと気になったんだけどね、スライダーの時はちよつとリリースポイントが高いかも」

「そんなのよく気付くね……早めに直してみるよ」

「この一言で『千秋は有能マネージャーになる』と確信した三人であった。

この日はリリースポイントに特に気を付けながら投げ込みを行い、肩で息をし始める頃に投球練習の終わりが告げられた。

「浜矢はライトも守ってもらうから、守備入って」

「ええ……聞いてないですよ、てかグラブ持ってないです」

「私の外野用グラブあげるよ。ごめんね、私が登板してる時は野手足りないから」

「あ、そうですよね……分かりました、頑張つてやります」

「……また中上先輩のグラブ貰っちゃったけど、あの人野手用のグラブもインテリアにしてたのか」

二度目だが中上は左利きであって、本来なら右利き用グラブなど持っているはずもな

い。

因みにこれは去年に在庫処分セールで購入し、一年間インテリアと称されて放置されていた物だ。

中上から受け取ったグラブを手にライトの位置につくが、すぐに糸賀から定位置はそこではないと指摘される。

正しい位置を教えてもらい、ノックに備えて構える。

「軽く打つから安心しろよー!」

「はーい! さあこーい!」

灰原は言葉通りノックバットを軽く振り抜き、高度・速度共に普通の打球をライト方向に飛ばす。

いわゆる平凡なフライと呼ばれる物だが、初心者かつ外野未経験の浜矢にとってはホームランキャッチ並みに難しい。

「浜矢、前! 前!」

「はいっ!」

糸賀の声に反応して全力で前に出てグラブの先端で捕球するが、体勢を崩し転んでしまう。

(うへえ、ダツサ……)

苦い顔をしながら砂を払っている浜矢に対し、糸賀は笑顔で彼女に声を掛ける。

「ナイスガッツ！ 今のよく捕ったな」

「ありがとうございます……落下地点分らないんですけど、どうすれば良いんですか？」

「これに関しては慣れだし、数こなすしかないよ。あとはあえて捕らずに打球の軌道を見るときか」

外野フライの難しさを実感した浜矢は、糸賀のノックを至近距離で見学させてもらう事にした。

一歩目の速さ、落下地点への迷いのない移動、捕球から送球の流れ。

彼女は全てがハイレベルで、高校生の中でもトップクラスに上手い。

「どう？ 分かった？」

「糸賀先輩っ！ すごく守備上手いですね！」

「ありがとう……？」

(違う違う、こうじゃない。私の為に守備を見せてくれたんだ。先輩を参考にしなきゃ)

目的を忘れて大はしやぎしてしまつた事に浜矢は顔を赤らめる。

だがすぐに気持ちを切り替え、今度は自分の番だと言わんばかりに声を張り上げる。

「さあこーい!!」

「よっし、いくぞー!」

今度はさつきよりも弾道が低く少し強めの打球が飛んでくる。

浜矢は突っ込むことはせず、打球の強さを確認しながら前に出てキャッチする。

「ナイスキャッチー!」

「ライナーなら捕れますよー。もつとこーい!」

この打球処理の感じを見るに、彼女はライナー性の打球を捕るのは得意なタイプだ。

その理由は本人すら分かっていないが、一つでも得意なことがあるのは心強い。

その後も灰原お得意の前後左右に揺さぶるノックが続き、終わる頃には浜矢は足が震えて立つことが出来なかった。

「もう立てないんですけど……」

「おっ、寮泊まつちやう?」

「いえ、家事が残ってるので……」

「家事もしてるのか? 偉いな」

「してるといふか、しなくちやいけないので」

親が早く帰ってこられないから浜矢がやるしかない。

部活との両立は大変だが、プロを目指す為に無理を言つて入部させて貰った身。

文句など言える権利など自分に無いし、体力も付くので結果オーライというのが浜矢の本音だ。

「解散の前に一つお知らせがある。二週間後に練習試合を組んだぞ」

「どこですか？」

「相模中央だ」

「ベスト16級のチームですね。守備が売りの」

「そうそう、そこまで強くもないし初陣には丁度良いかなど」

（神奈川ベスト16がそこまで強くない……？ この人たちの”強い”はどれだけハドル高いんだ）

い。神奈川で16強入りするにはノーシードで4回、シードで三回勝たなければならぬ。

最低でも三回は勝てるだけの力を持つチームを”そこまで強くないと”と評価する周囲に浜矢は困惑していた。

「先発は中上、浜矢も初の試合だし楽しんでいけよ！」

「はいっ！」

「もちろん勝ちに行く事も忘れずに。記念すべき初陣は折角なら勝利で飾ろう、解散！」

「ありがとうございます!!」

(楽しむのが最優先だけど、勝てるなら勝ちたい。あとは足を引つ張らないようにしなきゃ)

いきなりベスト16級と対戦する事になってしまったが、それはそれとして試合は楽しみ。

浜矢の表情はそう語っていた。

第3球 初陣

入学式から二週間が経過し、迎えた初の練習試合。

浜矢は9番のユニフォームを、鈴井は6番のユニフォームを見に纏い試合に臨む。

「伊吹ちゃん似合ってるよ!」

「ありがとう、せんしゅーがデザイン考えてくれたんだっけ?」

「うん、前に優勝した時と似たデザインにしたよ」

白をベースに赤のラインが入ったユニフォーム。

左胸の所には縦書きで至誠の文字が刻まれている。

至誠が初の全国制覇を果たしたのは八年前。灰原は四番兼主将としてチームを引っ張っていた。

当時の至誠はエースが抑えて四番が抑える王道野球をしていたが、それが格好いいと評判だった。

「……というより、どうして小林先生がここに?」

「ふふ、私は野球部の顧問ですよ」

「灰原監督は教員じゃないからね。教員が顧問じゃないと公式戦出られないから」

「あ、そうなんだ」

高校野球の監督は教員も兼任している場合が多く、灰原のように完全に外部の人間という方が稀なのだ。

だが浜矢と小林は生徒と担任という関係であり、プレーしている姿を見られるのは気恥ずかしいようだ。

「浜矢さん、鈴井さん。私の事は気にせずにプレーして下さいね」

「は、はい……」

「わかりました」

ソワソワして落ち着かない様子の浜矢とは違い、鈴井は慣れているのか特に気にしている様子はなかった。

「集合ー！ 千秋、相手の情報を」

「はい、相模中央は高い守備力が売りのチームです。勝った試合はほぼ全てロースコアの接戦。反面強打のチームには大量失点をして負ける事も多いので、うちもそれを狙いましょう」

短い時間でこれほどの分析をして監督からの信頼を得ていることに他の部員は驚きを隠せないでいるが、試合前ということもありすぐに真剣な表情に戻る。

「そういえば練習試合ってコールドあるんですか？」

「今日はあるよ、向こうも公式戦を見据えて試合してるからね」

「つまり公式戦と同じルールってこと」

プロ野球は好きだが高校野球は見ないため、高校野球のルールを知らない浜矢に、中上と糸賀がルールを説明する。

5回で10点差、もしくは6回7点差でコールド。

プロは9回制だが高校までは7回制。延長は最大12回まで、タイブレークは10回から。

今日はお互い公式戦に向けての試合なので公式戦と全く同じルールで行う。

ルールの説明が終わって一段落したところで、千秋からこの試合の打順が発表される。

一番センター 糸賀由美香

二番セカンド 菊池悠河

三番サード 山田沙也加

四番キャッチャー 柳谷真衣

五番レフト 青羽翼

六番ファースト 金堂神奈

七番シヨート 鈴木美希

八番ピツチャー 中上佳奈恵

九番ライト 浜矢伊吹

俊足巧打の糸賀が出塁し盗塁、その後小技の上手さに定評がある菊池のバントでワンアウト三塁の場面を作りクリーンナップで大量得点。

初回から一切の遠慮を無しに攻めていき、速攻でコールドを決めるプランだ。

「キャプテン、声出しをお願いします」

「ああ。これが初めての試合だ、絶対勝つぞ!!」

「おおっ!!」

初めてこの九人で円陣を組んでの声出し。

全員気合は十分。あとは勝つだけだ。

球審からプレイボールが宣告され試合が始まる、先攻は至誠。

トップバッターの糸賀が左打席に入る。

「由美香ー! 打てー!」

「私にチャンスで回してください!」

(おお、これがベンチでの声出し……近くで聴くと迫力あるなあ)

浜矢が選手として野球に触れていたのは数年前。

試合中のベンチの雰囲気や声出しなど、とうの昔に忘れていた。

先輩である柳谷や山田が積極的に声を出しているのを見て、彼女も負けじと声を張り上げて応援する。

糸賀は初球の外角、難しい変化球を擲いてレフト前に落とす。

続く菊池はバントの構えをするが、それはブラフ。

糸賀は投手が投球モーションに入ると同時にスタートを切り、悠々と二塁に到達し盗塁成功。

今度は菊池も本当にバントを仕掛け、理想であるワンアウト三塁の状況を作り出した。

「山田先輩ー！ 打てー！」

「ホームラン、ホームラン！」

山田の魅力はなんと言っても並外れた長打力。

打球速度は柳谷を抜いてチーム内トップを誇る。

灰原曰く、高校生であんなに簡単そうにアウトローの変化球をスタンドに運ぶ選手は見たことが無いとのこと。

ここは犠牲フライでも十分な場面なのだが、自分の長打力を誇りに思っている山田は

大振りなスイングをやめない。

確実性はそこまでな彼女は二球で追い込まれてしまい、三球目の内角のストレートに狙いを澄ます。

上手く肘を畳んで打ち返すもサードライナー。

(あんな速い打球よく捕れるなあ……)

浜矢もライナーの処理は問題無いのだが、それはあくまで外野での話。

サードという至近距離で山田のライナー性の打球など、今の自分が捕れるとは思えなかった。

ツーアウトながらランナー三塁のチャンスで打席には四番の柳谷。

三拍子揃った関東ナンバーワン捕手。

これまでの二年間で連合チームとして積み上げた成績は打率が通算5割、本塁打は30本を超える。

灰原に次ぐ至誠最高打者としての呼び方の高い彼女は、この打席でも四番の働きを試みせた。

鋭いスイングで白球を捉えたと思った瞬間、ボールはフェンス上段に着弾していた。

「……………え、ホームラン?!」

「初回ツーラン！ 最高ですよキャプテン！」

打球が速すぎて浜矢は目で追えなかったが、正真正銘のホームラン。

続く青羽が三振してこの回の攻撃は終わってしまったものの、初回到2点を先制する好スタートを切った。

「よし、抑えるよ！」

「中上、頼んだぞ」

「はいっ！ バックは任せましたよ！」

「おー！」

こちらの先発は変化球マスターこと中上。

まだ守備が下手だからライトには飛ばさないで欲しい、そんな浜矢の祈りが届いたのか中上は初回を三者連続三振で終わらせる。

ツーシーム、スライダー、カーブ、スプリット。

これが中上が実戦で投げる主な変化球だ。

どんな球種でも投げられるとはいえ、メインにしている球種はある。それがこの四つ。

つまりこの4球種は特に自信があるということ。

そこにストレートも混ぜて投げられてしまえば一巡目の上位打線が対応できるは

ずもなく、ボールがバットに掠ることすらなかった。

「佳奈恵、ナイピ」

「へへ、外野に飛ばさなかつたよ」

「内野にすら飛ばされてないですよ。私はもつと守備したいです！」

「なら次はセカンドに打たせるね」

野手として失点しないでくれるのは嬉しいが、それはそれとして守備が好きだからつまらない。

そんな菊池の言葉にも中上は優しく微笑み、冗談を言う時のようなトーンで言う。

2回表、この回の先頭打者は金堂。

「金堂先輩つて試合でも木製なんですネ」

「そうそう。長さとか重さの調節が効きやすいからだつて」

「木製でも打てるもんなんですか？」

「まあ見てなつて」

浜矢は山田にそう言われて打席の金堂に視線をやるのだが、どうしても目についてしまう物がある。

「……あのフォームどうにかならないんですかね」

「私も初めて見た時は驚いたけど、もう慣れた」

「体ピッチャーに向けてるじゃないですか……バット構える位置も低いし」

金堂のフォームは良く言えば独特、悪く言えば変だし気持ち悪い。

体をほぼピッチャーに向けた状態でバットのグリップがちょうどへその前に来る位置で構えている。

投手は構えを見てるだけで威圧されるだろう。

「ほら打った」

「いや今の明らかなボール球だったんですけど」

「神奈はそういう奴だよ」

「むしろボール球を打つ方が多いんじゃない？」

金堂は外にボール二個分ほど外れた球を、いとも簡単そうに打ち返してヒットにした。

それに対して自分以外の誰も驚いていないことから、あの先輩はこれが平常運転なのだろうと察した浜矢。

鈴木もヒットで続いてノーアウト一・二塁。

中上はライトフライに終わるが、金堂がタッチアップしてワンアウト一・三塁に。

「やっぱりスライダーとカーブしか投げられないっほい」

「分かりました」

凡退してベンチに戻る途中の中上から球種を聞き、ぎこちなさの残る構えで右打席に入る浜矢。

相手投手の球種はスライダーとカーブ。これは去年の夏から変わらないう。カーブが決め球、スライダーはカウント取りに使うと千秋は言っていた。

初球、内角のボールからストライクになるカーブ。

浜矢は体に向かってくる白球を思わず避けてしまいが、ボールはぶつかる前に曲がってストライク。

（打席で見るカーブは怖いって聞いたけどほんとだな。当たる気配無いのに当たると思っちゃったし）

捕球した位置だけ見れば、何故彼女は避けたのかと思われることだろう。

だが今までマシンの球ばかりで人の投げる生きたボールを打つ経験がほとんど無かった彼女からすれば、いきなり自分の体にボールが向かってきたらそれはもう恐怖以外の何物でもないのだ。

二球目、同じコースにカーブが投げ込まれる。

さつきは初見だったから過剰に恐れていたが、当たらないと分かっただけなら怖くない。

い。

浜矢は球筋を予測してバットを振るが、ボールの下を叩いてしまいキャッチャーフライ。

「すみません……」

「よく当てたよ。カーブ怖いでしょ?」

「はい。けど同じコースに続けられたおかげで、あの位置からでも当たらないって分かったので良かったです」

ベンチで投手二人が話している最中にひっそりと糸賀がツーベースを放ち、この当たりで金堂と鈴井の二人が生還し追加点を得る。

菊池はセカンドゴロに打ち取られスリーアウト。

2回裏、中上は先程冗談のように言っていた“セカンドに打たせる”という言葉を実行した。

内角の球で追い込んでから外に逃げていくスライダー、もしくはボールからギリギリストライクになるバックドアのツーシーム。

この配球で三人連続でセカンドに打たせ、菊池もそれを難なく捌いてスリーアウト、チェンジ。

守備が上手い選手というのは、高難度のプレーを簡単そうにやってのけるものだ。

事実、最後の打球もハーフバウンドだったのだが、そうは思えない程あっさりと処理していた。

3、4回はヒットは出たものの両チーム点は動かず。

5回表、先頭の山田が鈍足と打球速度のせいでフェンス直撃の単打を放った後の柳谷の打席。

ここまで二打数二安打、打てば猛打賞の場面。

そんな場面だろうが柳谷が緊張なんてするはずもなく、アウトローのスライダーを引つ張ってツーベースにしてしまう。

「おお、猛打賞！」

「真衣って猛打賞のイメージ強いよな」

「ほんとほんと。打ちすぎだよね」

変化球の怖さを体感した浜矢はキャプテンの猛打賞を輝いた目で見るが、同学年の二人は茶化すような言葉を発していた。

それでも表情が優しいあたり、柳谷の活躍を喜んでいるのだろう。

ノーアウト二・三塁から青羽が犠牲フライを打った後は続けず1得点で終わる。

その裏、ここまでノーヒットピッチングを続けていた中上が四球からの連打で1点を

失う。

5回裏、ツーアウト二・三塁。未だピンチは継続中。

打者は甘く入ったカーブを強く引つ張り、高く上がった打球がライトの浜矢を襲う。

(うわ来た！ 前、だよな……?)

確信は持てないが恐らく前だと思い突っ込む。

彼女の予想は的中し、ギリギリでグラブの中に打球が収まる。

「ナイスキャッチ！ 初フライだな」

「ありがとうございます……！」

初めてのフライキャッチ、それをこのピンチの場面でやってのけた。

浜矢にはセンスだけではなく運もあるのではないか。灰原はこの時にそう感じた。

6回はお互い1点を取り合い、7回表は無得点。

7回裏、ツーアウトランナー無し。勝利まで後一人というところまで追い詰めた。

「佳奈恵、思いつきり腕振れー！」

「三振三振！」

「セカンド打たせていいですよ！」

仲間達はマウンドに立つエースに声を掛け続ける。

エースは後ろを振り向かず、嬉しさを嘯み締めるように微笑む。

ツーストライクまで追い込んだ後、綺麗なシルエットのワインドアップからの三球目。

それはこの試合で初めて投げる変化球だった。

当然打ち返せずに空振り三振でゲームセット。

初めての試合は6対2で白星を飾った。

「ありがとうございました！」

至誠ナインは相模中央の選手に礼を言ってみ送る。

相模中央の選手たちの乗るバスが見えなくなった後、灰原と千秋による試合の振り返りが行われた。

「ベスト16相手に6点取り、1点しか取られなかったのは良かったな」

「守備でも失策0、かつファインプレーも出たので文句無しですね」

ベスト16級相手に完勝とかいけるやん！ という古くからの至誠ファンの声が聞こえてきそうだが、柳谷や中上といったタレントが揃っているのだからこれくらい出来て当然だろう。

むしろワールド勝ちを収められなかったのを反省するレベルだ。

「あとは伊吹のヒットだけだな！」

「はは……早いうちに一本打ちたいです……」

「まあ焦んなくてもいざれ打てるよ」

「だと良いんですけど」

浜矢は結局四タコという結果に終わった。

それだけならまだマシだが、三打席目にはバントも失敗しており打席では良いとこなシだった。

守備もファインプレーっぽい何かがあったが、守備範囲が狭すぎて菊池と糸賀に介護されまくりなのが現状。

「けど良い勝ち方だったよ。大会に向けて自信もついたらだろうし」

「大会までの期間であと10試合は練習試合を予定しているので、気合入れていきましよう！」

「おー！」

反省すべき点はあるが、初陣で初勝利。

それは彼女達にとって大きな自信になるだろう。

第4球 導く者

初の練習試合を白星で飾った翌日、至誠ナインはベンチ前に集合していた。

灰原と千秋から大事な話があるとのこと。

「来週からGWに入るので、合宿を行おうと思っています」

「合宿かー、楽しみだな」

「3泊4日、学校に併設されてる合宿所で行うよ」

2016年のGWは4月29日から5月8日までの間に二回も平日が挟まっており、有給を取れる社会人ならまだしも合宿で力を付けたい運動部にとっては微妙な感じになっている。

幸いにも29日の金曜日は祝日なので、木曜の午後から練習をすることで無理やり3泊4日になっている。

「最終日には成田西、そして春日部栄との練習試合を組んだぞ」

「春日部栄って確か埼玉の強豪でしたっけ」

「そう、去年の埼玉ベスト4な。けど成田西も千葉ベスト8だから中々手強いぞ」

部長たった十人、選手はうち九人という至誠がそんなチームと試合が組めるのは他で

もない、灰原の知名度と人脈のおかげだ。

今回の相手は流石の先輩たちでも苦戦するだろう、そう予想した浜矢は一層気合を入れるのだった。

この日の練習を終え帰宅した浜矢は、家事をこなして母の帰りを待つ。

どうやって合宿の話を切り出そうか考えていると、玄関のドアが開く音がした。

「ただいま」

「おかえりー。帰ってきて早々で悪いんだけど、話があるんだ」

「話？ 何かあったの？」

疲れ切った顔をした、娘の為に掛け持ちして働いてくれている母。

彼女は娘が野球部に入ると言った際にも、お金の心配はしなくていいと言っていた。

直後に浜矢が先輩たちから道具を貰えると告げると安堵した表情をしていたので、恐らく自分の食費なりを削ってお金を捻出しようとしていたのだろう。

「来週から3泊4日で合宿があるんだ」

「合宿……どこに行くの？」

「学校に併設されてる施設だから、遠征費は掛からないよ」

「あら、良かった。……伊吹、ごめんね」

母は心底申し訳なきように、小さくそう漏らした。

なぜ母が謝るのか、どこに謝る理由があるのか。

母の言葉を聞いた浜矢はそんな顔をしている。

「本当は何も気にせず野球してほしいんだけどね……」

「いいって。むしろ私の方こそごめん。急に野球やるなんて言い出して」

「今まで不自由な思いさせちゃってたからね……高校でくらい好きにしているよ。頑張って特待生にもなってくれたし」

(……一番不自由な思いをしているのは、私じゃなくてお母さんでしょ)

確かに高校生はオシャレを意識し始めたり部活をしたり友達と買い食いをしたりと、何かとお金が掛かる年頃ではある。

だが母だって新しい服を買いしたいはず、大人向けの高級な化粧品に手を出してみたいはず。

それを口にするのと泣き出して更に迷惑を掛けてしまいそうだからと、浜矢は言葉を飲み込んだ。

「私、必ずプロになるから。それまで迷惑掛けと思う」

「伊吹を疑う訳ではないけど、本当になれるの？」

「元プロが行けるって言うてるし、私はプロになる気しかないから」

「……そう。楽しみにしてるわ」

灰原が素質を見出してきて、千秋や鈴井、先輩たちが支えてくれている。経済的には恵まれていないが環境的には恵まれている、だから最低でもプロ入りをしなくては母に合わせる顔がなくなる。

目指すはドラフト1位という人生の大逆転。

自分を一番近くで支えてくれている愛すべき母のためにも、浜矢は強くなることを誓った。

——合宿当日。

野球部専用のグラウンドにて、外野陣は灰原によるノックを受けていた。

「くぐずー」

「ハイ」

浜矢にもすっかり遠慮の無くなった灰原のノック。

初球からいきなり大飛球をお見舞いされるが、今までの経験で落下地点を予想しそこに向かって走る。

ある程度走ってから後ろを振り向き打球を確認し、位置を微調整して余裕を持ってキャッチ。

まだまだ下手な方ではあるが、それなりに外野手が様になってきている。

「ナイス！ 次！ 青羽！」

「はいっ！」

青羽も守備が苦手な方だが、流石に初心者の浜矢よりはマシだ。

打球が上がってからすぐ動き出し、正面の難しいライナーをキャッチ。

「おおー……！」

「ナイスー、私にもこーい！」

糸賀はもはや何も言うことのない安定した守備。

灰原が打球を上げる前に軽くジャンプし、そのままスムーズに動き出すので守備範囲が広い。

両翼の守備が不安なだけに、彼女の存在が大事になる。

40分に及ぶ地獄の外野ノックが終わり、選手はベンチにて水分補給。

「きつつ……」

「こんなんでもバテてたら夏を乗り越えられないぞー？」

「ですよね……」

「投手もあるから余計に体力使うだろうしなー。ま、大会までには何とかなるっしょ！」

「何とかします」

糸賀は三人の中で一番前後左右に揺さぶられていたにもかかわらず、体力は一番残っている様子。

青羽より一年、浜矢より二年多く体作りをしていた成果だろう。

外野組が息を整えていると、ノックバットを担いだままの灰原が近寄る。

「青羽、急で悪いが投手もやってくれるか？」

「投手ですか……？」

「一番向いてるのは糸賀だと思うけど、流星にあいつ以外のセンターは考えられないし」

「その次に向いているのが青羽先輩ってことですか？」

「そういうこと」

突然の申し出に青羽は困惑を隠せないでいるが、次第に納得したようで投手としても活躍することを決意した。

近くにあったボールを手に取り、既に準備を済ましていた柳谷の元に向かう。

セツトポジションから投げ込んだ球は、ミットから鈍い音を出させた。

「おお、重そうな球……！」

「良いストレート投げるじゃん。これなら変化球一個でもそこそこ抑えられると思うぞ」

「……緩急つけるやつ、ですか？」

「そうそう。カーブかチェンジアップかな」

「なら二人ともカーブ覚えようよ。教える側としても同じ変化球の方が助かるし」

中上のこの提案には二人も賛成。

そもそも変化球を教えられるのが中上しか居ない以上、その中上に負担のかからないやり方の方が良いと思つたからだ。

急造投手二人の変化球は浜矢がスライダーとカーブ、青羽がカーブのみということになった。

二人は握り方を教わり、まずは一球投げてみる。

その後浜矢は柳谷と、青羽は灰原と組んでカーブの投げ込みを行う。

「青羽のカーブ良いな！ 浜矢はどうだ？」

「なんか上手く曲がらないんですけど……」

「見せ球くらいには使える……と思うよ。それにスライダーは良いし」

青羽のカーブはどちらかと言えばドロップカーブやパワーカーブのような縦に落ちる球なのでそれなりに使えそうだが、浜矢のカーブはほとんど曲がらない上に曲がり始めが早い。

幸いスライダーはまだ制球が効かない以外は文句無し、と絶賛される程度なので悲観

するほどでは無い。

投げ込みを続けている二人に千秋が声を掛ける。

「投げ込みは一日60から70球くらいでお願いします。二人には練習試合でも登板してもらいます」

「ええ……打たれる気しかしらないんだけど」

「けど公式戦に出たらあのレベルと戦わなきゃいけないんだろ。なら今のうちに慣れておいた方がいい」

「青羽先輩の言う通り！ 何失点してもいいから思いつきり投げてね」

「オツケー」

（成田西か春日部栄か……ベスト8だし成田西の方がいいなあ）

何失点してもいいと言われたが、浜矢にもプライドはあるのでなるべく失点は少なくしたい。

その為にはとにかく投げ込んで制球と投げる球の精度を上げる。

しかし70球までという制限がされているので、彼女は一球一球丁寧に気持ちを込めて投げ込んだ。

「いただきまーす！」

「沢山あるのでゆっくり食べて下さいね」

「せんしゅー！ 美味しい！」

「本当？ ありがとう！」

練習が終わり合宿所で夕食の時間。

山盛りの料理を作ったのは千秋と小林の二人。

ザクザクとした衣とジューシーな身の分厚い豚カツに、色とりどりの野菜と小林お手製のドレッシングを掛けたサラダ。

ハードな練習で汗と一緒に排出してしまつた塩分を補給するための味噌汁、ほうれん草の胡麻和え、そして食後のフルーツにヨーグルト。

食べ盛り的高校生、しかも運動部となれば大盛りの白米も含めてもペロリ。

浜矢は最後の方は量に苦しんでいたが、普段は節約を意識してあまり食べていないので、ここぞとばかりにお腹に詰め込んでいた。

「学校探索せずに何が合宿かー！」

「お、いいですね！ 私も行きます！」

「私もー！」

「寮が近くにあるから静かにな。それと自主トレする奴は明日以降の体力残しておけ

よ」

食事を終えて一杯のお茶を飲み干し、一息ついた山田らは学校探索をしようと言いだした。

自宅から通いの浜矢と菊池はともかく、寮生の山田は夜の学校など見慣れているはずなのだが、合宿でテンションが上がっているのだろう。

山田、菊池、浜矢の三人は夜の学校へ繰り出した。

「いやめっちゃ怖いんですけど……」

「そーいやここ出るって噂あるよね」

「ちよつ、先に言つてよ！ 出たら頼むよ、沙也加」

「ゴーストに格闘は効かないですよ」

「それゲームの話じゃん！ てかさ也加はどっちかというと地面とか岩でしょ」

三人は関係無い話をして怖さを紛らわしていたが、その時物陰から音がした。

その音を耳にした瞬間、三人は臨戦態勢をとる。

「マジでなんかいるぞ……」

「先輩！ 先頭は任せましたよ」

「真っ先に先輩を売ったな、この後輩！」

「まあ伊吹は弱そうだから一番後ろでいいよ」

浜矢は160キロストレートで弱そうと言われたことに対してムツとした顔をするが、事実なので何も反論できなかった。

ぐうの音も出ない正論とはまさにこの事だ。

この三人の現在の並び順は先頭が山田、その一步後ろに菊池、その二人を壁にして安置にいるのが浜矢。

この並びで物音のした方。否、している方へと歩みを進める。

とうとう音がすぐ近くからするようになった場所で、物陰に身を隠しながら様子を伺う。

「……………キャプテンじゃん」

「ええ……………」

「てか先輩たちだよ」

そこには素振りをしていた三年生がいた。

先程の音は素振りをした際の空気を切る音で、幽霊でもなんでもなかったのだ。

何も出なくて良かったという感情と、若干期待を裏切られたような気持ちがごちゃ混ぜになった三人。

「もー！ せんばーいー！」

「うわビックリした!! って、悠河か……………」

「不審者でも出たのかと思ったー!」

「何してんの?」

「学校探索してました……」

菊池が徐に飛び出していった結果、何も悪いことはしていない3年生が驚くという何とも言えない状況に。

浜矢は一番ビビっていたが、糸賀に頭を小突かれている菊池を見てさつきまで怖がっていたのがおかしく思えてきた。

「先輩方は自主トレですか?」

「うん。私達は最後の夏だからね」

「連合チームじゃないし、折角なら優勝したいじゃん?」

「私たちなら神奈川どころか全国の頂点にだって立てますよ!」

浜矢にとっては最初の夏だが、三年生からしたら高校最後の夏になる。

二年間連合チームでプレーしてきて、三年目にしてようやく至誠として出場できる最初で最後の大会。

後輩には分からない、強い想いがあるのだろう。

「私たちが先輩たちを全国へ導いてみせますよ!」

「なーに言ってるの。私たち三年が導くの、後輩たちが輝ける舞台へ」

山田が自信満々に宣誓すると、柳谷がそう言い切った。

「……カッコいいです!! 一生ついて行きます!」

「一生はいいから、打ってくれよな。次期四番候補さん?」

「任せて下さい!」

(知ってたけど、キャプテンってかっこいい……!)

自分が高い実力ある選手だと自覚しているにもかかわらず、それが鼻につかない。

堂々とした立ち振る舞いもそうだが、チームの頼れる主砲でありキャプテンという立場、そして今のような台詞をサラツと言えてしまう辺りが好感度を上げているのだろう。

「悠もファインプレー期待してるからなー?」

「ふふん、私にかかれれば毎試合ファインプレーしますよ!」

いくら守備機会の多いセカンドとはいえ、毎試合ファインプレーはもうファインプレーを偽造しているのだ。

冷静な見方をしている浜矢の前に中上が立つ。

「私がエースだけど、もう一人の先発は伊吹だと思う。けどあんまり気負わないでほし

いな」

「……はい！」

「それにいくら打たれても私たちが取り返してやるから」

「そうそう。打線だけで言えばウチは全国トップクラスだよ？」

「キャプテン、糸賀先輩……もし炎上したらお願いしますね！」

「任せろ！ バンバン打ってやるからな！」

至誠の強打者は柳谷や糸賀だけではない。

類稀なバットコントロールを誇る金堂と鈴木、圧倒的長打力を武器とする山田と青羽もいる。

10点取られたら11点取り返せばいい、それを実現出来てしまうチームなのだ。ならば浜矢がやる事はただ一つ、余計な事は考えず全力で腕を振るのみ。

第5球 反省点

各々課題をこなしていき、3泊4日という短いGW合宿はあつという間に過ぎていった。

迎えた最終日、千葉のベスト8成田西と埼玉のベスト4春日部栄とのダブルヘッダー。

第一試合は千葉のベスト8、成田西高校。

先発は浜矢、リリーフは青羽の継投。

浜矢のカーブが思った以上に使い物にならないので、柳谷はストレートとスライダーを中心の配球を強制された。

浜矢も柳谷の期待に応えようと全力で腕を振るが、使えるのがストレートを含め、たったの二球種ではどうしようもなかった。

「あつ、やばっ……」

「よし、ホームラン！ もっと点取れるよー」

全力投球の影響か、制球ミスが多く痛打される。

だが全力で投げないと抑えられないので、先発には必須と言われるペース配分を考え

る余裕も無い。

彼女は意地で4回まで投げ切るが7失点を喫した。

「すみません……」

「初登板お疲れ様。4回7失点なら上出来よ」

「打線に頑張ってもらおう」

「はい……青羽先輩もお願ひします」

「任せろ」

青羽は一言そう呟くと、有言実行のソロホームランを放ちこれで7対5となる。

(キャプテンといい青羽先輩といい、ウチの先輩たちかつこ良すぎじゃない?)

かつこいい先輩に続きたいと思いつながら浜矢も打席に入るが、切れ味鋭い縦スラに手も足も出さず空振り三振に終わる。

「伊吹ちゃん」

「なに、鈴井?」

「次からバッターボックスの後ろ側に立ってみた方がいいんじゃない?」

「後ろ? 線ギリギリってこと?」

「うん。今までの感じからすると変化が予測できずに空振ってるから、後ろに立って長

く見た方が良いと思う」

「なるほどな……ありがとう、そうしてみる」

鈴木も一年生ではあるが、それを感じさせないほど相手と対等に渡り合っている。

入部の時に「守備では迷惑を掛けない」などと打撃に自信の無さそうな事を言っておきながら、今打撃でも貢献していることに浜矢は不服そうだが。

千秋曰く、彼女は元からミート力は高かったらしいので、打撃力を逆サバ読んでいた。

5回からは青羽がリリーフ登板する。

重いストリートとカーブの組み合わせで序盤は好投を見せるが、相手打線も徐々に慣れていき連打されて3回4失点。

二人合わせて二桁となる10失点。

打線も青羽のホームラン以降まともなヒットが出ず、5得点に終わった。

いくら失点しても良いと事前に言われていたとはいえ、流石に4回7失点は堪えられない。

浜矢はベンチで項垂れたまま動けないでいる。

「落ち込んでる場合じゃないよ。次はあの春日部栄との試合なんだから！」

「そうだよ伊吹ちゃん。初ヒット打ちたくないの？」

「打ちたい!!」

二試合やつて8打数無安打。四死球、犠打も0。

初心者なので仕方ないとはいえ、7失点と出塁ゼロは流石にお荷物だ。

次の試合は死に物狂いで初ヒットを打つと浜矢は決意した。

第二試合は春日部栄との練習試合。

先発の中上は安定感のある投球を見せ5回終了時点で1失点。

しかし打線が湿り未だヒットは三本という惨状。

ツーアウトランナー無しで浜矢の二打席目。

(後ろで立つと確かに球が見やすい。焦らず甘い球を仕留める！)

バッターボックスの白線ギリギリに右足を置いた彼女は、今までとは全く違う球の見え方に「打てる」と感じていた。

カウント1―2からの四球目、内に食い込んでくる甘いスライダー。

それを逃さず強く振り抜くと、三遊間を抜ける強烈なヒットとなった。

浜矢は一塁でコーチャーの山田とグータッチ。

「初ヒットおめー!」

「ありがとうございます！ やりましたよ！」

初心者が格上相手に三試合目、九打席目でヒットとなるとかなり早い方なのだが、本人からすればここまで長かったようだ。

やはり野球の基本は好球必打、それを感じさせる打席だった。

糸賀もツーベースで続いた後の菊池の犠牲フライで浜矢は生還。

しかし後続が抑えられこの回は1点止まり。

6回表、中上が捉えられ一気に2失点。

その勢いそのまま乗り切られその後は無得点で敗戦。

合宿での練習試合は二連敗。

大会までまだ時間があるとはいえ、少し不安の残る結果となってしまった。

第三試合となる成田西と春日部栄の試合を観ながら反省会を行うことに。

「というわけで、反省会をします！ 三年生は塁審してるので不在です」

「監督は？」

「球審です」

一応二年生がいるのに千秋が仕切っているのは、二年生の中に仕切りたがりが居ないから。

「では今日の連敗の原因を、せーので言いましょう。守備or打撃で」

「何そのビーフォーチキンみたいなノリ……」

「いいから！ はいじゃあ、せーの！」

浜矢のツツコミは普通に無視された。

「守備！」

「打撃」

綺麗に半々ずつくらいに分かれた。

守備派は浜矢、青羽、菊池、山田の四人。

打撃派は金堂、鈴井、千秋の三人となった。

「てか守備派全員エラーしてんじゃないん！」

「自分がエラーしたから守備にしたんだよ……」

「流石に二試合で4失策はまずいですもんね……」

「全国出るようなチームは、予選全試合でその位だからな」

予選は大抵の県が最低でも四試合程度はこなす。

つまり四試合分のミスをたつた二試合でやってしまったということ。

守備職人である菊池がエラーをするのは珍しいと思われるかも知れないが、彼女は広すぎる範囲が故にエラーも多い。

「さあ、打撃派の意見を聞こうじゃないか！」

「えーつとですな……」

「……これ、名指しで言ってもいいの？」

千秋が言い淀んでいると、金堂が助け舟を出すように切り込んだ。

「反省会だし名指ししなきゃなきや意味ないっしょ！」

「それで落ち込んででも慰めないからね〜」

「ちよつと!? 友達だろ？」

「こんな圧かけてくる友達やだ……」

山田と菊池がこんなやり取りをしていると、金堂が軽く咳払いをして語り出す。

「じゃあ遠慮なく……まず問題点は、安打数は勝つてたのに得点数で負けてたことだと
思う」

「得点圏で繋がらなかったって事ですよね？」

「そうだけど、具体的に言うとう悠河みたいに得点圏が苦手なタイプ、沙也加や翼みたいな
確実性のないタイプ、伊吹みたいにそもそも打てないタイプ、そして私や美希のように
打てるけど単打ばかりでランナーを還せないタイプがいるの」

思った以上に遠慮の無い言葉に名前を出されたメンバー、というよりここにいる全員

は苦い顔をする。

特にそもそも打てないと散々な評価を下された浜矢は、もう笑うしかないといった様子だ。

「それに加えて慣れない打順……この二つの要素が悪い方向で噛み合った可能性は高いね」

「美月的にはどう?」

「私も金堂先輩と同意見ですね」

練習試合なので色々な打順を試しているが、それが悪い方向に噛み合ってしまったヒツトは出るのに得点には繋がらないフラストレーションの溜まる打線となってしまったのだ。

「どの打順でも打てろとは言わないけど、最低限は出来るようにした方がいいかもね」

「ほら沙也加に翼、言われてるぞー」

「振り回して三振するのは悠河も一緒だろー!」

「私は振り回してないけど三振するんだYO!」

「……もつとダメだろ」

菊池には内野安打に出来る走力と小技の上手さがあるので、山田と青羽に比べればまだ許されている雰囲気がある。

「とういわけで試合が終わったら守備派の人はノック、打撃派の人は打撃練習をしましよう」

「おっし、やる気出てきた!」

「ノックは監督がやりますよ」

「えっ、やだ……」

千秋の言葉に山田の手首はクルクル。

灰原のノックは厳しい。特に現役時代に自身のポジションであったサードとキャッチャーに関しては一層厳しくなる。

「打撃派はマシン打撃メインですかね」

「高速トスも混ぜてもいいんじゃない?」

「いいですね! では打撃派はそんな感じで」

反省会はひとまず終了となるが、浜矢は個人的に気になる点があったので鈴井に聞いてみることに。

「鈴井的に私の初登板はどうだった?」

「サインミスしないか心配だった」

「それに関しては私自身も心配してたよ……」

公式戦の時には、練習試合とは比べ物にならない緊張感やプレッシャーがある。

その時に平常心を保ち、冷静にサインを確認する事ができるかは大事になってくる。

彼女は投手兼野手という事もあり、投球のサインだけではなく守備シフトのサイン、また打席でのサインも頭に叩き込んでおかなければならない。

「……ん？　せんしゅーどしたの？」

「あつ、伊吹ちゃん……」

頭の中でサインを思い出していると、千秋が金堂の方をじつと見ているのに気が付いて声を掛ける。

「金堂先輩って優しいなって思ってた」

「んー？　今そんな事思う要素あったっけ？」

浜矢的には今さつき「そもそも打てない」と言われ、地味に厳しい人という印象になっちゃっている。

仲間だろうが甘やかしたりせず厳しくするのも優しさと言えればそれで終わりなのだが。

「……反省会でね、打線の具体的な悪い所言ってくれたでしょ？　あれ本当は私が言おうとしてたんだ」

「ああ、そういえば美月ちゃんあの時何か言おうとしてたね」

確かに、先程の千秋は何かを言い淀んでいた。

その直後に金堂が名指しで言っていていいのかと発言したのだ。

「先輩相手に言いにくいなって思ってたら、金堂先輩が代わりに言ってくれたんだ」

「そうだったんだ」

「私が言おうとしてたこと全部分かってたんだもん、びつくりしちゃった」

千秋と違い、金堂は参謀という訳ではない。

それでも的確に選手個人の弱点だったり敗因だったりを分析出来ているのは、それだけ周りを見ているということだ。

「普段あまり主張してこない人だけど、その分みんなの事をすごく見てくれてるんだね」

「……意外とキャプテン向きかもね」

「もしかしたら次のキャプテンは金堂先輩かもな」

一年後にこれが現実となるのだが、今の彼女たちはそれを知る由はない。

(せんしゅーのおかげで、普段あまり話さない先輩の良い所が知れたな)

別に金堂と浜矢は仲が悪い訳ではない。

ただ浜矢は鈴井や千秋、先輩の中なら同じ投手の中上や青羽と一緒にいる事が多く、金堂も基本的には同じ年で固まる傾向にあるので話す機会が少ないだけ。

第三試合も終わり、試合後の練習開始。

浜矢たち守備派は覚悟を決めて、灰原による地獄のノックを受ける。

「どんな体勢でもいいからまず捕る！ 全部正面つていう意識は捨てる！」

「はいっ！」

「無理してノーバン送球するな！ ワンバンだろうが何だろうが確実にアウトを取れる送球をしろ！」

プロ野球の舞台で戦ってきた灰原は、ゴロは全て正面で捕球する、必ずノーバウンドで送球するなどという指導はしない。

むしろ捕りやすければ逆シングル大歓迎、一塁への到達タイムが速くなるのであればワンバン送球でも良いという考え。

ただ逆シングルというのはあくまでも基礎が出来ている人間、もしくは強い打球の多いサイドにしかやらせない。

守備派の四人は試合後だが一人100球のノックを受け、疲労困憊の状態で合宿の終わりを迎えた。

「これにて合宿を終了します！ 試合結果は残念でしたけど、収穫もありました。これから頑張つていきましょう！ 監督、何かありますか？」

「練習は自主練のみにするが、試験の前後に試合はある。野球に気を取られて赤点なん

て取らないようにすること！」

「はーい……」

試験と聞いた瞬間、山田と菊池のテンションが露骨に下がる。

その二人ほどではないが青羽も灰原から目を逸らしている辺り、そこまで勉強が得意ではないのだろう。

「伊吹ー？ そんな余裕そうにしてて大丈夫かー？」

「いや、そもそも私特待生で入ってるので……」

「は!? 特待生!？」

「はい。学費免除組です」

いえーい。浜矢は気の抜けたような声を出しながらダブルピース。

至誠は他の私立と比べると学費は安い方なのだが、それでも浜矢家に一般生として入るだけの余裕は無い。

「普通科は無理だつて言われて推薦で入った私は一体……」

「え、うちの普通科の偏差値って……」

「浜矢、察してやれ……」

至誠の普通科の偏差値は46、体育科は40。

しかも体育科はそこから更にAくDクラスに分かれており、この2人は1番下のDク

ラスに在籍している。

これでこの二人の学力は察してほしい。

「まあ体育科のがテスト簡単だし平気でしょ」

「いや、体育科も無理っす!」

「頑張ってくれよ! 赤点取つたら大会出られるか分からないんだから」

「なんとか赤点は回避します!」

この人達、どんだけ頭悪いんだ……みたいな目で見てる浜矢も飛び抜けて学力が高い訳ではない。

特待生で入学しなかったから多少レベルを下げてただけであり、偏差値60やら70やらではない。

合宿の二週間後、練習試合二試合と中間試験を終えた彼女たち。

浜矢の手元にあるプリントには全教科の得点と合計、そして学年の順位が記されていた。

ほぼ全教科90点以上を叩き出している辺り、忙しい合間を縫って勉強したのだから。

「伊吹ちゃん、どうだった?」

「ふふーん。どやどや！」

「へー、本当に頭良いんだ」

「どういう意味だよ……鈴木は？」

「はい」

鈴井の成績はどんなもんかな、と何処か余裕そうに彼女のプリントを見た浜矢だったが、そこには自分よりも高い点数がズラリと並んでいた。

「なんで特待生より頭良いんだよ！」

「そりゃあだいたい偏差値下げて入ってきてるし」

「本当はいくつ？」

「68」

「ウチにいていい偏差値じゃないぞ……」

鈴井は行こうと思えば何処でも行けたのに、わざわざ至誠を選んだのは灰原が監督をやっているから。

一学期の中間試験如きでは躓かない、そらそうよ。

「伊吹ちゃん、美希ちゃん。テストどうだった？」

「お、せんしゅー。問題ないよー」

「わ、二人ともすごいね！ 尊敬しちゃうなあ」

「美月ちゃんはどうかなの？」

千秋の結果を覗き込むと、二人よりは低いながらも全教科80点以上という結果を残していた。

「いや全然平気じゃん」

「英語は伊吹ちゃんの倍あるじゃん」

「うるさい！ 英語のことは言うな！」

「なんで英語だけ50点台なの……？」

「苦手なんだよ……」

ほぼ全ての科目で90点以上、つまり最低でも一つの科目は90点を取れなかったわけ。

その唯一の科目が英語で52点。一科目だけ明らかに酷い。

いくらプロ野球選手として大成してもメジャーには行かん！ などと怒り狂ってる浜矢を二人は華麗にスルー。

「野球の話しよう！ 英語は二人に教えてもらおう！」

「はいはい。美月ちゃん、今アレ持ってる？」

「もちろん！」

千秋が手提げから取り出したのは選手の個人成績などのデータが記録してある私物のタブレット。

スマホだけでなくタブレットも持ち込みを許可されている辺り、至誠の校則の緩さが窺える。

「10試合やって6勝3敗1分け……かなり良い方じゃない?」

「うん。ベスト16以上が相手なのにこれだけ勝ってるのは凄いよ」

「成績……見る?」

「……見る」

恐る恐ると言った具合に浜矢が「個人成績」の欄をタップすると、全員分の今までの成績が画面に表示される。

「キャプテンの打率えつぐ。562ってなんだよ」

「3本塁打10打点……真正正銘の四番だね」

「中上先輩も28イニング投げて防御率1.50だよ!」

「糸賀先輩も4割超えてんのか……盗塁も5つ決めてるし理想の一番打者だな」

数字だけ見ても三年生の頼もしさが分かるだろう。

6割弱の四番に1点台のエース、打率4割超えプラス盗塁成功率10割の一番。

「じゃあ二人の成績も見ようね?」

「う、見たくない……」

「伊吹ちゃん、現実から目を逸らさないで」

「はい……」

まずは鈴井の成績から。

36打数14安打、打率・389。

四死球と犠飛が1つずつ。そして4打点。

一年生、しかもショートでこれだけ出来れば誰も口出しはできない。

問題は浜矢の成績だ。

36打数7安打、打率・194。

1四死球で打点は僅か2。

投手としても24と1/3イニングで18失点。

防御率は5・18となかなか酷い有様だ。

「いやあ……我ながらグロい成績だ」

「まあ試合重ねていくごとに失点が減っていったのは良かったね。最後の試合は5回2失点だったし」

「投手としてはだんだん良くなってるのは自覚してるけど、打撃がなあ……」

「打撃だけじゃなく守備もちよつとね……フライが上がるとヒヤツとしちゃうかな」

打てない、選べない、走れない、守れない、抑えられないの5ツールプレイヤーが完
成だ。

守備も範囲が狭いだけならマシンなのだが、狭い範囲内で2失策と散々な結果に終わっ
ている。

鈴木も言ったように投手としては成長しているが、野手としては特に変化は無い。
人数的にベンチに落とす事ができないので、呪いの装備のようになっていく。

「けど伊吹ちゃん以外は打てるし、とりあえず投手として鍛えた方がいいのかな」
「出来る限り投手陣の消耗は少なくしたいからね、それで良いと思うよ」

「今はとにかく投手としての成長がメインか……」

野手は爆発する時は平気で20点を奪ったりするような打線なので心配はいらない
が、投手は三人しかいない上にまともな経験者は一人のみ。

浜矢は投手としての成長を優先した方がよい。

因みに現時点での浜矢はストレートとスライダーはそれなりに良くなったが、カーブ
は相変わらず。

ストライクゾーン内に投げたらほぼ10割打たれるレベルの球だ。

だがもう大会まで時間は無いし、無理に変化球を覚えてフォームを崩したりストレー

トの質が落ちたりしたら大変なので、この三球種で大会に臨むと決めたのだ。

「そーいや打順って決まったの？」

「うん。相模中央戦の打順が一番良いかなって監督と話したよ」

「やっぱアレが一番だよな。王道というか」

「打順変わると途端に打てなくなる人もいたし、あの打順が合ってたんだろうね」

打てなくなる人は主に菊池、山田、青羽の三人。

あの三人は菊池は二番、山田と青羽の二人はクリーンナップから動かさない事になった。

「そーいやそろそろ抽選会？」

「うん、再来週だね。楽しみだな」

「てか制服持ってないんだけど」

「クジ引くわけじゃないしいんじやない？ 先輩たちも制服持ってない人何人かいる

みたいだし」

私服登校の弊害だ。まあ至誠にはこういう時の為に校内で制服をレンタルしているのだが、彼女がそれを知るのは一年後の話だ。

第6球 抽選会

「さあさあ！ ついにこの日がやって来たよ！ 早く中に入ろう！」

「ちよ、せんしゅー落ち着こうぜ！」

「そんな事言つて、伊吹ちゃんもだいたいぶはしやいでるけどね」

6月10日。夏の大会を一ヶ月後に控えたこの日は抽選会当日。

千秋は県内の有力選手を発見しては歓喜の声をあげて興奮しているが、鈴井の言う通り浜矢もどこか落ち着きが無い。

激戦区神奈川で戦うライバルがここに集結しているのだ、そうなるのも無理はない。

「おおー……人いっぱいだ」

「見て！ あそこにいるのが藤銀学園とうぎんのスタメン！ あつちは蒼海大相模の一年生、最速150kmを誇る速球派の佐久間さんだよ！」

「一年で150!? 凄いな……」

「高校通算40本、京王義塾きやうおうの四番結城さんに通算6割超えの水瀬さんも！」

プロ注目の三年生だけではなく一年生の有力選手まで網羅している千秋に対し、浜矢は素直に凄いと褒めているが、鈴井は若干引いている。

「……二人とも行くよ?」

「ごめんごめん。せんしゅー、段差気を付けてね」

「うん、ありがとう」

呆れた顔で二人を先導する鈴井に、その後をついて行く浜矢と千秋。

全員が着席し、時間になるとまずはシード校の抽選が始まった。

至誠はシード校ではないのでだいぶ後の方となったが、ようやく順番がやってくる。キャプテンの柳谷が紙を引いてスタッフに見せる。

「至誠高校、68番」

番号が読み上げられると、至誠のメンバーはトーナメント表を確認する。

出場校が奇数なので運が良ければ二回戦からの登場となったのだが、残念ながらノーシードが決定した。

「……茅ヶ崎西幡^{にしはた}? 知ってる?」

「普通の公立校だよ。基本一回戦負けの弱小校」

「なら楽勝だな。そこに勝ったら城南^{じょうなん}か」

「前までは強かったけど最近はそこそこだし、いけるかもね」

「ごくごく一般的な公立校と古豪が一、二回戦の相手となった。

油断をしてはいけないのだが、二回戦からいきなり蒼海大というハードモードではな

かった事にひとまず安心だ。

抽選会が終わると早速練習が行われる。

対戦相手が決まった事によってやる気が出たのか、全員いつもより気合いの入った動きを見せている。

野手陣はグラウンドで千秋による両打ちノックを、投手陣は室内練習場で投げ込みをする。

千秋はノックの技術がある上に貴重な両打ちということもあり、裏では選手転向をしても良いのではないかと言われている。

室内では投手陣が投球練習を行なっている。

浜矢は灰原、青羽は柳谷を相手に投げ込んでおり、中上は二人の変化球やフォームについて逐一アドバイスを送っている。

「うん、ストリートもスライダーもいい感じ！ これならそれなりに通用するよ」

「ほんとですか!!? やった!」

「ただカーブがなあ……一応チェンジアップも覚えようとしたんだっけ」

「はい。けど全然投げられなくて断念しました」

カーブもチェンジアップもリリースの瞬間に切るといよりは、ボールを抜くように

して投げる球種。

その感覚がどうしても掴めない浜矢は、チェンジアップが全てすつぽ抜けになり習得を断念した。

「青羽もそこそこコントロール付いてきたし、二人とも頼むぞ」

「はい！ 中上先輩だけに負担かけさせる訳にはいきませんし！」

「……与えられた仕事はこなしますよ」

「翼はクールだな。あつ、そうそう。私のリードが嫌だったら首振ってくれて構わないからな」

「けど私、配球の事とか全然分かりませんし……」

「平気平気。試合中に何となくこの球は投げたくないなって思う時はあるから」

（そういうものなんだ。今までの試合ではそんなの感じなかったけど、公式戦だとまた違うのかな）

試合の種類というより単純に勝負勘だろう。

一流の選手はサインを見た瞬間嫌な予感があったり、投げる直前に打たれると感じて急遽投げる球種を変えたり外したりする。

浜矢もいざれそうなると分かっているのだろう。

「それに柳谷のリードはそんな良くないしガンガン首振っていいぞ」

「ちよつと監督!」 最近は良くなってきましたよね!」

「やつと平均程度だなく。一年の頃は酷かったな」

「打撃全振りだったのは認めますよ……」

彼女は元々強打と俊足が売りで入学してきた。

その代わりに守備とリードがアレだったわけだが。

だが浜矢も青羽も組んでいてそこまで違和感を感じていないのは、それだけ灰原にしごかれたからだ。

「中上、野手にノックあと30分って伝えてきてくれ。終わったならここに集合な」

「はーい」

灰原からの伝言を伝えるに中上が外に出る。

浜矢は自分の残りの球数が丁度30球なので、1球1分のペースで投げ込んだ。

実際の試合ではそんなに時間を掛けたら審判に注意されるのだが、まだ初心者域を脱しない彼女が丁寧^{ていねい}に投げるのを意識するのは良いことだ。

30分後、投球練習を終えると同時に野手が室内練習場に集まる。

全員の姿を確認したあと、灰原が中身の詰まった段ボール箱を抱えてくる。

「ちよつと早いがレギュラーは決まってるし、ユニフォームと背番号を配布するぞ!」

「ユニフォーム！ きたっ！」

「待ってましたよ！」

段ボールに詰められていたのは、人数分の公式戦用ユニフォームと背番号のゼッケン。

今年はせっかく至誠だけで出場出来るのだからとデザインが一新されている。

ほとんど練習試合で着用した物と変わらないのだが、そこには触れない方針で。

「それと、予算が下りたからアンシヤも買ったぞ」

「うわっ、派手ですね」

「情熱の赤！ って感じで良いじゃん？」

「威圧感ありますねコレ」

赤色のアンダーシャツに白をベースに、赤のラインが入ったユニフォーム。

着用した時の見た目がかなり暑い、いや熱い。

ユニフォームとゼッケンは背番号順に配布される。

背番号1 中上佳奈恵 エースは勿論彼女だ。

背番号2 柳谷真衣 主将兼四番の正捕手。

背番号3 金堂神奈 木製バットの安打製造機。

背番号4 菊池悠河 俊足を誇る守備職人。

背番号5 山田沙也加 圧倒的破壊力の長距離砲。

背番号6 鈴木美希 守備と打撃を両立する遊撃手。

背番号7 青羽翼 投手兼野手のクリーンナツプ。

背番号8 糸賀由美香 俊足巧打のトップバッター。

背番号9 浜矢伊吹 センスだけで野球をやる初心者。

だが、これだけでは終わらない。

「それと10番、千秋」

「えっ!? 良いんですか……?」

「ベンチ入りの粹余ってるしな。それにコーチャーとしても出せるし」

「ほら、早く貰いなよ。憧れの至誠のユニフォームだよ?」

「うん……!」

今にも泣き出しそうな、それでいて喜びが隠し切れていない表情でユニフォームを受け取った千秋は、割れ物を扱うかのように大事な手つきでユニフォームを抱きしめる。

「よかったな、せんしゅー」

「うん、うん……! これは間違いなくあの至誠高校の公式戦ユニフォーム! ほら、生地も違うしフロントラインが一本多いんだよ! それに袖の所にもラインが入ってる!」

「お、おう……相変わらず凄いな」

色んな意味で。知識の豊富さもさることながら、話す速度や声の大きさが普段とは段違い。

この勢いで距離を詰められた浜矢はつい後ずさる。

「早く着たいなあ……」

「もう着ちやつたら？」

「それはダメ！ 大会までじっくり待ってから着るのが最高に幸せなんだよ〜」

「そ、そうなんだ……」

あの鈴井ですらも気圧されている辺り、このモードの千秋がどれだけ勢いがあるのか分かるだろう。

浜矢は距離を取ろうとしたが、鈴井ともども千秋に捕まり30分近くの至誠トークを聞かされる事に。

彼女の話は今の世代が知らないような事まで教えてくれるので、面白いと言えば面白いのだが。

(単純に圧が凄いなんだよな……)

そこだけ改善してくればいくらかでも話は聞くのだが、それを本人に伝えたら凹みそうなので何も言えないのだ。

ユニフォームを配り終え、本日の練習は終わり。

灰原は長時間の練習は不要派の人間。

短時間で密度の濃い練習をすれば効率的に成長ができるとよく言っている。

実際それで柳谷たちは育っているし、浜矢も野球を始めて2ヶ月とは思えない成長を見せているので正解なのだろう。

まあ浜矢に関しては彼女の才能もあるのだが。

「伊吹ちゃん、美希ちゃん。帰ろ？」

「おー、ちよつと待つてねー」

「早く準備しなよ」

「むしろ何で鈴井はそんな準備早いんだよ……さつきまでせんしゅーの話聞いてたじゃん」

「私は聞きながら準備してたの」

「くそう……」

二人を待たせてはいけなないと、急いで帰り支度を済ませる浜矢。

ふと、一つの疑問が頭に浮かんだ。

「そーいやせんしゅーって何でそんなに至誠が好きなの？」

「元々野球は好きだったんだけどね。八年前……ちようど監督が至誠の選手だった頃だね。あの時、私は県大会の決勝戦を球場で見てたんだ」

「へー。それってせんしゅーが行きたいって言ったの?」

「ううん。親も野球好きだったから連れられて」

八年前という小学生に入りたての頃だ。

(そんな頃から野球が好きだったとなると、生まれる前から野球が好きだったんじゃない……)

彼女は物心付いた時から野球道具に触れていたの、浜矢の予想はあながち間違っていない。

「そこで監督の活躍に目を奪われたんだ。4打数3安打1本塁打3打点……逆転サヨナラツーラン」

「あつたね。私もそれで監督のファンになったよ」

「美希ちゃんも? お揃いだね。……それからずっと至誠が好きなんだ」

「監督のファンだけじゃなく、至誠のファンにもなったんだ」

「うん。特に八神選手が好きだったな」

「八神さん! 私も好きだよ、あのフォーム!」

八神涼香。高校時代に灰原とバッテリーを組んで全国制覇を達成しており、現在も横

須賀スカイペガサスズで活躍しているプロ野球選手。

制球の良さが売りのサイドスロー投手で、毎年のように防御率2点台をキープしている名投手だ。

なお彼女が登板すると味方打線が沈黙する模様。

「……いつか、私も至誠の人間として全国に行きたい。全国の頂点に立ちたいって思ったんだ」

「選手になろうとは考えなかったの？」

「元から人のサポートをするのが好きだったし、私小さい頃はあんまり体が強くなかったから」

「そっか……けどユニフォーム貰ったし、グラウンドにも立てる！」

「そうだね！　それが嬉しくてしょうがないんだ」

そう言って笑う千秋の顔は、浜矢と鈴井の瞳にはとても幼く映った。

背は小さいし顔もどちらかと言えば幼いのに、いつもはどこか大人びて見える彼女。

普段は真面目な顔でデータを分析しているのに、今は小さな子供が初めておもちゃを貰った時のようにキラキラした目をしている。

「早く試合したいな……それでせんしゅーを全国へ連れて行くー！」

「期待しててね」

「二人とも……うん、期待してる！ 勿論二人の活躍もね！」

「よっしやー！ 完封してやるぜ！」

「じゃあ私は猛打賞かな」

「ふふっ、二人とも頑張ってるね！」

大会をどのように見ているかはそれぞれ違う。

浜矢はスカウトへのアピールの場として、鈴井は自らの実力を試す場として、そして千秋は全国に行くまでの通過点として見ている。

だが、全国へ行くという気持ちは全員が持つてる。

（目標が一致している。それだけで私達はどこまでも強くなれる、何処までも行ける気がする）

第7球 開会式

すっかり梅雨も明け、猛暑の始まりを告げた7月。

開会式当日、選手たちは横浜スタジアムに集まった。

「これ全員野球選手か……」

「やっぱりレギュラーは体格良いね」

「だな」

背番号が一桁台の選手は皆、体格が良い。

至誠の先輩たちも似たような感じだが、浜矢ら一年生と比べるとその差は歴然だ。

足の太さに至っては二倍近い差があるのではないかというほど。

「あ、あつちに佐久間さんがいるよー！」

「おー……一年の割には鍛えられてるな」

「だからこそ150kmを投げられるのかもね」

蒼海大相模の背番号18、佐久間玲。

浜矢たちと同じ一年生だが体格は既に二年生級。

この体格が150kmという速球を生み出している。

「佐久間ってバツティングはどうなの？」

「打撃も得意で、中学時代は四番を打ってたよ」

「エースで四番か……良い選手を獲ったんだな」

浜矢も佐久間のことだけは調べていた。

地元神奈川ではなく静岡県出身。越境組だ。

その才能を見出されて県外の高校に入学し、充実した施設で毎日夜遅くまで練習を行なう。

それを越せるだけの實力は、今の浜矢には無い。

だが、彼女には頼りになる仲間がいる。

どんな相手であろうと負ける気はしなかった。

「おーい、そろそろ入場だぞ」

「はい！ キャプテンは緊張してないんですか？」

「もう三年だし、あんまり」

浜矢は緊張で手汗が酷いことになっている。

彼女が一番心配しているのは、行進で手足が同時に出ないかどうか。

至誠の部員数はたったの九人なので、そんな事があればすぐ目についてしまう。

「ここで堂々としてなきやダメだぞ、ナメられちゃう」

「糸賀先輩も余裕そうですね……」

「三年は緊張なんかしてる暇ないからね」

三年生にとってこの大会は最後のアピールの場。

試合当日というわけでもないのに緊張なんかする豆腐メンタルなら、試合で本来の実力を出すことなど出来ない。

頭では理解していても、緊張するものはする。

浜矢にとってはこれが初めての開会式なのだから仕方ないが。

「よし、入場するぞ！ 演奏よく聴いてテンポ合わせて、左右は美月に合わせてな！」
「はいっ！」

千秋がプラカードを持って先頭を歩くことになるのだが、彼女は全く緊張している様子は無い。

むしろこの中にいる誰よりも楽しそうにしている。

鈴井といい千秋といい、なぜ自分以外は緊張していないのかと不服そうな浜矢であった。

どれだけ緊張していても時間はやってくるもので、選手入場が始まる。

観客席に座っている控え選手や監督コーチによる拍手に見送られながら、神奈川で戦い抜く選手たちが入場していく。

全員と戦う訳ではないが、全員がライバル。

(そう考えると、とんでもない世界に足を踏み入れたんだな……)

浜矢からすればほぼ全員が自分より体格の良い選手なので、余計にこの世界の凄さを感じるだろう。

『選手宣誓』

そのアナウンスに応え、蒼海大相模のキャプテンが前に出る。

堂々とした立ち振る舞い、ハキハキした喋り。

まさしく強豪校のキャプテンといった人だ。

蒼海大は間違いなく決勝まで勝ち上がった。

自分たちも勝ち上がって、決勝で蒼海大を倒す。

浜矢はこの選手宣誓を聞いて改めてそう考えた。

「あー、終わったー！」

「お疲れ。帰ったら練習だからな」

「はい！ いっぱい投げますよー！」

「打撃もあるからそこそこね」

「おう！」

長かった開会式が終わり、選手はバスに乗り込む。

猛暑の中で立ちっぱなしの疲れもあるが、他校の選手を間近で見た事によってやる気が出たのだろう。

浜矢の目は熱く燃え上がっていた。

「蒼海大のキャプテンって名前なんだっけ」

「ファーストの山城齋さんだよ。高校通算40本！ 1年生からベンチ入りしていた名選手なんだ」

「山城ね……よし、覚えた」

「むしろまだ覚えてなかったの？」

「いやー、佐久間の事調べてて他は……」

それに今年一回しか戦わない三年生よりも、三回以上戦う可能性のある同級生の方が気になってしまう。

特に浜矢と佐久間と同じポジションなので余計に。

「佐久間はウチ相手には多分投げないと思うよ、ノーコンだし」

「けど代打としては出てくるかもね」

「投手として戦う事になるかも知れないのか……抑えられるかな」

「今の伊吹ちゃんなら間違いなく打たれるね」

「そんなキツパリと……」

自分でも薄々分かってた事だが、こうもキツパリと断言されると悔しいものはある。

（というか鈴井やせんしゅーにそこまで評価されてるって、佐久間って本当に凄い奴なんだな）

基本的にプロ注目 of 三年生の話をする事が多い彼女たちが、同級生にここまでの評価を下すのは珍しい。

それだけ佐久間玲という選手は規格外なのだ。

「ただ変化球はあまり得意ではないみたいだし、スライダーなら抑えられるかも」
「もしくは新しく何か覚えるか」

「流石に今から覚えるのはな……私の登板時に代打で出てこない事を願おう」

「大会終わったらすぐ変化球覚えてもらうからね」

「スライダーとあのショボカーブだけじゃキツいからなあ」

結局カーブは使い物になりそうもないので、浜矢はストレートとスライダーのみでの勝負を余儀なくされた。

それでも野球に力を入れていない公立校や、私立でも中堅校までなら通用するよう
だ。

「帰ったら教えようか？」

「いいんですか？」

「といつても簡単なものになっちゃうけど」

「三球種投げられるようになればマシになると思いますし、お願いします！」

三人が変化球について話していると、前の座席に座っていた中上が振り向いてそう提
案した。

彼女は大抵の変化球は投げられるので、習得難度の低い変化球だって知っているだろ
う。

「何を教えてくれるんですか？」

「ツーシームかなあ、一番簡単だし」

「金属でツーシームって効果あるんですか？」

「強い当たりは飛ぶけど、意外と抑えられるよ」

実際に彼女もツーシームを多投しているが、ホームランにされた回数はそれほど多
くない。

ただ打ち取った場合も外野フライやライナーが多いので、強い当たりにはされがち。

「じゃあこの握りで投げてみて」

「はっ」

学校に戻って早速ツーシームの練習開始。

近くで話を聞いていた青羽も、やはり一球種では心許ないからと一緒に習得することになった。

「指の間隔とかはストレートと似てるんですね」

「まあね。というかツーシームだって言っちゃえば直球の一種だしね」

「確かにあまり変化球って感じはしませんね」

「けど木製だと途端に猛威を振るうから、意外と侮れないよ」

「木製は芯外されたら終わりですもんね」

バットのスイートスポット、つまり芯の部分が狭い木製バット相手であれば小さく動くツーシームはかなり有効だ。

金属バットはやろうと思えば根元付近でもヒットが打てるほど芯の部分が広く、一見するとツーシーム系の変化球は効果がないように思える。

実際木製ほどの効果は得られないが、それでも打ち損じさせて外野フライに仕留めることは出来る。

「腕の振りはストレートと同じだね」

「はい！ キャプテン、いきますよー！」

「よーし、こーい！」

柳谷のミット目掛けて腕を鋭く振り抜く。

途中まではストレートと同じ軌道を描くが、打者の手元で利き手側に変化した。

「おお……意外と変化大きいですね」

「そういう握り教えたからね」

「握り一つで変化って変わるものなんですか？」

「うん。私も変化の小さいスライダーと大きいスライダー投げ分けてるし」

「投球の幅も広がるからキャッチャーとしても有り難いんだよな」

小さな変化はカウント取りやゴロを打たせるのに、大きい変化は空振りを取る時に使える。

使い分けが出来れば実質二球種あるのと同じ。

浜矢に本当に必要なのは、新しい球種ではなくこの投げ分けなのかもしれない。

「ま、二人はとにかくツーシーム覚えよ！ 意外と良い変化してるし、多分実戦でも使えるから！」

「はい！」

「……はい」

ツーシームが実戦で使えるようになれば、今のところ使い道が無いカーブも見せ球として機能するかもしれない。

どんなに変化量がシヨボくて曲がり始めが早い絶好球だとしても、せつかく覚えたのだから使わないのは勿体無いというのが浜矢の考えだ。

「早く試合したいな」

「私達は二日目でしたっけ」

「そうそう、それに二試合目。一試合目だったら緊張してたと思うし良かったな」

「ですね」

いずれ当たるかもしれない他校の試合も観ることが出来るので、この順番は至誠的には最高だった。

(……けど、早く試合したいって気持ちもある。早く試合当日にならないかな)

第8球 夏の開幕

彼女たちの夏は、静かに始まった。

それもそのはず。観客など殆ど居ないのだから。

「先輩たちってかなり凄い選手なんですよ？ 何でこんだけしかいないの？」

「初戦は注目されないからねえ……勝ち進めば増えると思うよ」

「それに相手が相手だしね」

茅ヶ崎西幡の選手のノックを見ると、緊張のせいかな簡単な打球すらもこぼしていた。

怪物の中に一人混ざった一般人の浜矢としては、正直向こうの選手の気持ちも分かる。

初戦で観客がまばらとはいえ、一般人からすると公式戦というのは緊張してしまうのだ。

「さあ初戦！ 5回でコールド決めるぞ！」

「オオー！」

5回で10点奪ってコールド勝ち。

部員の少ない至誠にとって、一番消耗せずに戦えるのはこの方法なのだ。

この打線と相手の守備力からすれば10点なんて余裕で取れるだろう。

至誠は後攻なのでまずは守備から。

(裏の方が有利だから別に良いんだけど、先発がよりによって私なのは一体何故なんだ……)

格下相手にエースを登板させる理由が無いからだ。

まあ青羽と浜矢なら後者の方が投手としての能力は高いので二回戦に回すという手もあつたのだが、そもそも青羽はリリーフメインの起用なので選択肢にすら入ってなかつたのだ。

『明日の先発は浜矢でいくぞ』

『え!? 正気ですか!?!』

『私は至つて正気だよ。中上は出したくないし、青羽はリリーフメインで起用する』

『だとしても私つて……』

『浜矢は良い投手だよ。信頼してるぞ』

これが昨日の浜矢と灰原のやり取りである。

監督直々に良い投手と言われてしまえば、彼女の頭から断るといふ選択肢は消え去つた。

自分に目を掛けてくれた灰原の期待を裏切りたくない、いつまでも初心者だからとウ

ジウジしていられない、このチームの役に立ちたい。

そして何よりも、少しでもアピールしてプロに行ける確率を上げたい。それが彼女の原動力となっている。

——プレイボール。

試合は始まってしまった。浜矢に逃げ場は無い。

(なら私がやる事はただ一つ……三人で抑えるだけだ)

記念すべき公式戦初戦、先頭打者への初球は覚えたてのツーシーム。

公立の弱小校とはいえ一番を打っているだけあり、この球にタイミングを合わせてくる。

セカンドの頭上を超えられた打球。

それを菊池は高くジャンプして掴んでみせた。

「ナイスセカン！」

「ワンナウトー！」

公式戦初対決でヒットを打たれるのとファインプレーによって打ち取るのでは気持ち的に全然違う。

(あんまり守備にばかり頼っちゃいられないな！)

二人目はスライダーを打たせてファーストゴロ。

三人目も追い込んでから低めのストレートを詰まらせショートゴロで終える。

「ナイピー！」

「ありがとうございます」

意気込んでいたもののまさか本当に三人で終わらせられると思っていなかったようで、浜矢は少し驚いた顔をしている。

今日のスライダーの調子は上々。相手の攻め方次第では完封も狙えるだろう。

「1回裏！ まず2点取るぞ！」

「ハイッ！」

1イニングで2点。それを5回繰り返せばコールド。

浜矢が点を取られない事が前提ではあるが、上手くいけば最短でコールドを決められる。

九番には打線のブレーキかつ塁に出ても各駅停車の浜矢がいるが、その分上位打線には隙がないので2点くらい取れるはずだ。

「由美香ー！ まず出る！」

「いつものバツティングー！」

糸賀は初球をあつさり打ち返してツーベース。

(菊池先輩はバントかな……いや、あのサインは)

初球エンドラン。しかも完璧なタイミングでスタートを切った糸賀に動揺したのか、ストリートが甘く入るといふオマケ付き。

菊池はそれを逃さず捉えてタイムリーツーベース。

「よし、先制!」

「ナイバッチー!」

「まだまだ点取ってくぞ!」

ノーアウト二塁、そしてここからはクリーンナップ。それらが意味するのは猛攻の始まり。

山田、柳谷、金堂の三人が続き3点追加。

当初の予定の二倍もの点を奪って初回を終える。

「猛攻にも程がある……」

「それがウチの打線だし。ほら、早く守備行こう」

「はいはい、抑えますよつと」

山田と青羽以外は守備力に難が無いので、浜矢は割と楽に投げられる。

それに加えて援護も大量と、投手としてかなりやり易い状況だろう。

(まあ、だからこそ自分の実力の無さが浮き彫りになるんだけど)

だが既に試合が始まってしまった以上、やるしかないのだ。

2回表、四番はそれなりに打力のある選手。

いくらバツクの守備が良いからと油断してかかれば痛い目を見るのは明白。
柳谷の出したサインはスライダー。

(初球から内角か……当てそうで怖いけど、投げ切るしかない！)

顔の前を通過する内角高めのスライダーで仰け反らせ、ワンストライク。

一つ目のストライクを取った後は外角攻め。

二球続けて外角にストレートを続け、四球目に見せ球として内角のカーブ。

(最後は……スライダー)

サインに領き、アウトローのストライクからボールになるスライダーを投じる。

追い込まれていたらつい手が出てしまう球。

一番警戒すべき四番打者から空振り三振を奪った。

「よしっ！」

「ナイピー！」

格下とはいえ四番を三振に切ったことで自信がついた浜矢は五番、六番も打ち取ってこの回も三者凡退に仕留める。

「これ5回までノーヒットいけるでしょ!」

「すぐ調子乗らない。二巡目から打たれるよ」

「そうだよ伊吹ちゃん。油断してると失点しちゃおう?」

「ですよねく……ごめんごめん」

だが、初心者が公式戦初登板でノーノーを達成すればそれなりに話題となるだろう。

それよりも彼女はクイックが絶望的に下手で、柳谷の強肩を持つてもランナーを刺すのが難しい。

なので極力ランナーを出したくないのだ。

「浜矢、ネクスト!」

「あつ、はーい!」

この後の投球について考えていてネクストの事をすっかり忘れていた浜矢だったが、灰原の声によって思い出すことが出来た。

ヘルメットを被り、バットを片手にネクストバッタースサークルにて中上の打席を観察する。

茅ヶ崎西幡の先発の球種はストレート、カーブ、スライダー。浜矢とほぼ同じだ。

中上はカーブを打ち返すも僅かなタイミングがズレてしまい、ライトフライに終わ

る。

「ドンマイです」

「カーブ狙い目かも」

「分かりました」

凡退してしまつた先輩からアドバイスを貰つた浜矢は右打席に入る。

カーブを狙いつつ、ストレートが甘いコースに来たら迷わず叩く。

スライダーと、球種に問わず高めは捨てる。

柳谷や糸賀のような一流なら狙い球以外も反応打ちが出来るが、浜矢にはそんな事は出来ない。

（なら自分が打てる球を待つのみ！）

初球のスライダーは見逃してストライク。

次の高めのストレートもボールと思つて見逃すが、ストライクゾーンを掠めており
ツーストライクと追い詰められる。

一球ボールを挟み、緊張をほぐすために息を吐く。

勝負の四球目は内角、少し甘めに入ったカーブ。

（このコースは当たらない、打てる！）

死球に対する恐怖心は強いが、試合の経験を積んだ事でこのコースは当たらないと分

かっている。

ボールの軌道に合わせるようにバットを振り抜く。

しつかりと振り抜いた打球は三遊間を綺麗に抜けた。

「……よしっ！」

「ナイバッチ！ 公式戦初安打おめでとー！」

「ありがとうございます！」

公式戦初打席初安打、スタートは上々だ。

(盗塁できたなら良かったんだけどな……)

浜矢には盗塁を決められるだけの脚も投手のモーションを盗む観察眼も無い。

従ってこの状況での盗塁はほぼ100%不可能。

つまり今彼女にできるのは、糸賀や菊池が続くのを祈ることだけ。

(……エンドランか、よし)

糸賀が初球を見送ると、ベンチからエンドランのサインが出る。

彼女なら余程のことがない限り打ち上げない。

そう信じている浜矢は投球モーションに入って少しした後、スタートを切る。

その直後に金属音が響き渡り、打球の方向を確認すると一・二塁間を抜けていた。

「伊吹！ 三塁！」

三塁コーチャーの青羽の指示に従い、浜矢は二塁を蹴って更にスピードを上げる。

三塁にスライディングをして危なげなくセーフ。

「ナイバッチです、糸賀先輩！」

「伊吹もナイスラン！」

「先輩の声が無かったら二塁で止まってました、ありがとうございます！」

脚が遅いと自覚していて、尚且つまだ走塁判断が苦手な浜矢を先輩がサポートする。

野手としてもやり易い環境だろう。

菊池の打席、内野は前進守備を敷く。

先程の打席でパワーがあまり無いと分かっているからか、外野も前進気味。

菊池は初球を弾き返し、打球はライトへの深めのフライとなる。

ボールがグラブに収まったのを確認してから浜矢は走り出し、無事ホームイン。

「ナイス最低限！」

「ナイバッチナイスラン！」

「いえーい！」

ベンチに戻った菊池と浜矢は全員とハイタッチ。

その後更に1点を追加し6対0で2回を終える。

3回はお互い1点も入らず4回表の守備を迎える。

相手は三番からの好打順、ここは必ず抑えなければならぬ。

二球で追い込んでからのサインは、インハイボール球のストレート。

浜矢は頷いてからロジックバックを触り、コントロールミスがないよう心を落ち着ける。

腕を振り下ろし内角高めへのストレートを投げる。

打者はボールの下を振ってしまい三振。

追い込んでから釣り球を振らせる、理想的なピッチングだ。

四番、五番も抑えて4回表も終了。

ここまで浜矢は被安打2、四死球1の好投。

「ナイピ。伊吹のストレートはノビがあるから、高めに投げると振ってくれるな」

「ノビが……」

「受けてると分かるよ。時々弾くんじやないかって思うし」

「そんなに凄くないですよ！」

「ストレートは自信持っても良いよ」

（ストレートは、かあ……）

だが自信を持てる球種が一つでもあるのは心強い。

浜矢の特長とも言えるノビのあるストレート、これがあるから高めの釣り球が効く。

「この回であと4点取るぞー！」

「オオツ!!」

あと4点という明確な数字が出たことにより打線が奮起する。

クリーンナップから始まったこの回は、山田の特大ホームランを含む5連打で一挙4得点。

浜矢はやはり続けなかったが、これで次を0に抑えればワールド成立となる。

「この回しっかり抑えていくぞー！」

「ハイッ！」

「伊吹ちゃん頑張つてね！」

「任せろー！」

千秋からの声援も受け取った、援護も当初の予定通り10点貰った。なら、投手はただ抑えることに専念する。

先頭は二球で追い込んでから釣り球のストレートを振らせ三振。

次は内角のスライダーを打たせてショートゴロ。

最後の打者は守備は良いが打力は無い。

落ち着いて投げれば抑えられない相手ではない。

公式戦初勝利が目の前にあるが、浜矢は気分の高揚を抑えて打者と向き合う。

まだ試合をやりたい、コールドにはしたくない。

そんな事を考えている顔をしていた。

(……ちよつと複雑だけど、私にも勝たなきゃいけない理由があるんだ)

ど真ん中に向かって初球を投げる。

失投だと思ったのか全力でバットを振ってくる。

しかし、浜矢が投げたのはツーシーム。

絶好球と思われたその球は手元で変化し内角へ。

勿論詰まった打球になり、サードゴロで試合終了。

「終わった……」

「伊吹！ 初勝利おめでとう！」

「伊吹ちゃん、ナイピ」

次々と仲間からお祝いの言葉を贈られるが、浜矢に勝利の実感は湧いていない。

コールド勝ちだからなのか、それとも単純に試合慣れをしていないからなのか。

「ほんとに私が勝ち投手……?」

「何言ってるの伊吹ちゃん、完封したんだから正真正銘の勝ち投手だよ」
「今年の公式戦初の勝利投手は伊吹ちゃんだよ！」

二人にそう言われ、ようやく実感が持てた。

浜矢が投げ切ったのだ、浜矢が勝ったのだ。

「初戦突破！ けど物足りないだろうし帰ったら練習するぞ！」

「はいっ！」

「城南のデータもあるので、見たい人は言ってくださいね」

「じゃあ私は見させて貰おうかな」

千秋の言葉に中上はそう答えた。

彼女は次の試合の先発、相手チームの情報を頭に入れておきたいのだ。

「伊吹ちゃんお疲れ」

「お疲れ、鈴井は大暴れだったな」

「そんなでもないよ」

2安打2打点は大暴れだと思うのだが。

浜矢はヒット一本打つだけで大騒ぎなのに対して、彼女は打つ事が当然かのような反応をしており、そこに嫌でも選手としての格の違いを感じてしまう。

「次の試合も勝とうね」

「……おう！」

彼女達は勝ち上がらなければいけない。

学校の評判を回復させるのもそうだし、個々のスカウトからの評価も上げたい。

(もっともっと、スカウトの目に留まるような活躍をしなきゃな)

第9球 勝ち抜ける

二回戦の相手は古豪の城南。

それなりにレベルは高いが、データは豊富にある。

相手はチェンジアップを決め球とする技巧派左腕。

だが球速はそこまでではないのでチェンジアップさえ捨てれば打てるはずだ、恐らく。

先発の中上は完璧な立ち上がりを見せ、良い流れで攻撃へと繋げる。

打線も好調を維持し続けていて糸賀が決め球のチェンジアップを打ち返して出塁、菊池の送りバント、そしてクリーンナップの連続タイムリー。いつものパターンで初回から先制。

「城南のクリーンナップは流し方向への打球が多い、シフトを敷いておけよ」

「ハイッ！」

要注意なクリーンナップへの対策もすっかりし、中上は6回1失点という好投。

打線もチェンジアップを苦としない糸賀、金堂、鈴井の三人を軸に8点を奪って6回コールド成立。

三回戦は浜矢が4イニングを、青羽が2イニングを投げる継投。

守備型のチームで打線はあまり脅威ではなく、投手を始めたての二人でも6回を3返に抑えられた。

だがその反面投手力が高いチームで、二番手以降も手強い選手は揃っていた。

「よっし！ やつと一本出た！」

「ナイバッチー！」

しかし糸賀のホームランを始めとし、主に三年生の打撃が爆発。

それと金堂は巧打力はあるが長打は無いことから今までクリーンナップに据えられる事は殆どなかったが、今回のような投手力の高いチーム相手でも余裕で打てる事から今回は五番に置かれた。

足と打力を兼ね備えた最強の四番と、長打は無いがどんな投手のどんな球でも打ち返せる五番。

一番から三番の選手になんとか出塁してもらい、ランナーを溜めた状態で二人に回す。

それが上手い具合にハマって6回でコールド。

四回戦、五回戦は連続で打撃重視のチームと当たり、試合前から打撃戦が予想されて

いた。

そしてその予想通り五回戦は打撃戦となった。

この二試合はエース中上が四回戦を7回2失点、五回戦は浜矢が5回3失点、青羽が2回2失点。

一方で打撃陣は好調を維持し続け二試合で9得点。

この二試合はコールドは成立せず7回まで試合をする事になった。

四回戦は3対2、五回戦は6対5という接戦をモノにして準々決勝進出を決めた。

「五回戦突破おめでとう。あと三回勝てば優勝だ、気を引き締めてくぞー!」

「はいっ!」

あと三回勝てば神奈川の頂点に立てる。

タレント揃いのチームとはいえ、たった九人でここまで残ると予想出来た者は居ない。

下馬評では四回戦進出までがいいところだろうと言われていた。

選手たちの疲労はかなり溜まっているが、ここからの日程は連日の試合は無くなり、更に優勝さえしてしまえば暫くは休める。

「もう向こうは試合終わったんですかね」

「ちようど試合が終わったみたいですよ」

神奈川は出場校が多い。そのため五回戦まで来ても複数の球場に跨って試合が行われている。

生で観戦することによって気付くこともあるので、中継でしか観られないというのだけが残念な点だ。

「準々決勝の相手は……藤銀学園です」

「ついに当たったか、強豪と」

「今年の藤銀はどんな感じだ？」

藤銀学園。春夏二回の全国出場を誇る強豪校。

今年の優勝候補の一角とされている。

全寮制で部員は有力選手を県内外から集めている。

至誠と似たような感じだが、規則や校則だけ見れば向こうの方がだいぶ厳しい。

そもそもこんな髪色が派手な選手が揃っている至誠の方がおかしいといえればおかしいのだが。

強豪校と弱小校で何が一番違うかと言われれば、メンタルの強さだろう。

試合に慣れているのは勿論、逆境での強さ、得点圏での怖さなどはやはりメンタル面が関わってくる。

強豪校で試合を多くこなし、色々な場面を乗り越えてきた選手たちはメンタルが鍛えられている。

多少のミスが出て動じずプレーが出来る、かなりの強敵だと予想される。

「今年は投手力、守備力が高めのチームですね」

「かといって打線が弱いわけでもないんだろ？」

「そうですね。クリーンナップは全員4割打ってますし下位打線も3割弱の選手が並んでいます」

「そんだけ打って守備型のチームなのかよ……」

あくまで例年と比較して守備型というだけである。

だが投手層の薄い至誠にとって、比較的打線が弱い年に当たったのは幸運だろう。

「せんしゅー、藤銀の総失点は？」

「5試合やって2失点だよ」

「はっ？ それだけ？」

いくら格下としか当たってこなかったとはいえ、5試合で2失点というのは素晴らしい。

しかもその2失点も五回戦での失点なので、残りの4試合は全て完封リレーで勝ち星

を上げている。

ちなみに至誠は5試合で13失点。

チーム防御率は2.94と、まともな投手経験者が一人だけのチームとは思えない好成绩を残している。

「対策とかは無いんですか？」

「あるにはあるぞ」

「え、あるんですか!？」

「なんで驚いてんだ……ちゃんと調べてきたよ」

まず灰原が言うには、藤銀のエースはコントロールはいいが球威はあまり無い。

持ち球はスライダー、カーブ、スプリット。

その内のスプリットはコントロールが効くので捨てて、スライダーとストレート狙い。

スライダーは変化が小さく狙いやすく、ストレートも速くはない。

「スペックだけ聞くとなんでそんな抑えられたのか謎なんですけど……」

「打たせて取れる守備力のお陰もあるし、コースギリギリに決められたら手が出ないだろ?」

「なるほど……」

アウトローギリギリに変化球を決められてしまえば、まともに打てるのは金堂と柳谷くらいだろう。

特に高校野球はプロ野球に比べてストライクゾーンが広いので、バットが届きにくいというのも相手打者を苦しめる。

「あとはカーブの存在だな……あいつのカーブは縦に曲がるんだ」

「パワーカーブとかナックルカーブ系統ってことですか？」

「ああ、それに変化量も大きく制球も効く。あのカーブがあれば予選くらいなら簡単に抑えられる」

浜矢は縦に割れるカーブと対戦した経験は無い。

縦に変化するカーブをコーナーに投げ分けられる制球力があれば、県内ならそれだけで無双できる程の武器となる。

「カーブを打てそうな奴は狙って、無理なら捨ててスライダーとストレート狙い。それしかないな」

「あんま対策ってレベルじゃない気が……」

「それだけ向こうも凄いつて事だ。それにうちだって誰も打てないなんて決まった訳じゃない」

そう、至誠には最高打者の柳谷とバットコントロールお化けの金堂がいる。

青羽と山田だつて当たりさえすればアウトローの変化球もスタンドイン出来るし、糸賀や鈴井だつて当てるくらいなら出来るはず。

この中で一人か二人タイミンクが合えば点を奪うことだつて可能だ。

次の先発はエースの中上なので、2点か3点あれば恐らく勝てるだろう。

「明日は投手戦になりそうだな……」

「だね、まあ私に任せといてよ」

「後ろは必ず守ります！」

「おつ、いい返事！ 任せたよ〜！」

彼女はまだ手の内を完全に明かしてはいない。

この大会で投げていない変化球はいくつかある。

それを駆使していけば打たれる確率は下がる、それに託すしかない。

「浜矢も投げてもらおうかもしれないから、心の準備だけはしとけよ」

「はい」

浜矢もなんだかんだ言つて悪くはない成績。

左の変化球投手から右の速球派なのか本格派なのか分からない投手が出てくれば打ちにくいだろう。

(私が試合を壊すわけにはいかない、出番があつたら抑えるだけだ)

「帰ったら明日に向けて練習するぞ！」

「オオツ！」

ここを乗り越えられなければ優勝は無い。

圧倒的な破壊力を誇る至誠打線が打ち勝つか、それとも鉄壁の守備を誇る藤銀が守り抜くか。

運命の試合は明日13時から始まる。

第10球 投手戦

「うわー！ すっげー客の入り！」

「吹部も来てくれてるみたいだね」

「あまり浮かれすぎなよ」

「はーいー！」

準々決勝まで来ると観客席は満員に。

夏休みに突入したこともあり、お互いの学校の吹奏楽部以外の生徒も応援に参加している。

「柳谷、行くぞ」

「はいっ」

柳谷と灰原は先攻後攻決めとスタメン表の交換のために移動する。三塁側からは同じように藤銀の主将と監督が出てくる。

スタメン表を交換し、掛け声と共に先攻後攻を決めるジャンケンが行われた。

柳谷が負けてしまい、後攻を譲ることに。

「良い試合にしましょう」

「ええ、お手柔らかに」

藤蔭の投手育成力は県内でもトップクラス、ここ数年結果が出ていなかったのが不思議なほど。

本当にお手柔らかにしてほしいものだ。

「すみません、後攻取られちゃいました」

「打撃重視のチームではないから気にするな」

蒼海大相模のような打撃に全振りのチーム相手だと、後攻を取られるとサヨナラの確率が高くなる。

しかし藤銀の打力は際めて高い訳では無いので、そこまで恐怖は感じない。

ただ、藤銀の攻め方が分からないのが懸念材料か。

灰原は予選の全試合を観てきたが、藤銀はランナーを溜めて4番に回す王道野球、または粘りに粘ってエースを降ろす野球。

他にも様々な攻め方をしてきたチームだ、一筋縄ではいかない。

(ウチ相手なら恐らく粘って中上を降ろす戦術を取るはず、中上には打たせて取るピッチングをしてもらった方が良いか……?)

エースさえ引き摺り下ろしてしまえば、至誠に怖い投手はもう残っていない。

後ろに控えているのはセンスだけで野球をやっている初心者と、重いストレート以外

は平凡な投手ビギナーだけ。

「ついに準々決勝。今年の藤銀は油断出来ない相手だ、気を引き締めていくぞ！」
「おおっ!!」

試合開始のサイレンが鳴り響く。

今日は糸賀を一番、金堂を二番、そして柳谷を三番に置く速攻型オーダー。
打率の高い二人を上位に置きアウトカウントが少ない状態で柳谷に回す。

藤銀相手ならこれが一番得点の確率が高い。

《一番セクター糸賀さん》

彼女が左打席に入ると野手はシフトを敷く。

外野はレフトに寄り、内野はセーフティを警戒してやや前進している。

糸賀は自分の頭で考えて状況に応じたバッティングを出来る上に、シフトに掛かっていてもそれを破れるパワーも兼ね備えた選手。

一打席目で灰原からサインが出ることはほぼ無い。

サインを出すのは彼女が打ち取られてからだ。

初球、アウトローのカーブを引っ張るが観客席に飛び込むファール。

(初見でのカーブに対応出来ている、これなら心配ないな)

初球からいきなり引つ張ったにもかかわらず、藤銀の外野陣はレフトに寄ったまま動かない。

糸賀は滅多に引つ張ることがないから打てないと思われているのか、もしくはどんなバッティングをしてきても打ち取れる自信があるのか。

藤銀の守備力を考えるに、理由は後者だろう。

二球目はスプリットを見送り、三球目もボール。

四球目は内角のスライダーにタイムニングをズラされファール。

藤銀のエース、藤咲が勝負球として選んだのはカーブだった。

(ここから曲がる……っ!?)

「ストライク！ バッターアウト！」

初球こそ当てられたが、今回は空振り三振。

打ち取られる時もバットには当てられる糸賀が、手も足も出さず三振を喫してしまっ
た。

「いやーすみません、藤咲いい投手ですね」

「予想以上だったな……次は打てるか？」

「当然です！」

糸賀はこういう時に落ち込んだり不貞腐れたりするのではなく、逆に燃えるタイプ。

次の打席には期待してもいいだろう。

しかし、これだけでは終わらなかつた。

金堂も打ち取られ、ベンチの空気が変わった。

この二人が連続で打ち取られる確率はかなり低い。

連勝してきて多少なりとも気が緩んでいた部分があつたので、チームとしてはこちらが正解だろう。

「何落ち込んでるんだ？　次は柳谷の打席だぞ！　ほら声出せ！」

「あつ、はい！　キャプテンー！　打てー！」

「ホームランホームラン！」

ベンチの空気を良くするのは監督の役目。

まだ高校生の選手たちにそこまで任せるのは負担が大きすぎる、それが灰原の持論だ。

三番に据えられた柳谷の打席では、藤銀は長打を警戒したシフトを敷く。

(遠慮はいらぬ、山田が言ってるようにホームラン狙いのスイングで良いぞ)

柳谷は頷いて藤咲と相對する。

初球のカーブは見逃してワンストライクだが、今のはボールの軌道を確認していただ

け。

彼女なら次からは積極的に振っていく。

二球続けてのカーブ、柳谷は簡単にセンター方向へ打ち返す。

(よし、とりあえず一本！)

「セカン！」

「はいっ！」

「……なっ!?!」

完全に抜けたと思われた打球だった。

しかしセカンドの好プレーによってその打球は阻まれてしまう。

センターの前に落ちそうな打球に飛びついてキャッチ、まるで菊池のような軽快な守備だった。

(この三人が全員凡退するのは滅多にない……しかも実力を上回られた感じがある、これは少し厳しいか)

柳谷までもが打ち取られたことに、至誠ベンチは動揺を隠せない模様。

「まだ一回だぞ！ こつちも三人で抑えるぞ！」

「は、はいっ！」

「あと柳谷、この回は打たせて取るリードを頼む」

「了解です」

この作戦が通用するのか確認しておきたいのだ。

おまけに初回はメインの球種——つまりカーブ、ツーシーム、スライダー、スプリットのみを投げるようにと伝えた。

これで通用すれば中上の本当の実力を隠せる。

「千秋、確か一番は3割打ってたか？」

「ギリギリ打ってます」

「一番とクリーンナップ以外は2割台か？」

「そうですね」

今までの試合結果から見て、藤銀は一番から五番までで何とか1点を取ってそれを守り抜く野球をしている事が多い。

逆に言えば、その五人を抑えてしまえば怖くない。

もちろん油断は禁物だが、あの二人なら大丈夫だろうと灰原は信じている。

一番への初球はスプリット。中上のスプリットは、スプリットとは思えない変化量をしている。

彼女は変化球でカウントを整えてからの不意に投げる速球、もしくはその打席で初めて投げる変化球で三振を奪う投球を得意としている。

今日はあえて速球中心で投げるつもりなのだろう。

二球目のツーシームで詰ませワンアウト。

(真ん中付近に甘く入ったと思わせ、そこから変化するツーシーム……良い配球だ)

一番を抑えれば気持ち的に楽になる。

二番、三番と初球を打たせてサクツとこの回を終わらせる。

「ナイピ」

「私の投球、どうでしたか？」

「そうだな……今日はずっと打たせて取るピッチングで」

「分かりました！」

中上は三振にこだわりがあるタイプかと思いきや、意外にもあつさり受け入れた。

余程変な事を言わなければ監督の命令には従う、それが彼女の信念なのだろう。

だが、この答えで灰原は安心出来た。

この投球スタイルは球数を少なくする事により、スタミナの減りも少なくできる。

ここまでフルで出場してきて疲労も少なからずあるので、この試合は早く切り上げた
い。

まあ投手戦になれば精神的な疲労は蓄積されるのだが、肉体的に休んでほしいという
訳だ。

2回表、打席には四番の山田。

山田にはシフトの逆をつくなんて器用なことは出来ない。

何も考えず思い切り振り抜くだけ、しかし全国でもトップクラスの打球速度を誇る山田ならそれが一番良いだろう。

バキヤ、という金属とは思えないような音が響く。

プロレベルの鋭い打球がサードに飛んだが、それも巧く捕られてしまう。

(守備も上手いな……流石藤銀ってところか)

青羽、鈴井も凡退してこの回も三者凡退で終わる。

しかし中上も全国クラスの好投手だ、ツーシームを中心に組み立てた投球でこちらも三人で抑える。

そんな調子で4回までお互い1安打で終わる。

誰もが試合が膠着するとは思っていたが、まさかここまでだとは誰も思いもしなかった。

《只今よりグラウンド整備を始めます》

「まさかここまで打てないとはな」

「すみません……」

「当たってはいるし、何かきつかけがあれば打てそうなんだけどな……」

四球も選べているので、連打さえ出ればその勢いで複数点を奪うことだって出来るはず。

その連打のきつかけが欲しい訳だが。

「というか、あのスライダーのどこを見て打てるって判断したんですか？」

「え？ いや、打てるだろ？」

「まさか、監督基準の打てるですか？」

「……………あつ」

そう、灰原は規定こそ到達していないが高卒ルーキーの捕手で3割打った化け物だ。自分基準で打てると思った球でも、高校生の彼女たちからすれば打てそうにない球なのだ。

「本当に悪かった……」

「あつ、いや、謝らないでください！」

「浜矢は優しいな……」

しかしこうなると打てる球が見当たらない。

カーブには誰もタイミングが合っていないし、スライダーも今日は調子が良さそう

だ。

「あー……代打で出たい……」

「金属はダメですよ？ 死人が出そうなんで」

「バックスクリーンにしか打たないから安心しろ」

「バックスクリーン壊れそうっすね」

「弁償はできるから平気だ」

元プロ野球選手、しかも現役を退いてからまだ2年しか経っていない彼女が金属バットで打とうものなら殺人的な打球が客席を襲うことになるだろう。

「監督ってそんなお金あるんですか？」

「おう浜矢、失礼だぞ……これでも5年はプロでやってたんだぞ。しかも新人賞取ったし」

「そこなんですけど、それだけの選手がなんで5年でクビになったんですか？ しかも捕手なのに」

「そーいや素行不良って報道もされてたみたいですけど……」

（なんで山田がそんなこと知ってるんだよ。あの報道はかなりムカついた、けど……）

「まあ、事実だよ。誰彼構わず噛み付いてたし、監督やコーチに反発しまくってたからなあ」

「でもどこか獲るとこなかったんですか？」

「そもそもトライアウト受けてないからな」

灰原は戦力外になってからすぐ至誠の監督の誘いを頂いたので、トライアウトを受験しなかった。

怪我で肩が弱くなっていたとはいえ、若くて打てて守れる三塁手兼捕手。

仮にトライアウトを受けていても、どこか拾ってくれる球団はあつたはずだ。

「ブルペン捕手の話とかは？」

「トライアウト受けて、それから連絡くるだろうし。そもそも受けてない私には来ないってわけよ」

そこでも性格の悪さが災いして獲ってもらえなかったかもしれない。

ブルペン捕手は文句を言わず壁になるポジション、当時の灰原には全く向いていなかった。

「それより、こんな話してないで作戦会議するぞ！」

「とは言っても、打てそうな球が無いんですよね……私も打たれるつもりはないですけど」

「ストレート狙いにしても、アイツ全然ストレート投げないんだよね……」

「粘って球数稼いで降ろしますか？」

「うちにアイツの球を粘れる奴はそんないないぞ」

それこそ今日の一番から三番までの三人くらい。

あとは鈴木も意外と粘れる。

「なんらかのきつかけで向こうが勝手に崩れるのを待つとか？」

「流石にそれは運要素が強すぎるだろ……」

（何か考えなくちゃ、私が監督なんだ。コイツらを全国に導くのは私の役目なんだ。全員が実行出来て、そして効果が絶大な戦術を……）

選手たちの意見を次から次へと却下していたが、灰原の頭にも策は浮かんでいなかった。

正確には浮かんではいるが、絶対に通用しなさそうな手しか浮かんでこないのだ。

「……千秋？」

「……え!? はいっ?」

「大丈夫か? ぼーっとしてたけど」

「えと、大丈夫です。ちよつと気になることがあつて……」

まだ確証を持っていないのもう少し待って下さい、千秋はそう付け加えた。

もしかすると、この試合の鍵を握っているのは彼女なのかもしれない。

第11球 突破口

5回表の攻撃が始まる。

ここまでお互にたつたの1安打ずつ、四死球は至誠が1つ、藤銀側は0。

至誠の打線がここまで抑え込まれるのは初めてだ。

藤銀の好守備に阻まれている部分も多々あるので、そろそろツキが回ってくるのではないかと灰原は思っているが。

「美希ちゃん、できる範囲でいいから粘ってきてくれる？」

「うん、やってみる」

そう言つて鈴井の打席を見る千秋は、普段の温厚さからは想像出来ない程の鋭い目をしていて。

一秒でも速く突破口を見つけ出す、そんな顔。

不利な状況でこんな顔が出来る辺り、彼女は根っからの指揮官タイプなのだろう。

鈴井は六球粘つた末のセカンドフライに終わったが、千秋の顔は変わらない。

まだ突破口を見出せていないという事だ。

「美月、私たちは何したらいい？」

「藤咲さんにカーブを投げさせて欲しいです」

「了解」

粘れというのは、藤咲にカーブを投げさせるために粘れという意味だった。

彼女の投げるカーブはそう簡単に打てるようなボールではないが、千秋はそれを覆せそうな何かが見えたのだろう。

中上は七球粘ってファーストゴロ、菊池も四球目まで粘っているがカーブは無し。

「カーブ投げないな」

「多分次あたりに投げてくると思ってますけど……」

千秋の予想通り、五球目はカーブを投げてきた。

「あつ……！……！」

小さく漏れた声を聞き、灰原は千秋の横顔を見る。

灰原の瞳には、不敵な笑みを浮かべる指揮官の姿が映っていた。

突破口を見つけ出した、いい作戦を思いついたと言わんばかりの表情。

「千秋、見つけたか？」

「はい！……これなら、きつと打てます！」

「よくやった！」

希望を見つけ出してくれた小さな指揮官の頭をワシワシと撫で終わると、灰原は早速

菊池と浜矢以外の全員を呼んだ。

千秋が全員の前に立ち、作戦を話し始める。

「藤咲選手のカーブはかなり手強いです、ただ一つ欠点を見つけました」

「欠点……？」

「投げる際、腕の角度が微妙に違います」

「癖ってこと？」

「そうだね、カーブを投げる時だけ少しオーバースロー気味になってるみたい」

そう言われて全員で藤咲に注目する。

菊池はベンチの様子に気付いていたようで、一度打席を外していた。

その彼女にもう少し粘ってくれとサインが出る。

続いて投げられたストレートとカーブ、言われなければ分からないが、僅かに腕の角

度に違いがある。

「……全然分かんね」

「それくらい小さな違いだからね、気にしないで？ 分かる人はカーブ狙いで打ってく

ださい」

「よし、任せろ」

「私も分かったよ」

「さすがキャプテンと美希ちゃん！
相変わらず頼りになるコンビだ。」

特に鈴木はまだ一年生なので、これから身体が出来上がってくれば金堂並みのバット
コントロールも手に入れられるだろう。

ずっと粘つてくれた菊池も打ち取られて攻守交代。

さっきの作戦を菊池と浜矢にも伝え、守備についてもろう。

(攻撃はあと二回しか残されていない、1点でいいから欲しい)

ここからは作戦を厳選しなくてはならない、選手を導く監督として絶対にミスは許さ
れない。

(どうすれば完璧な指示が出せるんだ……)

「監督」

「小林先生……」

「あまり思い詰めない方がいいと思いますよ、生徒にも伝わっちゃうと思いますし」
「……………ありがとうございます」

指揮官が揺らげば皆が迷う、監督たるもの常に堂々としてなければ。

高校生の千秋は前を向き続けている、大人の灰原がいつまでも俯いてる訳にはいかな
い。

「この回も点をやるなよ！ いい流れで攻撃に繋げるんだ！」
「ハイッ！」

この回から中上はナックルカーブを解禁した。

藤咲の決め球と似た軌道の球、一種の挑発と取られても仕方ない。

だが、そうすれば対抗してカーブを投げてくれる確率が上がるかもしれない。

灰原によつて育てられた柳谷の考えそうなりード、そういうのは灰原の大好物だ。

藤咲にも負けず劣らずのカーブで三人を切つて取り、6回表の攻撃を迎える。

「この回が最初で最後のチャンスだと思え！ 必ず点を取るぞ！」

「オオー!!」

この挑発が効くのはおそらくこの回まで、この回で試合を決めなければならない。

「中上先輩の為に3点はもぎ取つてきますよ！」

「いや、1点で十分だよ」

そう言つてニヤリと笑う中上。

彼女にもエースの風格というものが出てきた。

その姿を見て、灰原は昔バッテリーを組んでいた旧友を思い出した。

「その通りだ、中上はもう点は取られない。死に物狂いで1点取つてこい！」

灰原は浜矢と糸賀の背中を叩いて送り出す。

ベンチからは過去最高の声援が飛び交っており、観客席からも吹奏楽部による応援歌が響き渡る。

これこそが高校野球の醍醐味だ。

「伊吹——！ 落ち着いて打て——！」

「四球でもいいよ——！」

浜矢は追い込まれてからも必死に喰らいつく。

変化球を見極められるだけの経験も目もないのにあそこまで出来るのは、意地かもしれないが、センスカ。

恐らく両方だろう。彼女は三年になる頃には全国を代表するクラスの選手になっていそうだ。

（くそつ、ネチネチと粘ってきて……さっきのカーブもそうだし、苛つかせるのが上手いチームだ。とつとと……三振しろ！）

藤咲は今日一番の力を込めてカーブを投じた。

その変化はこの試合最高の変化量を見せ浜矢を驚かせたが、同時に味方さえも驚かせてしまった。

「逸らした！ 伊吹走れ！」

「よっしー！ ナイラーンー！」

キヤッチャーの後逸により振り逃げが成功。

中上への対抗意識や急に粘り始めてきた打線への苛つき、それが捕手の許容範囲を超えた変化球を生んでしまったのだ。

相手のミスではあったが、これで上位にランナーがいる状態で回った。

（追い込まれるまではカーブ以外は捨てていけよ……）

サインを出したら監督は祈ることしか出来ない。

選手は灰原の出したサインなら大丈夫だと信じてくれている、なら灰原も選手たちなら大丈夫だと信じてあげる。

「しゃー!!」

「ナイバッチー!!」

「金堂先輩！ 決めてくださいい！」

糸賀のライト前ヒットで金堂に繋いだ。

ライトの強肩によりホームは阻止されたが、その間に糸賀は二塁へ進みノーアウト

二・三塁。

打席に入るのはここまで一度も打率が5割を切つてない金堂。

長打力こそないが、あのバットコントロールはプロのスカウトも目を見張るものがある。

そんな選手がここまで全打席抑えられていて、悔しくないはずがない。

藤咲がスペックの割に打たれない理由、それはカーブの存在とコントロールの良さ。

アウトローいっぱいに変化球を決められてしまえば、それをヒットにするのは至難の業だ。

特に高校野球ではコントロールが広く、バットが届かない事も多々ある。

——だが、それは金属バットの話だ。

金堂神奈は部内唯一の木製バット使い。

一般的に高校野球で使われる金属バットは長くても85cmより短い物が主流、しかし金堂の使用している木製バットは——87cm。

そして重さにも大きな差がある。

金属バットは900g以上と規定が決まっているが、木製バットにはその規定は適用されない。

そんな金堂のバットの重さは——840g。

金属バットと比べてかなり軽い。

バットが軽いと操作性が上がる、だから金堂はあんなに易々とボール球を打てる。

初球はアウトロー、僅かに外れるカーブ。

普通の打者ならばバットが届かないで三振するような球だろう、普通の打者ならば。

「打て！ 金堂！」

次の瞬間、金属の甲高い音とは違う木製の乾いた音が響いた。

地面に片膝をつきながら左手一本で振り抜いたバットの真芯に当たった白球は、大きく伸びていきセンターとライトの間に。

藤銀の守備を考えると捕られるかどうかギリギリの打球だ。

「落ちた!! 回れ回れ！」

「二人還れるぞ！ 速くー！」

「よっしゃー！ 先制！ 神奈ナイスー！」

打球は野手の手前にポトリと落ちた。

バウンドが高く処理に手間取った隙を見逃さず、糸賀もホームイン。

お互いチャンスすらまともに作れていなかったこの試合、遂に均衡が破られた。

「はあ〜、やつつと点入った……」

「お疲れ様です、監督」

「いやいや、千秋の方が疲れてるだろ」

「私は作戦とか考えるの大好きですから」

「けど実行するのは選手だぞ？ 信じて待つのはだいぶ息苦しくないか？」

灰原は苦しい。選手を信じてないわけではないが、本当にこの作戦で良かったのか、成功するののかという考えばかり頭によぎって気が気じゃない。

「監督は全部の責任を負わされますもんね……大変な立場ですよ」

「自分で話を受けたからには、それくらい受け止める覚悟はあるよ」

「私はたまにしかサインを出さないから、あまり責任っていうのを感じられてないのかもしれない」

そう言っただけで悲しそうな表情を浮かべる千秋。

選手が頑張ってる、監督が気負ってるのに自分だけ楽しい思いをしているのも思っているのか。

「マネージャーなんてそれくらいで良いんだよ、皆の支えになってほしいんだから。むしろサイン出してるマネージャーなんてそういないぞ？」

「監督……」

「千秋はそんなの気にせず、やりたい戦術があつたらどんどん言ってくれ。責任は私が取る」

「……ありがとうございます」

生徒に気を遣わせる事はしたくないし、苦しい思いもしてほしくない。

そう思っている灰原が出来るのは責任を負うだけ。

(歳を取ると挑戦する勇気が出なくて嫌になるな)

千秋や野球を楽しんでいる部員が眩しく見えて、羨ましくて仕方がない。

「監督、美月！ 私も打つたんですけど！」

「柳谷!!? いつの間に戻ってきてたんだ……」

「今ですよ……もう交代ですよ？」

「す、すみません……! 話に夢中になって……」

そんな楽しんでたのかと笑って聞く柳谷。

二人がスコアボードに目をやると、6回の所に3と書かれていた。

あの後柳谷がタイムリーで金堂をホームに還した。

「柳谷悪かった、守備はちゃんと見ておくから」

「おっ、言いましたね？ 全部見てくださいよ！」

(……大人になったと思っただが、笑うとまだまだ子供だな)

久しぶりに見た、いたずらっ子のような笑顔。

一年生の頃は表情がコロコロ変わっていたが、今は先輩となりどこかクールな印象を

持っている。

あいつをキャプテンに指名したのは間違いないじゃなかった、灰原はそう確信した。

「柳谷は成長したなあ……」

「三年間見てきたんですもんね」

「ああ、一年の頃はかなりやんちゃだったんだぜ？ 反発してくるしさ」

「今では考えられませんね……どうやって指導したんですか？」

「目の前でバッティングして私の力を見せつけた」

千秋は少し引いているが、当時の柳谷にはこれはかなり効いた。

神奈川では知らない者はいないと言われる程に実力の高かった彼女の周囲には、自分

より凄い選手などいなかった。

指示を聞いてもらうには灰原の方が良い打者だった教える必要があった。

結果、あれ以来自分から指導を仰ぐようになったらしい。

やると決めた時の集中力、積極性。

そして野球に対する愛情や向き合い方。

それが柳谷をここまでの選手に育てた。

「千秋、少しでいいんだ。気付いたことがあつたら鈴井や浜矢に言ってみたらどうだ？」

「へ？」

「自分が育てた選手が活躍する姿を見るのって、すごく楽しいぞ」

「い、いいんですか!？」

「千秋なら酷い指導はしないだろうし、それに私も手伝うから」

一緒にあの二人を最強のバッテリーに育てていこう、灰原はそう伝えた。すると千秋は目を見開いたのち、強い意志を持った目で頷いた。

「……監督はご存じだったんですね」

「そりゃあな」

「私も知ってはいたんですけど、美希ちゃんその話しないし嫌なのかなって」

「まあこの話を持ち出した時、あまりいい顔はされなかったよ」

「でもチーム事情的には……」

「やってももう必要がある」

今はまだこの話を詳しくする段階ではない。

いずれその時が来るまでこの話はお預けだ。

「よし！ 抑えられたー！」

「連続で四球出した時はヒヤヒヤしたよ」

「ごめんごめん」

ツアアウトからランナー・二塁のピンチを作った中上だったが、なんとか点を取られることなくこの回を終えた。

「珍しいな、中上が四球連発するなんて」

「その……ナツクルカーブのコントロールが効かなくてですね」

「なんで佳奈恵が向こうに対抗してんのさ……」

「だってカーブ対決したかったんだもん」

挑発目的でやってたのに、何故かこっちまで焚き付けられていた。

至誠ファン的には、中上がこのような投球をするのだけは勘弁してほしいだろう。

何故なら至誠の投手陣で安心して見ていられるのは彼女だけなのだから。

灰原が言った最初で最後のチャンスという言葉は当たっていたらしく、この回は簡単に打ち取られた。

だが、これで最終回を迎えた。

プロと違って7回制なので、終盤でリードしてる側は助かるだろう。

逆の立場になったら文句を言いそうだが。

「この回キツチリ三人で抑えて気持ち良く勝つぞ!!」

「オー!!」

「怪我には気をつけて！ 風向き確認しろよー！」

最後の守備に散っていく九人を見送り、灰原はベンチに腰掛ける。

準々決勝まで勝ち上がってきたからか、選手たちの顔つきが良くなってる。

一年生の二人は言わずもがな、二年生も勝負師といった表情だ。

三年は最後の夏という背景もあるので気合は十分。

対して藤蔭ベンチは緊張して張り詰めた空気。

諦めているような顔をしている選手も存在しており、至誠とは正反対だ。

「……勝ったな」

「はい」

諦めムードが漂っている相手に至誠は負けない。

要求通り中上が三人でピシヤリと抑え準決勝進出を決めた。

「中上ー！ ナイピ」

「球数も少なくできて良かったです」

「7回で68球、上々じゃないか？」

「あれ、そんな少なかったんだ」

1イニング10球も投げていない省エネピッチ。

これなら決勝は問題無く投げてもらえるが、全員が心配しているのは準決勝だ。

対戦相手はまだ分からないが、どこが勝ち上がったっても苦戦するのは目に見えている。

そんな大事な試合で登板させられるのが浜矢と青羽だけというのは色々とマズい。

「監督、これなら次も投げられますよ」

「駄目だ！ プロ行くんだろ？ だったら怪我のリスクが高い事はさせない」

「えー！」

「浜矢と青羽で何とか抑えられるようなリード頼むぞ、柳谷」

「言われなくても！」

（私は映像でも見て相手の弱点を見つけよう。あとは打者の苦手コースと得意コースをまとめ、球種別の打率もまとめておこう。カウント別の打率もあつた方がいいかな……）

灰原は既に次戦の準備を始めていた。

幸いにも彼女は教員ではないので時間はある、その立場をフルに活用して次の試合に臨む。

第12球 休息を取ろう

準決勝を翌日に控えたこの日、浜矢と鈴井は千秋の家に集まっていた。

横浜市内にある庭付きの一軒家と言えば、誰もがそこに住んでいる者の裕福さが分かるだろう。

「ひつろ……」

「伊吹ちゃん！ はやくはやく！」

「うわっ！ なっ、なに？」

「今日はゆつくり休む日だよー！」

言っていることと行動が一致していない。

千秋は浜矢の手を引いて二階にある自室へと駆け上がったいく。

「荷物置いてお風呂入ろっか！」

「んん？ 言ってる意味がよく……」

「一緒に！」

「はあ!？」

この二人は同じ部活動の選手とマネージャー、そして同い年と仲が良くなる要素はあ

る。

事実、仲はかなり良い。とはいえ知り合って数ヶ月の人間と一緒に風呂に入るのは、浜矢的には予想だにしていなかったこと。

「いいからいいから！」

「ええー……」

こうなった千秋は誰にも止められない。

今までの付き合いでそれが分かっている浜矢は、抵抗を止めて大人しく浴室に連行される。

「せ、せんしゅー……そんな見ないで」

「腕まわりの筋肉が付いてきたね、けど下半身はまだ細かいかな……」

「まさかそれ見るために呼んだ？」

「もちろん！ あとはマツサージかな」

千秋は浜矢の筋肉の付き具合を見たかっただけ。

それなら半袖短パンの服でも着てもらって見ればいいじゃないかと言われそうだが、彼女の場合は肩甲骨周りの発達具合も見ておきたいというのもある。

それに全身の筋肉のバランスを知りたいとなれば、極論だが全裸が一番分かりやすい。

かなりの極論だし、やり方も結構強引なのだが。

二人きりの状態で全身をくまなくガン見されるといいう一種の羞恥プレイのようなものを終え、二人は再び部屋に戻る。

羞恥心から、浜矢に浴室での記憶は無い。

「横になって！ マッサージするから！」

「てか鈴井は入れなくていいんですかー？」

「もう入ったよ」

「あ、もう被害者だったのね……」

遠い目をしている鈴井を見て、彼女も同じような思いをしたのか……と心の中で同情をする浜矢。

「痛かったら言ってね？」

「はーい……いいで」

「もうちよつと耐えなよ」

「無茶言うな……あー気持ちいい、いでっ！」

彼女のマッサージは絶妙な力加減で、痛い気持ちいいが交互にやってくる。

マッサージの技術まで完璧に心得ているあたり、根っからのサポート体質なのかもし

れない。

「痛いのか気持ちいいのかハッキリしなよ」

「痛気持ちい！」

「伊吹ちゃん肩周り柔らかいね〜！」

「なんかメリットあんの？」

「速い球が投げられるっていうのと、やっぱり一番は怪我をしにくくなるってところかな。ピッチャーはどこか怪我したらバランスが崩れる繊細なポジションだからね」

浜矢は肩甲骨周りの可動域が極めて広い。

だから野球を始めて数ヶ月だというのに130kmの速球を投げられる。

「前から柔軟とかやってたの？」

「ぼちぼち、時間がある時は」

「そっか、続けてたら本当に怪我しにくくなるから頑張つてね」

「りよーかい」

ずっと柔軟を続けて可動域の広さをキープし続ければ、いずれは佐久間のような速球を投げられる日が来るかもしれない。

そうすれば京王義塾や蒼海大相模を抑えることだって出来る。

「てか鈴井はなに見てんの？」

「京王の個人成績」

「まさか京王になっちゃうとはね」

「予想通りだったけどね」

準決勝の相手は京王義塾。

決勝はまだ分からないが、今年も恐らく蒼海大が勝ち上がってくるだろう。

強力打線と二連戦は部員の少ない至誠にはキツイ。

「やっぱり結城さんと水瀬さんが要注意かな」

「通算40本と6割打者か……けど6割打者ならうちにも金堂先輩がいる！」

「昨日の試合で6割切ってたよ」

「嘘っ!？」

鈴井の手から奪ったタブレットで確認すると、確かに打率は6割を切っていた。

だとしても5試合ずつと6割以上をキープしていたのは素晴らしい事だ。

「他の部員はあの二人に回すのがメインだから、あんまり長打警戒しなくていいかも」

「実際ホームラン打ってるのは殆ど結城さんだけだからね」

「水瀬さんが出て二番バント、三番が繋いで結城さんが還すっていうのが得点パターンだね」

まるで何処か聞いたような得点パターン。

そう、至誠の攻め方と全く同じだ。

糸賀が出て菊池が送り、三番に入った選手が繋いで柳谷が一掃する。

絶対的な四番がいるチームにはこれが一番効率の良い攻め方だろう。

「敬遠は？」

「してもいいけどヤジ耐えられる？」

「……無理」

「それにそんな事したら五番以降が奮起しちゃう。せつかく下位打線が怖くないっていうのに」

千秋曰く、京王義塾の下位打線はそこまで警戒しなくてもいいとのこと。

下位打線は毎年守備重視のメンバーを採用しており、そのせいで下位のみでの得点は見込めない。

「それで、京王戦は伊吹ちゃんに抑えてもらうしかないんだけど……」

「私がああの化け物二人を抑えられるイメージが浮かばないんですけど……」

「一応監督がデータ集めてるらしいけど……それでも抑えられるかは分からないし」

いくらデータ通り投げたとしても、浜矢の実力は結城や水瀬を大きく下回っている。

それに苦手コースなどのデータがあるとはいえ、全てデータ通りの結果になるとは限

らない。

「ツーシームとスライダー、あとはストレートで何とかするしかないね」

「無茶言うなあ……」

「というより取られた分取り返せばいいんじゃない」

「向こうの投手って誰？」

「多分二番手の二年生かな？ 結構良い投手だよ」

エース温存とは舐められたものだ、と浜矢は咄嗟に思ってしまったが仕方のない事だろ。

ここを勝ったら次は恐らく蒼海大相模と当たる。

県内最高と呼ばれる打線を持つ蒼海大相模にエースをぶつきたいのだ。

「けどあまりにも失点が多いと流石にダメだし……5点かな」

「へ？」

「5回を5失点以内に抑えてくれたら勝てるかも」

「……が、頑張るわ」

打者の目が慣れていない一巡目はまだ抑えられるかもしれないが、二巡目以降は滅多打ちにされることを考えれば3回まで1失点が許容範囲。

そうなる残り2イニングで4失点となるのだが、京王打線を相手にそれは難しいだ

ろう。

「シヨートに打たせてくれれば全部捕るけど」

「うちの二遊間は鉄壁だからね！　そこに飛ばせば抜かれないよね」

菊池と鈴井の二遊間コンビは鉄壁だ。

二人揃って強肩というわけではないが、捕ってからの速さと送球の精度が際立っている。

「なら任せるわ！　てか最初から三振取れるとは思ってないし」

「出来る限り球数も少なくしたいし、打たせて取る方がいいよね」

「打たれて取るって感じになりそうだけとな……」

基本は打たれて取って時々被弾して。そうなる未来しか見えない。

鈴井が持つてきた京王の試合映像を見て今日は解散しようと思ったので、三人は今年の子選の映像を見る。

「まって、水瀬脚速くね？」

「全安打の3割くらいが内野安打だよ」

「長打力は無いから、うちの守備なら前進してもいいかも……？」

「塁に出たら絶対走ってくるから、なるべく敬遠もしたくないしね」

投手からしたらとてつもなく嫌な一番打者だろう。

映像を見れば分かるが、選球眼も良くてカット技術も並み以上にはある。

センターを守っているあたり守備力も高く、長打力以外は隙無しという選手だ。

「こんなん抑えられる気しねーよ……」

「二番はほぼ確実にバントだし、三番は繋ぐ事意識で長打は狙ってこないから、なんとかそこでアウトカウント増やしたいね」

「ツーアウトの結城さんならまだなんとかなるかも」

千秋曰くツーアウト時の結城は得点圏、非得点圏に構わず打率が下がる傾向にあるとのこと。

なので二番と三番を抑えればその流れで結城も抑えられる確率が上がる。

「てかさんなことまで知ってるんだな……」

「今監督からデータ送られてきたんだ」

「あつ、リアルタイムで」

「凄いよこれ、カウント別の打率まで載ってる」

結城はツーストライクでは打率は3割くらいだが、フルカウント時の打率は6割。

これを見るとボール先行は駄目だが、あの打力を知っているとボール先行で攻めたくなる。

怖さを耐えて初球からゾーンに入れていく、それが出来ない投手が打たれる。

「水瀬は？」

「えつと……ノーアウト時の打率は7割だね。カウント別は……初球が5割以上」

「初球打ちが多いってこと？」

「うん、水瀬さんは積極性のある打撃が売りだからね。けど初見の相手にもガンガン振っていくから、一打席目はなんとかなるかも」

「この言葉に少し希望が見えてきたのか、浜矢の表情がパツと明るくなる。

「……今のは一打席目は必ず抑えろってことだよ」

「はい……」

楽観視してたらずかさず鈴井に釘を刺される。

一打席目は気楽に投げてもいいよ、ではなく一打席目の水瀬からは死ぬ気でアウトをもぎ取れという指示だ。

「つまり、一打席目の水瀬と二番三番、それとツーアウトの時の結城は絶対に抑えろと」

「そうだね、そうすれば失点の確率は下がるよ」

「よしつ、そうと決まれば練習だ！二人とも付き合ってくれる？」

「もちろん！」

「言われなくてもそのつもりだったよ」

動きやすいTシャツに着替えて外に出る。

千秋家の庭はあるが、住宅街でキャッチボールをするのは危ないということで、近くのグラウンドに移動する。

浜矢が投げ込むのだが、それを受けるのは鈴井。

最初の方は浜矢も気を遣って力を抜いて投げていたのだが、途中から鈴井が全力で投げたので、要求通り全力で投げ込む。

しかし彼女はそれも完璧に捕球してみせた。

「鈴井捕るの上手くね？ もしかしてキャッチャーやってた？」

「……………別に、やってなかったよ」

「そっかー。やっぱ守備上手い奴ってこういうのも上手いな」

一瞬変な間が空いていたことに浜矢は気が付いていたが、それはつまり触れられたくない話題だということ。

（今度からキャッチャーの話題を振るのはやめるか）

普段の浜矢はハイテンションで変な事を言うから鈴井によく呆れ顔をされているが、別に何も考えていない訳じゃない。

寧ろ彼女は周りをよく見ているし、気も遣える。

だから鈴井の地雷であろう話題に気が付けた。

40球、全球種を全力で投げ込んだ。

これで本当に解散、鈴井を見送って浜矢も自宅に帰ろうとした。

「伊吹ちゃん、ちよつといい？」

「ん？ なに？」

「さっきの美希ちゃんの事なんだけどね……」

荷物を背負おうとした時、千秋が呼び止める。

さっきの鈴井というのはもちろん、捕手の話題を出した時のことだ。

「美希ちゃんはね、元々捕手だったんだよ」

「えっ!? でもアイツ、やってないって……!」

「うん……ああ言った理由は私にも分からないんだよね」

「なんかトラウマでもあるのかな？」

「どうだろう……けど一つだけ分かっているのは、美希ちゃんは正捕手の座を奪われてショートに回ったってこと」

もしかしたらそれが原因で捕手の話をしたくないのかも、と千秋は自身の推察を口にした。

あの鈴井がレギュラー奪われたなんて信じられない。守備が上手くて打撃も凄くて、なんだったら脚だつてある。それなのに何故。

浜矢は理解が出来ないといった様子で矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。

「伊吹ちゃんの言いたい事は分かるよ、けど中学時代の美希ちゃんは打撃は良くなかったんだ」

「あの鈴井が……?」

「うん、あとは肩も全然強くなかった。それ以外は今と同じなんだけど、その欠点二つが響いたんだろうね」

「じゃあなんでシヨートに?」

肩の弱いシヨートなんて何処も要らないだろう。

それに、そんな選手をシヨートで起用するなら捕手で起用したって良いはず。

「あれ以降、美希ちゃんの力が目覚めたんだと思う。目覚めたって言うよりは努力の末開花したって言う方が正しいのかな」

「開花……」

「2割前後だった打率が一気に4割超え、肩も強くなつてシヨートとして最低限のレベルにまでなった」

「正捕手を奪われた事で奮起したってことか……」

だが、浜矢的には打撃型の捕手よりも鈴井の方が良いと思えた。

あそこまでミットのブレが無く捕球できるアマチュアの捕手など、彼女は知らなかったから。

柳谷よりも上手い、浜矢はそう感じた。

「言い方は悪いかも知れど、美希ちゃんって少しプライド高いところあるじゃない？ だから嫌だったのかなって」

「あー確かに、アイツそういうの言及されるの嫌いそう」

「だからこの話は美希ちゃんの前ではしないようにしようにしようか。いつか本人が話してくれるまで待とう」

「うん、私も鈴井に嫌われたくないしね」

（しかし鈴井が捕手だったとはな……）

もし彼女が過去を乗り越えてまた捕手をやりたいと言う日が来たら、最初に組むのは自分がいい。

自分であってほしい。浜矢はそう願った。

第13球 抑えてみせる

京王義塾と至誠の準決勝当日。

「ここまで来るとスタンドは満員で応援の熱も凄い。

「さて、浜矢！ 青羽！ この試合は二人にかかっているぞ、気を引き締めていけ！」

「ハイッ！」

「はい」

こんな大舞台だというのに緊張していないのかな、と思い浜矢が横目で青羽の様子を見ると、表情は普段と変わらぬポーカーフェイスだが手が震えていた。それはもう物凄く震えている。

「まつ、打たれた分打ち返してやるから！ 安心して投げてこいよ」

「……分かりました」

仮に打たれても柳谷を始めとした仲間達がいる。

けど少しでも野手の負担を減らしたい、何よりこの試合で成長したいと思うのは浜矢。

京王義塾という神奈川の強敵と戦えるチャンスは二度と無いかもしれない、ここを乗

り越えれば更なる成長を遂げられると信じている。

「せんしゅー、5点まではよかつたんだよな」

「そ、そうだけど……」

「悪いけど、そんなに取られないぜ！」

「伊吹ちゃん……うん！ 任せたよ！」

こんな所で負けられない、負けるとしてもせめて決勝まで行きたい。

40本だか6割だか知らないが、打てるものなら打ってみろ。それが浜矢の心情だ。

《一番ショート水瀬さん》

とは言ったものの、やはり強打者はオーラが凄い。

(水瀬って確か長打力は無いんだよな、そうとは思えない威圧感があるんだけど)

長打力が無いだけでそれ以外は一流のプレイヤーなのだから当然である。

しかし、ここを抑えれば最高のスタートが切れる。

(初球打ちが多いって言ってたから……ですよね！)

柳谷の出したサインは内角のツーシーム。

ストリートと惑わせて詰まらせる配球だ。

左脚を後ろに引き、細い腕を思い切り振り下ろす。

水瀬はデータ通り初球から振ってきた。

「つ、シヨート!」

「オツケー!」

ピッチャー返しを打たれ、捕球することが叶わなかった浜矢は自身の後ろを守る鈴井に託す。

内野安打を警戒して前進していたにもかかわらず、二遊間を真つ二つに割りそうな打球を難なく捕球してみた。

一回転して一塁に転送し、一つ目のアウトを取る。

「サンキュー 鈴井!」

「ん。ワンナウト!」

予定通り水瀬を打ち取れた事で安堵する。

二番は基本的にバントをすることが多いので打力はそこそこ、冷静さを欠かさなければ浜矢でも抑えられる相手だ。

(初球は内角のスライダーか、了解。しつかり投げますよ)

間違つても相手にぶつけないように、指先の感覚に全神経を集中させる。

着るようにしてリリースしたその球は鎌のような軌道を描き、これにはバットに当てるだけで精一杯。

しかも当てると言っても芯ではない、根元だ。

「おっけー！ 自分で！」

「任せた！」

ボテボテのピッチャーゴロとなりツーアウト。

次の打者は3割弱、警戒すべき相手だ。

アウトローの直球はファールでワンストライク。

二球目はカーブを見せ球として使い1ー1。

三球目のスライダーは外れてしまい、バッティングカウントにしてしまう。

（カーブか……いや、ここは強気に攻めましょう）

浜矢は初めてサインに首を振った。

ここはカーブで逃げる場面ではない、強気に攻めなければいけない場面だと感じ取ったから。

悩んだ末に柳谷が出したのは、初球と同じサイン。

アウトローのストリート、初球よりも隅を狙って。

（これは入ってる、頼むから振ってくれ！）

「っ、キャッチャー！ 後ろ！」

「オーライ！」

ホームランにしてやると言わんばかりに強く振り抜かれたが、タイミングを外したおかげでキャッチャー後方へのフライとなる。

作戦通り、初回はヒットを許すことはなかった。

「ナイピー！」

「あざっす！」

難しいフライを捕ってくれた柳谷とグラブタッチ。

ベンチに戻ってから千秋ともハイタッチをし、ついでに一番初めに助けてくれた鈴木とも。

だいぶ守備に助けられていた感じはあるが、抑えればそれで良いのだ。

至誠ベンチは京王の先発・古城の投球練習を眺める。

「……速いな」

「あれで二番手かく、さっすが京王」

「けど、うちの打線なら打てると思うよ」

「だね！ 前の試合打てなかったし今日は打つよ！」

二年生は準々決勝で金堂以外があまり打てていなかったせいか、気合十分といった具

合だ。

三年生は集中してて周囲の声など聞こえていない。

そう思ってしまうほどの鋭い眼光で向こうの先発を見てる。

「鈴井はどう？ 打てそう？」

「どうかな……当てられるけど内野を越せるかな」

「弱音吐くなんて珍しいじゃん」

「互いの実力を考えた上での発言をしてるんだよ」

金堂と同じく、鈴井も長打力には自信が無い。

だが走塁の上手さで短打を二塁打にしてしまう。

パワーの無さを走塁技術で補っている形だ。

「向こうは初めてベンチ入りした二年生だ。大会の雰囲気慣れていない、不安定なと

ころを叩くぞ」

「ハイッ！」

まるで悪役のような笑みを浮かべながら、外道じみた発言をするのは灰原だ。

しかし実際に不安定な立ち上がり叩くのは効果的だし、そもそも彼女の担当していた捕手というポジションは相手の嫌がる事を積極的にやる。

どんなに性格が悪いと言われてようとも、彼女にとってそれは褒め言葉なのだ。

《一番センター糸賀さん》

「やっぱこの打順が落ち着くよね〜」

「いつもの打順ですね」

「藤銀戦のめかなり攻撃的で好きだけど、やっぱりこっちだよな」

今日は糸賀が出塁して菊池が犠打、そしてクリーンナップで大量得点を狙う見慣れた打順。

山田の言う通り、これが一番至誠らしい打順だ。

「糸賀が打てるかどうかで、チーム全体がどれだけ打てるか決まる所あるからなあ」

「それってなんでですか？」

「糸賀は対応力が高いんだよ。その糸賀が打てなきや他も打てないことが多い」

「伊吹もさ、由美香先輩が打てなかったら無理だっと思うことあるっしょ？」

「それは……ありますね」

あの糸賀が打てないのに自分が打てるはずない、浜矢はよくそう思っている。

実際は相手も浜矢だからと油断している可能性があるのです、糸賀が打てない相手でも彼女が打てるパターンはあるのだが。

つまるところ、糸賀の一打席目はその試合で相手を打ち崩せるかの指標のような扱いになっている。

「そういう意味でも由美香先輩には打ってもらわなきゃ!」

「なるほど……! 糸賀先輩ヒットお願いします!」

「ホームランでもいいですよ!」

糸賀は警戒されているので、際どいコースへの投球が多い。

それでも高打率をキープできるのは、際どい球はカットして甘い球だけを打ち返せる技術があるから。

好球必打は野球の基本、だけどそれが難しい。

彼女はそれが出来るからこそ不動の一番なのだ。

「おっ、抜けた!」

「ナイスヒット!」

いつものようにあっさりヒットを打ってみせる。

彼女の安打は半分以上がレフト方向。

当然流し打ちを警戒したシフトを敷かれているが、そんなのお構いなしに打つのが糸賀由美香だ。

「走りますかね?」

「どうだろう……初回だし慎重に攻めていくんじゃない?」

二人が灰原を見ると、悩んだ末にサインを出した。

出したのはグリーンライト、自由に盜塁しろ。

グリーンライトのサインが出されるのは基本的には糸賀だけで、稀に菊池にも出る。それだけ脚に関して信頼されているということだ。

初球、モーションに入ると糸賀はスタートを切った。

ウエスト気味に外されたボールを受け取った捕手は、二塁に矢のような送球を投げる。

「走った!」

「うわっ、ギリギリ! 間に合え……!」

「……セーフ!」

セーフになったが、あの糸賀がギリギリ。

若干スタートが遅れたのもあるが、彼女があそこまで危なかったのは初めてだ。

「クイツクが速いな」

「青羽先輩……ですよね。それにキャッチャーの送球も正確でした」

「それだけじゃない、捕ってからも早かった」

流石は強豪校の守備力と言ったところだ。

一体どれだけの時間を守備練習に費やしたのか、そう思うほどに正確かつ素早い動き

だった。

「これは私には無理かな」

「菊池先輩も盗塁上手いのに無理なんですか……」

「脚の速さは由美香先輩のが上だからね」

そもそも菊池は犠打が多く打力も無いので走者として塁にすることが滅多に無い。

脚は速いのにそれを活かせる場面が来ない。

そして当然、ここも犠打のサイン。

「ちゃんと決めろよ！」

「ここ決めたらかっこいいぞー！」

こんな声援なんて必要なかったかのように、警戒されてる中であっさり決めてしま
う菊池。

流石は成功率100%を誇る、至誠のバント職人。

「これで犠牲フライでも1点ですね」

「神奈なら打つしよー」

「そういえばいつも通りって言ってましたけど、山田先輩今日5番ですよね」

「ここが入れ替わるのはよくあるし」

菊池以外の二年生は打順が固定されていない。

だが基本的に三、五、六番以外に入ることはない。

本日の打順は金堂が三番、山田が五番、青羽が六番。

「よーし神奈！ 打つたれー！」

「また打率6割に乗せましょー！」

金堂への初球は曲がりながら落ちるスライダー。

普通なら手が出ない球だが、金堂なら。

「おつ、高く上がって……落ちた！」

「しゃー！ 回れ回れ！」

「先制！ やった！」

レフトの前へのポテンヒットで1点先制。

それよりも気になる点、というよりどう足掻いても気になってしまう点が一つ。

「あの人またボール球打ちましたよ……」

「あれもいつも通りだな！」

「神奈に普通の打撃を求めない方がいいぞ」

「ええ……」

相変わらず天才的、というより変態的なバットコントロールと言った方がいいだろう。

彼女は過去に選球眼は悪くないという旨の発言をしていたが、ワンバンしていたとしても打てそうなら打ちにいくタイプだ。

「キャプテンにも続いてほしいですね」

「ただいまー」

「おかえりです！」

ベンチに戻ってきた糸賀と浜矢がハイタッチ。

柳谷はきつと続いてくれる、そう信じて打席の彼女に目線をやると、今まさに鋭い打球を放つ瞬間だった。

「うわっ、打球速っ！」

「これも抜けますね！」

「神奈は帰って……これないか」

「金堂先輩もそんな脚遅くないんですけどね」

鈍足に分類されるのは浜矢、山田、青羽の三人。

平均より少し上なのが鈴井、金堂、中上。

俊足なのが糸賀、菊池、柳谷となっている。

こうして見ると、至誠の走力は綺麗に三人ずつに分かれている。

「……ちよつと先輩たちー!？」

「いやーごめんごめん」

「あれは無理だ」

「そんなはつきりと言わなくても……」

あの後、山田と青羽は揃って三振を喫した。

この二人は不調が長引いているようだ。

「守備は頑張るから!」

「え、正直そちに飛ばしたくないんですけど」

「センター方向が安全すぎるからな」

「そうなんですよねえ」

至誠のセンターラインは固すぎて、投手はそこ以外に飛ばしたくないと思ってしまう。

レフト方向なんてサードが山田でレフトが青羽だ。

同じチームとは思えないくらい守備力の差がある。

「とにかく結城を抑えなきゃ、ですよね!」

「当てられたら終わりみたいいなもんだからなあ」

「内野の出番は無いかもな」

「怖いこと言わないで下さいよ……」

至誠ナインは2回表の守備につく。

浜矢はマウンドの上から打席に入った結城を見た瞬間、全身に電流が流れたような感覚がした。

(何だこの威圧感……!? 水瀬とは比べ物にならないぞ！)

18. 44mも離れているのに、まるですぐ近くにいるような迫力。

投げる前から打たれると感じてしまい、体が微塵も動かせない。

「伊吹！」

「あ……キャプテン」

動揺のあまり、柳谷がタイムを取ってマウンドに駆け寄ってきた事にも気が付かなかった。

「結城は怖いよな、けどきつきも言っただろ？ 打たれても私が打ち返すつて。それに、

“そんなに取られない” んだろ？」

「……はい！ 5点未満に抑えてやりますよ！」

「最高の球を頼むよ、必ず受け止めてやるから！」

浜矢から見た柳谷という存在は非常に頼りになる。

一言二言喋るだけで緊張がほぐれて、絶対に大丈夫だという気持ちにさせてくれる。

(……よし、もう平気。結城相手に投げられる事を嬉しく思えばいいんだ)

サインはスライダー。

流石の柳谷も結城相手に初球ストレートから入る度胸はない。

コントロールドリフトだけは絶対に許されない。

(くらえっ！、これが私の最高の球だっ！)

ミットに正確に投げ込む自分を脳内でイメージし、それを現実にするために浜矢は右腕を振り抜く。

イメージ通り、アウトローいっぱいが決まる完璧な球だった。

「なっ!?!」

簡単に打てるような球ではない。だが結城はいとも簡単にその球を打ち返す。しかも単打ならまだしもツーベース。

(今のを打たれるか……なら、後続を切るだけだ)

浜矢はショックなど受けていない。

自分が結城に敵わないのなんて、自分が一番理解しているから。

むしろホームランを打たれなかったので自分の勝ちだという精神でマウンドに立つ

ている。

六番は追い込んでからの高めのストレートで三振。

七番はセカンドゴロで、その間に結城は三塁へ。

(ツアアウト三塁……打席には八番か。下位打線相手なら私でも優位が取れる)

下位相手だからこそ出し惜しみはしない。

万が一のことが起きないように、全力のストレートを投げ込む。

詰まらされた打球はセカンド正面に転がる。

「セカン！ 一塁！」

「任せろ！」

そう言つてファーストに送球する菊池。

しかし、その送球が金堂のミットに収まる事はなかった。

「エツ……!?!? 一塁二塁！」

「オツケ！」

浜矢の指示と柳谷の素早いカバーのおかげでバッターランナーが二塁に進む事はなかったが、その間に結城はホームイン。

(別の人がフラグ回収しちゃったよ……)

まさか菊池がタイムリーエラーをすとは思ひもしなかった浜矢は、他人事のような

態度をしていた。

実際に浜矢からすれば他人事なのだが、失点したのだからもう少し動揺してもいいだろう。

「伊吹ごめん……」

「いい、いえ大丈夫ですよ！　というかあの流れは山田先輩か青羽先輩がエラーする流れでしたよね」

「なんで私達に飛び火したの!?!」

「まあレアな物見れたってことで」

菊池のエラーなんて何回も見られる物ではない。

それにまだ同点、しかもツーアウト一塁で九番打者と失点の可能性はかなり低い。

ここを抑えれば流れを渡さずに済む。

まずは高めのストレートで見逃し。

その次はボールゾーンにカーブを投げたら振ってくれてツーストライク。

まさかあのクソシヨボカーブを空振りする選手がいるとは思わず、浜矢は一瞬目を見開いた。

最後は外のスライダーで調理完了。

「伊吹も不運だったな」

「野球やってればこんな事もありますよ」

「自責点じゃないから気にしないで投げようね」

「おう！ てか私は全然平気だから菊池先輩の方をなんとか……」

「うん、任せて」

浜矢の代わりに千秋が菊池を励ます。

浜矢はそこまで人を励ますのが得意なタイプではないし、エラーした相手とどう話せばいいのか分からない。

「取られたら取り返す！ それが至誠の野球だろ？ 大量に点取ってこい！」

「オー！」

「美希と私が打つから、自援護よろしくね」

「えっ、それは流石に……」

まさかの自分でのタイムリーを要求され、浜矢の顔が引き攣った。

第14球 負けてたまるか

2回裏の攻撃は七番の鈴井から。

内野の頭は越せないかもしれないが、当てるだけなら出来ると発言していた鈴井。その発言通り、どんな球でも当ててはいる。

ただ、一向に前に打球が飛ばない。

「鈴井ー！ 頑張れー！」

「真芯で捉えればいけるよー！」

直後、鈴井は会心の当たりを放つ。

右中間を真つ二つに割り、フェンス直撃のツーベースとなる。

「ないばっちー！」

「美希ちゃんは流石だね……！」

「私も負けてられないな！」

同級生が結果を出した事により浜矢も奮起する。

彼女はやる気に満ちた表情でネクストバッターズサークルに入り、中上の打席を眺める。

彼女のフォームは鈴井の左右対称、過去に鈴井にフォームを伝授して貰っていた。違いは右か左かだけ、タイミングの取り方やスイングは瓜二つだ。

二人のフォームはいわゆる振り子打法、ハイアベレージが期待できるフォーム。

通常であればタイミングを崩されることを嫌って変化球をカットなどで対応し速球を待つのだが、振り子打法はその逆。

変化球を待つて速球はカットなどの対応をする。

速球、特に内角に投げられた場合には振り子打法は差し込まれやすい。

だから速球はカットして変化球を待つ。

「ハイヘー……うわっ!」

「あつ、ごめーん!」

「き、気にしないでください……」

中上に打った打球が至誠ベンチに飛び込んだ。

ちようど自分の真横を通過したということもあり、恐怖心から浜矢はグラブを装着する。

(お、サイン出た……バント?)

カウント1-1からバントのサインが出たが、中上はしっかり送ってワンアウト三塁。

「ナイバンですー！」

「任せたよ」

犠牲フライでも1点の場面、ただ向こうの打線と浜矢の実力を考えると1点では到底足りない。

なので浜矢は最低限なんて意識は捨てて、とにかくヒットで繋ぐことを考えた。

初球、アウトローに決まるストレート。

(うわ、はっや……)

ネクストやベンチで見ていた時よりも速く感じた。

球速は142kmと豪速球という訳ではないが、異様に速く感じるのはノビがあるから。

中上にバントのサインが出たのも領ける。

だが、振らなければ何かが起きることはない。

古城の球種はカーブ、スライダー、カットボール。

その中で浜矢が打てるのはストレートかカットボールのみ。

2球目、内角低めのやや甘いコースに速球が投げられる。

低めが得意、というより高めが壊滅的に打てない彼女は全力でバットを振る。

(……あつ)

彼女はストレートだと思って振ったが、投げられたのはカットボール。

打ち上げてしまいライトへの犠牲フライに終わる。

(打って繋ぎたかった……！)

最低限では足らないと打席に入った彼女にとって、この結果は決して喜べる物ではなかった。

「いーぶぎ、ナイスフライ！」

「ナイス最低限！」

「よく当てたな」

それでも、打率が2割を切った彼女がああ球を犠牲フライにした事を先輩たちは評価している。

先発投手がいつまでも落ち込んでいては、抑えられるものも抑えられなくなる。

常に平常心、そして自分に自信を持たなければスカウトを唸らせるような活躍は出来ない。

浜矢は自らの頬を叩いて気合いを入れ直す。

「とはいえ流れは切れちゃいましたからねえ……」

「ま、次の回が勝負よ」

「ですね」

この後の糸賀は低めのカーブを上手く掬うがライトフライに終わりスリーアウト、チェンジ。

3回表、京王義塾の攻撃は一番水瀬からの好打順。

水瀬に打たれたら最低でも1失点はする、その覚悟を持って浜矢はマウンドに立つ。

(ストレートから入るの怖いなあ……スライダー？ 了解です)

アウトローに構えた柳谷のミット目掛け、強打者にも充分通用する変化量のスライダーを投げ込む。

しかし、それを水瀬は肘を畳んで打ち返す。

「げっ……っ……」

「おっけー!」

二遊間を抜かれると思ひ浜矢が勢い良く振り向くと、セカンドの菊池が横つ飛びで打球を防いだ。

このまま立ち上がって一塁に送球したとしても、自分の肩と水瀬の脚を考えればアウトには出来ない。

そう考えた菊池は、自分に向かって走ってきている鈴井にグラブトス。

鈴井は待つていたと言わんばかりの笑みを浮かべながらトスを受け取り、そのまま一

塁に転送する。

「ナ、ナイスプレー！」

「へへっ、イージーイージー！」

菊池と鈴井による超フラインプレー。

飛び込んで捕るのはもちろん、そこからのグラブトスと一塁への送球が正確で素晴らしい。

高校生でこんなプレーが出来るのは全国を探しても数名しか居ないだろう。

そもそも、普通ならあの打球に追いつくことすら出来ない。

(流れはこっちのものだ、あとは抑えるぞ！)

二番はストロートを続けてからのボールになるスライダーで三振、三番はストロートの後のツーシームを打たせスリーアウト。

あの京王義塾を相手に、至誠が3回までリードをしているなど誰が予想しただろうか。

「ナイピ」

「ありがとうございます」

「あと2イニング、いけそう？」

「この調子ならいけますよー」

球数はまだ30球程度、スタミナ的には余裕がある。

青羽が2イニングをどれだけ失点で済ませられるかが懸念材料だが、柳谷のリードと至誠の守備があればそこまで酷い事にはならないだろう。

「てか菊池先輩も地味に打率ヤバイですよね」

「まあ守備の人だからな……」

「それなのにエラーしたって落ち込んだよ」

「でもさつきみたいなのプレーがほとんどですし、私は気にしてないのに……」

「普通のエラーとタイムリーエラーじゃ全然違うからなあ」

エラーをしてしまった事が気まずいのか、先程から菊池は浜矢と目を合わせようとしていない。

浜矢的にはたかが1失点だし、それも同点にされただけであって勝ち越された訳ではないのだから普通に接してほしい。

「おっ、珍しく打った」

糸賀の地味に畜生な発言が飛び出る。

二試合ぶりのヒットなので珍しく打ったというのは事実だが。

「挽回しようとしてるなあ」

「てことは走りますかね?」

「どうかな……」

そう言つて糸賀は灰原の様子を窺う。

浜矢も続いて灰原を見ると、彼女はどのサインを出すか悩んでいる様子だった。

スタートが送れたとはいえ糸賀でもギリギリだったのが足枷になっている。

(お、盗塁のサイン)

灰原としてももつと攻めたい気持ちはある。

失敗した時のリスクを考えてこれまでは慎重にならざるを得なかったが、今日は攻めていく気だ。

一回、二回と牽制を挟んでスタートを切りにくくする。しかもタイミングを変えると
いうオマケ付き。

一塁ベースから少し離れてリードを取っている菊池は一切表情を、気持ちを緩めな
い。

心臓は通常よりも速いリズムを刻み、全身から嫌な汗も噴き出ている。それでも。

(伊吹は京王相手にも勇敢に立ち向かつて……先輩の私が頑張らなくてどうするんだ
!)

打者に対しての初球を投げ込もうとした時、菊池はスタートを切った。

「走った！」

「うおっ、速っ……！！！」

「セーフ！」

「菊池せんばーい！ ナイスランです！」

向こうが来ないならこっちから行くまで。

浜矢の声に反応して、ようやく菊池は目を合わせた。二人は笑顔のままエアハイタッチをする。

「てかギャンブルしたな〜」

「モーシヨン入る前に走ってましたよね」

モーシヨンが入る直前、僅かにグラブが動いたタイミングでスタートを切った。

投手に気付かれれば。一塁手の指示するタイミングがもう少し早ければ。

ほぼ100%牽制アウトになるタイミングでスタートを切ったのだ。

「それだけ活躍したいって思いがあるんだろうな」

「菊池先輩……」

それだけしてもらえたことが嬉しい。

チームとしても、個人としても。

菊池の奮闘により、ノーアウト二塁という絶好のチャンスで金堂に回った。

「……上がつてきたな」

「さつきタイム取つてたもんな、あれで立ち直っちゃったか」

変化球のキレ、スピード。直球のコントロールが目に見えて良くなった。

二盗を決められた直後に捕手がタイムを取つて内野陣が集まったあの時に、上手いことやられた訳だ。

至誠もタイムや伝来のタイミングは上手いのだが、京王義塾も上手い。

金堂はセカンドへの進塁打で終わる。

ワンアウト三塁、この場でチーム最強打者に打席が回った。

柳谷はかなり集中してるようで、いつもの優しい笑顔は無い。あるのは鋭く相手を睨みつけ、獲物を狩る肉食獣のような瞳だけ。

二球続けて見逃して1-1。

その後も打ち損じたり見逃したりでフルカウントとなる。

進展自体は無いのに、一秒たりとも目が離せない。

どちらがこの勝負に勝つのかを見逃したくない。

球場内にいる者の思いは一致していた。

勝負の七球目、柳谷は高めの速球に力負けせず強く弾き返す。痛烈な打球はセンター

を襲う。

「っ、センターー！」

「落ちろー！」

「抜けろー！」

水瀬が前進してきて、あと少しでグラブが届く。

あと一歩のところだった。

「落ちたー！」

「ゴーゴーー！」

「よっしー！ 3点目ー！」

俊足を生かした広い守備範囲が売りの水瀬でも届かず、白球はグラウンドにポトリと落ちる。

しかしそこからの対応は流石の一言に尽きる。

バウンドしたボールを素早く捕ってすぐに体勢を立て直し、二塁に低い弾道の送球。

柳谷でも二塁を陥れることは出来ず一塁ストップ。

「3対1か……まだ油断はできないな」

「監督的には私があと2イニング抑えられると思いますか？」

「正直同点までは覚悟してる」

「結城が怖すぎるんですよね……」

浜矢は結城に打たれる覚悟はしている。

だからこそ得点圏で彼女に回す訳にはいかない。

次の打席は彼女が先頭打者なのでランナーは居ないから、少しだけ安心できる。

浜矢が結城対策を考えている間に攻撃は終わった。

考えていたとしても実行出来なければ全てが無駄になる。強い気持ちを持って相對せねばなるまい。

(ふう……相変わらず凄い威圧感だ)

結城からは、絶対に打つという気迫を感じられた。

いくらタレント揃いとはいえ、こんな急造チームに負けている状況が許せないのだから。

自分が何とかしてみせる、自分が流れを引き戻す、そんな眼をしている彼女はまさしくキャプテン。

(けど、負けてたまるか。全力でいかせてもらおうぞ)

まずは例のカーブを見せ球に使ってボール。

次にインハイのストレートで仰け反らせる。

さらに内角をえぐるツーシームを投げたが、釣られることなく2—1。

(ボール先行はまずいな……ストライク入れたい)

四球目は外に逃げるスライダー。

僅かに手元が狂ったのを感じた次の瞬間だった。

「……まじかよ」

「結城さーん！ ナイバッチャー！」

「さすが四番！」

白球は無情にもライトスタンドに飛び込んだ。

流してこの飛距離となると、彼女の純粋なパワーと技術の高さが窺える。

「伊吹ドンマイ！」

「まだ1点差あるよ！ 気にせず投げようぜ！」

「……はい！」

頬を叩いて気持ちを切り替える。

結城に打たれても他の打者に打たれなければ追い付かない。

五番にはヒヤツとした当たりを打たれるが糸賀の守備範囲。

六番にはヒットを打たれるが、七番と八番は完全に手玉に取って抑え込む。

これで浜矢が投げる残りイニングは1となった。

「浜矢、次の回行けるか？ 辛そうだけど」

「大丈夫です！ まだ投げられます！」

「そうか、なら頼んだぞ」

「はい！」

そう答える浜矢の前髪は汗で濡れている。

肩で息をする程ではないが、呼吸を整えるまでの時間が長くなっているので限界が近づいている。

球数は57球、上手くやれば1イニングは持つ。

野手は援護をして楽に投げさせてあげたかったが、この回は打線から快音が響くことはなく無得点。

5回表、浜矢はこの回で降りる。

最後だからしっかり抑えて青羽に繋ぎたい。

この回の先頭は九番、いわゆる安パイだったが。

(っ、しまった……！)

「デッドボール！」

今大会、初めて当ててしまった。しかも投手に。

動揺したがすぐさま帽子を取って謝罪する。

先程から手元が安定しない感じがある浜矢は、ロジンバグを手にとって心を落ち着かせる。

ノーアウト一塁、打席には水瀬。

至誠の守備を持つてしてもゲッツーに仕留めるのは相当難しい。

ここで一番嫌なのはヒットを打たれて一・二塁にしてしまうこと。

(あと少しだから抑えないと。私が抑えなきゃいけないんだ、私が……)

浜矢は殺気じみた雰囲気醸し出しながら、自分だけの世界に入り込んでしまう。

水瀬を抑えられるのは自分しかいない、自分一人で水瀬を抑えなければいけないと思
い込んでいる。

「伊吹ー！ 落ち着いてー！」

「ここまで抑えられてんだから平気だつてー！」

「シヨート打たせていいよー！」

「センターでもいいぞー！」

前後から投げかけられた仲間の声で我に返る。

浜矢は独りではない、頼りになる仲間がいる。

目の前にいる柳谷は自分を信じてミットを構えている、それに応えなければ投手では

ない。

(くらえ……全身全霊のスライダー！)

水瀬や結城といった一流打者にしか投げない。否、投げられないスライダー。

変化量も曲がり始めの遅さも最高、これなら水瀬でも打てないだろうと柳谷は確信した。

しかし水瀬が選択したのはヒッティングではない。

「セーフティーだ！」

(くそっ、間に合えっ！)

「セーフ！」

完全に意表を突かれてセーフティー成功。

二番は予想通りバントだったから落ち着いて対処できたが、問題はここから。

三番打者に打たれたらワンアウトで結城に回る。

得点圏になるのは仕方ないが、ツーアウトの結城と戦う選択を取る。

敬遠も一つの手だが、この良い場面でそんな事をすればベンチか客席から野次が飛ぶ

のは明白だろう。

今の浜矢に野次を受けて平常心でいられる精神力の強さは、ない。

その最悪な状況を避けるには、とにかく目の前の打者を打ち取らなければならない。

(ストリート……分かりました)

最初はインハイのストリートで空振り。

柳谷曰く、ノビがあるから高めで活きる球。

次は同じく内角のカーブで緩急をつける。

スタンダードな配球だが、それが意外と打たれない。

「ストライク！」

浜矢のカーブが狙い目だという事は周知の事実なので、打者はフルスイングで立ち向かってきた。

当たっていれば確実にスタンドインだっただろうが、当たらなければどうということはない。

(決め球は……スライダー)

外角のストライクからボールになるスライダー。

バッテリーの思惑通り打者は釣られ、ピンチの場面で空振り三振を奪う。

「よっしゃー！」

「ナイピー！」

「ナイスボール！」

まだ安心は出来ない。ここで真打登場だからだ。
ランナーは二人、打席には結城。

ここで打たれれば確実に流れは持っていかれる。

(……必ず、抑えるんだ)

第15球 良い投手の条件

ツーアウト一・二塁。絶体絶命のピンチで浜矢は結城と向かい合う。

浜矢自身に興味は無い、早く投げろと言わんばかりの目線を送るのは結城だ。

全身から流れる冷や汗を止める手段は無い。

仲間から送られる冷や汗も、観客席から結城に向かって送られる声援も浜矢には——否、この二人には聴こえていなかった。

結城と浜矢、相手と自分。二人だけの世界に入り込んだように感じられた。

(落ち着け……向こうだって人間だ。少なからず緊張してるはず、そこを突くぞ)

鼓動の高鳴りを抑え、息を一つ吐く。

ストレートを高めに外してボール。

結城レベルの打者は当然釣られてくれなかった。

二球目はスライダーがワンバウンドしてツーボール。

(ここでストライク欲しさに甘い球を投げちゃいけない……とにかくコーナーを突くぞ)

カーブは見送ってもらいストライク。

心臓の高鳴りが増した。汗の噴き出る量も増えた。

ここで投げミスをするれば一瞬で終わりを迎える、悔いなく全力で投げ切るしかない。

(覚悟しろ、結城っ！)

浜矢は投げた瞬間、抑えたと確信した。

それほどまでに良い球を投げられたとリリースの瞬間に感じた。

——だが、その想いは結城の一振りで碎かれる。

「あ……………」

「よっしやー！ 逆転ー！」

「結城さん最高ですー！」

「ナイバッチーー！」

5回表、四番の逆転タイムリー。

一番打たれてはいけない場面で打たれてしまった。

浜矢はこんな事になるなら敬遠しておいた方がマシだったと思った。そう思っているが。

「伊吹、大丈夫か？」

「キャプテン、私……………」

「……で降りる事だって可能だ。」

このまま打ち込まれるくらいなら降りて青羽に託した方が何倍も良い。

打ち込まれた場合の彼女の精神面での苦痛を考えた時、その選択は間違いではないと言える。

だが、それでも。

「まだ投げたいです」

「そうか、頼んだぞ！」

「……はい」

けど、このまま負けっぱなしで終われない。

ここで降りたら一生後悔するし、一生このトラウマを引きずって生きていかなければならない。

それだけは嫌だった。自分はまだやれると京王義塾に見せつけたかった。

こんな所で終わってたまるか、こんな所で折れてたまるか。それが浜矢の心の叫びだった。

浜矢の目の色が変わった。

どこか自信なさげで不安そうだった瞳は消え、ただ目の前の敵を仕留める事しか考えていない、熱く燃える瞳をしている。

——この状態の浜矢ならどんなコースに要求してもいい。

ただ一人しか立つ事を許されない先発というマウンドに立つ後輩を見て、柳谷はそう直感した。

当たりそうになってしまいう内角でも、繊細な技術が必要になるアウトローへの投球も、フロントドアもバックドアも。

今の彼女なら全てを要求できると脳が理解した。

その直感は的中した。

まず手始めに五番は追い込んでからの高めの釣り球のストレートを振らせて三振、六番にはカウント0―2からフロントドアのスライダーを見送らせて三球で三振に仕留めた。

浜矢伊吹、京王義塾打線を相手に5回4失点でマウンドを降りる。

「せんしゅーごめん……逆転されちゃった」

「けど、5失点はしなかった」

「だけど……」

「カッコよかったよ、伊吹ちゃん」

「あ、ありがと……」

千秋の容姿はとても可愛らしい。

そんな彼女に真っ直ぐと見つめられて褒められるのは悪い気がしない、というより照れ臭いようで浜矢は顔を赤く染めてソワソワしている。

「それに、伊吹は良い投手だよ」

「中上先輩……けど逆転タイムリー打たれましたし」

「確かに打たれないのが一番だけど、それでも死球を引きずらなかつたのは良かったよ。セーフティーは仕方ないし、三番は三振に出来た」

そして何より、自ら続投を志願した後にキツチリと抑えたこと。

それこそが良い投手の条件だと彼女は言う。

「死球を出そうが逆転されようが切り替えられる。それがエースの素質があるってことだよ」

「エースの素質……」

「私だって四球連発しても抑えられるでしょ？　そういうこと」

良い投手は気持ち切り替えられる。

それが出来た浜矢もその素質を持っている。

「それに、伊吹ちゃんはまだ体が出来てないからね……いずれエースになると私は思っているよ」

「私がエース？」

「うん！ それも全国でもトップクラスのね！」

「せんしゅー……ありがとう」

褒めて励ましてくれるだけではなく、将来の活躍まで見据えてくれている仲間がいる。

それなのに、たった一度打たれただけで凹むのは情けない。

今日が終われば結城とは一生対戦しない。浜矢が真に越えるべきはスタンドにいる一・二年生。

であれば、彼女は今日のことは引きずらずに前を見て進み続ければいい。

「いつか私が至誠最高のエースになってやる！」

「よく言った！ 応援してるよ」

「私にもそのサポートさせてね」

「勿論！ てかせんしゅーがいなきや無理！」

自分のことを一番信じてくれていた千秋だからこそ、自分がエースになるまでサポートしてほしい。

そしてその恩は、エースとなつて至誠を全国制覇に導くことで返す。浜矢はそう決心した。

「よしつ、応援するか！」

「うん！ 美希ちゃん頑張ってる！」

「……伊吹ちゃん」

「なにー？ って、近い近い」

声に反応して顔を上げると、視界全体に鈴井の顔が広がる。

一応入学式の日に一目惚れのようなものをした浜矢にとって、この距離感はかなり心臓に悪かった。

「私と中上先輩で同点にするから」

「へっ？」

「伊吹ちゃんはそこで見てて」

それだけ呟いて鈴井は打席に向かう。

一体何が起きたのか理解が追いついていない浜矢は、口をポカンと開いていた。

「美希ちゃんなりの励ましかもね。援護するからそんな落ち込まないでいいよって」

「素直じゃないなあ……」

「けどそういう所も好きでしょ？」

「うん、せんしゅーもでしょ？」

「もちろん！」

鈴井が素直ではないことなんて二人はとっくに理解している。

冷たいようで本当は大事に想ってくれている。

浜矢も千秋も、彼女のそういう部分が好きなのだ。

さて、鈴井の持ち味はミート力と選球眼だ。

際どいコースは粘り少しでも外れたら見極める。

だから一年生でショートという負担の大きいポジションなのに高打率を残せているんだ。

「おっ！ 長打コース！」

鈴井は甘く入ったボールを逃さず打ち返し右中間。

外野が彼女の長打力を甘く見て前進していた事もあり、捕球にはまだ時間が掛かりそうだった。

「二塁蹴ったぞ?!」

「美希ちゃん……!!」

「逸れた! 右右!」

だからと言って、二塁まで蹴るとはこの場にいる誰も予想していなかった。

外野からの送球が僅かに逸れたのを見て、コーチャーの青羽が少しでもセーフになる確率の高いコースを指示する。

鈴井は二塁を蹴ってからどンドン加速していき、最後は指示通り三塁ベースの右側に滑り込む。

「セーフ！」

「あいつ……」

「執念、かな」

あの常にクールな鈴井美希が、呆れ以外の感情を滅多に露わにしない鈴井美希が吠えている。

彼女があそこまで感情を剥き出しにしているのは珍しく、同級生の二人ですら見た事がない姿だった。

余程この打席で打てたのが嬉しかったのだろう、浜矢を支えられて安心したのだろう。

「佳奈恵！ 繋げ！」

「美希をホームに帰してやれー！」

中上はベンチに向かって微笑む。

そしてこの期待に応える犠牲フライで同点。

どれだけ打たれてもその分援護してくれる、それは投手からすればどれだけ心強い事か。

同級生が活躍したんだ、自分も負けていられない。

浜矢はそう思って右打席に入る。

(いくらでも食らい付いてやる、どんな球でも当ててやる。鈴井が執念を見せてくれたんだ、私だって)

2割も打つてない安パイ打者だとか、至誠唯一の癒しポイントだとか、逆5ツールプレイヤーだとか。

このまま舐められっぱなしというのは彼女のプライドが許さなかった。

犠牲フライの後は打線が繋がりにくい。

ランナーが居なくなることで勢いが途切れるから。

つまり、犠牲フライの後の打者が出塁すれば流れは変わる。

藤咲程ではないが古城も制球力が高い。

そして、球に力がある方ではないのでコーナーを突く投球が多い。

コーナーを突くという事は際どいコースに投げ込むという事、際どいコースに投げ込むという事は必然的にボール球も増える。

「ボールフォア！」

「よしっ！」

「ナイセーラー！」

そんなサインは出ていないのに、浜矢はセーフティをするフリをして揺さぶりをかけて四球をもぎ取った。

見た目だけは俊足なのが功を奏した。

(さてと、サインは……特になしか。まあそんな頻繁にエンドランなんか出来ないよな) 糸賀なら出来そうだが、仮に打ち上げた場合浜矢の走力と打球判断では帰塁出来ない可能性が高い。

だがここは確実に進塁させたい。であれば彼女が取る行動は。

四球を出した直後の一球目、糸賀が選んだのはセーフティバント。

(そう来ると思ってましたよ！)

ノーサインでセーフティを仕掛けた先輩に驚いて二塁で刺されるなどという間抜けな事はしない。

それは彼女のこの行動を予想していたから。

四球を出して動揺しているところを狙ってセーフティ、先程浜矢が水瀬にやられた事だ。

打力が心配な菊池の打席、バントか強攻か。

灰原は長考した末、強攻を選んだ。

1点では足りない場面、アウト一つをタダでやる訳にはいかないと判断した。この采配が吉と出るか凶と出るか。

——答えは吉だった。

菊池の打球は前進守備のショートの前を抜けてライトの前に転がっていくヒットとなる。

これでワンアウト満塁、そしてクリーンナップ。

珍しく金堂は外野フライに打ち取られる。

それなりの飛距離ではあったが、浜矢の脚ではホームで刺されるだろう。

糸賀と浜矢が逆なら……とベンチの全員が、何なら本人たちも思っていた。

ここで投手交代のアナウンスが流れる。

1番を背負った京王のエース・永田の登場だ。

投球練習から既に素晴らしい球を投げている。

先程まで投げていた古城が二番手だったのも頷ける実力の高さだ。

だが、打席には至誠最強打者の柳谷だ。

「キャプテン！ 私をホームに還してくださいー！」

「じゃあ私もー！」

浜矢の声に糸賀も便乗する。

柳谷は二人を見てニツと笑うと、それぞれに向かつて右の拳を突き出した。後は任せろ、そう言っているようだった。

(伊吹、5回4失点で抑えて凄かったよ。そして由美香もこんな良い場面で回してくれてありがとな)

永田の投げた初球、アウトローいっぱいに決まる146kmのストレート。ノビがあり、球速はそこそこ、制球も悪くない。

総合的に見れば好投手と呼ばれる選手だろう。

だが柳谷は一流。好投手は一流打者には勝てない。

柳谷がスイングをすると白球は一瞬にして外野フェンスに到達した。

あまりの打球速度に浜矢は反応が遅れてしまったが、無事走り出して生還。

糸賀も余裕のホームインで勝ち越しに成功。

「キャプテン！ ナイバッチー！」

「サンキュー真衣！」

4対6、まさかあの京王義塾がこれだけの点を取られるとは誰も予想していなかっただろう。

しかも自慢のエースも自責こそ0だが打たれた。

山田はこの打席も打ち損じた。

今日打てなかったのは山田と青羽の二人。

青羽は登板の事が頭にあつてそれどころではなかったのかもしれないが、山田は来年の四番候補なのにこれはいかんでしょ。

この二人が挽回できるチャンスはもう決勝しか残っていないが、頑張ってもらおう。

「先輩、あとは任せました」

「伊吹がここまで粘ってくれたんだ、私も打たれはしないぞ」

「はい！ ライトには飛ばさないで下さいね！」

「なら飛ばしてやるよ」

そんな軽口を叩き合つて笑い合う。

青羽は見た目は怖いし感情が顔に出ないが、冗談を言うり返してくれるノリの良さがある。

「あ、そうそう。下位打線はストレートで押せば打たれませんよ」

「分かった」

浜矢も下位打線にはストレート中心で攻めた。

見た感じ力負けをしている様子だったし、そもそもタイミングが合っていないかったの

でストレート主体に攻めていくのは悪くないだろう。

青羽もここまで投げて来て、投手としてのノウウハウや能力も鍛えられている。

そこに浜矢のアドバイスと柳谷のリードが加わった。そんな彼女は誰にも打たれない。

下位打線を圧倒して6回表の守備を終えた。

イニングはあと1回、リードは2点。

第16球 終わりは唐突に

5回裏こそ回の途中で、しかもピンチの場面という投げにくい場面での登板だったからアレだが、6回裏はエースの本領発揮をされた。

青羽は三球三振、鈴木もスプリットに手を出してしまいショートゴロ。

中上も高めのストレートに釣られてあっさり三振。

「青羽先輩！ 負けてられないですよね！」

「ああ、この回を抑えてお前に勝ちをつけてやる」

「頼みますよ！」

ハイタッチをしてライトの定位置に駆けていく。

この回を抑えれば八年ぶりの決勝進出が決まる。

浮き足立ってしまいそうになるが、冷静に風向きと太陽の位置を確認する。

《一番セッター水瀬さん》

最終回2点差でも全く安心できないのは彼女と結城の存在があるから。

水瀬は何が何でも出塁してやると、鬼気迫った表情でマウンドの青羽を睨みつける。

敵を怯ませる気迫はある。張り詰めるような緊張感もある。だが、負ける気だけはな

い。

藤銀はどこか諦めていたような雰囲気ベンチに漂っていたが、京王義塾にはそんな様子はない。

それもその筈だろう。これまで何度も全国出場に届きかけた、しかしその度に蒼海大相模や藤堂学園にその権利を持っていかれた。

数年ぶりに決勝に進めるチャンス、それをそう易々と手放す訳にはいかない。

初球、青羽のストレートに対して水瀬は珍しく力任せに振り切った。

プレッシャーからか、冷静さを欠いた彼女らしからぬスイング。

しかし流石は6割打者と言ったところか、ヒットゾーンに運んでノーアウト一塁の場面をメイクする。

(まだ負けられへん。絶対このメンバーで全国に行く、三年間それだけを目標にやってきてん)

中学時代から憧れていた結城とチームメイトになるためだけに兵庫から神奈川まで来て、寮に入って野球漬けの日々を送ってきた。

楽しい事なんてほとんどなかった、高校生らしい事もほとんどしていない。

ただ結果を出す事だけを求められ、その期待に応えるべく常に自分を律して研鑽を積

んできた。

それなのに三年間で一度も全国出場の経験無しで卒業したくない、そんな事が許されるはずがない。

苦楽を共にしてきたチームメイトの為に、共に実力を高め合っていた結城の為に、そして何よりも自分の為に。

「走った！」

絶対に自分がチャンスメイクしてみせる。

自慢の脚力を信じ、初球からスタートを切った。

ボールの行方を確認せず一心不乱に地面を強く蹴り、27.431メートル先のベースに向かってただひたすらに駆ける。

——しかし、この考えを読んでいた者がいた。

柳谷真衣に、鈴木美希の二人。

水瀬がスタートを切ったのを見ると同時に鈴木は二塁に入り、正捕手からの送球を待つ姿勢をとった。

そして正捕手は——投手に直球を投じさせた。

外角高めに外れる速球を弾くことなく直ぐさま握り替え、ステップを踏み、二塁で構える後輩に向けて低い弾道のバズーカ送球。

投球動作を終えた青羽が一瞬にして回避行動に移らなければ当たってしまう、そんな弾道だった。

二塁に滑り込む水瀬の脚、それと同時に鋭い送球を受け取った鈴井がタッチをする。グラウンド整備から時間が経っており、スプリングラーで撒いた水分は蒸発してしまっただろう。

二塁ベース付近、広範囲に砂埃が舞う。

プレーを見て判定を下すことが出来たのは、鈴井と水瀬、そして塁審のみだった。

「アウトー！」

そのコールがされた瞬間、球場が湧いた。

県内でもトップクラス、全国でも見劣りしない俊足を誇る水瀬楓が刺された。

そんな珍しい場面を目の前で見てしまったのは、興奮するのも無理はないだろう。

この歓声は至誠を後押しし、京王義塾を動揺させる残酷なものだ。

「ごめん……」

「向こうの捕手が一枚上手だったただけだ。それに、四番わたしが打てばいいだけの話だろう？」

「……任せたよ」

惜しくも盗塁死をしてしまった水瀬は、ベンチに戻ると俯いたまま結城と会話を交わ

す。

悔しさから今にも泣き出してしまいそうな彼女は、喉から声を無理やり絞り出していった。

このまま順調にゲームセットとはいかないもので。

今日の試合でノーヒット、バントは上手いが打力はそこそこのこという絶対に抑えなくてはいけない二番に四球を与えてしまう。

三番打者をゲッツーに打ち取れば結城に回すことなくゲームセット、それ以外の場合は結城に回る。

ヒットや四死球の場合はワンアウトで得点圏という、結城の大好きな場面で。

それこそ敬遠をしなければいいのだが、その選択をした場合必ずヤジが飛んでくる。

この試合だけでは済まないかもしれない、次の試合も、その次も続くかもしれない。罪のない選手たちに誹謗中傷が届くかもしれない。

そう考えた時、「灰原は敬遠の指示を出すということは考えられなかった。

「ここで終わらせろー！」

「翼！ 投げきれー！」

「セカンド打たせろー！」

青羽は心を落ち着かせる為にロジンバツグを触る。

試合前、緊張で手が震えていた彼女はいいない。

マウンドに立っているのは、チームの勝利を掴み取ろうとしている投手だ。

最高はダブルプレー、最低でもツーアウト、そして最悪はワンアウト。

それだけを頭に入れて青羽は投げる。

初球、アウトローのカーブを見逃し。ストライク。

次に真ん中低めのストレートをファールにされる。

(レフト方向へのファール……速球を引っ張ったってことは元から速球狙い、しかも引っ張るつもりだったか。打力はあるしホームランに賭けてたか)

ホームランを狙って打つ場合、一番それを実行しやすいのは引っ張り打ち。

外角の球を流すより真ん中から内の球を引っ張る方が強い力が伝わりやすい。

ファールの方向、そしてタイミングが合っていたという事実……これがホームラン狙いであつたと柳谷に悟らせてしまった。

柳谷はあまり三球勝負を好まない。自分のリードでそれをした場合、打たれるのではないかという怖さがある。

だからもう一球内角に速球を投げさせる、打者を仰け反らせるために。

(一瞬だけど踏み込んできた…… やっぱストレート狙いか)

見逃し方、タイミングの取り方、体の開き具合。

それで相手の待つている球種や狙いを探れ、柳谷は灰原からそう教わった。

まさに今、それを実行している。

(さあ柳谷、ストレートをホームランにしようと打ち気にはやる打者には何を投げる?)

長考の末に柳谷が構えたのは、インコース。

青羽は勝負を決める白球を握りしめ、グラブの中で二本の縫い目に指を掛ける。

左脚を上げ、そのまま力強く踏み込む。

右腕をオーバースローから、169cmの高身長から、24.5cmのマウンドから振り下ろす。

内角には投げられたが、一球前に打者を仰け反らせたほど体に近くはない。それどころか、甘い。

球速、コース共に打ち頃の絶好球。

最後の最後で失投か、そう思った打者は迷いの無いフルスイングで粉碎しようとした。

しかし、白球はホームベースの手前で利き手側に曲がり始めた——ツーシームだ。

打ち気にはやる打者に対して、甘いコースから斜めに沈み込むツーシーム、ゴロを打たせたい時によく使われる配球。

柳谷の狙い通り、打者はバットの根元付近で白球を捉えた。

だが腐っても金属バット、芯を外されたとしてもある程度は強い打球が打てる。しかし至誠の内野陣——特に二遊間は鉄壁だ。

「ショートいったぞ！」

「はいっ！ 一塁！」

「オーケー！」

鈴井は鋭い打球をガツチリと掴む。

流れるような動きで二塁に入った菊池にトスをしてツーアウト、そして菊池がそのまま一塁へ転送。

「……アウトッ！」

——長い試合の終わりが告げられた。

どちらも一歩も譲らない白熱した試合だったが、終わる時は意外とあつけないものだ。

「青羽せんぱーい！ ありがとうございませす！」

「礼はあの二人に言いな」

そう言つて青羽が指差したのは鈴井と菊池。

確かにこの試合、あの二人にはだいたい助けられた。

「鈴井！ 菊池先輩！ ありがとうございまして！」

「エラー分取り返せてた？」

「十分すぎるほどに！」

鈴井も礼は言わないでいいと口にしながらも笑っていた。相変わらず素直ではない。

歓喜に包まれている至誠ナインとは違い、京王義塾ナインは泣き崩れていた。

地面に両膝をつき、蹲ったまま動けない。

特にチームの中心人物であった結城葵と水瀬楓は抱き合いながら悔しさを、自身の不甲斐なさをぶつけあっていた。

自分が悪い、自分があの場面で打てれば、あの場面で盗塁を失敗しなければ。

そんな言葉を涙が溢れてきて止まらない。

しかし敗者は立ち去らなければならない。

試合が終わった後のグラウンドには、勝者のみが残ることを許される。

結城と水瀬はチームメイトに肩を支えてもらいながら、覚束ない足取りでグラウンドから去る。

「決勝進出おめでとう！ 相手はこの後の試合で決まる、皆で観戦しよう」

「どっちが勝つと思う？」

「そりゃ蒼海大でしょ」

「相手は市大藤沢ですよね！」

「なら私は市大藤沢予想かな」

神奈川屈指の強豪校・蒼海大相模と、ここ数年力を付けてきている市大藤沢。

圧倒的に打のチームである蒼海大相模に守りの市大藤沢、この二校の準決勝は熱戦が予想されていた。

——それは、予想を遥かに上回る結末だった。

「なんだよこれ……」

「……市大って強いんですよ？」

「今年は投手も二枚看板で優勝候補だぞ……」

スコアボードには24対1と刻まれていた。

優勝候補とまで言われたあの市大藤沢がこんなに点を取られて、なおかつ1点しか取れなかった。

「どこからでも点が入る打線か……」

「それどころじゃない、どこからでもホームランが出るぞ」

「投手も良いな……」

三年生すらも驚きを隠せない様子。

蒼海大は確かに毎年のように優勝している名門校だが、まさかここまで圧倒的だとは誰も思わなかった。

「そういえば佐久間は出なかったね」

「この試合展開だし、経験を積ませるためにも投げさせるかと思ってたけど……」

「そういやなんで出なかったんだ？」

「この数試合はリリーフで投げてたから温存したのかな？」

もしくは完膚なきまでに叩きのめそうとしたのか、それともエースの評価を上げようとしたのか。

「それに関しては球数だろうな、5回で50球だと」

「え、50……」

5回までとはいえ完投して50球。

打者一人に対して3球程度しか投げていない計算。

「球数が少ないってことは、打たせて取るタイプなんですか？」

「いや、元は奪三振を取るタイプだ。きっと決勝も投げるから球数抑えようとしたんだな」

（決勝も投げるなら継投すればよかったのに……佐久間を投げさせたくない理由でもあったのかな）

一年生で最速150kmという輝かしい実績はあるが、絶望的なまでのノーコンで強豪校を相手に投げさせるには危険すぎる。

その為にエースを連投させるという選択を取ったのだが、それを浜矢が知る術はない。

「まあ、何はともあれ決勝の相手は蒼海大に決まった。明日は速球打ちの練習をするが、その後はゆっくり休んでくれ」

「おっ、休みでいいんですか？」

「決勝でバテてもらっちゃ困るからな。それに私もデータ収集するから時間取れないし」

「ちなみに私もお手伝いします」

千秋も居ないのではチームに正確にノックを打てる者が一人もいなくなる。ならば言われた通りゆっくり体を休めるしかない。

「ただ、三年は練習後も残ってくれ」

「えっ!?! 私らなんか悪い事しました?」

「違う違う、インタビュー」

「インタビューですか……嬉しいですね」

決勝まで残ったからインタビューを受ける。

こういうのは基本的にキャプテンと監督だけなのだが、至誠は3年生が三人しかいないので全員に聞くらしい。

「優勝したら伊吹ちゃんも取材受けるかもよ」

「へっ!? いや私は取材する意味無くない!?」

「初心者が京王を5回4失点は普通に取材殺到すると思う……」

(もし取材とか来てもちゃんと答えられる自信無いんだけど)

注目されたらスカウトの目にも止まるし良いことではあるのだろうが、今の浜矢に平常心で受け答えをできる自信は無い。

「あんまり浮かれるなよ!」

「はっ、はい!」

妄想を膨らませていると灰原に釘を刺される。

(こんな浮かれてちゃ蒼海大には勝てないな)

浜矢は気合いを入れ直して明後日の試合に臨もうと決めた。

第17球 決戦! 蒼海大相模

決勝戦当日。ここ横浜スタジアムのスタンドは当然のように満員だ。

ネットやテレビでも中継されているので、この試合を観ているのは今ここにいる者だけではない。

この何倍、何十倍もの人数がこの試合の行方を見守っているのだ。

「人やば……」

「緊張しすぎて倒れないでよ」

「大丈夫……多分」

普通の人生を歩んできてこんな大舞台に立った経験などない浜矢は、過去最大の緊張を感じていた。

もし今躓いて倒れてしまった場合、自力で起き上がることは出来ない。それほど手足が震えている。

深呼吸をしてなんとか緊張を逃そうとしていると、突如として三塁側の観客席から歓声が湧く。

神奈川の名門・蒼海大相模の選手が入場したのだ。

当然、佐久間もその中にいる。

「相良さがるー！ 頼むよー！」

「佐久間も出場してー！」

「ここまで来たら優勝一択！」

相良と呼ばれた選手が観客に向かって手を振ると、その都度黄色い悲鳴が上がっていた。逆

逆に佐久間は一切客席の方を見ておらず、この二人のファンへの対応は正反対と言えるだろう。

蒼海大相模の選手がベンチに着くと同時に、至誠は千秋を中心として作戦会議を始める。

「遂に決勝だね……警戒するのはやはりエースの相良投手。フォークとシュートが武器の左の本格派投手です」

「リリースポイントが見辛いフォームが特徴だな」

「弱点はあるんですか？」

「特に無いが……フォークは捨てた方がいいかもしれん。変化量が多くてワンバンする事が多い、見逃せば逸らす可能性もある」

運要素がかなり強い作戦だが、運に頼らなければ勝てないくらい良い投手ということだ。

前日に全員で映像を見た。見たのだがこれらしい弱点を発見する事はできなかった。

ストレートのノビも変化球のキレもコントロールも、全てが一級品。

そのレベルでないと蒼海大のエースは務まらない。

「それと、伊吹ちゃん的には佐久間さんも気になるかな?」

「もちろん!」

「出てくるのは恐らく試合終盤……代打として出てくるよ」

「うち相手に投げてくるかな?」

「どうだろう……けどどこまで良い成績残してるし、もしかしたらあるかも」

佐久間は投球より打撃の方が評価されている。

それでも一年生で150kmのストレートを操るので浜矢にとってはかなりの強敵間違いなしだろう。

「打線に関しては、全員警戒して下さいとしか言えません」

「だよなあ……」

「打線強すぎて投げるの嫌なんだけど」

「私も嫌です、中上先輩頑張ってください」

蒼海大相手に浜矢を登板させたら余裕で二桁失点はするだろう。

至誠の中で蒼海大とともに張り合えるのは中上だけ、本人が嫌だと言っても全てを託すしかない。

「幸いにも後攻だ、まずはしっかりと守って攻撃に繋ぐぞ！」

「()まで来たたら絶対勝つぞ!!」

「オー!!」

至誠ナインが守備に散っていく。

絶対的王者・蒼海大相模か、古豪復活・至誠か。

大きくて重い期待を背負った二校の頂上決戦が、今幕を上げた。

蒼海大相模のオーダーは以下の通り。

一番セカンド 田中

二番レフト 角田

三番センター 西川

四番ファースト 山城

五番サード 菅沼

六番ショート 石☒

七番ライト 永井

八番キャッチャー 城田

九番ピッチャー 相良

蒼海大相模の一番打者田中は打率4割越え。

水瀬と比較するとマシに思われるかもしれないが、彼女は蒼海大相模のスタメンだ。長打力もある。

ただそれと相対する中上も防御率1点台のエース。

化け物打線と互角に渡り合える実力はある。

運命の第一球、中上が投げたのは浜矢が一度も見つた事のない変化球だった。

「オーライ!」

それでも田中は初球から積極的に打ちにきたので、まずはサクツと1個目のアウトを取る。

県外の高校ばかりと練習試合をしていたのは中上の変化球のデータを県内の強豪校、主に蒼海大相模に渡したくなかったから。

二番・角田への投球も、身内ですら全く見たことがない変化球ばかりだった。

一つがスライダー系だというのは浜矢にも分かったが、その球を投げられることを知らなかった。

相手もそれに戸惑っているのか三振に終わる。

しかしここままでだいたい手の内を明かしてしまったのが悪かったのか、三番の西川には追い込まれる前にストレートを叩かれて出塁される。

《四番ファースト山城さん》

蒼海大相模不動の四番、山城斎。

今年の県予選で高校通算50本塁打を達成した正真正銘のスラッガー。

メディア曰くドラフト1位は確実とのこと。

彼女が打席に入ると内外野は共に後退、外野は背中にフェンスが触れる直前まで下がる。

落ちる球から入ったこの打席、山城の放った打球は高々と舞い上がりセンター方向へ。

(え、これホームランじゃ……)

浜矢はそう思ったが、フェンスギリギリの所で糸賀がキャッチ。

あとボール一個分伸びていたらホームランだった。

浜矢は最悪の事態は避けられた事に安堵して中上の方を見ると、何やらドタバタしていた。

「山城怖い！　なんだよあいつー！」

「飛ばされすぎー」

「無茶言わないでよ! 縦スラあんなに飛ばされると思わないよ!」

ああ、アレは縦スラだったのかと納得。

彼女のメインの落ちる球はスプリット、それとは変化の仕方が違うように感じていた。

「そういえば、今日投げてた球種って何ですか? 私は見た事ないと思うんですけど」

「えっと、スラブとサークルチェンジ、あとはシンキングファストに縦スラかな」

「そんな色々投げてたんですね……」

やはり中上佳奈恵という投手は凄い。

多種多様な変化球を操れるのもそうだが、今までそれらを封印してこの成績を残していたことも。

攻守を交代して至誠の攻撃が始まる。

相良がマウンドに上がった瞬間、歓声が上がる。

投球練習をしようものなら至誠の攻撃時の応援よりも大きいと思われる声援が。

「コントロールいいな」

「シユートの変化量すぎ……怪我しそう」

「ちゃんと投げればシュートは怪我しないよ。曲げようって思ってたに捻るから怪我するんだ」

そもそも変化球というのは人によって握りやリリースの仕方が違う。

他の選手なら無理やり捻らなければ曲がらない場合でも、相良ならストレートと同じリリースでも大きく曲がる場合もある。

彼女はシュートという変化球に投げる事に適した身体をしていたのだろう。

特に何か工夫することも無く、大きな変化のシュートを手に入れた。

「悔しいけど、相良ってフォームも綺麗だしね。良いフォームの選手は良い球を投げるよ」

「確かにフォーム綺麗ですね」

「二つ一つの動きが繋がってるんだよね。高校レベルであんな完成されたフォーム、見たことない」

「見ていて楽しいフォームですよね」

投球集という動画があれば間違いなく延々と見ていられるフォーム、つまり見惚れてしまう。

浜矢と千秋は相良の投球練習を眺める。

「相良さんが左でよかった……内角挟られないで済むし」

「確かに内角のシュートは怖いよね、最近では絶滅気味な球種っていうのもあるし」

「確かにシュートを決め球にしている投手なんて最近見ないなあ」

投げ方次第では怪我をしないのに、怪我をしやすいというイメージが付き纏った結果絶滅気味になる。

それってなんか悲しいな、と浜矢は感じた。

まあ彼女もシュートを投げる気は毛頭無いのだが。

「初回から相良を打ち崩せるとは思うなよ? じっくり時間をかけて攻略していこう、先に焦りを見せた方が負けるぞ」

「こちらでも何か気付いたことがあれば言うので、とにかく粘って下さい」

「了解、任せといてよ」

本日の至誠のオーダーは以下の通り。

一番センター 糸賀

二番セカンド 菊池

三番ファースト 金堂

四番キャッチャー 柳谷

五番サード 山田

六番レフト 青羽

七番シヨート 鈴木

八番ピッチャー 中上

九番ライト 浜矢

「一巡目でどれだけ喰らいつけるかだな」

「ですね、最低でもバットに当てて貰いたいんですけど……」

「制球も良いから四死球も望めないしな」

糸賀の第一打席で今日の苦戦具合が分かる。

運命の決勝戦、最初の攻撃が始まった。

相良はゆつたりとした綺麗なワインドアップから左腕を振り下ろす。

「ストライーク！」

「うへー、ビッタービターの制球」

「ノビもありそうですね」

いきなりストレートを低めに決めてきた。

コントロール良し、ノビ良しの好投手。

彼女もドラフト1位は確実な選手、今年の蒼海大は例年よりも手強い。

「ストライーク！ バッターアウト！」

「由美香が手が出ないって……」

「変化球もコントロール出来てる、厄介だな」

あの糸賀が見逃し三振に仕留められた。

柳谷の発言通り、相良という投手は変化球であつてもお構いなしにコーナーに決めてくる。

それが打者からすればどれだけ打ちにくいか、投手からすれば投げるのが難しいか。

浜矢は同じ投手だから分かるが、彼女は間違いなく今まで出会ってきた中で最高の投手だ。

「うちも相良欲しかつたんだがなあ」

「スカウトしてたんですか?」

「断られたけどな」

相良は野球大国・大阪府出身。

数多の強豪校がこぞってスカウトをしたが、彼女が選んだのは神奈川の蒼海大相模。

理由は不明だが、噂では山城とチームメイトになりたかつたのではないかと囁かれている。

「相良さんと山城さんって仲良かったの?」

「いや、そういうのじゃなかったみたい。けどライバルだったんだって」

「だから同じチームに？」

「そう言われてるけど、あくまで噂だからね」

だが千秋は蒼海大に入学してからのインタビューを見る限り、信憑性は高いかもと付け加え。

「……ん？もしかして私は第二候補だったってことですか？」

「いや、その……」

「相良に断られたから同じ左の私が選ばれたって事ですか!？」

「……まあ、そうなるな」

「……相良にだけは絶対負けない」

中上が焚き付けられてしまった。

そりゃあ監督直々にお前は二番目だったんだぞと言われれば燃えて当たり前だろう。

「ぜーんぜん当たらん！」

「何あのコントロール！」

中上が相良に対して一方的にライバル心を燃やしてる間に、菊池と山田も三振して帰ってきた。

初回から三者三振、本当に素晴らしい投手だ。

「相良せんばーい!」

「素敵ー!」

「今日も勝つてくださーい!」

観客席からは相良へのラブコールが聞こえる。

「相良さんって何であんな人気なの?」

「あの蒼海大のエースっていうのもあるし、それに美人さんだからね」

「確かにそうだな……」

アイドルや女優と言われても違和感の無い顔立ちに加えファンサービスが良く、野球の実力も文句無しとなれば人気が出るのは至極当然だろう。

「しかも頭も良くて性格も良いらしいよ? 校内にはファンクラブもあるんだって」

「ええ……ドラマかよ」

ファンクラブがあるのも頷ける完璧超人。

彼女の欠点を探すが突然彼女のファンになって帰ってくるという都市伝説があるとかないとか。

「私はファンクラブなんてないのに……! 相良ー! 見てろよー!」

「どこで張り合ってるの……」

「熱いのはいいけど空回りすんなよー」

一体どこで張り合っているのか。

というより本人たちが知らないだけで、3年生組は校内に隠れファンクラブがある。ちなみに一番会員数が多いのは柳谷だ。

「今日の私は一味違うよ……悪いけど外野は暇になるよ！」

「私としてはそれでも良いですよ」

「同じく」

「センターには飛ばしてよ」

中上が本気になれば外野に打球は飛ばさせない。

浜矢と青羽は守備が苦手なのでそれでも全然良いのだが、守備が好きな糸賀は不満を漏らした。

なのでセンターにだけは飛ばすと宣言し、中上はマウンドに向かっていった。

「今日は一味違う」その言葉通りのピッチングを中上は見せた。

また見覚えのない変化球で次々と三振に切っつけていき、相良に対抗するように三者三振で終わらせた。

「相良にできて私にできない訳がない！」

「流石です……で、今の変化球は？」

「シユートとフォークもどきとチェンジアップ! あとドロップカーブも」

「完全に意識してるじゃないですか……」

シユートとフォークは完全に相良だ。

フォークもどきなのは、中上はフォークとナックルだけはどうしても投げられないから。

しかし対抗意識があるとはいえ本人の前で真似するような投球なんて、向こうはどう思っているのか。

そう思つて浜矢が蒼海大ベンチを見ると、思わず悲鳴が出てしまう光景が。

「ヒイツー!」

「浜矢? どした?」

「べ、ベンチ……相良さ……!」

「んー? うわっ」

浜矢の指先を追つて糸賀が蒼海大ベンチを見ると、相良が満面の笑みで中上のいる方向を見ていた。

笑顔だがあれは確実に絶対に怒っている、怖い。

特に美人が怒つた時の顔は怖い。

「こりや投手戦になりそうだなあ……」

糸賀がポツリとこぼした呟きは的中した。

4回まで相良はノーヒット、中上も初回のヒット以外はほぼ全員を三振に切った。

内容だけ見ると熱い投手戦だけに、事情を知らない観客は大盛り上がり。

本人たちは違う意味で盛り上がっているが。

「ほら皆！ 相良を打ち砕こう！」

「……中上がそう言ってるから頼むぞ」

「お、オー……」

あの灰原ですらも気圧されている。

温厚な中上がここまで熱くなるのは初めてだ。

全力で投げてくれていているエースのためにも、ここまでノーヒットに抑えられている屈

辱を晴らすためにも、この辺りで1点は取っておきたい。

第18球 伏兵登場

5回裏の至誠の攻撃が始まる。

打席に立つのは珍しくノーヒットの柳谷。

内角を挟るシュート、外角の見極めが難しいコースへのフォークで追い込まれる。

そしてラスト一球は、まさかのカーブだった。

それも中上の物と似た軌道の。

「相良ア〜!」

「めっちゃ煽られてるじゃん」

「したり顔でこつち見てますよ……」

中上と組んでここまでチームを勝ち上がらせてきた柳谷を、中上と似たカーブで三振に仕留めた。

そして直後の至誠ベンチを見た時の顔、これは完全に挑発している。

これには中上も憤慨するが、先に仕掛けたのは彼女だ。自業自得だろう。

「佳奈恵ごめん」

「いや、真衣は謝らないでいいよ。でも相良は許さない!」

「お互い意識しまくってんなあ……」
「泥沼ですね」

お互いがお互いの得意球で勝負するという、何とも見応えのある勝負が始まった。
(てか中上先輩はわかるけど、なんで相良さんもカーブ投げられるんだ?)

中上と似た軌道のカーブをいきなり投げられる相良に疑問を抱いたようで、浜矢は千秋に聞きに行く。

野球の事で疑問が浮かんだらとりあえず千秋に聞けばいいと思っただろう、その通りだ。

「相良さんって今までカーブ投げてきたの?」

「うーん……あんまり投げてた印象は無いかなあ」

「てことはほぼぶっつけで投げてるってこと?」

「うん、だから打とうと思えば打てる……かも」

そんな話をしてると、快音と歓声が聞こえてきた。

二人が慌ててグラウンドの方を見ると、二塁に滑り込んでいる山田の姿が。

「おお! 山田先輩打った!」

「沙也加のヒット久々に見たな」

「悠河も人のこと言えないよ」

「か、神奈あ……敵しいよ」

金堂内野手、地味に毒舌。

大人しそうな顔をしているし実際自己主張をすることは少ないのだが、口を開くと結構毒を吐く。

かなりストレートな物言いにしても二年生の仲が良いのは、本気で人を悪く言ってるのではないと理解し合っているから。

「翼も最近ヒット出てないよー」

「味方をヤジるのってどうなんですか……」

「んー、その方が尻に火が付きそうだし良いんじゃない？」

「そんな適当な……」

人によっては観客や相手に野次を飛ばされるよりもダメージを受けそうだ。

しかも金堂のように普段は優しい人間に言われると余計に。

菊池の言う通り尻に火が付いたのか、青羽も見覚えのあるカーブを叩いて先手を奪う。

「おっ、打った！」

「先制打ー！ ないばっちー！」

「沙也加脚おそーい！」

「私は悠河と違って長距離砲だから仕方ないんです」

「キャプテンは長打も打てるけど脚速いよ」

流星に柳谷と比べるのは可哀想だ。

山田だって普通に全国クラスのスラッガー、捕手のくせに俊足な柳谷が異常なのだ。

勢いに乗れると思ったこの回の攻撃だったが、相良もあのタイムリーからバットに当たることすらさせない投球で最少失点。

5回終了時点で1対0と息が詰まるような投手戦が続いている。

「向こうは中上を意識して崩れた、こっちはそんな風にはなるなよ!」

「任せて下さい! 三人で抑えてみせますよ!」

なんて言ったのがフラグになり、中上は山城に特大のソロホームランを打たれて同点とされる。

雲一つない青空に白い放物線が描かれていくのは美しい、これが相手側のホームランでなければ。

また、彼女もそれで目が覚めたのか後続はしっかりと絶って最少失点で切り抜ける。

「なーにが三人で抑えてみせますだ! 普通にホームラン打たれてるじゃん!」

「相良が見てると集中出来なくてさ……」

「どっちもどっちだな」

お互い意識し過ぎて1失点ずつ。

仲が良いのか悪いのか分からないが、見る方は正直面白いというのは浜矢談。

「球数も嵩んできたな……大丈夫か？」

「まだいけますよ！　というより相良が降りる前に降りたくありません！」

「そ、そうか……じゃあ頼むぞ」

また二の足を踏みそうな気がするが、灰原が送り出したということは今度は平気だと信じているから。

今までチームを引っ張ってくれたエースを信じないで誰を信じるのか。

6回裏の攻撃が始まったのだが、どうやら蒼海大相模側の様子がおかしい。

内野がグラウンドに集まっており佐久間も準備してるといふ事は、投手交代だ。

「そんな投げてたっけ？」

「えつと……80球は超えてるね」

「けど相良さんってスタミナあるでしょ？　なんでここで降りるの？」

「……多分、怪我かも」

「怪我？」

「確か去年の冬くらいに肘を怪我してた気がする」

プロ志望ということもあり将来の事を考えてドクターストップが掛かっている、それが千秋の予想。

ドクターストップを無視して続投させて再発、なんて事になってしまえば監督の責任問題になる。

エースの怪我を再発させたくないし、自分も叩かれたくない。だからここで継投。

《蒼海大相模、選手の交代をお知らせいたします。ピッチャー相良さんに変更まして、佐久間さん》

次世代のエース候補の登場に球場は盛り上がる。

だがそれと同じくらい、相良の降板を惜しむ声も聞こえてくる。

「佐久間さんはノーコンだから、真ん中以外は見送ろうね」

「了解」

制球を犠牲に球速を手に入れた、それが佐久間だ。

浜矢でも出塁くらいは出来るかもしれない。

「お願いします」

「プレイ！」

初球からフルスロットの豪速球、147km。

これが自分と同じ一年生の投げる球だと浜矢には信じられなかった。続くスライダーにも空振ってストライク。

変化球だが浜矢の最速よりも速い。

前評判とは違い全く制球も乱れていない。

なんて思っているると急に乱れ始めた。

いきなり外れに外れてフルカウント。

このムラの激しさが彼女を準決勝で投げさせられなかった理由。

佐久間玲という投手はボール球を好まない。

ノーコンのせいで外れるのはまだ納得しているのだが、勝負球にボール球を用いるのが好まないという意味だ。

彼女のその傾向を試合前に伝えられた浜矢は、一か八かど真ん中のストレートだけにヤマを張った。

佐久間が豪快なフォームから六球目を投じた。

白球は浜矢がヤマを張っていたコース——ストライクゾーンど真ん中に向かう。

(おっ、ど真ん中！)

確かに佐久間の球は一年生にしては速い。

だが今まで対戦してきた二・三年生の中には佐久間よりも速い球を投げる選手はいたし、何だったら相良の最速も150kmだ。

それに相良と比べて佐久間のストレートはノビがない、言ってしまうえば棒球だ。

相良が球速以上の速さに感じる球であれば、佐久間はその逆で球速の割には遅く感じる球だ。

ど真ん中のストレートだけにヤマを張っていた事もあり浜矢でも反応でた。

この絶好球に対してフルスイングで打ち返す。

すると今まで感じたことの無い感触と快音が響く。

「……へっ?」

「嘘だろ? いくな!」

「伊吹! 走れ走れ!」

白球が上空に高々と舞い上がり、浜矢は状況が理解出来ないまま走り出す。

鈍足の彼女が一塁に到達する辺りでも、白球はまだグラウンドに落ちてこない。

ここにいる誰もが打球の行方を追って息を呑む。

「は、入った……?」

白球が満員のレフトスタンドに飛び込んだ直後、様々な叫び声が聞こえてきた。

ある者は打率・182の至誠打線唯一の穴がホームランを打ったことに歓喜の声を上げ、ある者は打率・182の至誠打線唯一の穴にホームランを打たれたことに悲鳴を上げ、ある者はツーストライクからフルカウントまで持っていた挙句ど真ん中に失投した佐久間に対しての怒りを叫んでいた。

全ての声が浜矢と佐久間の二人に向けている。

二人の片方——起死回生の一発を放った浜矢は、実感の無いままホームベースを踏む。

「ナイスホームラン！」

「伊吹—— やっぱお前持つてるよ！」

「……ほんとに私がホームラン打ったんですか!？」

「今更!?! 本当に打ったんだって!！」

実際は客の反応やら何やらで自分がホームランを打った事は分かっていたが、まさか打率・182がホームランを打つなんて本人すら予想出来ていなかった。

「伊吹ちゃんないばつち！」

「いやー、ど真ん中に来たから思いっきり振ったんだけど……まさかホームランになるとは」

「運も実力のうち、調子には乗らないですよ」

「そんなの分かってるよ」

鈴井の言う通り、今のは運がかなり良かっただけ。

もし佐久間のコントロールが人並み程度だったなら、浜矢なぞ3球で仕留められただろう。

「速い球の方が飛距離は出るし、ジャストミート出来たらそりや飛ぶよね」

「でもホームランダービーと違って遅い球じゃない？」

「プロは遅い球も打てる人しかいないからね。本来は遅い球のほうがタイミングを合わせにくいんだよ」

「だからチェンジアップが魔球なんて呼ばれるんだしね」

球速が速い方がバットにぶつかった時の反発が大きくなり、その結果飛距離が出る。

逆に遅くて回転数の少ないチェンジアップのような球は遠く飛ばすにはパワーだけではなく技術が必要となる。

だからといって速くて回転数の多い球をホームランにしやすいかと言われるとそうでもない。

そのような球は正確に捉えるのが難しいからだ。

初心者で技術的にまだ未熟な浜矢が今ストレートに出来るのは、速さの割には回転数が比較的少なくて芯で捉えやすい球のみ。

つまり佐久間の投げるノビのないストレート。

「けど佐久間さん、調子は良さそうだね」

「さっきのは偶々だったみたいだね」

「打ててよかった……」

佐久間は豪速球とスライダーで糸賀と菊池を三振に切って取る。

さつきと真ん中に来たのがおかしかっただけで、本来の投球はこつちだ。

「まさかこんな展開になるとは思ってたが……1点リードで最終回だ。しっかり守って神奈川の頂点に立とう！」

「ハイっ！」

ホームランのインパクトで忘れられかけていたが、ここを抑えれば優勝だ。

連合チームではなくなって迎えた初めての大会で優勝、しかも選手は九人となればかなりの快挙だ。

真紅の優勝旗と全国の話題を搔つ攫うため、ナインは最後の守備に散る。

相良を意識しなくなった中上は無敵だ。

スプリット、カーブ、スライダー、ツーシーム。

いつもの四球種を駆使して打者を翻弄していくスタイルは見ていて安心感を覚える。七番永井はショートゴロ、八番城田も三振。ツーアウト走者無しで迎えた最後の打者は。

《九番ピッチャー佐久間さん》

打者としての佐久間玲が右打席で構える。

先程の失点を取り返すために気合が入っている、最後の打者に相応しい相手だ。

初球、変化の大きいスプリットにフルスイングで立ち向かう。

「ファール！」

「うわ、打球はや……」

「浜矢ー！ バックバックー！」

「あつ、はい！」

佐久間相手にも山城と同様のシフトを敷く。

フェンスギリギリまで下がってホームラン未遂の長打を防ぐシフト。

一年生でここまでの飛距離を警戒されるのは彼女くらいだろう。

あわよくば釣ろうと思ったツーシームを見送られてボール、次はボールからストライクになるスライダーを見逃してツーストライク。

恐らく次が勝負の一球、マウンドに立つ中上の背中からその雰囲気を感じ取った浜矢

は集中する。

中上が最後に投じたのは、先程まで相良に真似されていたカーブ。

左打者の頭部付近から急激な変化をして、ストライクゾーンを掠めるようにして決まるその球を佐久間は逃さなかった。

持ち前のフルスイングで捉えられた白球はライナー性の打球となつて、ライトを襲う。

「つて、ほんとにこつち来んのかよ！ オーライ！」

いつ打球が飛んできてでも捕れる準備はしていた、何となく自分の所に飛んできそうな気もしていた。

だけど本当に自分の方に打つ奴がいるか。

そんな事を考えながら、浜矢は打球に向かって一直線に進む。

彼女は外野の守備が極端に苦手で、千秋ですら苦笑いを浮かべるレベルだ。

だがそれはフライの処理だけ。むしろライナー性の打球の際には、身体が本能で動く。

前に倒れ込みながら白球をグラブに収める。

近くに駆け寄ってきた塁審にグラブの中を見せると。

「アウトー!!」

「よっしやあ!!」

浜矢は最後の打球を落とさなかった。

ウイニングボールを彼女が掴んだこの瞬間、至誠高校の八年ぶり二度目の全国大会出場が決まった。

第19球 エースの誓い

既にマウンドには仲間達が集まって喜びを分かち合っている、浜矢も50m7.8秒の鈍足（野球選手基準）を飛ばしてマウンドに向かう。

千秋と灰原、そして小林もベンチから飛び出して歓喜の輪に加わる。

「中上先輩！ やりましたね！」

「伊吹ー！ ナイスキャッチー！」

「沙也加と翼も、よくやったな！」

「つ、ここまで野球やってきて、至誠に入って良かったです……」

青羽がそう言つて泣き始めた瞬間、全員が一斉に泣き崩れた。

一番泣かなそうな人が泣いたら全員が泣く法則。

ひとときしり歓喜の涙を流した後、整列して良い戦いをしてくれた蒼海大相模の選手と握手を交わす。

蒼海大の選手も悔しさから泣き腫らしたようで、目は充血し鼻も真っ赤だ。

特に相良は一番泣いていた、というより今も号泣していて仲間にも肩を支えられてい

る。

逆に佐久間は泣いていない。決勝戦で敗戦投手というのは精神的に辛いだろうに。校歌斉唱と監督とキャプテン柳谷のインタビュも終え、あとは帰るだけとなった。蒼海大に挨拶に向かった中上達を待っている間、浜矢は落ち着かないので周囲をうろついていると。

「おい！ 浜矢伊吹！」

「ひい、フルネーム……!?!」

振り向くとそこには佐久間が立っていた。

睨みつけるような表情、そして腕組み。

結城や水瀬とはまた違った威圧感を感じる。

「ホームランを打ったのはお前か」

「は、はい……すみません……」

「私の球を打っておきながら何で謝るんだよ。いいか、よく聞け」

「な、なに……?」

「……必ず勝てよ。初戦なんかで負けたりしたら容赦しない、それと連絡先教えろ！」

急に話しかけられていきなり捲し立てられて、状況を把握できないまま二人は連絡先を交換した。

打ってしまった相手だどう接したらいいのかと浜矢が気まずさを覚えていると、佐久間は右の拳を突き出した。

「来年も勝ち上がったってこい！ お前を倒すのは私だけだ、負けるんじゃないぞ！」

「……お、おう！ 言われなくてもそのつもりだ！」

「いい返事だ。私は来年までもっと強くなる、覚悟しとけよ！」

「ああ！」

佐久間の言葉に勢いだけで言い返したが、今のは一体何だったのだろうか。

浜矢が困惑していると、近くで見ていた鈴井が声をかける。

「よかったね」

「なにが？」

「初めてのライバルが出来たじゃん」

「ライバル……」

佐久間のさつきまでの発言、浜矢をライバルだと認めてくれたと考えれば辻褃が合う。

「遠回りすぎんだよ〜！」

「ライバル認定なんて、そんな直球に言うようなものでもないでしょ」

「だからといってアレは分かりにくいって！」

「そう？ 結構分かり易かったと思うけど。特にお前を倒すのは私だつてところ」
あんな台詞、余程の戦闘狂でもない限りライバルだと認めている相手にしか言わない
だろう。

「……来年も、また戦いたいな」

「だな」

今度は実力で佐久間を打てるようになりたい。

そして投手としても対戦して抑えたい。

その為には今よりも力を付けなければいけない。

(帰ったらくさん練習しよう)

激闘が終わったばかりだが、試合直後というのはアドレナリンが大量に出ている状態。
身体は疲れていても心はやる気なのだ。

将来のエース候補が再会を誓い合っている頃、現在のエース中上は蒼海大のバス付近
まで来ていた。

相良というブーストがあつたとはいえ、蒼海大打線を相手に1失点は自画自賛したく
なる出来だった。

しかし、気掛かりがある。相良だ。

降板した時のあの悔しそうな顔、試合終了の瞬間に普段の澄まし顔が崩れ、周りの目なんて気にせず泣きじやくっていた姿を見たら、居ても立っても居られなくて歩き出していた。

蒼海大のバスとそこに集まる選手達が見えた。

「あの、お疲れ様です」

「お疲れ様です、もしかして相良ですか？」

「はい」

「おーい、陽菜！ 向こうのエース！」

出迎えてくれたのはキャプテンである山城。

既に気持ちを切り替え、後輩達を励ましていた。

同じ最上級生として見習うべき姿がそこにあった。

「……どうも」

「お疲れ様、いい勝負だったよ」

「それを言うためだけにわざわざ来たの？」

相良は不機嫌そうにバスの中から出てきた。

それもそうだろう、彼女からすれば試合後にわざわざ煽りに来たと思えないか

ら。

「そうじゃなくて、何て言えばいいんだろう……まだ別れなくなかったというかさ」

「は？」

「いや本当に自分でも何言ってるか分からないの！　けど、相良ともう戦えないのが寂しくて……」

気が付いたらここに居た。

そう言うのと少しの静寂の後、小さな笑い声が。

「本当に何言ってるか分からないわよ、けどそうね……私も同じ気持ちかも」

「えっ……」

「何で先に言ったほうが驚いてるの？　貴女が初めてなのよ、投手のライバルだと思えた相手は」

山城がライバルだという噂は聞いていたが、思い返せば今まで投手としてのライバルの存在は聞いた事がなかった。

「私はライバルだった斎と同じチームになればそれで良かった、自分より優れた投手なんて同世代にはいないと思ってたから」

「それは間違ってるよ、相良より良い投手なんてこの世代にはいない」

「私も今日までそう思ってた。けど中上、貴女がいたのよ」

「……………」

中上は相良の言葉を素直に受け取れなかった。

自分は彼女より良い投手ではない。勝てたのは山田や青羽、そして浜矢が打ってくれて、柳谷がリードをしてくれたからだと思っっているから。

「真似されるし同じタイミングで失点するし、最初は本気で苛ついたけど……それが楽しかった」

「私も真似されたんだけどね」

「そんな風に、相手を意識して投げた事なんてなかったから。負けたけどすごく充実感があるわ」

「相良にそう言っただけで貰えるなんて嬉しいよ」

県内最高投手の相良に褒められる喜びを味わえるのは、唯一彼女に勝った中上だけの特権だ。

「……だから、貴女と今まで出会えなかったのが悔しいのよ」

「私もだよ、もっと早く出会いたかったな」

「もう戦えないのが残念だけど、貴女はプロは目指しているの?」

「もちろん、相良もでしょ?」

「ええ……なら、次に勝負するのはプロの舞台ね」

お互いプロ入りを目指している選手同士。

同じチームになる確率は低い、ならまだ戦えるチャンスはある。

「貴女と投げ合つて、今度は私が勝つ」

「……次も私が勝つよ」

顔を見つめ合い、お互いの熱意をぶつけ合う。

必ずこの人にだけは負けたくない、そんな人が初めて出来た。

「蒼海大の誇りも背負つて、全国でも思い切り戦つてきなさい」

「分かった。一つでも多く勝つてくるよ」

「この私に勝つたんだから、不甲斐ない投球なんてするんじゃないわよ」

「私がそんな投球をするように見える？」

売り言葉に買い言葉。それが妙に心地良い。

ライバルとはそういうものだろう。

「まあ期待してるわよ、優勝校のエースさん」

「期待しててよ、準優勝校のエース様」

最後に想いを込めた握手をして、お互い自分のチームメイトの元へ帰る。

必ず勝つと誓ったから、もう後ろは振り向かない。

蒼海大の誇りと至誠の夢を左腕に乗せ、中上はこれからも戦い抜く。

「お、佳奈恵戻ってきた」

「二人とも……どうしたの？」

「佳奈恵が蒼海大に挨拶に行くって言うからさ、喧嘩にならないか心配でついてきた」

「えっ、てことは今の会話……」

「ごめん、聞いちゃった」

ウインクされながら謝られても説得力無い。

けど、中上は糸賀のそういう所が好きだ。

「相良って本当にいい人だったね」

「疑ってたの？」

「別に疑ってたわけじゃないけどさ、あそこまでいい人だとは思ってなかった」

「ちよつと煽られたけどね」

けどやる気の出る心地良い煽りだった。

喋り方も綺麗だし、煽りに不快感が無い。

あの話術は一朝一夕で身につくものではない。

育ちの良さやメディア露出の多さが感じ取れた。

「勝たないと、全国でも」

「蒼海大に勝ったのがマグレだと思われないうにしないとね」

「私が抑えるから、二人は援護頼むよ」

最強エースがそう言うのと不動のリードオフガールは親指を立て、高校No. 1捕手は静かに頷いた。

一試合でも多くこのメンバーで野球をしたい、その為にはやはり勝ち上がり続けるしかない。

（私の初めてのライバルとなってくれて、私を初めてのライバルと認めてくれてありがとう相良。相良の分まで私達は、私は勝ってくるよ）

蒼海大相模のチームカラーのように青く染まった空を見上げ、中上はそう誓った。

第20球 祝勝会

八年ぶりに神奈川の頂点に立った至誠ナインは、我らが灰原監督の奢りで焼肉屋に来ていた。

「ガンガン食って体力回復しろよー！」

「あぎーっす！」

「お米頼もうかな」

「神奈お米派なんだ、私は肉だけ派〜」

決勝が終わったので抽選会まで一週間近く休める。

ここまで過密日程をこなしてきた彼女達にとつては、天国のような時間だ。

大量の肉と米をわしわしと胃に詰め込んでいく様子はまさしく運動部と言えるだろう。

「まさか今年優勝出来るとは……」

「そうか？ 私は今年逃したらもう無理だと思ってたけど」

「監督ー！ 私たちにも期待してくださいよー！」

「一・二年が期待出来ないんじゃないやなくて、今の三年が頼りになりすぎるからだよ」

この三人は準々決勝辺りから試合を観に来るスカウトの人数が増えていた。

特に決勝戦直後のインタビューでは、何十人もの記者が三人に群がっていた。

「多分、後にも先にもこの世代が一番総合力高いんだろうな……」

「それだけの面子が揃ってますからね」

「守備力、攻撃力、投手力……全てを取ってもバランスの良いメンバーだからな」

センターラインは堅いし、クリーンナップは強いし、投手はエースの中上に加えて浜矢もそこそこの成績は残せた。

際立った長所というのは無いが、かといって短所も無いバランスの取れたチームだ。

「他県の代表も錚々たる顔ぶれだったな」

「大阪桐葉とうようは勿論、西東京の祥雲しょううんや宮城の東北学園といった強豪校が勝ち上がってきて

ますもんね」

高校野球を普段見ない浜矢でも聞いた事のある野球強豪校ばかりだ。

敵は四十八校、どこも県予選を勝ち上がってきた。

今まで以上に厳しい戦いとなるだろう。

「けど、そういうところにも勝つしかないよな」

「そうだね！　至誠なら良い勝負はできると思う」

「あの蒼海大に勝てたんだからな」

藤銀、京王義塾、蒼海大相模と神奈川の名だたる強豪達を倒してきた。

実力もチームワークも磨かれた自信がある。

それを全国の舞台上で発揮すればいいだけ。

「監督は注目選手とかつていますか？」

「やっぱり大阪桐葉の永谷かな」

「どんな選手なんですか？」

「簡単に言うと佐久間の強化版」

「うわあ……絶対ヤバイやつじゃないですか」

佐久間が一年生で、その永谷という人物は三年生。

二年分の違いで体格も佐久間より良いし、パワーも桁違いだ。

「ちなみに現在通算84本」

「はっ!? 84!?」

「練習にも12球団のスカウトが見に来てるんだと」

「そりやそうでしょうね……」

浜矢は結城の40本や山城50本で驚いていたが、全国にはその上を行く者がいた。多少の試合数の差はあれど、80本という数字はそう簡単には超せない。

「キャプテンは今何本ですか？」

「えーと……確か30は超えてた気がする」

「38本ですね」

「だって」

柳谷だって十分凄いののに、永谷という選手はその倍以上の本塁打を放っている。

ただ柳谷の場合は連合チームでやってきてあまり練習試合も出来なかった事が影響している。

同じ試合数をこなしていた場合、恐らく彼女も80本打っていただろう。

「これは祝勝会ではあるけど、反省点がある奴はそこもちゃんと全国までに自覚しておけよー」

「反省点かぁ……私は打率かな」

「神奈は5割超えてるでしょ……」

「6割切っちゃったから」

ストイックというか何というか。

5割で不満なら、208の菊池と、217の浜矢、そして、240の山田は一体どうなってしまうのか。

「伊吹ちゃんは結局2割ちよつとだったね」

「うっ、その話は……」

「けど蒼海大戦、良いところで打ってくれたから……」

「そうそう！ ちゃんと仕事はしたよ！ てか投手としてはそこそこ良いでしょ！」

「そこそこどころか、かなり良いよ？」

19イニングを投げ8失点の自責点7、防御率2.58。

奪三振は20で奪三振率7.37というのも良い。

初心者とは思えない好成績を残している。

「鈴木は打率どんくらい？」

「4割5分5厘」

「一年で4割超えかよ……」

本当になぜ入部の際に打撃は自信が無いというような発言をしていたのか。

彼女の打撃に欠点があるとすれば、この打率で本塁打は無しという点だけだ。

「美希ちゃんはチーム3位の打率だからね、頼りになるよ〜！」

「ん？ 2位は？ 1位は金堂先輩だろうけど」

「キャプテンが5割ちようどで2位だよ」

「そんなに打ってたんだ……」

いつも打っているイメージはあったが、まさか5割も打っているとは思っていなかった。

因みに不動の一番打者である糸賀は、391で4位。

「チーム打率はどんなもん？」

「343で全国出場校の中では真ん中くらいかな」

「これで真ん中なの……？」

「高いところは4割超えてるからね。それこそ大阪桐葉とか」

全国は浜矢の想像より凄い選手が揃っている。

至誠も打撃は悪くないのだが、打撃に特化しているかと言われると別にそうでもない。

まあチーム打率に関しては主に浜矢と菊池の二人で盛大に数字を落としているのだが。

「早く見たいなあ〜！ 全国の有力選手！」

「抽選会まで我慢してね」

「一回戦はどこと当たるかな」

「予選と違って弱い高校なんてないし、どこと当たっても正直同じだと思う」

「それもそうだな……」

試合数には差があれど予選を勝ち上がってきたというのは全チーム共通、全国大会において楽な相手などいないだろう。

「今年はダークホース枠とかあるの？」

「東東京代表のディーバ学園かな、ここ最近どころか今まで1度も全国出場をした事がない高校だよ」

「何だったら野球部が出来たのだって何年か前の話らしいよ」

「へえ……指導者が良いのかな」

「私もあんまり詳しくはないんだ、今度調べるね」

創設したばかりの野球部が全国大会に出場。

東京という激戦区で、推薦で入学した選手も少ないであろう学校がこの結果は素晴らしい。

「で、今年の優勝候補は？」

「祥雲か大阪桐葉を予想してるところが多いね、私も同意見だけど」

「絶対的エースがいるとか？」

「二校ともエースがいて、更にもう一人安定感のある投手がいるね。それに加えて桐葉は圧倒的な打力が、祥雲は堅い守備力があるよ」

1点を取るのが難しい祥雲と、打ち勝つのも抑えるのも難しい桐葉。

浜矢は決勝がその二つになったら面白そうだと考えてしまったが、自分だって全国制覇を目指しているのだからいつまでも観客気分ではいられないと気を引き締める。

「早く抽選会にならないかな」

「それさつき美月ちゃんが言ってたよ」

「私もなんか有力選手に会いたくなっちゃった」

「だよな！ サインとか貰いたいよね!？」

「え、いやそれは別に……」

浜矢はミーハーというわけではないし、それにプロでもない選手にサインを頼むのはどうも気が引けてしまうのだ。

現時点でプロに注目されているような選手は既にサインを考えているし頼まれるのにも慣れているから失礼のないようにすれば意外と断られないのだが、彼女はまだその事を知らない。

「とにかく、どこと当たってもいいように練習頑張ろうね!」

「はーい！ キャプテン、この後受けてもらえませんか?」

「ん、良いよ。二人はどうする?」

浜矢の頼みを快く引き受けた柳谷は、中上と青羽にも声を掛ける。

「私は昨日結構投げたから今日は休むよ」

「……すみません、打撃を鍛えます」

中上は昨日の試合で完投したので今日は肩肘を休めたくて、青羽は予選で思うように打てなかったので打撃練習を行いたいとの事で断る。

つまり今日は浜矢が柳谷を独占できる日だ。

全国の前に正捕手を独占して投球練習が行えるのは、とても良い経験になることだろう。

第21球 抽選会、再び

全国大会の抽選会当日。

ここまで来たチームの主力ともなるとプロ注目が多く、浜矢の隣にいる千秋は大興奮。

忙しなく視線を動かしては時折、声にならない叫び声を上げている。

「せんしゅー落ち着こうぜ……」

「落ち着いてなんかいられないよ！ プロ注目選手がこんなに沢山……！」

「伊吹ちゃん、諦めよう……」

鈴井が匙を投げるのは相当だ。

とはいえこの好奇心があるから相手のデータを細かく分析したり、突破口を見つけ出せるのだが。

「ほら、早く座って。そろそろ始まるぞ」

「はいっ！」

「すみません……」

柳谷に促されて三人は席に着き、初戦の相手を決める大事な抽選が始まった。

キャプテンである柳谷がくじを引いてそかに記された番号を読み上げる。

《至誠高校、20番》

20番。対戦相手はまだ引いていない。

次々と各都道府県の代表者がくじを引いていき、遂にその瞬間が訪れた。

《神聖ディーバ学園、19番》

なんだその校名は……と思った者が多かつた。

神聖と言うのだからミッシヨン系の学校なのかと思いきや、その割には制服はセー

ラー服ではないごくごく普通の制服だ。ある一点を除けば。

(うん、あの変なマントみたいなの以外は普通だな)

何故か部員全員が羽織っているマントのような物以外は普通だ。

色が純白という事もあり軍服のようにも見える。

『祥雲学院、21番』

『大阪桐葉高校、22番』

優勝候補二校の対決は初戦で実現してしまった。

他の高校からすれば優勝候補の片方が消えるので大変有り難いが、当人達からすれば

堪ったものではないだろう。

因みに至誠が初戦に勝った場合、この二校の勝者と二回戦で激突することになる。

一回戦でダークホース枠、二回戦で優勝候補と戦わなければならないのは運が悪すぎる。

しかし結果は変えようがないので、他の部員たちは柳谷に一瞬だけ冷たい視線を送っておいた。

あまりにも対戦相手が悪すぎることで以外は無事に終わり、会場の外でこれからについて語り合う。

「初戦の相手はディーバ学園か……どんなチームなんですか？」

「実は殆ど調べてなくてな、打撃型のチームという事は分かってるんだが」

「でしたら私が。神聖ディーバ学園、名前からも分かる通りちよつと変わった高校です」

「変わった？ ミッション系だと思ってただけ」

「ううん、全然そういうのじゃないんだよ」

ミッションスクールではないが制服がかなり特徴的となると、考えられるもう一つの可能性は。

「……まさか、厨二病？」

「ホームページとか見る限り、多分そう……」

ディーバ学園のホームページは徹底されている。

校章やら言い回しやらが本当に厨二病を連想させるような物で、厨二病を患っていない中学生が見たら驚くことだろう。

「出場してる選手は殆ど上級生なんだけど、中心となっている選手は一年生三人です」
「一年が中心？」

「はい、元々出来たばかりの野球部という事もあり、あまり強くはなかつたんです。けど今年、恐らく推薦で入学してきた一年生が予選で大活躍して全国まで連れてきたみたいです」

弱小校なので一年生でもチームの中心人物となるのは容易いが、それで全国に連れて行けるのはなかなか出来ることではない。

千秋はその中心人物の三人の解説を始める。

「まず一人目はセンターの飛鷹さん。走攻守三拍子揃った名選手で、特筆すべきはその得点圏の強さ。予選での得点圏打率は5割を超えているよ」

「得点圏5割!? 投げたくないなあ……」

主に打順は一番か三番を打つ事が多い飛鷹。

走攻守全てに隙が無く、中学時代からスカウトの視線を集めていた名選手だ。

「次にサードの斑鳩さん。ディーバの人らしく打撃特化の選手です。予選ではグラウンドスラムを含む二本のホームランを放ち、チームトップの打点を挙げています。守備は苦

手だし確実性は高くないんですけどね」

「沙也加みたいな奴だな」

「翼も人のこと言えないだろー!」

だがサードという事を考えると山田だ。

飛鷹が得点圏5割なのに打点は斑鳩がチームトップなのは打順が影響している。

先程も言ったように飛鷹は一番を打つ事もあるが、斑鳩は四番固定だった。

「最後にエースの大鷲さん。緻密なコントロールとチェンジアップが武器の技巧派投手で、防御率は2.39。反面球質が軽いのか被本塁打は四本、そしてこの人も打撃が良いです」

「制球が良いチェンジアップか……打ちにくそー」

「けど被本塁打が多いなら打てるかもな」

個性が爆発している三人だが、全員に共通しているのは一年生とは思えない成績を残していること。

「打撃戦になるのは明白だ。どれだけエラーを減らせるか、チャンスに物に出来るかが勝敗を分ける」

「帰ったら守備練習を重点的にやりましょう!」

「おっしや! やるぞー!」

「私ももつと守備鍛えるぞー!」

「悠がこれ以上鍛えたら外野の仕事が無くなりそうだから程々にねー」

そんな話をしながらバスに乗り込み、学校へ帰る。

デーバに勝つたら次は祥雲もしくは桐葉。

厳しい二連戦になるのは分かりきっている。

「そーいや祥雲の注目選手聞いてなかったな」

「一年生エースの神田さんかな。投打共に超一流、防御率は1点台で打率も4割弱。本塁打も二本と大活躍だったよ」

「何でこの世代化け物しかいないの?」

「そりゃ黄金世代って呼ばれてるからね」

鈴井曰く、中学生の頃からこの世代は黄金世代と呼ばれていたらしい。

投手野手共に有力選手ばかりで、全員の進路に注目が集まっていたとのこと。

「神田さんと言えばやっぱりその育ちだよな。両親が医師をやっている、お姉さんは現役のプロ野球選手!」

「現役……まさか、朱里じゅりさん?」

「正解!」

「嘘だろ?! あの朱里さんの妹?!」

大阪オーロックス所属の二塁手・神田朱里。

打てば3割30本100打点、走れば30盗塁、守ればゴールデングラブの生きるレジェンド。

今の日本球界でトップの実力を持つ選手と言っても過言ではない。

その神田朱里と実の姉妹なのが祥雲学院のエース・神田というわけだ。因みに10歳差姉妹だ。

「頭脳明晰、容姿端麗……それに性格も良いみたいだよ」

「……相良さんみたいだな」

「同じ左だし、確かに似てるよね」

「神田の話か?」

「うわっ、監督!」

神田の話をしていると、灰原も前の座席から振り向いて会話に混ざってきた。

「懐かしい名前が聞こえたもんでな」

「懐かしい……?」

「ああ、私と朱里は同じ年だからな」

「そうだったんですか!」

「そう。朱里は私が唯一、高校でもプロでも勝てないと思った相手だよ」

守備も打撃も走塁も全部アイツには敵わなかった。

そう言つて少し寂しそうに、けどどこか清々しい表情で灰原は言う。

「朱里さんの妹さんも知ってるんですか？」

「翠嵐だな。小さい頃しか知らないが……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：可愛かったなあ」

「神田、翠嵐……」

自分と同じ年でそんな規格外の選手がいるなんて知らなかった。早く会いたい、早く戦いたい。

浜矢は必ず初戦を突破しようと心に決めた。

「あともう一人、同じく一年生で正捕手の孤塚志黄さんもいるよ」

「一年で正捕手かあ」

「打率こそ伊吹ちゃんより低いけど、高い守備能力と巧みなリード、それと強肩が売りの選手だね」

「え、私より打率悪いの？」

野手専任で浜矢より打率が悪いのは相当だ。

それでも正捕手を任されているという事は、よほど投手の能力を引き出すのが上手い

のだろう。

「神田さんとは幼馴染らしいよ」

「へー！ だから正捕手なのかな」

「かもね、気の知れた相手が受けてくれるならかなり投げやすいと思うし」

「だから防御率1点台なのかなあ」

孤塚のリードも確かに良いが、それ以上に神田の実力が圧倒的だということを経験は
まだ知らない。

バスに揺られて学校に戻り、全国大会に向けての練習開始。

打撃を鍛える者や守備走塁を鍛える者などに分かれるが、投手陣はマウンド付近に集
まっていた。

「投手陣は実戦形式のフリーバッティングをしよう。柳谷と……山田！ 相手してや
れ」

「はい」

「任せました！」

「よりにもよってその二人ですか……」

「強い奴と戦わないと成長できないだろ？」

それはそうだが、この二人を相手に投げろと言われて嫌がらない投手は居ないだろう。

「あれ？ キャプテンが打つ時のキャッチャーって……」

「私が務めよう」

「監督が!?! うわ〜! レアだなあ」

「浮かれて手元狂うんじゃないぞ」

あの灰原麗衣選手に受けてもらえると分かった途端、浜矢は嬉々としてマウンドに向かう。

これだけで至誠に入学した価値はあるだろう。

「じゃあまず柳谷から!」

「はいっ」

柳谷はミート力もパワーもあるが、厄介なのは内野安打に出来る走力も兼ね備えている事だろう。

まあこの勝負で彼女が内野安打を狙うとは思えないので、浜矢が意識するのは甘いコースに投げないという事だけだ。

(いきなり内角のスライダーか……)

手元狂うなど釘を刺していたのはこういうことだ。

先輩、それもキャプテンに初球から内角なんて怖いが、監督の指示なら投げる以外の選択肢は無い。

内角攻めをする時はボールになってもいいから胸元を挟る、死球を恐れて内に入るのが一番駄目なパターンだ。

「ボール！」

「良い球きてるぞー！」

仰け反らせてワンボール。

普通に練習で味方に投げるような球ではない。

（次はアウトローの直球か）

インハイで仰け反らせてアウトローに投げる。

スタンダードな配球だが、裏を返せば効果があるということ。

（外れると一気に不利になるから丁寧に投げなきや）

ボール先行になると打者は思い切り振れるので被弾する確率が高くなる、なのでこの一球は大事にしないといけない。

浜矢がきつちりとアウトローにノビのあるストレートを投げ込むと、柳谷は迷わず振り抜いてきた。

「ファール！」

「ひい……いわ……」

並の打者なら当てることすら難しいが、相手は柳谷。手を出すし何だったら当ててくる。

もう少しタイミングが速ければヒットだった。

(次は……カーブを見せ球か)

インローに外れるカーブを見せる。

相変わらずカーブは見せ球くらいでしか使えない。

それでもコースの際に投げればたまに振ってくれる人もいるが。

(ツーシームで詰まらせる！)

柳谷ならそんなの関係無しに打ちそうだが、逃げていては何も始まらない。

全力で腕を振り抜いて最高の球を投げれば、奇跡が起こるかもしれない。

内角のツーシームで詰まらせる。

それが二人のプランだったが、柳谷はいとも簡単に打ち返してしまった。

しかもそれがライト前へのヒットになった。

「くそう……」

「伊吹、良いボールだったよ」

「柳谷相手にホームランを打たれなかった。それだけで成長したのは分かっただろ？」

「確かに……」

前までの浜矢ならフェンスまで飛ばされていた。

それを単打に抑えられたのは紛れもない成長の証。

全国屈指の強打者が相手なんだから、何も打ち取らなくても良い。

単打なら勝ちくらしいの気持ちで投げればいいのだ。

「ただやっぱ落ちる系の球が欲しいな……」

「落ちる球……フォーク系ですか？」

「だな、浜矢の球速を生かすならスプリットかフォークだけど……大会後にしようか」

大会前に変化球を覚えようとしてフォームを崩してはいけない。

しかもフォーク系は肘や指先に負担が掛かるのもあり、もしかすると怪我をしてしま
うかもしれない。

そのため、新変化球の習得は大会後となった。

「一打席勝負が投手有利とはいえ、柳谷を単打に仕留めたんだ。自信を持っていいと思
うぞ」

「はい！ これなら全国の強打者相手にも立ち向かえそうです！」

この練習は野球の実力を付けるのが目的ではない、メンタルを鍛えるためのものだっ

たのだ。

大会が始まって、全国の強打者にずっと怯えている訳にもいかない。

この経験を糧に大会に挑めば、きっと全国でもある程度の成績を残せるはずだろう。

第22球 襲来のディーバ

とうとう全国大会の幕開けだ。

初戦は厨二病疑惑のある†神聖ディーバ学園†。

一年生三人が中心選手という元弱小校で、今大会のダークホース枠。

「飛鷹と斑鳩をどう抑えるかが鍵だな……」

「中上先輩、頼みましたよ」

「なんとか5点以内には抑えるよ」

ここから二試合は中上と浜矢の継投。

連投なのでいかに球数を少なく出来るかが肝だ。

「ディーバの選手ってどんな感じなのかな」

「フツ……我らに与えられし名を呼んだか？」

「な、何だこの喋り方……」

声は低音で格好良いのだが、妙に厨二臭い喋り方に浜矢の背筋がゾワつとした。

「神聖ディーバ学園一年、飛鷹涼風^{すずか}！」

「同じく一年、斑鳩雪風^{いかるが}……」

「さらに同じく一年！ 大鷲千晴だよ！」

各々のカッコいいと思うポーズを決めながら登場してきたのは†神聖ディーバ学園の一年生だ。

ただ、登場の仕方が余りにも酷すぎるせいでこの場の空気が凍りついてる。

「フツ、この溢れ出る波動オーラに畏怖したか……？」

「普通に引いてるんだと思う……」

「それでこそ頂点を目指せし者の集い……！ どちらが神の裁きを受けるのか、愉しみにしているよ」

「神の裁きって……普通に負けるって言えよ」

何も考えずに浜矢がそう返すと、ディーバの三人は目を見開いて彼女の方を見る。

「生き別れし同士……!?!」

「同士じゃない！ 私はもう患ってないわ！」

「もう？ てことは伊吹ちゃんって、元厨二病？」

「あつ……いや、その……」

この歳で厨二バレは精神的にキツイ。

確かに彼女は厨二病を患っていたが、ディーバの三人と違って既に完治している。

まだ患ってるこの三人とは違うんや！ というのが浜矢の心からの叫び。

「なるほど、同士討ちか……心苦しいが我等の信ずる神がこの運命を定めたのだ、従うしかあるまい」

「だから同士じゃない！ あと決めたのは神じゃなくてクジ！」

「付き合ってくれてありがとうね、他校の人に言ってること分かってもらえるの初めてなんだ」

この三人の中で大鷲だけは普通に喋る。

斑鳩は無言でずつと腕を組んでいるが、あれはカッコつけるタイプの厨二病だ。

飛鷹は一番スタンダードな厨二病。

「ちなみに私は変化球に名前付けてるタイプの厨二病だよ」

「ヴツ……」

「伊吹ちゃん!？」

「せ、せんしゅーありがとう……」

大ダメージを受けた浜矢を千秋が支える。

実を言うとなんも大鷲と同じタイプの厨二病だったので、彼女の発言が一番精神的にクワるのだ。

まあ人間というのはいつの時代も必殺技を欲しいと思う動物。つまり本能、つまり不可抗力。

そして浜矢の方を見ながら話し出そうとする飛鷹。

正直もう何を言われても驚くつもりはないが、ダメージがくるのだけは勘弁してやってほしい。

「至誠高校の皆さん、激戦区である神奈川を勝ち上がってきた貴方達と戦えるのを楽しみにしていました。いい勝負をしましょう」

「……………普通に喋れるのかよ!!」

なぜ初対面の浜矢が付き合わされているのか。

それに初めから普通に喋ってくれば自分が元厨二病だということがバレずに済んだのに、という不満で口が尖っている。

「おつかれ、伊吹ちゃん」

「ほんとだよ、何なんだよアイツら…………」

「ちよつと変だけど実力は確かだから、気は抜かないでね」

「おう…………」

あんな感じだがれつきとした東東京代表だ。

アレに負けるのはかなり悔しいと思うが、東東京の皆さん、心中お察しします。

「てかディーバのユニフォームカッコよかったな…………」

「青を基調としてたから、爽やかさがあつたよね」

「筆記体いいな」

「……やっぱりまだちよつと患つてる？」

「大丈夫だから!!」

外国人が漢字を格好良いと思うように、日本人も筆記体を格好良いと思うんだと浜矢は主張する。

その主張も鈴井には全く響いていないようだが。

「面白い子たちだったね」

「え、そう？」

「私はちよつとダメージくらったんだけど」

まさかの柳谷もディーバ側の人間だった。

中上はお嬢様で厨二病とは今まで縁が無かったので、純粹に面白いという感想を抱いたようだ。

もし中上がそこまで言っていたら、浜矢は間違いなく厨二病は芸人じゃないんですよとツツコンんでいただろう。

「えー、気を取り直して……ディーバはとにかく打撃力が高い、その反面守備は不安定な所があるからそこを攻めていこう」

「はいっー」

斑鳩を始めとし、打撃は良いが守備が苦手な選手がレギュラーに多く存在する。そこを狙った打撃が出来れば勝てる。

至誠の中でそんな芸当が出来るのは金堂や鈴井、柳谷くらいだからほぼ強攻するしかないのは触れてはいけない。

——^{プレイボール}試合開始。

先攻はディーバ、まずは無失点に抑えたい。

飛鷹が三番、斑鳩が四番、大鷲が六番と全員打力を信頼されていると窺える打順だ。

全国に出た高校のクリーンナップのうち二人が一年生というのはディーバだけ。

言動が少し変わってただけで実力は本物なのだ。

「よーしー… しまっついでいーしー…」

「おー…」

中上の声は部内でもよく通る方だ。

その彼女の大きな声が甲子園に響き渡る。

自信満々なエースは誰にも止められない。

一番打者からは三振、二番打者もショートゴロに仕留め飛鷹との一度目の勝負。

ベンチからのサインも出たので外野は少し後退。

(なんか独特なフォームしてるな……)

バットを投手に向けてから、肩をトントンと叩いてタイミングを取る。

打つ時はバットを立てて足を高く上げる、かなり個性的なフォームだ。

構え方を見ただけで飛鷹だと分かるだろう。

初球は自信のあるスプリットから入るが、飛鷹は落ちる変化球に合わせてバットを出す。

「ライトー！」

「ひっ、打球はや……！」

鋭い打球が飛ぶがこれはファールラインを割る。

一年生とは思えない打球速度、佐久間と同じ。

二人とも一年生から背番号を貰っているのだから、上級生顔負けの実力があるのは当然だ。

いきなり危険な打球を打たれたが、中上はまだ球種を残している。

いくら飛鷹でも初見の変化球は打てないはずだ。

次はスローカーブで緩急を付けてタイミングを外すが、それでも外野まで飛ばされセ
ンターフライ。

「ナイピ」

「ありがと、あの子すごいね」

「緩急付けても普通に打つてきますもんね」

タイミングを外されてもあの独特のフォームが崩れる事はなかった。

足を上げるフォームでそれは難しいのにそれが出来るということは、体幹を鍛えているのだろう。

「さてと、大驚は確か球質が軽いんでしょ？ なら意外と打ちやすいのかな」

「でも制球は良いしチェンジアップが決め球だったよね、結構難しいかもよ」

「それにあのフォームを見てみる」

「ダイナミックだなあ……あれからチェンジアップ投げられるのか」

投げる前に一瞬跳ねるような動きをした後、その勢いをフルに使ってリリースする。

あの豪快なフォームから制球重視の決め球チェンジアップは想像出来ない。

投げている球も勿論凄いのだが、それ以上にフォームと実際の球が違いすぎて打ちにくいのが大驚だ。

至誠の本日のオーダーは以下の通り。

一番センター 糸賀

二番セカンド 菊池

三番サード 山田

四番キャッチャー 柳谷

五番ファースト 金堂

六番レフト 青羽

七番ショート 鈴木

八番ピッチャー 中上

九番ライト 浜矢

特に変哲の無い、いつもの打順だ。

相手が攻撃的なチームなのでこちらも藤銀戦の速攻型オーダーで行くことも考えたのだが、変に動かすよりいつもの打順の方が打てそうだからという理由でこうなった。

「さて、じゃあいつもの由美香の占いか」

「由美香が打てるかどうかだね……」

「それ広まっちゃったんですね……」

あの話は浜矢と灰原の間だけでしていたのだが、いつの間にか広まって今では占いやらクジやらと言われている。

まあ本人もノリノリなので良いのだろう。

「ストライク！」

「うーん、由美香タイミング合っていないかな」

「チェンジアツプえつく、めっちゃブレーキかかってたよ！」

「……少し厳しそうだな、私も沙也加も」

二人とも長打力はあるが確実性に欠ける。

だから大驚みたいに緩急を使ってタイミングを外してくる投手が一番苦手。

並行カウントから投げられたのはど真ん中。

糸賀なら当然打てると思ったが、白球はそこから内角に鋭く曲がり始めた。

糸賀も対応しようとするが、引つ掛けてしまい内野ゴロに打ち取られる。

「なんだ今の変化球？」

「多分スラップですね」

「普通ならあれが決め球になりそうだけどね……」

「それ以上にチェンジアツプが良いですもんね」

中上の言う通りであれが決め球でもおかしくない。

決め球ではないのはチェンジアツプがあるから。

あそこまでブレーキの効いたチェンジアツプは、試合経験豊富な3年生すらも見たこ

とが無い。

制球の良さも加わって菊池と山田は連続三振。

四隅にビシビシ決められるし変化球の精度も高い。

灰原は乱打戦になると予想していたが、その予想を裏切った投手戦になる可能性が浮上してきた。

「さてと、次は斑鳩からか」

「……先輩、楽しそうですね？」

「えっ？　そう見える？」

「はい、蒼海大と戦った後から」

浜矢の目に映る中上は、強打者と戦うことを楽しんでいるように見える。

以前のように怖いとも言わなくなったと伝えると、中上は少し考えるような素振りを見せた後に。

「そうだね、良いことあったんだ」

「へー！　何があったんですか？」

「……それは秘密、だよ」

口到人差し指を当てて微笑む。

それが大人っぽくて様になって、浜矢の心臓が僅かに跳ねた。

ただ、この発言で蒼海大戦の後に何かがあった事は確定となった。

「ほら守備につくー！」

「は、はいー！」

(……私も佐久間とライバルになったし、中上先輩も似たような事があったのかな)

普通に正解だ。浜矢が佐久間とライバルになったのと同時刻、中上は相良とライバルになっていた。

佐久間と相良の二人がこの試合を観ている可能性はある、中上と浜矢は気の抜けたプレーは出来ない。

お互いに連絡先を交換しているので、そんなプレーをしたら試合後に速攻で怒りの電話が掛かってくるのは目に見えている。

斑鳩が打席に入ると浜矢は違和感を覚えた。

その違和感の正体はすぐに分かった、彼女の左眼が見えているのだ。

試合前に話した際は長い前髪で左眼を隠していたが、今はヘルメットの中に仕舞ってある。

これも厨二病の一環でやっている。

やはり彼女も飛鷹同様、実力は本物。

恐ろしいスイングスピードに打球速度、一瞬たりともボールから目を離してはいけない。危険すぎる。

中上はメインの変化球四種で斑鳩を抑えようとするが、悉く特大のファールにされる。

そして八球目、その瞬間は来た。

ボールからストライクになるスライダーを完璧に捉えられ、白球は満員のライトスタンドに向かう。

ポール際、入るか入らないかの瀬戸際。

どちらと言われても納得出来る微妙な場所に落ちたが、審判の判定は。

「……入ってたか」

中上が孤独なマウンドでぼつりと呟く。

審判は右手を高く挙げ、頭上でゆっくりと回した。

まさかの先制ホームランで試合は動いた。

だが打たれっぱなしで終わる彼女ではない。

五番に六番の大鷲、七番まで連続で打ち取って最少失点で切り抜ける。

「打者の大鷲はどうでしたか？」

「結構怖かったかな、豪快なスイングだけど芯に当てる事重視してる感じだったよ」
「なんか投球フォームと似てますね……」

「そうだね、派手に見えるけど実は繊細な技術を持っている……面白い選手だよ」

試合前の会話でも至誠ナインが引いているのを感じてフォローを入れていた辺り、意外と繊細なのだ。

フォームだけ見るとそんな感じは一切しないが。

「先制はされたがまだ1点だ、早く大鷲の球に慣れて取り返すぞー」

「オーツ!!」

1点差で迎えた2回裏、先頭の柳谷から。

流石に彼女は怖いかボール先行。

ツーンボールとしてからカウントを取りに来た緩い球に対し、柳谷は持ち味のフルスイング。

しかし白球は惜しくも飛鷹のグラブに収まった。

「サークルチェンジも投げられるみたいだな」

サークルチェンジ。チェンジアップの一種で利き手側に沈むようにして変化する。普通のチェンジアップと混ぜられたら簡単には打てないと、柳谷も太鼓判を押す。

「けど、神奈なら打てるかもな」

「ですよね……って言ってるそばから打った」

話の最中に普通にヒットを打った金堂。

あの変態的なバットコントロールの前には、どんな変化球も無意味なのか。

だがそこからは青羽が三振、鈴井がレフトフライで続けず。

「打てそうなのに打てないのが一番腹立つ」

「鈴井がそんな怒るの珍しいな」

「投げてる球だけ見たら普通なんだよ？　なのにあのフォームと緩急で打てなくさせるのムカつく」

「そういう投球スタイルなんだよ……」

投手というのはそうやって工夫を重ねて抑えていくポジションだ。

だが、これも遠回しに褒めている。

相手に対しても相変わらず素直じゃないが、鈴井がここまで褒める投手は少ない。大鷲千晴も、あの鈴井美希に認められる実力者だ。

第23球 群青に染まる

3回表のデーバの攻撃は下位打線から。

いくら強打のチームといえども、中上も神奈川で防御率1点台を叩き出した好投手。

下位打線相手に打たれはしない。三人でシャットダウンして攻撃に移る。

「下位打線は意外と抑えられそうです」

「まあ、飛鷹たちと違って推薦で入ってきてはなしな」

「やっぱりあの三人は要注意ですね」

浜矢は灰原と中上の話に聞き耳を立てる。

中上と浜矢では実力も違うし参考程度にしかないと気はするが、一応自分も登板

予定なので頭に入れておく。

とにかくあの三人に気を付けつつ、他で油断しないようにすれば大事故は避けられるだろう。

3回裏の攻撃、まずは中上がヒットで出塁。

マグレっぽかったがヒットはヒットだ。

(バント……了解)

ここで送れば糸賀辺りが還してくれるだろう。

浜矢は正直バツティングには期待出来ないし、送りバントくらいは成功させなければならぬ。

大鷲が初球を投げた瞬間、ファーストとサードがチャージを掛ける。ついでに大鷲も突っ込んでくる。

(げっ、どこに転がせば……くそっ、ヤケクソで投手前！)

「あっ」

「オーライ！」

浜矢は普通に打ち上げてしまった。

ゲッツーよりかはマシだが、送りバントのサインを出されて転がせないのは論外。

しかもベンチから灰原が手招きしており、浜矢の気分は一気に底に落ちた。

「浜矢く？」

「すみません!!」

「まあでもゲッツーよりかはマシか……次からは木製使うか？」

「あー……私木製でもこんな感じなんですよ」

「なら帰ったらバント練だな」

浜矢は地味な練習はそんなに好きではないのだが、そんな事を言ったら流石の灰原も

本気で怒る。

「監督ってまだ本気で怒った事ないですよね？」

「だって萎縮して消極的なプレーばかりされたら嫌だろ、叱るのと怒るのは違うんだ」

「……監督がうちの監督で良かったです」

感情的に怒りをぶつけてくる人だったら浜矢はとつくに部を辞め、夢を諦めていた。

灰原は選手の立場に立って考えてくれるから、選手からの信頼が厚い。

藤銀戦のように自分が失敗した場合もちゃんと頭を下げられる大人でもある。

「おっ、由美香打った！」

「あー！ 見逃したー！」

浜矢は人の顔を見て話せるタイプの人間なので、視線は灰原の方を向いていた。

彼女の知らない間に糸賀がヒットで繋いでワンアウト・二塁。

菊池にはバントのサインは出ない。彼女は初球から積極的なスイングをしていくが。

「あつ……」

「あーあ……一番やつちやいけない事を……」

「うーん、これはキツイな」

この場面で綺麗な6―4―3のゲッツー。

チャンスが一瞬にして潰れてしまった。

「……ごめんなさい」

「次があるから、そんな落ち込むなって」

ここまで落ち込まれると灰原も叱れない。

嫌な空気のまま攻撃が終わり、守備につく。

超攻撃型のデーバ対どちらかと言えば打のチームの至誠の試合は点の取り合いが予想されていたが、その予想に反して3回まで終わって両チームの得点は斑鳩のソロホームランだけ。

それだけならまだしも、ヒットすらほとんど出ていないという状況だ。

お互いエースが投げているから当然といえば当然だが、ここまで封じ込められているのは予想外。

中上は先頭打者にヒットを許してしまい、飛鷹の打席を迎える。外野は後退して長打に備える。

カウント1―1から中上が投じたのはナツクルカーブ。

体の近くから低めいっぱいに決まるその球を、飛鷹は掬い上げた。

「なっ、オーライ！」

「任せた！」

しかし、セカンドとライトの間にポトリと打球が落ちる。

その間にランナーは三塁まで進み一・三塁。

完全に浜矢の守備範囲の狭さを知って打ったヒットだ。

「すみません！」

「今のは仕方ないよ、それより次は斑鳩だから下がってね」

「はい！」

次は今日、両チーム唯一の得点となるホームランを打ってる斑鳩。

一番警戒しなければならぬ相手、それはバッテリーも分かっていた。

だが、またしても捉えられた。

打球は一瞬にして外野の最奥部へ。

「飛鷹二塁回ってます！ 急いで！」

「オーケー！」

糸賀が捕球する頃には飛鷹は二塁を蹴っていた。

レーザービーム送球で三塁へ送球をしたが、判定はセーフ。

「脚速すぎだろ……」

「それだけじゃないよ、走塁も上手かった」

自分や菊池にも匹敵する、と糸賀が言う。

流石にこれには柳谷がタイムを取り、内外野全員がマウンドに集まる。

「いやー、流石に2点目はキツイね……」

「頑張つて援護するからもう少し堪えて！」

「伊吹は6回からだよね？」

「そうです」

「ならこれ以上失点しないから、6回までに逆転頼むよ！」

また至誠ナインは守備位置に散っていく。

中上を責める人は誰もいない、当たり前だ。

ここまで連れて来てくれて、デーバを2点で抑えてくれる彼女を責められるような者は居ない。

「センター打たせて良いぞー！」

「セカンドもいっすよ！」

「ショートなら全部捕りますよ！」

センターラインだけは頼りになるので、そこに打たせれば失点の確率は大幅に下がる。

バッテリーの二人は当然それを知ってる。

(ただ、一番確実なのは……そもそも打たせないことだよね！)

一番確実なアウトの取り方、それは三振。

あくまでも後ろに逸らさないキャッチャーと組んでいるという条件が必要だが、その条件さえ満たしてしまえば一番確実だろう。

五番は三振、大鷲はセンターフライ、七番も三振。

「有言実行ナイス！」

「ありがと、援護お願いね！」

「任せろ！」

4回裏の攻撃は山田から。

ここ最近結果が出ていないし、そろそろ一本出そうだとベンチが話していた時だった。

「うわっ、いったろこれ！」

「飛距離エグッ……」

芯で捉えられた打球は一瞬にしてスタンドに突き刺さった。

あんなのが直撃すれば死人が出る。

「いえーい！」

「ほんと、沙也加っていきなり打つよな……」

「打席ごとのムラが激しいので」

「そんなんじや四番任せられないぞ」

現四番の柳谷にすら弄られる安定感の無さ。

山田という打者は打席ごとの調子の変動が激しい。

四番は常に結果を出す事が求められるから、山田のような打者は正直向いていない。

恐らくだが、彼女は六番辺りで何も気にせずブンブン振る方が良い成績を残せるタイプ。

「けどこれで一点差だ！ この回で追いつくぞ」

「おー！」

続く柳谷もチェンジアツプを思い切り引つ張りノーアウト一塁。

ここで打席に立つのは金堂、期待が出来る。

「走った！」

「マジか……！」

「よしつ、セーフ！ ナイラン！」

柳谷は初球から走って盗塁成功。

盗塁の出来る捕手、盗塁の出来る四番は珍しい。

そして柳谷が化け物すぎてその影に隠れがちだが、得点圏での金堂は頼りになる。

それを証明するように彼女は初球からライト前に流し打ち。

「回れ回れ！」

「ノースライ！」

今さつき二盗を決めた柳谷の脚で間に合わないはずもなく、悠々と生還。意外とあっさり同点になる。

「大驚の球軽いな、すごい飛んでった」

「の割には単打だったんだけど〜？」

「打球速すぎて二塁は無理」

打球が速すぎて逆に単打になってしまったが、柳谷は盗塁が出来るし特に問題は無かった。

やはり脚があるというのはかなりの強みだ。

青羽はレフトライナーに終わってしまいが、鈴井はセンター返して出塁。

しかしそこから中上内野フライ、浜矢はいつも通り三振で続けず。

同点には追いついたが勝ち越すことは出来なかった。

「ま、次は下位打線だからいけるって」

「佳奈恵、頼むぞ……」

柳谷の不安をよそに中上は好投を見せる。

まーた見覚えのない変化球で打者を翻弄していき、三者凡退で5回表を終わらせる。

「よし、私が打ってくる！」

「由美香ー！ 頑張れー！」

いつもの有言実行、糸賀由美香。

インローのチェンジアップを難なく打ち返し出塁。

「さてと、ここはどうするかな……」

「バントじゃないんですか？」

「いつもならそうだけど、さつきあんな顔してたからな……糸賀ならゲッツーにならない

いだろうし、託すか」

菊池には出されたのは強攻のサイン。

先程のゲッツーは自分で取り返せとのこと。

内角のチェンジアップ、外角のスラップに手も足も出ずあつという間にツーストライクに追い込まれる。

「悠河！ 打て！」

「いけるよー！」

「落ち着いてボールよく見て！」

菊池は一旦バッターボックスから出て間を取る。

深呼吸をして心を落ち着かせ、大鷲と向き合う。

一球外れて1―2となった直後の四球目だった。

甘く入ったストレートを完璧に打ち返し、三遊間を破るヒットに。

糸賀は三塁ストツプで一・三塁。

「なんで今の当たりで三塁行けるんですかね……」

「由美香つて少しでも行けると思っただら走るタイプだから」

今までそれに救われていたが、見てる方は結構ヒヤヒヤする走塁。

ただ本人はアウトにならないと分かって走っているの、なぜ皆がそんなに心配する

のかが理解出来ない。

「スクイズさせます?」

「確かに不意はつけるけど、1点じゃ足りないしそもそも山田は普段バントさせてないから無理だ」

それに山田は嫌そうな顔をしてサインがバレる。

という事で灰原は普通に打たせたが、何処まで飛ばす気だと言いたくなる豪快な空振

りで三振。

「真衣ー、頼むよ」

「了解」

四番の柳谷が打席に向かう。彼女は今までで一番の集中力を見せている。

ここで打たなければ5回2失点の好投をしてくれたエースに勝ちが付かない、だからこれだけ集中している。

初球の内角低めのチェンジアップ、それは少し甘めに入ってしまった。

「……いったな」

「真衣ー!」

打った瞬間それと分かる当たり。

柳谷は打球の行方を確認してバットを放り投げる。

本来なら許されないバット投げ、だがこんな良い場面でホームランを打ったのだから仕方ないだろう。

「勝ち越しスリーラン!」

「ナイバッチ!」

「さすがキャプテン!」

「打てて良かったよ」

柳谷はホームランを打つても落ち着いている。

浜矢はいつだったか、捕手として試合に出ると攻撃の時も配球の事が頭に浮かんでくると聞いた事があつた。今もそうなのかもしれない。

「これで5点目か……なかなかいい攻撃だな」

「あとは伊吹が抑えれば完璧！」

「が、頑張ります……」

マウンドでは大鷲を囲うように内野陣が集まっている。だがここは続投の模様。

「控えに投げさせるより大鷲のが抑えられるって事なんですかね？」

「だな、デーバの控えとか4点台とかしかいないし」

「そりゃ続投させますね……」

「まともに抑えられるのは自分しかいないと再認識した大鷲は、金堂を今日初めての凡退に仕留める。」

青羽にはヒットを許すが、鈴井は内野フライでスリーアウト。

勝ち越しのスリーランを打たれた直後にこの投球ができる、彼女も正真正銘のエースだ。

「じゃ、伊吹頼んだよ」

「はい、なんとか抑えます！」

「2点までだったらいいかからね」

初心者がデーバ相手に2回2失点はなかなか厳しいが、勝つためにはやるしかない。

八年ぶりの全国大会、初戦敗退で終わらせる訳にはいかない。

第24球 真紅に染まれ

浜矢伊吹、全国大会初登板。

最初に対戦するのは今日まだノーヒットの三年生。ノーヒットという事、この打席は何がなんでも出塁したいと思っている。つまり油断したら間違ひなく打たれる。

一瞬たりとも気は抜けない。バッテリーは極力低めをつけて慎重に攻めていく。

しかし打者は低めのストレートも見せ球のカーブも、その直後のスライダーも当ててくる。

(めっちゃ粘ってくるじゃん！ なんで中上先輩は抑えられたんだよ……)

そうなの当然だ、浜矢と中上では実力が違いすぎるのだから。本人もそれは理解している。しているのだが、あの三人以外なら自分でも抑えられると心のどこかで思っていた。

だが現実は違う。自分ではどうも決めきれない、その揺るぎない事実が浜矢に重くのしかかった。

六球投げてても決着はつかない。こういう時に変化球が、更に言うともともに使える変化球が少ないのが痛い。

(伊吹、ストレート。ぶつけるくらい気持ちで腕振って投げてこい)

実際には故意死球を投げさせるつもりは無いが、それくらいの強気な気持ちで投げてこいとのこと。そこまでしないと抑えられないと遠回しに言っている。

彼女がインハイのストレートを投げさせる時は、大抵空振り三振を奪いたい時。浜矢のストレートにはノビがあるので結構振ってくれるが、インハイというのは諸刃の剣。

今の浜矢のように、僅かに内に投げてしまうと簡単に外野まで運ばれてしまう。

高めのストレートを捌かれてツーベース。

「やば……」

「伊吹ー！ まだヒット一本ー」

「ですよー！」

とはいえ、ノーアウト二塁で飛鷹に回ってしまった。先程自分を励ましてくれた先輩もどう攻めていいのか悩んでいるようで、なかなかサインが出ない。

(とりあえずスライダーかな……慎重に、これは最悪外れてもいいから)

外角、ボールからストライクになるバックドアのスライダーを投げてストライク。

流石にこれに手を出されたら敬遠するしかないの、見送ってくれたのはバッテリー的には幸運。

次に要求されたのはカーブ。浜矢的にはゾーンに入れたつもりだったが、ボール一個

分外れてボール。

(……でツーシームか……了解)

アウトローのツーシームで引つ掛けさせる。サード方向にゴロを打たせればランナーも進塁出来ない。

山田の守備だけが不安だが、肩は良いので捕球さえ出来れば内野安打は防いでくれるはず。

打者が一番遠く感じるコース、アウトロー。そこに小さく動く変化球を投げ込むと、面白いようにゴロを量産することができる。

しかし、浜矢はリリースの瞬間に嫌な予感がした。

——打たれる、と。

それを待っていたと言わんばかりの迷いの無い飛鷹のスイング。真芯で捉えられた白球は一瞬にしてレフトスタンドに飛び込む。

投げた瞬間に打たれると分かっていた投手は、快音が響いても振り向かなかつた。

「……くそっ」

「伊吹、今の打たれたら仕方ないよ」

「そうそう、まだ1点差あるんだし切り替えてこー!」

「……はい!」

落ち込んではいられない、次は斑鳩なのだから。

ここでまたホームランを打たれたら同点。

自分が尊敬する先輩の勝ちを自分が消すことになる、それだけは絶対にしたくなかった。

(……斑鳩、勝負だ！)

敬遠しても良かった。しかし、同級生のスター選手と戦える機会は浜矢にとって良い経験になる。

飛鷹と斑鳩の二打席は、将来のエース候補である彼女の成長の糧になると灰原は信じていた。

若干制球も怪しくなってきたて全く使い物にならないカーブなんて投げない、ストレートとスライダーだけで勝負。

ツーシームは打たれたばかりで浜矢の脳裏に被弾のイメージが焼き付いてると思い封印した。

斑鳩は飛鷹と違ってミート力は無い、内外に上手く散らせば何とかなる相手。

(私のスライダーをそう簡単に打たせるかよ)

浜矢の瞳に、投手としてのプライドが見えた。

警戒していた相手に打たれて悔しくならない投手なんていない、後続は必ず抑えてやると思わない投手はいない。

——決め球に自信を持たないエースも、いない。

決め球のスライダーを打たせる気がないのは、エースとしての第一歩を踏み出したことの証明。

浜矢伊吹、ようやくエースの心構えを手にする。

まずはスライダーでインコースを抉る。一瞬ぶつかりそうになったその球に斑鳩は思わず腰を引いてしまうが、白球はそこから曲がってストライクゾーンに収まる。ワンストライク。

二球目、同じコースに今度はストレット。自分に対しては内外に散らばらせてくるだろうと思っただけに、全く同じコースに違う球種を投げ込んでくるのは予想していなかった。ツーストライク。

浜矢はここ一番の集中力を発揮している、なので遊び球は投げさせない。三球勝負だ。

柳谷が構えたのは外角、僅かに外れるコース。

提示されたサインに静かに頷いた浜矢は、どこかぎこちないノーワインドアップから勝負を決める一球をリリースした。

高めに投げられた球に斑鳩はフルスイングで対抗するが、白球は斜めに鋭く沈んでいく。スライダー。

「ストライク！ バッターアウト！」

「しゃっ!!」

「ナイピー！」

マウンドで右腕が吼える。

高校生らしさやら何やらと色々うるさいが、そんなの真剣勝負の場においては不要だ。

そもそも、こんな熱い勝負の真っ最中に吼えるなどというのも酷な話だ。

投手と打者は一球ごとに全力をぶつけ合っている、それで自分が勝てたら吼えるのも無理はない。

柳谷がこの場面で浜矢にスライダーをこのコースに要求した理由、それは彼女のコマンドにあった。

コマンドとコントロールの違いを簡単に説明すると、コントロールはそのままストライクゾーンに投げる能力のこと。

コマンドというのはストライクかどうかは問わず、狙ったコースに投げる能力のこと。

浜矢のコントロールはお世辞にも良いとは言えないが、ここぞという場面でのコマンドはできる。

まだ投手として未熟が故にピンチならいつでもコマンドができるわけではないが、それでも現時点でこの投球が出来るのは大きい。

斑鳩を三振に切つて調子が上がってきた浜矢は五番サードゴロ、六番大鷲ライトフライで切り抜けた。

大鷲の打力も比較的高い方なのだが、意外にも力で押せば何とかなる打者だ。

「浜矢ー！ あの後よく抑えてくれた！」

「けど打たれちゃいました……悔しいです」

「だったらまた来年リベンジすればいい」

「そっか……ですよね！」

今まで戦ってきた結城や水瀬は今年が最後の三年生で、戦えるのは今年限りだった。しかし佐久間や飛鷹といった同級生とは、あと二年も戦えるチャンスが残っている。

化け物ばかりの黄金世代、浜矢もいずれそこに名を残すことだろう。

6回も続投の大鷲は球威こそかなり落ちてきたが、エースの意地をぶつけてきた。

力任せに腕を振り抜くのではなく、自分の長所であるコントロールを今まで以上に意

識する。

内角外角、高め低め、フロントドア、バックドア。

自分の持つ全ての技術、全ての投球術を駆使してこの回を三者凡退で終わらせた。

「最終回だ！　ここを抑えて必ず勝つぞ！」

「オオ！」

至誠ベンチの円陣に対抗するように、デীবバベンチからも気合いの入った大きな声が聞こえてきた。

「ここで終わる訳にはいかないだろ！　デীবバの底力を見せてやれ！」

「ハイッ！」

1点差。勝利を確信するには心もとなない数字、勝利を諦めるには早すぎる数字。

デীবバの攻撃は下位打線からのスタートだったが、ここからは代打攻勢なのだろう。先頭打者から代打を起用してきた。

デীবバの控え組はスタメンとほぼ変わらない打力かそれ以上だが、あまりにも守備がザルなので代打要員として控えに回されている。

スタメンも飛鷹以外はそこまで守備が上手くないのにレギュラーを奪えない彼女たちの守備力は、想像以上に酷いものだ。

仮にも全国出場を果たしたチームのベンチ入りメンバーだというのに、イージーな打

球をバンザイしたりトンネルしたりする。

ただ、その代わりに打力は本物だからベンチに入ってる。

(さっきまで下位打線は余裕だったけど、今回はそうはいかないってことか……上等だ！)

代打組にストレートのゴリ押しは通用しない。

なら、次に自信があるスライダーで抑えるだけ。

予選が終わってからも鍛え続けていたおかげで、変化量が増えたスライダー。

浜矢的にも柳谷的にも有り難かった。

一人目、狙い通り外スラでクルクル。

浜矢の場合、困った時はインハイのストレートか外スラで大体何とかなる。

飛鷹や結城のような超一流選手には通用しないが、ある程度の打者ならこれで抑えられる。

次の代打も困った時のインハイストレートで空振り三振。いよいよツーアウトというところまでできた。

アウトローのカープ、インハイのストレートで1ー1。

外スラを警戒されたのか見送られてツーボールとされるが、内角のツーシームで並行カウントに。

「伊吹ー！ 決めてやれ！」

「腕振り抜いてね！」

「ばっちこーい！」

浜矢は息を吐いて空を見上げる。

青い空と太陽、まるでディーバと至誠のよう。

(……なんて、変な事を考えてる場合じゃないな)

顔を下げて打者と向き合う。

全国大会初勝利のマウンドに、自分が立っている。

それがどれだけ嬉しくて幸せなのか知りたい。

浜矢は全力で腕を振り下ろして、最高のストリートを高めに投げる。

白球は上空高く舞い上がった。柳谷がキャッチャーマスクを外してグラブを上に向ける。

「オーライ！」

「……アウト！ ゲームセット！」

試合が終わった。至誠が勝ったのだ。

ディーバの選手が膝から崩れ落ちている。

泣き喚いている選手もいた。

（勝利の瞬間は、いつになっても実感が湧かないな……）

どうしても客観的に見てしまう。

試合中はそんな事はないのに、試合が終わった途端に他人事のようにグラウンドを見渡してしまふ。

それが要因で気付けることもあるので、一概に悪いことだとは言えないが。

「良い試合だったよ」

「ありがとう、そつちも強かったよ」

「えへへ、ありがとう」

整列をし、浜矢は大鷲と握手を交わす。

6回5失点と、数字だけ見れば褒められたものではないかも知れない。

だが、大鷲はどんな場面でも笑顔を決やさずチームメイトを鼓舞していた。

真のチームの精神的支柱は、飛鷹ではなく大鷲だ。

至誠ナインがバスに乗り込む前に飛鷹たちがやってきた。

三人とも目と鼻が真っ赤になっているので、直前まで泣いていたのだと分かる。

「……良いスライダーだった」

「え？ あ、ありがとう……」

斑鳩が急に喋るのに驚いて、浜矢の喉から上擦った声が出た。

無口キャラで売っているのにこの場での第一声が斑鳩だとは誰が予想したか。

「次の相手は桐葉か祥雲でしょ？ どっちが来ても苦戦はするだろうけど、私たちに勝ったんだから！」

「……必ず勝利を約束しろ」

「何でそんな上から……まあいいや、約束するよ」

鈴井が斑鳩と勝利を約束した。

何だかんだ、鈴井も同い年のライバルができて嬉しそうである。

「また季節が巡りし刻、三つの心が合わさり全てを破滅へと導く力を生み出す。其の刻を待っているがいい！」

飛鷹がそんな捨て台詞を吐いて帰っていく。

大鷲と斑鳩もその後について行き、至誠サインは何とも不思議な三人との別れを迎えた。

「……で、飛鷹は何て言ってたの？」

「なんでこつち見るんですか……」

周囲に通訳を期待されている。

浜矢だって厨二病ではあったが、大鷲寄りの厨二病だったので飛鷹の言葉遣いには詳

しくない。

「多分ですけど、来年は三人でクリーンナップ張って勝ち上がってくるから、覚悟してろ……みたいな感じですかね」

「なるほど」

「さすが名通訳！」

浜矢は通訳になった覚えはないし正解しているかどうかの確認もないが、ニュアンスだけでも伝えられたから良いだろうと自分のした仕事に納得しているようだ。

「ほら、早くバスに乗り込めー」

「はーい」

疲れを癒すためにも第二試合は宿で観ることに。

祥雲と大阪桐葉、激戦が予想されていたが実際は。

「はー……神田すげえ……」

「桐葉相手に2失点完投……」

「ストリートはノビがあるし、変化球はキレも変化量も素晴らしい。それに加えて全球種コントロール出来る……完璧だね」

一年生でこれなら、三年生になったらどんな化け物に育ってしまうのか。

スタンダードな変化球しか投げないのにこれだけ抑えられるのは抜群の制球力と変化量、そして孤塚のリードがあるから。

「二回戦の相手は祥雲か……守備型のチームだからデИБァよりかはいいけど」

「そう？　むしろ1点を争う展開だと精神的に疲れるよ」

「あーそつか、どつちもどつちだな」

デИБァ戦は点の取り合いで肉体的な疲労が溜まるが、次の祥雲戦では精神的な疲労が襲ってくる。

この二校との連戦を引いてしまったのはかなり運が悪い。余談だが、柳谷は抽選会の翌日にお祓いに行ったらしい。

「伊吹ちゃん、明日は楽しもうよ」

「鈴井がそういう事言うの珍しいな」

「同級生と戦えるのが楽しみただけだよ」

あの鈴井が珍しく楽しもうと言っている、なら浜矢も楽しむしかない。

もちろん勝てたらそれが一番嬉しいが、勝敗がどうであれ悔いが残らないようにしたい。

浜矢の気持ちはそれだけだった。

第25球 翡翠の君は

全国大会二回戦の相手は西東京代表、祥雲学院。

一年生エースの神田翠嵐と一年生正捕手の孤塚志黄のバッテリーは勿論、全体的に守備力の高いチーム。

速攻を決められる相手でもなし、じつくりと時間をかけて突破口を見つけ出していくのが本日の作戦となった。

「伊吹ちゃん、あれ神田さんじゃないかな？」

「ほんとだ」

「マウンドでは凛々しかったけど、普段はお淑やかな人なんだね」

鈴井の言う通り、神田はマウンド上では常に凛々しい表情をしていた。だが決して睨みつけるような顔はせず、淡々と投げ込んでいた。いわゆるポーカーフエイス。

それが今は複数の記者に丁寧に対応している。

「てか試合前にあんな群がっていいのかわ……」

「多分ダメ、なのかな？ けどあまり気にしてないみたい？」

「そうでもないんじゃない？」

鈴井にそう言われ、二人は神田の方を見る。

「神田選手、対戦相手の至誠高校について一言！」

「良いチームだと思いますよ、部員が少ないのにここまで勝ち上がるのは凄い事だと思いますし」

「自信のほどは？」

「それはまだ分かりませんよ、どれだけ対策されているのかも把握できていませんし……それより」

そこで神田から笑顔が消えた。

違和感を察した記者を見渡してから言い放った。

「他の選手は試合前にインタビューを受けないのに、私だけ例外というのはあまり良くないのでは？ それに練習時間も減ってしまいますし……試合後でしたらいくらでもお受け致しますので」

それでは、と告げて球場に入っていく神田。

多少怒つてはいたのだろうが、それを表に見せず相手を納得させて去る。大人な対応とはああいう事なのだろう。

「相手を悪く言う事なく、かといって自分の株も下げない言い方したね」

「あつたまい……」

「試合後にサイン貰えるかな!？」

「せんしゅーは相変わらずだなあ」

神田は評判通りの人格者であった。浜矢は正直なところ、その評判を疑っていた。一年生の時から周囲からの絶賛を受けつつ結果も残しているのに、多少なりとも天狗になっているのかと思っていた。

「人としても選手としても憧れるなあ」

「そうだよね!？」 神田さんは凄いだよ〜!」

「伊吹ちゃん逃げるよっ!」

「はっ?」

「このままじゃ神田の話30分コースだよ!」

試合前の大事な時にそれは嫌だ、そう思ったので鈴井と一緒に千秋から逃げる。浜矢も野球部員なのでそこそこ走れる、はずだったのだが。

「伊吹ちゃん脚遅い」

「うるせー……」

少しの距離を走っただけで二人の間にかかなりの距離が生まれていた。鈴井の脚は平均以上であつてずば抜けて速くはない、なのにこの距離感という事は浜矢の脚が遅すぎ

るんだ。

「来年はもうちよつと速く走れるようになってね」

「へーい」

「二人とも〜！ 見つけたよ！」

「ゲツ！ てか何でそんな元気なんだよ！」

「私だつて伊達にマネージャーやってないからね！ 誰が毎日ノックしてると思つてるの〜？」

そう、千秋は灰原と共にノッカーを務めている。時には部員達と走り込みなどもしているの、弱小校の野球部員よりも体力がある可能性も否めない。

「こら、試合前に体力消耗しないの」

「こ、金堂先輩……すみません」

「楽しそうで良いとは思うけどね、デーバ戦で体力使つてるんだから少しでも休もう？」

「はいっ！」

あまり話すことは無いが、この先輩は優しい。浜矢はそう感じた。二人の仲は別に悪い訳ではないが、金堂は大人しい方なので積極的にコミュニケーションを取ろうとはしない。

仲の良い二年生で集まっている時も一歩引いた感じなので、誰に対してもそういう接し方なのだろう。

「どうしたの？」

「あつ、いえ！ なんでも……」

今自分が心の中で思った事を正直に言ったら絶対に亀裂が入ると思い、口を噤む。言わない方がいい事と言ってもいい事の区別をつける、それが正しいコミュニケーションの取り方だ。

全員が集合し、至誠ナインは一塁側ベンチに入場する。

「さてと、神田対策の件だが……」

「正直な所、弱点が見当たらないんですよ」

「そうじゃなかったら防御率1点台なんて無理だもんな」

「球種も多いから粘るのだから一苦労だしね」

不調を願うか、もしくは狙い球を決めてそれだけを狙うか。それ位の対策しか出来ないと灰原は言う。

「二球種以外を捨てる、それ以外の球を投げられた時に対応出来ないから打てる確率は低くなるんだけどな……」

「けど狙い球を絞らないと多彩な変化球に翻弄される……」

「やりたくなくてもやるしかない、か」

至誠の指揮官二人をここまで悩ませる辺り、神田翠嵐という投手の凄さが窺える。これが一年生だとは到底思えない。

「1点を争う展開になるのは分かっている、エラーしたら終わりだと思え！」

「指差しあつてるけど、そこ全員危ないよ」

「はい……」

全員、というのは青羽と浜矢と山田の三人。つまりいつものメンツだ。冷静に考えると、いや冷静に考えなくとも両翼が守備下手なのは辛い。

「バッテリーも慎重に攻めていけよ、派手なプレーなんて必要ないからな！ 一つのアウトをとにかく丁寧に取っていけ！」

「ハイッ！」

試合開始のサイレンが響き渡る。

この試合は至誠が先攻なので、いきなり糸賀くじの時間がやってくる。

「由美香がどれだけやれるかだな」

「……先輩が背負ってるもの、凄く重いですよね」

「本人は楽しんでたよ」

「ええ……？ 何でですか？」

「それだけ評価されてるのが嬉しいんだとき」

自分の結果がそのままチームの結果に繋がると思われている。初回の攻撃の流れを作る一番打者としてはこの上ない好評価かもしれない。

神田は大きく振りかぶって、高い身長を生かして左腕を振り下ろす。外角高めに投げられたストレートは、電光掲示板に表示された143kmという数字よりも速く見えた。

「はっや……」

「ノビが凄いな……良い回転が掛かってる」

「角度もあるから打ちにくいよ」

「せんしゅー、神田って身長いくつ？」

「えつと……168cm」

一年生にして柳谷と同じ身長だ。しかも神田の場合はまだ伸びる可能性がある。一年生左腕らしからぬ球速に場内が騒めいているのは気にも留めず、神田は二球目を投げる。

途中まではストレートと同じ軌道で、手元で急激に落ちる変化球で空振りを奪う。

「スプリットえぐつ」

「ガクツて落ちましたね……」

「ストレートの後にあれ投げられた打てないな」

「キャプテンすらも無理ですか……」

最後はこれまでの二球とは違い、緩いカーブでタイミングを外して空振り三振。

「神田やばいわ、今まで戦ってきた中で一番かも」

「次は打てそう？」

「どうせ次回ってくる時までには全球種見れるでしょ、なら打つよ」

「頼もしい限りだな」

全球種見れたからといって打てる確証はない。それでも糸賀は絶対に打つと宣言してみせた。

(……神田の攻略は先輩達に任せて、私はいずれ来るであろう投球について考えてよつと)

浜矢伊吹外野手兼投手、神田の攻略を諦める。まあ流石に県予選の打率、217が神田からヒットを打つのはほぼ不可能なので、投球のことを考えておくのは悪い事ではないはず。恐らくは。

菊池は変化の大きいカーブで三振、山田もキレのあるスライダーで三振。初回から三者三振と、彼女の高い実力を見せつけられた。

「どの変化球でも三振が取れるんだな」

「そうなんだよねえ……予選での奪三振率は10超えてるし」

「化け物かよ……」

28イニングで43奪三振、奪三振率10.75。因みに至誠のイースは27イニングで34奪三振、奪三振率8.81。ついでに浜矢は19イニングで20奪三振、奪三振率7.37と比較的高い数字を残している。

「皆、なにそんな辛気臭い顔してんの！ 私だつて抑えるからね！」

「中上先輩！ もちろん期待してますよ！」

「向こうはイースの実力を見せつけてくれたんだ、私だつてやってやるよ！」

確かに祥雲のイースは凄い。しかし至誠のイースも凄い。今日中上は殆どの球種を封印し、自信のある四球種だけで勝負した。祥雲も平均的な打力はあるが、デーバ並みの打のチームではないので簡単に抑えられた。

「ほら三凡！ 神田以外から打たれる気しないから頑張つて1点取つてね！」

「了解つと」

期待を背に打席に向かった柳谷も、鋭く曲がった変化球に詰まらされセカンドゴロに

終わる。

「何だ今の球？」

「多分ツーシーム……」

「ツーシームって普通あんな曲がるか？」

「神田のは曲がり大きいよ」

一年生組がそんな話をしている最中に、快音を響かせてチーム初安打を打ったのはやはり金堂。

木製なので力負けするのではと灰原に心配されていたが、そこは流石の金堂だ。

「相変わらず神奈のバツティングは訳わからない……」

「いくら全球種見れたからってさあ」

ツーシーム、カーブ、スライダー、スプリット。中上と全く同じ構成だが変化は人それぞれ違う。

ツーシームは神田の方が変化が大きく、カーブは似たような感じ、スライダーはキレも変化も中上の方が上、スプリットは変化量は同程度だが鋭さは神田の方が一段階上と違った具合。

球種だけを聞いて中上で見慣れていると侮っていると、この違いにやられる。

今日六番に入った青羽は速球には滅法強いが、変化球中心で攻められてあっさりと凡退。

「クソツ……何だよあの一年」

「あの朱里さんの妹だしなあ、やっぱこれくらい手強くなっちゃね」

神田がああ神田朱里の妹という事は周知の事実。

（ずっと注目され続けてたんだろうな、息苦しそう）

浜矢はそう考えてしまつてから、本人は嬉しいと思つてるのかも知れないし、人の気持ちを憶測してはいけないと思ひ直す。

考えを振り切るようにして打席の親友の方を見ると、外角低めに投げられたストレートを上手く流し打つ姿が見えた。

「鈴井打つた！ ナイスー！」

「さすが美希ちゃん！」

鈴井もヒットを打ち一・二塁のチャンス到来。

だが、その後ろに続くのは中上と浜矢の二人。それが意味するのは凡退であり、スリーアウトとなる。

「ピンチでの強さは流石エースだな」

「神田さんメンタル強いですよね」

「だから重圧があっても今まで潰れなかったんだろうな」

あれだけ期待されていれば、何処かしらで崩れる。その経験が無かったから神田はここまで投手になったと灰原は分析する。

「監督！ 私もメンタルはエースですよ！」

「メンタルだけじゃなくて実力もエースだぞ」

「えへへ、じゃあ抑えてきますね！」

「任せたぞー」

灰原に褒められた中上は嬉しそうにマウンドに向かい、四番を張る神田との初対決を迎える。

神田のフォームは神主打法、というより姉である朱里と9割方同じフォームだ。神田の方がバットを縦にしている。

あのフォームで打つの難しそう、なんて事を浜矢が考えているとききなり打球が襲ってきた。やはり浜矢の守備がザルという事を知って狙い打ちをしているのだろうか。

しかしここはワンバウンドした打球をしつかりと掴み、次の塁には進ませない。神田以外は打撃が際立っている選手はいないので、神田さえ越えてしまえば野手も安心できる。

先頭の神田にこそヒットは許したが、そこからは3人で抑えて交代。お互い打てはす

るが、得点には繋がらないもどかしい攻撃。

「金堂や鈴井は打てるし、上手く噛み合えば点も取れそうだな」

「逆に向こうは神田以外に怖い打者はいませんし、抑えるだけならデーバより楽そうですね」

その分点を取るのには難しそうだが、点を取られる心配がほぼ無いのは気が楽になる。

3回表の攻撃は浜矢からはじまる。

神田の長身を生かしたフォームは、打席から見ると威圧感もあるし球に角度もついている。浜矢はバットに当てることさえもままならない。

(おっしや、ストレート！)

追い込まれてからの勝負球はスプリットだった。ストレートだと思つてバットを出した瞬間、落ちる。そのキレと変化に浜矢は手も足も出さず空振り三振を喫した。

「スプリットやばいな……」

「正直狙い球絞つても厳しいかもね」

「でも鈴井打ってたじゃん」

「ストレートだったし。変化球は当てるのが精一杯かな」

鈴井がそんな事を言っている傍らで、糸賀が低めのカーブを巧く掬って出塁する。

「あれ、バントですか？」

「ワンアウトからバントなんて珍しい……」

「スモールベースボールって正直好きじゃないけど、期待値的にはこっちの方が良いと思っただ」

現役時代に長距離打者だった灰原はスモールベースボールを好まない。ランナーが出たらずぐバントという指示は菊池以外にはあまり出さないし、ワンアウトからのバントなんてもつてのほかだ。

サインを見た菊池は一球で自分の仕事を済ませる。

「ナイバーン」

「神田相手でもバントは任せてよ！」

「さっすがです！」

菊池を絶賛している浜矢なら絶対に打ち上げていた。そもそも浜矢の場合、あの速球に腰が引けてバットに当てることすら出来なかったかもしれない。

菊池はヒットこそ打てないが、こうした最低限が出来るから灰原からの信頼も厚い。

ツーアウト二塁のピンチで、神田はギアチェンジしたような投球で山田を手玉に取る。高めの釣り球のストレートを振らせた後、内に食い込むスライダーで仰げ反らせ、

最後は外のスプリットで三振。

内外に投げ分けられるコントロールに、強打者のインコースを攻められる度胸の持ち主。

「尊敬するなあ……」

「伊吹ちゃんも三年生になったらあれくらい投げられるといいね!」

「期待が大きすぎるんだけど?」

「それだけの才能はあると思うぞ?」

灰原と千秋に期待されるのは嬉しいが、神田レベルの投球をしている自分が想像出来ない。しかしそう思っても仕方ないだろう。今の浜矢はストレートのノビとスライダー以外は並レベルにすら達していないのだから。

この回の祥雲は下位打線なので、中上は三人でサクツと抑えてベンチに戻る。前評判通り、孤塚のバッティングは良くない。

「てかもう4回!?! 全然ヒット出てないじゃん!」

「神田さんも中上先輩もテンポ良いからね、打たれなかったらすぐ回が進んじゃうね」

「これ延長入るんじゃないの……?」

「もし延長までいったら、圧倒的に不利だね」

至誠はそもそも選手数が少なすぎる。それに加えて全国大会という注目を浴びている中でのプレー、前回のデーバ戦のせいで疲れが溜まっているという悪条件。

更には本職投手が中上以外にいないので、いくら祥雲とはいえ抑えられるか不明。至誠的には、絶対に延長に突入させる訳にはいかない。

第26球 琥珀色の作戦

4回表の攻撃は柳谷から。神田相手に唯一ホームランを狙えそうな彼女だが、その期待は砕かれた。

ストレートで押してからの外に逃げるスライダーで凡退。真つ向勝負である柳谷が負けた。

「ギアが上がってきたか？」

「まだ上がるんですか……」

「ここら辺で叩けないと難しいな」

頼みの綱の金堂。しかしその彼女すらも力で押されてファールフライ。長打力が無いという唯一にして最大の欠点を攻められた。

この回はもう無理かも知れない、そう思つてナインが守備の準備をしていると青羽がヒット。神田のスプリットをしつかり捉えて外野まで弾き返した。

しかし次の鈴井はストレートで押されて凡退。長打力の有無で責め方を変えてくる、厄介な相手だ。

「かわす投球と力で押す投球……それを両立出来る投手は少ない」

「技術があつて、体格も良い神田さんだからこそ出来る投球術ですね」

姉の朱里も力と技術を両立している選手。野手と投手でポジションこそ違えど、そういう所まで似ている姉妹だ。因みにこの二人は双子でもないのに顔も似ている。

「私だつて負けてないからね！　なんだつたら被安打数は私の方が少ないよ！」

「ですよ、あとーイニングお願いします！」

「えっ？　先輩あとーイニングなの？」

「向こうの打順次第ではあるけど、そう考えてるよ」

「ここを勝ち上がったらまだ大会は続く。その戦いに備える為に、中上を最後まで引つ張る事はしない。」

あとは浜矢でもある程度は抑えられるであろうという判断。

「打順次第つて神田？」

「うん、出来れば神田さんと当たらない所から投げさせたいんだけど……」

「ふーん……よし、任せろ」

誰が相手でも抑えなければいけないのは同じ。仮に神田と当たつたとしても、ホームランを以外なら勝ちくらいの気持ちで投げればいい。

祥雲は二番打者からの攻撃。

先頭はしっかり切つたが、三番には出塁を許してしまいランナーありの状況で神田。

ここで柳谷がタイムを取る。

「敬遠する?」

「いや、今の調子なら抑えられると思う」

「オツケー」

話が終わり、柳谷は長打警戒の指示を出す。結城や山城の時と同じ守備位置、つまり外野はフェンスに背中が付く手前まで後退する。

中上のスライダーとカーブは一級品、特にスライダーは神田より変化量も多いし制球だつて効く。そう簡単に打てる球ではないが、神田はファールを連発する。

勝負の一球、実は中上の得意球であるスプリット。手元で小さく変化するスプリットは、途中までストリートと見分けがつかない。だが、神田はそれを打ち返した。

またしても自分に向かって打たれた白球を浜矢は捕球し、ランナーの状況を確認しようとして顔を上げる。

「伊吹! 三塁!」

「オーケー!」

一塁ランナーが二塁を蹴つて三塁へ向かおうとしていた。浜矢が初心者だからと舐めていゝのだ。

(けど、流石にそれは暴走だぜ!)

浜矢は山田のグラブを目掛けて送球する。大きく逸れないように、だがランナーには当たらないように気をつけて。

「アウト!!」

「よっしー!」

「レーザー、レーザー!」

センターを守る糸賀には遠く及ばないが、浜矢だって初心者で投手に抜擢されるのだから肩は強い。しかも普段はコントロールが悪いくせに、こういう時には制球が効くというオマケ付き。

今のアウトで得点圏ではなくなった。

それが投手にとってどれだけ嬉しいか、調子上がるかを浜矢は知っている。マウンドに立つ先輩は抑えられる、そんな浜矢の予想は現実となった。

五番打者を内角のツーシームでショートゴロに仕留めてスリーアウト。

「いーぶきー! ありがとうー」

「そんな……アレは暴走だっただけですよ」

「けど嬉しかったよ! それと初捕殺おめでとう」

練習試合も含めて、初めてランナーを刺した。アウトコールが響いた瞬間の気持ち良

さは、経験した者にしか分からない。

「いい守備も見せて貰ったんだし、攻撃も頑張らないとね！」

「はい！」

「……盛り上がってるところ悪いけど、早く先頭とネクスト行ってこーい？」

「あつ、そうだった」

「ごめんなさーい！」

この回の攻撃は中上からだという事が二人の頭から抜け落ちていた。二人は糸賀からバットとヘルメットを受け取り、ダッシュでそれぞれバッターボックスとネクストへ向かう。

中上は打席で恥ずかしそうに審判と捕手に頭を下げる。それで調子が崩れたのかは知らないが、三球で凡退してベンチに帰ってくる。

「いやー、色々と恥ずかしい……」

「ど、ドンマイです」

浜矢も恥ずかしい思いはしたが、中上が良い具合に和ませてくれた。というか浜矢は恥ずかしがっている場合ではないのだ。

（いい加減打たなきやな……）

至誠の中に全国に来てから一本もヒットを打ってないどころか、出塁すらしていない

選手が一人いる。そう、我らが浜矢伊吹である。周りは全員打つてゐるのに自分一人だけヒットが出ないのは嫌なので、何がなんでも打つてみせると気合が入つていた。

初球は内角低めに速い球が投げられた。これでスプリットだったとしても構わない。浜矢はストレートだと信じて強く振り抜く。

すると手に痺れるような感触がやってくる、バットに当たつたのだ。二遊間を襲つた打球は、ギリギリ守備範囲内かというところだ。

「抜けるっ！」

浜矢は無意識のうちに叫んでいた。彼女は全国に来てからというもの、知らず識らずのうちに叫んでいる事が増えた。それだけ野球に熱中しているのだ。

「抜けたー！ 初ヒットじゃん！」

「伊吹ちゃん、ナイバツチ」

「サンキュ！」

浜矢はコーチャーに出ていた鈴井とグータッチをする。シヨートが飛び込まなかつたおかげで打球はセンターに抜けた。マグレ感が強いヒットだが、それでもヒットだ。

しかし糸賀、菊池と立て続けに打ち取られ得点には繋がらず。

嫌な流れになつてしまった、そう思つた観客は多かつただろう。しかし中上も尻上がりに調子を上げる投手、ここで祥雲打線を三者連続三振に切つてみせた。

「5回が終わってお互い無得点か……」

「ここまでの投手戦になるとは思いませんでした」

「正直1点は取れると思ってたな」

両投手共に点を取られる気配が無い。中上に至ってはそもそも打たれる気配すらないし、神田も神田でピンチを背負ってからの投球が素晴らしい。

あと2イニングで決着を付けたい、というより付けなければ次の試合が厳しくなる。

先頭の山田は緩急を付けられて凡退したが、頼れる四番の柳谷がヒット。安打製造機・金堂もそれに続くように低めのスライダーを巧く打ち返した。

「落ちろー!」

「セカンド……あー!」

「今のを捕るか……」

セカンドの後方に上がった打球だった。それを後ろ向きでジャンプしながらキャッチ。守備型の祥雲らしいファインプレーだ。

青羽も強い打球を放ったが、外野陣の守備範囲の広さにやられてスリーアウト。

「やっぱり繋がらないなあ……」

「あと1イニングですか……厳しいですね」

「けど延長にはしたくないし、どうにかして次で決めるしかないな」
(あれ、そういうえば私の登板はどうなったんだ)

5回から浜矢が登板する予定だったはずなのに、ずっと中上が投げている。

「なーなー、私の登板は？」

「あつ、そうだよね……どうします？」

「六番からだよな……よし、頼んだ」

「やった！ 行つてきます！」

浜矢は肩を作るのが早い。マウンドで何球か投げればすぐに肩が作れるので、緊急の登板にも対応出来るという強みがある。

「伊吹、任せたよ」

「了解です！」

浜矢だつて下位打線くらいは抑えられる。六番にこそヒットは許したが、後続は抑えて試合は最終回に突入する。

「さて、最終回だ！ ここで決めるぞ！」

「今までの攻め方を思い出して、狙い球を絞るのが良いと思います」

浜矢の場合だとストレートが多く投げられてた。そんな具合に、打者によって多く投げられる球種が違っていた。

それを思い出して打席に臨めばきつと打てる、というかここまで来たならそれしか打つ手段がない。

だが、祥雲はここでも私達の予想を上回った。鈴井がストレートを狙っているとかつた途端、スプリット中心の配球に変えてきた。

「くそつ、神田のやつ……」

「……いや、多分これは孤塚さん」

確かにマウンドに立って至誠打線相手に投げているのは神田だが、そのサインを出しているのは孤塚。

鈴井に投げさせた何球かでこちらの攻め方を把握して、それに対応するような配球を考える。簡単なように聞こえるが実際にやるとなると難しい。

「正直、神田が主体となって配球を考えていると思っていたな」

「たまにそういうパターンもありますもんね」

神田は自分で配球を組み立てられる頭脳もあるが、配球に関しては孤塚に一任している。

孤塚は打撃が苦手で、肩と守備が良いだけの選手ではない。観察眼もあり、瞬時に対策を考えられる柔軟性に頭の回転の速さ。一年生から正捕手を奪えた理由はそこだ。

神田だけではなく、孤塚にも翻弄されこの回は三者凡退。これで抑えたとしても延長戦に突入するのが確定した。

「ヒット一本許したら神田に回る、それだけは何としても避けよう」

「はっ」

一番から始まる好打順だが、ここは絶対に抑えなければいけない。初球は高めのストレートで空振りを取る。二球目のスライダーは僅かに外れたので、カーブで緩急を付けつつカウントを整える。

カウント1―2から投げたのは、やはり高めのストレート。浜矢の一番得意な球種を一番投げやすいコースに投げさせる。これで空振り三振に切つてワンアウト。

あと二人を抑えればいいだけ。しかし、そう上手く事が運ぶことはなかった。

守備型といえど、相手は全国まで勝ち上がってきた名門校だ。

意地でも神田に繋ぐためにゾーン内の球はカットし、少しでも外れれば見逃して行く。いつの間にかフルカウントにされていた。

(落ち着け……ここは外しちゃいけない。かといってヒットもダメだ)

なら要求されるのは一択。困った時のインハイのストレート、これだけだ。

(しまった……！)

外してはいけないという焦りが手元を狂わせた。

一番得意なコースの筈なのに、ボールは高めに外れてしまった。

(けど、今ので完全に頭が冷えた)

三番をゲッツーに打ち取ればいい。そうすればピンチで神田を相手にしないで済む。

(インのツーシームで打ち損じろ!)

内角低めのツーシームでゴロを打たせようとした。しかし相手がつてきた作戦は。

「なっ、バント!?!」

「伊吹! 一塁!」

「はいっ!」

ベアハンドで捕球して一塁に投げて二つ目のアウトを取るが、ランナーは二塁まで進み、打席には神田を迎える。

ここで送ってくるなどと思っていなかった、そんな油断が招いたピンチ。

最終回にして最悪の展開を迎えてしまった。

第27球 裏の顔

最終回、ツーアウト二塁で打席には神田。

ツーアウトにしても彼女に繋ぐということは、それだけ打撃を信頼されているのだろう。

「伊吹、ここからコントロールミスはダメだ」

「はい……必ず構えた場所に投げます」

先程のような失態は許されない場面。マスクを着けて構えた柳谷を見てから、神田と相対する。

勝負を決するこの状況で、神田は緊張などしていない。ただただ冷静に浜矢を見続けている。

（試合慣れつてこういう事を言うのかね……）

柳谷のサインは外のボール球のストレート。

ここを打ちにくるか見送るかで、敬遠するかどうかを決める。打ちにくるのであればカウントを悪くするまでは勝負して、見送るのであれば敬遠する。

浜矢はセットポジションから遅いクイックでストレートを投じる。指に掛かった感

覚がしたし、リリースも完璧だと浜矢は自負していた。

事実、今まで彼女が投げたストレートの中では最高の質だった。

(えっ?)

しかし浜矢が次の瞬間に見たのは、神田の振ったバットがそのストレートを捉える瞬間だった。

「っ、レフト!!」

「バックホーム!」

浜矢のコントロールは悪くなかった。宣言通り柳谷の構えたコースに投げ切ったが、神田が巧すぎた。

流された打球はレフト線を破る長打となり、俊足の二塁ランナーは既に三塁を蹴っている。

浜矢も大声で青羽に指示を出しながらバックホームのカバーに走り、プレーの行く末を見届ける。

そしてその瞬間は訪れた。

柳谷が捕球し、ホームに突入してくるランナーにタッチする。

タイミングはほぼ同時、球審に全てが委ねられた。

実際はたった一秒程の静寂は至誠ナインにとって、そして浜矢にとっては何分もの時間に感じた。

球審はゆつくりと両手を広げる。

「……セーフ！」

その瞬間、敗者と勝者が決まった。

祥雲のベンチから選手全員が飛び出して、神田とランナーに飛びつく。

浜矢はといえば、ただ泣き崩れる目の前の先輩たちを見ているだけしか出来なかった。

(そっか、私が終わらせたんだ。先輩たちの夏を)

暫くして、事の重大さを理解した。

思い返せば彼女は今まで自分勝手だった。

投げたいからと登板を志願し、好きなように打ち、抑えたら叫ぶ。

ただ自分のためだけに野球をやっていた。それが今のこの状況を招いた。

「伊吹ちゃん」

「鈴木、どうしよう……！ 私、先輩たちの夏……！」

「……神田相手に、よく立ち向かったよ」

ただ一言、優しく「頑張ったね」と言われてからの記憶は、浜矢にはなかった。

ただ大声で泣き叫んだ事だけは覚えていた。

浜矢は鈴井に慰められながら何分も泣いた。

自分がしてしまった事の重さに胸が苦しめられたが、頼りになる先輩たちはもう泣いていない。

夏を終わらせてしまったのは辛い、来年以降もある1年生がずっと泣いている訳にはいかない。

「よし、もう大丈夫かな……整列しよう」

少し鼻声の柳谷の指示でナインは整列する。

祥雲の選手は喜びを必死に隠そうとしながら、至誠の健闘を讃えてくれる。

球場の外に出て空気を吸った浜矢は、ある事を思いついた。神田に挨拶に行こう、と。

ここまで来たのだから優勝して欲しい、その想いを伝えるために。

鈴井と浜矢の二人で球場の外を少し歩くと、目的の人物は一人で佇んでいた。

「神田さん」

「……………」

二人が挨拶に行くと、神田は見定めるような視線を送る。試合前の穏やかで優しそうな目ではなく、酷く冷たい目をしている。

「ふん、あの灰原監督の認めた逸材だと聞いていたが……期待外れだったな」
「……………は？」

浜矢には神田の言ったことが理解できなかった。

彼女は一体何を言っているのだろう。本当にさつきまで喜んでいた神田なのか、試合前に大人の対応をしていた神田なのか。

浜矢には、この神田を本物だと認識出来なかった。

「聞こえなかったか？ 期待外れだと言ったんだ」

「……………聞こえてるに決まってるだろ！ 何だよお前、勝ったからって調子に乗りやがって！」

「調子に乗る？ 笑わせるな、勝つのは当然だと思っていたが？」

「はあ!？」

口を開くたびに煽ってくる神田。この態度の違いからして、マスコミの前では随分と猫を被っていたということだ。

「下がって」

「……………鈴井？」

「アンタなんか伊吹ちゃんを否定されたくない」

「確かお前も一年だったな……悪いがお前も知らないな」

私は実力者しか覚えていないんだ。そう言われた瞬間、浜矢の中で何か切れた。

「っ、ふざけんなよ!! 鈴井はお前にバカにされるような選手じゃないんだよ!」

「ハッ、負け犬同士の慰め合いか? 滑稽だな」

「神田ツ!!」

自分が馬鹿にされたことも腹が立ったが、浜矢を負け犬と称されたことで鈴井の怒りも限界を迎えた。

正面切つて馬鹿にされた浜矢は、いつも冷静沈着な彼女が怒り狂っているのを見て少し頭が冷えた。

だが、それだけでは腹の虫が治らない。自分も加勢しようと一歩踏み出した瞬間だった。

「二人とも、落ち着いて!」

「翠嵐も……!」

「せんしゅー、孤塚さん……」

千秋と孤塚が三人の間に割つて入る。二人の顔と声があまりにも悲痛で、浜矢と鈴井の怒りが一時的に引いた。

「なんだ孤塚、私はただ自分の実力を把握してない奴らに現実を教えてやっていただけだぞ?」

「もう行く……！」

そう言つて孤塚は神田の背中を押す。そして一度浜矢たちの方を振り向くと、謝るよ
うに一礼をして去つていった。

「……なんだよアイツ」

「神田つて性格悪いね」

「私もまさかあんな人だとは思わなかつたよ……」

「そうだ！ せんしゅーありがとう、止めてくれて」

あそこで千秋と孤塚が止めていなければ、間違いなく殴り合いの喧嘩に発展して
いた
だろう。

すんでのところでストップを掛けてくれた彼女に浜矢が礼を言う。

「ううん、私じゃないよ。孤塚さんが教えてくれたんだ」

「孤塚が？」

「うん。三人が言い争つてるから止めるのを手伝つて欲しいって」

「そうだったんだ……孤塚は良い人そうなんだけどなあ」

何故幼馴染の神田はアレなのか。何よりアレに愛想を尽かさずにつつ付き合つて
いる孤塚は凄いな、と浜矢は思った。

「三人とも！ 大丈夫か!？」

「監督、どうされたんですか?」

「それはこつちの台詞だ！ 祥雲と至誠の選手が言い争ってるってスタッフが話してるの聞いて……!」

周りに聞かれていたとなると危ないだろう。

記者に知られば人气的に至誠を批判する記事を書かれるのは必至。それだけは阻止しなければならぬ。

「怪我はないか?」

「はい、大丈夫です。伊吹ちゃんと美希ちゃんも無事です」

「良かった……!」

灰原は心底安心した声を出す。大事な選手が傷つくのも嫌だが、それ以上に一人の間として心配していたのだ。

浜矢は灰原に心配をかけてしまった事を恥じるが、それ以上に気になる事があった。

以前バスの中で聞いた神田の話と、実際の彼女が全く違う点についてだ。

「監督は神田と知り合いだったんですね?」

「ああ……昔はあんな子じゃなかったのに、どうして……」

「今みたいに猫被ってたんじゃないですか?」

「あの年齢じゃ考えられないな、多分何かあったんだらうけど」

どんな理由があったとしても、浜矢は神田を一生許せる気がしなかった。

自分が悪く言われるだけならまだ許せたが、彼女は親友である鈴井すらもコケにしたのだ。

「……まあ、大会はもう終わった。翠嵐とも暫くは会わない、だからこの事は一旦忘れよう」

「ですね、ずっと苛ついてる訳にもいきませんし」

この言葉でようやく二人の怒りは収まり、いつも通りの雰囲気以至誠ナインの元に帰る。

「あつ、帰ってきた！　おーい！」

「大丈夫でしたか？」

「ああ、全員無事だったぞ」

この事は部内には既に知れ渡っていた。

神田があんな性格だった事に対する失望や驚き、浜矢たちに対する励ましや慰めの言葉が飛び交う。

「あまり気分は良くないかも知れないが、帰ろう」

「全国大会二回戦敗退……まあ、最近の成績考えたら充分だな」

「むしろ快進撃だよ！ 胸張って帰ろう！」

三年生の言葉を最後に、球場を後にする。

浜矢からすると柳谷たちは夏が終わってしまったというのに、自分や神田の話題になってしまったのが申し訳なかった。

学校に戻る頃には外は暗くなり始めていた。

慰労会は後日行う事になりこの場は解散となったが、浜矢は一向に帰らなかった。

「伊吹？ 帰らないのか？」

「キャプテン……」

浜矢は帰らないのではない、帰りたくないのだ。

「……最後に、受けてくれませんか？ 私の球」

神田に馬鹿にされっぱなしでは帰れない。

少しでも投球練習がしたかった。

「ああ、いいよ。思いつきり投げてこい！」

「……ありがとうございます」

浜矢は怒りをぶつけるように何十球も投げ続けた。

コントロールを気にしない、無茶苦茶な投げ方。

だがそれが心を落ち着かせてくれて、肩で息をする頃には気分が晴れていた。

「すみませんキャプテン、こんな遅くまで付き合つて貰つて……」

「気にしないでいいよ、ストレス発散になつたでしょ？」

「はい……けどキャプテンたちの夏が終わつたのに、こんな……」

「さつきも言つたけど私たちは全国に出られただけで嬉しいし、それに後輩が頑張るなら手伝つてあげたいと思うのが先輩だ」

だからそんな顔をするな、と言つて頭を撫でる。

それがどうしようもなく優しい声で、優しい手つきで。気が付いたら浜矢はまた泣いていた。

「……落ち着いた？」

「重ね重ねすみませんでした……」

「今日は謝つてばかりだなー」

はつきりと言われると恥ずかしくなり、浜矢の白い顔が赤く染まる。

「伊吹はさ、どんな投手になりたい？」

「……神田を超える投手」

「ははっ！ いいね、それ最高！ ならやっぱ新しい変化球覚えようか」

「新しい、ですか……」

以前から話していた新変化球。浜矢にはスプリットなどのフォーク系が良いと話した記憶があった。

「私たちは引退だからあんま練習手伝えないけど……アイツがいるからな」

「アイツ？」

「すぐ分かるよ」

当然、浜矢に心当たりは無い。

頭をフル回転させて思い付く限りの人物を脳内に描くが、誰もピンと来なかつた。

「そんな考え込まないでいいって！ 多分、何日か後くらいに分かるんじゃない？」

「そんなに近いんですか!？」

「多分ね……アイツならきつとそうする」

浜矢的には柳谷がこんなにも信頼を寄せている相手とは一体誰なのか、という方に興味を向いた。

「伊吹、前を向けよ」

「え……?」

「神田に言われた事をずっと気にするよりも、今の自分に何が出来るか、何をしたら成長出来るかを考えるんだ」

過去を引きずっていても仕方ないだろ、と加える。

柳谷の言う通りだ。神田を意識するあまり自分を見失っては意味がない、あくまでも自分の為になる事をしなくてはいけない。

「それで伊吹はエースになるんだ」

「エース……」

「そう、至誠最高のエースに。伊吹ならそうなれる素質はある」

だから、私たちの夢全国制覇を叶えて欲しい。

真っ直ぐ見つめながら、柳谷は強い意志を持って浜矢に夢を託した。

「……わかりました、必ず叶えます」

「期待してるよ、未来のエース」

この二人がバッテリーを組むことはもうない。

次に誰と組む事になるのか浜矢が知る由はない。

その相手は二年後に全国最強バッテリーと呼ばれた片割れである事も、まだ知らない。

第28球 来年に向けて

祥雲学院との激戦から二日経ち、至誠ナインは学校の一室で慰労会が行われようとしていた。

「皆のおかげで全国大会まで進めた、ありがとう！ 長ったらしい話は皆嫌いだから……早速乾杯！」

「かんぱーい！」

柳谷の乾杯から慰労会、もといパーティーが始まった。料理は食べ盛りの運動部ということを考えて大盛り、飲み物やお菓子だつて大量にある。

「この教室つていつも何に使つてるんですか？」

「私らはパーティー部屋つて聞いてるけど」

「私がいた頃からそれ言われてるぞ……」

少なくとも十年前には定着していた。

だが普通の学校にパーティー専用の部屋なんてあるはずなどない。

「元は会議か何かに使う予定だつたらしいけど、いつの間にかパーティー部屋になつたらしいぞ」

「立地的にもしょうがない気が……」

「二つ隣が調理室だもんなあ」

何だったらこの部屋には冷蔵庫もあるのです、直前まで飲み物やアイスを冷やせる。これではパーティー部屋と言われても仕方ない。

「ほら伊吹！ もつと肉食え〜」

「ちよつ、糸賀先輩!? 流石にその量は無理ですつて!」

「じゃあ野菜もあげるね」

「じゃあじゃないわ! 肉だけじゃ量食べられないって意味じゃないわ!」

何故か鈴井からも野菜を押し付けられる。鈴井も大概細いのだから、そっちもターゲットにしろよと浜矢が考えていると。

「美希ちゃんも細いからもつと食べようね?」

「……うん」

「やーい、言われてやんのー!」

「伊吹ちゃんうるさい」

鈴井は浜矢には当たりが強いが、千秋には滅法弱い。というより千秋に対しては全員甘い。

小動物のようで可愛らしく、かと思えばノックも楽々こなせて相手チームの分析もし

てくれる千秋に強く当たれというのも酷な話だが。

「みなさーん、お菓子も作りましたよ〜」

「やった！ 小林せんせー大好きです！」

小林は家庭科の教諭なので当然料理は上手いし、お菓子作りもお手のもの。甘めのチョコクッキーが大会で疲れた体に沁み渡る。

「そういえばせんせーって何で顧問になったんですか？ 野球好きってわけでも無さそうですし……」

「きっかけは灰原監督に声をかけられたからですね」

「へー、監督が……」

「私も同年代の方がいいし、それに部の評判もあんな感じだったから、せめて顧問だけはクリーンなイメージのある人にしたかったからな」

確かに小林にはクリーンなイメージがある。それよりも、この二人が同年代だという事に驚いている者が多いが。実はこの二人は1歳差。

「私も顧問を持ちたいと思ってましたし、それに教師というのは頑張ってる子を応援したくなるものですから」

「嬉しい〜と言ってくれますね〜」

「ふふ、特に野球部の子達は県外から来てる子が多いですし、そんな姿を見たら支えてあげたいと思うものですよ」

この中で県内出身は五人だけ。全部員の半分が県外出身というチーム、比率としてはかなり多い。分母が小さいというのもあるが、分母が小さい割に県外出身が多いというのもおかしな話だ。

「これからも活躍する姿を見せて下さいね」

「任せてください！」

最初の頃は担任である小林にプレーしている姿を見られる事に恥ずかしさを感じていた浜矢だったが、今ではすっかり慣れたようだ。

先輩後輩という垣根を越えて楽しく話をしていても、終わりの時間はやってくる。というより現実には引き戻されると言った方が正しい。

「腹も膨れたところでそろそろ本題に入るぞー」

「本題って何ですか？」

「キャプテン決め」

灰原がそう言った瞬間、二年生がざわついた。

誰がやるのが一番良いのか、誰が向いているのかを各自考えているようだった。

「ちなみに現キャプテンはどう思う？」

「私ですか？ うーん……神奈とか？」

「一年全員賛成です！」

「勝手に人の意見を言わないでよ……まあ賛成だけど」

一年生組は反省会などで、金堂が周囲をよく見ている人だというのは知っている。

実際、二年生の中で一番キャプテンに向いているのは金堂だろう。

「私かあ……皆はそれでいいの？」

「部長会議とか嫌だから、神奈お願い！」

「私も嫌だ！」

「……同じく」

二人揃って部長会議のことを嫌いすぎだ。

「部長会議ってそんなに面倒なんですか？」

「神奈以外に予算の交渉とか出来ると思う？」

「あ……無理ですね」

菊池と山田は勢いだけで乗り切りそうだし、青羽はその場の全員を怖がらせてしまいう。それが金堂なら物腰も柔らかいし、交渉術にも長けていそうなので安心して任せられるということだ。

「金堂はそれでいいのか？」

「ここまで言われればやるしかないですね」

「じゃあ今からキャプテンは金堂だ！」

「イエーイ！ 神奈キャプテン！」

今ここに新しいキャプテンが誕生した。

彼女は言動で引つ張っていくタイプでは無いが、人望があるので安心して見ていられる。それに後輩たちも相談しやすい雰囲気を出しているのも良い。

「それともう一つあるんだけど、秋大はどうする？」

「どうするって……何がですか？」

「部員足りないけど、連合チームで出場する？ それとも出ないで基礎練するか？」

至誠の唯一にして最大の弱点であった部員数。三年生が抜けた秋以降はまた試合が出来ない人数に逆戻りしてしまうのだ。

「メリットとデメリットを言った方がいいんじゃないですかね」

「そうだな……まずメリットとしては勝負勘が鈍らないし、当然だけど実戦でプレー出来る」

野球選手にとっては、実戦でプレー出来る事がどれだけ経験値を得られることか。勝負勘もすぐ鈍ってしまうし、人の投げる球を打てるというメリットもある。

「アメリカはまず連合チームを組めるか分からないし、組めたとしても練習時間が激減する」

「お互いの高校を行き来しないといけないですもんね」

「そう、そして公平にメンバーを選ばなきゃいけないからチームの総合力は落ちる」

決まりはないが、お互いの高校から半々くらいの選出をする方が後腐れがない。だがその分チーム力は落ちてしまう。

「新しい事試したいなら出場しなくてもいいし、そんな事より試合したいんなら出場してもいい」

「ここは早速キャプテンに決めて貰おうか」

「ええ……その前に、まず新しい事試したい人はいる？」

浜矢は新変化球を覚えたいので、控えめにだが挙手する。彼女の他に手を挙げたのは鈴井と青羽だ。

つまり3対2、金堂は手を挙げてないので彼女次第では同率になる。

「一番悩む割合だね……どうしよう」

「神奈的にはどうしたいんだ？」

「私は別にどっちでもいいんですけどよね、みんながやりたい方で」

周囲を見ているからこそ、全員が納得出来るような選択をしたいと思っているのだろ

う。

「……けどそうだね、大会を通して基礎的な技術が足りてない人も多く見られたし、今回は見送ろっか!」

「オツケー! ならばバリバリ練習しよう!」

「私もさんせー!」

浜矢のスタミナやコントロール、鈴井のパワー、山田や青羽のミート力不足など、基礎能力が足りてない所はあった。

そこを鍛えればもつと上を目指せる、なら全国制覇を目指している彼女たちはやるしかない。

「じゃあ今回は見送りって事で……その代わり、大会出ると変わらないくらい厳しくいくからな!」

「かかってこーい!」

「乗り越えてやりますよ!」

夏大を通して全員、自分の課題が分かった。なのでこんなに練習に乗り気なのだ。

「ついでに反省会……する?」

「……せつかく全員で集まれたんだしやろう!」

という訳で予選と全国の反省会を開始。いきなりだったが、誰も反対しなかったのはこうなると予想してたから。

「じゃあ三年を除いた背番号順に……金堂！」

「打率が6割切ったのと、あとは長打率ですかね」

「打率5割で長打率も5割だもんな」

「ヒット全部単打は流石に駄目だと思つているので、少しでも長打力を身に付けたいです
すね」

そう、彼女の安打は全て単打だったのだ。得点圏でヒットを打ったにもかかわらずラ
ンナーが還つてこられない場面もあつたので、確かに反省点ではある。

「じゃあ次は菊池」

「まあ普通に打撃全般つすよね……2割はちよつと」

「いくら守備が良くても上位で2割はな……」

「だからせめて粘れるようになりたい！」

菊池が打てるようになれば打線に厚みが出る。そして何より、強打のセカンドという響きに彼女は惹かれるタイプだ。その話を持ち出せば勝手にやる気になってくれるだろう。

「次、山田！」

「やっぱミート力ですかね……全国は2割切っちゃったし」

「唯一のヒットがホームランってのはなかなか面白いけどな」

「ホームラン打ってても打率低いと使いにくいですよね……」

打順に困ると灰原は常々思っている。なので青羽共々、打順がコロコロ変わっていた。

「鈴井は？」

「私は……パワーですね、神田のストレートに力負けしましたし」

単打でも盗塁を決められる脚もあるしそこまで気にしなくてもいいのだが、本人的には神田に打ち取られたのが相当悔しかった模様。

「青羽！」

「私も沙也加と同じで確実性ですね、せめて得点圏に強くなりたいです」

「二人が安定して結果残せれば、来年の打線も強いからな」

青羽は長打力を武器としながらもケースバッティングを考えて打席に入っていた。それを実力不足で実行出来ないのが彼女の悩み。

「最後は浜矢！」

「野手としてはまず打撃が酷かったので選球眼鍛える所からですかね……投手としては、コントロールと変化球の精度ですね」

変化球を見極められる眼が欲しいし、ストライクに安定して投げられるコントロールも欲しい。

あとはもつと変化球の精度を上げなくては全国の相手には通用しないという事も知れた。

浜矢にとっては沢山の収穫がある大会だった。

「自分の課題が分かっているようで結構！ それを実現する為にはとにかく分析と練習の繰り返ししかない、この秋と冬で鍛えるぞ！」

「はいー！」

キャプテンも決まり、各々の目標も決まった。

大会も無いのでじっくりと時間をかけて練習をできるし、慌てず怪我無く弱点を克服していける。

第29球 新たな相棒

慰労会の翌日の練習日。各自の課題を克服するために、それぞれ特別なメニューをこなしている。

「なんで私は今更基礎トレメインなんですか〜！」

徹底して基礎トレを命じられた浜矢が嘆く。

「基礎が足りてないから制球も効かないし打撃も酷かったの。春までに身体作るぞー」

「ボール触りたいんですけど……」

「あとでな」

周りがボールやバットを使ったトレーニングをしているのに、自分一人だけ基礎トレなのは寂しい。

しかし柳谷もウエイトをしている事を思い出し、気合を入れ直す。

「にしても随分と静かになりましたね」

「三年が居なくなっただけ……室内にいるけど」

「スカウトの人も来てるんですけど」

「そうそう、全球団から来てるんだぞ」

中でも柳谷はかなり注目を集めていて、複数球団にドラフト指名されるのではないかと予想されている。

「二回戦敗退でここまで注目されるんですね」

「まあな、それに全国出てなくてもドラフト指名される奴もいるし」

柳谷のように打ちまくっているのが前提ではある。二年間連合チームだということに38本という輝かしい実績を残した逸材を、プロのスカウトは見逃さなかった。

「浜矢は新しい変化球覚えるんだったよな」

「はい！ フォーク系のを覚えるつもりです」

「フォークは難しいから、粘り強くな」

「それは承知してます！」

フォーク系は負担が掛かるし投げるのも難しいが、浜矢はそれでも投げたいと思っ
ている。

中上の想いを引き継ぎたいし、自分の投球スタイルにもフォークが一番良いと理解
しているから。

「……よしつ、OK！ 全員休憩しろよー」

「やったー！ もう疲れました……」

「まだ何時間もあるんだから頑張れ」

先程の会話から30分後、千秋お手製のドリンクを飲みながら一旦休憩。全員違うメニューではあるが、疲れているのは同じだ。

「そーいや鈴井は何処ですか？ さつきから見当たらないんですけど……」

「もうすぐ来るよ」

鈴井は途中で抜けてから戻ってこない。浜矢には方向的に部室の方に行ったという事しか分からない。

「お待たせ」

「おー、鈴井待ってた……って、その格好！」

「うん、いろんな意味でお待たせ」

鈴井はキャッチャー防具一式を身につけ、浜矢たちの前に現れた。祥雲に敗れたあの日に柳谷が言っていたアイツとは鈴井のことだったのだ。

「これからは私が伊吹ちゃんのを受けるから、生半可な投球なんてさせないからね」

「ああ！ 鈴井こそ逸らすんじゃないぞ！」

「誰に言ってるの？ 私は絶対逸らさないよ」

浜矢は鈴井とバッテリーを組む事に嬉しさを感じているが、とりあえず隣で様子がおかしい千秋が気になって仕方がない。

「……せんしゅー、解説よろしく！」

「うんっ！ 美希ちゃんが高い捕球能力と送球精度、そして投手それぞれに合ったリドを操る名捕手だよ！ これをずっと言いたかったんだあ〜！」

「美月ちゃんもお待たせ」

ようやく真の鈴井の解説が出来て嬉しそうな千秋。鈴井の事をここまで嬉しそうに解説するのは千秋くらいしか居ない。

「てかキャッチャー嫌なんじゃなかったの？」

「まあそれは後で……それより早く投げてよ」

「そうだな、話は後にしてとにかく投げるか！」

満を辞して同い年バッテリーの投球練習。浜矢は今日初めてボールに触るので、まずは軽めのキャッチボールから。

「私捕手やってたこと言っていないんだけど」

「あつ……」

「美月ちゃん経由でしょ？ 何となく分かってた」

そう、鈴井からは一度も捕手をやっていたなどと言っていない。それなのに浜矢がその事を知っているとすると、千秋が灰原経由としか考えられない。

「……打撃の良い人に正捕手の座を奪われてね、捕手をやってたって事を話したくな

かったんだ」

「そこに相関性ある？」

「追いやられてシヨートをやってるって知られたくなかったの」

以前浜矢と千秋が話した時に鈴井はプライドが高いから言いたくないのではと予想していたが、それが的中していた。

「それに、また捕手をやって席を奪われなくなかったしね」

「けど今やつてるじゃん」

「うん……その気持ち以上に、伊吹ちゃんを鍛えたいって気持ち湧いてきたから」

捕手と投手は互いに成長し合えるポジション。だからこそバッテリーの関係は重要なのだが、合点がいかない部分がある。

「でもいきなりじゃない？」

「……アイツに、神田に伊吹ちゃんを馬鹿にされたのが許せなかったから」

「そこ関係だったか」

「私は神田を見返したい、伊吹ちゃんはこんなものじゃないって教えたい」

「だから自分が鍛えてやるってか……」

冷たく見えて意外と仲間想いな鈴井の考えそうな事だ。だが浜矢はその考えを面白いと感じた。

「ビシバシ鍛えてくれよ！ 私だって神田をギャフンと言わせたい！」

「伊吹ちゃんならそう言うと思ったよ、もう投げられるでしょ？」

「ああ！ 私の球、しっかり受け止めてくれよ！」

「だから誰にそんな事言ってるのってば」

浜矢が以前一度だけ受けて貰った時に感じたのは、とにかくキャッチングが上手いということ。

捕球してからミットが一切ブレず、良い音も出すので投手からすればとても投げやすい相手だ。

「じゃあまずストレート」

「オツケー」

あの時は防具付けていなかったのも、全力と言っても加減はしていた。しかし今はフル装備なので本気で投げてても問題は無い。

ノーワインドアップから放たれた良い回転のストレートが鈴井のミットに収まる。

「ナイスボール！ いいストレート投げるじゃん」

「まあな！ これでも神奈川で防御率2点台だし」

「ノビがあるから高めに投げると活きるね」

「……それ柳谷先輩にも言われたんだけど」

至誠の捕手は似たようなことを考えるのか、それとも浜矢のストレートを見た捕手は全員そう思ってしまうのか。普通に考えて後者だろう。

（これからもインハイに要求されそうだから、当てないようにコントロール付けないと）
ノーコン投手にインコースは要求しにくい。自分がそうならないように、そして強打者を抑えるためにも浜矢はコントロールを身に付けると誓った。

「スライダーとツーシームも良いね、カーブは微妙だけど」

「うっ、やっぱカーブはダメか……」

「まあフォーク覚えればカーブ投げなくても平気だと思っし、早く覚えようね」

「けどどうやって覚えよう……中上先輩も投げられないし」

中上はスプリットとフォークもどきは投げられるが、本物のフォークは投げられない。だが浜矢が欲しているのは変化の大きいフォークなのだ。

「伊吹ちゃんがよければだけど、オリジナルのフォークを考えるっていうのはどう？」

「オリジナルの？」

浜矢がウンウン唸っていると千秋から助言が送られる。オリジナルという事は握りから考えなければならぬ。

「それこそ中上先輩にも手伝って貰って、軌道も握りも伊吹ちゃんだけの物にしちゃう

のー！」

「……いいなそれ！ 私だけの変化球！」

「そう！ それにオリジナルの変化球なんてエースっぽくない！」

「ばい！ よっし、早速先輩のとこ行くぞー！」

スカウトに迷惑はかけないように、と灰原に念を押されてバッテリーは室内練習場へ向かう。

そこでは三年生が練習しているのをスカウトが鋭い視線で見つめており、浜矢たち一年生には少し居心地が悪く感じた。

「あれ、伊吹に美希？ どうしたの？」

「実は先輩にお願いがあるんですけど……」

「お願い？ 私にできる事ならいいよ」

浜矢は握りも軌道もオリジナルのフォークを作りたい事、その為に協力して欲しいという旨を伝える。

「オリジナルねえ……面白そう！ 手伝うよ！」

「やった！ ありがとうございます！」

「すみません、いきなりこんな事頼んでしまって……」

「可愛い後輩の頼みは聞きたいのが先輩だから」

中上はそれぞれどんな軌道を描くのかを解説しながら、様々な変化球の握りを浜矢に教える。

浜矢はそれを見てどんな軌道のフォークにしようか考えるが、どうにも思い浮かばない。

「どういうフォークにするのかは決めてるの？」

「誰も投げた事がないような球ってことしか……」

「ならそうだな……斜めに落ちる、とかは？」

「えっ、そんなこと出来るんですか？」

浜矢が尋ねると、中上は柳谷を座らせてその一球を投げ込んだ。それは彼女が得意とするスプリットだったが、打者の手でスライド気味に変化した。

「今の見たこと無いんですけど……」

「最近完成したからねー」

「スライド気味に曲がるスプリット……私もそんなフォークがいいです！」

「オーケー、じゃあまずこれがさっきのスプリットの握りね」

普通のスプリットと握る位置をズラすだけ。これだけで軌道が変わるのだから変化球は面白い。

「スライドするフォーク……スライドフォーク？」

「おつ、いいネーミングセンス！　じゃあ私のはスライドスプリット？」

「カツコいいですね！」

「こうやって色々引き継がれていくのって良いね」

先輩から後輩へ引き継がれていくのは想いだけではなく、こうして技術も引き継がれていく。

「じゃあ握り試してみよっか……けど、かなり時間はかかるからね？」

「それは承知してます！　それでも投げてみたいんです……誰にも打たれないような球を」

そんな球が存在しないのは理解しているが、打たれる確率が格段に低い球を生み出すことはできる。

であれば、浜矢はそんな球を開発するだけだ。

「分かった、じゃあ色々試そう」

「はい！」

まずはスタンダードなフォークの握りから。普通のフォークが投げられなくても平気だが、投げられた方がアレンジがしやすくなる。

基礎をこなしから応用に挑戦する方が分かりやすいのと同じだ。

「難しい……」

「フオークはねえ……私も投げられないし、ちよつと苦戦しそうかな」

しかし基本ですらそう簡単にはいかず、すつぽ抜けて高めに行ったり地面に叩きつけてしまったりと苦戦している。

「でも時間は沢山ありますし、頑張ってみます！」

「その意気だよ！ 私も時間ある時は手伝うし」

もしドラフトで指名されれば中上らは1月に球団の寮に入る。それが終わると新人合同自主トレや春季キャンプが待っている。

つまり浜矢が教えて貰えるのは年内まで。あと四ヶ月でこの変化球を完成させなければいけない。

「……間に合わせなきゃな」

「ん？ 何か言った？」

「いえ、何でも！ 握りは分かったので、先輩も自分の練習をして下さい！」

「そう？ じゃあ遠慮なく」

浜矢は先輩たちがここから居なくなる前に、どうしても見せてあげたかった。自分が成長した姿を。

番外編 夏大総評

中上佳奈恵

投球回 2 7 被安打 2 3 四死球 3 奪三振 3 4 失点 6

自責点 6 防御率 1. 5 6 W H I P O. 9 6 奪三振率 8. 8 1

打席数 2 5 打数 2 3 安打数 6 打率. 2 6 1 本塁打 1 打点 4

四死球 2 三振 4 出塁率. 3 2 3 長打率. 4 3 5 O P S. 7 5 5

【備考】

防御率 1. 5 6 と エース として 完璧な 投球 を した。

奪三振率の高さと W H I P O の 優秀 さ が 際立 つ。

打撃でも一本の本塁打を放ち長打力をアピール。

柳谷真衣

打席数 2 6 打数 2 2 安打数 1 1 打率. 5 0 0 本塁打 4

打点 1 5 四死球 3 犠飛 1 盗塁 2 三振 3 出塁率. 5 3 8

長打率 1. 2 2 7 O P S 1. 7 6 5

【備考】

本塁打、打点共にチームトップを誇る。

四番らしい得点圏での強さを見せつけた。

二盗塁と脚も使えることをアピールし、スカウトを唸らせた。

金堂神奈

打席数 26 打数 24 安打数 14 打率・583 打点 3

四死球 2 出塁率・615 長打率・708 OPS 1.323

【備考】

チームトップの打率を誇る次期キャプテン。

打率に対し長打率、打点が低いのがネックか。

木製でありながらこれだけの成績を残せる安打製造機に、プロも注目。

菊池悠河

打席数 27 打数 24 安打数 5 打率・208 打点 2

四死球 1 犠打 2 盗塁 4 三振 10 出塁率・240

長打率・292 OPS・532

【備考】

チーム最下位の打率だが盗塁数は評価できる。

打撃での鬱憤を晴らすかのような美しい守備は、何度も球場を沸かせた。

山田沙也加

打席数 26 打数 25 安打 6 打率 .240 本塁打 3 打点 7
 犠飛 1 三振 9 出塁率 .231 長打率 .600 OPS .831

【備考】

長打力は魅力だが確実性の無さが課題。

守備でも2失策と精細さを欠いた。

打率改善されれば、守備には目を瞑り1位指名される可能性がある。

鈴井美希

打席数 25 打数 22 安打数 10 打率 .455 打点 4
 四死球 2 犠飛 1 盗塁 1 三振 3 出塁率 .480
 長打率 .727 OPS 1.207

【備考】

高打率を誇るニューホープ。

長打力の無さが気になるが、脚の速さでそれをカバー出来る。
守備でも一年生ながら堅実なものを見せた。

青羽翼

投球回 6 被安打 7 四死球 3 奪三振 5 失点 4 自責点 4

防御率 4.67 WHIP 1.67 奪三振 5.83

打席数 25 打数 24 安打数 6 打率 250 本塁打 2 打点 6

犠飛 1 三振 7 出塁率 240 長打率 538 OPS 823

【備考】

現実性が不安だが、得点圏での強さとパワーは魅力的な選手。
来年以降は野手に専念すれば打撃面が改善される可能性が。

糸賀由美香

打席数 27 打数 25 安打数 9 打率 391 本塁打 1 打点 5

四死球 3 犠飛 1 盗塁 5 三振 3 出塁率 444

長打率 783 OPS 1.227

打率、出塁率、盗塁数どれをとっても文句無しの一歩打者であり、パンチ力もある。守備でも両翼をサポートする広い守備範囲と強肩を誇る。

浜矢伊吹

投球回 19 被安打 22 四死球 4 奪三振 20 失点 8
 自責点 7 防御率 2.58 WHIP 1.37 奪三振率 7.37
 打席数 25 打数 23 安打数 5 打率 217 本塁打 1 打点 2
 四死球 2 三振 12 出塁率 280 長打率 261 OPS 478

【備考】

この夏注目を集めた期待の新星。

安定した投球でチームのブルペンを支えた。

反面野手としてはあまり良いところは無かったが、蒼海大戦での勝ち越しホームランを放った。

第30球 プロになるということ

浜矢はスライドフォークの開発に向け、鈴木や中上と練習を行なっている。

かれこれ一週間スライドフォークの練習だけが続けているが、全く完成する気配は無い。

「ん〜……難しいなあ」

「フォークは投げられるようになったんだけどね」

「けど制球効かないですし、もうちよつとフォークの精度も上げてからの方が良いですかね？」

「どうかな？ スライドフォークを制球しやすい握りにすれば平気だと思うけど……」
握りもまだまだ試行錯誤中。そもそもスライド気味に曲げる、という事しか決まってい
ないのだから当然だが。

「よーつす、やってるねえ」

「糸賀先輩！ 今日はグラウンドなんですネ」

「そうそう、スカウトの人がマシンも見たいって」

「なるほど……そういえば木製なんですネ」

プロや大学に入れば木製バットのみを使用する。

夏が終わってからすぐ使い始めて、高校生のうちに慣れておけというのは灰原談。

「いやー、木製難しいよ。神奈の凄さを実感した」

「キャプテンって一年生の頃から木製使ってたんですか？」

「そうそう。入部の時にも木製持ってきてて、凄い新入生が入ってきたなと思ってた」

一年生が木製バットを担いで来れば周囲は驚くだろう。しかもそれで結果を残しているので余計に。

「キャプ……柳谷先輩は苦戦してるんですか？」

「最近慣れてきたっばいよ？ めっちゃ飛ばしてる」

糸賀曰く、最初と比べて打球の伸びが違うのだと。

そんな柳谷はスカウトに打撃は知っているので守備の実力も知りたいと言われ、室内でノックを受けている。

「木製ってどこが難しいんですか？」

「まず芯が狭すぎるんだ、金属とか最悪根本でも飛んでくでしょ？ 木製でそれやったら折れるからね」

糸賀はコンコンとバットを指で叩いていき、音が変わった箇所を何度も叩いた。

「コン」だけ音が響かないでしょ？ 木製の芯ってこの部分だけなんだ」

「狭つ……ここじゃないと打てないですよね？」

「打てない事もないけど、さつきも言ったように折れる可能性が高くなるし、めっちゃ手が痺れる」

その衝撃はしばらく残る上に手に豆が出来やすくなる。木製にムービング系が有効な理由が分かったと糸賀は付け足す。

「芯で捉えた場合、木製の方が飛んでくって聞いた事あるんですけどアレって本当なんですか？」

「ほんとほんと、真衣とか金属の時より飛ばしてるし。まあでもそういうのは技術ある人だけなんだろうけど」

力任せに打ったところで技術が無ければフライを飛ばすことすら出来ない。それが木製の難しいところであり、面白いところだ。

「……なんか、本当にプロになっちゃうんですね」
「なに〜？ 寂しい〜？」

「正直、凄く寂しいです」

右も左も分からない自分に、優しく教えてくれた先輩たち。実力もあり、チームとしても浜矢個人としても居なくなっただけでほしくない。

「でも居なくならなくちゃいけない……それが高校野球だから」

「悲しいけど、先輩達がまた一つ上の舞台に行くつて事ですもんね！ 応援しますよ！」

「ありがとう、まあ指名されなきゃ大学だけだ」

「先輩たちなら大丈夫ですよ！」

予選でも全国でもこの三人は素晴らしい成績を残している。素行不良というわけでもないのです、余程の事が無い限りは指名されるだろう。

「嬉しいこと言ってくれるね〜！ んじゃ、そろそろマシン打たないと」

「ですよね！ すみません、時間を頂いてしまつて」

「いいつていいつて！」

糸賀はスカウトに礼をしてマシン打撃を始める。本人はまだ苦戦していると言つていた木製も、外野から見たら十分対応出来ているように見えた。

「伊吹もいずれ木製で打てるようにならないとね」

「キャプテン……ですよね」

「最初は大変だと思ふけど、慣れれば打てるから」

木製でヒットを量産している金堂が言うと言得力がある。しかし彼女は簡単そうに木製で打っているが、三年生ですら苦戦しているのを見ると金堂は凄いのだなと、浜矢は改めて思う。

「キャプテンも最初は苦労したんですか？」

「勿論。でもずつと木製で打ちたかったから」

「その理由って教えて貰えますか？」

「特に深い理由は無かったんだよ？　ただ単にプロの選手が使ってるのと同じのを使いたかっただけ」

それで打ててしまうのだから恐ろしい。彼女はプロの球に目が慣れてしまえば、現段階でもある程度は打てるだろう。

「正直私、バットの事とか詳しくないんですよ……バランスとか」

「今使ってるのってどれだっけ？」

「えーっと、確かミドルバランスってやつです」

「一番振り抜きやすいし、良いと思うよ」

浜矢は店でマイバットを買う際、店員にミドルが初心者向きだと言われたのでそれを使っている。

彼女は他のバランスのバットを振ったことが無いので、真偽の程は分かっていない。

「あとはトップと……何でしたっけ？」

「カウンターね」

「それです！　その違いが分からないんですよね、どういう打者が向いてるのかとか」

当然だがバットによつて違いがあり、打者のタイプによつて使いやすいバットも違うのだが浜矢はよく分かつていない。

彼女はとりあえずミドルが使いやすいと初學者向きらしいという程度の知識しかない。

「まずトップはその名の通りバットの先端に重心があるタイプね、操作性は低いけど上手く振つてあげれば飛距離は出るよ」

「確か柳谷先輩はトップでしたよね」

「パワーヒッターが使つてるイメージがあるかな」

柳谷は上手くバットを扱えるので難しいトップバランスのバットでも飛ばすことができる。

「そしてミドルバランスは、とにかく振り抜きやすいのが特徴。操作性も飛距離も真ん中だから初心者にも安心」

「だから私はミドルをオススメされたんですね」

実際に浜矢は振りやすいと感じたので店員のオススメは間違つていなかった。いくら振り抜きやすくて打者の技術が無ければヒットは打てないという事を彼女は証明してしまつたが。

「最後がカウンターバランス、操作性は高いけどあまり飛距離が出ないタイプだね。ち

なみにカウンターは短く持つのが良いらしいよ」

「バットは短く持ちたくない派なんですよね……」

「ならトップかミドルだね」

トップは操作性に難があり、今のバットを振り抜きやすいと感じているのであれば変える必要は無いだろう。

「木製つて長さとか重さを自由に換えられるんですよ？」

「そうだね、私のは87cm840gだよ」

「えっ、軽くないですか？ それに長い……」

「私はとにかくどんなコースでも打ちにくいからね、操作性を重視してるんだ」

こうなったら他の選手のバットも気になるので、浜矢は手始めにマシン打撃を終えたばかりの糸賀に声を掛ける。

「糸賀先輩！ バットつてどれくらいの長さで重さですか？」

「んー？ 私のは確か85cmで900gだよ」

「キャプテンのと比べると重いですね」

「神奈のが軽すぎるだけなんだけどね」

近年は軽いバットを使用する選手が増えてきているが、それでも金堂の840gというのは軽すぎる。

「柳谷先輩はどうですか？」

「えっ、私？ ……86cmで950gだったかな」

「重っ！ ほぼ1kg振り回してんのね……」

「まあパワーはあるからな、プロの球に対応出来なかつたら軽くするつもり」

「こうやって微調整を加えられるのも木製の強みだ。なおコスパは非常に高い模様。」

「今まで高卒の選手が打てないのは木製に慣れてないからだと思ってたんですけど、プロの球に対応出来ないってのもあるんですね」

「速さも変化量もキレも段違いだからなあ」

「それにコントロールも良いしね」

「だから高卒は出てくるまで5年待てとか言うんですね」

高校からプロ、社会人などに行くのと一気にレベルが高くなる。それに加えて慣れない木製バットに狭くなったストライクゾーンが壁となり、余計に打てなくなる。

「まあ私は一年目からレギュラー狙ってくけどな」

「さっすが真衣！ 私は一軍上がるの目標かなあ」

「私は開幕一軍狙ってくよ！」

それぞれゴールは違えど、シーズンの最後に一軍に居るといえるのは一致している。

本当に高卒一年目の選手がレギュラーになった場合、そのチームのファンは大歓喜するだろう。

特に柳谷。もし高卒捕手がレギュラーなんて事態になれば、向こう10年は捕手の心配をしなくて済む。

「先輩方なら出来ますよ」

「私もそう思います！」

「ほんと〜？　ありがと、一軍定着できるように頑張るよ」

良くしてもらった先輩たちがプロで活躍する姿を見たいというのは、後輩なら当然の思いだろう。

「よしっ！　私も練習頑張ります！」

「私も手伝うよ」

「ありがとうございませす！　目指せスライドフォーク完成！」

一刻も早くスライドフォークを完成させ、プロ注目の選手達すら手玉に取るような投手になりたい。

その為に浜矢は今日も、スライドフォークの開発を進めていく。

第31球 季節よ巡れ

全国大会も終わり、ドラフト会議やU-18が注目を集めている。U-18に選ばれた選手がいる学校は今日か明日に連絡が来る。

「誰か選ばれるかなあ」

「柳谷先輩は選ばれるかもね」

「だよなく、それに今年の捕手って他に凄い人いたっけ」

「うーん……孤塚さんが居るけど一年生だし、それに打撃はあんまりだからなあ……」

柳谷が選ばれるのであれば、後輩たちは身近に日本代表がいると自慢できる。

「てか祥雲優勝したんだよな……」

「神田さん凄かったねえ」

「性格は酷いけどな」

神田と孤塚の存在もあり祥雲は今年全国制覇を果たした。よかったね。おめでとう。

決勝戦で先発した神田は5回を1失点。

そして二番手の三年生が2回を無失点で抑えて勝利。

「来年こそウチが優勝するぞー」

「その為にもスライドフオークを完成させなきゃね」

「なんとか春までには……」

未だスライドフオークは完成していない。良い所までは来ているが、あともう少しという所で躓いている。

「柳谷はいるか？」

「あれっ、監督？ 先輩なら打撃練習やってますよ」

「そうか、ありがとう」

もしかするとU—18の電話が来たのでは、そう思った浜矢と千秋は顔を見合わせる。

部員たちはどこか落ち着きのない様子で灰原たちの会話が終わるのを待つ。

「全員集合！」

「はい」

「なんですか？」

数分後、灰原から集合がかかる。

全員が揃うと灰原は皆の顔を見渡して一言。

「柳谷がU—18に選ばれたぞ！」

「……えっ!? 本当ですか!?!」

「真衣！やったじゃん！」

「まさか選ばれるとは思ってなかったよ……」

むしろ柳谷が選ばれなければ誰が選ばれるのか。打てて走れて守れる捕手など、選ばれない理由がない。

「他の選手はいつ分かるんですか？」

「明後日だな」

「うわー楽しみ〜！」

一体誰が日本代表に選ばれたのだろうか、そんなワクワクを抱えながら彼女たちは二日後を待った。

そして当日、落ち着かない様子でテレビの前に待機する至誠サイン。

「そろそろ始まるぞ……！」

「相良は選ばれるかな」

「どうだろう……選ばれそうな気はするけど」

柳谷が選ばれたのは既に分かっているが、それ以外に誰が選ばれたのかは知らない。

《蒼海大相模、相良陽菜選手》

「うわっ、いきなり選ばれた！」

「相良……！ 不甲斐ない投球するんじゃないぞー」

蒼海大相模のエースにして中上のライバル、相良の名が呼ばれた。背番号が18ではないのでエースという訳ではないが。

《至誠高校、柳谷真衣》

「真衣めっちゃ緊張してるじゃん」

「柳谷先輩でも緊張することってあるんすね」

「久しぶりにあんな緊張してる真衣見たよ」

柳谷は「緊張しています」と言っているような表情で登場する。ユニフォームは似合っているのだが、どうしても表情に目がいってしまう。

「てか10番って正捕手じゃない？」

「そっか、U-18って捕手は10番からか」

我らの柳谷が日本代表の正捕手。至誠の生徒からすればとても誇らしい事だ。

《蒼海大相模、山城斎》

「おっ、山城も選ばれた」

「……50本打つてますからね」

「プロ注は基本選ばれるよね」

数少ない三年生のファースト。打力と守備力を兼ね備えた山城が選ばれるのは当然

だろう。

神奈川勢は山城で最後だったが、全国のスター選手が集結した。今年は優勝を狙える力があると、代表監督も断言している。

「んー……、よし！ 練習するか！」

「ですよね！ 私も打撃練習したくなりました！」

「沙也加はいつもそれ言ってるでしょ〜」

「じゃあ私は守備練しよ〜っと」

同年代の人が世界と戦うと知ってしまったえば、やる気が出るというもの。浜矢もスライドフォーク完成に向けて投げ込みを増やす。

月日は流れ、すっかり気温は下がった。植物も夏の緑色の葉ではなく、紅葉が見られるようになった。

優勝を狙えると断言されたUー18も結局は3位で終わり、スライドフォークも完成していない。

「で？ 何を春までに間に合わせるって？」

「いや〜……8割くらいは出来てるんだよ」

「その割には曲がったこと無いんだけど？」

「もうちよつと！ もう少しだけ練習させて！」

あと少しで何かが掴めそう、完成しそうな感覚は浜矢の中にはある。だがその足りないピースが分からない、そんな状況だ。

「そういえば、そろそろドラフトだね」

「先輩たち呼ばれるかなあ」

「育成まで含めれば絶対呼ばれると思うけどね」

「いや、支配下いけるっしょ」

変化球マスター（左腕）と関東N.O. 1捕手と打率4割弱の走攻守揃ったセンター。育成まで含めれば選ばれないはずがないだろう。

「ドラフトねえ……思っていたのと違う球団とかもいくし難しいよね」

「先輩たちは特に希望ないって言ってたけどね」

「けどやっぱ行きたくない球団とかはあるんじゃないの？」

（思っていたのと違う……フォークだと思わないで投げる、のは違うよなあ。ならフォークの常識を変えるような握り？）

その時、浜矢に閃きが降りてきた。オリジナルの変化球を投げる時に常識というのは足枷になっていた。その足枷を外す時が来た。

「鈴井、ちよつと受けてくれない？」

「いきなりだなあ……いいけど」

「なんとなくだけど、インスピレーション的なのが湧いてきた」

（挟むのは当然なんだけど、それとは違う感じで。思っていたのと違う……違う縫い目を挟む？）

浜矢はあえて斜めに握って投げてみる。無回転に近い状態で進んでいったボールは、ホームベースの手前でスライドするように曲がりながら落ちる。

「っ……伊吹ちゃん、これって」

「……………え？ 嘘でしょ？」

「今、スライド気味に曲がったよ」

数ヶ月苦戦したとは思えない程、あっさりと完成してしまった。少しの閃きで魔球が完成するというのはよくある話なので、これもそのパターンなのだろう。

「どうやって握ったの!？」

「えーつと、こう」

「見てるだけで痛そうな握りだね」

「実際痛いよ」

フォークと同じように挟んでいるのだが、人差し指と中指を1時35分のような形にして握る。正直指が裂けそうなほど痛いらしい。

「変化は小さいけど、この軌道なら簡単には打てないよ」
「だよな？ よーし！ これをマスターするぞ！」

この日から浜矢はスライドフォークを中心に投げ込んだ。制球、キレ、球速……。全てを実戦で使用できるレベルにまで上げる為に。

それから二週間が経ち、遂に実戦レベルまで仕上がった。フォームは崩れていないしキレもあり、何より変化するポイントが打者に近いのが良い。

「これなら流石に使えるだろ！」

「そうだね、こんな変化のフォークは受けたことないよ」

「スライドフォーク、完成!!」

「おめでとう伊吹ちゃん！」

投げ始められるようになってから日が浅いので制球はまだ効かないが、鈴井はそれらを全て捕球する。

「てかよく捕れるな」

「美希ちゃんだからこそ捕れるんだと思うよ」

「伊吹ちゃんには負けてられないからね」

ちなみに柳谷は何球か逸らした。全て完璧に捕球できる鈴井の方がおかしいのだろ

う。

「もうそろそろドラフトも始まるし行こっか」

「もうそんな時間か、急ごう！」

そう、実は今日はドラフト当日。夏が終わってから開発を始めたので、三ヶ月以上の月日が経っている。

「記者めっちゃ来てるじゃん……」

「そりゃ柳谷先輩いるしね」

「けどこんなにいっぱいいるとは思わなかったなあ」

浜矢たちが会場に到着すると、そこは既に満員だった。柳谷らのクラスメイトや、呼ばれるのを今か今かと待っている記者。そして野球部のメンバーなどなど。

席に座って暫く待っていると、ドラフト会議の始まりを告げるアナウンスが響いた。ドラフト1位は十二人、三人の中に選ばれる者はいるのか。

《第一巡選択希望選手 千葉マリンシーガルズ

相良陽菜 投手 蒼海大相模高校》

「相良さんドラージャーん」

「千葉が獲るとは思ってたなあ」

同じチームではないが知り合いだ。何より自分たちをあそこまで苦しめた彼女がド

ラフト1位というのは、熱戦を繰り広げた側の者としても嬉しい。

《第一巡選択希望選手 埼玉ホワイトパンサーズ

山城斎 一塁手 蒼海大相模高校》

「うわっ、蒼海大コンビが1位か」

「まああれだけ打てばね……」

相良に引き続き山城も1位指名。だがその後は1位で至誠と戦ったことのある者が呼ばれることも、至誠の中から誰かが呼ばれることもなかった。

《第二巡選択希望選手 宮城ファルコンズ

結城葵 三塁手 京王義塾高校》

「結城も呼ばれたか」

「確か結城って宮城出身でしょ？」

「へー、そうなんですな」

地元球団に呼ばれるというのは嬉しいことだ。それにファルコンズは慢性的な長打力不足のチームなので、良い指名だろう。

《第二巡選択希望選手 福岡スナイパーズ

柳谷真衣 捕手 至誠高校》

その名が呼ばれた瞬間、会場は静寂に包まれた。そして一瞬間を置き、その感情が弾

けた。

「真衣ー！ ドラ2だよ！」

「おめでとー！」

「柳谷先輩……！ ドラ2！ 凄い！」

しかもスナイパーズはパ・リーグの強豪。そんな球団から指名されるといのは、彼女の実力が高いと認められたのと同義。

指名を受けた柳谷は記者から一斉にマイクやカメラを向けられ、今の気持ちやスナイパーズの印象を聞かれている。それに対し、少し焦りながらもしっかりと答えていく柳谷。

「あとは二人が呼ばれるかだね」

「ちよつと沙也加、怖い事言わないでよ」

「先輩たちなら呼ばれるだろ」

あとは中上と糸賀の二人が残っているがまだ二巡目。呼ばれるチャンスは十分にある。そして三巡目に差し掛かった瞬間だった。

《第三巡選択希望選手 千葉マリンシーガルス

中上佳奈恵 投手 至誠高校》

「中上せんばーい！」

「やった！ これであとは糸賀先輩だけ！」

「てか相良さんと同じチーム！」

シーガルズもファルコンズに負けず劣らずの貧打のチームなので投手より野手を補強した方がいい気がするが、先発も枚数が足りていないのでやむを得ないのだろう。

「けど高卒左腕二人ってどうなの？」

「でも一人は本格派、もう一人は変化球マスターだよ」

「活躍出来れば左右なんて関係ないから」

「……それもそうか」

二人とも活躍してしまえば左腕で被っていても何の問題もない。

ドラフト3位の指名が終わり、4位指名が始まる。

現在5球団が指名をしたが糸賀の名前は呼ばれていない。

「……大丈夫かな」

「先輩、明らかに不安そうだよね」

「そろそろ呼ばれそうだけど……」

《第四巡選択希望選手 大阪オーロックス

糸賀由美香 外野手 至誠高校

ついに全員の名前が呼ばれた。

指名漏れもなくドラフトが終わり、会場は大盛り上がり。

「よかつたあ〜〜!」

「神田さん……朱里さんがいるチームだね」

「けどあんま強くないよね」

「最近は何かに力付けてきてるし、私は来シーズンの優勝候補だと思ってるよ」

オーロックスは暫く優勝から遠ざかっているが、神田（朱）を始めとした強力打線が売り。投手さえ覚醒すれば優勝が狙えると毎年のように言われているが、果たして来シーズンはどうなるか。

「というわけで、無事全員呼ばれたな!」

「呼ばれないかと思った……」

「ヒヤヒヤしたね〜」

記者会見も終わり、プチ打ち上げ会。一人だけ指名漏れかとヒヤヒヤしていた糸賀や、ドラフト2位という上位で呼ばれて記者から質問攻めを食らった柳谷はすっかりくたびれている。

「身内がドラフト指名されるとやる気も出るだろうし、明日からは厳しくいくぞ！」

「はいっ！」

「私たちも来年指名されるように頑張るよ！」

「オーツ!!」

第32球 体力つけろ!

本日の練習は何やら普段と違うようだ。

全員ユニフォームではなくジャージで集合するように言われ、その集合場所も野球部のグラウンドだったがそこから移動する。

「室内……って訳でもないよなあ」

「すぐに分かるよ」

先程から千秋はこう言っただけで今日の練習内容はぐらかす。彼女の事なので変な特訓はさせられないと分かっているけど、事情を知らない部員は少し不安。

「てか監督はー?」

「スカウトに行かれましたよ、福岡まで」

「福岡!? そんな遠くまで行ってんだ……」

現在の部員は殆どが関東出身だ。近場をメインにスカウトするのかと思いきや、良い選手がいるとなれば福岡まで赴くのだ。

「みんなは年末年始何してた?」

「ふつーに帰省してダラダラしてた」

「県内組は自主トレしてたのに！」

「久しぶりに家族と会ったから怠けちゃった」

冷静に考えると、越境組はこの歳で家族にも滅多に会えず結果を出す事を常に求められている。外人部隊だなんだと批判されがちな野球留学生だが、留学生なりの苦悩だつてある。

「県内組だけの練習って珍しくて楽しかったです」

「自主トレって何やったの？」

「美月がいるからノックしたでしょ？ あと実戦形式のフリーバッティングに〜」

「走塁練習もしましたよね」

人数が少ない割には充実したトレーニングだった。千秋が居たのでノックが出来たのは大きく、捕手の鈴井が居たから実戦形式でフリー打撃も出来た。

「私も実家が東京だし、行こうと思えば行けたんだけどね」

「年末年始くらい家族と一緒にいた方がいいよー」

「けど素振りしか出来なくて暇だったな」

「翼はマシン打撃好きだからね」

青羽と山田のロマン砲コンピはマシン打撃が好き。マシンが空いた瞬間にダッシュで向かってる姿を、他の部員は何度も目撃したことがある。

歩き始めてから数分、目的地に到着したのか千秋が立ち止まる。

「はいっ、着きましたよ!」

「……ん? ここっつて」

「お、来たね! じゃあこれ」

「ちよっ、話が見えない……」

野球部員がサッカー部専用のグラウンドに着いたと思ったら、番号の書かれたゼッケンを渡された。

唐突すぎて誰も話に付いていけない。

「野球部の冬は体力作りが基本! というわけでサッカーやりましょう!」

「サッカーやっていいの!? よっしやー!」

「早くアップしよう!」

急に山田と菊池がやる気を出す。普段は野球一筋なのでサッカーが出来るのが新鮮なのだ。

そして何故か野球部員はサッカーが上手い選手が多く、彼女たちも例に漏れなかった。

「普通の走り込みじゃダメなの?」

「逆に聞くけど、伊吹ちゃんは長時間走り込みしたいの？」
「……嫌だわ」

少しでも楽しく体力を付けられるように千秋がサッカーを提案し、そしてその話を聞いたサッカー部も快く引き受けてくれたとのこと。

「あつ、ちなみに伊吹ちゃんはミッドフィールダーね！ 走り回ってもらおうよ」

「ええ……なんで……」

「先発投手が夏場完投すると、サッカー試合出ると同じかそれ以上のカロリーを消耗するんだよ？ だから頑張ってるね」

千秋はいい笑顔で圧を掛ける。

だが千秋の言うことは正しいので、この練習（という名のサッカー）は有意義なものになる。

やる事が決まればまずはメンバー決め。

「んじゃグツパで分かれよう」

「よし、メンバー大事だぞ」

「菊池先輩上手そうだから一緒にになりたいですね」

「この中で一番上手い自信あるよ！」

それは頼もしい。どうにかして菊池と同じチームになりたい浜矢だった。

「グツとパーでわっかれましょ!」

「綺麗に分かれたな」

「じゃあ私と翼、美希はこっちで残りの三人はそっちね」

「あいよー」

金堂(MF)、青羽(FW)、鈴木(DF)がグー。

浜矢(MF)、菊池(FW)、山田(FW)がパー。

メンバーが決まったら作戦会議となる。当たり前だがサッカー部主導で会議を進める。

「じゃあこのフォーメーションでいくね」

「サッカー詳しくないから、このフォーメーションがどういうのか分かんないんだけど」

「けど3-4-3って事はスタンダードですよね?」

「そうだね、それとウチは基本的にはサイドから攻めてくよ」

ボールを奪ったら適当にドリブルして、サイドのFWにボールを回せばいい。単純な攻め方だが、FWを信頼しているから取れる作戦。

「まあこっちで指示は出すから、思いっきりプレーしてね!」

「はい!」

これは公式戦とかではなく体力作りの一環。野球部員はとにかく動き回るのが正解。「せんしゅーはやらないの?」

「皆の動きを見るのが目的だからね、それと! しつかり90分出てもらうよ」
「なっが」

試合とはいえ練習なので短縮してやると浜矢は少しだけ思っていたが、野球が絡んだ千秋はそこまで優しくない。

「だろぅなとは思ってたけど……」

「諦めなよ、伊吹ちゃんがターゲットだから」

「くそう……私にもっと体力があれば!」

逃亡は許されないので何だかんだやるのだが。浜矢に渡されたゼッケンは9、事前の発言通りMFだ。

「よーし、準備はいい? 始めるよー」

試合開始のホイッスルが響く。キックオフはグーチームから。

ホイッスルと同時に速攻を仕掛けられるが、サッカー部も手加減はしてくれている。これなら野球部でも太刀打ちできる。

浜矢は相手のFWの足から一瞬ボールが離れた隙に奪い取る。

「伊吹ー! ハイパースー!」

「おっけー!」

浜矢からFWの菊池にロングパス。

僅かに逸れたが菊池の脚なら余裕で追いつける。パスが通ったことを確認し、浜矢も前線に上がる。

向こうのDF陣まで到達したところで、菊池は浜矢にパスをする。彼女がトラップした時点で空いているスペースは無いので、ドリブルで抜けていくかセンターリングを上げるかの二択。

合っているかは分からないが、浜矢はフォーメーションと今の配置を考えてセンターリングを選んだ。

「菊池先輩っ!」

「任せ……って、高い!」

「すみませーん!」

菊池の身長を忘れていた事により、GKにボールを奪われる。相手の身長や脚力などを考慮して、届く範囲にパスをするのは意外と難しい。

サッカー部は簡単そうにやってのけるが、いざ自分でやってみるとその難しさが分かる。

そんな攻防もありながら、前半戦が終わった。

サッカー部はまだ余力がありそうな感じだが、野球部は常に動きっぱなしというのは慣れていないのでバテている。

「けど後半も出なきやなんだよな……」

「しかもずっと動きっぱなしだからね」

鈴井も涼しそうな顔はしているが息が上がってる。これを見る限り、1年組の課題はやはり体力か。

先輩組は1年生よりかはバテていない、ただ一人を除いて。

「なんで菊池先輩はそんな疲れてるんですか……」

「いや、FWだからって飛ばしすぎた……」

「ずっと走り回ってたからね」

確かに彼女は常に走っていた。攻撃的なFWという印象だが、アレは疲れるだろう。

「はい、伊吹ちゃん」

「せんしゅーありがと……これ何？」

「スポドリのあつたかいの！」

「それ美味しいの……？」

浜矢は冷たいスポーツドリンクしか飲んだ事がない。ぬるいスポーツドリンクが不味いのは知っているが、温かいのは未知数だ。

「あつ、意外とイケる」

「でしょ? 寒い時期にぴったりだよ!」

「今度から家で温めてから持ってこようかな」

冬場に冷たいスポーツドリンクは体が冷えてしまうが、これなら体も温まるし塩分や糖分も同時に補給できるので丁度いい。

「じゃあ後半戦も頑張つてね!」

「おう! ゴールかアシスト決めてやる!」

「私も決めるぞー!」

パーチームは後半戦が始まった瞬間に猛攻を仕掛ける。FWだけでなくMFも全員突撃して1点をもぎ取る作戦。

菊池が上がっていくと、向こうのDFの鈴井にボールを奪われるが。

「油断すんなよ!」

「くそつ、伊吹ちゃん邪魔!」

「うっせ!」

誰にパスするか悩んでいる隙に浜矢が奪取。

中央から突撃しようかと悩んだが、彼女が選んだのはサイドのFWへのパス。パス自体は通ったが、相手側の守備が固く攻めあぐねている。

(……あそこ空いてるな、行くか！)

浜矢は守りが薄くなっているスペースを見つけ、そこに向かって駆け出す。

「ハイパス！」

「任せた！」

完全フリーの状態でボールを託され、そのままボレーシュート。マグレではあるがゴールの隅に決まり1点を先制する。

「いえーい！」

「ナイツシュー！」

サッカーも野球と一緒で点を取った時のパフォーマンスはあるのだが、混ぜてもらっている以上は自重してハイタッチだけにする。

「試合終了！ しつかりダウンしてねー！」

「へー……やっと終わった……」

「伊吹ちゃんおつかれ！ 大活躍だったね」

「忘れてたけど、伊吹ちゃんって一応運動神経良かったんだっただね」

鈴井に対して一応は余計だと言いつ返し返そうとしたが、疲労で喋る余裕すらない。

90分フルで出た挙句、本来はあるはずのない地獄のロスタイムもあつたので100分動き続けたからだ。

「体力付きそうな感じでしたでしょ?」

「まあ、体力は尽きたな……」

「つまらないダジャレはいいから」

「はい」

実際、これが続けていけば体力も付く。足を動かしながらどこを攻めるか考えたりで頭も使うので、脳への良い刺激にもなる。

「冬の間はサッカーがメインになるからね! もちろんそれ以外の練習がしたかったら言ってみてね」

「変化球も完成したし、私はサッカーやろっかな」

「私もサッカーやりたい!」

「言っておくけど、遊びじゃないからな」

青羽は野球の練習もやるようにと釘を刺す。

だが浜矢の一番の課題は体力なので、少なくとも彼女はサッカーメインにした方がいい

い。

「冬場にどれだけ身体を作れるかが大事です、皆さんこれからも気張っていきましょう！」

「オー!!」

もう少し経てば新入生が入ってくる。後輩たちの手本となれるよう、彼女たちは実力を磨いていく。

番外編 バレンタイン

2月14日、世間一般で言うバレンタインデー。

本来のバレンタインとはある聖職者が迫害された日だのヨーロッパでは大切な人に贈り物をするだけであつてチョコの必要はないだの言われているが、ここは日本なので日本の文化に従う人が殆どだ。

というよりも、普通にチョコを貰いたいだけの人間もいる。それが浜矢だ。彼女は全国大会にも出場したので、多少は貰えるだろうと期待に胸を膨らませていた。

「鈴井ー！ チョコ貰ったー!?!」

「うるさい……貰ったよ」

「なーんで鈴井のが多いんだよ……私5個しか貰ってないのに」

「それだけあれば十分でしょ」

鈴井は12個、浜矢は5個という格差。

同じ一年生なのにこの差が出る理由は恐らく活躍度合いと立ち振る舞いの違いが大きい。

シヨートとして攻守に渡って活躍した鈴井と、投手としては中々の活躍をしたがサヨ

ナラタイムリーを打たれてしまった浜矢。

根は真面目で大人びているのだが活発に振る舞っている浜矢と、常に冷静沈着な鈴井。

同級生からの鈴井人気が高いのも頷ける。

「食費浮くからもっと欲しい」

「急に現実的な話をしないでよ……」

「日持ちするから出来れば市販品で」

「バレンタインでそんな注文付けてんの、多分伊吹ちゃんくらいだよ」

普段は食費を削る事を考えて買わないだけで、浜矢はお菓子が苦手ではない。寧ろ好きな方だ。そんな彼女にとってバレンタインは、滅多に食べられないチョコを食べられる特別な日という印象。

市販品を強請っているのは日持ちするという理由と、単純に甘い物を大量に食べられないから。数は少なくとも折角買った物なのだから、全て美味しく食べたいというのが浜矢の本音。

「せんしゅーから貰ったのは市販のだったから助かったなあ」

「えっ」

「んん？ まさか鈴井……」

「私の手作りだったんだけど」

嫉妬のような感情が浜矢の心の中に湧く。

浜矢は千秋の事を恋愛的に好きという訳ではないが、二人しかいない同級生内で差を付けられて嫉妬するのは仕方ない。

「伊吹ちゃんの事を考えて市販のチョコにしたんじゃないの?」

「なるほど? むしろ私の事が好きってことか!」

「はっ? いや普通に私の方が好きでしょ、手作りなんだし」

「せんしゅーからの愛はやらんぞ!!」

こういう話に鈴井が乗ってくるのは珍しい。それだけ彼女も千秋に懐いているという事だ。

結局、お互い貰えるだけありがたいという結論で言い争いは終わった。

そして放課後の部活の時間。先輩たちは文句無しに貰っているだろうと思いきや、部室に入ると、机の上にチョコが入った紙袋の山が出来ていた。

「金堂先輩が一番貰ってるの、少し意外なんですけど……」

「私自身そう思ってるよ、なんでだろうね?」

「そりゃ大人っぽい方が好きなんだろう? 特に後輩とかは」

「監督〜！ 私達に救いの言葉を！」

後落ち着いていて頼り甲斐のある、いかにも大人といった先輩の方が後輩からの人気が出やすい。

青羽も落ち着いている方だが、素の彼女を知らない人からすると怖いと思う事の方が多いだらう。

貰ったチョコを眺めて微笑んでいるのも、野球部の人間以外は知らない。

「柳谷先輩とかはエグい数貰ってそうですよね」

「球団のバレンタインのチョコ貰った数ランキング1位だつて」

「ルーキーでそれですか……」

「寧ろルーキーだからだろ？ 人気がある時期だし」

全国大会で活躍したスーパールーキーの入団直後というのは、一番人気がある時期。

彼女たちは今頃、キャンプ地のホテルでチョコの山を見ているのだらう。

「糸賀先輩もチーム内トップスリーくらいには入ってるらしいよ」

「朱里さんが毎年1位なんだっけ」

「相手が悪すぎるなあ」

今の日本球界に、神田（朱）より貰える人など居ないのではないか。神田（朱）はかなりの美形、というよりも神田家は美形揃いだ。

神田（翠）も性格こそアレだが顔はずば抜けて良い。

「中上先輩の所はまだ公表されてないんですね」

「……中上なら、さつき相良に数負けて煽られたってメッセージ送ってきたぞ」

「中上先輩……」

「てかめっちゃ仲良くなってますね」

中上と相良はいつも一緒に居ると球団広報のSNSにも投稿されていた。食事をする際の席もわざわざ隣に座っており、何だったらドラフト1位と2位なのでホテルも相部屋だ。

「私達もプロ入ったらそんなくらい貰えるのかな」

「球団にもよるだろうけど……それでも一般人よりは貰えるよね」

「楽しみだなあ!」

「……そういうのって、食べられはしないんじゃないんですか?」

球団にもよるが、基本的にはファンの人から貰った飲食物は口に入れない。ファンを装ったアンチが何を入れてるか分かったものではない。手作りであれば余計に。

「ま、まあ貰った数がステータスになるし……」

「バレンタインでマウント取るんですか?」

「むしろ伊吹は取らないの?」

「取れるほど貰える気がしないんですけど……」

浜矢の場合、同じ年に美形が多いのが厳しい。飛鷹に斑鳩と鈴井、あとは最大の壁である神田。この辺りにメディアと一般客からの人気を奪われている。

まあ彼女も初心者でここまで活躍したり、実は顔もそこまで悪くなかったりするのでコアなファンが付いてはいるが。

「それより！ 練習始めるぞー」

「はい」

バレンタインだろうと部活は普通にある。今日はサッカーをやらずに通常の練習。浜矢はキャッチボールを終えた後、鈴井を相手に投げ込みを始める。

「ナイピ、フオーク良い感じだね」

「これなら全国相手にも通用しそうかな」

「それは厳しいかな。一球種が良くても他が良くなきや打たれるし、それにコントロールはまだアバウトだから」

飛鷹や神田のようなミート力も兼ね備えたパワーヒッターは抑えられないと鈴井は言う。

「なら、あの二人にも通用する球を投げられるようになればいいんだな」

「そうだね、私も付き合うから頑張ろう」

「鈴井がそう言ってくれると頼もしいよ」

捕手の鈴井にもだいぶ見慣れてきた。

キャッチングが非常に上手くて返球も胸元から逸れず、それに意外と褒めてくれる。普段あんな冷たい対応をしているので一切褒めてくれないのではと浜矢は予想していたが、いい意味でその予想を裏切られた。

そもそも鈴井が冷たい対応をするのは浜矢が変なテンションで変な事を言ったりするからであり、野球が関わればあまり冷たくしない。

「鈴井的にさ、飛鷹と神田どっちのが怖い？」

「悩むけど飛鷹かな、何でも当ててくるじゃん」

「確かに」

「インハイで仰け反らせてもその次のアウトロー打てるとか、普通できないよ」

打率だけなら神田よりも飛鷹の方が高い。そして彼女の場合は走塁技術も兼ね備えており、そう言った意味でも神田より厄介だ。

「どちらにせよ、今のままじゃ打たれるだろうね」

「ストレートも磨かないとな」

「というか全部だね、全部の球をカウントも取れて空振りも取れるような球にしたい」

「そこまでしないと抑えられない、か……」

それくらい強い方が燃えてくるというもの。一流のアスリートなど負けず嫌いばかり。浜矢もそちら側にだいたいぶ染まつてきた。

「来年こそ神田に勝つぞ！」

「あの鼻っ柱をへし折つてやろう」

二人して不穏な事を言っているがまだ落ち着いている。当時は暴力に訴えかけようとしていたので、それと比べるとマシな方だ。

それに、野球選手なら野球で決着を付けるのが筋というものだろう。

（待つてろよ神田、必ずお前に勝つからな）

第33球 卒業式

3月3日、至誠高校の卒業式当日。

つまり、今までチームを最前線で引つ張ってくれていた三年生の卒業の日。同じ立場の後輩は野球部以外にも大勢いるので、周囲は涙を流している生徒だらけ。しかし、それは野球部も同じな訳で。

「せんばいいい〜!!」

「ちよつ、悠……涙と鼻水が……」

「そつぎようじないでぐだぎい〜!!」

「無茶言わないでよ……」

留年でもしなければ不可能だ。しかも留年したら公式戦に出られないので意味がない。ただ、全員菊池の言うことも分かる。頼りになる先輩に居なくなつて欲しくないのだ。

「伊吹は意外と落ち着いてるんだな」

「まあ、泣いてても仕方ないというか……それに先輩たちが居なくなるってことは、自分が先輩になるってことと同義ですから」

「先輩としての自覚、か」

それに浜矢は祥雲戦後に号泣した後、これ以上涙関連で誰かに迷惑をかける訳にはいかないと決めていた。それを実行出来るのは凄い。

「新入生は何人入るのかな……」

「スカウトは順調だったって聞きましたけど」

「とはいえ人数制限とかあるからなあ」

「先輩達の穴を埋められるような先輩が入ってきたら、嬉しいんですけどね」

今の浜矢では中上の穴は埋められないし、鈴井も柳谷の穴を埋めるには打力が不十分。後輩と力を合わせて穴を埋められるのが一番だ。

「流石にそれは厳しいだろ、今年の三年生って全国でも際立つてる選手だし」

「ですよねえ……けど有名選手とか入ってきってくれたら良いなあ」

中学生の時点で名前が全国に知られてるような選手とか、素材型のポテンシャルお化けとか。ただ、そんな選手が至誠に入學してくれる可能性は低い。体罰事件からそこまですらで時間も経っておらず、それに設備の問題もある。

「プロでも変わらず活躍してくれよ」

「任せてください、新人賞獲っちゃいますよ!」

「負けてたまるか」

「案外私が獲るかもよ〜?」

三年生は全員パ・リーグに行ったので、三人で新人賞を争う形になる。今まで同じチームで仲間として互いを高め合ってきた彼女たちは、今度は違うチームのライバルとして競い合う。

「5年以内ならセーフだから、全員獲れる可能性もあるけどな」

「それだと最低でも二年間は燻ってる選手が出ちやうんで……」

「高卒なら2年くらい別にいいと思うけどな」

“高卒は5年待て”とプロ野球界ではよく言われている。ただ日本を代表するクラスの手であれば3年目辺りには頭角を現していることも多い。

この言葉には高卒の選手に発破を掛ける今も含まれているのかもしれない。高卒5年目と言えば大学に進学した同級生が入団する年なので、そこまでに目立っておかなければ首が危ないと遠回しに言っている可能性もある。

「来年は神奈たちの番か……待ってるよ」

「必ずシーガルズに行きますね!」

「……散らばってもいいと思うけどな」

「敢えて全員違う球団とか?」

それはそれで面白そうだが、浜矢的には誰とも同じチームになれないのは寂しい。出

来れば一人は同じ球団にいて欲しい。

「そういえば監督、来年の新入生は何人入ってくるんですか？」

「五人のスカウトに成功したぞ」

「おお！ 一気に賑やかになりますね！」

「結構良い選手も獲れたし、楽しみにしててな」

灰原の嬉しそうな表情を見るに、本当に良い選手が獲れたのだと分かる。あんなに嬉しそうな灰原は誰も見た事がない。

灰原の顔を見ていた浜矢はそう思っていたが、一瞬だけ切ない表情をしていたのを見逃さなかった。

「……監督？」

「いやな、この時期は慣れないなと思ってたんだ」

「慣れない？」

「新しい選手を獲るって事は、誰かが居なくなる……分かってても淋しくなるんだ」

選手ならまだしも監督という立場ではあまり時間が取れず、少しだけ会うということすらも難しい。自分からは会いに行けず、向こうから来てくれるのをただ待っただけ。それは淋しくなっても仕方ない。

「青羽も言ってたが、この世代は優れた選手揃いだっただけから特にな……」

「手塩にかけて育てても、3年でいなくなっちゃいますもんね」

灰原的にはもっと長くいて欲しい。プロと高校の一番の違いは選手の入替わりだ。プロは勿論入れ替わりが激しいけど、ある程度の成績を残していれば戦力外になる事はまず無い。それに対して高校は成績に限らず3年で居なくなってしまう。

定期的の上の舞台に選手を送り込めるのは喜ばしいことだが、世代交代の難しさも考えると3年限りというのは結構キツイ。

「いつまでもクヨクヨしてちゃいけないんだけどな、浜矢たちにも期待してるし」

「今年も全国行きますよ!」

「……ああ、楽しみにしてるよ」

自分の想いだけではない、三年生の想いも乗せている。今年もまた蒼海大や京王義塾あたりが立ちほだかるとは思うが、全て乗り越えていくしかない。

佐久間、飛鷹、斑鳩、大鷲、孤塚……そして神田。この1年で浜矢にこんなにもライバルが出来た。野球をしていなければ見ることの出来なかつた世界、これからも楽しむと心に誓った。

「……柳谷、中上、糸賀! 卒業おめでとう」

「ありがとうございます!」

「これから先、今までとは比べ物にならない困難が襲ってくるだろう、だけど三人なら大丈夫だ！ それにいつだって私に頼ってもいい、無理だけはしないようにな」

灰原が優しく微笑んでそう言うと、ずっと泣いている後輩を慰める側だった三人が泣き始める。

「あーあ、泣かないって決めてたのになあ……」

「監督ズルいですよ……」

「そんなの言われたら泣くに決まってるじゃないですか！」

「子供は強がつてちゃダメだぞ？」

彼女たちが先輩として、後達に気を遣って泣かないでいたのを見抜いたのだ。チームの中では一番頼りになって大人びている3年生とはいえ、やはり本物の大人には敵わない。

「そして二年と一年！ 二年生は最上級生に、一年生は先輩になる……大変だとは思いますが周りを頼れよ」

「はいー！」

「最後に全員に言っておくが、絶対一人で抱え込むなよ！ 周りを見れば、必ず手助けしてくれる人はいるはずだ」

浜矢には鈴木や千秋、そして新たに三年生となる先輩たちに灰原や小林もいる。そし

て卒業する三人も、プロに行けば周囲は歳上しか居ないので頼れる人はいる。

「来年自主トレの時期になったら戻ってこい、その時に全員笑顔で再会するぞ！」

灰原が強く言い切った瞬間、心地の良い風が吹く。桜の花びらが風に乗って舞い散り、まるで彼女たちを祝福しているようだった。

来年のこの時期にはまた別れがやってくるが、その時の浜矢たちは一体どんな表情をしているのか、卒業する金堂たちはどんな目標を掲げるのか。

シーズン2

設定集

浜矢 伊吹 二年四組組 投手／右翼手

右投右打 164cm／52kg 12月22日生まれ

野球初心者から急成長した投手。

同い年のライバルの存在により、競争心に火が付き厳しい練習にも弱音を吐くことが減った。

先輩となった為、後輩には情けない姿を見せられないと奮起している。

自信のなかった野球でもチームを引っ張っていこうと決意。バントは相変わらず苦手。

鈴木 美希 二年六組 捕手／遊撃手

右投右打 160cm／53kg 6月22日生まれ

シヨートから捕手に転向した守備の名手。

守備の負担が大きい捕手になったが、高い打率はそのまま。愛想は無いが後輩には優

しく接する。

三好に好意を寄せられているのは悪く思っていない様子。捕手として監督と話せる機会が増えたのが地味に嬉しいらしい。

千秋 美月 二年四組 マネージャー

左投両打 154cm / 46kg 10月22日生まれ

ノック、分析、戦術なんでも出来るマネージャー。

二年生になり後輩のメンタルケアも受け持つようになり、後輩と先輩の架け橋のような役割も。

貴重な左利きだが、選手になる予定は無い。

実は両打ちでノックをしている。

金堂 神奈 三年Bクラス 一塁手 221号室

右投右打 160cm / 58kg 11月26日生まれ

キャプテンに任命された安打製造機。

穏やかな喋り方をしているが、言わなければいけない時はズバツと言うタイプ。

人の変化に気付きやすく、その変化を千秋に伝えている。三年生になっても木製バツ

トは相棒。

菊池 悠河 三年Dクラス 二塁手 220号室

右投右打 156/54kg 7月20日生まれ

打撃の改善が課題の守備の名手。

誰が相手でも話しかけていけるコミュ力の持ち主。

年齢問わず好かれやすい性格で、自覚はしていないが橋渡し的な存在。

華麗な守備は忍者と例えられることもある。

山田 沙也加 三年Dクラス 三塁手 220号室

右投右打 170cm/68kg 5月5日生まれ

確実生が課題の長距離砲。

パワーと打球速度は全国トップクラスだが、守備が足を引っ張っている。

青羽とは（一応）四番の座を争い合う仲になった。

三年生の自覚は正直無い。

青羽 翼 三年Cクラス 外野手 221号室

右投右打 169cm / 66kg 10月19日生まれ
得点圏打率が課題の長距離砲。

最上級生の自覚や四番に必要なものを考え、自分の打撃スタイルを改めようとしている。

肩は強いが守備範囲と精度が低いのがネック。
後輩に怖がられているのを気にしている。

洲寄すゞき

真理 東京出身 一年Bクラス 投手 306号室

左投左打164cm / 56kg 9月27日生まれ

東京No.1左腕という肩書きを持つ投手。

持ち球はスラーブ、パーム、スクリュー。

打撃は苦手だが小技は上手く、脚もそこそこ速い。

制球重視でコースを突いていく技巧派。

神宮とは小学校が同じ。

神宮 空 東京出身 一年Dクラス 投手 306号室

右投右打 156cm / 52kg 2月7日生まれ

明るい性格のサイドスロー投手。

持ち球はスライダー、シュート、カーブ。

コントロールが悪く四死球を連発する劇場型中継ぎだが、ピンチの場面には滅法強い。

一年生馬鹿トリオの一人。洲寄とは小学校が同じ。

荒波 友海^{ともみ} 神奈川出身 一年Dクラス 外野手

左投左打 155cm/50kg 1月25日生まれ

派手な守備が売りの外野手。

脚の速さと肩の強さも売りだが、三振が多い。

試合中は常にサングラスを付けているが、理由はカッコいいから。一年生馬鹿トリオの一人。

岡田の事はライバルだと思っている。

岡田 早紀 千葉出身 一年Dクラス 外野手 307号室

右投右打 152cm/48kg 7月6日生まれ

元陸上部の名中堅手。

守備と走塁に関してはプロの一軍でもトップクラスの実力を持つが、打撃は小学生レベル。セーフティは得意だが送りバントは苦手。

選球眼も良くないので、四球での出塁も絶望的。

何とか高校のレベルについていこうと奮闘中。

三好 耀^{ひかり} 福岡出身 一年Bクラス 遊撃手 307号室

右投両打 150cm / 47kg 6月7日生まれ

スウィッチヒッターの遊撃手。

カッター技術と選球眼が売りの嫌らしい打者。

鈴井に憧れて至誠に入學し、普段はクールだが鈴井にだけは感情をむき出しにする。博多弁で喋ると可愛いと言われるのが恥ずかしくて、普段は標準語で話している。

伊藤 隼^{けい} 神奈川出身 一年一組 捕手

右投右打 155cm / 52kg 4月23日生まれ

強肩が武器のクールな捕手。

打力は無いが選球眼の良さで出塁率を稼ぐ。

鈴井と監督に憧れており、ずっと至誠に入學したいと思っていた。

頭が良く一年生の中ではツツコミ役のポジション。
石川とは生まれる前からの幼馴染。

石川 灯^{あかり} 神奈川出身 一年二組 二塁手

右投左打 156cm / 50kg 7月10日生まれ
器用さが武器の二塁手。

本職は二塁だが捕手と投手以外はどこでも守れる。

走塁、盗塁技術が高く積極的なプレーをする。

テンションは高いが、馬鹿トリオの仲間では無い。

伊藤とは生まれる前からの幼馴染。

灰原 麗衣 神奈川出身 27歳 捕手

右投右打 168 / 64kg 9月18日生まれ
高い分析力でチームを導く監督。

元プロ野球選手の実力は今も健在。

昨年^の反省を生かし、もっと皆の実力を把握しようと決めた。実はU-18で日本が優勝した時の正捕手。

プロで活躍する八神涼香と神田朱里とは同い年。

小林 周子 東京出身 28歳

学年が上がっても浜矢たちの担任。

担当科目は家庭科で、野球には詳しくない。

夏の大会を通じてもつと野球の事を知らないと思い、猛勉強中。至誠のOGという訳ではない。

監督の事は年下なのに頼りになると思っているが、同時に放っておけない存在だとも思っている。

第1球 新入部員

4月7日、この日に入学式を迎える学校は多い。

至誠高校も例に漏れず、この日が入学式であった。

「いやー、せんしゅーとクラス一緒でよかった」

「美希ちゃんとは離れちゃったからね」

「アイツは理系選んだからな……」

高校二年生は文理選択の時期。

至誠では文系は一組から四組、理系は五組から八組と決まっている。鈴木は理系、浜矢と千秋は文系を選んだ為、この三人が同じクラスになる事はない。

「まあ、今はそれより新入部員が気になるけど」

「確かスカウトは五人だつて言つてたよね」

昨年の実績により、至誠は再び強豪校と呼ばれるようになった。その結果1学年におけるスカウトの制限人数が増え、今年はその上限の五人が入学する。

「みなさんおはようございます、このクラスの担任を受け持ちます小林です」

教室の扉を開け、このクラスを一年間纏める担任が入ってきた。浜矢たちにとっては見

慣れた顔だ。

「……絶対野球部でまとめられたよな」

「その方が楽なのは分かるけどね」

他の教師に話を聞くよりも、実際に自分で見た方が生徒がどんな生活をしているのかが分かりやすい。

このクラス分けにはそんな意図が透けて見えていた。

始業式と軽い自己紹介を済ませ、放課後の時間。

部活に行く者や寄り道をしようと思えば話している者、真っ直ぐ帰る者などに分かっていた。

「せんしゅー！ 早く行こー！」

「待って伊吹ちゃん、すぐ行くね」

この二人は部活に向かう者だ。

荷物をまとめ、見慣れない廊下を歩き慣れ親しんだグラウンドに向かう。

グラウンドに着くと既に何人かの姿が見えた。

「おはようございますー！」

「おはようございます」

「おはよ」

鈴井と灰原監督が浜矢たちを出迎える。

浜矢たちに続くように、新三年生の四人がやってくる。

「新入部員ってまだですか？」

「新入生は色々話す事あるしな、もう少し待とう」

灰原がそう言うと、部員は一旦落ち着きを見せたものの、すぐさまソワソワした雰囲気きずなに包まれる。

その様子を見て苦笑いをする灰原と小林。

「あつ、来たんじゃないか？」

灰原の声に全員が反応しその指が示す方を見る。

向かってくるのは五人、スカウトした新入部員の数も五人だ。

「遅れてすみません！」

「私達が早く来すぎただけだから、気にしないで」

茶髪をワックスでセットしている少女が、勢いよく頭を下げる。それに対し優しい表情で氣遣う、新たなキャプテンである金堂。

「よし来たな、じゃあすざき洲崎から自己紹介！」

「はい」

洲寄と呼ばれた、肩までの茶髪が綺麗な少女が前に出る。

「洲寄真理、ポジションは投手です。これからよろしくお願ひします」

大人びた雰囲気纏いながら、落ち着いた喋りで自己紹介を済ませる洲寄。大物を予感させるそのオーラに、先輩となるメンバーは喜びを隠しきれていなかった。

「す、洲寄さん……!!? あの東京No. 1左腕の……!!」

「そんな凄い選手なのか? てか県外まで把握してるんだな……」

「県外といつても関東だけなだけどね」

特に千秋は興奮を抑えきれないと言った感じで、洲寄の手や筋肉のつき具合を見る。

彼女のその反応からも、洲寄の実力が窺える。

「神宮空です、同じく投手です! 精一杯頑張ります!」

(投手二人目かよ……)

周囲が祝福ムードの中、浜矢だけは危機感を覚えていた。彼女たちの存在によって自分の出番が減るのではないか、そんな焦燥感を感じていた。

「荒波友海、外野手です! 守備と脚なら誰にも負けません、よろしくお願ひします!」

「言ったな~!! 私には負けないからね!」

荒波の言葉に、同じように守備と走塁が武器の菊池が反応した。

「岡田早紀、同じく外野です! 私も守備と脚には自信があるので、荒波には負けません

！」

「なっ、ライバルか!？」

まさかの同級生ライバルの存在に、慌てふためく荒波。その様子を見ながら、少し呆れた表情で前に出るポニーテールの少女。

「三好耀^{ひかる}、ポジションはショートです……よろしくお願いします」

(美希ちゃんと似た雰囲気の子だね)

千秋は新入部員の中で、誰が誰に似ているか、誰と誰が仲良く慣れそうかを考えていた。

優れた観察眼を持つ千秋だからこそ分かる事だ。

まだ初対面で性格などは深く知らないが、現段階で不仲になりうる組み合わせはないと判断された。

「全員が仲間でライバルだ！ 学年なんて関係ない、レギュラーを奪い取るつもりでやってくれよ！」

「ハイッ！」

監督の激励に、新入部員は呼応する。

その言葉を聞いた先輩組の中にも、やる気が出てきた者もいる。

「じゃあ早速だが、実力チェックといくか！ 特に守備が得意って言った二人！ 良
方がセンターだ！」

「ホントですか!? 負けないぞ〜！」

「私がセンターになるんだ……！」

発破をかけられ燃え上がる荒波と岡田。

このテストで、守備力が優れていると判断された方がセンターのレギュラーを掴み取
る。

「じゃあいくぞ、捕ったらすぐバックホームな！」

「はい！」

「じゃあこーい！」

（あの二人なら、ちょっと難しくて平気だろ）

灰原はこの二人の試合を観たことがある。つまり守備範囲を把握しているというこ
と。ならばその範囲ギリギリを狙って打てる。

「二球目！ 岡田！」

ノックバットが打球音を響かせ、センターに鋭い打球が飛ぶ。定位置を考えると、普
通のセンターであればワンバウンドで捕るような打球だった。

しかし、灰原に実力を見出されて入学してきた岡田はノーバウンドで捕球。すぐさま

ホームへと返球するが、その送球も素晴らしい。

「ナイスー！」

「イージーイージー！」

その言葉に偽りは無かった。

前のめりになる事もなく楽々と打球を掴み、ホームへの鋭く正確な返球。その動きは、まだ上の実力を秘めているようにも見えた。

「次は荒波いくぞー！」

「はいー！」

(正直かなり上手いけど、負けてられない！)

先ほどの華麗な守備を見て奮起する荒波。

一定位置から大きく左に逸れた打球に俊足で追いつき、バックホーム。岡田には劣るが、こちらもレーザービームと呼ばれるような送球だ。

「オツケー！ 二人とも良いよ！」

守備と走塁に関して言えば岡田の方が圧倒的に上。なら何故荒波を獲ったのか、その理由は打撃だ。

「岡田打撃ヤバくない？」

「いや〜……実は野球始めたのって中2からなんですよね、だから全然打てません！」
実力テストを終えてマシン打撃を始めていた岡田は、ボールを全く前に飛ばせていなかった。

「元は何やってたの？」

「陸上やってました！ けど中学の時の陸部があんまり雰囲気良くなって……それで辞めた後野球部にスカウトされたんでやりました！」

彼女は地元である千葉の中では有名な陸上選手だった。だが彼女の中学の陸上部は、お世辞にもやる気があるとは言えなかった。

その雰囲気慣れる事ができず、部を辞めてすぐに野球部に勧誘され、野球選手としての道を歩む事になった。

「陸上はもういいの？」

「未練が無いって言ったら嘘になりますけど……でも野球もめっちゃ楽しいんで！」
満面の笑みでそう言い切った岡田。

彼女は楽しい事は進んでやるタイプで、彼女からすれば野球はまさに楽しい事。

陸上への未練はありつつも、これからは野球選手として過ごしていく事を決めた。

「そーいや皆なんで至誠を選んでくれたの？ 近くに蒼海大とかあるのに……」

浜矢の純粹な疑問である。近くには設備も整っており、強さも申し分ない蒼海大相模

がある。

野球選手としての実力を伸ばしたいのであれば、至誠よりもそちらに行つた方がいい。

「だつて至誠つて校則緩いじゃないですか！」

「同じく〜」

「私も同じです！」

荒波の言葉に岡田と神宮が賛同する。その言葉通りこの三人はワックスを付けたり茶色に染めたりと、高校生らしからぬ髪型や髪色をしている。

「なるほどね……他の二人は？」

「私は鈴井先輩と一緒にプレーしたくて……」

「へえ！ 鈴井よかつたじゃん！」

三好にファン宣言をされ、少し恥ずかしそうな表情を浮かべる鈴井。だが悪い気はしていないかつた。

「鈴井先輩はまず守備が良いですよね、あの華麗さと俊敏さを兼ね備えた動きはまさに守備職人といったところですよ。それに走塁の動きも良くて……」

「ちよつとストップ！ 落ち着こう……」

三好のマシニングトークに鈴井は思わずストップをかけた。普通に恥ずかしいから

だ。

それに彼女の語り方や着眼点から、鈴井には三好が自分を神格化しているファンにしか見えなかった。

(そこまで言われるような人間じゃないのに)

嬉しさもあるが、それはそれとして落ち着かない。

彼女は自分の事を神か何かだと思っっているのではないか、そう感じ取っていたからだ。

「す、洲寄は?」

鈴井に助け舟を出すのと三好の暴走を止めるため、浜矢は洲寄に話を振る。この質問に対しての彼女の返答は、誰も予想していない物だった。

「……祥雲と、神田さんと戦いたいからです」

「えっ?」

洲寄の言葉に浜矢は驚愕した。まさか新入生の口から憎き神田の名が出るとは思いもしなかった。

「く、詳しく聞かせてもらってもいい?」

浜矢からすれば神田は倒すべき存在だ。

ならば少しでも相手の情報を知っておいた方が良い、そう思っている。

「……あの人は、昔は優しい人でした。同じ左腕としてアドバイスをくれたり、野球以外の相談にも乗ってくれて……」

普段の煽りカス具合からすると信じ難いが、過去の灰原の発言と一致する。

灰原は以前、神田は昔は良い子だったと言っていた。それと似た話をする洲寄を見て、あの話は事実であったという確信を得た。

「でも、中学二年生の夏頃から様子がおかしくなっただけです」

「……周りを見下すように？」

「もしかして浜矢先輩もですか？」

「ああ……アイツにバカにされたよ」

その言葉を聞き、洲寄は苦い表情をする。現在も自分の知っていた神田ではないことが確定してしまったから。

「けど中学2年か……その時期に何かあったのか」

「恐らく……ですが理由は分かりません」

「その理由を知るんだったら、祥雲に入った方がよかつたんじゃないのか？」

浜矢の言う事はもつともである。神田の過去を知りたいのであれば、同じ高校に通った方が効率的だ。

「それでは駄目なんです、私は神田さんに勝ちたいんです」

「……私も、同じだよ」

（洲寄には悪いけど、あまり協力は出来ないかな）

神田を倒すのは自分、そう考えていた浜矢にとつて洲寄はライバルとなる。洲寄が神田に勝ってしまった場合、自分はずっと鬱憤を晴らせないまま。

「至誠なら全国に出られると思っっているので、ここを選びました」

「なるほどね……」

（だったら蒼海大とかでもよかつたんじゃ……）

蒼海大相模だつて神奈川屈指の強豪校だ。

毎年のように決勝まで進み、ここ数年は連続で全国出場も果たしている。蒼海大相模に入学したとしても全国出場は果たせただろう。

ただ、あのブンブン振りまくつて速球でゴリ押していくスタイルが洲寄と合うかと言われると、絶対に合わないと言わざるを得ない。

「それに、あそこまで緻密な育成プランを考えてくれたのは至誠だけですから」

「そんな事まで考えてんだ……」

スカウト時に三年間の育成プランを提示するのはよくある事だが、灰原はかなり細かくプランを組んでいる。しかも彼女は元捕手の観察眼を生かして洲寄本人が気付いて

いないような癖や欠点などを見抜いており、その改善策なども伝えていた。

そんな灰原の言葉に並々ならぬ情熱を感じた洲崎は、至誠への入学を決めたのだ。

「……空？」

「へっ？ な、何ですか？」

「様子がおかしいけど大丈夫？」

「だ、大丈夫です！」

洲崎の話の話を聞いているうちに表情が暗くなっていく神宮を、鈴井は見逃さなかった。今も慌てて誤魔化したが大丈夫ではないのは明白だったが。

（誰しも言いたくないことはあるよね）

捕手をやっていた過去を隠していた鈴井だからこそ、神宮の気持ちも理解できた。無理に聞き出すことはせずに、会話を打ち切って千秋の元へ赴く。

「美月ちゃん」

「なあに？」

「空だけど、もしかしたら真理と何かあるかも」

「そっか……分かったよ、ありがとうね」

参謀であり口が固い千秋にのみ告げる事にした。浜矢も口は固い方ではあるが、自分

で解決しようと突撃する可能性が僅かながらあるので伝えない。

(真理ちゃんときちちゃんか……気をつけて見てよう)

チームの不和を人一倍恐れている千秋は、当事者の二人を見守る事を決意する。洲崎と神宮の間に一体何があるのか、それを突き止めようとしていた。

第2球 親友

至誠高校の寮は二年生までは相部屋となる。先輩後輩で一部屋ではなく、同級生との相部屋なので緊張感は少ない。

通常、高校生二人が同じ部屋となれば様々な話に花を咲かせるもの。しかしここ306号室は静寂に包まれている。

「……空」

「な、なに……?」

この空気に耐えられず、声を発したのは洲崎。神宮はそれに対し気まずさを前面に押し出していた。

「話があるんだけど、いい?」

「……いいよ」

神宮も洲崎に言いたいことはあるが、言い出すのが怖くて口を噤んだまま。そんな彼女を前に、洲崎は意を決して次の言葉を口にする。

「私のこと、避けてるよね?」

「っ! それは……」

その反応は、洲崎の言ったことが事実であると肯定するようなもの。だが神宮はこれ以上口を開くことはなかった。

「お願いだから教えて、なんで私を避けてるのか」

ライバルでしょ、そう言った次の瞬間神宮が叫ぶ。

「ライバルじゃないよっ！ だって、真理は神田さんと戦いたいんでしょ？ 私のこと

なんか眼中に無いんでしょ……!?!」

「待って空、そんなの誰が言ったの？」

「見てれば分かるよ！ 私からエースの座を奪ったと思ったら、すぐ神田さんって……！」

（そっか、空はそれをずっと気にしてたんだ）

この二人は小学校からの幼馴染。同じ時期に野球を始め、ポジションも同じ投手。しかしエースになれるのは当然一人だけ。

エースの座を掴んだのは、洲崎だった。それだけなら神宮もエースの座を奪おうと奮起していただろうが、現実はそのはならなかった。

「エースになったと思ったらすぐ神田さんと出会って、それからずっと神田さんに憧れて……！ 私の事なんて、最初からどうでもよかつたんじゃない！」

「……それは違う」

神宮は自分の実力が神田より劣っているから見捨てられたと思っていた。その言葉を洲寄は否定する。

「覚えてる？　空が私の投球を見て格好良いって言ったの……だから私はもつと良い投球が出来るようになりたかったの」

洲寄の問いかけに神宮が答えることはなかった。それでもハッキリとその言葉を言った日を思い出していた。

「空のことを忘れた日はなかった、中学が一緒じゃなかったのだから寂しかった」

「……真理」

「また、一緒にプレーできて嬉しいよ」

洲寄が微笑んでそう言うと、神宮は泣き出してしまった。ずっと届かないと思っていた彼女が、自分を大事に思ってくれていた。

共にプレーできる事を喜んでくれていた、それがどうしようもなく嬉しかった。

神宮は少しして泣き止むと恥ずかしさから顔を赤らめ、拗ねたように口を尖らせる。

「てか嫉妬し損じゃん……」

「嫉妬しててくれたの？　ありがとう」

「そこはお礼言うところじゃないってー！」

憧れていた洲寄が自分を見限って離れたと思っていたのに、本当は自分の方から離れていた。それを自覚した神宮は自分の過去の行いを反省し、再び良好な関係を築いていくと決めた。

「……私も、真理とまた一緒に嬉しい」

「一緒に至誠の投手陣を支えよう」

「うん！」

二人は固い握手を交わす。三年ぶりに触れた相手の手は、思ったよりも大きい。自分たちはまた同じ場所で活躍できる、そう確信した二人には笑顔が浮かんでいた。

入学式翌日の放課後、浜矢と千秋はグラウンドへ向かう。

「ん？　なんか知らない顔がいるんだけど」

「一般入部の子かも！」

「マジか!?　やった！」

（もしかしてあの二人は……!）

千秋はグラウンドに立つ二人組に見覚えがあり、高揚感を必死に抑えながら現場へ向かう。

「浜矢、千秋！　新入部員だぞ」

「やっぱり！ 自己紹介お願いしてもいい？ あつ、私は二年の浜矢伊吹！」
「同じく二年生の千秋美月です」

浜矢と千秋が名乗るとその二人組の片方は笑顔で、もう片方は澄ました表情で自己紹介を始める。

「セカンドの石川灯です！ よろしくお願いしまーす！」

「伊藤慧、キャッチャーです。先輩、これからよろしくお願いします」

守備の要のセンターラインを守る二人が入部した。

チームとしてはこれ以上ない補強だろう。

そして彼女たちの名前を聞いた途端、千秋が興奮で震えながら話し出す。

「ユーティリティー性が売りの石川さんに強肩が武器の伊藤さん！ まさか至誠に来てくれるなんて！」

「まあ千秋なら知ってると思ってたよ……」

（けど、まさか本当に調べていたとはな……少し悔ってたな）

灰原からすれば、この二人はいわば隠し球。

その存在すらも調べられていた事に僅かな恐怖を覚え、尊敬の念を抱く。

「スカウト……ではないですよね？」

「声だけは掛けといたぞ、体育科ではないけど」

「そういうのもアリなんです……」

体育科はスポーツ推薦で入学した生徒しか入れない。その為この二人は普通科だが、実質的にはスカウトしたのと同義。

「二人は仲良いの？」

「生まれる前からの幼馴染です！」

浜矢にそう尋ねられると、石川は満面の笑みを浮かべながら答える。

「どういう意味？」

「親同士が仲良くて、家も隣なんですよ！ だから生まれる前からずっと一緒にいるんです！」

「へー……すごいな」

幼馴染という存在に馴染みのない浜矢は、長年も同じ人間と仲が良いのが想像できなかった。

「二人とも至誠を選んでくれてありがとうね！ これから一緒に全国目指して頑張ろう！」

「はいっ！」

「はい」

(……なんか監督みたいな発言してるな)

浜矢は口にはしなかったが、心の中ではツツコんでいた。

事実千秋は昨年の大会を終えてから灰原と共にスカウト候補のリストアップをしており、ただのマネージャーという立場ではなくなっていた。

「さつそく実力を見てもいいかな？ 特に石川さんはほとんどのポジションを守れるし……」

「はいっ！ それと呼び捨てでいいですよ！ ハマ先輩も！」

「う、うん」

（ハマ先輩……？ 距離詰めるの早いな）

しかし後輩に懐かれていることに悪い気はせず、その呼び方を受け入れる。

そして石川と伊藤の守備と打撃の実力チェックが始まった。

「じゃあノックからいくよー！」

「はーいー！」

千秋はノックバットを持ち、記憶している石川の守備範囲を頭に思い浮かべながら緩い打球を打つ。

前後左右に揺さぶりをかけじつくりと実力を見極めていく。

「他のポジションもやってもらっていい？」

「了解でーす！」

ショート、サード、センター……バッテリー以外の全ポジションの守備力を把握する為にノックを続ける。

（やっぱりセカンドが一番かな……でも他のポジションも上手いし、起用するなら代打か代走からの守備固めかな？ スタメン併用でも良いかも）

自分の頭の中で起用法を考える千秋の目は、指揮官そのものだった。灰原の采配は結構アレなところもあるので、千秋が指揮官を兼任しても良いのかもしれない。

「じゃあ次は彗ちゃん！ 伊吹ちゃんマウンドに立って、灯ちゃんと……耀ちゃんが二遊間ね！」

「はい」
（いきなり肩と送球を見るのか……気合い入れよう）

伊藤はキャッチャー前に転がされたボールを捕球し、素早く二塁へ転送する。

そのボールの弾道は低く、投手が屈まなければ避けられないほどだ。

「ナイスー！ やっぱ彗の肩強いね！」

「ありがとう」

（肩が強いのは勿論だけど、送球の精度と捕ってからの速さも良い……！ 控えにしておくのはもったいないなあ）

打撃も守備も全国クラスの鈴井が正捕手の座を掴むのは確定だが、伊藤も他校では正捕手になれるレベルだと千秋は確信していた。

今の一瞬で肩だけではなく、送球までの動作や体の使い方まで見ていたのだ。

「二人とも守備上手いね！ 次は打撃も見せてもらってもいいかな？」

「りよーかいです！」

「分かりました」

（灯ちゃんは元気だね、彗ちゃんも落ち着いてるけどコミュニケーション能力に問題は無さそうかな）

新入部員がチームの雰囲気馴染めそうか否かまでチェックする千秋その様子を見て何を考えているのか察した鈴井が苦笑いをしているのには、彼女は気付かなかった。

「打撃はあんまりだな……」

「二人ともそこがネックなんだよねえ」

打撃練習を観察する浜矢と千秋。二人の言葉通り、伊藤と石川は守備は良いが打撃が弱点だ。

「灯ちゃんは内角が苦手、彗ちゃんは外角が苦手なんだよね」

「フォームが崩れてる感じあるな」

「けど、あれくらいなら直せると思う！」

（二人ともポテンシャルは高いから、ちゃんと指導すればかなり打てそうな気はするかな）

千秋も既にき年間の育成プランを立てていた。

自身は二年しか一緒にいられないが、最後の一年は灰原に託そうと考えている。先程灰原の采配がアレだと言ったが、育成に関して彼女は間違えない。

「二人はどうして至誠に来てくれたの？」

打撃練習を終えた二人に、ドリנקとタオルを渡しながら千秋が尋ねる。その問いかけに二人は息を整えてから答える。

「私は監督と鈴井先輩が憧れだったので……お二人に指導をしていただきたく入学しました」

「私は彗と一緒にならどこでも良かったんで！」

（また鈴井目当てのが来たのか……いつからこんな人気になったんだ？）

三好に続き二人目の鈴井のファン。要因として思い当たるのは昨年の活躍くらいだが、ここまでの人気が出ると浜矢は信じられなかった。

「ちなみに鈴井のどこが好きなの？」

「一番は守備の動きですね、あの無駄のない動きと判断力、それにあの送球精度の高さは

憧れです」

「なるほど……」

浜矢も鈴井の守備は綺麗だと思っただけなので、見惚れる気持ちも分かってはいる。ファンではないが。

そして石川はというと、その話を少しつまらなそうに聞いている。

「灯ちゃん？」

「聞いてくださいよ！ 至誠に入學が決まっただけからずつと鈴井先輩と監督の話するんですよ！ 私というものがありません！」

「ごめん、でも一番好きなのは灯だから安心して」

「……なら許す！」

（我が幼馴染ながら、ちよつと心配だな……）

石川の単純さに不安を隠しきれない伊藤。その場にいた千秋や浜矢も似たようなことを考えていた。

石川は見た目こそ派手で友好関係が広そうなイメージがある。実際広いのだが、伊藤が不動の頂点に君臨しているので伊藤に好きと言われるとすぐ大人しくなる。つまり、かなりチヨロい。

「結構部員増えたな〜……十四人？」

「去年から一気に増えたね、それに灯ちゃんが居るから疲労の心配も無いし」

ユートイリティープレイヤーである石川が居ることにより、疲れの溜まっている選手を休ませることが出来る。石川がカバー出来ない投手は洲崎と神宮が、捕手は伊藤が控えているという無敵の布陣だ。

(これなら今年も全国はいけるかも……あくまでも投手次第だけど)

高揚した気持ちを抱えながらも、多少の不安は持っている千秋。

絶対的エースであった中上の卒業により今の至誠にはポテンシャルは十分だが荒削りな浜矢、実力はあるがスタミナにやや不安のある洲崎、球威は抜群だが制球面が課題の神宮しかない。

「美希ちゃんが鍵かなあ……」

「呼んだ？」

「わっ、聞いてた？」

「うん」

小声で呟いた言葉を当事者に聞かれてしまい、驚きで肩が跳ね上げる。

「今の投手陣ってみんな一長一短って感じだから、美希ちゃんのリード次第かなって

思つて」

「やっぱり中上先輩の穴は大きいよね……頑張つてみるよ」

「ごめんね？　こんなに負担かけちゃつて」

千秋が謝ると、鈴井は気にしなくて良いと言つた。それには捕手だからこそその理由があつた。

「自分の実力が試されてるみたいで楽しみだし」

「ふふ、やっぱり美希ちゃんに頼もしいね！」

笑みを浮かべながらそう言う鈴井の顔を見て、自分の不安は杞憂だったと知る千秋。

早速投手陣の育成プランについて話し合う二人を、浜矢は苦笑いをしながら見ていた。

(これは……かなり厳しい練習させられそうだな)

そう思う浜矢の表情にも楽しさが滲み出ていた。

鈴井と千秋を見て、浜矢の心にも火がついたのだ。

第3球 四番の自覚

「つーばーさー！ 部活いこー！」

「……声デカい」

放課後の始まりに、山田の大きな声が響き渡る。

クラスメイトは既に慣れていたので、その声に驚く事はあつても目線を送る事はなかった。

「悠河は……居ないんだったな」

「悠河も風邪引くんだねえ」

「馬鹿は風邪引かないってやつか……沙也加も気をつけるよ」

部屋分けは山田と菊池が220号室、青羽と金堂が221号室だ。

同じ部屋である山田が一番風邪を警戒した方がいいのは明らかだ。

「聞きたいことがあるんだけどさ」

「なにー？」

青羽が少し言いくそように話し出すが、山田は普段通りの反応を返す。

「沙也加は、四番になりたいか？」

「……なれたら良いと思うって感じかな」

一瞬間を開けてから、少し寂しさと悔しきの混じった表情で言う。

その表情を見た青羽は聞いてはいけないうことを聞いたか、と内心焦った。

「私じゃ柳谷先輩みたいにはなれないから」

「……別に、あの人の真似をしなくてもいいだろ」

確かに柳谷は凄かったが、選手にはそれぞれ自分だけの打撃スタイルがある。それを曲げて四番になるつもりは、青羽にはない。

自分のスタイルを貫き通して四番を掴み取ろうとしている。

「なら私が四番取るけど」

「……平気？」

(コイツ……どういう意図で言ってるのか分からないんだよな)

単に言葉が足りないだけの可能性もあるが、こういう時の山田は何かしらの意図があつて発言している。

「別にあの人と全く同じ成績を残す必要なんてないだろ」

「そうだけどき、やっぱり比べられたりとか……」

普段後輩の前では見せない不安そうな表情。

そんな表情を、同じ四番候補の立場である青羽には見せる。

「そんな事気にしてんのかよ」

「いやーだつて柳谷先輩が凄すぎたからさ」

柳谷は神奈川の球女で知らない人は居ないというレベルの有名な人だ。当然、県外から来てその事を知った二人も尊敬の念を抱いていた。

純粋なパワーがあるだけではなくミート力も兼ね備えた柳谷は、山田にとって憧れの存在。理想の打者だった。

「じゃあ沙也加は私が四番になつても良いのか？」

「正直それでも良いかな……自由に振りたいし」

山田の打撃スタイルはどんな時でもフルスイング。

ランナーの状況や脚などを考慮して、ケースバッティングも出来た柳谷とは正反対のスタイル。

「けど、翼も四番なんて出来るの？ 私と同じで確実性は無いじゃん」

「だからこれから鍛えるんだよ、今までの自分を変えるんだ」

長打狙いのスタイルは変えずとも、打席への臨み方は変えられる。自分らしさを残したまま至誠に対応しい四番になろうと決心していた。

「仮に私が打てなかつたら、沙也加が決めてくれ」

「……そうだね、二人並んでたらピッチャービビるよね！」

全国でもトップクラスの長打力を誇る二人。

仮に四番と五番に並んでいたら、相手からしたら堪ったものではないだろう。

「そうなると三番は神奈かな?」

「……凄い嫌な打線だな」

近い内に実現するその打順を思い浮かべ、苦笑いをする青羽と山田。二人の目にはもう迷いは無い。

放課後、真つ先に浜矢に駆け寄る二人。

「てな訳で伊吹! 相手頼むよ!」

「すみません、今からウエイトするんで洲寄に頼んでください」

「じゃあしようがないか、真理ー!!」

浜矢が駄目だと分かると、すぐ洲寄に声を掛ける山田。その声に反応してボールを持ちながら歩いて向かってくる洲寄。

「何ですか?」

「フリー打撃手伝って欲しいんだ」

「私でよければお受けします」

洲寄がマウンドに上がり、相手である伊藤が構える。何球か投球練習をした後に山田

を呼ぶ。

「本気で来てよ！」

「それは勿論です」

洲崎も伊藤も、先輩だからと手を抜くような生温い環境でやってきていない。常に真剣勝負だ。

（山田先輩はインハイとアウトローが得意……インローにストレートよろしく）

（了解、しつかり投げるよ）

技巧派で制球重視の洲崎であるからこそそのリード。

伊藤の意図を読み取り、しつかりと内角低めにストレートを投げ込む。

「良い球だね」

初球は見逃して伊藤がストライクを宣告する。山田の言う通り、構えた場所にズバツと決まる良いストレートだ。

次に出したスクリューのサインに洲崎は首を横に振る。バッテリーを組んで日が浅いので少し考え込んだ後、パームのサインを出すと頷いた。

（何がくるかな……スラップ？）

山田は外角のスラップにヤマを張る。

しかしそのヤマは外れ、ストライクからボールになるパームに空振りさせられる。

「おいおい、打てよ？」

「大丈夫！ ツーストロライクからが本番だつて！」

実際、ツーストロライクからの山田は三振も多いが長打を打つことが多い。

追い込まれてから本領を発揮できるタイプだ。

(だからこそ四番は向いてないんだけど……追い込まれると相手を勢いづけちゃうし)

洲寄と伊藤が選んだ次の球はバームだった。

スイングする直前までバットを出したが、ギリギリの所でバットを止めた。

「ひ、耀ー！ どっちだと思っ？」

ベンチの前で素振りをしていた三好に判断を求める山田。一瞬悩んでセーフのジエ

スチャーをする。

「よしよし、簡単に三振はしないぞー！」

「その割には振りそうだったけどな」

息を吐いて凜とした顔でマウンド上を睨みつける。

その表情に洲寄は威圧感を感じながらも、決して動揺は見せなかった。

(最後はストレート、いくよ)

インハイに構えた伊藤のミットをノビのあるストレートが襲う。

山田はそれに狙いを定めてフルスイングをするが、そのバットから快音が響くことは

無かった。

「くっそー！ いいストレートだったよ！」

「ありがとうございます」

（伊吹ほどではないがノビは感じた……あまり威力は無さそうだったな）

次に打席に入る青羽は、洲崎の球質や球筋をじっくりと見ていた。

青羽は相手を打ち崩すイメージを持ってバッターボックスに足を踏み入れる。

「さあ来い」

「では遠慮なくいかせて貰いますね」

（この人も長打力があって内角が得意だ、コースギリギリを慎重に攻めよう）

サインに頷きグラブの中のボールを見つめる。

慣れた手つきでお目当ての球種の握りをし、ゆっくりと振りかぶって初球を投げる。

「っ、本当にいい球を投げるな」

「ですよね、受けてる方も楽しいです」

一球目はスクリユーで空振り。

手元でグツと曲がりながら落ちるスクリユーには手も足も出ないといった様子だ。

（これで一年か……よくこんな選手がウチに来たな）

実際洲寄の元には十何校もの野球名門校からの誘いが来ていた。

それでも至誠を選んだのは、神田に対する失望や期待、理由を暴きたかったからに過ぎない。

もし神田との確執がなければ至誠は選ばず、どこかの甲子園常連校にでも進学していただろう。

ファールやボールを挟みつつ、並行カウントとなり迎えた六球目。選ばれた決め球は、洲寄が得意としている絶滅危惧種のパームボール。

真ん中から緩やかに落ちてボールになるその球は、そう簡単には打たれない。

だがグラウンドには金属の甲高い音が響き渡り、白球は外野フェンスの手前まで飛んでいった。

「……………これはヒットでいいだろ?」

「はい、完敗です」

青羽は低めの球を上手く掬い、レフトオーバーのヒットとなった。完璧な制球を意識した洲寄の技術を、青羽の技術とパワーが上回った。

(やはり球に威力は無いな……………当てられたら飛ぶタイプか)

逆に言えば躲す投球を得意とするタイプ。

当てられさえしなければヒットになる心配もない、そんな投球スタイルで洲寄は東京

No. 1左腕の称号を手にしたのだ。

「いきなりごめんね、楽しかったよ!」

「本当にいきなりだったからな……ありがと」

「いえ、こちらこそ反省点も見つけられましたし勉強になりました」

深くお辞儀をする洲崎と伊藤の二人。

育ちの良さが出ていると山田と青羽は感じた。

「伊吹ちゃんもあれくらい投げられないとね」

「じんぐーもいるし、負けられないな」

グラウンドの外で筋トレをしていた浜矢と鈴井が、洲崎たちの対決を見て感想を話し合っていた。

「けど私も秋冬で結構良くなったつしよ? 球速も上がったし制球も前よりは効くようになったし」

「それでもまだノーコンだけどね、やっと人並み程度にはなったかな」

鈴井が浜矢に対して人並み、と言ったのはこれが初めてだ。つまりかなりの高評価をしているのだが、付き合いの長い浜矢は当然それを分かっている。

(相変わらず素直じゃないな……まあ、その分褒められた時が嬉しいんだけど)

だから浜矢も積極的に褒められようとはしない。
その意図を鈴井が知る由は無かった。

一方その頃、会議室で灰原と千秋が今後の予定について話し合っていた。

「この時期はやっぱ練習試合を組みますか？」

「だな、合宿前に実力は把握しておきたいし」

「なら良い方法があるんですけど……」

千秋の言う「良い方法」を聞いた灰原と小林は、顔を見合わせて笑顔になる。

第4球 実力チェック

「今日はダブルヘッダーだからね！ みんな気合い入れていこう！」

「オーツ!!」

ベンチの前で円陣を組み、千秋の声出しに応じて叫ぶ至誠サイン。

本日の試合は午前に一試合をして昼休憩、そして午後も一試合のダブルヘッダーだ。

「一試合目は一年メインで、二試合目は出てないメンバーを出すぞ！ 連続で出るメンバーもいるがアピールのチャンスだと思え！」

「だからダブルヘッダーなんですな」

「ああ、全員の實力を一日で見られる良い方法だろ？」

千秋が考えてくれたんだ、そう灰原が言うのと千秋に対しての拍手が起こる。

照れ臭そうな表情でその拍手を受け止める千秋。

「では一試合目のスタメンを発表します！」

千秋から告げられた一試合目のスタメン。

一番レフト 荒波友海

二番シヨート 三好耀

三番ファースト 金堂神奈

四番サード 山田沙也加

五番レフト 青羽翼

六番セカンド 石川灯

七番センター 岡田早紀

八番キャッチャー 伊藤慧

九番ピッチャー 洲崎真理

予定通り神宮以外の一年生がスタメンとなった。

その神宮もリリーフ登板の予定なので、一年生は全員出場ということになる。

「クリーンナップは先輩たちなんですね」

「まあ折角なら勝ちたいしな」

それに加え、山田と金堂以外にファーストとサードを守るのは石川しかいない。

石川を本職で採用する以上、この二人が二試合連続で出場するのはやむを得ない事だった。

「二年だからって遠慮するなよ、暴れてこい！」

「はいっ！ 打つぞー！」

一番に入る荒波の打席から試合が始まる。

相手先発の球種はスライダーとスプリット。追い込まれるまで変化球は捨てる決めて打席に入る。

その狙いは的中し、二球目のストリートを弾き返して高校初打席でヒットを放った。

「ナイバッチー！」

「あざっすー！」

荒波の長所はその俊足だ。当然本人もそれは自覚しているので盗塁のサインが出るかとベンチを見るが、三好が集中してバッティングに臨めるよう、この場面は盗塁禁止のサインが出る。

（三好は粘って四球狙いで）

ヘルメットを触って了解の合図を出し、左打席に立つて投手と向き合う三好。

彼女は類稀な選球眼とカット技術を持ち、中学時代に多くの四球を選んできた。

灰原もそこを評価して至誠にスカウトをした。

そしてその評価通り際どいコースはどんな球でもカットし、少しでも外れれば見逃して四球で出塁。

「ナイセン」

一塁上でグータッチを交わす菊池と三好。

三好はさも当然と言わんばかりの涼しい顔をしている。実際彼女はあへあへお散歩

ガールなので本人からすれば当たり前のことだ。

「初回から点取るぞ、クリーンナップ頼んだ！」

「はい」

金堂が足元をならしてからバットを構える。相変わらず気持ち悪い（褒め言葉）
フォームだ。

（友海の脚なら単打でも帰って来れそうだけど、狙うのは打球判断が簡単な……レフト線！）

狙いを研ぎ澄ませ振り抜いたバットは、白球を強く叩いてレフト線を破るヒットを生んだ。

「回れ回れ！」

「耀はストツプ！」

ベンチからの声で荒波は三塁を蹴りホームイン。

三塁コーチャーの浜矢の指示で三好はストツプ。

1点を取り、さらに一・三塁の状況だ。

その後も山田のタイムリーで1点を追加し、2点リードで1回裏の守備を迎える。先発のマウンドに立つ洲崎の元に伊藤が近寄る。

「緊張してる?」

「別に普通かな」

「なら良かった、思い切り投げてきて」

マウンド上でグラブタッチをし、バッテリーは投球練習を始める。

（今日はスラープあんまり良くないな……スクリューは良さそうだしそつちメインで組み立てるか）

今日の洲寄はスラープの曲がり悪いが、スクリューはキレのある良い球を投げていた。

伊藤はそれを踏まえて配球を組み立てようと判断した。捕手に必要なのはこの柔軟性。

「どれくらい出来るか楽しみだな」

「私は嫌ですよ……同じチームにライバルとか」

洲寄の投球を楽しみにしている灰原と、不安を覚えている浜矢。

それもそのはず、浜矢からすれば自身が狙っているエースの座を奪われるかも知れないのだから。

（私が洲寄より良い投球すればいいだけなんだけど、アイツ中学から凄い奴だしなあ）
そもそも持っているものが違う、そう思い込んで自信を失っている様子だ。

そんな浜矢を尻目に守備は始まってしまふ。

(内角にストリート、コントロールドミスをらないでよ)

そんな事は当たり前だろ、と言いたげな表情で洲寄はサインに頷く。インを突くストリートは、正確な軌道を描きミットに収まった。

洲寄が一番得意としている内角へのコントロールド、それをこの一球で見せつけた。

その後もパームとスクリューで三球三振。

二番、三番も完璧に打ち取っていき、初登板の一年生が圧倒的な実力を見せつけた。

2回表の攻撃は岡田から。

当てることを重視している彼女は、バットを短く持っている。

岡田のパワーでは飛ばせても内野まで。だが彼女には特筆すべき武器がある。

投手がモーションに入ってからバントの構えを見せる。セーフティーバントだ。

三塁線に転がった打球を三塁手が掴んだ時には、岡田は既に一塁付近まで走っていた。

「脚はやっ……」

「さすが元陸上部って感じだね、トップスピードに乗るまでが速い」

鈴井の分析通り、岡田は陸上選手の中でもトップスピードに乗るまでにかかる時間が

短い。

だからこそ陸上界でその名を轟かせたのだ。

「彗ちゃんはどうしましょうか」

「初めての打席だし打たせるぞ」

灰原はヒツティングのサインを出し、伊藤は頷く。

三好と似て選球眼が良い選手である伊藤、この打席もその持ち味を生かし好球必打で出塁。

（洲寄はバントだな）

バントのサインを出し、そのサイン通り洲寄はきっちり送りバントを決める。

「洲寄って打撃はどうなの？」

ノータイムでバントのサインを出された先程の打席を見て、疑問を抱いた浜矢が鈴井に尋ねる。

「投手ってセンスのある人がやるから打力もある。パターンが多いんだけど、真理は正直打撃センスはないかな」

「ふーん……：そういうや中上さんも打撃良かったな」

脚があつて小技も上手く、恐らく鍛えれば覚醒する素材だけに今まで打撃を磨いてこなかった事を勿体無く思う鈴井。

試合は進み5回裏、3対1で至誠が2点のリード。

この場面で灰原が選手交代を告げ、神宮がマウンドに上がる。

「じんぐー抑えてこいよー！」

「もちろんですよー！ 見ててくださいいねー！」

高校初投球は決め球であるスライダー。

打者に向かっていき、あわや外角のボール球と思うまで曲がるそのスライダーに打者は手も足も出さず空振り。サイドスロー特有の軌道だ。

「曲がりえっぐ！」

「あんなスライダー投げられる投手が居たんだな……！」

数多の名投手と対戦してきた山田と青羽でさえも唸らせるスライダー。

そのスライダーを軸に組み立てて最初の打者は三振に切る。実力は十分、誰もがそう思っていた。

「ボールフォアー！」

「おいおい、満塁だぞ……！」

神宮はその後ヒットと四球でワンアウト満塁のピンチを招いてしまう。彼女の唯一にして最大の弱点であるコントロールの悪さが出てきた。

(ここからが本番だもんね！)

マウンドに立つ神宮の目つきが鋭くなった。

そこからの投球は、まるで別人のようだった。

キレが増した変化球にゾーン内で散らばる荒れ球のストレート。ワンアウト満塁から二者連続三振で無失点の投球を見せる。

「胃が痛くなる投球はやめてくれよ」

「けどこれが私の投球スタイルなので」

「知っててスカウトしたけど、実際見ると思ったよりもハラハラするな……」

四死球と甘く入った球を痛打されて場を悪くしてから完璧に抑えるという、典型的な劇場型投手。

中学時代からずっとその様な投球をしてきた神宮だが、ベンチからすれば堪ったものではない。

その後はお互い無失点で切り抜け3対1のまま試合は終了。至誠は今年度初の試合を白星で飾った。

昼食と観戦を挟み午後の試合が始まる。

この試合の先発メンバーが発表された。

一番セカンド 菊池悠河

二番ショート 三好耀

三番サード 山田沙也加

四番レフト 青羽翼

五番ファースト 金堂神奈

六番キャッチャー 鈴井美希

七番ピッチャー 浜矢伊吹

八番ライト 荒波友海

九番センター 岡田早紀

二・三年生はフル動員、一年生はポジションが被っていない選手のみの出場となった。

「岡田9番じゃん」

「納得はしてます……納得は……」

納得はしているが悔しさはある様子だ。岡田と荒波と比べるとまだ浜矢の方が期待できるというのがベンチの考え。なお、どんぐりの背比べな模様。

ただ浜矢は去年より身体が大きくなり、パワーもある程度付いて打球速度も上がってきた。

偶然とはいえあの佐久間から本塁打を放った実績もある。あの打席を見て彼女に打

撃センスがあると感じた灰原は、浜矢を育てる名目で7番に置いた。

「伊吹ちゃん、しっかり抑えよう」

「当然！ 洲崎には負けてられないしな！」

試合が始まればいつも通りの浜矢だ。

さつきまでの自信のなさはどこへ行ったのか、洲崎に対抗する気にいる。

(ストレートで押してこう)

(アレはまだお預けか……分かった)

浜矢の一番の武器と言えるノビと球威のある直球。

高めに投げられたそれは実力ある打者でも簡単には打てない。完全に振り遅れた空振りでストライク。

次は変化球でストライクを取り、出されたサイン。それを見た浜矢は一瞬目を丸くした後、嬉しそうに頷く。

先頭打者への勝負の一球。

真つ直ぐの軌道を描き手元へ向かったボールは、打者の手元で斜めに曲がりながら落ちていく。

「ストライク！ バッターアウト！」

「おっし！ 完璧ー！」

浜矢の新変化球であるスライドフォークは、変化こそ小さいが珍しい軌道で相手打者を翻弄する。

だが鈴井はその変化に合わせて、地面にバウンドする前にガツチリと掴んだ。

（今のを捕れるのか……やはり鈴井先輩は捕手の方が向いてる気がする）

ベンチで伊藤が鈴井のポジションの適性を考える。

鈴井のセンスと努力があれば、どのポジションでも平均以上の守備が出来るが、それでも捕手が一番だと伊藤は評価する。

そしてこの三振によって勢い付いた浜矢は、三者連続三振で抑え洲崎と同じスタートダッシュを切る。

1回裏、ツーアウト二塁で青羽の打席。

高校に入学してから初めて四番に入った彼女はやる気に満ちていた。

（今までだったら振り回していたが、今は四番だ。ランナーを返す事が仕事なんだ）
初球の難しい球には手を出さないうで見逃す。

昨年までの青羽であったら、無理矢理打ちにいつて凡退していた球だ。

（柳谷さんみたいには私だってなれない、けどあの人に近い成績を残す事は出来るはずだ！）

二球目は内角高めにすっぽ抜けたスライダー。

もちろん青羽がそんな絶好球を見逃す筈もなくバットを振り抜く。

次の瞬間打球はフェンスへ突き刺さる様に当たり、グラウンド内にポトリと落ちた。

「ツーラン！ ナイス翼ー！」

「青羽先輩すげー！」

ベンチでは全員が盛り上がり、青羽がダイヤモンドを一周しベンチに戻ってくるのを今か今かと待ちわびている。

（考えてホームランを打てたのは初めてだ……これが四番の仕事か）

珍しく笑顔を浮かべ、ベンチでハイタッチに応じる青羽。

「青羽せんばーい！ ナイバッチですー！」

「ああ、私が打ったんだから抑えてな」

「はいっー！」

青羽からの激励もあり、浜矢は7回を2失点で抑える好投を見せる。打線も爆発し6得点、二試合連続で白星を飾る。

「今日は二試合とも良い勝ち方が出来たね！ 大会に向けてもつと試合を組むから、更に実力を付けていこう！」

千秋の声でダブルヘッダーは締め括られた。

る。試合前は少し緊張していた様子だった一年生も、今では自信に満ち溢れた顔をしている。

第5球 いぎ、合宿

4月末、世間はGWの話題で持ちきりだ。

しかし野球強豪校ともなればそんな物は存在せず。

「今年も合宿するぞ！」

「うへー……休みは無いんですね」

「他校よりか練習時間短いんだから頑張れ！」

灰原の方針により至誠は短時間で効率の良い練習をこなしている。

他の強豪校は22時前後まで練習をしているのに対し、至誠は遅くても20時には片付けを終える。

それでも神奈川という激戦区を制したのは、プロで得たトレーニングの知識や厳しい上下関係を無くし遠慮しない環境を整えたのが大きい。

「場所はどこなんですか？ あんま遠くには行けないですよね？」

「宿舎もあるし学校でやるぞ」

「えーつまらない……」

岡田を始めとした一年生が不満を漏らす。

寮生の彼女達からすれば、夜の学校など見慣れた景色であり別段テンションの上がる物ではない。

「文句言う奴は厳しくいくぞー?」

「全く不満などございません!!」

効率は良いが、決して楽ではない練習内容。

それが更に厳しくなれば身体がついていけないのは明白で、不満を漏らした面子は掌を返した。

そして合宿当日、寮生以外も荷物を用意し学校に集まる。ここにいる全員がこの合宿で大きく成長しようと思気込んでいる。

「言い忘れてたけど、合宿の最終日には試合組んであるから」

「ダブルヘッダーですか?」

「残念ながら一試合だけ」

その分試合後の練習に当てられる時間が増える。

元々試合経験が豊富なメンバー、勝負勘は既に十分あると判断し地力を上げることを選んだ。

「じゃあ合宿開始だ! 投手と外野はグラウンドでフリー打撃、内野は室内で千秋の

ノック！」

灰原の一声で選手が室内と屋外に分かれる。

投手陣は肩慣らしのキャッチボール、外野陣は素振りから始める。

初めに浜矢がマウンドに上がり、打席には青羽。

捕手はもちろん鈴井で球審は灰原だ。

（青羽先輩はストリートが好きだし、変化球でカウント稼ぐよ）

スライダーのサインに頷いた浜矢は左足を引く。

ぎこちなさが消えたそのフォームから放たれた変化球は、斜めに滑るように曲がっていき外角に構えたミットへ収まる。

「良い変化するんだな」

「今日がたまたま調子良いだけですよ」

（とはいえ、たまたまでもこのスライダーが投げられるのは成長の証かな）

鈴井は口ではそう言うが、実際の所は高い評価をしていた。相変わらず素直ではない。

昨年よりも曲がりが大きく制球も効くようになり、カウント稼ぎにも決め球にも使える優れた球だ。

今の浜矢の決め球は、と聞かれた際にストリートもしくはスライダーと答える人は多

いと予想される。

そのクラスまでスライダは磨かれている。

なお観客がスライドフォークを見た瞬間、一気に決め球争いに食い込んでくる模様。(フォークはまだ温存したいしツーシームで、引つ掛けさせられるかも知れないし)

鈴井が内角低めに構えた瞬間、浜矢は嫌な予感がして首を横に振る。マウンドから見える青羽の姿から何かを感じ取った。

(内角がダメなの？　けど外も飛ばされるしな……ならボールからストライクになるように投げてよ)

ツーシームは利き手側に曲がる変化球、浜矢は右利きなので右打者の内角を抉る軌道になる。

青羽は右打席に立っている、つまり外角に投げれば青羽からすればボールからストライクに入ってくる打ち辛い球となる。

鈴井の意図を読み取った浜矢は、外角のボールゾーン目掛けてツーシームを投げる。シュート方向に曲がりながら沈むツーシームは、バッテリーの思惑通りストライクゾーンへと向かっていく。

ボールを受け止める準備をしている鈴井の視界にバットが入ってくる。

そのバットが白球を捉え痛烈な打球がライト方向へと飛ぶ。

「ちつ、ファールか」

（あぶな……もう少しタイミングが早ければホームランにされてたかも）

打球は惜しくもラインを割りファールとなった。

タイミングがズレていただけで、球自体は真芯で捉えられていた。青羽のパワーなら簡単にホームランに出来ただろう。

（ならフォークいくよ、伊吹ちゃん！）

（おう！先輩に見せつけてやるぞ！）

ストリート、スライダーと来て新しく決め球候補に挙がったスライドフォーク。手で鋭く落ちるこの球には、流石の青羽も対応出来ず空振りの三振に終わる。

勝負には負けたものの、何かを掴んだような表情の青羽に灰原が近づく。

「三振だったけど手応えはあったら？」

「はい」

（この調子なら大会までには間に合いそうだ）

青羽は自身の打撃スタイルを変えるべく急いでいた。根本から変えるのではなく、一部だけ。

もつと四番に相応しいバッティングが出来るようにと研究を続けている。

「二人ともありがとうな」

「いえいえ！　こちらこそ楽しかったです！」

「またよろしく願います」

三人はそれぞれ礼をしてからグラウンドを離れる。

洲寄や神宮もマウンドに上がり、伊藤と組みながら外野陣プラス鈴井と戦った。

しかし洲寄に食らいつけたのは青羽と鈴井の二名のみであった。

「よし、次はゲッツーいくよー！」

グラウンドでフリー打撃をしている一方、室内練習場では千秋の内野ノックが行われていた。

二遊間を守るのは三好、菊池、石川の三人。

石川がショートとセカンドを交互に守り、組み合わせを変えながら行う。

「ナイツスロー」

「キャプテンって捕るの上手いので、こっちも楽に投げられますよー！」

「そう？　ありがとう」

ファーストは世間一般的に、守備力が低い選手がやるポジションと思われがちだ。

しかしアマチュアレベルであれば送球の精度に問題がある内野は珍しくなく、その送球を全て受け止めなければならないファーストこそ守備力が必要だ。

（上手いファーストがいるだけで内野の守備レベルは上がる……キャプテンには感謝しなくちゃ）

千秋もそんな考えの持ち主であり、内野陣の中で菊池に次いで捕球が上手い金堂がファーストだから内野のエラー数が減っていると分析する。

「サードいきますよー！」

「ハーイー！」

緩い打球に猛チャージして捕球し、一塁に目掛けて低く鋭い送球をする山田。

右に逸れた送球を金堂は脚を開いてキャッチする。

「ごめん！ 神奈ありがとー！」

「これくらいなら捕れるから気にしないで！」

（ここまでは上手いと、キャプテンの後継者探しは大変かな……なるべく良い選手は獲りたいけど）

金堂は今年で卒業なので、当然新入生でファーストを獲得する必要がある。

金堂は高い守備力を持ちつつ類希なミート力も兼ね備えている。守備面でも攻撃面でも大きな穴が開くのは必至。その穴を埋められる中学生など殆ど存在しないだろう。

（山田先輩に青羽先輩もいなくなると、本格的に長打力不足になる……最悪打力重視のスカウトも考えなくちゃいけないさそうかな）

浜矢は成長しているがまだ物足りないし、鈴木はミート力はあるが長打力は無い。一年生を見ても打撃が得意な選手自体がおらず、打力不足になるのは防げない。

その為来年の新入生は、全体的に打力重視のスカウトになってもおかしくはない。

(けど大会の結果次第かな。夏大で成長した選手が多ければスカウトできる選手の幅も広がるだろうし)

補強ポイントが分かるのは大会が終わってから。

そこで成長する選手が多ければ補強しなければならぬ箇所は少なくなり、ある程度自由に選手をスカウト出来る。

その為にもこの合宿で総合力の底上げをし、夏の大会で何かを掴むきっかけを作らなければならぬと千秋は感じていた。

打球音と捕球音、そして足音や選手たちの声が響き渡る練習場とグラウンド。

一日目は守備練習をメインに終わっていった。

選手たちが片付けをしている最中、小林は合宿所のキッチンで夕飯を作っていた。

「すみません先生、手伝って貰って……」

「私は野球に詳しくありませんから、これくらいは手伝わせて下さいください」

顧問でありながら野球という競技に詳しくない。

普通の学校では珍しくない事だが、ここは強豪校の至誠だ。

そこに少なからず負い目は感じているのだろう。

「それに千秋さんは一際頑張っていますから、少しでも負担を少なくしたいんですよ」

「そんな、私なんて……！ ただ好きだからやってるだけです」

「でしたら私も好きでやっているんですよ、家庭科の教師ですから」

優しく微笑みかけながら千秋にそう語る。

「元々料理や裁縫が好きで家庭科教師になった身、この言葉も事実だろう。」

「ありがとうございます、本当に助かります」

「ふふつ、気にしないでもつと頼ってくれていいんですよからね？」

（分かっているはいましたが、千秋さんは人に頼るのが苦手そうですね。私や灰原監督くらいには頼ってくれてもいいのですが……）

「何でも出来る」そう思われているのを自覚しているからこそ人に頼れない。

しかし灰原や先生は千秋の倍近く生きている大人、その二人からすれば完璧と言われる千秋も周りと同じ高校生だ。

「……少しだけ、頼っても良いですか？」

「もちろんです！ 可愛い生徒の頼みとあれば断るなんて選択肢はありませんよ」

二人は和やかな空気のまま夕食作りを進めていく。

暫くして、片付けと入浴を終えた選手達が集まってくる。

「腹減ったー！」

「もうご飯できてるよ！ 先生が作ってくれたんだ」

「あれ？ そんなしゅーは作ってないの？」

「私は明日のメニュー考えてたんだ」

（先生が全部やってくれたから、私はメニュー作りに集中できた。休んでないってちよつと怒られちゃったけどこれで良いんだ）

今日の練習中の動きを見て、翌日のメニューを少し組み直した千秋。

休ませる為に小林は頼みを聞いたのだが、千秋は野球に触れていないと落ち着かないようだ。

「一年生は特にいっぱい食べてね！ 身体大きくして夏乗り切ろうね！」

「はーい！ いったきまーす！」

食べ盛りの高校生が十四人だ、山盛りのご飯とおかずがあつたとしても一瞬で無くなる。

「先輩！ この後って自由時間ですか!？」

「そうだよ、遊んでも良いけど寮が近くだから静かにね」

「はーい、友海！ 早紀！ ボードゲーム持ってきたから遊ぼー！」

「負けないぞー！」

神宮、荒波、岡田の三人が集まり遊んでいると、石川や菊池も寄ってきて参加する事に。

最終的には一年生全員が参加する大所帯でのゲームになった。

そんな楽しい時間を過ごしている後輩たちとは打って変わって、宿舎の裏では浜矢が自主練をしていた。

「伊吹ちゃん？ 素振りしてたんだ」

「うん、やっとバツティングにも手応え感じてきたしモノにしたいなって思ってたさ」

浜矢は昨年に比べスイングスピードも上がり、変化球の見極めも出来るようになった。

「打率こそあまり変わらないけど、良い当たりは出るようになってるしね」

「そうそう、上手くいけば中上さんと同じくらい打てるかなって」

野手の正面に行ってしまうだけで、打球の質自体は格段と上がっている。

あとはタイミングを合わせられるようになれば、チーム内でも上位の打力は身につくだろう。

「鈴井は何してたの？」

「私も素振りしようとしてたんだよ、今年は打撃も求められてるし」

「あー、一年貧打だもんな」

（私が言えたことではないけど、岡田とか荒波は私より下位打ってたしなあ）

この二人も打力の低下には危機感を覚えていた。

特に浜矢は自分よりも下位を打つ後輩の存在を重く見ている。

「せんしゅーたちも大変だなあ、スカウト候補のリストアップ」

「今年は守備重視で獲ったって言ってたし、逆に来年は打撃重視かもよ」

「投手としてはそっちのがあるがたいな」

いくら守備が良くて無失点に封じ込められても、点が入らなければ試合に勝てない。

浜矢のような奪三振率が高く守備を頼らない選手からすれば、打撃型のチームの方が嬉しい。

「今年も勝ち上がって佐久間に会いたいな」

「意外、蒼海大の打線とはもう戦いたくないとか言うと思ってた」

「私だって成長してるんですー！ それに佐久間はライバルだしー！」

（初めて私のことをライバルだと認めてくれたんだ、アイツの目は狂って無かったことを教えてやりたい）

自身が不甲斐ない投球をすれば、そんな自分に目を掛けた佐久間に失望されるのは分

かっていた。

そんな事が無いように浜矢は投手としての成長を続けていた。

「すごいや鈴井つてライバルいないの？」

「いないかな」

「神田は？」

「あれはただのムカつく奴」

（気持ちは分かるけどキツパリ言うなあ……）

浜矢も神田のことをライバルとは思っていない。

しかし、鈴井と同じで見返してやりたいという気持ちは強く持っている。

「佐久間にも勝つて、神田も見返す！ それが今年の目標だな！」

「だね、だから生半可な投球はしないでね」

「なら鈴井も酷いリードはするなよ！」

星空の下でバッテリーはお互いを焼き付け合う。

群青の瞳と琥珀の瞳を持つ二人の心は赤く燃え上がっていた。

第6球 ナイスピッチ!

新入生を迎えてのGW合宿は終盤に入っていた。

一年生の野手は主に打撃練習を、投手は連携プレーと投球練習をメインに行なっている。

「浜矢と鈴井はやっぱ体型がネックだよなあ」

「二人とも細いですよね」

練習風景を眺めながら、灰原と千秋は二年生の二人について語り合っていた。

浜矢と鈴井は実力こそ十分だが、体格は中学生にも劣る場合がある。

「どうにかして身体を大きく出来ないものか……」

「体重が増えたらその重さに慣れるまで時間が掛かるってよく聞きますけど、監督は実際どうでした?」

「1、2キロ増えるだけでもだいぶ変わった感じはあったな」

野球の世界はコンマ一秒を、たった数センチを争う繊細な場だ。体重が2キロ増えるだけでも、体のバランスは乱れスイングや投球にも影響が出る。

そしてそのバランスに慣れるまでには時間が掛かる。

「とはいっても、あれだけ細いと夏場キツいだろうしな……去年は結局全国二回戦負けだったからあれだけど」

祥雲戦を勝ち上がった場合、あの二人が耐えられた保証はない。灰原は厳しい表情でそう断言する。

「確かにそうですね、食べる量を増やすように言いますか?」

「それは難しいだろうし食事の回数自体を増やして貰おう、それとベンチプレスとかウエイトとかを積極的にやらせようか」

選手一人一人に合ったトレーニングは必ずある。

それを見つけ出していき、選手に正しく伝えるのが二人の役目だ。

「というわけで二人はこれから食事の回数を増やしてね! あとはトレーニングの内容も更新するよ!」

「うへえ……キツソー」

「伊吹ちゃんはともかく、私ってそんなに細かいかな?」

その言葉を聞いた瞬間、千秋の眼が光った。

「美希ちゃんって確か160cmだよな? 体重は?」

「53だったかな」

「細かいよ! というより軽いよ! 最低でもあと2キロは増やして欲しいな」

今の鈴井のBMIはちょうど20といったところ。

あと2キロ増えればBMIは21.8となり、スポーツ選手として最低限の体重は確保できたと言っている。

「伊吹ちゃんは今希ちゃんより背が高いんだから、当然もつと増やしてね」
「はい……」

この状態の千秋が見逃す筈もなく、浜矢もしっかりと釘を刺される。

（二人には期待してるんだから……これくらい厳しくいかないとね）

期待をしていなければメニューの更新などしない。

千秋が二人に特別厳しいのは、期待の表れであるのが分かる。

試合の締めくくりは県外の高校との練習試合。

「試合をやって合宿も終わりだ！ 勝ってピシッと締めよう！」

「ハイッ!!」

灰原からスタメンが発表される。

一番セカンド 菊池悠河

二番ショート 三好耀

三番サード 山田沙也加

四番レフト 青羽翼

五番ファースト 金堂神奈

六番キャッチャー 鈴木美希

七番ライト 石川灯

八番ピッチャー 浜矢伊吹

九番センター 荒波友海

公式戦でのスタメンに最も近いメンバーだ。

浜矢が先発のマウンドに上がり足元をならす。

「連勝がかかっているから気合入れて投げてよ」

「分かっているって！ 鈴木も援護頼むぜ」

「言われなくても」

相棒と称するに相応しい二人がそれぞれの守備位置につく。鈴木 of 激励を受け取った浜矢は初回から好投を続ける。

スライダーとスライドフォークの調子が良く、面白いように打者を三振に切り取っていく姿は圧巻だ。

浜矢は4回まで無失点のピッチングを続け、裏の攻撃を迎える。

「三好出てくれー！」

「分かりました」

(いい加減先輩を援護したいし、ここはチャンスメイクとして四球狙いかな)

三好が打席に入り息を吐く。

彼女の真骨頂と言えるカット技術で粘り続け、迎えた十球目。

「ボールフォア！」

「よしっ……」

四球でノーアウトからのランナーが出る。

三番の山田が気合の入った表情で打席に向かう。

(コントロール乱れてるし、甘いのが来たら狙っていこうかな)

どっしりと構えてホームランを狙う姿勢になる。

制球の乱れ、そして三好に四球を出したことによりストライクを先行させたいという

焦り。

その二つの要素が合わさり、失投を招いた。

(もらった!!)

山田の振り抜いたバットがボールを捉えた瞬間、打球は外野フェンスに突き刺さった。
打った瞬間、誰も動かなかつたのは本塁打を確信したから。

「ナイバッチ」

「2点守り切ってね!」

「了解です!」

グータッチを交わし合う山田と浜矢。

2点の援護は今の浜矢には十分すぎた。

尻上がりに調子を上げ6回まで1失点の投球を続ける。

「さてと、自援護しなくちゃな」

「スライダーが狙い目だよ」

「せんしゅーありがと!」

(伊吹ちゃんが打てればチーム的にはかなり助かる……ここで結果を出して欲しいかな)

千秋は浜矢の打席を厳しい目で見つめる。

一年生の中で打撃型の選手がいない以上、浜矢に頼らざるを得ないのが現状だ。

(おっ、甘い!)

浜矢に対しての初球は、真ん中高めに浮いたスライダー。それを逃さずに打ち返し、痛烈な打球は右中間を真っ二つに割る。

「二塁行けるぞ! 走れ!」

一塁コーチャーの青羽の判断に従い、二塁目掛け全力疾走をする浜矢。脚から滑り込み少しの余裕を持ってセーフとなる。

(よしよし、ホームランには出来なかつたけど長打は打てた)

(今の仕留められないか……けど去年を考えたら成長してるね)

二人して似たような事を考える浜矢と千秋。

事実去年の浜矢であれば打ち損じていた球だ。

それを長打に出来たのは、間違いなく成長している証であつた。

(荒波はヒッティングで)

(了解つと、出来る限り引つ張つた方が良いかな)

浜矢の脚を考えると、内野ゴロでは進塁出来ない。

最低でも引つ張つて外野フライにしなければならぬ。

「ストライクツ！」

引つ張らせないように外角に変化球を投げ込んでくる相手投手。荒波の対応力では外の変化球は引つ張れない。

(流してヒットにできるのが最高か……難しいけどやってみよう)

二球目も外角にカーブを投げ込んでくる。

荒波はしっかりと待ちの姿勢を貫き、タイミングを合わせて流し打つ。

打球はフラフラつと上がり、幸運にもレフトとショートの間に着ちた。

「ナイバッチ」

「ラッキーでしたけどね」

菊池が打席に入り投手と対する。

(スクイズのサインは無い……犠牲フライで1点だけど、伊吹の脚を考えるとライトかセンター方向か)

やはり浜矢の脚を頭に入れる。鈍足にも程がある。

しっかりと狙いを定めて構える菊池。

その初球は真ん中高めへのストレート、絶好球だ。

(もらった! あっ……)

しかし菊池は打ち損じてしまい、ライトは定位置のまま動かない。

「行けそうかな」

「行けますよ……ゴー!」

捕球したのを確認した伊藤の合図で浜矢が走り出す。ライトもホームで刺そうと鋭い送球を捕手に送る。

「セーフ!」

「オツケー！ 先輩ナイスフライ！」

「伊吹もナイスライン！」

僅かに浜矢の方が速く、これでまた2点差となる。

ベンチに戻りハイタッチをしながら伊吹は息を整える。

「てか今私何球だっけ」

「6回で68球！ かなりの省エネ投球だよ〜！」

「ありがと、なら7回も私で良いですよね!?!」

期待をしているような瞳で灰原を見つめる浜矢。

苦笑いしながら灰原は答える。

「元から完投させるつもりだったから頼むぞ」

「まっかせてください！」

「元から完投させるつもりだった」その言葉は指揮官からの信頼を意味している。

それを理解した浜矢は口元のニヤケを隠せなかった。

「キモイよ伊吹ちゃん」

「うっせ！ キャッチャーは完投するリード考えててくださいい〜！」

「はいはい」

悪態をつきながらもお互い信用はしている。

二人の様子を眺めながら、千秋は満面の笑みを浮かべている。その後は両チーム追加点がなく2点差のまま7回裏を迎えた。

「よし、サクツと三人で締めようぜ！」

「ど真ん中には投げないでね」

「ここまで来てそんな勿体無い事しないって」

浜矢と鈴井が微笑み合い、守備位置につく。

相手打線はクリーンナップから始まる好打順だ、油断は出来ない。

(フオーク警戒で前に立ってる……なら速球かな)

バッターボックスの前に立つと、変化球はよく見えるが速球に差し込まれやすくなる。

それに加えて浜矢のストレートは質が良い。

その二つが合わさるとどうなるか。

「オーライ! ……はいワンダン」

勢いのないファーストフライとなりワンアウト。

打者は浜矢のストレートの威力と速さに、愕然とした面持ちだ。

次のバッターは左打者、初球は内角低めにスライダーがビシツと決まりワンストライ

ク。

(同じコースにツーシーム、甘く入らないようにね)

(了解、しっかり投げるよ)

同じコースに真逆の変化をする球種を投げる。

それに惑わされ、尚且つツーシームという球の特徴として手元で曲がるというのがある。

打者もうまく肘を畳んで打ち返したが、力の無い打球はセカンド正面。

「ツーダンツーダン！」

「あと一人で決めるよー！」

(先輩たちが率先して声出してくれるから、やりやすいんだよな……よしっ！ 最後ピシッと決めよう)

スライダー、カーブ、ストリートと投げワンボールツーストライク。

いよいよ最後の一球という所まで来た。

(低めにストリート投げたから、同じコースにフォーク頼むよ)

(おっけー、三振取るぞ！)

最後の決め球はやっぱりスライドフォーク。

同じコースに二回続けてストリートを投げたと思った打者は手を出したが、そこから

ボールは曲がりながら沈み空振りを取る。

「鈴井! 一塁!」

「うん」

ワンバウンドした球を捕り、落ち着いて一塁に送球する鈴井。振り逃げは成立せず、球審から試合の終了が告げられた。

「ナイピ」

「あんがと、連勝途切れなくて良かった」

これでチームは今年に入ってから無傷の三連勝。

洲崎と浜矢の先発二枚看板、そしてそれを支える神宮の安定した(要審議)投球が勝利を呼び込んだ。

試合後の片付けや軽い守備練習もこなして、GW合宿は終わりを告げた。

「お疲れ! 今後は練習時間は短縮するけど試合はあるし、試験もあるからまた気合入れていけよ!」

「うっ、試験……」

「赤点取つたら補修だからな! 必ず回避しろよ!」

試験の単語に反応したのは三年生では山田と菊池、一年生では岡田と荒波に神宮。

「灯はなんでそんな余裕そうなんだよ！」

「私には彗がいるし〜？」

「私も彗ほしい！」

「耀と真理いるじゃん」

石川は焦った様子もなく返答する。

伊藤と石川の家は隣同士、テスト前の勉強会を開くには何も苦労は無い。

「クラス違うから教えてもらえないし！」

「私とは学科も違うんだけど!？」

「灯はこつちサイドの人間だと思ってたのに……!？」

普通科という事は、体育科Dクラスの三人よりは頭が良いことになる。

「彗の幼馴染やってて頭悪くなれる訳ないよ……」

「あー……なんかごめん」

苦い顔をしながらそう呟く石川。

その表情は伊藤の勉強に対する厳しさを伝えていた。

「寮生は寮生で頑張りなよ、私たちは二人で勉強会するし」

「そうそう、それに体育科だけの科目とかもあるんでしょ？」

流石にそれは分からない

から」

石川と伊藤にもっともな事を言われ閉口する三人。

この三人に勉強を教える事が確定した三好と洲崎は、呆れたような顔をしている。

「二年は心配……ないか」

「まあそうですよね」

二年生は特待生の浜矢に偏差値を下げて入ってきた鈴井、総合点なら浜矢より上の千秋の三人だ。

学業に対しては何の心配もなかった。

「三好たちには悪いが、二人とも頼むよ」

「まあ監督に言われたら仕方ないですね」

「そのかわり厳しくやるけん、覚悟してね」

監督に頭を下げられれば、三好たちも断れなかった。自分の勉強時間を削られる不満は三人にぶつけるようだ。

「勉強と部活の両立は大変だと思うけど、頑張ってくれ! 解散!」

「ありがとうございました!」

勉強が苦手なメンツと得意なメンツで表情と足取りが違う。

既にやる気が出ている浜矢に対し、岡田や神宮は三好と洲崎に引つ張られながら寮へと帰っている。

番外編 勉学に励め

ほのかに暖かさを感じる季節となった。

一軒家が並ぶ朝9時の住宅街に、活力の溢れる声が響く。

「お邪魔しまーす！」

「灯ちゃんいらつしやい、彗なら部屋にいるわよ」

「はーい！」

石川は慣れた足取りで二階にある部屋に向かおうとしたが、伊藤の母に呼び止められた。

「これくらいしかないけれど、二人で食べて」

「ありがとうございます！ これ食べて勉強頑張りますね！」

「うふふ、頑張つてね」

伊藤の母からお菓子と飲み物の乗ったお盆を預かり、笑顔で二階へ上がる石川。

「けーい！ 開けてー」

「灯、いらつしやい」

自室のドアを開き伊藤が石川を招き入れる。

「相変わらず頭良さそうな本が多い……野球関連の本も増えたね」

「……今日は勉強会だからね？」

「分かってるって〜」

躊躇いもなく部屋を物色する石川に、その行動自体には何も言わない伊藤。

その遠慮の無さは二人の付き合いの長さを感じさせる。

「赤点取りそうなのはどれ？」

「どれも赤点は取りそうにないけど……強いて言うなら数学かな」

「理系科目得意じゃないもんね」

石川は文系、伊藤は理系科目が得意。

お互いの苦手な分野をカバーし合えるという点でも、この二人は良いコンビだ。

「因数分解と展開が分かんない……」

「だいぶ初期で躓いてるじゃん、見せて」

理系科目は苦手と言いつつ最低でも50点は取れる石川だが、高校に入ってから授業について行くのすら精一杯の様子。

「この数式は……法則があるんだよね」

「マジで!?! 教えてー!」

「ここに書いてある公式に当てはめて……」

「あー……なるほど！」

口で言われた時は理解出来なかったが、伊藤がノートに問題の答えを書きながら法則に当てはめていくと納得といった表情を浮かべた。

「これ覚えれば簡単だな！　ありがとう」

(……授業で言つてたと思うんだけどなあ)

そうは思ったが口にはしなかった伊藤。

大方寝ていたか聞き逃していたのだろうと予想する。実際のところは、起きていたのに守備の事を考えていて聞き逃していた。

二人が伊藤家で勉強している一方、至誠の学生寮でも同じような事が行われていた。

荒波は寮生ではないが近所という事もあり、こちらの勉強会に参加している。

「二人とも厳しすぎるんだけど！」

「アンタらが基礎分かってればこんな厳しくしないんだけど？」

「基礎すらポロポロとはね……」

弱音を吐く神宮に対し、呆れながら現状を教える三好と洲崎。岡田、神宮、荒波の三人は基礎の部分すらも理解していなかったのだ。

「数aはまだ簡単な方だと思うんだけどなあ……」

「九九分かつとー?」

「流石に九九くらい言えるわ!」

三好の発言に勢いよく反論する荒波。

ここまでの間違い具合を見ると、三好がそう思ってしまったのも無理はなかった。

「一学期の最初の所でここまで躓けるのは逆に才能だと思う」

「中学の範囲も分かつとらんかったらこんなもんやと思うけど」

勉強会が始まって既に一時間が経過している。

教える側の二人はお疲れの様子だ。

「とにかく、今日中に数Iと数aは終わらせるよ」

「早紀と友海は私が何とかするから、そっちは任せたまよ」

気合を入れ直した二人がペンを手に取り、指導を再開する。その二人のオーラに怯えつつも、逃げ場はないと悟った三人は諦めの表情を浮かべている。

後輩たちがそんな事になっているとは知らず、浜矢は自室で黙々と勉強を進めていた。

試験勉強用に配られたプリントを解いている最中、近くに置いておいたスマホが鳴る。

浜矢が携帯に目をやると、二年生だけのグループに千秋からのメッセージが送られていた。

《働くとも勉強は進んでる?》

《私は今やつてる最中だったよー。バッチリ!》

《私もやつてた。点数なら問題ないよ》

浜矢が真つ先に返信し、次いで鈴木もメッセージを送る。

《伊吹ちゃんはちゃんと時間取れてる?》

《自由時間減らせば勉強出来るし心配しないで》

《それはそれで心配になるけど?》

浜矢の発言に鈴木が心配のメッセージを送る。

彼女は顔を合わせていると言えないが、メッセージでは浜矢を氣遣った言葉を送る事が多い。

《そろそろ休憩するから安心して!》

《特待生ってどれくらい点数取ればいいの?》

《評定4.0以上らしいから、多分80くらい?》

特待生審査に通るには、一年間の評定が4.0以上必要となる。部活もしつつ、常に80点以上をキープしなければならぬのは厳しいだろう。

《まあ至誠の偏差値を考えたなら普通にいけると思ってるよ》

《油断はしないでね》

《分かってるよ》

その後は野球の話に移り、図らずとも浜矢は休憩を強いられることとなった。

結局三人は一時間近く野球関連の話をし続けており、話が終わる頃には勉強をする気も起きなくなっていた。

《話しすぎたな……》

《まあ休憩は大事だしね》

三人とも集中すれば休憩を忘れるタイプだ。

だからこそ千秋はメッセージを送り、休ませようとしたのだろう。もう何通かメッセージを送り合いこの場での会話は終わった。

時は過ぎテスト返却の当日。

担任の小林からテストを受け取った千秋と浜矢は、ホッと息をついていた。

「伊吹ちゃんどうだった？」

「英語以外はバッチリ！」

「やっぱり？ 英語は何点？」

「66……」

しかしそれ以外の科目はどれも85点以上を取っており、浜矢の学力の高さが窺えた。

「66点でも十分だと思うなあ」

「せんしゅーは？」

「もちろん問題なしだよー！」

そう言つて千秋は自身のテスト用紙を見せた。

そこには80点以下の点数は書かれていなかった。

「練習メニュー考えたりデータ収集したり……いつ勉強してんの？」

「流石にテスト期間は勉強に集中してるよお」

「あ、そうなんだ」

二人のやり取りを聞いていた小林は微笑んでいた。

自身が担当する生徒が好成绩を残している、それは顧問としても担任としても喜ばしい事だからだ。

「一年の馬鹿トリオはどうなったかなあ」

「馬鹿トリオつてまさか……」

「じんぐーと岡田と荒波」

「だよねえ……多分平気だと思っけど」

苦笑いを浮かべながら後輩たちを心配する二人。

その会話を聞いた小林もまた、苦笑いを浮かべていた。

体感では久しぶりとなる授業を終え、放課後を迎える。浜矢と千秋は部室に一番乗り。

「二年全員赤点回避しましたよー!」

「おつ、マジか! 頑張ったな」

「今までで一番勉強しましたよ」

部活の時間になり、部室に入ってくるや否やテストを見せびらかす例の一年生三人組。

確かにその紙に赤点を示す点は書かれていなかった。

「石川は?」

「私は平均以上取りましたよ、理系科目以外は……」

「あ、苦手なんだ」

理系科目が得意なのは隼の方です、と言いながら伊藤を指差す石川。それはイメージ通りだったらしく浜矢は納得したように頷く。

「ハマ先輩はどうなんですか?」

「ほれほれ」

「たっか！ めっちゃ頭良いんですね！」

「意外ってよく言われる〜」

浜矢は普段の様子から頭が良いイメージは無い。

しかし実際はこのように成績優秀な生徒だ。

「三年生……というか、金堂先輩以外はどんな感じですか？」

「ふふん、バツチリ回避したよ！」

「あつたりまえだよなー！」

「……おう」

山田、菊池、青羽も全教科最低でも50点以上は取っている。全部員が赤点ギリギリより余裕を持って中間試験を乗り越えられた。

「全員赤点なしって事で、これからは練習に集中していこう！」

「やーつと野球だけできるー！」

「監督！ 今日は内野ノックやって下さい！」

「はいはい」

テストが終わって気分が良い部員が、グラウンドへ駆け出す。それを見てから灰原や成績優秀な部員も部室を飛び出していく。

(普段からやればもつと成績良くなるのになあ……勿体無い)

灰原はそんな事を思いながらも、野球を楽しんでいる部員の存在に喜びを感じていた。

「さあ！ 久しぶりにいつも通りの時間までやるぞ、飛ばしていくからなー！」

「ハイッ!!」

初夏の日差しが照りつけるグラウンドに、一人の監督と十四人の部員達の大きな声が響き渡った。

第7球 馬子にも衣装？

2017年度の神奈川県予選抽選会当日。数多の野球選手が一斉に集まるこの日。

「制服、意外と似合ってるね」

「そうか？ 私は落ち着かないんだけど」

「馬子にも衣装ってやつだね」

「それ褒めてねーじゃん……」

珍しく至誠の制服を身に纏った浜矢を見て、ニヤリと笑いながらそう述べる鈴井。

「制服レンタルしてるなんて知らなかったな」

「空ちゃんたちがいて良かったね」

登校する際の服装は自由だが、このような場で着用する時のために校内で制服のレンタルをしている。

神宮にその事を教えてもらった浜矢は、入学してから初めて制服を着用した。

「全員揃ってるな？ 入場するぞー」

「はーいー！」

受付を終えた灰原が部員を集める。

全員が揃っているのを確認してから会場へ入る。

「んでせんしゅー、今年の注目選手は？」

「佐久間さんはマストだよね！ あとは京王の四番米原さんに藤銀のエース竹谷さん、それに市大藤沢が誇るエースと四番コンビの喜多さんと古野さん！」

浜矢に尋ねられ、大興奮で注目選手の名を挙げていく千秋。その中には当然、佐久間も含まれていた。

「今年の佐久間ってどうなの？」

「相変わらずの速球派だよ、けど変化球が良くなってるから油断は禁物だね」

「そっか、ありがとう」

（早く佐久間と投げ合いたいな……成長した私を見せてやる）

凜とした表情で佐久間の後ろ姿を見つめる浜矢。

初めてのライバルである彼女の存在は、浜矢にとってかなり大きい。

最初にシード校の抽選から始まり、その次に至誠を含むノーシードの高校の抽選。

至誠の代表としてくじを引くのは金堂。彼女はくじに書かれた番号を見た瞬間、顔を綻ばせた。その理由は単純明快。出場校の数の兼ね合いでノーシードから数校だけが得られるシード権を得たのだ。

次々と埋まっていくトーナメント表を見ながら千秋が呟く。

「初戦は市大藤沢かあ」

「確か去年蒼海大にボロ負けしたところだっけ」

「うん。だけどそこそこ強いから、多分勝ち上がってくるよ」

24対1という大差で敗れたので仕方ないのかも知れないが、一応去年の優勝候補がこの覚えられ方はあんまりではないだろうか。

少し不憫な市大藤沢の初戦の相手は公立の無名校。

県内で中堅と称される市大藤沢が苦戦する相手ではないと千秋は伝える。

「エースと四番コンビだっけ？」

「そうだね、セカンド兼投手の喜多さんに右の大砲の古野さんが主軸だよ」

「二刀流……って、高校はそういうの結構いるか」

市大藤沢の選手を見つけそちらを眺めながら小声で語り合う二人。

その後も抽選は続いていき、一時間もしないうちに抽選会は終わった。

「終わったー！」

「帰ったらいっぱい練習しなくちゃね！」

「おう！」

ずっと座っていて硬くなった身体をほぐすように伸びをする浜矢。

相手も決まった事で練習に対するやる気も上がっているようだ。

「相変わらずお前の声はうるさいな」

「佐久間! ……てかお前の声もデカイと思うけど」

二年生組に声を掛けてきたのは佐久間。

その鍛えられた身体は昨年よりも大きく見えた。

「蒼海大と当たるならまた決勝なんだよね」

「フン、決勝以外でお前らと当たりたくないな」

「だよな! 最後に戦うのに相応しい相手だぜ!」

闘志を燃やしながら言葉を交わす浜矢達。

抽選の結果、この二校が戦えるのは決勝戦となる。

「少しは成長したんだろうな?」

「あつたりまえだ! 佐久間だってちゃんと成長したんだろうな?」

「当然だろ? もうお前には打たれないさ、それと鈴井にも」

挑発的な目で鈴井を見る佐久間。

それに対抗するように鋭い目を細めながら佐久間の前に出る鈴井。

「私は同じ年に抑えられるような選手じゃないよ、打たれる覚悟をしておいてね」

「それくらい強気な方が抑え甲斐があるな」

お互いに挑発し合う鈴井と佐久間。

佐久間は浜矢とだけではなく、鈴井ともライバルになった。なお、鈴井側はそこまでライバル意識は持っていない模様。

「玲ー？　行くよ？」

「はい！　じゃあまた決勝でな」

「望むところだ！」

蒼海大の制服を着た先輩らしき人が佐久間を呼ぶ。

佐久間は浜矢たちに別れを告げ先輩の元へ向かいながら、背を向けたまま右手を挙げる。

「決勝まで負けられないな」

「当たり前だよな」

「今日の練習は厳しくいくよー！」

浜矢達もバスに乗り込み学校へ戻る。

車内では対戦が予想される相手校の話題や、注目選手を近くで見た事の感想などで持ちきりだった。

「そーいや佐久間と監督って名前同じなんだな」

「漢字は違うけどね」

「それに監督の名前って気にしないよねえ」

「どんな名前だろうと監督って呼ぶしな」

二年生は灰原と佐久間の名前が同じ事について話していた。灰原はその会話は聞こえていたが、混じることはなかった。

数十分を掛けて学校に戻り、練習が始まる。

「さあやるぞ! 内外野はノック、バッテリーは投球練習始めろー!」

灰原の一声で一斉に自分の位置に散らばる十四人。

洲崎と神宮は伊藤と交代で組みながら投球練習、浜矢と鈴井はまず話し合いを始める。

「投げないの?」

「大会も近いし確認しておきたい事があるんだ」

「確認しておきたい? 配球とか?」

浜矢の問いかけに頷く鈴井。

ストライクゾーンと打者が書かれた紙を取り出し、二人で配球について語り合う。

「まず伊吹ちゃんって決め球は何が良いの?」

「うーん……悩むけどやっぱりストレートかな、決め球というより一番自信がある球だけ

ど」

「分かった、じゃあ左右の違いでそれを変えたいとかはある？」

「あんま無いかな、けど右相手にはフォーク効くと思う」

自分の投げたい球だけではなく、効果的だと思う球を挙げていく浜矢。それを聞き色んな場面を想定し配球を組み立てる鈴井。

「こうやって話してると思うけど、鈴井みたいな奴と組めて嬉しいよ」

「……そう」

「なんだよー！ 人が褒めてやったのに！」

「うるさい」

浜矢から顔を背け冷たく言い放つ鈴井。

それを不服そうに見る浜矢に対し、ある事実気付いた千秋が耳打ちをする。

「美希ちゃんは照れてるんだよ、ちよつと顔赤くなってるもん」

「マジで？ アイツも可愛いとこあんじゃん」

「二人とも聞こえてるよ！」

ほんのり赤く色づいた頬を隠さないまま、小声で話す二人に威嚇するように叫ぶ鈴井。

三人の信頼関係が見て取れるやり取りだ。

「ほら！ まだ配球考えるから集中して！」

「はーい、せんしゅーはこれからノック？」

「そうだよ、二人とも頑張つてね！」

千秋は灰原と交代してノッカーをやる為、バッターボックスに向かう。残された二人は集中し直し、配球や打者心理を突き詰めていった。

「ラストー！ ……よしつ、片付けるぞー！」

『はーい！』

練習開始から二時間以上が経ち、灰原による最後のノックを終える。

疲れを見せながらも片付けを進めていく部員たち。

「千秋、浜矢たちはどうだった？」

「いい感じでしたよ、信頼関係も築かれていますしお互いの意見も交換し合っていましたし」

「同じ年だところという点で楽だよな、気遣わないでいいから」

鈴井はそうではないが、意外にも浜矢は先輩相手だと気を遣うタイプである。

自分の意見を飲み込んでしまう事もあるため、鈴井と浜矢がバッテリーを組んでいるのはチームとしても良い事だ。

「野手陣も動き良さそうですね」

「特に外野は良いぞ、岡田と荒波は守備範囲も広くて肩も強いし」

「内野だと耀ちゃんも守備上手いですよねえ」

今日の練習を見て感じた事を共有する二人。

指揮官である二人の考えを伝え合う事で、作戦の精密さも上がる。

「他は特に無いかな、引き留めて悪かったな」

「そんな……監督と野球のお話できるの楽しいですから気にしないで下さい！」

「嬉しいこと言ってくれるな、じゃあまた明日な」

「はい、また明日」

最後まで残った千秋を見送り、灰原は深いため息をつく。

「灰原監督？ 大丈夫ですか？」

「平気ですよ、ちよつと考え事してただけです」

心配という気持ちに乗った声色で尋ねてくる小林に、ぎこちない笑顔で返事を返す灰原。

小林が背を向けると今度は聞こえないように、もう一度小さく息を吐く。

(……いい加減、決めなきやならないよな)

第8球 珍しさの連鎖

6月。連日雨が降り続ける時期。湿度が高く服が体に張り付いて不快感を覚えるが、野球部員にとつての問題点はそこではない。

「外で練習したい……」

「もう四日も雨降り続けてるし、いい加減グラウンドで練習したいね」

「ピッチャーはやっぱりマウンドに立ってこそだと思ふんだよ！」

強い雨が降りしきる外を恨めしそうな顔で見つめる神宮と洲崎。それなりのスペースはあるが広くはない室内練習場に十四人、この場の密度は高い。

「外野も守備練満足に出来ないからなあ」

「てか外で走りたい！」

「中学の時とか階段で走り込んでる奴いたよな」

荒波と岡田も賛同し、まともに練習が出来ない現状に不満を漏らす。ただ、この二人に関しては守備より打撃練習をした方がいいのではないか。

「私らも階段で走るか！」

「いや普通に迷惑でしょ」

「だよね……」

提案を却下され目に見えて落ち込む岡田。

しかしすぐ立ち直った事から本気ではなかったのが分かる。

その頃部室では、灰原が一人ため息をついていた。

手に持っているのは今までの試合結果や個人成績のデータが纏められているタブレット。

(防御率2.18と1.96か……誤差ではあるが、これは……)

浜矢と洲寄の成績を険しい顔で眺める。

暫くして、決意を決めた表情で立ち上がる。

(……きちんと説明して納得して貰おう。それに起用法自体は去年と変わらない)

灰原は何かが入った段ボールを持ち部室を後にする。雨に濡れないよう注意しながら歩みを進め、室内練習場の扉を開ける。

「集合！ 背番号配るぞ！」

「背番号？」

「至誠はゼッケン自分で付けるタイプのユニフォームなんだよ」

「へー、中学は貰った時から刺繍されてたなあ」

段ボールを開けるとそこには、人数分の公式戦用ユニフォームとゼッケンが。それを見る灰原の目には、未だ迷いが見えていた。

「……背番号1、洲崎」

「えっ？」

驚きに目を見開き浜矢の方を一瞥する。

浜矢は洲崎の視線に気づくと、笑顔で一言。

「凄いじゃん！ ほら、早く受け取れよ！」

「……………はい」

納得がいかない、だけど嬉しい。

そんな複雑な感情が混じり合った顔のまま、栄光の背番号1を受け取る洲崎。

（……………なんで私なんだ、浜矢先輩の方がいいのに）

（やっぱりエースは洲崎か…………）

お互い相手の方がエースに相応しいと考えていた。

だが浮かない顔をしている洲崎に対し、浜矢は晴れやかな表情。

スタメンの背番号はポジション別に振り分けられ、控え選手の番になる。

「10番、浜矢」

「はいっ！」

背番号10は至誠では二番手投手の証。

二番目に評価されている事実を、ユニフォームと一緒に受け取る。

「11番、神宮！」

「はい！」

中継ぎである神宮の背番号は11。

今の至誠投手陣の中では、一番下の評価を受けてはいるがそれには納得している様子。

そして12番は伊藤が、14番は石川が受け取った。

「じゃあ最後、千秋は13番な」

「今年も良いんですか……？」

「登録しておけばコーチャーにも出せるし、それに悴はまだ空いてるからな」

誰よりも嬉しそうにユニフォームを貰う千秋。

その姿を見て自身も嬉しそうになっている浜矢を、鈴井はじつと見つめていた。軽い筋トレに守備練習、投球練習と素振りて本日の練習は終わる。

「浜矢」

「伊吹ちゃん」

帰り支度を進める浜矢を鈴井と灰原が同時に引き止める。同時に声を掛けられたことに笑いながら二人に近づくと、浜矢。

「何ですか？」

「背番号の事なんだが……」

「伊吹ちゃんは納得しているの？」

いきなり直球で聞く鈴井に苦笑いをする灰原。

鈴井の聞き方に慣れている浜矢は気にすることなく答えた。

「悔しいけど、納得はしてるぞ？ 成績良いのはあっちだし」

「……私は確かに成績で背番号を選んだ、けれど浜矢を評価していない訳じゃない」

「それは分かっていますよ、だから10番をくれたんでしようし」

人数が増えた分背番号は一つ後ろになったが、10番ということは投手として評価されたことを意味する。それは浜矢にとって何よりも喜ばしかった。

「起用法自体は去年と変えない、二枚看板で行く」

「……なら何も問題は無いです！」

「ありがとう、浜矢」

明るくそう答えた浜矢だったが、鼓動は運動後だからという言い訳で誤魔化せないレベルで速くなっていた。

(監督の性格的に二枚看板にするとは思っていたけど、確信は持てなかった……本当に良かった)

洲寄がエースになる事で、自分の登板が減るのではないか。その不安を抱えていた浜矢はようやく安心できたのだ。

「少なくとも来年までには……」

「監督！」

鈴井の言葉を遮って浜矢が話し出す。

遮られた事に少し苛立ち、眉をひそめて浜矢の方を見た鈴井。しかしその次の言葉は出てこなかった。鈴井の目に映る浜矢が珍しかったからだ。

「大会が始まったら私を10番にした事、後悔させてあげますよ！」

悪戯を仕掛ける子供の様な顔。

滅多に見せないその顔に、鈴井ですらも拍子抜けしたのだ。浜矢は呆気に取られている二人に挨拶をして部室を出る。

「……………あいつ」

「強いですね、伊吹ちゃん」

「だな」

教え子の成長を実感した灰原は、浜矢が出て行った扉を微笑みながら見つめた。

（呼び止める必要なんて無かったかもな……それにしても、近くで見てたつもりだったのに今更成長に気付かされるとは）

子供の成長というのは案外早いものだ。特に高校生ともなれば、いつの間にか大人になっっている。

「これからも相棒を支えてやってくれよ」

「言われなくてもそのつもりです……お互いに」

はにかみながら言う鈴井を見て、今日は珍しい顔をよく見る日だなど思う灰原。

自身が見出した才能同士が認め合い、実力を高め合っている。それがどうしようもなく嬉しくて、灰原も珍しく満面の笑みを浮かべた。

月日は流れ開会式当日。

じりじりと照りつける陽の光に、長時間熱されたアスファルト。

上下から違う種類の熱を感じいつ熱中症になってもおかしくない暑さの中、球女たちは一堂に会した。

「あつっ！ こんな中、野球やるとかバカでしょ」

「今更それ言う？ それにまだここは神奈川だから」

「まあ沖繩とかに比べりゃマシだろうけど……」

額にじんわりと汗をかきながら浜矢が項垂れる。

鈴井も口調は冷たいがこの暑さには参っているようで、アンダーシャツで汗を拭いている。

「ピカー、夏にアンシャ着るのってどうなの？」

「……………は？ 私？」

「え、うん」

「何そのあだ名」

ひかるだからピカ！ と岡田に元気よく言われ頭を押さえる三好。

三好は七分丈のアンダーシャツを着用しているが、岡田は半袖の物なので腕の汗は吸い取れない。

「外野はダイビングキャッチするでしょ、怪我防止にもなるから長袖着れば？」

「汗でへばりついて着替えめんどいんだよ……………それに私は飛び込まなくてもある程度なら捕れるから！」

岡田の守備範囲の広さは尋常ではない。

プロの舞台で戦ってきた灰原を持ってしても、最高の外野手だと絶賛する。

「それに陸上だとユニフォームは出来る限り軽くしてたんだよね、だからこっちはまだ慣れないな」

「そーいや陸上って布面積少ないか」

陸上から野球に転向した岡田からすれば、わざわざ服を重くする意味が分からなかった。

郷に入れば郷に従え、三好は岡田にそう伝える。

至誠が集まっている場所から少し離れた地点で、蒼海大の選手が入場を心待ちにしていた。

「今年は必ず優勝するぞ！ 打倒至誠！」

「オー!!」

キャプテンの一声で部員が大声を出す。

神奈川の頂点に立つ高校、そう言われれば誰もが蒼海大と答えていた。

しかし昨年は至誠にその座を譲った、これは蒼海大のメンツに関わる事であった。

「てかこれ聞こえてんじやないすか？」

「聞いててもいいさ！ むしろ聞かせてやれ！」

佐久間は至誠が集まっている場所を眺める。

まるで実力を見定めるかのように、新入生を中心にじつと見つめる。

(……………ん？ 浜矢の背番号…………)

彼女は浜矢が1番でない事に気づいてしまった。

それが分かった瞬間、苛立ちや悲しみなどの感情が心の中に渦巻いた。

(何やってんだよ、お前ならエースになれるだろ……私が言えたことではないのが一番ムカつく)

佐久間の背番号は昨年と変わらず18番であった。

しかし彼女の場合は、1番でないならこれを希望すると言つて得た番号。

実際は浜矢と同じ二番手投手の評価を受けていた。

「玲? どうしたの?」

「……いえ、なんでもありません」

不機嫌そうに浜矢の方を一瞥し背中を向ける。

球場中に選手入場のアナウンスが響き、彼女たち蒼海大の選手は入場を始めた。

開会式が終わりバスに乗り込んで、学校で解散。

寮生はそのまま寮に向かい、それ以外の部員はそれぞれの帰路に着く。

しかし青羽はいつまで経ってもそこから動こうとしなかった。

「翼? 帰るよー」

「……ああ」

「なにになに？ 考え事？」

青羽の様子に気づき他の三年生が集まる。

思った以上に注目されてしまい、気まずそうな顔をしながらもぼつりぼつりと語り始める。

「私達は今年で最後……だから、悔いが残らないようにしたいと考えてただけだ」

「だよね……やっぱり今年もまた優勝したいよ」

「今年の至誠も強い！ だからイケるって！」

青羽の言葉に山田と菊池が賛同する。

言葉は無かったが金堂も頷いていた。

「私が守備も引つ張るし先頭で出る！」

「なら私がチャンスを広げて」

「……私が決める」

「そして私がダメ押しの一発を打つ！」

菊池が人差し指を立ててそう宣言し、それに続き金堂も自信を持った声で言う。

一瞬の間を開け青羽が強い意志を込めた声で呟き、山田が得意げな顔のまま叫ぶように喋る。

何かを閃いた金堂が手を自身の前に差し出す。

彼女の意図に気付いた三人がその手の上に、次々と自身の手を重ねていく。

「泣いても笑っても最後なんだ、だから自分達の力を全部を出し切ろう！」

「おーっ!!」

「……おう！」

キャプテンである金堂の声出しに他の三人も応え、夏の夜空に熱く、強い声が響き渡る。

第9球 作戦会議

今年も神奈川県予選が始まった。

二日目の第一試合は市大藤沢の試合となり、至誠ナインはテレビの前で観戦していた。

《さあピッチャーゆつくりと振りかぶって……投げた！ 内角の球に詰まらされ……最後のアウトが宣告されました！》

「……決まったな」

「うん、予想通り初戦の相手は市大藤沢……」

市大藤沢が初戦を5回コールド勝ち。

10対0と圧倒的な実力を見せつけた。

「思ったより手強そうだね」

「ならやる事は一つですね！ 作戦会議をしましょう！」

千秋がニコニコしながら、かき集めたデータの詰まったタブレットの画面をモニターに映し出す。

「まず注意すべきはエースと四番です」

「喜多と古野か……」

千秋がタブレットを操作し、エース兼二塁手である喜多のデータを出す。

「ナツクルカーブを軸に投球する技巧派投手ですが、注意すべきは打撃の方です」

「確か高校通算28本だっけ」

「はい！ ミート力も高く、フィールディングも良いので、正直野手として出てきた方が厄介ですね」

そう言っただけでセカンドとして出場した喜多の映像を見せる。細身ながら鍛えられた肉体だ。

二遊間を襲う痛烈な打球に滑り込みながら追いつき、すぐさま体勢を直し正確な送球をする姿が映し出された。

「上手いな……動きの一つ一つが綺麗だ」

「打撃の方も、対左にもチャンスにも強いので抑えるのは難しいですね」

「得点圏で回しちゃいけないって事か」

浜矢は強敵と闘える事を楽しみにしているようだ。

次は投手としての喜多の映像が流れた。

「ナツクルカーブ、変化は小さいね」

「けどストレートはノビがあるし、奪三振能力に長けてるよ」

「……これ見た感じだと、野手の方が厄介ってのは分かるな」
（良い球を投げてるとは思うけど、怖くはないんだよね……）

同じ投手である浜矢は喜多の投球を的確に評価していた。

喜多は投げてる球は良いが強打者は抑えられない選手、そこを勿体無いと評する野球関係者も多い。

「てか球遅いな」

「けとりリリースはどの球種でも一緒なんだよね……なんか変な投手」

「あはは……纏めると、喜多さんは投手より打者として警戒した方がいいです」

高卒でプロ入りするならば間違いないく野手転向をする、千秋はそう締めくくった。

続いて四番である古野の映像を移す。

「古野さんの特長はなんとと言っても長打力！ これを見て下さい」

アウトローの緩い変化球を容易くスタンドイン。

それがどれだけ難しいことかはこの場の全員が知っている。長い沈黙を経て金堂が口を開く。

「けど、確か左は苦手なんだっけ？」

「そうです！ そこを考慮すると、市大藤沢との試合は真理ちゃん先発にしようかなあ」と

「そういう事でしたら投げますよ」

四番を封じ込めれば幾分かは楽になる。

至誠の初戦の先発投手は洲寄に決まった。

「せんしゅー、喜多は先発しそうなの？」

「多分……初戦は二番手だったし次は喜多さんでくるとおもう」

「投手喜多の弱点は？」

浜矢に聞かれると千秋は、喜多についての細かなデータを出す。そこにはカウント別の被安打数や四死球率なども書かれていた。

「これを見て貰えば分かると思うんだけど、対左時の被安打が多いね」

「左が苦手なんだ」

「うん、だから左の子はスタメンで出すからね！」

千秋がそう言うのと荒波と石川がガッツポーズをし、二人の騒ぎっぷりを見て呆れた顔をする三好。

スイッチヒッターである彼女もスタメンは確約されている。

「センパイ！ 私はポジションどこですか!?!」

「実はどうしようか迷ってるんだけど、ライトかセカンドかな」

「ならセカンドやっていいよー、私は左そんな得意じゃないし」

三年生は最後の夏である、それを知っているながら菊池は後輩にスタメンを譲った。

それには流石の石川も驚きを隠せなかった。

「えっ!? 流石に先輩が出た方がいいですよ!」

「喜多みたいなタイプほんと苦手なんだって、そんなのが一番に座つても邪魔でしょ? だからイシに任せたよ」

その代わり初戦以降の試合は私が出るから、と笑顔のまま言い切る菊池。

「……千秋先輩、セカンドで出てもいいですか?」

「もちろん! 菊池先輩、ありがとうございます」

「いいっていいって、チームの勝利の為だよ」

(そう思っても実行に移すのは難しいんだけどね……)

口にはしなかったが、金堂は菊池を褒めていた。

自分が同じ立場に立つたら同じ事が出来るか、確実に出来ると言える自信は金堂には無かったからだ。

「スタメンは決定した、ならやる事は決まっていますよね?」

「……練習するよ!」

「おー!!」

千秋の問いかけに金堂が立ち上がって指示を出すと、他の部員が一斉に叫びグラウンドへ一目散に向かう。去っていく後ろ姿を眺め灰原と千秋、小林は笑い合った。

「まずは当日のスタメンでノックするぞ、残りは千秋からメニューを聞いてくれ」「じゃあ明日のスタメン発表しますね！」

千秋から市大藤沢戦のスタメンが発表される。

一番セカンド 石川灯

二番シヨート 三好耀

三番ファースト 金堂神奈

四番レフト 青羽翼

五番サード 山田沙也加

六番キャッチャー 鈴木美希

七番ライト 荒波友海

八番センター 岡田早紀

九番ピッチャー 洲崎真理

打力的にはどんぐりの背比べだが、岡田の方が脚がある分内野安打が期待できるとのこと、洲崎が九番に置かれた。

「てか私のところに友海入れて、灯はライトじゃダメだったんですか?」

「市大は長打力があるチームだから、できる限り外野は守備重視で起用したかったんだ」
疑問に思った岡田が千秋に尋ねると、考え抜かれた理由を返される。

石川はあまり肩が強くなく、更に本職ではない分荒波や岡田と比べると外野での守備範囲は狭い。

「それに公式戦でのエラーは怖いからね、緊張している初戦では本職で出してあげたかったんだ」

「そんなところまで考えてるんですね……」

チームの初戦でミスをすればその後のプレーに影響が出る可能性がある。

いくら本職ではないと言っても、ミスをした本人は引きずるだろう。

そこを考慮してセカンドで石川を起用した。

「さっ! ベンチメンバーもやる事はあるからね! 伊吹ちゃんと空ちゃんは的当て、野手陣は室内でマシン打撃しよう!」

「道具を運ぶのは手伝いますよ」

「先生! ありがとうございます」

小林がボールの入った籠を室内練習場に運び込む。

普段から授業に必要な道具を運んでいる彼女は、見た目とは裏腹に力持ちだ。

「伊吹ちゃんと空ちゃんは向こうね、ちゃんとネットで仕切っておいてね」

「はいよー、じゃあ神宮キャッチボールやろう!」

「はいっ!」

投手の二人は千秋お手製の的で投球練習。

九分割にされた的を狙って投げる事で制球力の強化に繋がる。

「野手はノック……って言っても彗ちゃんと菊池先輩しか居ないんですよ」

「その分いっぱい受けられるからよし!」

「キャッチャーは普段ノックの本数少ないので有難いです」

普段の練習でのキャッチャーゴロやキャッチャーフライの本数は少ない。

しかし今は満足いくまでノックを受けられる、それは1年生で成長中の伊藤にとって有難い事だった。

「二人とも50球投げ込んだらこっちに来てね!」

「はい」

ピッチャーは九人目の野手とも呼ばれるポジション、フィールディングを鍛えるのは大切だ。

因みに二人ともフィールディングには自信がある。神宮は俊足だし反射神経も良いのでバント処理が上手く、浜矢も投手の時ならフライの処理も危なっかしくない。

「じゃあノック始めますよ！」

「しゃーこい！」

「ノーミス狙いますよ」

千秋によるスパルタノックが始まった。

軽やかな動きでどんな球でも捕る菊池、派手さはないが正確かつ丁寧に守備をこなす伊藤の二人。

（菊池先輩は守備は文句なし……替ちゃんも捕ってからが速い）

動きを見て脳内でデータを更新していく千秋。

灰原のデータ収集力、千秋の観察眼があるから至誠の選手は実力を100%発揮できる。

グラウンドでは灰原による厳しいノックが行われていた。

「サード！ 今の前に出なかつたら捕れたぞ！ 何でも前に出ないで状況判断しつかりな！」

「すみません！ もう一回！」

「次は捕れよ……ナイス！ 今のだよ今の！」

守備範囲ギリギリを狙い強い打球を打つ、彼女のやり方は実力をつくがその分疲労も

溜まりやすい。

「セカン！ よーし、石川いいぞ！ その感覚を忘れるなよ！」

「はいっ！」

このノックでは内野を集中的に鍛えていく。

打球が多く来るのは内野なのだから、その内野を鍛えるのは大会を勝ち進むんでいく為に必要な不可欠だ。

「外野もいくぞ！ 捕ったらすぐバックホームな！」

「なーい！」

高く舞い上がった打球を助走しながらキャッチし、その勢いそのまま捕手の鈴井へ矢のような送球。

「岡田いいよ、完璧！」

「ありがとうございまーす！」

（岡田の守備は問題無し、どころか全国トップクラス……それだけに打撃がなあ）

練習試合での成績は26打数5安打、打率. 192。

守備では素晴らしいプレーを連発していたが、流石にこの打撃は何とかしなければならぬと監督は思っていた。

（まだ一年だし打撃を集中的に鍛えて、三年になる頃にはまともに打てるようにしたい

な)

育成プランは既に立ててあるが、その通りにいかないのが野球だ。

監督はしつかりと個人を見て適切な指導をしようと決意した。

「はい終了！ みんな片付けるよー！」

「千秋さんは少し休憩しましょう、私が代わりにやりますよ」

「でも皆が動いているのに私だけ休むのは……」

「こうでもしなければ、千秋さんは絶対に休まないでしょう？」

小林の言っている事はもつともだ。

部活が休みの日も他校を研究し、時には現地に赴いてまでデータを収集する。

千秋は生徒でありながら、灰原や小林と同レベルの作業量をこなしている。

「そうそう！ せんしゅーは休みなって！ これもトレーニングだから」

「伊吹ちゃん……ごめんね？」

「謝るんじゃないかってお礼言っただけだよ」

「……ありがとう」

浜矢の気遣いが千秋の心に染み渡る。

ほんわかとした空気の中、片付けは終わりスタメン組と合流。情報を共有して本日は

解散となった。

「先生もありがとうございました」

「試合になると出来る事がないですし、練習くらいは手伝いますよ」

「千秋がお礼言っていましたよ」

「ふふっ、お礼を言うのはこちらの方なのに……」

小林は千秋に野球について教えて貰った、というよりも千秋の近くにいる関係で自然と知識が耳に入ってきていた。

ルールも分からなかった最初の頃に比べ、今は専門用語も少しずつではあるが覚えてきた。

「皆さん頼もしいですね」

「高校生の成長速度って怖いですよね」

「本当にそうですよ、金堂さんだって初々しいと思っていたのに今じゃキャプテンしてますから」

小林は金堂を一年生の頃から見守っていた。

家庭科教諭であるが故に、様々な学年を見守れる。

（あまり主張しない子だと思っていました、あんなに周りを引っ張っていける力があつたんですね……いえ、その力が身についたんですね）

高校生の成長速度は目を見張るほど速い。

少し見ないうちに大人びるのはこの時期の子供にはよくある事だ。

「浜矢さんたちの成長も楽しみです」

「あの三人は一番成長しますよ、野球も精神も」

「でしたら、私たちはそれを支えてあげないといけませんね」

「ええ」

生徒を評価するのは大人の役目。

二人の大人は、自身の教え子を高く評価していた。

第10球 夏大開始！

市大藤沢との試合当日となる。

至誠は初戦だが相手は二試合目、球場の雰囲気やグラウンドに慣れているのは相手である。

「早い段階に喜多さんを打ち崩して降ろす！ クリーンナップは長打警戒！ この二つを頭に入れて戦いましょう！」

「観客は去年の夏から私たちの公式戦を観ていない、成長した姿を見せて度肝を抜かせてやれ！」

「ハイッ!!」

じゃんけんの結果により先攻は市大藤沢となった。

前日に発表されたスタメンが守備位置につく。

(まさか初戦の先発が私とは……任されたからにはやるしかないか)

マウンド上で息を一つ吐いて空を見上げる洲崎。

今はやる気よりも緊張が勝っている状態だ。

「完封する気で投げてね、全部受け止めるから」

「分かりました……よろしくお願いします」

鈴井と洲寄がハイタッチをするのを、浜矢はベンチで面白くなさそうに見ている。

「くそう……あのポジションは私のなのに」

「次の試合は伊吹ちゃんが先発だから、ね？」

「……………我慢する」

心から納得している訳ではないが、千秋に言われたら仕方ないといった表情でそう答える。

（エースの座まで獲られてんのに、鈴井まで獲られたら堪ったもんじゃないぞ）

「そんなに心配しなくても、真理ちゃんには空ちゃんがいるよ？」

「……………ナチュラルに心読むのやめよう？」

「伊吹ちゃんが分かりやすいだけだよ」

千秋であれば本当に心を読むことも出来そうだな、と浜矢は思う。

「今日はどんな試合になりそうですか？」

「鈴井に相手の苦手コースは伝えてある……だから洲寄の調子次第ですね」

「なるほど……」

小林と灰原が今日の試合展開の予想をしていた。

彼女が自分から野球の話振ってくるのは珍しい、と灰原は感じた。

鈴井という全国クラスの捕手に洲寄という中学No.1左腕の投手。その二人が合わされば、激戦区神奈川でも圧倒するのは当然とも言える。

初回を三人で完璧に抑えた洲寄がベンチに戻る。

「洲寄ー、ナイピ！」

「浜矢先輩……ありがとうございます」

浜矢はさつきまでの不機嫌そうなオーラはどこへ行ったのか、今は洲寄の好投を讃えている。何だかんだで後輩のことも大好きなのだ。

「さあ初回から点取っていきますよ！」

「イシー！ とりあえず出塁してくれ！」

「はい！」

1回裏の攻撃が始まり石川が打席に入り、マウンドには予想通り喜多が上がる。

（喜多さんか……ナックルカーブが厄介って言うってたし、最悪それは捨てよう）

喜多がスリークォーターから初球を投げ込む。

その球はまさかの真ん中付近の絶好球。

（甘い、もらった！）

捉えたと思ったその球は石川に手の痺れを与えつつ、セカンドへの平凡なゴロとなっ

た。

「甘かったと思っただけですけどね」

「手で小さく曲がった……カットボールかな」

「だから詰まった感覚があるんですか」

喜多はナツクルカーブとノビのあるストレート、そして直球と惑わすカットボールがある。

(カットボールか……ギリギリまで見極めて打つしかない)

三好はバッターボックスの後方に立ち、変化を見極められるようにした。

その作戦は的中し切れ味鋭いカットボールにも対応出来ている。

七球粘り2―2の並行カウントまで持ち込んでからの八球目だった。

外角高めにすっぽ抜けた様な球が投げられ、三好は見逃そうとしたが。

(いやっ、落ちる! カットだけなら出来るはず!)

「ストライク! バッターアウト!」

「っ……………」

しかし反応が遅れてしまったのは大きく、空振り三振となった。

「意外とあのナツクルカーブ厄介そうですね」

「小さく曲がるからああいう投球も出来るんだね……引き出してくれてありがとう耀

ちゃん」

「いえ、どつかの灯が初回の先頭だつてのに初球打ちしたから粘っただけです」

「うっ……、ごめんごめん！」

三好は初回の上位打線は粘つて、全球種を投げさせるのが役割だと考えている。

その為甘いからと初球打ちした石川を少し叱る。

「次からはちゃんと粘るよ！」

「そういえば灯つて粘れたっけ？」

「……………無理」

「じゃあやっぱ私が粘るから好きに打つていいよ」

石川はツーストライク時の打率が低い。

対して三好は打率自体は低いものの、余程のことが無い限り粘る事ができる。

初回の二人目の打者が三好の場合、球数は増えるし全ての球種を暴かれるので、投手からするとかなり厄介な相手。だからこそ三好は不動の2番打者として確立している。

金堂がヒットで出塁したものの、青羽の打球はショート正面のライナーとなりスリーアウト。

この初回の投球そのままに、その後は投手戦が続き3回まで両チーム無得点。

「敵ながら喜多さんは良い投手ですね」

「まあ去年の秋に参考記録ですけどノーノー達成してますからね」

「確か5回までだったか」

昨年の秋季大会二回戦、新チームのエースとなった喜多は5回をノーヒットノーランで抑えた。

コールドゲームだった為参考記録ではあるが、あの試合で彼女の名は全国に知れ渡った。

「真理ちゃん、クリンナップからだから警戒ね」

「はい、抑えてきます」

千秋に見送られ洲崎が4回のマウンドに上がる。

三番から始まるこの打順、四番の古野の前にランナーは出したくない。

ロジンバックを触りながら心を落ち着かせる洲崎。

鈴木も至って冷静に、前打席でのスイング等を考えながら脳内で配球を組み立てる。

(この人はさつきスラップを打ちにくそうにしていた……なら初球からいこうか)

サインに頷いてスラップを内角高めに投じる。

左対左の対決、体に向かってくる球は反射的に仰け反ってしまう。しかしボールはストライクゾーンを通過しワンストライク。

(次はスクリューをアウトローにお願い)
(分かりました)

スクリューは利き手側に曲がる変化球、外に投げれば明らかなボール球になると思われた球がゾーン内に入ってくるのだ。

打者からすればかなり打ち辛い球なのは間違いない。しかしこの大事な一球で洲寄は。

(あつ、しまった……！)

(ヤバッ、失投!?)

すつぽ抜けた球は真ん中高めに浮いた。

それをクリーンナップを張る選手が見逃す訳もなく、ジャストミートされ外野まで運ばれる。

(ツーベース……やってしまった)

結果はフェンス直撃のツーベースヒットとなった。

四番古野を得点圏で迎えてしまう所で、鈴木がタイムを取りマウンドへ向かう。

「真理平気？ スクリューの調子悪い？」

「いえ、すみません……少し気が抜けてたのかも知れませんが」

「なら良かった、次はしっかり投げて抑えよう」

試合中でもやり取りを交わし、意識の食い違いがあれば配球を変える。捕手として必要な能力が鈴井には備わっている。

(古野は左は苦手……なら内角ガンガン攻めてこう)

内角低めにバームを投げ体制を崩させファール。

続いて内角高めにクロスファイヤーを放り空振りを取る。

(最後はスラープで決めるよ！)

外角低めにゾーンギリギリを攻めるスラープ。

それに手を出し力で無理矢理運ぶが、レフトフライに終わる。

「ドンマイ」

「あのスラープは警戒した方がいいぞ」

「分かった」

四番の古野を抑えても、五番には喜多が座っている。情報を共有してから喜多は右打席に入る。

(一年生だつていうのに凄いな……流石は西東京の黄金左腕)

喜多は洲崎と同じ西東京出身、二歳下の洲崎の事も知っていた。対戦した経験はないが球筋は知らないが、その分映像を観てきた。

(古野さんもだけどここの人も威圧感あるな、慎重に入ろう)

内角低めのストレートであわよくば詰まらせる、そう思ってこの球を選んだのだらう。

しかし喜多は上手く体を使い、ギリギリまでバットのヘッドを出さずタイミングを合わせる。

甲高い金属音が昼の空に響き、白球はレフトスタンドに吸い込まれるように落ちていった。

試合を動かしたのは、エース喜多による先制ツーランホームラン。

ここで鈴井はタイムを取りマウンドに向かう。

「真理ごめん、今のは配球が悪かった」

「私も打たれないと思って首を振りませんでした、先輩だけの責任ではないです」

「……そうだね、この後は抑えよう！」

「はっ」

まだ試合は中盤だ、諦めるには早すぎる。

バッテリーは気持ち切り替え後続をしつかり打ち取り、これ以上点差を広げさせはしなかった。

「すみません、先制されてしまいました」

「あれを打たれたら仕方ないよ、ほら野手陣援護してやれ！」

「こつちもクリーンナップだからだからね！ 得点は期待できるよ！」

金堂が打席に入り真剣な表情でマウンド上の喜多を睨む。普段の温厚な彼女からは想像できない表情。

(至誠で一番警戒すべきバッター……対戦するのを楽しみにしてたよ)

(野手と比べれば、投手の喜多は脅威度は低い……私なら打てる！)

援護を守り抜きたい喜多と、後輩を援護したい金堂の戦いが始まる。

初球のストレートは見逃してワンストライク。二球目のカットボールは手を出さずワンボール。

二球続けてのカットボールは惜しくもファールでツーストライク。

しかし追いつまされてからのナックルカーブにも食らいつき、フルカウントになるまで粘る。

勝負の一球は高めのストレート、ノビがあり想像よりも打ちにくい球。

それに対し金堂は踏み込んでバットを出す直前まで振った。スイングするギリギリの所で止め、捕手が塁審へスイングの判断を求める。

セーフのジェスチャーがなされて四球となり出塁。

普段ならボール球でも迷わずスイングしていたが、この大事な場面でハーフスイング

を選んだ。

(ノビがあるから当てられてもヒットになるか分からなかった……振らないでよかった)

(この場面で止めてきたか……昔の君だったら迷わず振ってたのにね)

因みに喜多と金堂は中学時代に対戦した経験がある。二人とも東東京、更に言うところ中野区出身だ。

ノーアウト一塁で打席には四番の青羽。

威圧感を放ちながら打席に入り、右腕を一度回すというルーティンをする。

(ここで一番欲しいのはホームランだが、喜多のような投手に大振りしたら最悪ゲッツツー……ならば)

初球のインローのカットボールを無理矢理引っ張りレフト前。ノーアウト一・二塁で山田に繋いだ。

(ここで私かよ！ 全く翼は無茶振りばっかして……けど)

(お前はこれくらいの方が燃えるだろ?)

塁上の青羽と視線を交え、喜多に向き合う山田。

プレッシャーは感じているが、その緊張感が楽しいといった雰囲気だ。

得意球であるナックルカーブをアウトローに。

普通の打者ならば当てるのが精一杯の球だろう。

だが、山田はその辺にいくらでもいるレベルの打者ではない。

「なっ……!」

「逆転スリーラン!! ナイバッチ!」

「山田せんぱーい! 好きでーす!」

「イエーイ!」

白球はあつという間にスタンドに突き刺さり、逆転スリーランとなる。

ベンチと観客席からの歓声に応えるように、満面の笑みでダイヤモンドを一周する。

「ありがとうございます!」

「いいって! いやー、打って良かった!」

「チーム第1号おめでとう!」

今年のチーム初の公式戦本塁打を放ったのは山田。

四番という立場でありながらも、後続を信じて託した青羽の判断の良さも光った。

「洲崎、どうよっ!」

「……これだけ援護を貰ったら、負ける訳にはいきませんね!」

浜矢は具体的に質問はしなかったが、同じ投手の洲崎は意図を読み取った。

先輩から援護を貰った洲崎は、今度は宣言通り完璧に抑え5回を2失点。

リリースで登板した神宮は安定の四死球を2個出したものの、要所は抑え2回無失点。

打線も6回に2点を追加し5対2で快勝した。

第11球 自分らしく

市大藤沢の選手は地に膝をついて泣き崩れていた。

来年であればベスト16争いには食い込める、それが今年は二回戦負け。

至誠でなければとベンチ外の選手の多くは思ったが、スタメン組は違った。

二回戦でなくともいわずれ戦っていたであろう相手。

そこを勝たなければ優勝は無いのだから、至誠でなければというのはただの言い訳だと。

市大藤沢ナインは自らの実力不足を悔やみながらも、最後まで勝利を信じて声援を送ってくれた観客に一礼する。

至誠ナインがグラウンドから出て灰原を待っている最中だった。

「金堂」

「喜多……久しぶり」

「覚えててくれたんだね、嬉しいよ」

喜多と金堂は同じ東京都中野区出身で、一度ではあったが対戦した事もあった。

「流石に覚えてるよ、昔から有名だったんだから」

「それは君の方だろうか？ 東京の安打製造機なんて呼ばれてたじゃないか」

「私なんて打率だけの打者だよ、殆ど単打しか打てないし」

その打率をキープするのがどれだけ難しいのか、喜多はそう思いはしたが口にすることはなかった。

喜多はその端正な顔を歪ませて、今にも泣き出しそうな表情で呟く。

「……一度くらいは勝ちたかったよ、君に」

「喜多……」

中学での対戦成績は4の4で金堂の圧勝。

試合も5対2で敗れ個人でもチームでも負けた相手だ。

「けど、君が至誠に入って腐らなくてよかったよ」

「ちよつとそれどういう意味？」

「至誠は体罰事件があったからね……もしかしたら君の才能が傷付けられる事があるかもと、少しだけ危惧してたんだ」

体罰事件があったのは金堂が入学する二年前。

たった二年間で体制が変わる筈がない、喜多はそう考えていた。

「けど杞憂だったみたいだね、まさかあの灰原選手が監督をやっているとは思ひもしな

かったよ」

「じゃなかったら入学してないよ」

「だね、君は合理的に物事を考えるタイプだ」

「……それはお互い様じゃない？」

喜多も自身の性格やプレースタイルを自己分析し、一番自分に合っている高校を選んだ。

その高校の強さではなく、自分らしくプレーできるか。それを喜多は重要視していた。

「私たちについてももしかして似てるのかもね？」

「私と君が似ている？ そんなに自分を卑下する事ないよ」

「卑下してるのはそっちだよ……喜多と似てるって言われたら嬉しいよ」

「そうかい？」

喜多は野球も文句無しで上手いが、学業面も優秀だ。小中と成績はオール5をキープし続けた秀才。

そんな人と似ていると言われたら嬉しくなるだろう。喜多は何故これだけの結果を出しておきながら自己評価が低いのか。

「そろそろ時間だ、最後に聞かせてくれ……君はプロを目指しているのかい？」

「勿論だよ、喜多は？」

「……………そうだね、私も高卒でプロを目指す事にしたよ」

金堂がその返答について疑問をぶつけようとしたが、喜多は気にせず自らが率いるチームの方へと歩いていった。

（自分がまだこんなに熱くなれるとはね……………彼女とまた、プロで戦いたいと思うなんて）
喜多は高校で野球を辞めようと考えていた。

両親を始めとした周囲は、彼女の頭脳に価値を見出していたからだ。

（市大で自分らしくプレー出来た……………なら今度は、自分らしく生きるんだ）

その後ろ姿を見送った金堂は、自然と口元が緩んでいた。

何か言われた訳ではない、だが喜多が何故あんな発言をしたのか。

あの発言に隠された意味を読み取ったからだ。

（私と戦う事に執着してくれたんだ、あの完璧超人の喜多が）

「神奈」

「翼？　　（め）めん今行くよ」

青羽に呼ばれ至誠のラインが集まる場所へと向かう金堂。

高校の間に会う事は恐らくもうないが、それでも彼女達はお互いの存在を忘れる事はないだろう。

学校に戻り他校の試合を観戦し、至誠の次の相手である三回戦の相手を確かめる。

「三回戦の相手は京王義塾！ まさかここで当たるとはね」

「かなりの激戦が予想される、気を引き締めていこう」

昨年は準決勝で当たった京王義塾高校。

二・三回戦と強大な相手との戦いが続く。

「京王の四番はセンターの米原さん、魔術師という異名を持つ守備職人です」

「だが打撃も素晴らしいぞ、昨年の秋から打率は5割台をキープして本塁打も多い」

右投右打の大型外野手、京王義塾の米原。

本人は自身を守備型と評するが、打撃も全国トップクラスだ。

「京王は打撃型のチーム……一番から九番まで気を抜かないでね、伊吹ちゃん！」

「任せとけ！ 私が完璧に抑えてやる！」

「気合十分だな、なら今日は浜矢と野手陣でフリー打撃だ！」

監督のその言葉に反応し、一気にやる気になった三年生の強打者組。

浜矢も臆する事なく頬を叩いて気合を入れている。

グラウンドに移動し、まずは一番打ちたがっていた金堂との対決。

「好調の金堂先輩が相手……どうする？」

「フオーク投げるのは怖いんだよね、多分狙われてるから」

「かといってストレートは得意だし……なら」

「スライダーで攻めよう」

同時に同じ言葉を発した二人は、一瞬の間を開けてからニヤツと笑い合った。

（二人は何話してたんだろう、まあどんな球きても打つけど）

打席で待ちぼうけをくらっていた金堂は、そんなのは気にせず打つ気満々であった。

しかも自分が打てるかと信じて疑わない。打率5割越えの東京の安打製造機は格が違う。

（初球はどうする?）

（……ストレート、絶対コントロールミスらないでね）

サインに頷いてから一つ息を吐く。

心を安定させてから初球のインハイへのストレート。

高めにノビのあるストレートを投げられたら、流石の金堂でも対応出来ないのか空振り。

「相変わらず良いストレートだね」

「ありがとうございます」

あの金堂がストレートに空振りをした、その事実が三年生がどよめいた。

「神奈つて空振ることあるんだな」

「久しぶりに見た気がする〜」

「伊吹も凄くなってるんだなあ」

三年間見続けてきた三人ですら、金堂の空振りを滅多に見たことはない。

彼女の類希なミート力の高さが分かる。

（まさかこの私が直球に当てられないとはね……さすが伊吹）

当人もまさか当てることすら出来ないとは思っていなかった。

後輩がここまで成長していた事に驚きつつも、素晴らしい投手と対戦出来て愉しそうにしていた。

（多分もうストレートは通用しない……ならボール球のフォークで）

アウトローにボール球のスライドフォーク。

金堂はバットを止めワンボールワンストライクとなる。

（今の振らないか、先輩も打撃スタイル変わったかな？）

（どうする？ ボール球投げらんない？）

（……いや、まだ手はある）

同じコースにスライドフォーク、しかし今度はストライクになるように投げる。

今度はバットを振り抜いてファール。

(ツーエンドワンか、ここはボール球投げてくるかな?)
(もうボール球は投げないよ、最高の球をお願い!)

真ん中から外に逃げていくスライダー。

ボールではないと判断した金堂は当てていくが、力の無い打球となりファーストゴロに終わる。

「ナイスボール、完敗だよ……美希も良いリードだったね」

「正直、最後の球当てられるとは思ってませんでしたよ」

「金堂先輩! 対戦ありがとうございました!」

高校通算打率6割弱の金堂を抑えた、それは浜矢と鈴井にとって大きな自信が付くものとなった。

浜矢が一日に投げていい上限の球数までフリー打撃を続ける。

その後は神宮と洲崎が交代で投げ、実戦形式で練習をする。

打撃型の京王義塾だ、打球速度の速さについて行けるよう青羽や山田が多く打席に入った。

「よし終わり! しっかり休んで明日に備えろよ!」

「あざしたー!」

練習が終わると寮生が中心となって片付けを始める。帰宅に時間がかかる部員を氣遣つての行動だ。

その一方でバッテリーは明日の試合について話し合っていた。

「伊吹ちゃん、調子は良さそうだね」

「洲寄には負けてられないからな、合わせてきた」

「そっか、なら明日は完封してね？」

「出来る限り頑張るよ」

苦笑いでそう答える浜矢。

今の自分が成長したとは自覚しているが、それでもあの京王を完封出来る自信があるかと聞かれれば答えはNOだ。

「エース奪うんでしょ？ だったらここでアピールしなよ」

「……そうだよな、京王だろうが何だろうが抑えてやる！」

「その意気だよ、私も抑えられるリード考えてくるから一緒に頑張ろう」

笑顔でハイタッチを交わすバッテリー。

二人の頭には「勝利」の二文字しか浮かんでいなかった。

第12球 気持ちを切り替えて

京王義塾と至誠、注目のカードという事で三回戦ながら客席はほぼ満員だ。強豪校同士の試合らしく、試合前の練習で緊張した選手がいる様子はない。互いに初歩的なミスもなく練習を終え、試合開始の時間が迫っていた。

「京王で警戒すべきは投手より打線！ 最悪打撃戦も覚悟してくださいね！」
「エラーしたらそこから流れを持っていかれる、集中して試合に臨もう！」
「おうっ!!」

千秋と金堂の声出しで注意点を最終確認。

この試合は先攻なので一番の菊池から攻撃が始まる。

(一番の仕事は粘ること！ 全球種引き出してやるから覚悟しとけよ！)

菊池は粘り続けスライダーとカーブを引き出した。

しかし最後に投げられたフォークには空振りし三振してしまう。

「ごめん、ツーシーム見せらんなかった」

「それは私に任せて下さい」

入学してから一度も変わらず二番に入った三好は、菊池が惜しくも引き出せなかったツーシームを投げさせた。

(2―2か……このバッテリーは確か、並行カウントからは釣り球を投げる傾向にある) 高めにストリートが投げられ、三好は少しも動くことなく見送った。

三好自身の判断通り、これはボールと宣告される。

(フルカンは絶対ゾーンに入れてくる、そこを叩く！)

千秋と灰原から打球傾向を聞いていた三好の判断は当たっていた。

ボールからストライクになる外角のカーブをしっかりと打ち返すが、三塁線を破ることはなくサードゴロに終わる。

「粘ってくれてありがとうね」

「いえ……頼みました」

「うん、必ず打ってくるよ」

三番に入る金堂が守備シフトを見る。

外野は前進気味で、レフトとサードの間は空いている。金堂が強く引つ張れないほど非力だと思っているのだろう。

初球の外に投げていくスライダーは見逃す。

二球目のカーブも見送ってカウントは1―1。

三球目は内角高めに外れるツーシーム、金堂はその球に対し体勢を崩しながらも振り抜いた。

芯で捉えられた打球はサードの頭上を超え、レフト前に落ちた。

「ナイバッチです！」

「打てて良かったよ」

ベンチは顔面に向かってくる球を巧みな技術で打ち返し、しかもヒットにしてしまう金堂に愕然としていた。

「今の打つのかよ……」

「流石に今の打てるのは人間じゃないでしょ」

「相変わらずの変態打ち……」

灰原に菊池、浜矢が口々に思ったことを言う。

他の部員も何も思わなかったのではなく、驚愕すぎて何も言えなかっただけだ。

(何はともあれ得点のチャンス……青羽先輩、ここは長打狙いでお願いします)
(この状況ならそうだよな、任せとけ)

高めのストレートを打ち損じてワンストライク、低めのスライダーは見送ってワンボール。

再度高めに投げられたカーブには反応せず追い込まれた。

最後の決め球も高めのストレート。

青羽はそれを初めから狙っていたかのように、迷いのないスイングでボールを捉える。

「左中間だ！ 大きい！」

「打球はやつ！」

打った瞬間それと分かる打球であつた。

初回から先制ツーランを放ち、最高のスタートダッシュを切ることが出来た。

「なーいばつち！」

「ん、伊吹もちやんと抑えろよ」

「当然ですよ！ 何だったらもう援護なくても勝てますよ？」

祥雲戦の敗退で精神が鍛えられ、現在絶好調の浜矢はもう強敵相手にも臆さない。

山田が打ち取られチェンジになると、誰よりも早くベンチから出た。

「米原さんの前には極力ランナー溜めないように、気合入れて投げてね」

「もちろん！ 誰が相手だろうと抑えてやるよ！」

ロジンを触つてから先頭打者と相對する。

左の俊足が持ち味の打者、言うならば打力が付いた荒波だ。

（この人は内角の球に強いけど速球には弱い、だからストレートで押すよ）
初球は外角高めにストレートで見逃し。

次はカーブで緩急を付ける筈だったが、外れてしまいワンボール。

三球目は内角高めのツーシームで仰け反らせる。

（高めのツーシームで仰け反らせた……なら次のこの球は対応できないはず！）

決め球として選んだのはアウトローのストレート。

前の球の効果もあり、低めの豪速球には反応が遅れ空振りの三振でワンアウト。

「ナイピー」

「ワンダンワンダン！」

（今日はストレートの調子良い感じ、もっと投げさせよう）

浜矢の調子が良い時は回転数が多くなる。

回転が多くなればノビのある球となり、打者から空振りを取りやすくなる。

そして今の浜矢は絶好調だ、打者からすればまるで浮き上がっているかのような錯覚を覚える。

浮き上がるようなストレートを駆使し三者三振に仕留め、初回の守備を終える。

浜矢はベンチに戻って水分補給をしながら、千秋と調子について話し合う。

「伊吹ちゃん今日調子良いね！」

「特にストレートが最高！ 誰からでも空振り取れそうな感じする」
「うんうん、頼りにしてるよ！」

先頭の鈴井がツーベースを打って出塁。

七番に入った浜矢が素振りをしてから打席に立つ。

（ノーアウト二塁からどんな攻め方してくるのか分からないだよな……けど、最低でも進塁打は打つ！）

浜矢は高めに浮いたフォークを弾き返すが、飛距離が出ずライトフライになる。

しかし鈴井の脚ならばタッチアップは余裕だった。

「ごめん荒波、頼むわ」

「任せて下さい！ 追加点入れちゃいますよ」

荒波が左打席に入り、バットの先で地面を擦ってから構える。オープンスタンスでバットをよく動かすのが特徴的だ。

（鈴井先輩の脚じゃ浅めのフライで還って来られない……最低でも外野の最奥までは飛ばしたい）

荒波は初球から積極的に振っていくが、スライダーに空振り。

続くカーブにタイミングを外されファールとなる。

一球ボールを挟んでからの勝負球は、内に食い込むスライダーだった。

甘く入ってきた思った荒波はバットを振るが、曲がり始めたとき気付いた時にはもう遅かった。

内に変化していく変化球をせめてカットしようとするが、窮屈なスイングとなりバットに掠ることすらなかった。

「友海ー、マジかよ」

「やっちゃったよ……早紀頼んだ」

「私に頼まれてもなあ、頑張るけど」

ランナー三塁という絶好のチャンスで三振という最悪の結果を残した荒波は、ベンチに戻ってから俯いていた。

「ほら荒波、声出せ！ 自分の打席だけが仕事じゃないぞ、切り替えて応援するのだから仕事だ」

「……はい！ 早紀打てー！」

灰原はそんな荒波を直接的では無いが励ました。

チャンスでの凡退なんて誰にでもある、そこで気持ちを切り替えられるのが一流の選手。

プロの舞台で活躍した灰原だからこそ、そう考えている。

(まあ三振多いところは直さないとな……流石にこのままじゃダメだ)

岡田も三球で三振し、このチャンスを活かす事はできなかつた。

「浜矢せんぱーい！ すみませんでした！」

「もう2点援護貰ってるから平気だって……それに私もヒットは打てなかつたし」

「うう……守備で貢献します！」

「頼りにしてるぞ、名センター！」

すっかり先輩役が板についた浜矢も、三振してしまつた後輩を慰める。

岡田の打撃力の無さは守備力で十分カバーできる、それは全員が理解していることだ。

(さてと……後輩にカツコつけた手前、ここはしっかりと抑えないとな)

右打席には四番の米原が入る。

強力打線を誇る京王の中で四番に相応しいとされた彼女は、温厚そうな見た目とは裏腹に周りを圧倒するオーラを放っていた。

(柳谷さんみたいな感じの人だな、けどそれ位の相手じゃなくちゃ面白くないよな！)

初球から調子の良いストロートで押していく。

高めのストロートに合わせたフルスイングで、三塁側への痛烈なファールとなつた。

(はや……あんなの捕れる気しないんだけど)

守備が苦手とはいえ、速い打球は見慣れている山田が一切反応出来なかった。

マウンド上の浜矢は一瞬焦った表情をしたが、すぐに凜とした顔で米原に向き合った。

(あの米原を打ち損じさせたんだ、私は自分の球に自信を持つていい)

去年までだったら確実にスタンドに放り込まれていた。それが今はファールで切り抜けた。

それはつまり、浜矢の成長を意味している。

続いてワンバンするフォークで空振りを誘うが、その誘いには乗らず見送られる。

外角低めのツーシームで引つ掛けさせようとするが、それもあわや長打コースのファールとされる。

(対応力が凄いな……どのコースに何投げても打たれそうな感じがする)

(けど、今の伊吹ちゃんならこの人も抑えられる筈！)

ボールからストライクになるカーブを投じる。

見せ球としか使つてこなかったカーブを、ここで勝負球として使う。

米原はそれを想定していなかったが、それでも力と技術で無理矢理外野まで持つていく。

「センター!」

(早速きた汚名返上のチャンス、掴み取ってやる!)

岡田が最短距離で打球まで走り、センターとショートの間に着ちようかという打球を飛び付く。

地面に手を付いて滑り込みながら、ボールがグラブに入った感覚を頼りにグラブをガツチリと閉じる。

「アウト!」

アウトの宣告がされた瞬間、球場が沸いた。

汚名返上、名誉挽回の超ファインプレー。

岡田早紀という選手を良くも悪くも象徴する一連のプレーだった。

「岡田サンキュー!」

「今のは捕らなきやダメですもん!」

ファインプレーの直後は流れを持っていきやすい。

浜矢もその例に漏れず更にギアを上げ、五番と六番を打ち取り2回もノーヒットピッチを継続。

「ナイピ、岡田もよく捕ったな」

「打撃じゃ貢献できないですしね、これくらいはやらないですよ!」

「岡田がセンターで良かったよ！」

浜矢が岡田の頭をワシヤワシヤと撫でる。

荒波は気持ちを切り替えるとはこういう事だ、と教えられた気分だ。

（早紀には負けてられないな……！ 私には打撃で活躍してやる！）

完全に流れを渡したくない相手の先発と、1点も許さないという気迫を感じる浜矢の好投により3回と4回はお互い無得点。

2対0と全く気の抜けない展開のまま、5回表の至誠の攻撃を迎える。

第13球 流れという名の波に乗れ!

2対0で迎えた5回表の攻撃は七番に入った浜矢の打順から。スパイクで足元をならしつつバットを投手に向け、臨戦態勢に入る。

(岡田はもう平気だ、問題は荒波……プレーで立ち直させるしかない)

気合を入れ直してはいるが、まだ立ち直つてはいない後輩の為に浜矢はお膳立てをしようと考えた。

初球のフォークには釣られずしっかり見送り、次の低めのストレート。

彼女はそれに対しインパクトの瞬間に肘を伸ばして弾き返し、ライト方向への強い打球を打つ。

脚は遅く走塁技術もままならない、しかし後輩を助けたい一心で浜矢は二塁に滑り込む。

「荒波——！ 頼むぞ！」

「浜矢先輩……」

二塁上で自身に向かって拳を突き出す浜矢の姿を見て、荒波は浜矢の行動の意図を理解した。

（先輩は私を立ち直させる為に、二塁まで行ってくれた……なら私が先輩をホームに還すんだ！）

荒波は高鳴る鼓動を感じながらも、冷静に頭の中で状況を整理する。

ノーアウト二塁で内野はやや前進してバントを警戒している。

（伊吹ちゃんが頑張ってくれたんだし、バントはさせないよ）

（バントはなし……打たせてくれてよかった）

低めのストレートを打たれたのが効いたのか、荒波に対しての初球は高めのスライダー。

荒波は左打者、そして相手投手は右投手。

ボールの出どころや軌道は右打者より見やすい、荒波はリリースの瞬間にスライダートと分かっていった。

（じっくり待って、下半身でタメを作って打ち返す！）

変化球を打つ際の基本に従った荒波は、カーブにも体勢を崩されず思い切り引っ張る。

打球はライトの頭上を越えワンバウンドでフェンスに到達した。

その打球を見た浜矢は二塁から全力疾走で三塁を蹴り、ホームに突入する。

ライトはバックホームを諦め、荒波の進塁を防ぐ為に中継に送球する。

「荒波ー、ナイバッチー！」

「先輩もナイスランです！」

これで3点目を追加し、有利な試合展開となった。

後続は抑えられてしまったが5回で3点リードは大きい。

5回裏の京王の攻撃は一番からの好打順。

調子の良いストレートを投げ、先頭はショートゴロに仕留める。

しかし二番に四球、三番にヒットを打たれワンアウト・二塁にされる。

「もしかして豆潰れたの？」

「いや平気、単純に打たれただけ」

「そっちの方が心配だけど……気合入れ直してね」

「ん、分かってる」

打席には得点圏に強い四番の米原が入る。

ミート力と対応力の高さ、そしてパワーもある強打者だ。この試合の分岐点を迎えた。

(ストレートから入ろうか)

(いや、なんか打たれそうな気がするからヤダ)

浜矢は首を振る。去年までは本当に自分が首を振れるのか疑問だった彼女は、今では嫌な時に首を振れるようになった。

（嫌なの？　ならフォークをストライクゾーンに、あの球ならそう簡単には打たれないだろうし）

モーシヨンに入るまでにたつぷりと時間をかけて、指先の感覚に集中する。

普段の倍は間を取ってから、クイックモーシヨン（激遅）でフォークを投げる。

真ん中高めから逃げるように沈み込むフォークには、流石の米原も当たるのが精一杯。

（普通に当てられるのおかしいでしょ、空振り取れると思ってたのに）

（当てるのすら厳しいか……二年でこれなら三年でどうなるんだろう）

米原は三年生なので、三年生になった浜矢の投球を見る事は叶わない。

だが確実に、全国を代表する投手になるというのは感じ取れた。

（敢えて低めのストレートを投げて惑そうか、外れてもいいから）

浜矢は先程のフォークの着弾点目掛けてストレートを放る。

ミットを構え捕球の体勢に入った鈴井の視界に、鋭く振り抜かれたバットが見えた。

（はっ？　嘘でしょ!?!）

そう思ったのも束の間、打球は弾丸のような素早さで二遊間を襲う。

センター前に抜ける打球となる、誰もがそう思っていた。

——ただ三人を除けば。

「よつと、耀！」

「はい！」

米原が打ち返した瞬間に動き出した菊池が、ジャンプしてグラブの先でボールを掴んでツーアウト。

そのまま三好にグラブトスをし、二塁ランナーは戻れずスリーアウト。プロ顔負けの好プレーにまたしても球場が沸いた。

「き、菊池先輩……！ 助かりました！」

「私は打たれた瞬間捕れるって分かってたけどな！」

ベンチにいる中の二人も、菊池はこの打球を捕れると確信していた。

「菊池先輩の守備範囲と動き出しの速さ……それが生かされた良いプレーですね」

「だな、アイツなら捕れると思ってたよ」

千秋と灰原は彼女の守備範囲を把握していた。

そしてこのようなピンチの場面になると、集中力が増し動き出しが速くなる事も。

「米原ドンマイ」

「……まさか今のを捕られるとは思わなかった」

京王ベンチには重い空気が漂っていた。

先程は岡田に、そして今は菊池の好プレーに防がれた。その流れの悪さがこの空気に繋がっている。

「……凡退した私が言うのも何だけど、まだ試合は終わってない！ 京王の底力を見せつけてやろう！」

「は、ハイッ!!」

キャプテンとして最後まで諦めず、ポジティブな発言をして周りを鼓舞し続ける。金堂とは違うタイプではあるが、彼女もまた優れたキャプテンだ。

6回の至誠の攻撃は無得点で終わり、6回裏の守備を迎える。

「伊吹ちゃん今64球だけど、7回までいけそう？」

「多分……100球超えなきゃ平気」

「あと2回で36球かあ、いけるかな」

浜矢の弱点は制球とスタミナ、特にスタミナの少なさだ。基本的に7回を投げ切れる事はなく、大抵は5回か6回で降板する。

「まあ今日はいけるよ！ それに後ろに任せるの怖いし……」

「何ですか! 私だって抑えられますよー!」

「いやあ……だって四死球がさ」

神宮はスタミナはあるが浜矢以上に制球が悪い。

そんな投手を京王相手に投げさせれば、何が起こるか分からない。

一回負けたら終わりのトーナメント戦、あまりギャンブルはしたくない。

「まあ私が完投するよ、イケる気はするし」

「そう? なら任せたまよ」

「安心してベンチで見ててくれ」

浜矢はそう言つて肩を回しながらマウンドへ歩く。

その背中を見た監督は、何か引つかかるものを感じていた。

「五番からだだから気を張つてね」

「まあ3点リードだし楽に投げられるけど」

「適度な緊張感は大事だからね」

浜矢は堂々としながらマウンドに立つ。

そんな浜矢に対して、殺気に近いオーラを放ちながら五番打者の柏木がバットを構える。

(怖つ……野球してる人のオーラじゃないよこれ)

(米原は私たちをここまで引つ張つてきてくれた、恩を返すなら今しかないんだ)
浜矢は背中中に若干の寒気を感じながらも向き合う。

柏木に対しての第一球は外のスライダー、大きく曲がる変化球には手を出さずに見逃してストライク。

続いては内角のツーシームをファールにさせツーストライクと追い込んだ。

三球勝負はせず一球外にカーブを外してからの四球目、勝負球の内角高めのストレートだった。

金属バットの甲高い打球音が響いたのち、青空に白い軌道が描かれていき新緑のスタンドにポトリと落ちた。

(良い配球だったがスタンダードすぎる……ヤマを張つておけば打てない事はない)

カーブからのストレートは球速差があり、簡単に対応出来ない。

しかし彼女のようにヤマを張つた相手にこの配球は弱い。

それに加え浜矢のストレートはノビがある分、芯で捉えられた時の飛距離が出やすい。

ヤマを張られて打たれた。そうなれば誰が悪いのか、捕手だ。少なくとも鈴木はそう考えているので、マウンドに駆け寄る。

「伊吹ちゃんごめん、今のは配球が悪かった」

「まあソロだから平気だろ、まだあと2点あるし」

柏木がダイヤモンドを一周している間に、浜矢は気持ちを切り替えていた。

遠回しに後続を打ち取れると言っている。しかも、さも当たり前かのように。

(伊吹ちゃんはメンタルが強くなった、間違いない去年から一番成長している)

初めてのライバルにサヨナラ負け、そして先輩になったという事が浜矢の心を強くした。

「そうだね、最少失点で済ませよう」

「ああ!」

鈴井がこの後配球の感じを変えたのが効いたのか、二者連続三振とサードライナーでスリーアウトを取る。

京王もこれ以上は点はやらず、7回表を無失点で抑えた。

「伊吹ちゃん、完投してきてね!」

「あいあいさー!」

「何その返事……」

浜矢のいい加減な返事に呆れた顔をする鈴井。

鈴井は元は船乗りの返事とは知っていたが、浜矢は絶対にそういう意味では使っていないと確信していた。

(まあ伊吹ちゃんはこれ位脱力してた方が良い球投げられるから、別にいいんだけど……)

時々大人びた一面を見せる事はあるが、基本的には楽観的な浜矢。

普段通りの彼女が出ているという事はリラックス出来ている証拠。

投手というのは繊細なポジション、緊張しすぎで良い事はない。

「伊吹ー、セカンド打たせていいよー」

「サードも任せろ！」

「センターもつと打たせてくださいーい！」

(……セカンドとサードとセンターに打たせればいいのかな？ 難易度高いな……)

浜矢は言葉通りに受け取った結果、少々ズレた事を考えていた。

ただまあ、彼女に狙った場所に打たせる技術はない。

「何ぼーつとしてるの？」

「あつ、いやなんでも……」

「ちゃんとしてよね、三振で仕留めてよ？」

「……うん！」

尊敬する先輩たちの言葉であっても、可愛い後輩の言葉であっても、鈴井の言葉には敵わない。

浜矢は他の何よりも鈴井の言葉を優先する傾向にある。

(打順は九番からだけど代打攻勢でくる、油断は禁物か)

打撃全振りの選手が京王ベンチには多くいる、その選手を京王はここで出してくる。

代打が告げられると歓声が上がリ、試合の展開を決める代打を盛り立てる。

代打というものは独特の緊張感があり、十分な準備が無ければ体が硬くなってしまうもの。

鈴井程の観察眼を持つ選手がその様子を見逃す事はなく、その隙を突こうと考える。

(初球から仰け反らせてやろうよ)

(緊張してる相手仰け反らせるとか性格わつる……まあ捕手としては良いけど)

浜矢は鈴井のリード通り、内角のストリートで仰け反らせる。

ガチガチになっていた体が今の一球で更に縮こまり、素人目に見ても打てない雰囲気が出てるのが分かった。

鈴井と浜矢は容赦無く攻めていき、まず先頭を三振に切り取ると次の打者もセカンドゴロに打ち取る。

そして最後の打者にも代打が告げられた。

(……)で決めないと米原さんに回る、そうしたら最悪同点にされるかも知れない)

(分かってる、絶対ここ抑えるぞ)

初球は内角低めのツーシームで引つ掛けさせようとし、結果は見逃し。

二球目と三球目は制球が乱れてしまいツーボール。

一番コントロールの効くストレートでカウントを整え、並行カウントとする。

(さあ、ここで決めるよ！)

(サインは……当然それだよな！)

浜矢が勝利への想いを込めて最後の一球を投げる。

打者は真ん中低めに投げられたその球を弾き返そうとバットを出したが、そのボールはスライド気味に落ちていきかわ躲される。

ワンバウンドしたスライドフォークを体で抑え、鈴木は打者にタッチし最後のアウトを取る。

3対1という接戦の勝利は至誠がもぎ取った。

第14球 勝つ為に

試合後に至誠ナインと京王ナインは握手を交わす。

片や笑顔を浮かべながらも気を遣った様子で、片や涙を浮かべながらも笑顔で送り出そうとして。

そんな正反対な感情と表情を浮かべる彼女達は、グラウンドを後にした。

試合の疲れを癒すために、待ち時間でマツサーズをしている至誠ナイン。

その輪から離れ、京王ナインの元へ向かう青羽。

「……お疲れっす」

「お疲れ青羽さん、勝ってきてね」

「はい……あの、米原……さんは四番として大事にしていることってありますか？」

言いくそそうに、だが答えを求めて青羽が尋ねる。

四番として打席での意識を変えたが、それが正しかったのか。青羽は内心悩んでいた。

「私と青羽さんはそもそもそのタイプが違うから、あまり参考にはならないと思うけど……私は繋ぐことを意識してるかな」

「繋ぐ？ 四番なのにか？」

「ウチが強打のチームっていうのもあるけど、私は自分で決める事に執着すると打てなくなるタイプなんだ」

青羽はその言葉に心当たりがあった。

昨年までの青羽は、とにかく長打を狙い難しい球に手を出して三振やゴロなどが多かった。

「それに自分が打てない相手っていうのも出てくる、そしたら長打どころじゃないからね」

「……だから後ろを信じて繋ぐのに徹する」

「そういうこと、参考になったかな？」

青羽の後ろには得点圏に強い山田、長打力はないが高打率を誇る鈴井が控えている。彼女たちの打力は十分信頼に値するだろう。

「凄く参考になった、ありがとうな」

「そう言ってくれて良かったよ、じゃあ……頑張つてね」

「ああ、必ず優勝してみせる」

青羽は米原と別れ自分達のチームの元へ戻る。

同い年の四番の意識を聞く、それは彼女にとって大事な事だったのだろう。

歩みを進める青羽は晴れやかな顔をしていた。

学校に戻った至誠ナインは小林の作った軽食を食べながら試合を観戦し、次戦の相手を確認していた。

「次の相手は藤銀学園！ 去年も戦ったけど、今年の藤銀は一味違うよ！」

「エース竹谷の存在だな、球が速くて変化球で緩急を付けてくる本格派投手」

千秋が出したデータには竹谷の持ち球や配球分布、コースや球種別の被打率が載っていた。

「サークルチェンジ、スラップ、スプリット……速球を生かす球種が多いです」

「特に厄介なのはサークルチェンジ、これと直球の組み合わせで数多の三振を奪ってきている」

京王義塾や蒼海大相模といった強豪校から、右腕がサークルチェンジで次々と三振を取っていく映像が映し出される。

速球との球速の落差、単純な変化量の多さが幾多の強打者を苦しめた。

「対策しようにも、サークルチェンジ投げられる奴いないんだよな……」

「私投げられますよ」

灰原の口からぼつりと溢れた言葉に、洲崎が手を挙げて発言する。

視線を集めているのを気に留めず言葉が続ける。

「実戦で使える球ではないですけど、一応変化はしますし練習程度には」

「知らなかった……なら洲崎に投げて貰おうか」

他の注目選手の解説もしてから、グラウンドに移動し洲崎を相手にサークルチェンジ対策をする。

伊藤が捕手を務め鈴井が打席に入る。

「正直鈴井ならなんでも打てそうな気がするけど」

「それでも対策は必要でしょ、それに私のフォームだと速球には対応しにくいし」

鈴井はフォームは振り子打法と呼ばれる物。

通常打席では頭を固定するのに対し、振り子打法は自分が動きその反動で強い打球を打つフォームだ。

非力な選手であつても強い打球が打てること、変化球を待ち速球はカットなどの対応をするという基本とは真逆の性質を持つ。

弱点は内角攻めに弱い、速球に振り遅れるなどがあるが、鈴井は持ち前の巧打力で内角の球をもつともしない。

「いつでも投げていいよ」

「はい、彗も準備いい？」

「勿論」

鈴井は普段はあまり打撃練習に参加しない。

配球や守備練習を重点的にやり、打撃はマシンのみという日もある。

そんな鈴井の珍しい姿に、他の部員も自分の練習の手を止め眺める。

洲寄がゆつたりと振りかぶってサークルチェンジを投げる。

減速しながら斜めに沈み込む変化球、鈴井はそれを難なく真芯で捉えた。

「相変わらず凄いミート力してんな……」

「美希ちゃんって金堂先輩の後継者みたいなどころあるよね」

「打率が高くて長打は少ない……確かに」

マシンではなく人なので、投げられる数は有限だ。

何球か投げたらすぐ他の人に交代、それを十二人分続けた。

「じゃあ軽く練習するぞ、何かやりたい事ある奴はいるか？」

「はい、室内でもいいので」

「何か必要な物とかは？」

「カラーコーンさえあれば平気です」

カラーコーンで一体何をするのか、ほぼ全員が疑問に思ったのかその練習を見せて貰

うことになった。

鈴井は等間隔に的を付けたカラーコーンを八つ並べ、マウンドにピッチングマシンも置いた。

「……打撃練習？」

「まあ見てて」

鈴井はマシンが投げた球を次々と打ち返していく。

ただ打ち返すだけではなく、打球を左の的から順に当てていく。

(……なるほど、鈴井のミート力はこの練習で身に付いたのか)

(普通の練習はしてないだろうなとは思ってたけど、まさかこんな事してるとはね)

灰原と千秋がジッと鈴井を見つめる。

自分たちに隠れてこのような努力を続けていた事、それがあの打撃に繋がっていたのだとようやく知れたのだ。

「神奈先輩も出来そうですね！」

「流石にあれは厳しいかも」

神宮の問いに苦笑いで答える金堂。

彼女も類稀な巧打力は持っているが、偶にしか狙い打ちはしない。

狙ったコースに打ち返せるバットコントロールを持つのが鈴井、ボール球をヒットに

出来るバットコントロールを持つのが金堂。

巧打者と一括りにされているが、性質は違う。

「……これが続いたら今の私の打撃が生まれた、大事な練習だよ」

「出来る気しねーわ……やっぱ鈴井って凄いな」

浜矢は来た球を打ち返しているだけで、狙った所に打てる技術は無い。

ヤマを張り狙った場所に打つ鈴井とは正反対だ。

「すみません、グラウンド使いますよね？」

「続けてもいいんだぞ？」

「他にもやりたい練習はあるので……」

そう言つて鈴井はカラーコーンを片付ける。

片付け終わった後は各々の練習を始めた。

「ほら、灯頑張つて！」

「無理っ……！ きつつ！ おらあー！！」

「ナイスガッツ！ 次、悠河」

一人が左右にボールを軽く投げ、もう一人はそれを素手で捕るペッパー。

二遊間を守る三人がこの練習を行なっていた。

「神奈先輩まじヤバい……終盤めっちゃ距離増やしてくるんだけど……」

「けどその方が練習にはなるでしょ」

「そうだけどさー！ キツイもんはキツイ！」

スパルタな金堂のトスに石川が嘆く。

まだそれを体験していない三好は、どこか余裕そう。

「悠河先輩お疲れっす！」

「おつかれー……神奈つてさ、こういうところあるよな……」

「おお……先輩までこんなくたびれて……」

自分の番が終わった途端地面に倒れ込む菊池。

石川は自分もそうなったから気持ちがあつてはいたが、三好は少し不安を覚え始めていた。

(……灯はともかく先輩までこれって、相当ヤバいんやなかと)

嫌な予感的中し、普段クールな三好からも悲鳴に近い叫び声が聞こえた。

その様子を見て腹を抱えて笑う石川と、温かい目で見守る菊池の姿があつた。

「どーよ？ 神奈先輩のペッパヤバかつたろー？」

「……………監督より鬼」

「流石に監督ほどじゃないよ」

優しく微笑みながら言う彼女は、事情を知らなければ優しい先輩に見えるだろう。

「それと灯……後で覚えときんしゃい」

「ヒイツ、博多弁出るほどマジじゃん……」

三好はいつもは恥ずかしいからと博多弁を隠している。

それが出てくるという事は、余裕なんてないという事。

つまり今の発言はかなり本気であることが窺える。

一方その頃室内練習場では外野陣が打撃練習を、投手陣が投げ込みをしていた。

その片隅で一人黙々とバントをし続ける岡田。

「早紀ってバント上手いよねー」

「えっ？ 上手くないよ？」

「いやいや、今ライン上に転がしたじゃん」

芝生の上に引かれたラインの上に、綺麗に転がしていた。

これだけ見ればバントが上手い選手と思われるだろう。

「私セーフティーしか出来ないよ」

「なんでそんな極端なんだよお……」

衝撃的な事実に頭を抱える荒波。

送りバントが出来ればまだ活躍の場も増えただろうに、そう考えていた。

「いや、けど早紀の脚を考えるとセーフティーが上手いのは良いのか」

「そうそう、セーフティーで出塁して盗塁！ それなら私でも出来るから」

セーフティーバントと盗塁はそんなに簡単に出来る物ではないが、岡田の成功率はどちらもあるの所100%だ。

「早紀って盗塁上手いよね、コツとかあるの？」

「えー？ 何となくで走ってるだけだよ？」

「それである成功率はおかしいでしょ」

ギリギリならまだしも、岡田は余裕で成功する。

何かコツがなければおかしいと荒波は思った。

「一塁でピッチャーの背中見るじゃん？」

「うんうん、んで？」

「それで牽制してこなさそうな時に走るの」

「んん？ どういう意味？」

どういう意味と言われても、そのままの意味と返す岡田。

流石にそれでは納得できず、荒波は詳しい解説を求める。

「分かんない？ 投げてこなさそうな雰囲気の時あるじゃん」

「分かるような分からないような……」

「逆に友海はいつ走ってんの？」

「普通にモーション入ってからだけど……」

投手のクイックの上手さや牽制の頻度などは考慮せず自分の勘と脚力を信じて走る岡田と、実は色々考えつつスタートを切っている荒波。

このまま二人はお互いの盗塁に対する意識やスタートの切り方、リードの大きさを語り合った。

打撃練習を忘れていたのを思い出したのは、練習が終わる10分前の事であった。

「じゃあ解散！ 明日に向けて今日はゆっくり休めよ」

「ありがとうございましたっ！」

「あざしたー！！」

各々の練習を終わらせ、藤蔭戦へ向け帰路へつく。県予選四回戦、勝った方がベスト16の座を掴む。

第15球 ガラスのハート

神奈川県予選四回戦、藤銀学園対至誠高校。

彗星の如く現れた藤銀のエース竹谷と、中学から一部の者の間では有名だった洲崎。

この両投手の投げ合いを見る為に多くの観客が集まっている。

「竹谷から大量得点は難しいだろうし、頼んだぞ」

「はい、完封する気で投げてきます」

灰原に背中を押され洲崎がマウンドに立つ。

まだ誰にも荒らされていない、投手の仕事場。

そこに立つた時の快感は、何物にも代え難い。

「藤銀学園はどんなチームなんですか？」

「高い守備力を誇るチームですが、打撃もそこそこ良いですね」

「守備寄りのバランス型のチームですか」

「まあそんな感じですね」

灰原と小林がベンチで藤銀について話し合う。

毎年守備は県内有数だが、打撃は年によって違う。

今年の藤銀は昨年に比べれば全体的に打撃力が落ちた。

「今日の調子はどうか？」

「結構良いと思う、コントロールも良いし」

「分かった、なら内角も要求するから」

今日のスタメンマスクは鈴木ではなく伊藤。

スタメンが発表された時、鈴井のファンである伊藤と三好は猛反発したが理由を聞いたら納得した。

「鈴木も休むのは珍しいよな」

「捕手は疲れるんだよ、それに替も育てたいしね」

「監督みたいなこと言ってるな……」

鈴井の疲労回復と伊藤に経験を積ませる為、このような起用となった。

また伊藤に先発してもらおう事により、配球を読まれにくくするという狙いもあった。

同い年バッテリーの方がお互い遠慮が無く、洲崎も投げやすいし伊藤もリードしやすいのではないかという思いもあったが。

（今考えると二人とも、野球では遠慮しなさそうだな……まあ鈴木を休ませられるからいいか）

洲寄も伊藤も礼儀は大事にするが、野球になると言いたい事は全部言う性格だ。それは裏表が無いとも言われるし逆に性格が悪いとも言われる。

二人はお互いの思考を理解し合っている為、後者のように思うことはない。

(さてと、早速内角投げて貰うからね)

しなやかに振り下ろされた左腕から、糸を引くような直球が放たれる。

スピンのなかった球はただ真つ直ぐとミットだけを目掛けて走る。

打者は打てると確信しバットを出す、ボールの下を振り空振り。

(これが洲寄のストリート。浜矢とはまた違った球質……)

激しく空気を裂きながら進む浜矢の直球と、空気に乗っているかのような綺麗な回転をする洲寄の直球。タイプは違うがどちらも一級品の直球だ。

その直球とキレのいい変化球をバランス良く投げ、初回は被安打ゼロの無失点に抑える。

「二人とも……特に三好、球数投げさせるのは任せたぞ」

「ラジャーッ！」

「任せて下さい」

菊池と三好の一・二番コンビが粘り打ちを任された。まずは菊池が打席に立ち、竹谷の球筋を見極める役割をこなそうとする。

ストレートとスラープを投げられツーストライク。

その後も三球連続でスラープを投げられるがファールで粘り、最後の一球だった。
(打てる……っ!?)

低めに投げられた速球を打ち返そうとバットを出す、ボールは急激に落ちてミットに収まる。

「スラープばつか投げてきて、最後はスプリット……アレはやバいから気をつけてな」「はい」

スプリットに三振させられた菊池のアドバースを聞き、三好が左打席に入る。

元々彼女は左利きであり、左の方が球を見極められるからという理由だ。

(ストレートは速いけど伸びはなさそう、スラープも変化はそんなでもないけん……)
菊池が三振したボール球のスプリットも見極めバットを止める。

落ちる球にも平然とバットを止められる彼女の選球眼は確かにチーム随一だが、弱点はある。

(これは……サークルチェンジか!)

大きく変化するサークルチェンジにタイミングを外されセカンドゴロ。

三好の弱点とは、純粋な打撃能力自体は無い点。

基本は粘って四球で出塁、もしくは犠打や最低限の進塁打という選手だ。

「どうだった？」

「変化が思ったより大きいです、それとブレーキも効いててタイミングを合わせるのは難しそうです」

「まあ三好がカット出来ないレベルだもんな」

予想していたよりも手こずりそうな竹谷のピッチングに、灰原は頭を悩ませる。

（サークルチェンジを捨てて速球狙いにするか？ いや、それだとスプリットを振らせるか……？）

それぞれの得意球や苦手球、打撃能力に選球眼を考慮して作戦をいくつか組み立てていく。

「まず一巡目は好きに打ってくれ、サインを出すのは二巡目からだ」

「私も賛成です」

灰原の発言に千秋が賛同し、まず一巡目は何もサインは出さない事になった。

（まずどれだけ対応出来るかを全員分見極める必要がある。一度負けたら終わりの戦い……大胆に攻めるのは、攻略の糸口を見つけてからだ）

灰原の言う通り一巡目は好きに振った至誠。

その結果は金堂以外はヒットを打てず、ましてや三振だらけという惨状に。

「言い出したのは私だけど、もう少し食らいつけるとは思ってたな……」
「ですけど、もう十分ですよね？」

「ああ、データは集まった……ここから反撃だ！」

灰原の声に声を出すサイン、その円陣に加わりながらも浜矢は。

(反撃って言ってもこれから守備なんだけど……)

正しいがここで口にするのは正しくない、そんな事を思っていた。

洲寄が4回表のマウンドに上がり投球を始める。

パームを低めに投げ空振りを狙うが、ヤマを張っていたのか迷いなく振り抜かれる。

「セカン！」

「オツケー！」

強烈な打球が一・二塁間を襲った。

菊池はその打球に全速力で走り、追いつく。

まるで足にバネが付いているかのような、軽やかな動きでジャンプし一塁へ送球する
が。

「やばっ……」

「捰！ 二塁！」

「はいっ！」

送球は金堂の身長を遥かに超える高さに投げられた。

伊藤が急いでカバーをしようと、彼女の肩の強さを警戒したのか二塁には進まれなかった。

「ごめん！」

「いえ、平気ですよ」

（今のは菊池先輩だから追い付けた打球……エラーしても仕方ない）

洲寄は菊池を責めようという意思は無い。

今の打球は並の野手なら追い付けない、それに追い付けただけで素晴らしく守備が上手いことが分かる。

しかし世間は残酷で、今の一連のプレーだけを見て菊池は守備範囲は広いが送球は上手くないと評価してしまう人も多い。

並大抵の選手が追い付けない打球に追いつけてしまうが故に、エラーも増えてしまっているだけ。

「まだ一人出ただけだぞ！ 集中！」

「はいー！」

「はっ、はいー！」

ベンチからの激励の声にハッとすする菊池。

確かにノーアウトでのエラーは良くはない、しかしたった一人ランナーが出ただけだ。

(ここは洲寄に頼るしかない。内野はゲッツーシフト敷きつつバント警戒)

(了解)

内野はゲッツーシフトを敷きながらも、バントをされたらチャージを掛けられるよう意識を持つ。

次の打者には六球を粘られ、甘く入ったスラップをセンター前に弾き返される。

(流れが良くない……けど洲寄なら、ん?)

灰原が洲寄の異変に気付いた。

普段はマウンド上ではポーカーフェイスを崩さない洲寄が、動揺した表情をし額に汗を浮かべている。

「タイム!」

(伊藤、行つてやれ)

(分かりました)

タイムを取りバッテリー間で会話を交わさせる。

「真理、平気? まだ点取られた訳じゃないし気負わないでいいよ」

「……うん、大丈夫」

「とにかく腕振って投げて、そしたら絶対打たれないから」

伊藤は洲寄の頭を軽く撫で、キャッチャースポックスで構える。

軽く違和感を感じてはいたが、あの洲寄なら平気だと思っていた。

——しかし、そんな考えは一瞬にして砕かれた。

ど真ん中に入ったストレート、それを右中間に運ばれる。

しかも向こうはヒットエンドランを選択しており、二塁ランナーだけではなく一塁ランナーも三塁を蹴る。

「っ、バックホーム！」

「おう！」

荒波が投げた送球は低くて鋭い、弾丸のような球。

風を切り裂きながらホームに一直線に届いたその白球を受け取り、伊藤がホームに突っ込むランナーにタッチする。

「……セーフ！」

「よっし！」

しかし掻い潜られてホームベースを陥れられてしまう。中盤の流れの悪い状況で2点先制タイムリー。

「……なあ神宮」

「な、なんですか？」

「洲寄ってメンタル弱いのか？」

「え？ 別に普通だと思えますよ、むしろ強かった気がします」

だが今の投球を見たらそんな事は言えない。

神宮もそれは分かかっていて、発言してからは口を固く閉ざしている。

「もう一つ質問しよう、洲寄は今まで打たれた事ってあったか？」

「打たれた事？ うーん……小学校の頃は殆ど打たれませんでしたね」

「じゃあもう一つ、小学生の時に洲寄に敵う打者はいたか？」

「居るわけじゃないですよ、だって防御率0点台でしたもん」

今の三つの質問で灰原は全てを理解した。

「洲寄は今まで打たれた経験が無く、同レベルの打者と対戦した事もない……そこから導き出される答えは」

「打たれる事に慣れていないから、いざピンチに直面すると動揺する」

「その可能性が高いな」

千秋と灰原が同じ意見を出す。

今まではピンチを作っても相手に格下しか居なかったから楽に投げられた、そしてそ

もそもピンチを作ることが滅多に無かった。

「そういうタイプの本メンタル弱いかよ……」

「流石にこれは想定外でしたね」

頭を抱える灰原と、苦笑いを浮かべる千秋。

それはそうとしてこの状況を何とかしないとイケない。

「浜矢、伝令行つてきてくれ」

「はい、何話します？」

「何でもいいから好きな事話してこい」

(無茶振りにも程がある……言われたから行くけど)

(ここで一番洲崎に効くことを言えるのは多分浜矢、任せたぞ)

浜矢がマウンドに向かって洲崎と向き合う。

伝令に使える時間はたった30秒、浜矢はそれをフル活用しようと考えた。

「2点くらいウチの打線ならすぐ取り返してくれるから安心しろつて！ それにそんなウジウジしてると私がマウンド上がるぞ？」

「いや、まだ肩できてないじゃん」

「へへっ！ ですよね、だから任せたぞ……エース」

浜矢が最後に真剣な表情でそう告げた。

ジョークで雰囲気のをませ最後は決める、浜矢伊吹の人間性が全面に出ていた伝令だ。

(……私すぐ肩作れるから、普通に投げられたんだけど。まあここは洲寄に譲るか)

ジョークのように聞こえた言葉は、実は本気であった。

(浜矢先輩は確か10球前後で肩を作れる、投げようと思えば投げられた。それなのに私にマウンドを譲ってくれた……)

同じ投手として共に練習をし、何度も技術について語り合った2人。

肩を作るのに何球を要するかも当然知っていた。

(……その恩は、ここに抑えることで返す)

浜矢の言葉で心に火が付いたガラスのエアースは、まるで別人のような投球を見せた。

否、寧ろこれが本来の投球である。

洲寄は後続をしつかり絶って大量失点は防いだ。

第16球 早手の如く翔け、明かりが灯る

試合が動く事はなく、5回裏の至誠の攻撃。

灰原が全員を集めて作戦会議を始める。

「金堂はもう対応出来てるから良いとして、青羽と山田は基本ストレート狙いで低めは捨てろ！」

「もつちろんですよ！」

「やってみます」

長距離砲の二人はとにかく速球狙い。

低めの球は全て捨てて一発長打を狙うスタイルで。

この二人はコースや狙い球を絞れば簡単に長打を打てる。狙い球がストレートであれば尚更。

「三好と伊藤はヒットはいいから球数投げさせてくれ」

「いつも通りですね」

「一応二人はサークルチェンジ狙いで」

「分かりました」

三好と伊藤の選球眼コンビは出塁ではなく球数稼ぎに。力強い直球を狙う長距離砲コンビとは違い、こちらは緩めのサークルチェンジ狙い。

カット打ちは野球規則で色々と言われるのだが、真つ向勝負で打てないのだから仕方ない。

特に三好。彼女はパワーが無さすぎてヒットに出来る球が少なすぎた結果、カットの技術を磨いたという経歴がある。

「菊池と荒波は三振多いから初球からガンガン振って驚かせてやれ！ それに二人の脚なら何か起こるかも知れないし」

「ラジャツ！」

「りよーかいですー！」

菊池、荒波の俊足三振多めコンビは初球から振っていく。仮に内野ゴロになったとしても、二人の俊足ならば内野安打も期待できる。

「監督、私はどうすればいいんですか？」

「今日は岡田がキーになる、作戦はな……」

小声で岡田の作戦が語られる。

その作戦を聞いた岡田は満面の笑みで頷いた。

「この回最低でも同点にするぞー！」

「オーーーーーッ!!」

この回の先頭打者は七番の荒波から。

作戦通り初球から振っていくつもりで荒波の心に、迷いという文字はなかった。

(竹谷はストレートから入る事が多い……なら荒波の打力でも)

外角高めめのストレート、荒波はそれを迷いなく振り抜いた。力強い打球は左中間を抜きツーベースヒットとなる。

「ナイバツチャー!」

「イェーイ!」

このチャンスで打席に立つのは、八番に入る岡田。

洲寄と同レベルの打力か、それ以下ではあるが岡田には最高の武器がある。

(追い込まれるまではフルスイング……)

初球のサークルチェンジをフルスイングでファールにする。

岡田は元々バットを短く持っており、長打を売りにする選手では無いのは見ただけで分かる。

そんな選手が今はバットを長く持ちフルスイング。

それは守りにつく側からしてみれば、とても異質に映るだろう。

「ストライーク!」

(ストレートにタイミング合っていないな、ならもう一球ストレートで)

持っているのは金属バットだ、岡田のパワーでもフルスイングすれば強い打球は飛ぶ。

二球続けてのフルスイングで内野は前進守備を辞めていた。

三球目のストレートがボールが投げられる直前、荒波はスタートを切って走り出した。

まさか三盗か、そう考えサードは三塁ベースに近付く。その僅かな動きを岡田は見逃さなかった。

「セーフティー!? ボールひとつ!」

「おっ、おう!」

三塁線上に転がされたボールを捕った頃には、岡田はもう一塁に到達していた。

ツーストライクからのセーフティーバント。岡田を知らない相手からすれば、これは一か八かのギャンブルとしか思えなかっただろう。

「よしっ、作戦成功!」

「早紀ちゃんならやってくれると思ったよ〜!」

「岡田さんは流石の脚ですね」

しかし至誠ベンチでは灰原、千秋、小林が口々に岡田を褒め称えていた。これはギャ

ンブルなどではなく、れっきとした戦術だ。

「ツーストライクからあんな完璧なセーフティー決められるのなんて、岡田くらいしかないよな」

「これで送りバントも上手かったら文句無しなんですけどねえ……」

セーフティーの上手さは誰もが認めるが、それ故に滅多にやらない。

警戒され内野に前進されれば当然失敗するし、フルスイング戦法はもうバレてしまった。

「これで一・三塁……さあいくぞー！ 石川ー！」

「任せて下さいー！ よーし、打つぞー！」

ここで洲寄に代打・石川が告げられる。

三振が多く打力もそこまで無いが、得点圏の強さはピカイチ。

この場面での代打にはもってこいの選手だ。

「鈴井じゃダメだったんですか？」

「そこは育成も兼ねてだな、それにパンチ力は石川の方があつるし」

石川と鈴井なら前者の方がパワーはある。

普段のミート力を考えると代打に出すのは鈴井だが、今は得点圏だ。

得点圏での石川は別人のような打撃をする。

(さあ岡田、まだ仕事は終わってないぞ)

(りょーかい！ 極限まで引つ掻き回してやりますよ！)

セーフティーで不意をつかれ、今は代打で出てきた石川に注意を引かれている。

そんなフリーパスの状態で岡田がジツとする訳がない。

「走った！」

「くそっ……！」

三塁に俊足のランナーがいる状況で二塁には投げられず、岡田は悠々セーフ。

ノーアウト二・三塁の大チャンスを作り出した。

「分かってたけど、やっぱ岡田すごいな……！」

「元陸上選手だから当たり前だけど、直線が速すぎる」

岡田は元は短距離走の選手、直線を走るスペシャリストと言っても過言ではない。そんな彼女が直線勝負で負けるはずがない。事実、盗塁成功率は10割をキープしている。

なお、出塁する回数が少ないので走力と盗塁技術の割には企図数が少ない。

(友海がきつかけを作ってくれて、早紀が拵けてくれて……なら私がそれを活かす！)

外のボールからストライクにスラップに石川はタイミングを合わせる。インパクトの瞬間に最大の力を込めて、全身を使いフルスイング。空を駆ける打球は右中間を真っ

二つに割った。

「回れ回れ！ 早紀も突っ込め！」

「まかせろー！」

岡田がホームに全速力で走り余裕の生還。

これで2点を奪い同点に持ち込んだ。

「二人ともありがとう」

「いいって！ 私らもそろそろ活躍したかったんだよ！」

「そうそう、久々のヒットで嬉しかったし〜！」

洲寄と岡田、荒波がハイタッチを交わし合う。

これで洲寄の負けは消え、後はチームが勝つだけ。

しかし竹谷も今のヒットで立ち直り、反撃はここで終わる。

「神宮行ってこい！」

「はーい！ ちゃんと抑えてきますよー！」

6回からは神宮がマウンドに上がる。

変化量の多いスライダー、切れ味鋭いシュート、緩いカーブを使い分けノーヒット

ピッチ。

「へーい、ナイピー！」

「あざっすー！」

「さあ最終回だ、ここで勝ち越すぞー！」

息の詰まる接戦を終わらせる最後の攻撃が始まる。

右打席で威圧感を放つのは我らが四番、青羽翼。

(ここは1点とは言わず、2点3点欲しい……長打狙いだ)

灰原に言われた通り、低めの球は全て捨てる青羽。

それが功を奏し二球続けてボールとなる。

「これで見極められていると思ってくればいいんだけど」

「多分思いますよ、今年の先輩は去年と全然違いますから」

「好球必打が出来るようになったから、今も見極めていと感じそうですね」

私が捕手だったらそう思ってます、そう小林が言うとき千秋と灰原は驚きで目を見開いた。

「……好球必打って言葉を、覚えられたんですね？」

「ええ、一応これでも勉強してますから」

「何というか、すごく嬉しいです……！」

野球のルールすらも分からなかった小林が、クリーンなイメージだからという理由だ

けで顧問に選ばれた小林が。

専門用語を含んで二人の会話に混じってきた。それは二人にとって喜ばしい出来事だった。

(なんかベンチはしゃいでるな……いや、集中だ。せつかくカウント有利なんだ、次打つぞ)

ツーボールからの投手心理としては、多少甘くなつてもいいからストライクが欲しい。

そんな打ちごろの球を青羽は待っていた。

カキーンと小気味の良い音が響き、白球は青空に綺麗な放物線を描いた。

第3号は値千金、勝ち越しのソロホームラン。

「やつぱり今年の青羽はここぞという場面で決めてくれるな!」

「柳谷さんにも負けず劣らずの四番ですな!」

ベンチは大興奮で大仕事を終えた四番を迎える。

中にはそこそこの力で叩く人もいたが、青羽はそれを嬉しそうに受け止めた。

興奮冷めやらぬ中、また一つの金属音が鳴り響く。

先程の高くて痛快な物とは違い、パキャツという低くてどこか詰まったような感じさ

えさせる音。

しかし打球は高々と舞い上がり、青羽のホームランとは真逆のライトスタンドに吸い込まれた。

「ちよつとー！ 見てなかったんですけどー！」

「二者連続とかやるなー」

「対抗意識燃えちやつたんじゃないの？」

「……私に言われても」

各々好きな事を口にし、山田に手荒い歓迎をする。

青羽に負けじとホームランを打つ山田は、まさに第二の四番だ。

ここで藤蔭は投手交代、ここで流れが変わり2点差で最終回の守備を迎える。

「これだけ援護があれば安心だな」

「2点差あればもう十分ですよ、私を誰だと思ってるんですく？」

神宮は腕を組んで自信満々にそう言う。

しかし浜矢や灰原たちの反応は芳しくない。

「ノーコン劇場型」

「胃薬必須ピッチャー」

「ちよつと酷くないですかー!？」

「でも事実だしなあ」

神宮は完璧に抑えてその発言を撤回して貰いますよ！　と言いつつ放ちマウンドに向かう。

援護を貰ったのに怒りながらマウンドに立つ彼女は、周りから見たら奇妙に映るだろう。

だが、神宮は自らの発言を後悔する事となる。

ワンアウトからヒット二本と四球であつという間に満塁のピンチを作り、初球。

「あつ、やべ」

「デッドボール！」

スライダーが曲がりすぎ押し出しの死球を与える。

流石の間を取らなければまずいと思った伊藤がマウンドに向かう。

「空……」

「ほんつとーにごめん！　曲がりすぎた！」

「変化球自体は良いと思うから、気にせず投げて」

「へ？　いいの……？」

流石に押し出しの死球は怒られると思った神宮は、伊藤の優しい言葉に拍子抜けした。

「そもそもあの打者が避けるの下手だったんだよ、普通あの曲がりだったらスイングし

「ないよ」

「て、手厳しい……」

「だから空は気にせず私のミットだけ目掛けて投げてきて……あつ、目掛けた所にいかないか」

「なー!!? 見とけよー! ビッタビタの制球見せてやるからね!」

伊藤の茶化すような言い方でリラックス出来たようで、笑顔のままバッテリーはそれぞれ構える。

初球で勝負を決めるために、内角のシュートを投げて詰まらせる。

シュートの三好からセカンドの菊池に正確な送球、そして素早い動きで一塁に転送しゲッツー。

「ナイピ、良いシュートだったよ」

「普通当てた次に内角要求する〜?」

「空なら投げてくれるって信じてたから」

「……も〜! 擘相手じゃなかったら首振ってたからね!」

最終回は劇場型ピッチャーらしくハラハラする展開となったものの、何とか1点差で逃げ切り四回戦も突破。至誠のベスト16進出が決定した。

第17球 勝ち上がれ！

至誠は破竹の勢いで神奈川を勝ち上がっていった。

序盤の三試合を市大藤沢、京王義塾、藤蔭といった強豪校としか当たらなかったのが良い方向に転がったのかも知れない。

五回戦からの三試合はその三校と比べると格落ち感があり、もっと厳しい戦いを強いられてきた至誠の敵ではなかった。

五回戦は浜矢が5回2失点、神宮が1回1失点というまずまずの投球をした。

打線は本塁打は出なかったものの大爆発し10得点。結果は10対3で6回コールド勝ち。

準々決勝は洲寄が完璧な投球を見せ6回無失点。

打線も青羽の第4号のスリーランホームランが飛び出て8得点。8対0と二試合連続の6回コールド勝ちを収めた。

準決勝は浜矢が先発し6回2失点の好投、神宮も1回を無失点に抑える完璧な投球を見せた。

打線も山田の第3号の満塁ホームランも出て7得点。

7対2で快勝し、決勝戦へと駒を進めた。

そして決勝戦で頂を奪い合う相手は。

「二年連続で蒼海大になります」

「まあ知ってたよ」

佐久間が所属する蒼海大付属相模高校。正直、組み合わせが決まった時点で勝ち上がってくるのは誰もが予想出来ていた。

蒼海大相模高校を一言で表すとすれば、圧倒的な破壊力を誇る“打”のチームだ。

「六試合での総得点は56点です……」

「56点!? ウチでも確か37点でしょ?」

「はい。なので簡潔に言うと、蒼海大相模は全国トップクラスの打力を持っています」

今年は打力が上がった至誠ですら37得点。

それを遥かに上回る56得点、どれだけ凄いのかと言うと毎試合平均で8点は取る打線だ。

「それより先発は誰で来そうなんだ?」

「それが、多分佐久間さん……」

「マジで? アイツ二番手だろ?」

「でもここ二試合で投げてないし、それに至誠相手には投げてくると思う」

佐久間の性格であれば無理を通してでも先発する筈だ。彼女を知っている二年生はそう思っていた。

「じゃあこつちも伊吹先発？」

「……いえ、真理ちゃんで行こうと思います」

「そうなの？」

「伊吹ちゃんは去年投げてますし、蒼海大に警戒されすぎてます」

普通に考えれば浜矢を先発させる場面。

だからこそ逆をついて洲崎に投げさせるのだ。

「けど伊吹ちゃんには早めに継投するのも考えてるから！ 準備はしておいてね」

「了解！ 登板したらちゃんと抑えるよ」

「あともう一つ理由があつて、蒼海大の選手つて速球には強いんだけど変化球は苦手な人が多いんだ」

速球中心の浜矢より、変化球中心の洲崎の方が相性が良いのではないかと千秋は考えた。

空気を読むのであれば浜矢で強行するが、チームの勝利の為にはやむを得ない判断だ。

「打者で警戒すべき選手は？」

「もちろん全員だよ！」

「うん、知ってた！」

蒼海大の打線の強力は全国でも有名だ。

一番から九番まで、他所ならクリーンナップを張れる選手が並んでいる。

対戦相手が決まってるからやる事といえば練習。

強力打線を相手にする為、投手陣はいつもよりやる気に満ち溢れている。

神宮と浜矢は並んで的当てをしていた。

「伊吹先輩気合入ってますね〜」

「じんぐーは気合い入りすぎて、いつも以上にノーコンになってるぞ……」

「多分投げないって分かっているのに、ちよつと緊張しちゃって」

神宮の投げた球は的に当たることすら殆ど無かった。力んでボールをコントロールし切れていない様子。まあ、割といつもそんな感じなのだが。

「けど神宮はメンタル強いよな、ぶつけても平気そうだったし」

「悪い事ではあるんですけど、当て慣れちゃってるんで……今更それくらいじゃ動揺しませんよ」

「……コントロール鍛えるって事は選択肢は無かったのか？」

「色々試したんですけど、球威が落ちまくったんですよ〜」

神宮のメンタルの強さの理由は四死球の多さ。

ピンチの場面をよく作り、そのまま打たれることも稀にあるので必然的にメンタルが鍛えられた。

「ピンチの時って何考えてる？」

「ピンチ作っちゃったー、じゃあこっから抑えよーみたいな感じですよ」

「楽天的というか何というか……」

「常に本気で投げてるんですけど、ピンチの時の集中力には勝てないですね」

神宮はピンチの時になると楽しそうにする。

そこから繰り出される曲がりの大きいスライダーは、数々の強打者を翻弄してきた。

「打たれたらどうしようとか考えたりしないの？」

「私は追いつかれなきや何点取られても良いって考えなんです。それにどちらかと言うとぶつける事が多いですし……」

「ピンチになると曲がりが大きくなるよな」

「そういう考えは持つてても、やっぱり失点したくないって気持ち湧き上がってくるのよ」

投手というのはプライドが高い人間が多い。

神宮も例に漏れずそのプライドの高い人間であった、それだけの話だ。

「じゃあ私はフリー行ってくるわ」

「はーい、抑えてくださいね!」

「頑張る〜」

浜矢は外野陣とフリー打撃をする為に場を離れる。

一人の練習を退屈に感じた神宮は、その辺をうろついていた灰原に声を掛ける。

「監督、スライドフォークって何であんなに打たれないんですか?」

「斜めに落ちるフォークとか脅威だぞ、打席で見たら分かる」

途中までは真っ直ぐと同じ軌道なのに、そこから斜めに落ちていく。たったそれだけなのに、それがどれだけ打ちにくいことか。

「監督は打てますか?」

「うーん……現役の時だったら打てたな」

「今は無理ですか?」

「当てるのは出来そうだけど、ヒットにするのは難しいかな」

灰原が引退してからもう三年半の時が経過した。

部員の練習を手伝ってはいたが、実戦からは離れている。当時と同じ感覚で打撃をす

るのは難しいだろう。

「金属なら余裕でホームラン打てるけどな」

「……監督が金属持ったら死人が出ますよ」

「それ去年も誰かが似たような事言ってたな」

昨年三年生が話していた内容と全く同じ。

あの時は灰原に金属を持たせたら、バックスクリーンを壊すと言われていた。

「懐かしいな、元気にやってるかな」

「先輩たちですか？ それなら十分元気ですよ」

「私、速報とかも殆ど見られてないんだよな」

灰原がそう言うのと千秋は任せろ、と言わんばかりに三人の成績を語り出す。

「お三方とも一軍に昇格しましたね、その中でも活躍してるのは中上先輩です」

「まあ左の変化球マスターは活躍するよな……」

「ですね、私の見た試合だと一試合で八球種投げました」

「打者からしたら堪ったもんじゃないな……」

野球というのは狙い球を絞って打つもの。

それなのに八球種も投げられたら絞れる訳がない。

「柳谷先輩と糸賀先輩もいい感じですよ、打率も2割5分は超えていますし」

「高卒ルーキーがそれだけやれば十分だな」

「監督は3割1分2厘でしたよね」

「よく覚えてるな……確かそうだった気がする」

シーズンの半分しか出場していないものの、打率は3割を超え本塁打も二桁に乗せた。

そんな高卒ルーキーの捕手が現れば、新人賞を貰うのも納得だろう。

ちなみにこの三人、浜矢と外野陣のフリー打撃を眺めながら会話をしている。

「おつ、連続で打ち取った」

「伊吹ちゃん成長速度凄いですよねえ」

「伊吹先輩も打たれてた時とかあったんですか?」

「そういや一年の時から結構抑えてたな、代わりに打撃と守備が酷かったけど」

一年生の時は打率2割前半、守備範囲も狭くフライ処理が苦手だった。

それでも防御率は2.58と二番手として十分な働きをしていた辺り、やはり彼女は天才だ。

「今じゃ打席にもマウンドにも、安心して送り出せるもんな」

「本人はまだ納得してないみたいですけどね、特に打撃は」

「私が知らなかっただけで伊吹先輩って凄かったんですね……私も頑張らないと」
神宮は小さく、だがしつかりと決意を呟いた。

背番号1
エースを背負った幼馴染にベンチからの信頼を得ている先輩、この二人には負けていられなかった。

バッティングピッチャーの役目を終え、軽く休憩をしている浜矢と洲寄も言葉を交わしていた。

「先輩、佐久間さんってどんな方なんですか？」

「どんな？ ……見た目は怖いしガラもちよつと悪いけど、優しい奴だよ」

「あの、そうじゃなくて……選手として……」

洲寄が言いくそうにそう伝えると、勘違いに気付いた浜矢は慌てて謝罪する。

「ごめんごめん！ せ、選手としてね……バッティングがヤバイよ、打球速度がえげつない」

「投球の方はどうなんですか？」

「ノーコン速球派としか言えないかなあ……けど調子良い時は手が付けられない」

調子のムラが激しいからこそ、調子が良かった時に誰も手が付けられなくなる。

蒼海大の二番手を担っている選手だ、スペック自体は高いのは当然だろう。

「打席でもかなり威圧感があるけど、怖がらず迎え撃てば平気!」

「浜矢先輩が言うならそうなんでしょうね……分かりました、佐久間さんを迎え撃ちます」

「期待してるぞ!」

浜矢が歯を見せて笑いながら拳を前に出す。

控えめではあったが洲寄も拳を突き出しぶつける。

この二人で明日、絶対王者の蒼海大に立ち向かう。

第18球 立ちはだかる蒼き者

神奈川県予選決勝、ついにこの日がやってきた。

横浜スタジアムは陽と観客の熱気に包まれている。

選手が入場するとその熱気は増し、今ここが神奈川で一番熱い場所とい言ってもいいだろう。

「佐久間ー！ 期待してるよ！」

「ここまで来たら優勝してー！」

「強力打線の力見せてやれっ！」

蒼海大には根強いファンが多数存在する。

それもその筈、蒼海大は神奈川の野球名門校は何処かと聞かれたら真っ先に名前が上がる高校。

古くからの強豪校には古くからの野球ファンが付くのだ。

「金堂先輩いつものバッティング期待してますー！」

「伊吹ー、投げたら完璧に抑えてね！」

「ホームラン打ちまくってやれー！」

体罰事件や数年前までの低迷期のせいで数は減ったが、至誠にも古くからのファンはいる。

昨年の活躍で古豪復活と取り上げられ、それがきっかけで再び応援する人も少なくなかった。

「やっぱ決勝は人多いなー」

「当たり前だよ、それにこのカードは人気あるし」

「神奈川最強と古豪の対決は燃えるよね」

二年生の三人が談笑をしながら入場する。

観客席からの圧を感じてはいるものの、それに緊張させられる事はない。

「てか佐久間人気だな」

「県内最速はロマンあるからねえ、それに打撃が凄いし」

「フォームも派手だからそういうのが好きな人は多いだろうね」

佐久間のフォームは打撃、問わず豪快だ。

そのフォームと同じくらい豪快なプレーに惚れる人は多い。

「……勝たなきゃな」

「まあその為に来たんだからね」

「野球ファンの人に、至誠が神奈川最強って言わせようね！」

炎のように紅いユニフォームを纏う至誠の前に立ちはだかるは、海のように深い蒼のユニフォームを纏う蒼海大。真逆な色を見に纏う両チームの決勝戦が、今始まった。

「……………ふう」

「緊張してる？」

「まあそこそこには……………けどやるしかないですからね」

緊張した様子で洲寄が先発の、誰も踏みしめていないマウンドに上がる。

それを見た佐久間は持っていたバットを強く握りしめる。

(浜矢が先発じゃないだと……………？ ふざけるな、何故アイツが控えなんだ)

「れ、玲？ 怒ってるみたいだけど……………」

「……………気にしないで下さい、ただちよつと先発の潰し方を模索してるだけです」

「お、穏便にね……………」

先輩ですらも気圧される程のオーラ。

佐久間はいかに洲寄を早い段階で降ろすか、その手段を考えていた。

(……………普通に打てばいいな、ボコボコにして浜矢に投げさせるんだ)

確かにそれが一番の近道ではあるし蒼海大相模らしいのだが、考え方が脳筋過ぎる。

洲寄が投球練習を終え、遂に最後の試合が始まった。

(一番なのに威圧感半端ないな……慎重に攻めよう)

一番打者のはずなのに、四番のような威圧感を醸し出している。彼女は蒼海大という学校の打線を象徴しているだろう。

運命の第一球は洲寄の得意球であるパーム。

緩く落ちる変化球が隅に決まりワンストライク。

(コントロールは良好、これなら抑えられそう)

二球目はスラブで内角を挟り、力強く引つ張られるがファール。一球インハイのボール球を挟み、カウントを2―1としてからの四球目。

打者は真ん中低めに投げられたボールを掬い上げようとバットを出す、ボールはバットから逃げるように変化し空振り。

洲寄の第二の決め球、スクリューが決まった。

「ストライク！ バッターアウト！」

「よしっ……」

ポーカーフエイスは崩さないものの、ホツと息を吐く洲寄。一人目とはいえ三振を取れた事で不安が無くなった。

二番は対変化球に強い左の巧打者。

変化球が甘く入れば間違いなく打たれる相手、失投は許されない。

(変化球を打たれたくないからストレート……は流石に読まれてそうだからスラップで)

体の近くに投げて仰け反らせつつストライクも取る、性格の悪い(褒め言葉)鈴井らしいリード。

そして二球目はアウトローのストレート。

インハイからアウトロー、それは一番球が遠く感じる配球だ。

外れると感じ見逃したその球は、しっかりストライクゾーン内に入っていた。

(ツーストライクからが怖いんだよね……ボール球のバーム、振ってくれたら儲けもので)

低めに外れるバームを投げると打者は無理やり当ててきたが、セカンドゴロとなりツアアウト。

「ツーダンツーダン！」

「ナイピーー！」

(ここまでは問題無し。次は佐久間さ、ん……う?)

殺気に近いオーラを放ち、バットを洲崎に向け宣戦布告をする佐久間。

(浜矢先輩、この人本当に優しいんですか？ 殺気を放っている気がありますが……)

ベンチに座る浜矢の方を見るが、佐久間と洲崎の対決に興奮している様子だった。

「洲寄と佐久間はどっちが勝ちますかね!？」

「お前、意外と鈍感なんだな……」

「へ? 何がですか?」

こんな事になってるにも関わらず、浜矢は佐久間が自分と対決したくて気合が入ってる事実に気づいていない。

(怖いけど投げるしかない、ピッチャーライナー打たれない事を祈るしかないけど……) 心配しなくとも、佐久間には狙って打てる技術が無いことを洲寄は知らない。

この試合で一番警戒すべき相手、佐久間に対する初球はスクリュー。力強く振り抜いたが、タイミングが少しズレ特大のファールに。

(こわ……またパワー付いた? とにかく当てさせない配球するよ)

洲寄も流石にこれは恐怖を覚えたようで、鈴井らしからぬ消極的なサインに頷く。バッテリーは変化球で攻め、バットに当てさせないようにする作戦を立てた。

しかし佐久間は食らいつき並行カウントまで持ち込まれる。

(前はこんなミート力無かったでしょ、そんなに真理から打ちたいんだ……ならいいよ、打たせてあげる)

鈴井のサインは内角のスラップ、打たれると思った洲寄は首を振る。

しかし鈴井はその後、守備シフトのサインも出す。

それを見た洲寄は頷きスラップを投げる。

絶対球だと思った佐久間がフルスイングをすると、痛烈な打球が三遊間を襲う。

(定位置なら抜かれてるだろうね、定位置なら)

「なっ……!」

三塁寄りの深い位置で守っていた三好が、打球の勢いに押されながらも一回転して一塁に送球する。

「耀ありがとう」

「どんな球でも捕るから、安心して投げていいよ」

洲寄の背中をグラブで優しく叩く三好。

プレーに派手さを求めない彼女が、勢いに押されたとはいえ回転して投げた。確実にアウトを取る為にやったのだが、それが洲寄には喜ばしいことだった。

「初回は三凡か、上々の滑り出しだな! さあ今度は攻撃だ、打ちまくれよ!」

「オーツ!!」

至誠の一番はセカンドの菊池、速球には弱い粘るくらいは出来る。

(ハッ、打ちまくる? 笑わせるなよ、浜矢^{ディツ}が出てくるまで1点もやる気はないさ)

佐久間は不敵に笑いながら投球を開始する。

豪快なフォームから投げられたストレートは、昨年よりも球威と速度を増しているようだった。

（はっや……打つどころか当てるのもムズそうなんだけど!）

県内最速のストレートに高速スライダー、そして新たに身に付けたフォークで数々の打者を手玉に取ってきた。更には今は集中力が増している為、コントロールも普段より悪くない。

最後は豪速球にやられ、菊池は三振する。

「いやー、あれはキツイわ」

「三好、一応粘れるか試してみてくれないか?」

「やるだけやってみます……」

三好は左打席に入りゆつくりと構える。

目の前から発されるオーラに負けず、ストレートをカットしていく。

（ストレートはまだカット出来そう……けど変化球は無理!）

何とかフォークに当てはしたものの、力の無い打球になりピッチャーゴロ。

三番に入った金堂が打席に入り、非力なバッターが三人続く。

（技術はあるようだが、それだけじゃ私の球は打ち返せないさ。その木製バットをへし折ってやる!）

佐久間は自信のあるストリートで勝負する。

ミート力が高い金堂なら余裕で当てられるが、力負けて前に飛ばすことが出来ない。
い。

(球が重すぎる、これが本調子の佐久間……)

四球続けてストリートを投げ、五球目だった。

この打席初めてのスライダーを内角に投げる。

金堂はスライダーに対応したが、詰まらされた為バットにヒビが入ってしまった。

「見て、ヒビ入った」

「うわっ、なんてストリート投げてんだアイツ……」

「まあ木製なんて芯外されればスローカーブでも折れるけどね」

アウトにされベンチに戻った金堂が、ヒビの入ったバットを置く。

芯を外せば折れるしヒットも出にくいのが木製。

だからこそ面白いと感じ、彼女は高校から木製を選んだ。

(負けっぱなしは面白くない……私でも佐久間から打てるって事を証明したい)

表には出さないものの、金堂にも意地やプライドというものは存在する。

完璧に打ち取られた事がかなり悔しかったようで、彼女もまた強者のオーラを放って

いた。

2回表はランナーを二人出したものの、下位打線だったという事もあり失点は免れた。

その裏、佐久間は二者連続で三振に取り最後まで内野フライに打ち取る完璧な投球。

3回はお互いランナーを一人出したが、安定した投球で二塁を踏ませる事は無かった。

4回表の蒼海大の攻撃が始まる。

打席には先程の打席でヒットを放った四番。

五球目のバームを打ち返されシングルヒット。

(なるほど……これは、皆に伝えなきやな)

その後はノーヒットで切り抜け4回まで無失点に抑える。その裏の攻撃は金堂からの攻撃だった。

「つー！ くそつ……」

「ドンマイ！ それに飛距離は出てるから！」

「……そうだね、次の打席は打つよ」

センターフライに終わってしまうが、前の打席と比べれば飛ばせるようになった。

この対応力の高さも彼女の武器である。

5回表の攻撃が始まる前、蒼海大ベンチは円陣を組んで作戦会議をしていた。

「無理に引つ張ろうとしないで、そして低めの変化球は捨てよう」

「キャプテン、その理由は？」

「変化球は引つ張ると引つ掛けやすくなる、だから長く見て流すんだ」

そこでは蒼海大相模のキャプテン……一二三真奈が、この試合が始まってからずっと探していた、洲崎の攻略法をチームメイトに共有していた。

「低めの変化球は？」

「ウチは高めが得意な選手が多いし、低めは完全に捨てた方が良いと思う。高さはベルトより下ね」

「オーケー、キャプテン！」

蒼海大相模のレギュラーは感覚派が多いので苦手なコースに来てもある程度は打てたり、外の緩い変化球を無理やり引つ張ったり出来る。

そんな中で一二三は、唯一と言つていい理論派。

自分が打つ為に攻略の糸口を探していたら、それがチームを救う鍵となっていた。まさかそうなるとは思ってもしなかっただろう。

「相模のレギュラーなら、狙っていたコースに来た球を打ち逃す事なんてないよね？」

「この回で一気に点を取ろう！」

「オウツ!!」

不穏な空気を隠せないまま5回表が始まる。

この回は九番からの打席であったが。

「ボールフォア!」

(急にボール球を見極められるようになった……さっきの円陣の効果?)

(真理の攻略法が分かった? けど変な癖とかは無いのに……)

先頭に四球を与えると、一番と二番にも連続ヒットで満塁とされてしまう。

そして得点圏で一番回したくなかった相手、佐久間が相手だ。

(集中してるな……揺さぶりも効かなさそう)

低めに変化球を二球続けてあっさりと追い込む。

初球から振ってくる佐久間がピタリとも動かないのを、バッテリーは不審に思っていた。
た。

(洲崎を降ろして、浜矢を投げさせる為には……)

外角高めにストレートが投げられる。

それはボール一つ分外れていた、明らかなボール球だった。

(……で打つしかないよなあ!!)

力強く踏み込んで全身を使ったフルスイング。

振り終わった後に膝をつくほどの勢いでスイングで当てられた白球は、高く高く舞い上がりゆっくりと、しかし確実にスタンドに近づく。

「入るなっ!」

「いけっ!!」

長い滞空時間が過ぎ、その打球が落ちた場所は。

——観客に埋め尽くされた、ライトスタンド。

試合中盤で打たれた先制の満塁本塁打。

蒼に染まったスタンドからは歓喜の声が、紅に染まったスタンドからは悲鳴や落胆の声が聴こえる。

「真理……」

「すみません、打たれてはいけない場面で……」

洲崎は立ち直れそうにはない、そう感じた鈴木はベンチにアイコンタクトを送る。

「……浜矢、確か10球で肩作れるよな?」

「はい、今行きますか?」

「ああ、任せた」

灰原が球審に選手交代を告げ、肩を回しながら浜矢がマウンドに向かう。

その瞬間に目を輝かせる佐久間。

(やっとなら出てきたか浜矢！ 待ちくたびれたぞ)

(佐久間はやっぱ凄かったな……けど、私も負ける気はない)

浜矢は10球を投げ込み投球練習を終えた。

一度目を閉じて3秒間空を見上げ、ゆっくりとまぶたを持ち上げる。

青色の瞳には炎のように燃えた意志が宿っていた。

第19球 エースの背中

浜矢は初球を投げる前に一つ息を吐く。

彼女の数あるルーティンの内の一つだ。

左脚を引きそのまま上げ、グラブで一回膝を叩いてから投球する。

風を切り裂いて進むボールは、重い音を響かせてミットに収まった。

「ストライークッ！」

この一球で球場の空気が変わった。

——浜矢のストレーターの質が良くなっている。

観客ですら分かるのだから、応援席にいる蒼海大相模の選手であれば誰でも分かる。

この選手から追加点を取るのには難しいのではないか。浜矢はたった一球で周囲にそう思わせた。

(最高のストレーター……よし、ガンガン攻めよう)

内角を多く要求する鈴井に、それにしっかり応える浜矢。

息のあった二人の配球は蒼海大を圧倒していた。

「ストライク！ バッターアウト！」

まず一人目はたった三球で三振に切り取る。

二人目も内角のツーシームを詰まらせセカンドゴロ。最後はツーストライクまで追いつ込んでから。

(さあ、スライドフォークいくよ)

(最高の球を投げるから、ちゃんと捕ってくれよ！)

決め球であるスライドフォークが投げられた。

斜めに曲がりながら落ちる魔球は、キレが増していた。

手元で急激に変化するフォークに対応出来ず三振、ワンバウンドした球は鈴井が体で止めて振り逃げも阻止。

「ナイピ」

「へへーん、どうよ?」

「まだあと2イニング残ってるんだから、調子乗らない」

「へーい」

悪い流れは浜矢によって完全に断ち切られた。

ここから良い流れに持っていこうと考えるが、そう甘くはない。

(あれでこそ浜矢だ、実力だけ見れば全国トップクラスの選手には及ばない。だが何かを持っているスター選手……だから私はお前と投げ合いたかったんだ)

佐久間が心の奥底から溢れ出る喜びを隠しきれていなかった。

殺気と見まごう程のオーラを放っていたとは思えない、高揚感に満ちた表情を浮かべていた。

「浜矢！ 私の投球を見ておけ！」

「!? お、おうっ！」

いきなり大声で名前を呼ばれ、ビクツとする浜矢。

叫んだ後佐久間は、駆け足でマウンドに向かいマウンドをならす。

（投手としては私よりアイツの方が凄い……だが、お前には負けたくない！ 初めてのライバルであるお前には!!）

佐久間はこの終盤で更にギアを上げてきた。

制球は少し乱れたものの、ゾーン内で散らばる程度の乱れ。

彼女の球速を考えればかなり凶悪だろう。

荒波、岡田、菊池の三人が打ち取られ5回裏は無得点。しかし佐久間のその投球を見

た浜矢は。

（やっば佐久間はポテンシャルは高いんだよな……私もあんな投球してやる！）

嬉々としてマウンドに駆けていく。

浜矢の後ろ姿を見ていると、監督は思うことがあった。

(登板しただけで流れを変え、更に付け入る隙を与えない投球……。あれこそがまさしく、背番号1の背中だ)

佐久間の投球に感化された浜矢は6回を三凡で終わらせる。

お互いがお互いを高め合う投球をする、これぞライバルだ。

どんな悪い流れでも変えることができる、これがエースだ。

「いい加減1点欲しいな……」

「任せてください」

金堂がネクストバッターズサークルにしゃがむ。

ここまで二打席とも打ち取られ、一回はバットをへし折られた。

大きな屈辱を味わったのだ、自分もやり返さないと気が済まないのだろう。

「アウト！」

三好がファーストゴロに終わりワンアウト。

それを見てから金堂はゆっくりと立ち上がる。

いつもは冷静で出塁するのが当たり前と思われていたし、事実そうであった。

それが今日は打ち取られっぱなしでチームとしても反撃すら出来てない。

(……私は一度負かされた相手に、最後まで抵抗できない選手じゃないよ)

バットは体の前に出し、体は投手の方に向ける。特徴的なこのフォームが金堂を巧打者に導いた。

投げられた初球はストレート。

(ど真ん中、貰った！)

力負けをしないようにこちらも力強く振り抜く。

的確に芯に当て軽く振ってヒットを打ついつものスタイルとは違う。

木製特有の乾いた打球音が鳴り、打球は空高く舞い上がる。

ふらふらつと伸びていく白球はレフトスタンドに届いた。

「え？ ほ、ホームラン……？」

「神奈ー！ ナイスホームラン！」

「ほら回れ回れ！」

自分でも予想していなかった、寧ろ本人がこの結果に一番驚いていた。

本当に現実なのか疑いつつダイヤモンドを一周し始める。

(あんなスイング初めした……私って意外と長打力あったのかな)

大事にホームベースを踏んで今ホームイン。

反撃の狼煙を上げたのはキャプテン金堂だ。

「ナイバッチー！ 高校初ホームランだな！」

「キャプテンって高校でホームラン打ってなかったんですね」

「いや、人生初だけど……」

山田と浜矢が大はしやぎしていると、衝撃の事実が本人の口から伝えられる。

「人生初!? え、神奈が野球始めたのっていつだっけ……?」

「……小学校」

「十年以上ホームラン打ってなかったの!」

「そもそも打ちたいって思ったこと無かったし」

金堂が言うには、初めて見たプロ野球の試合でボール球を簡単にヒットする選手がいた。

その人に憧れて自身も今の打撃スタイルを身に付けたので、ホームランを打ちたいと思ったことは無かったらしい。

「ホームランって言えば野球の華じゃん……!」

「まあでも悪球打ちも華といえは華ですよね」

「でしょ? だから私はホームランはこれからも狙わない! 一本出れば逆転って時には狙うかも知れないけど……」

長い年月を掛けて体に染み付かせた打撃スタイルを、今更変えることはしたくない。だが今後は状況を考え狙う事もあるかもと言った。

初めから完成された打撃の金堂が、更に成長する可能性を持った。

しかし良い知らせはここまでだ。

反撃の狼煙を上げたと思われたが、逆に佐久間に火がついた。

ストレートとフォークの組み合わせで次々と打ち取っていき、浜矢が3回を無失点の好投を見せるが援護は結局金堂の1点だけであった。

「ありがとうございますました！」

決勝戦は呆気ない幕引きとなった。

至誠がもう少し反撃出来ると思っていた観客も少なくなない。

しかし負けたのは事実、至誠の夏は県予選準優勝という結果に終わった。

「見違えるほど強くなってビックリしたよ」

「お前もな……来年は必ず1番取れよ」

「言われなくてもそのつもりだ、佐久間も絶対1番な！」

「当然だ、来年は最初から最後まで投げ合おう」

浜矢と佐久間は来季の背番号1奪取を誓い合い、それ以降は言葉を交わさずそれぞれの道へ別れる。

「真理、平気……?」

「つ、わたしが……夏をつ……！」

洲寄はベンチで俯いたまま泣きじやくっていた。

あの満塁本塁打がなければ勝てたかもしれないと、そう考えていた。

「わたしの……せい、でっ……」

「そ、そんなこと……」

「そうだね」

「はっ？」

洲寄の言葉を三好が否定しようとするが、神宮は肯定した。

その言葉に苛立った様子の三好は掴みかかろうとしたが。

「だから、私と一緒に練習しよっ？ 私はメンタルなら真理より強いよ、打たれまくって

るからー！」

「空……」

「……それは誇る所ではないし、私も打席立つくらいなら手伝うから」

「耀……二人とも、ありがとう」

二人に手を引かれ、ようやく洲寄は立ち上がる。

神宮、洲寄、三好の三人の瞳は次を見据えていた。

蒼海大への挨拶も終え、浜矢と鈴井はバスの中で一息ついていた。

「蒼海大には優勝して欲しいな」

「……全国に伊吹ちゃんっていうライバルいないし、また不安定な投球になるんじゃない……」

「あつ……」

二人の予想が的中し、蒼海大は三回戦で散ることになるのだがそれはまだ後の話。

「伊吹ちゃんおつかれ」

「せんしゅーお疲れー!」

「今までで一番良い投球だったよ」

千秋がタブレットを脇に抱えながらバスに乗り込んできた。

そしてデータを映した画面を二人に見せる。

「これがボールがどこに投げられたかのデータで、これはストライク率に被打率……あとは平均球速と最高球速ね」

「結構良い数字なの?」

「かなり良いよ、安定してこの数字が出せれば間違いなくエースだよ」

ストライク率は72%と高水準の数字を残し、平均球速に至っては過去最高だ。

鈴井の言う通りこの数字を安定して出すことが出来れば、全国でも通用する大エース

になれる確率は高い。

「来年こそ全国制覇目指すぞ！ 帰ったら練習しよう！」

「伊吹ちゃん今日投げたから抑えてね」

「ええー……でも洲寄は私よりやる気みたいだけど」

そう言われ洲寄の方を見る鈴井と千秋。

確かに一年生で固まり、練習メニューについて熱く語り合っていた。

「……いつも通りの球数投げて良いよ、その代わり休憩はしっかり取ること！ スト

レッチャやアツプ、ダウンも丁寧だね！」

「やったー！ せんしゅー好きー」

浜矢が軽く抱き付くと、千秋は現役高校球女に抱き締められた事が衝撃的すぎてフリーズした。

「一旦静かにー、全員いるな？」

「二年いまーす」

「二年も一名フリーズしてるけど全員揃ってます」

「三年もオツケーです」

監督がバスに乗り込んで全員が揃っているか見る。

静かになったのを確認してから話し出す。

「残念ながら今年は全国出場は果たせなかった、だが神奈川で準優勝だ！ 全員自信を持って、胸を張って帰ろう！」

「はい！」

監督は誰かを責める事はなく、部員の奮闘を讃える。

「激戦区神奈川で二年連続決勝進出、これは全く簡単な事ではない……至誠は間違いなく神奈川の強豪校だ、その生徒なんだから自信を持つ事を忘れるな！」

今の至誠はかつての強さを取り戻していた、いや寧ろ越えている。

そんな強いチームに在籍しておきながら、自分に自信が持てないのはいけない事だと監督は感じていた。

「自分ももっと活躍出来ていれば、少なからずそう思った奴はいると思う……けどな、私は自分が輝かせられる選手しか獲らない」

至誠のスカウトの基準が初めて語られた。

自分が輝かせられる選手、つまり自分が関与しなくても勝手に結果を残せるような選手は獲らない。

鈴井に關しては完全に例外。彼女の方から接触してきたので、断るのも酷だと思い推薦入学を認めただけ。

「だから今回の試合で活躍出来なかったとしても、次は必ず活躍出来る。三年生は上の

舞台上で輝けると私は確信しているぞ」

「監督……」

素晴らしい投手とはいえ、二年生相手に抑え込まれた三年生の四人。

もつとチームを引つ張りたかった、全員がそう考えていた。

けれど灰原は必ず自分たちが活躍出来ると信じてくれた。

「私からは以上だ、キャプテンからは何か……」

「全員帰ったら猛特訓するよ！ 来年こそ優勝するために！」

「オー……!!」

灰原が言い切る前に金堂が気合の入った声を出す。

その声に呼応して部員たちも腹から声を出し、声の圧により窓がビリビリと揺れる。

学校に帰り早々、至誠ナインは一目散にグラウンドに向かった。

中には競争形式で走る選手も居た。

「自分の弱点はこの夏分かったよね？ なら克服するよ！ 持ち味がわかってる選手はそこも伸ばそう！」

「ハイ!!」

キャプテン金堂の声出しから練習が始まった。

「野球部もう練習してるじゃん」

「はやっ！ さっきまで試合してたんだよね？」

「惜しかったよねー、金堂先輩がホームラン打った時はいけると思ってたんだけどなー」
「通りすがった生徒たちは、試合が終わって一時間しか経っていないのに練習を始めている事に驚いていた。」

全員が立つ事すら出来ない程の練習を終える頃には、空はすっかり暗くなっていた。
「疲れた……」

「そーいや秋はどうするんですか？」

「一塁と三塁が居ないんだよね……」

「私が一塁守りましようか？」

伊藤が拳手をして一塁に立候補する。

それでも三塁を守る選手が居ない上に、部員の数もたったの十人、選手は九人だ。

浜矢たちが入学した時と同じ状況に逆戻り。むしろポジションが被ってるせいで当時よりも酷い状況に陥っているかもしれない。

「神宮って投手以外もどこか守れないか？」

「小学校の時にセカンドやってましたけど……」

「なら石川を三塁に置いて神宮を二塁、洲崎と浜矢を外野すれば一応形にはなるか……」

？」

かなり無理のある陣形ではあるが、やってみようという話になる。実戦経験を積んで来年に備える、そんな狙いもあった。

「それとキャプテン！ 誰がやる？」

灰原が二年生の三人を見て尋ねる。

三人がそれぞれ顔を見合わせてから、鈴井が言う。

「じゃあ私がやります」

「鈴井が？ あんまやらなさそうなイメージあったけど……」

「伊吹ちゃんは家の事あるし、美月ちゃんはそもそもやる事が多すぎるでしょ」

浜矢は片親家庭のため家事をこなしており、千秋は今ですら仕事量が多すぎる。

これ以上二人に負担をかける事は出来ないという判断だ。

「でも鈴井も正捕手じゃん、負担はあるっしょ？」

「けど部長会議を伊吹ちゃんに任せたくないから」

「それ言われると何も言い返せない……」

結果としては鈴井がキャプテンになる、という事で纏まった。

灰原、柳谷に次ぐ三人目の捕手キャプテンの誕生だ。

番外編 夏大総評

至誠高等学校

チーム防御率2.09 チーム打率.357

洲寄真理

投球回20 被安打24 被本塁打2 四死球3 奪三振25

失点8 自責点7 防御率2.45 WHIP1.35

奪三振率8.75

打席数6 打数5 安打数1 打率.200 犠打1 三振4

出塁率.200 長打率.200 OPS.400

【備考】

背番号1を背負った1年生の左腕エース。

安定した投球を見せたが、決勝戦では痛恨の満塁本塁打を被弾。

打たれ弱い面も見受けられたので、精神面での成長が鍵となりそうだ。

鈴木美希

打席数 20 打数 17 安打数 10 打率 .588 打点 3
 四死球 2 犠飛 1 盗塁 1 三振 2 出塁率 .600
 長打率 .882 OPS 1.482

【備考】

遊撃手から華麗な転身を遂げた扇の要。

守備での安定感は勿論、打撃でも常に高打率をキープ。本塁打がゼロなのが少し寂しいか。

金堂神奈

打席数 24 打数 22 安打数 16 打率 .727 本塁打 1
 打点 5 四死球 2 出塁率 .750 長打率 .955 OPS 1.705

【備考】

神奈川の安打製造機は更に成長を遂げた。

遂に7割を超えた打率に高校初の本塁打も放った。

内野陣を支える守備も健在。

菊池悠河

打席数 21 打数 20 安打数 6 打率 .300 打点 3 四死球 1
盗塁 4 三振 5 失策 1 出塁率 .333 長打率 .400 OPS .733

【備考】

忍者と呼ばれた守備職人は打撃でも輝いた。

1 失策を記録したものの、守備範囲の広さと送球精度の高さは魅力的。
4 盗塁も決め脚も十分にアピールした。

山田沙也加

打席数 23 打数 21 安打数 7 打率 .333 本塁打 3 打点 9
犠飛 2 三振 6 失策 1 出塁率 .304 長打率 .810 OPS 1.114

【備考】

得点圏で強さを発揮する第二の主砲。

昨年から打率を1割近く上げた彼女は、もうロマン砲とは呼ばれない。

三振が多いのは気になるが、それ以上に魅力ある選手。

三好耀

打席数 24 打数 19 安打数 4 打率 .211 打点 1 四死球 3 犠打 2
 三振 3 失策 1 出塁率 .318 長打率 .263 OPS .581

【備考】

至誠が誇るクセ者スイッチヒッター。

打率こそ2割前半だが、出塁率と犠打で貢献。

大会全体での1打席の平均投球数が3.51なのに対し彼女は5.25を記録した。

青羽翼

打席数 24 打数 21 安打数 8 打率 .381 本塁打 4

打点 12 四死球 1 犠飛 2 三振 5 出塁率 .375 長打率 1 OPS 1.

375

【備考】

現実性を増した主砲は頼りになった。

打率を4割弱とし本塁打4、今大会3位タイの打点12を叩き出した。

守備面ではまだ少し不安が残る。

岡田早紀

打席数 22 打数 21 安打数 3 打率 143 四死球 1 盗塁 3 三振 12
 出塁率 182 長打率 143 OPS 325

【備考】

最強の守備と最弱の打撃を兼ね備えた名中堅手。

プロと言われても遜色ない守備力の持ち主だが、打撃面で大きな課題を残した。

藤蔭戦でのセーフティバントからの盗塁は、あまりにも鮮やかだった。

荒波友海

打席数 22 打数 20 安打数 4 打率 200 打点 1 四死球 2 盗塁 2 三

振 9 出塁率 273 長打率 250 OPS 523

【備考】

打撃が課題の守備型右翼手。

至誠では貴重な左打者なので、もう少し打力を付けて暴れて欲しい。

来年は勢いのある至誠という波に乗れるか。

浜矢伊吹

投球回 21 被安打 23 被本塁打 1 四死球 3 奪三振 28 失点 5 自責点 5

防御率 1.67 W H I P 1.24
 奪三振率 9.33

打席数 8 打数 7 安打数 3 打率.429 打点 2 四死球 1

三振 2 出塁率.500 長打率.571 O P S 1.071

【備考】

背番号1奪取に大きく踏み出した速球派右腕。

魔球を武器に次々と三振を奪っていく姿には、圧巻の二文字しか似合わない。

蒼海大戦では流れを変える投球を見せた。

神宮空

投球回 6 被安打 5 被本塁打 1 四死球 4 奪三振 5

失点 2 自責点 2 防御率 2.33 W H I P 1.50

奪三振率 5.83

打席数 1 打数 0 四死球 1 出塁率 1 O P S 1

【備考】

スタミナ抜群のサイドスロー投手。

制球の悪さが目立つが失点はイメージより少ない。

ピンチには強いが、ピンチを作らないような投球をして欲しい。

伊藤 隼

打席数 3 打数 3 安打数 1 打率 .333 三振 1

出塁率 .333 長打率 .333 OPS .666

【備考】

陰ながらチームを支えた将来性のある捕手。

スタメン出場は1試合だったものの、神宮の登板時にはマスクを被る事が多かった。少ない出場機会の中でも盗塁を刺すなど強肩を見せつけた。

石川 灯

打席数 7 打数 6 安打数 2 打率 .333 打点 2 犠打 1

盗塁 1 三振 2 出塁率 .333 長打率 .500 OPS .833

【備考】

要所で輝いた至誠の灯火。

藤蔭戦での代打タイムリーはその後の流れを変えた。

バッテリー以外はどこでも守れるユーティリティー性も魅力。

第20球 課題は明確

秋大は夏の快進撃が嘘のようにボロ負けした。

具体的に言うとうと3回戦で敗退、しかも1・2回戦もギリギリの所で勝利した。

スコアは1試合目が2―0、2試合目が2―1、そして3試合目が1―5。

全ての試合に共通する、今の至誠の明確な課題は。

「打てなさすぎだったなあ……」

「先輩達が居なくなるから打力落ちるのは分かってたけど、まさかここまでとはね」

長打力がある選手が居ないのは勿論、そもそも打てる選手が殆どいない。

岡田や荒波に三好は低打率、浜矢と鈴木は長打が少ない。

三振が多い石川や2割5分の伊藤がまだマシな方という惨状だ。

「秋はとにかく打撃練習だな……」

「ですねえ、けど今の1年生って守備重視で獲ったんですよ？」

「まあな、糸賀や柳谷が居なくなるの痛かったし」

「ということは今年は打力重視のスカウトですか？」

千秋がそう尋ねると監督は頷く。

守備力は県内でもトップクラスだが、打撃に関しては私立の中ではワースト10には入るだろう。

「けど守備の乱れからの失点が無かったのは良かったな」

「失策ゼロで好守も目立ちましたからね、守備に関しては文句無しだと思います」

だからこそ打力の無さが勿体無い。

新入生に頼らなければならぬのは情けないが、そんな事を言っている余裕は無い。

「……美月ちゃん、監督」

「美希ちゃん？ どうしたの？」

「私が長打力を付けるって言ったら、どう思いますか？」

鈴井の提案はハイリスクハイリターンだった。

打線を厚くするために自分が長打力を付ける、しかしもし失敗すれば最悪長打力が身に付かないまま、ミート力も失うかも知れない。

「鈴井は今のスタイルでも良いとは思うが」

「新入生に頼ろうにも大一番に強い選手を獲ってくるのは難しいと思います、なら誰がやるかと聞かれたら私がやります」

「……フォームもそうだが、自分の打撃傾向を変えるのはリスクが高いぞ？」

「打率は多少犠牲にしても、長打力を身に付けられる自信があります」

鈴井は決意の灯った強い眼をしていた。

10秒間、誰も言葉を発しない空間となり最初に声を出したのは。

「そうか、なら私も最大限手伝わせて貰うよ、極力リスクは減らしたいしな」

「監督……」

「私も手伝うよ！ 長打の打てる美希ちゃん、見てみたいもん！」

「美月ちゃんも……ありがとう」

鈴井の熱意を受け止め監督は許可を出す。

千秋も賛成し、秘密の特訓が始まろうとしていた。

「私の課題はやつばスタミナかな」

「私は文句無しでコントロールですね……」

「……私はメンタル」

投手陣もそれぞれ自分の課題を洗い出していた。

浜矢はスタミナ、神宮はコントロール、洲崎はメンタル。三者三様の克服すべき点が

あった。

「けど神宮はさ、ゾーン内で荒れる分には良いんじゃない？」

「ですよ、今の私は狙ってストライク投げられないんで……」

「空の球威で散らされたら多分打ちにくいと思う」

神宮はストレートの球威はある方だ、故にストライクを入れられるようになれば好成績が望めるはず。

「スタミナ付けるのはどうしたら良いんだろうな」

「まず先輩は線が細いんで、そこからですかね」

「食育トレーニングかあ、ちよつと難しそうだな」

元々の食事が少ないものもあるが、浜矢の家庭は裕福では無い。

経済的にも量を増やすのは難しいだろう。

「あとはランニングとインターバルですよ！」

「インターバル嫌いだけど、やるしかないよな……」

インターバルトレーニングはキツい分、効果は期待できる。

スタミナと下半身強化にはもってこいだろう。

「コントロールは……的当て？」

「それよりもシャドーやって、リリースとか体重移動を意識した方がいいと思う」

「確かになー、神宮ってリリースとかバラバラな感じする」

「なるほど……あとは下半身強化かな、先輩と一緒にインターバルやります！」

浜矢と神宮は自分に合ったメニューを見つけ、あとは千秋に確認するだけとなった。

「メンタルってどうやったなら鍛えられるんですか」

「……………寺に行く？」

「もうちよつと真面目に考えてやれよ……ピンチ作ったら深呼吸するとか、ジャンプするとかそういうルーティン入れるとかは？」

浜矢もマウンドに上がった際は1回深呼吸をする。

1イニング毎にグラブで胸をポンと叩くのもルーティンだ。

「ルーティンですか……確かに私はルーティンとかあまり無いですね」

「ならやっぱ深呼吸した方がいいって、リラックス出来るしマイナス思考が無くなるし」

「それに真理は実力めちやくちやあるんだし、打たれるかもと思っちゃダメだよ！

私はピンチ作っても打たれるかと思っちゃないし！」

「どつちかという押し出しとかワイルドピッチのが心配だもんな」

浜矢の言葉に神宮が反論し、軽く戯れる感じで取っ組み合う。

2人の姿を見て洲寄は今日、初めて笑顔を見せた。

「……私は、考えすぎだったのかも知れませんかね」

「そうそう！ 頭いい奴のが考えすぎちゃうんだよ」

「私達はバカだからそういう心配してないから！」

「人を勝手にバカ扱いすんなー！」

また浜矢と神宮による、コントのようなやり取りが行われた。

洲寄はようやく吹っ切れたようで、スッキリした顔をしていた。

「私達はまあとにかく打力だよね」

「耀は選球眼がある分、私達より活躍してるしね」

「打撃指導してくれそうな人……3年の先輩！」

「教えてくれるかなー、まあ言うだけ言ってみようか」

岡田と荒波の貧打外野コンビは、打撃を改善すべく3年生に指導を仰ぎようと考えていた。

「て訳で打撃教えてくださーい！」

「別にいいけど……あんま教えられないよ？」

「スカウトの人最近よく来てるし、木製に対応しなきゃいけないし」

今話しているこの時も、各球団のスカウトは見ている。あまり教える時間は取れないだろう。

「神奈は平気じゃない？ 木製慣れてるから」

「神奈せんぱーい！ 打撃教えてください！」

「私でいいの？ 長打の打ち方は教えられないよ」

「とにかく打率上げたいんで大丈夫です！」

そういう事ならと金堂の指導が始まった。

荒波と岡田の打撃が良くなれば脚を活かせる、チームとしても頼り甲斐ある選手になつてくれるだろう。

金堂の打撃指導を眺めつつ自分の練習をしている3年生。

「私らももう引退かー」

「悠河はプロに行くのか？」

「んー……悩み中」

「えっ？ 全員プロ志望だと思ってた」

山田は真つ先にプロ入りを宣言していたが、菊池は大会が終わって2ヶ月経つても進

路に悩んでいる。

「そもそも私の成績でドラフトかかるかなー」

「上位は厳しいかもな」

「けど守備良いんだしワンチャンあるかもよ?」

今年の打率は3割を越えたが通算で見れば2割台。

また本塁打も殆どなく打撃ではアピール出来ていない。

「高校で打てない選手がプロで通用するとか思われくない!」

「それはまあ……けど、あの守備なら獲る価値はあると思うけど」

「守備だけの選手なんてどの球団にもいるよー」

守備の上手さで打撃は免じて貰っている選手はいるが、あまりにも打撃が酷いと許容

されなくなる。

菊池が今入団すれば、間違いなく後者になるだろう。

「だから独立とか行こうかかって」

「独立? つて確か一応プロなんだっけ?」

「そうそう、それで元プロの人しか監督出来ないんだって」

「高いレベルでの指導が期待出来るし、大学や社会人と違って最短1年で志望届けも出

せる」

大学は4年、社会人は3年かかる所を独立リーグは1年でドラフトで指名される権利を得る。

菊池は1年間で実力を身に付け、最短でプロ入りを目指していた。

「悠河の守備なら2割5分打てれば使われると思うし、頑張れ」

「独立もドラフトあるんだっけ？」

「えつとねー、トライアウト受けてドラフトかな」

一次試験を通過した選手が二次試験を受けられる。

その二次試験での結果やプレーが良ければ、完全非公開のドラフトで指名されるといった流れだ。

「私は実戦でプレーしなきゃだし、まだ頑張るぞー！」

「実戦あるの？ なら伊吹達に投げて貰えば？」

「そのつもり、特に私は速球に弱いから伊吹に手伝ってもらおうよ」

彼女もまた自分の課題を見つけ、それを克服しようとしていた。

秋の大会を終えた至誠は、確実に前へと進んでいた。

もつと強くなる為、練習メニューを新しく組んだ2週間後。

この日はオフだったが、鈴井は1人黙々とバットを振っていた。

その近くには監督と千秋が付き、指導をしている。

「長打は力んで打つものじゃないぞ！ もつと力抜いて、インパクトの瞬間に爆発させろ！」

「はいっ！」

「美希ちゃん軸足がフラついてるよ、もつと踏ん張って！」

「分かった」

2人の熱のある指導を受け、段々と飛距離が出るようになってきた。

「ラスト！」

「はいっ！」

最後だからと身体に残っていた僅かな力を振り絞って、鈴井はボールを芯で捉えて飛ばす。

白球はライナー性の打球となり、外野にあるフェンスの上段へぶつかかった。

「……ホームラン、だな」

「美希ちゃん……凄いよ！ たった2週間でこんなに飛ばせるようになるなんて！」

「2人の、ハア……お陰、です……」

鈴井は息が絶えながらも2人へ感謝を伝える。

冷静を装っているが、ホームランが打てた事で口元が緩んでいる。

「まさかこの短期間でスイングが身に付くとはな」

「まだまだです……まだ少し違和感があります」

「さつきラストって言ったけどもう何球か打って、感覚覚え込ませる？」

「そうだね、じゃああと10球お願いしていい？」

感覚を身体に覚え込ませる為に、さらにもう10球打ち込む。

（鈴井が飲み込みが速いのは知っていたが、ここまでとは……）

監督は鈴井の飲み込みの速さに驚愕していた。

たったの2週間で今の自分と正反対のスイングを身に付けたのだ、この反応は当たり前だろう。

「……これなら、来年は私が打線を引っ張れますね」

「ああ、頼んだぞキャプテン」

「美希ちゃんの公式戦初本塁打、期待してるね！」

鈴井美希という安打製造機が、今度は本塁打を量産するかも知れない。

来年の活躍が楽しみだ、3人は揃って同じ事を考えていた。

第21球 ドラフト!

今年もまた、ドラフト会議の日がやってきた。

視聴覚室には大勢の記者が集い、カメラを向けている。

「すごい数だな……」

「まあ何だかんだ2年連続決勝進出だからね」

「それに私達の代って結構注目されてるらしいし」

7割打者の金堂に得点圏お化けの山田、そして4番として成長を遂げた青羽がいる。

菊池も注目されてはいたが、彼女は客席の方にいる。

「そろそろ始まるぞ、ピシッとしよう」

「はい」

ドラフト会議が始まり、まずは優先権を得たパ・リーグの指名から始まる。

《第一巡選択希望選手 東京ギガンテス

米原奈緒 外野手 京王義塾高校》

「米原か……」

「何球団競合するかな」

「さあ……けど複数は確定だろうね」

その予想通り、10球団が指名した段階で4球団競合となった。
あと2球団、まだ至誠の選手は指名されていない。

《第一巡選択希望選手 福岡スナイパーズ

喜多司 二塁手 市大藤沢高校》

「おつ、喜多が指名されたか」

「野手転向したんだ」

「まあ打者としての方が凄かったし」

高校通算37本を誇り、フィールディングも良い二塁手兼投手。

世間からは二刀流を期待されたが、本人は野手専念を選んだ。

《第一巡選択希望選手 東京クレモリツ

山田沙也加 三塁手 至誠高校》

「わっ、私!?!」

「そうだよ、おめでどう!」

「ドラーおめでどう」

会場からは大歓声が飛び交った。

本人は自分が1位指名だとは考えておらず、まだ動揺している。

「ほら、インタビューだ」

「山田選手！ クレモリツからの1位指名ですが、今の心境はどうでしょうか!？」

「えーっと、まだ実感が湧いてないです……けど監督の所属していた球団なので、そこは嬉しいです」

東京クレモリツは監督が所属していた球団だ。

今季は96敗という大敗を喫しリーグ最下位となり、打線強化の為に山田を指名した。

「プロ一年目の目標はありますか?」

「目標……1年目からレギュラー奪います! それでいつか三冠王です!」

この瞬間SNSのクレモリツファンは歓喜した。

今の山田の言葉は、入団を決意したと捉えられてもおかしくない。

当人はそんな意図はなくただ単に目標を言っただけであつたが。

4球団競合した米原の抽選となり、4人の監督が運命のクジを引いた。

手を挙げたのは、福岡スナイパーズの監督。

「おー、福岡か」

「柳谷さんと同じところかー」

「またスナイパーズが強くなる……」

福岡スナイパーズはここ数年圧倒的な強さを見せてつけている。

その分レギュラー争いは熾烈だが、米原の性格なら腐らずやっつけていけるだろう。

2巡目の指名はパ・リーグの上位チームから。

《第二巡選択希望選手 広島レッドテールズ

古野晶 一塁手 京王義塾高校》

「古野ドラ2かー」

「まあ全国は出てないからねえ」

「けどあれだけの打力があれば、1位で呼ばれると思ってたけど」

京王の4番古野は広島に2位指名。

一塁手の後継者が欲しい広島にとつて、古野はジャストだった。

その後も複数の球団が指名を終わらせていき、パ・リーグ3位の宮城ファルコンズの指名は。

《第二巡選択希望選手 宮城ファルコンズ

金堂神奈 一塁手 至誠高校

彼女が指名された瞬間、ファルコンズファンは大盛り上がり。

高校から木製バットを使い7割を打った彼女は、高卒ながらに即戦力になれるとの評価をされていた。

「金堂選手、宮城ファルコンズからの指名ですが今の心境は？」

「第一に嬉しいですね、こんな高い順位で指名して頂いて」

「ルーキーイヤーの目標は何ですか？」

「まずは開幕一軍を、そして一塁レギュラーを掴み取ります」

彼女もまた1年目からのレギュラー奪取を誓った。

宮城は打力に難のある選手が多く、金堂のようなタイプは有難いだろう。

「……呼ばれねえ」

「まだ二巡目だし平気だと思おうよ」

「そうそう、翼が指名漏れとかあり得ないし」

高校通算32本、今夏の打率は、381で打点は12。

指名される可能性は十分にあるだろう。

シーガルズ、クレモリツが指名してからの3球団目。

《第三巡選択希望選手 北海道フェンサーズ

青羽翼 外野手 至誠高校》

全員が呼ばれた瞬間、会場は過去最高の盛り上がりを見せた。

フェンサーズはスター選手を多く指名する球団、青羽もその枠に入っていたのかも知れない。

「青羽選手！ 今の心境をどうぞ！」

「指名されてホツとしています、この中で一番下なのはちよつと不満ですけど」

そう言つて記者の笑いを誘う青羽。

SNS上では、「顔は怖いが意外とお茶目」と印象付けられた。

「1年目の目標を教えてください」

「レギュラー奪います、それと二桁本塁打も」

「あつ……私もそれ言えばよかつた」

青羽の発言に山田が小声で後悔を呟く。

隣にいた金堂はその反応に笑つてしまう。

「何笑ってたんだ？」

「いや、沙也加が二桁本塁打の時に私も言えばよかつたって……」

「人の会見中に話すなよ……」

「だって本当にそう思ってたんだもん」

3人は安堵と歓喜が混じった笑顔を浮かべている。

菊池はそれを1人客席で見ている。

(3人ともすごいなー、私も早くプロ行くぞー！)

上位指名された3人を見て更に気合が入った菊池。

彼女がトライアウトを受けるのはこの1週間後だ。

「3人ともおめでとー！」

「ありがとう、悠河も頑張れよ」

「悠河ならぜったい合格出来るからね！」

「楽しんでプレーしてきなよ」

ドラフトが終わり4人は集まる。

指名された3人を祝福する菊池と、その菊池を激励する3人。

「試験って何やるの？」

「二次が守備とか50m、二次が実戦かな」

「守備と50mとか悠河の本領じゃん！ いけるって！」

「合格目指して頑張るぞー！」

たった4人だけだったが円陣を組んで声を出す。

顔を上げた彼女達の笑顔は輝いていた。

ドラフト会議から1週間が経ち、独立リーグのトライアウト当日。

150人の受験者が浦和球場に集まった。

その選手を厳しい目で見つめる元プロの首脳陣。

(緊張するけど、とにかく楽しむ！ 自分らしいプレーを心がけるんだ)

菊池は程よい緊張感で球場入りしていた。

一次試験では50m走と60m送球、シートノックにバッティングが行われる。

まずは50m走から始まり、1人1本を走る。

(やっぱ速い選手多いな、まあ基準さえクリアすれば良いしフォームに気を付けよ)

菊池の番がきて他の受験者と共に走り出す。

風を切って走る彼女のタイムは基準値を大きく上回っていた。

(このタイムなら十分かな、次は60m送球? か)

ただ遠くに投げれば良い遠投とは違い、60m先で構えたグラブ目掛け正確に送球出来るかを見るテスト。

「103番お願いします」

「はいっ!」

菊池の番号は103番、ステップを踏み60m先の選手に向かって投げる。

普段内野で遠投をすることがない彼女、届きはしたが山なりの送球になってしまった。

(もうちょつと力入れても平気かな……次は完璧につと!)

今度は低めの弾道の球になり、最低評価は免れた。

しかし肩の弱さは知られてしまった。

「次はシートノックです、内野は一塁送球とゲッツー、バックホームをそれぞれ2本ずつ

行います」

「はいっ」

シートノック、菊池の本領が発揮できる場だ。

菊池は派手なプレーよりも堅実な守備を見せ、守備力の高さをアピールした。

「ゲッツーいくよー！」

「しゃこーいー！」

セカンド右方向に打球が打たれる。

それを滑り込みながら逆シングルで捕り、グラブトスでショートに渡す。

（やばっ……普通についてものプレーしちゃった）

派手なプレーをしたら怒られるのではないか、菊池はそう考えていた。

しかしこの場合は言葉を発する人間すら少ない。

（トライアウトだから当たり前なんだろうけど、やりづらく）

至誠であれば大きな声が飛び交う中、ノックを受けるのが普通だった。

今はどんなプレーをしても声一つ聞こえない。

それはプレーをする選手達に緊張感を与える。

「最後はバッティングを行います、1人1分半！ 番号順に打席に入ってください」

菊池は遅めの番号なので、素振りをしながら待つていた。すると近付いて声を掛けてくる女性が。

「菊池選手、先程は華麗な守備でしたね」

「ありがとうございます！ けど派手なプレーってしちゃいけないのかなーって……」

「そんな事はありません、高校生であんな綺麗なグラブトスを出来るのはアピールポイントですよ」

「まあ……監督にしごかれたので」

菊池は元から派手なプレーを好んでいたが、グラブトスは出来なかった。

高校入学してから、監督が菊池の守備力を上げようと最初に覚えさせたのがグラブトスだった。

「灰原さんね……結構厳しいでしょ」

「結構キツイですね、けど優しいので」

「……変わったんですね」

「へっ?」

こっちの話です、と謝って他の話に移る彼女。

彼女はクレモリツで監督と同期だった選手だ。

「103番、お願いします」

「はい!」

木製バットを持ち打席で構える菊池。

バッティングピッチャーの投げる球を、次々と打ち返していく。

(これはちよつと無理つと……)

難しい球は見送つて打てそうな球だけ振る。

好球必打が出来ているのが分かるバッティングだった。

「ラスト!」

「はいっ! ……つと、よしよし」

最後は外野フェンスに直撃する良い打球だった。

限られた時間の中で、菊池は最大限のアピールが出来た。

野手全員のバッティングが終わり、少しの時間が空いた。そして遂に迎えた一次試験の合格者発表。

1番から順番に呼ばれていくが、脱落者がどんどんと出ている。

「103番!」

「! やつた……」

菊池は無事一次試験を突破した。

最終的には投手24名、捕手8名、内野が各ポジション2〜4名、外野も各ポジション2〜4名の、計71名が二次試験へと駒を進めた。

(半分も落ちるんだ……そしてこの中からドラフトに掛かるのは、例年20人前後……)

狭き門ではあるが、菊池はそこに挑戦しようとしているのだ。

実戦前にシートノックが再度行われ、捕手の二塁送球タイムの計測などが行われた。

「最後は実戦テストを行います、カウントは1―1、投手野手共に3人の相手と対戦します」

まず菊池はセカンドの守備につく。

投手は緊張している様子で、コントロールはバラバラ。

「打たせていいよ！ 思いっきり投げちゃえ！」

いつものノリで菊池は声を出し投手を励ます。

その声で緊張がほぐれたのか投手は別人のような球を投げ始めた。

2人続けて三振を取ったが、最後の打者にはピッチャー返しを打たれる。

「任せて！ よっ……と」

菊池はセンターに抜けそうな打球を、飛び込んでキャッチ。

そのまますぐ起き上がって一塁に送球しアウトを取る。

「ナイスー」

「ナイスセカン！」

「イージーイージー！」

菊池はその後も安定した守備を見せつつ、打撃でも3打席に立ち1安打1四球と良い結果を残した。

「お疲れ様」

「お疲れ様です！」

「良い動きをしていたね、目を奪われてしまったよ」

「へへっ、ありがとうございます！」

その後も複数の人が菊池に声をかける。

やはりあの守備が注目を集めたのだろう。

「菊池さんはどこの球団に行きたいとかはあるの？」

「特には……けどセカンドが不足してるところに行きたいですね」

「1年目からレギュラーの座が欲しい？」

「です！ それですぐプロ目指すんです！」

独立リーグはあくまでプロへの架け橋、長居する場所ではない。

その為菊池のスタンスは正しいものだ。

「なるほど……2週間後に合格者が発表されるから、HPを見てね」

「はいっ！ 今日ありがとうございますございましたっ！」

こうして菊池のトライアウト挑戦は終わった。

2週間後に彼女の命運が決まる。

第22球 それぞれのやるべき事

時の流れは早いもので、もう12月を迎えた。

神奈川はあまり雪が降らないのが幸いだが、気温は十分低い。

「さっむー！」

「こんな中練習するの〜？ 風邪引くよ〜」

部員はほぼ全員寒さに震えていたが、長野出身で寒さには慣れている青羽は平然としていた。

「今日はただの練習じゃないですよ、これですよ！」

「サッカーだー！ ほら早くアップするよ！」

「菊池先輩サッカー好きすぎでしょ……」

サッカーが好きな菊池は露骨にテンションが上がリ、1人アップを始めていた。

彼女は無事トライアウトに合格し、不安が無くなった状態だ。

「監督が居なくても、全力でやるよー！」

「おーー！」

監督は現在スカウトをしに滋賀まで行っている。

それが終われば和歌山に向かい、後日更に愛知や埼玉にも赴く。

神奈川に戻ってくるのは暫くしてからだ。

スタミナを鍛える必要のある浜矢はリベロに、どんな場面でも冷静な判断が求められる洲寄はミッドフィールダーとなった。

菊池は走り回りたいとの理由でフォワード、鈴木と伊藤は捕手だからとの理由でキーパーをする。

「今年もよろしくお願いします」

「いいよー、うちらも部員少ないし」

今年もサッカー部に頼み、この練習を組み込んだ。

サッカー部も3年生が引退して部員はたったの15人、紅白戦は出来ない。

「ウチって全体的に少数精鋭好きだよね……」

「入学者が少ないとも言おう」

「もつと人気出て欲しいんだけどな……」

お互い部員が少ない事を愚痴りながらも、理由は分かった様子。

そんな彼女らを尻目に試合が始まる。

浜矢と菊池が動き回り場を引つ掻き回し、洲崎がその動きを見て周囲に指示を出す。更にその後ろからGKの伊藤が、洲崎の目の届かない範囲のカバーをする。

(やばい、ディフェンスラインが上がってる……)

「灯、耀下がって！ 浜矢先輩はサイドから攻めてください！」

「オツケー！」

(こうしていると周りの状況がよく把握できる……そんな中でどれだけ冷静な指示が出るか、それが大事なんだ)

どんな場面でも焦らないメンタルを身につける、その為に相手側にはサッカー部を多く入れ敢えて実力差を付けた。

その甲斐もあり試合終盤になると、洲崎の采配の精度は上がっていき、少しのピンチでは焦らないようになっていた。

前後半45分、選手交代は無いがロスタイムも含めて行い100分間試合を行った。

「へー……疲れた……」

「おつかれ伊吹ちゃん」

「せんしゅーありがと」

「全員ちゃんとストレッチして下さいねー」

水分を補給して一息ついてからストレッチをする。

怪我の予防や疲労を残さない為にも、運動後すぐにした方がいい。

浜矢達が体力作りに励んでいる最中、順調にスカウト活動が行われていた。

まずは滋賀の守備職人に声を掛ける。

「至誠……！ 鈴井さんがいる学校ですね!？」

鈴井のファンだという彼女は、この感じならおそらく入学してくれるだろう。

続いては和歌山のヒットメーカー。

「本当に私ですか？ 人違いじゃ……」

自分に自信のない名門チーム出身者は、後日連絡をしようと云ったが手応えは十分あった。

更に愛知の中堅ガールズの4番打者は。

「本当ですか!?! 嬉しいです!」

初めての県外からのスカウトに、喜びを爆発させていた。

そして埼玉のサブマリンと呼ばれた投手。

「へえ……面白そうですね、色々お話を聞かせて下さい」
育成プランの話を持ち出すと食い付いてきた。

最後は神奈川にいる強打の内野手。

「……良いですね、この条件飲みますよ」

学校側から提示された入学条件に、彼女は口元を綻ばせた。

スカウト出来たのは5人だが、その5人全員に手応えがあった。

監督は千秋にスカウト成功のメッセージを送る。

《全員来てくれそうだ》

《良かったです！ それとみんな監督のこと待ってますよ》

《明日から練習に参加するから、待っていてくれ》

そう返信して監督は1週間ぶりに自宅に帰る。

横浜の1LDKマンション、一人暮らしには丁度いい広さだ。

久しぶりの自宅に安心感を覚えながら就寝する。

翌日ついに監督が練習に参加した。

「1週間ぶり、ちゃんと練習してたかー？」

「監督ー！ そりやもうばっちりですー！」

一斉に監督の周りに集まる部員達。

元プロという事もあるが、その性格から部員からは愛されている。

「スカウトどうでした!？」

「大成功、多分全員来てくれる」

「おおー！ これで来年の至誠も安泰ですねー！」

1年生は特にスカウトの結果が気になるようで、根掘り葉掘り聞く。

どんな選手が入ってくるのか、性格はどんな子か、などなど。

「……で、洲寄は何やってるんだ？」

「メンタルトレーニング、ですかね」

座禅を組んで悟りを開いている洲寄。

これはメンタルトレーニングの一環だと千秋は言う。

「無心になるのって意外と良いんですよ、それにこうやって繰り返しやってあげばいざという時に役立つと思います」

「ルーティンみたいなものか」

今こうしておけば、ピンチの場面でも目を閉じて心を落ち着かせられるかも知れない

という狙い。

「神宮と浜矢はどうだ？」

「2人とも結構良さそうですね、伊吹ちゃんは最近インターバル投球で70球投げられるようになりましたし」

インターバル投球とは、何球かを投げ3分休憩を繰り返すトレーニングだ。

休憩を一度挟むことによつて、試合と同じ感覚で投げる事ができる。

「普通の投げ込みの70球と、試合での70球は違いますからね……良い傾向だと思います」

「神宮はシャドーやつてたんだっけ？」

「はい、最近は狙つてストライク投げられるようになってますよ」

「それなら来年はもつと期待できるな」

変化球は曲がりが大きくキレがあり、ストレートも球威があつて強打者相手にも通用する。

ただ制球が悪すぎた為に失点してしまうのだ、つまりストライクを投げられるようになった神宮は強い。

「野手陣はどうだ？ 特に外野コンビは」

「まだまだ要改善つてところですかね、良くなってはきてますけど……」

打撃練習をしている岡田と荒波の方に目をやる。

「確かにまだ未熟ではあるけど、スイングは良くなってきてるな」

「飛距離も前より出てますよ、早紀ちゃんは内野の頭越せるようになりましたし」

基本的にゴロか三振での凡退が多かった岡田。

しかし今は打球を外野まで運べているのは、大きな進歩だと言っている。いいだろう。

「三好とかはどうだ？」

「耀ちゃんは速球打ちの練習してて、捰ちゃんはキャッチングとリードを美希ちゃんに教えて貰ってます、灯ちゃんは選球眼を鍛えていますよ」

速球に対応出来るようになれば打率の上がる三好、捕手としてのレベルアップを図る

伊藤、難しい球に手を出さないように特訓している石川。

3人とも自分の弱点を把握し、自ら進んで練習をしている。

「これは来年は全国制覇も狙えそうだな」

「全員入ってきてくれれば、ですけどね」

「だな、後はアイツをどう手懐けるか……」

「ああ……あの子ですか」

来年のスカウト組の中には、1人性格に難のある選手がいる。

「事情が事情なだけに仕方ないけど、上手く馴染めるかな」

「美希ちゃんに任せれば平気そうですね……」

「反発されそうなんだよな、そういうのは逆に浜矢のが得意そうだ」

「確かに……舐められても茶化す事はありませんけど、ちゃんと叱りますもんね」

多少失礼な事を言われてもある程度ならネタとして消化できる浜矢。

しかし神田のように度が過ぎれば、ちゃんと怒りを露わにできる。

例の彼女には1番いい相手かも知れない。

「実力は十分だし、本心を出してくれるような環境を作らないとな」

「心の傷って何年経っても癒えませんかからね……ゆつくり時間をかけてケアしていきましよう」

「先生……ですよね、それ位してもお釣りが返ってくる程の価値はありますからね！」

彼女の實力は申し分ない、もし改心させることが出来れば大きな戦力となる。

その為に監督と千秋、小林の3人は手を組む事となった。

第23球 懐かしの3人

年末年始の束の間のオフを満喫した部員は、多少の気だるさを感じながらも練習に取り組んでいた。

「帰省組は大変そうだよな」

「久しぶりに会うと、親がいつぱいご飯作るんですよ……」

「ああ……だからちよつとプニツてるのか」

「言わないで下さいよ！ 頑張つて落としますから！」

神宮はいわゆる正月太りをしており、頬の辺りが以前より柔らかそうに見えた。

「伊吹先輩は変わってないというか、寧ろ筋肉付きました？」

「まあ12月入ってからバイトしてたから」

「へー、どこでやってたんですか？」

「賄い出るから焼肉屋」

浜矢は12月から年末年始まで、焼肉屋でバイトをしていた。

給料を稼ぎつつ賄いで食費も浮かせる、まさに一石二鳥だった。

「けど徐々に真理のお母さん達にも会えたから楽しかったです！」

「そっか幼馴染か〜いいなあ……」

「美希先輩と美月先輩と仲良いのも、羨ましがられると思いますよ」

「確かにな〜、あの人気ありそうだもんな」

千秋は可愛くて鈴井は美人と言われる事が多い。

そんな2人と仲睦まじい浜矢のポジションは、羨ましがられるだろう。

「でも伊吹先輩も結構人気ありますよ」

「マジで!? うわー嬉しい……」

「蒼海大戦のピッチングがカッコ良かったって評判ですよ!」

「まああの試合の流れだとそうだよな……」

後輩が打たれた直後に登板し、相手を寄せ付けない投球を見せた。

その姿は特に年下には格好良く映っていた。

「てか三好は福岡まで帰ったの? 大変じゃない?」

「大変やったけど楽しかったです」

「……やっぱ帰省すると方言戻るんだな」

「仕方ないんです……! 周りが皆博多弁しか喋らないんです……」

地元に戻省すると、休み明けに方言が出る事は多くある。

三好も例外ではなく博多弁を隠すのに苦労しているようだ。

「ほらそこサボらない！」

「げっ、バレた！ 今すぐやりまーす！」

「じゃあ私はカーブの精度上げてきます」

先程まで練習していた三好はともかく、話し込んでいた浜矢と神宮は一目散にマウンドへ向かう。

浜矢はインターバルで実戦を意識した投げ込みを、神宮は緩急を付けるためにカーブの投げ込みをする。

「休み明けでちよつとだらけてるな……」

「まあすぐ感覚取り戻してくれますよ、それに今日はあの人達が来ますから」

「だな、流石にアイツらが来ればやる気も出るか」

その話をしたタイミングで、グラウンドに見覚えのある3人組が現れた。

「おっ、きたきた！ 久しぶりだな！」

「お久しぶりです、ここは変わってないですね」

「雰囲気も良いし、部員も増えましたね」

「なんか安心する〜」

現れたのは中上、柳谷、糸賀の卒業生3人だ。

自主トレの期間になり母校に戻ってきたのだ。

「ほっ、本物の柳谷さん……!」

「捰?! だ、大丈夫?」

「大丈夫じゃない……捕手として憧れてた人がこの場に全員揃ってるんだよ!」

監督、鈴井、柳谷という捕手として高い評価を得ている3人がこの場にはいる。

しかも1人は元プロ、そしてもう1人は現役という大物ぶり。

「私のファン? なら後でサインあげようか?」

「い、いいんですか……!?! ぜひお願いします!」

「私の捰が遠くに行ってしまう……!」

「別に灯のではないでしょ……え、違うよね?」

三好の問いに違うよー、と樂觀的に答える石川。

単に幼馴染が自分には見せた事のない顔をしていたのが、気に食わなかった様子。

「灯も好きだから安心して!」

「へへー、なら許す!」

「そのやり取り何回も見た記憶あるけど大丈夫？ 灯騙されてない？」

「いや好きなのは本当だから」

その言葉に対し、好きと言いながら伊藤に抱きつく石川。

そんな2人を呆れた顔で見る三好。

「いーぶき！ 夏大活躍だったじゃーん」

「中上先輩のお陰ですよ……色々変化球も教えてもらいましたし」

「先輩って呼ばれるの久しぶりだなー、前は中上さんって呼んでたし」

「引退してる人に先輩って呼ぶのはどうかと思つて……今はつい呼んじやっただけです」

私は別にどっちでもいいんだけどね、と中上。

その一方で外野組も話していた。

「外野が鉄壁になつて凄かったなー、2人ともいい守備するね」

「まあ我々守備と脚しか誇れないので……」

「あとは肩ぐらいしか……」

「私も入学したての頃は似たようなもんだつたし、2人もすぐ打てるようになるよ！」

外野コンビは糸賀とすぐに仲良くなつていた。

3人ともコミュニケーション能力が高い人間だからだろう。

「そうだ監督、アレ届いてないですか？」

「アレって何だ？」

「変化球も投げられるピッチングマシン、3人で買って寄付したんですけど……」

「まだ来てないな、というかそんなの買ってくれたのか？　ありがとう」

3人曰く、部全体のレベルを上げるために購入したとの事。

「それと恩返しですかね」

「私らは監督が居なければこんな大成してなかったと思いますし」

「特に私は至誠に来てなかったら、ずっと打てないままだったと思いますし」

「私はただダイヤの原石を選んだだけだ、私じゃなくても大成してたと思うぞ」

ダイヤの原石をダイヤにするのには技術はいる。

監督は采配には自信は無いが、育成に関しては胸を張って得意と言える。

「プロ野球ってどんな感じなんですか？」

「レベル高いよ、私なんて2軍にいた方が長かったし」

「私は開幕一軍だったけど、一度落ちてからはシーズン終盤まで戻れなかったな」

「私は夏に体力尽きて落とされた……」

活躍の度合いはそれぞれ違うが、それでも苦戦したのは共通している。

この中で1番一軍に帯同していた期間が長かったのは。

「中上先輩が1番活躍してましたよね」

「野手と投手なら、投手の方が通用しやすいからな」

「相良と同時に落とされたのは笑ったなあ」

「アレは何だったんだろうね、まあ陽菜だけ一軍つてのも負けた気がして嫌だったけど」

(……名前で呼ぶようになってる、仲良くなったんだなあ)

これを言うと恥ずかしがりそうだからと、浜矢は口を閉ざした。

実際この2人は、あの時の煽り合いが嘘のように仲良くなっている。

プライベートで2人きりで遊びに行き、その様子をSNSにアップする程だ。

「まあ誰ももう新人賞の資格ないんだけどね」

「私が夏に落ちてなければ多分、って感じだったかな」

「何だかんだ6勝してるもんな」

中上は6勝5敗で防御率は3.86、柳谷は41試合に出場し102打数24安打、

打率.235で3本16打点。

糸賀は38試合に出場し86打数20安打、打率.233で1本10打点。

3人とも高卒ルーキーとしては中々の活躍をしたと言つてもいい。

「来年はレギュラー定着出来そうか？」

「キャンプで調子良ければ先発ローテ確定です」

「良いなー、私のもつと頑張らなきゃ無理かも」

「私はもう少し打てれば多分一軍には居れます」

全員来季のレギュラー奪取に向け、気合が入っている模様。

「柳谷先輩！ 対戦してくださいよ」

「おっ、いいね」

「鈴井ー、キャッチャー頼んだ」

「仕方ないなあ……」

浜矢が柳谷との勝負を申し出る。

（来年こそ一番を取るために、今自分がどれだけ出来るか知りたい）

（久々に伊吹の球打つな……あのフォークを打席で見えたかったんだ）

それぞれの迷惑を胸に、全員が持ち場で構える。

高校時代から少し変わった打撃フォームだが、タイミングの取り方は変わっていない

い。

(出し惜しみはしない、最初からフォークいくよ!)

(了解、さあ柳谷先輩……これが私の魔球フォークですよ!)

初球から魔球と呼ばれたフォークを投じる。

球の軌道を見極める為に、手は出さずに見送る。

「これがスライドフォークね……良い球だね」

「ありがとうございます、モノにするまで頑張ったんですよ!」

「だろ、これをコントロールするのは難しそうなのによくやったよ」

(軌道は分かった、次からは打ちに行くぞ)

(相変わらず凄い集中力……安易にストライクは入れられない)

ギリギリストライクにならない、際どいコースに投げていく。

しかし柳谷はそれに釣られずカウントは1―2。

(釣られないか、ならここは勝負するしかない。最高の直球を頼むよ)

(任せて、柳谷先輩相手にも空振りとってやるよ!)

インハイに投げられた豪速球は風を切り裂きながら前へと進む。

柳谷のバットも空気を裂ながらボールを捉えようとするが、空を切った。

「ノビが更に増してるね、流星は伊吹」

「まあ鈴木やら監督やらにだいぶしごかれたんで……」

「そのお陰で今空振り取れたんだから感謝してよね」

「分かってるってばー」

（さて、並行カウントか……柳谷さんは追い込まれたら多少のボール球は全部振ってくる、ここからはミスは許されないよ）

（オーケー、成長した姿を見せてやる）

内角のスライダーは右方向へのファール。

外のボール球のカーブも流されるがファール。

低めのストレートは大きく外れてフルカウント。

（まだ見せてないツーシームでも良いんだけど、ストレートの後に投げるのは怖い……なら最後はあの球しかない）

最後の勝負球として投げられたのは、初球と同じ内角へのスライドフォーク。

柳谷はそれを待っていたと言わんばかりに振り抜く。打球は鋭く低い弾道でライトを襲う。

「これは……」

「荒波なら捕れるかな？」

「シフトにもよるけど、定位置だったら捕れるね」

野手が守りについてなかった事もあり、打球はグラウンドに落ちはした。

しかし荒波であれば捕れるとの判定が下り、結果はライトライナー。

「まさか打ち取られるとは……あのフォーク凄いね」

「その分コントロールは難しいし、雨の日は投げられないんですけどね」

「欠点はあるけど、それを持ってしても使うメリットのある球……まさしく魔球だな」

今では浜谷伊吹の代名詞となっているスライドフォーク。

試合中の写真から真似をしようとする選手もいるらしい。

「後輩の球も打てないんじゃないや、まだまだ一軍は遠いな！ もっと投げてくれ」

「柳谷先輩……分かりました！ いくらでも抑えますよ！」

「言ったな？ 私は何度も打ち取られはしないぞ」

「何回か打つたら私にも代わってよねー」

打ち取られた悔しさから奮起した柳谷は、この後浜矢を打ち砕く。

糸賀も打席に立って洲崎や神宮に投げてもらい、中上も今の至誠ナインを相手に投げ込んだ。

「いやー、楽しかった！」

「至誠に来ると安心してはしやぎすぎちやうね」

「けど来季への気合は充填されたな」

旧3年生トリオは満足した様子だ。

その対戦相手となった現部員も、プロを相手に出来たことがいい体験になったようだ。

「私たちの1個下がもう入ってくるんだもんね……負けてられないね」

「まあ誰とも同じチームにはなれなかったけど」

「でも殆どパ・リーグだから戦えますよ」

新旧3年生のプロ入りした6人は、山田以外はパ・リーグの球団に入った。

「早く一軍上がって戦おうね、絶対二軍では戦わないから！」

「開幕から一軍に上がってみせますよ」

「交流戦楽しみにしてて下さいね！」

「早くシーズン始まって欲しいな」

先輩後輩対決が実現される日は近い。
それを知らない彼女達は、いつか来る日を想像して胸を躍らせている。

第24球 別れの季節

今年もまた別れの季節がやってきた。

先輩の第二ボタンを受け取る者、卒業をして欲しくないと泣きじやくる者、全く涙を流さない者もいる。

その一角で集まった、我らが至誠野球部は。

「卒業おめでとうございます」

「ありがとう、今年は頑張つてね！」

「必ず全国制覇してみせます」

浜矢は菊池と今年の事について話していた。

2人の目に涙はないが真っ赤に充血していたことから、先程まで泣いていた事が分かる。

「1年しか一緒にいけないなんて寂しすぎますよ……」

「自主トレの時期になったら戻ってくるから、ね？」

「うう……キャプテン!!」

「わっ、もう……身動き取れないよー」

石川と荒波が金堂に抱きつく。

今の1年生は3年生とはたったの1年しか一緒に居ることができない。

キャンプでいなかった期間を考えれば1年未満だ。

「美希、チームは任せたよ」

「金堂先輩に負けないくらい、頼れるキャプテンを務めてみせます」

「信頼してるよ」

新旧キャプテンが優しい握手を交わす。

（美希のこの瞳、これなら安心して任せられるね）

強い意志が灯った瞳をしている鈴井、今の彼女は既にキャプテンのオーラが出ている。
た。

「打線が心配だけど、まあお前なら平気か」

「任せてください！ 守備だけじゃなく打撃でも貢献しますよー！」

「私もある程度は打てるように頑張ります！」

「打撃ばかりやって守備と走塁が疎かにならないようにな」

青羽は外野コンピに念を押しておいた。

「打撃に力を入れすぎて、1番の売りである守備と走塁が下手になってしまつては意味がない。」

「投手陣マジで頑張りなよ、優勝できるかどうかは投手に掛かつてるっばいし」

「今の私に抑えられない相手はいませんよ！」

「私も、少しは度胸付いた気がします」

「ストライク入るようになったんで無敵です！」

山田が投手陣を激励する。

浜矢はこの2年で自信がつき、洲寄はトレーニングの結果メンタルが少し鍛えられ、神宮も狙つてストライクを投げられるようになった。

今の彼女達に加え、新入生にも1人投手がいる事を考えると投手陣は安泰だろう。

「やっぱ2、3年は楽しかったな」

「2年で全国行つて、3年は準優勝だもんな」

「神奈川で一度でも優勝したつてのは自信になるよね」

「私もトライアウトの時それ言われたよ！」

卒業する4人は高校生活を振り返っている。

1年生の頃は連合チームで出番も少なかったが、2年になってからはスタメン。

県優勝と準優勝を果たした2年間は、充実したものとなった筈だ。

「監督がスカウトしてくれたおかげだね」

「だから私は何もしてないって、中学から有名だったから獲ったただだよ」

「でも監督が全員獲らなかつたら、私達一緒の高校じゃなかつたんですよ！」

「そうそう、だからそこも感謝してますよ」

この4人を巡り合わせたのは他の誰でもない、監督だ。

出身もポジションも性格もバラバラだが、それが上手い具合に噛み合った。

初めこそぎこちなかったが今はすっかり親友だ。

「この景色も最後かー……寂しいな」

「また1年後だな」

「けど1年も皆と会えないのかぁ」

「みんなが居るのが当たり前だったからね、キャンプの時とかも変な感じしたよ」

全員それぞれ違うチームへと入団する、次に会う時は敵同士だ。

その感覚にまだ慣れていない彼女達。

「もしホームシックになったら連絡してきてもいいぞ?」

「恥ずかしいんですけど」

「えっ、連絡していいんですか!? やったー!」

「監督にいったばい電話しよー!」

「ホームシックになつたらつて言つてるだろ……」

監督の提案を青羽は遠慮したが、山田と菊池は電話する気満々だ。恐らくホームシックになつてもならなくても連絡をするだろう。

「神奈も何か言つてやれよ」

「んー? 私も連絡しようかな」

「えっ」

「だつて監督からアドバイスとかも貰えるかもしれないし」

（確かにそれは良いけど、卒業してから頼りすぎるのはな……）

青羽は卒業した後も監督を頼る事に、気が乗らない様子。

「別に迷惑じゃないからな、もし困つた事があつたら遠慮なく聞いてくれよ、私は元プロなんだから」

「……そう、ですよね」

「そうそう! せつかくこう言つてくれてるんだから!」

「2人はもつと遠慮つて言葉を覚えろよ」

青羽の考えを察して自分を頼るように促す監督。

その心遣いを理解した青羽は、少しくらいは連絡しようと思った。

「というか普通に私も寂しいし、試合観れないから近況報告くらいは連絡くれ」

「監督も寂しいんですね」

「そりゃあな、毎年見送ってはいるけどやっぱり慣れないよ」

「なら初ヒット打ったらメールしますね！」

「じゃあ私は初ホームラン！」

なら私はどうだ、なら自分はこうだと話が広がる。

この賑やかさが無くなり、また新たな風を吹き込む者が入ってくる。

それが悲しくもあり楽しみでもある。

「金堂、青羽、山田、菊池……4人とも卒業おめでとう」

『ありがとうございます！』

「プロはレベルが高校とは段違いだ、それはあの3人の成績を見ても分かるだろう」

高校では敵なしとまで思えたあの3人ですらも、ルーキーイヤーは苦戦を強いられた。

それほどまでにプロ野球とはレベルが高いのだ。

「けど全国を経験して精神面でも技術面でも鍛えられた筈、その経験を活かして、どんな良い事を吸収して活躍してほしい」

「新人賞取っちゃいますよー!」

「なら私と狙おうかな」

「じゃあベストナイン取っちゃおー!」

山田と青羽は各リーグの新人賞を、菊池は独立リーグのベストナインを目標に掲げた。

何か目標言わないと、そんな視線を感じた金堂が口にした言葉は。

「それなら私は最多安打か首位打者を」

「目標高すぎじゃ……いや、神奈なら出来るかもな」

「神奈なら無理じゃなさそうって思わせちゃうの凄いよね」

「高卒ルーキーで最多安打とか前代未聞でしょ」

まさかのタイトル宣言、しかも首位打者もしくは最多安打と豪語した。

今まで高卒ルーキーが首位打者を受賞した事はない。

それでも金堂ならやってくれるのでは、そう思わせるだけの説得力が彼女にはあつ

た。

「一番木製の扱いには慣れてるだろうし、3割は余裕かもな」

「監督の成績越しても平気ですか？」

「勿論、寧ろどんどん越してけ！」

監督も近年の高卒ルーキーとしては、トップクラスの成績を残した。

それを越えられる選手がいれば野球界は大盛り上がりを見せるだろう。

「とにかくだ、これまで作られた記録なんか全部ぶち破ってやれ！ 至誠の卒業生なら出来るだろ？」

「当たり前ですよ！ 最多盗塁してみせますよ！」

「本塁打記録なんて塗り変えてみせますよ！」

「私も、最多安打記録を塗り替えます」

「……じゃあ私は打点記録」

各々が得意分野で勝負する事を表明した。

菊池は盗塁、山田は本塁打、金堂は安打、青羽は打点。

「それだけやる気なら実現出来るだろうな……最後に一言」

監督はそう言って、涙を堪えるように空を見上げた後震えた声で呟く。

「……他の誰よりも輝いてこい！　そして、胸を張ってここに帰ってこい！」

『ハイッ！』

それが監督の4人に向けられた最後の言葉だった。

誰よりも輝いて活躍して。

そしてまた1年後に実績を引っ下げて帰ってこい。

後輩から尊敬されるような選手となって戻ってこい、それが監督がどうしても伝えたい事だ。

「……花吹雪」

その一言は誰が呟いたのだろうか。

次の瞬間桜の花びらが吹雪くように空を舞った。

まるで新たな人生の門出を祝福するかのよう。

「よしっ！　誰が1番最初に一軍に上がれるか勝負だ！」

「翼言つたね!?　私が1番だよ！」

「ふふっ、私が最初だよ」

「独立リーグは一軍とかそういう概念無いんだけど……まあいいや！　レギュラーの座

を奪うのは私が最初ー！」

最後まで元氣よく、賑やかに終わった彼女達。

その姿を見た後輩はこの先輩が帰ってきた時に、失望されないような成績を残そうと決意した。

卒業式から2週間以上が経過した。

春の選抜真っ只中、至誠は出場権は無いので他校同士の試合を観ることしか出来ない。

「鈴井、せんしゅー！ 祥雲負けたってマジ!?」

「伊吹ちゃん知らなかったの?」

「いや、速報見たけど映像は見てないから……神田打たれたの?」

祥雲は選抜準々決勝で敗れた。

新チームというのは緊張や経験不足から守備の乱れが多いが、祥雲は毎年安定した守備を見せていた。

その為毎回のように優勝候補に挙げられる高校だったが。

「打たれたのは2番手、神田はライトで出場して全打席敬遠されたんだよ」

「ぜ、全打席敬遠! 相手度胸あるな……」

「すごいブーイングされてたよね、ルール違反はしてないんだけどねえ」

勝つための戦略として、チーム一の強打者を敬遠するのはおかしい事ではない。

しかし高校野球では「高校生らしくない」との理由で敬遠を批判される。

「そのチームは次の試合平気だったの?」

「普通に負けてたよ、けどあれは多分ブーイングとか関係なく実力で」

「元々最近は低迷していた学校だったからね、準決勝まで進めただけで凄かったんだ」

祥雲やディーバ程の有力選手はいない高校だった。

その為敬遠策を選ばざるを得ない状況だったのだ。

「というか普通に神田以外が打てば勝てたし、敬遠に文句言うのは違うよね」

「それは……言つていいのかな」

「ウチで青羽先輩敬遠しても、山田先輩と私が打てるでしょ? 祥雲はそれが出来な

かったつてこと」

祥雲はどちらかと言えば守備型のチーム、他の打者は抑え込まれてしまった。

「私の意見としては敬遠した後、しっかり抑えられた投手は褒めるべきだと思う」

「私も同じ意見だなあ、良いピッチングしてたよね」

「ふーん……でも神田は抑えられないのか」

「腹立つけど神田は凄い打者だからね」

まだ神田とこの2人の間のわだかまりは解消されていない。

凄い選手だとは認めているが、人間性は認めたくない。そんな事を神田に対して思っている。

結局この選抜は、1番のライバルが居なくなつたデーバが優勝旗を手にした。

「来年こそ至誠が夏春連覇するぞ！」

「その為にはまず夏の大会勝ち抜かないとね」

「2人が居れば大丈夫だよ！ それに私と監督で新入生をみっちり鍛えるから」

笑顔でそんな事を話す千秋に、苦笑いを返すことしか出来ない2人。

千秋と監督のみつちりは、そんなレベルでは済まない事を知っているからだ。

「とにかく私がエースになって、全国制覇まで導いてやる！」

「言質はとつたよ、なら私も最高の捕手を務めるよ」

「だつたら私は全国1のマネージャーになるね！」

3人が来年こそは全国制覇をすると、手を重ねて声を出す。

たった3人だけの新3年生、彼女達がチームを引っ張っていく事となる。

シリーズン3

キャラ紹介 (至誠)

浜矢^{はまや} 伊吹^{いぶき} 3年4組 投手 右/右

164cm / 56kg 12月22日生まれ 神奈川県出身

至誠が誇る元初心者エース。

神田や飛鷹等の他校のみならず、洲崎という校内でのライバルの出現により急成長を遂げた。

ノビのある速球と魔球・スライドフォークの組み合わせで次々と三振を奪っていく。3年生としてチームを引っ張ろうと日々頑張っている。

鈴井^{すずい} 美希^{みき} 3年5組 捕手/遊撃手 右/右

160cm / 55kg 6月22日生まれ 神奈川県出身

攻守の要となった守備型正捕手。

チーム事情により長打力をつけた事により、打率を多少犠牲にして長打が増加した。

正捕手というだけでなくキャプテンも兼任する事から、負担の大きさを心配されが

ち。

キャッチングの上手さは高校随一。

千秋せんしゅう 美月みづき 3年4組 マネージャー 左/両

154cm/47kg 10月22日生まれ 神奈川県出身

年々権力を増していくマネージャー。

3年目となる今年はスカウト選手を決める会議にまで参加した。

両打ノックは変わらずだが、筋肉が増え打球速度が速くなったとの噂が。

可愛い見た目と裏腹に威圧感のある笑顔も相変わらず。

栗原くりはら 美央みお 1年D組 一塁手 右/右 307号室

161cm/55kg 1月8日生まれ 愛知県出身

ショートカットの茶髪と赤色の少しつり目

得点圏に強いホームランバッター。

明るい性格だが実はメンタルが少し弱め。

守備走塁面で課題が残るが、素直な性格なので周りのアドバイスを受け入れやすく

と成長中。

進学理由は県外からの唯一のスカウトだったから。

茶谷 ちやたに 佳奈利 かなり 1年D組 二塁手 右／右

160cm／55kg 11月17日生まれ 神奈川県出身

セミロングのピンク髪と緑色のつり目

栗原と争う将来の4番候補。

守備範囲もそこそ広く、強肩の持ち主だが送球精度に難がある。

メンタルは強いがチャンスの場面には弱い。

親が騙されて借金を抱え、施設に預けられそれ以来人間不信になった。

進学理由は条件が良かったから。

川端 かわぼた 渚 なぎさ 1年B組 三塁手 右／左 307号室

156cm／50kg 10月16日生まれ 和歌山県出身

肩までの茶髪と青色のタレ目寄りの目

和歌山のヒットメーカーと呼ばれた選手。

パワーこそ無いがバットコントロールは素晴らしい。範囲は狭いが安定感のある守備が売り。

1年生の中では常識人ポジション。

進学理由はわざわざ自分をスカウトしてくれたから。

上林 真希^{かんぼやし まき} 1年B組 遊撃手 右/右 306号室

157cm/51kg 4月14日生まれ 滋賀県出身

茶髪のポニーテールで茶色のつり目

範囲は広くはないが、いざという時には思い切ったプレーが出来る。

捕球の上手さとパンチ力のある打撃が武器。

よく三好と言いつているがお互い嫌いではない。

進学理由は鈴井と一緒にプレーしたいから。

三好 輝^{みよし ひかる} 2年B組 左翼手/遊撃手 右/両 209号室

153cm/50kg 6月7日生まれ 福岡県出身

今年から外野手に転向したくせ者バッター。

選球眼の良さとカット打ちの技術が更に磨かれ、くせ者ぶりにも磨きがかかった。

上林に追いやられた事に思う所はあるが、外野転向自体は悪く思っていない。

岡田^{おかだ} 早紀^{さき} 2年D組 中堅手 右/右

155cm / 50kg 7月6日生まれ 千葉県出身

至誠が誇るセンターの魔術師。

守備と脚は相変わらず全国でも飛び抜けているが、打撃も相変わらず苦手なまま。しかし1年生の頃よりは打撃も上達している。

荒波^{あらのなみ} 友海^{ともみ} 2年D組 右翼手 左/左 209号室

156cm / 53kg 1月25日生まれ 神奈川県出身

打撃が成長した好守のリードオフガール。

速球にもある程度対応出来るようになり、1番打者としての起用が多くなった。今後の成長が1番期待されている選手。

洲崎^{すざき} 真理^{まり} 2年B組 投手 左/左 208号室

166cm / 58kg 9月27日生まれ 東京都出身

メンタルが改善されてきた次期エース。

変化球のキレと制球の良さに磨きをかけ、更なる好投が期待される。

打てないが小技と脚の速さはそこそこ。

神宮は小学生の頃の幼馴染で、神田と因縁がある。

神宮 空 じんぐう そら 2年D組 投手 右／右 2008号室

158cm／55kg 2月7日生まれ 東京都出身

荒れ球を駆使するサイドスロー投手。

最近はコントロールが良くなってきたおり、打ち取れる確率が上がってきた。

しかし時々四死球を連発する事もある。

洲寄とは小学生の頃の幼馴染。

伊藤 隼 いとう けい 2年6組 捕手 右／右

157cm／54kg 4月23日生まれ 神奈川県出身

強肩が武器の将来性ある次期正捕手。

打撃とキャッチングの精度が課題。

2年生の中では常識人だが、ツツコミを放棄する事がある。

石川とは生まれる前からの幼馴染。

佐野 夏輝 さの なつき 1年3組 一塁手 左／左

158cm / 53kg 11月28日生まれ 神奈川県出身

黒髪のハーファアップと琥珀色のつり目

確実性が課題のロマン溢れる長距離砲。

中学までは家の都合で剣道を習っていたが、高校からは自由になり念願の野球部へ。
見た目は賢そうだが、実は頭は悪い。

進学理由は通学時間と学力。

石川 いしかわ 灯 あかり 2年4組 二塁手 / 他 右 / 左

158cm / 54kg 7月10日生まれ 神奈川県出身

代打に代走、守備固めと様々な場面で活躍するが、便利すぎてレギュラーになれない。

伊藤のおかげで実は頭は悪くない。

今年から襟足を金髪に、それ以外は黒に染めた。

伊藤とは生まれる前からの幼馴染。

白崎 しろさき 杏紗 あずさ 1年3組 三塁手 右 / 右

162cm / 58kg 8月20日生まれ 神奈川県出身

セミロングの茶髪と緑色のタレ目

至誠最高と呼ばれるバツター候補。

長打力とミート力、得点圏の強さが素晴らしい。

中学時代に誰も練習に付き合ってくれず守備と走塁が苦手。

進学理由は近くて雰囲気良かったから。

牧野 まさの ゆう 1年A組 投手 右/右 306号室

160cm/54kg 8月17日生まれ 埼玉県出身

茶髪のローポニーテールと緑色のつり目寄りの目

”浮き上がる” ストレートが武器のアンダースロー。

精密機械と呼ばれる程の制球力の持ち主だが、球は軽く左打者には弱い。

持ち球はカーブ、スライダー、チェンジアップ。

頭が良く唯一のA組だが、人をからかう事が好きな一面もある。

進学理由は育成プランと起用法の一致。

春宮 はるみや ゆい 優維 1年3組 マネージャー 右利き

154cm/45kg 4月29日生まれ 神奈川県出身

茶髪ロングでピンク色の猫目

全く野球を知らないが、選手がカッコいいからという理由で入部したマネージャー。入部した以上は真面目にやるといった考えの持ち主。学年1の美少女として校内で有名。

進学理由は通学時間と学力。

灰原 はいばら 麗衣 れい 監督／捕手 右／右

168cm／64kg 5月25日生まれ 神奈川県出身

元東京クレモリツのドラフト1位捕手。

現在は持ち前の分析力と指導力で至誠の監督を務めている。

厳しい面ばかり注目されがちだが、誰よりも部員の事を考えている人。

現在もプロで活躍している八神と神田とは同年。

小林 こばやし 周子 しゅうこ 家庭科教師 右利き

160cm／53kg 10月1日生まれ 東京都出身

浜矢達の担任を務める美人教師。

最近では野球についてもだいたい詳しくなくなり、千秋や灰原の会話にもついていけるようになった。

以前の自分と同じ立場の春宮に、優しく野球用語を教えている。

第1球 新たな風

2018年4月2日。

「ここ至誠高校に新たな風が現れる1日だ。

「またせんしゅーと同じクラスだー!」

「また野球部で纏められたんだねえ」

「てことは担任は……」

2人の予想した通り、小林が教室に入ってくる。

分かっていた2人は苦笑いに近い笑みを浮かべていた。

「小林先生は好きだけど、クラス替えの楽しみがないんだよな……」

「担任が誰になるのかってワクワクするもんね」

「そう考えると鈴井がちよつと羨ましいかも」

2人は文系、鈴井は理系なので今年も鈴井だけクラスが離れている。

その為鈴井は毎年クラス替えの楽しみを味わえるのだ。

「早く新入部員と会いたいなー」

「かなりのメンバーが集まったから、楽しみにしててね！」

「せんしゅーがそこまで言うならそうなんだろうなー、楽しみ！」

今日は待ちに待った新入部員の入部初日。

今年是有名選手を集めたとの発言に、浜矢は興奮を抑えきれない様子。

すっかり慣れた始業式が終わりいつもより早い放課後。

「さっ、終わった！ 部活いこー！」

「そうだね！ 美希ちゃんも誘おうよ」

「5組だっけ？」

「うん、隣同士だから休み時間も会いに行けるね」

今までは棟が離れていた事もあり、休み時間中に会う事は無かったが今年は隣同士の教室だ。

「すーずい、部活いこー」

「2人ともまた同じクラスだったんだ」

「担任も小林先生だよ」

「相変わらずだね……」

鈴井は毎年担任が変わっているようで、2人は羨ましがっていた。

慣れ親しんだ学校を歩いてグラウンドに向かう。

「こんちやーす！」

「よっ、今日は3人で来たんだな」

「クラス隣だったんですよ」

雑談をしながら全員が集まるのを待つ。

5分もしないうちに2年生もやってきた。

「あれ？ イシ髪染めた？」

「染めましたー！ イメチェンです！」

「似合ってるなー、ヤンキーっぽいけど……」

「中身は普通です！」

石川は茶髪をやめ、全体は黒髪の襟足だけ金色にしていた。
見た目だけ見ると不良だが、中身は普通の女子高生だ。

「1年は長いね」

「まあ色々話すことあるしね」

「どんな子が来るのかな？」

神宮、荒波、岡田の3人がどんな人が入部してくるかの予想を話し合っていると、複数の人影が近寄ってきた。

「おつ、きたきた」

「待つてました！ こつちだよー！」

監督と千秋に呼ばれ駆け寄ってくる新入生達。

その表情には緊張やワクワク、不安など様々な感情が混ざっていた。

監督に自己紹介を促された彼女達の中から1人が前に出る。

賢そうな顔立ちをしている、黒髪を低い位置で纏めている少女。

「埼玉出身、投手をしていますまきのゆうます牧野湧です、よろしくお願いします」

牧野は深々と礼をしてから列に戻る。

続いて前に出てきたのは茶髪の1年にしては体格の良い少女。

「愛知から来ましたファーストの栗原美央くりはらみおです！ これからよろしくお願いします！」

栗原は活気のある声で挨拶をする。

次は茶髪をポニーテールにした真面目そうな少女。

「かんばやしまき上林真希、滋賀出身のシヨートです、よろしくお願いします」

「ショート……?」

小声で三好が呟いた言葉は、誰かに聞かれることはなかった。

——なんでショート……いや後釜も大事だし分かるんだけど、嫌な予感がする。

そんな三好の思いとは裏腹に、次の選手の挨拶が始まる。暗めのピンク色の髪をした笑顔の少女。

「神奈川出身、セカンドの茶谷佳奈利ちやたにかなりです、よろしくお願いします!」

——ピンクだ……至誠ってほんといろんな髪の色居るな。

浜矢はピンク色の髪に目を奪われていた。

その彼女はニコニコしたまま列に戻り、最後は肩までの茶髪の少女。

「和歌山から来ましたサードの川端渚かわはたなぎさです、これからよろしくお願いします」

全員の自己紹介が終わり大きな拍手が送られる。

「じゃあ千秋、いつものよろしく」

「はいっ! じゃあまずは牧野さん! 埼玉のサブマリンと呼ばれ針の穴を通す制球が

武器の投手だよ!」

「へえ……ありがとうございます」

マネージャーが知っていたのか、と一瞬牧野は驚いた顔をしたがすぐに感謝の言葉を

伝えた。

「栗原さんは得点圏の強さとパワーが売りで、中学時代は4番を打ってたんだよね！」
「はい！ ……まあ、そこまで強いチームでは無かったんですけどね」

照れ笑いを浮かべながらそう言う栗原。

この体格の良さは飾りではなかったのだ。

「上林さんは滋賀の魔術師って呼ばれるくらい守備が上手いんだ、それに打撃もパンチ力がある」

「ありがとうございます」

少し訛りのある言い方で返す上林。

三好とは違い方言は隠していない様子だ。

「茶谷さんはパワーと守備が武器！ 4番も打ってたんだ！」

「褒めてもらえて嬉しいです」

人の良さそうな笑顔で話す茶谷。

しかしその笑顔は何か違和感を感じさせる。

「川端さんは和歌山のヒットメーカーって呼ばれててね、なんと和歌山の強豪ガールズ

で一番を打ってた人！」

「私はそこまで凄くないですけどね……」

川端も上林と同じように訛りが出ていた。

和歌山のヒットメーカーは、意外にも謙虚だった。

「さて、全員揃ったし早速練習を……」

「待ってください！」

「私達も入部希望です！」

練習を始めようとした瞬間、そこにやってた2人。

長い黒髪をハーファアップにした少女と茶髪を腰まで伸ばした少女。

「入部希望は大歓迎だ、自己紹介してもらってもいいか？」

「はいっ！ 佐野夏輝です、野球初心者ですが精一杯頑張ります！」

「私も初心者だったよ、よろしく」

浜矢が初心者同士である事を伝えると、佐野は目を輝かせる。

「浜矢先輩！ 私、浜矢先輩が初心者だったって知って、それで至誠に入ろうと決めたん

です！」

「本当!?! すっごい嬉しい！」

「まあ強豪校で初心者仲間がいるって、心強いよな」

強豪校に初心者が入部するのは敷居が高いが、同じ境遇の選手がいるとなれば多少はマシになる。

「で、そつちの子は？」

「マネージャー志望の春宮優維です！ よろしくお願いします」

「2人目のマネージャーか、よろしく」

野球が好きなのか、と監督に問われた春宮は苦い顔をした。

「いやー、私野球はルールも知らないですよね……」

「えっ、じゃあなんで野球部に？」

「だって野球選手ってかっこいいじゃないですかー！」

——ミーハータイプか……今までこういうタイプは居なかったな。

野球が好きなのではなく、野球をやっている人が好きなタイプだ。

「あつ、でもでも！ やるからにはちゃんと仕事はこなしますよー！」

「やる気があるなら良かった、マネージャーの仕事を教えてやってくれ千秋」

「はい」

ミーハーではあるが真面目な性格らしく、やると決めたらしつかりやり遂げようという意思はあるようだ。

「そーいや佐野は何で野球を始めようと思ったんだ？」

「元々実家が道場を営んでいて、それで剣道をやってたんですけど……私自身はずっと野球がやりたかったんです」

剣道から野球への転向、そこまでにどれだけの葛藤や反発があったのだろうかと監督は感じた。

「剣道かあ、強かったの？」

「いえ、あまり才能が無かったっぽくて……県準優勝が最高です」

「十分凄いなと思うけど」

「とにかく、高校からは自由に部活して良いことになったので！ だから野球部に入り

ました！」

満面の笑みでそう言った佐野に拍手が送られる。

「よし、じゃあ実力チェックだ！」

「まずは夏輝ちゃんからやってみる？ 経験者の後だとやりにくいだろうし」

「いいんですか？」

「うん、フォームとかは分かる？」

千秋に指導してもらいながら何とか基本の形を身につけ、マシン打撃を開始する。緊張の入り混じった初球、バットに捉えられた打球は鋭い弾道で外野まで届いた。

「うわっ、飛距離エグっ……」

「打球速度もヤバいですね」

「本当に初心者？」

「真正正銘の初心者です！」

しかし今の当たりはまぐれだったのか、その後はバットに掠る事すら殆どなかった。いやー、バッティングって難しいなあ

「でもあの打球凄かったよ！」

「優維ありがとう！」

仲睦まじげに話す春宮と佐野を見ながら、監督と千秋はいつも通り分析をしていた。

——剣道で鍛えられた体感とリストの強さ……鍛えれば良い選手になりそうだな。ポジションは……左だしファーストやらせるか。

——スポーツ経験者だけあって動きに勢いがある。いずれはクリーンナップも打てそうかな？

2人とも鍛えられた力と体の使い方を褒めていた。

いずれはクリーンナップも夢ではない逸材だ。

「春宮と佐野って仲良いの?」

「今日初めて会ったんですよ」

「けど同じクラスです!」

「初対面でそんな仲良いんだな……」

浜矢は2人の距離感の高さに驚いていた。

曰く2人ともコミュニケーション能力には自信があるそう。

「さあ、残りもバンバン行くぞ! まず守備からやるぞ!」

「はいっ!」

まずは二遊間の守備を見る為に、茶谷と上林が位置につく。

「てかピカやばくない?」

「そうなんだよ、上林と私のポジションと被ってるんだよ」

「まあまだ奪われるって決まった訳じゃないし」

「でも上林って結構有名な選手なんでしょ?」

そんな話をする2年生を尻目に守備練習が始まる。

監督の強烈なノックを丁寧に捌く上林に、アグレッシブな動きを見せる茶谷。正反對だが2人とも守備力の高さが窺えた。

「2人ともいいぞ！ 次、川端と栗原！」

「ういつす！」

「はいっ！」

三塁線に打たれた打球に対し、正面に入って捕球する川端。

正確だが少し緩い送球を受け取る栗原。

——渚ちゃんはそのうタイプの指導を受けてきた子か、美央ちゃんは確か……。

次の一塁線への鋭い打球を栗原は弾いた。

「やばっ、すみませーん！ もう一球！」

「次は捕れよー！」

「よっしやー！」

気合は空回りせず今度はしつかりキャッチした。

——守備が不安っていう評判通り、まあ守備はいくらでも上手くなるし平気かな。

千秋は内野の守備練習を楽しそうに見ながらデータを記録していた。

守備範囲、動き出しの速さ、肩の強さなど色々だ。

一通りの守備練習を終え最後は投手である牧野。

「誰が打席に立ってもらった方がいいか？」

「そうですね……では鈴木先輩と対戦したいです」

「私？ いいけど」

まさかの指名に疑問を口にするが、その次の瞬間には準備をしていた。

牧野も投球練習を始め、2人の準備が終わったのは5分後のことだった。

「アンダースローか……」

「どんな球を投げるのか楽しみだね」

「私が捕手を務めるからな」

監督が防具を着用してミットを構える。

牧野は左脚を引いてからゆっくりと上げ、下から掬うように投げる。

その手の位置はマウンドにギリギリ当たらない程低かった。

「うわっ、位置ひつく」

「アンダースローでもあそこまで低い人は中々いないよ」

「コントロールも良いですね！ 内角の良い所突いてましたよ」

「……空には無理だろうね」

「ちよつと真理ー!？」

そんな雑談をしている4人を気に留めず、鈴木は今の球を分析する。

——制球良し、ノビもそこそこ、リリースは普通? けどアンダーってリリースポイント見づらいな……。

続くカーブも見逃しで2ストライクと追い込まれた。1球ボール球を挟んでからの最後の球。

「っー」

「三振つと……珍しいな」

「流石に今のは打てませんよ」

「チェンジアップだな」

まさかの鈴木が三振という結果に終わった。

最後に投げられたのは外角低めへのチェンジアップ。

「ブレーキは効いてるしコース突いてくるし、リリースも直球とさほど変わらない……

良い投手だね」

「ありがとうございます、鈴木先輩にそこまで褒められるなんて嬉しいです」

対決をした2人が握手を交わす。

その様子を恨めしそうな顔で見る上林と三好。

「鈴木先輩と握手とか、羨ましいんやけど……」

「はっ？ まさか上林、鈴木先輩のファン？」

「はい、そうですよ」

上林がそう言い切ると三好の雰囲気が変わった。

「……絶対ショートの、いや！ 鈴木先輩の後継者ポジは渡しゃんけん！」

「ふーん……まあ、私は正式に！ 先輩の後継者になる事を望まれて入学してきましたしー？」

「は!? ちょっと監督!？」

「いやー……それには色んな事情があるんだけど」

まずはヒートアップした2人に落ち着いて貰わないといけない、その為に千秋と小林が必死に宥める。

「上林の言ってる事は半分違うぞ」

「半分は本当なんですけどね!？」

「あ、ああ……確かにショートとしてスカウトしたけど、別に鈴木の後継者とは言ってな

「ぞう」

「上林、嘘つくのは良くないと思う」

またヒートアップしそうな2人を、今度は監督も必死に止める。

「でだ、三好には実は外野にコンバートして欲しくて……」

「聞いてないですよ!?!」

「今の上林のプレーを見て、やっぱりコンバートさせた方がいいと思ったんだ」

「正直守備の上手さなら私の方が上だと思えますけど?」

三好はコンバートに納得がいかない様子だ。

それもそうだろう、鈴井の後を継げると思いシヨートとして至誠に入學してきたのは、彼女も同じだからだ。

「それは確かにそうなんだけど、脚の速さや範囲を考えると三好を外野にしたいんだ」

「ピカ外野やるの? そしたら2年外野陣じゃん!」

「いやまだやるとは決まってるじゃないけど」

「2年で外野をやって欲しいってのは思ってたぞ」

「同じ年3人の方が意思疎通がしやすく、更に外野の守備が鉄壁になると考えた」と監督は言った。

「それに、ちよつと他にも理由があるんだけど……まだ言えないんだ」
「何ですか?」

「まあちよつとデリケートな話題というか……問題が解決したら教えるから! コンバート、頼まれてくれないか?」

じつくりと悩んだ後に、三好が出した決断とは。

「……複数のポジション出来るっていうのは、強みになると思いますしやりますよ」

「ごめんな、こんな急に言つて」

「でも! 上林より私の方が守備は上ですよね??」

「お、おう……」

勝ち誇つた表情で上林を見下ろす三好。

スツと立ち上がり物理的に三好を見下ろす上林。

「けど、シヨートつていうポジションを掴んだのは私ですからね? 物理的な距離なら

私の方が近いでもんね!」

「はー? 心ん距離なら私の方が近いけど? 上林より1年も長う先輩と一緒におる

し」

「あーもう落ち着け! 鈴井からも何か言つてやつてくれ……」

本人に助けを求めようと鈴井を見るが。

「鈴井めっちゃ好かれてんねー、今の気持ちはー？」

「伊吹ちゃんうるさい！」

「そんな怒んないでよー、顔赤くなってるよ？」

「なつてない！ 黙って！」

後輩2人に慕われているとなると、流石の鈴井も照れるように浜矢にからかわれていた。

「今年は收拾つかなくなりそうですね……」

「上林は真面目だと思ってたんだけどなあ……」

「多分、美希ちゃんが絡まなければそうなんだと思います」

「つたく、今年の1年もクセ強いなあ！」

監督の悲痛な叫びがグラウンドに虚しく響き渡る。

その後立ち直った鈴井が2人を宥め、何とかこの場は治った。

第2球 知られざる強打者

学校近くにあるバッティングセンター。

そこは球速の種類が豊富で、変化球にも対応しており人気のある場所だ。

至誠の野球部は滅多に行かないが、今日は珍しくここに遊びに来ているのが3人。

「何でわざわざバッセン来てるの？」

「まあいいじゃん！ たまにはこういうところ行きたいしー」

「それに私は寮生じゃないから学校のは使えないし」

三好、荒波、岡田の2年生3人だ。

3人のうち2人は寮生ということもあり、学校にあるマシンを使える。

しかし寮生ではない荒波はそうはいかないので、今日は珍しくここまで来た。

「相変わらず人多いなー」

「ここいつ来ても人気だよね」

「ふーん……そうなんだ」

何回も来ている2人とは違い、初めて来る三好は興味深そうに周囲を見る。

「ねえねえ、あの人凄くない!？」

「ちよつ、引つ張らないで……」

岡田に裾を引つ張られてそちらを見ると、ずっと快音を響き渡らせている一人の少女がいた。

髪の毛は茶髪で長さは肩甲骨辺りまで、メジャーリーガーのようなフォームをしている。

「日本人……だよな? 外国人っぽいフォームしてるけど」

「多分そうだと思う……てか同い年くらいじゃない?」

「え、結構大人びてない?」

3人とも違う印象を感じたようで、お互いの意見に反論したり賛同したりしている間に彼女はバッティングを終えた。

「てかあのジャージ……ウチの生徒じゃない?」

「ほんとだ! すみませーん! 至誠の生徒ですか?」

「ひいつ、え、えつと……」

「いきなり話しかけないでよ……不審者じゃん」

突然話しかけられた彼女は、ひどく怯えた様子だった。

猫背で頭を俯かせ時々こちらの顔色を伺うように見てくる。

「私達も至誠の生徒なんだ、野球部」

「凄いバツテイニングしてるからさ、もし良ければウチの野球部入らない!」

「えつと……」

「ウチは上下関係とかめつちや緩いから!」

荒波と岡田が至誠を推していくが、反応は芳しくない。

「だから勢いありすぎ! ごめんね? でも気が向いたら見学でも来てみてね」

「ピカやさしー」

「うるさい、てかその呼び方そろそろやめない?」

「えー、もうこれで慣れちゃってるからムリ!」

打撃の凄い彼女に手を振り3人は打席に入る。

変化球に四苦八苦する荒波と岡田、バント練習から入り目を慣らしていく三好とバツテイニング一つにも個性が出ていた。

そして翌日、例の彼女はグラウンドを眺めていた。

もう少し近づきたい、でも近づかないといった様子だ。

——至誠、かあ。上下関係が緩いって言ってたけど本当かな?

そんな彼女を見つけた三好が駆け寄る。

「こんにちは、来ちゃったんだ」

「あ、こんにちは……来ました」

「別にあの2人の言うことなんて真に受けなくてよかつたんだよ？　　気遣わせちゃつて

ごめんね」

「い、いえ……来たかつた、ので」

詰まりながらも言葉を絞り出す彼女に、何かを言うわけでもなく頷きながら話を聞く三好。

「グラウンドで見学する？　それともここで見てる？」

「……グラウンドに、入りたい、です……」

「分かつた、あの2人みたいにテンション高いの何人かいるけど、怖かつたら私に言つてね」

「すみません……」

——この人は優しそう、他の人もこうだといいな。あの人達も押しは強かつたけど、良い人そうだったなあ。

オドオドした足取りで三好について行く彼女は、背は大きいのにまるで小動物のような雰囲気を纏っていた。

「監督、見学希望者です」

「ありがとう、学年と名前は？」

「えと……」

——さ、サングラス……監督さんは怖いかも。

監督を見て更に縮こまる彼女。

サングラスを付けている理由を知らない為、仕方ない事ではある。

「あれ？ 白崎さんじゃない？」

「本当だ、入部希望なの？」

「い、いえ！ け、見学です……！」

練習の準備をしていた春宮と佐野が会話に混じってきた。

話しぶりからどうやら知り合いのようだ。

「知り合い？」

「同じクラスの白崎杏紗ちゃんです、だよね？」

「は、はい……」

「てことは3組か、3組のやつ多いな」

白崎と呼ばれた彼女は、春宮と佐野のクラスメイトだ。

「ふ、震えてるけど大丈夫……？」

「平気だよ、監督中身はそんなに怖くないよ！」

「そんなにつてなんだ……」

体がプルプルと震えている白崎を心配して近寄ると、彼女は距離を取る。

その瞬間しまったという表情をする。

「あつ！ ご、ごめんなさい……」

「……野球経験者？」

「い、一応……そうです」

「ポジションは？ あと投打」

「サード、やってました……右投、右打です……」

緊張をほぐそうと監督が質問をしたが。

——失敗だったか？ ちよつと辛そうな顔してたな、けど野球嫌いな奴が見学になんて来るか？ ……分からないな。

野球の話題に触れられて欲しく無さそうなのに、野球部の見学には来る。

その矛盾した行動の理由が分からず、監督は頭を悩ませる。

「あっ！ 昨日の子だー！」

「本当だ、来てくれたんだ〜」

「あれだけ圧かけられればそりや来るでしょ……」

白崎を発見した岡田と荒波がやってくる。

「3人と知り合いなのか？」

「昨日バツセンで会いました！ 凄いバッティングするんですよ」

「へえ、なら軽く打ってみるか？」

「あ……は、はい……」

小さい声だったが頷いて返事をする。

元々この時間は打撃練習の予定だったので、既に準備は整っていた。

「着替えは持ってる？」

「はい……」

「なら春宮と佐野、部室まで連れて行ってやってくれ」

「はいっ！ ほら行こう」

春宮と佐野の後をついて行く白崎。

声が届かない距離になったのを確認してから。

「白崎って野球嫌いなのか？」

「でも嫌いだったら見学なんて来ないですよ」

「2人の庄に押されたからか？」

「それは……ありそうですね、気弱そうですし」

もしかしたら本当は来たくなかったのかも知れない。

だがあそこまで言われた手前、来ない訳には行かなかったのかもと言う結論に。

「なんか申し訳ないな……」

「2人の練習量増やしていいですよ」

「ちよっ!？」

「そ、それだけは勘弁して……!」

三好の発言に荒波と岡田は焦りだし、部室の方向へ謝罪する。

そんな話がされているとは思ってもいない3人は。

「ここが部室ね、空いてるロッカーは……これ!」

「ありがとう、ございます……」

「にしても白崎さんが野球経験者だとは知らなかったよ」

「自己紹介の時にも言っただけだったもんね」

春宮と佐野が話をしてる横で、焦るように着替えを終えた白崎。

「……………この人達も、悪い人では無さそう。春宮さんはちよつと見た目が派手だけど……………多分良い人。」

春宮は茶髪に化粧もバツチリと、他校の生徒ではあり得ないような容姿をしている。それに加え容姿も抜群なので芸能人っぽさが際立つ。

再びグラウンドに向かうと、今度は全員揃っていた。

「じゃあ早速打ってもらおう、球速はどうする?」

「……………速めで、お願いします」

監督が球速を変更している間に、白崎はルーティンをこなす。

ホームベースをバットで叩いた後、バットを投手の方へ向ける。

その表情は先程までの不安そうなものではなく、獲物を狙う獣のような顔だった。

「……………なかなか面白そうな奴が来たな、さて……………お手並み拝見といくか。」

初球から浜矢の最速に近いボールが放たれる。

豪快なスイングで振り抜かれたバットは、ボールを潰すような勢いで打ち返す。

「うわ……………ホームラン」

「昨日の打球とおんなじだ……………」

一瞬にして外野フェンスに突き刺さったライナー。それは昨日岡田達が見た打球と全く同じだった。

「凄いな！ もっと打ってくれ！」

「……は、はい……」

——白崎杏紗ちゃん……神奈川出身だよな？ でも私のデータの中にはそんな名前載って無いし、監督も知らないみたい……一体何者？

監督のみならず千秋すらも知らない選手。

一体何者なのかという視線を浴びながら、白崎は打撃練習を終える。

「出身中学はどこ？ もしかして県外かな？」

「え、えつと……一昨年まで、千葉にいました……」

「千葉？ ということは早紀ちゃんと同じだね」

「私も千葉県民だよー！ 仲間が増えて嬉しい！」

岡田と同じ千葉出身だった事が判明した。

しかし気になる事があった千秋は、更に質問を重ねる。

「こつちに来てからはガールズとかには入らなかったの？」

「は、はい……バッティングセンターには、行つてましたけど……」

「……その理由つて、聞いても平気？」

「えっ……」

2つ目の質問は誰にも聞こえないに、耳元で囁くように聞く。

明らかに様子がおかしくなった白崎を見て千秋は。

「分かった、聞かないでおくね」

「……ありがとうございます」

「ううん、嫌なことは言わないでいいんだよ」

——野球が嫌いっていうよりは、前の野球部で何かあったタイプかな？ とはいえま

だ情報が少なすぎる……踏み込んだら大きな地雷を踏む可能性は高い。

千秋は白崎とこれからどう接するかを考えていた。

「守備練習はする？」

「っ、私守備はあまり……」

「そっかあ、じゃあ今日はいっぱい打とうか！」

「えっ……」

まさかそんな事を言われるとは思っていなかった、そんな顔をしていた。

「伊吹ちゃんバツピしてくれる?」

「任せとけ! いつでもいいよ白崎」

「は、はい……」

急な要望だったが浜矢は受け入れる。

そんな周囲に白崎は戸惑っているようだ。

「……監督、杏紗ちゃん結構傷が深そうです」

「だよな……慎重に仲を深めていくしかないか」

「ですね、いつか杏紗ちゃんの方から話を切り出してくれるようになるまで」

「その為にもまずは入部して貰わないとな」

白崎はフリーバッティングやマシン打撃、トス打撃なども終え部活の終わりの時間が近づいた。

まだ道具の場所が分からない彼女は先にダウンを始め、その隣に座り話し掛ける千秋。

「今の気持ちはどう? 入部とか考えてくれたりするかな?」

「……まだ、悩んでいます」

——千秋先輩はすごく優しくそう……気を遣わせすぎちゃってるのは申し訳ないけど。

千秋に対して好感を抱いている白崎。

だがまだ自身の心に根付いている不安は振り払えない。

「……私なんかでも、いいんですか？」

「もちろん！ 杏紗ちゃんみたいな凄い打者は大歓迎だよ！ ウチつてあんまり打線強くないから……」

「っ！ そう、なんですね……」

打線が強くないと言った途端顔色が悪くなる白崎。

それを千秋が見逃す訳がなかった。

「まあ全国基準だから平均よりは全然上だよ、それに杏紗ちゃんが来てくれたら皆気合が入ると思うな」

「……嫌いに、ならないですか？」

「えっ？」

千秋が聞き返すとしたという表情で誤魔化しの言葉を紡ぐ。

そんな白崎の手を優しく包み込むように握る千秋。

「ならないよ、絶対に」

「千秋、先輩……」

「杏紗ちゃんの事情は分からないけど、絶対に私は野球を好きな子は嫌いにならないよ、だって私野球大好きだもん！」

——なんだろう……先輩の事は何も知らない筈なのに、安心感と説得力がある。この人の事は信用しても良さそう……。

白崎は固く閉ざされていた口を、心を少し開く。

「……野球部、入ります」

「本当!? やった、すごく嬉しいよ!」

「期待には、応えられないかも知れませんし……嫌な気持ちに、させるかも、知れませんが……」

「ふふっ、そんな心配いらないよ? だって至誠の皆は優しいから」

千秋から差し出された手を握る、それは入部を決意したことの表れだった。SHIS
E I I S YOU!

君の打撃で、このチームは完成する。

誰もその存在を知らなかった強打者が、今野球部に入部した。

番外編 狙い目は誰？

秋季大会も終わり、葉が紅く色づく季節になった。

この季節の中今日の野球部の練習はなし、しかしここ会議室では今から大事な会議が始まろうとしていた。

「では、2017年度のスカウト会議を始めます」

「良い選手を獲得する為に頑張りましたよ！」

千秋と監督によるスカウト会議、2人にとっては夏の大会に次ぐ一大イベントだ。

「私の方でもピックアップはしておきました、こちらです」

「なるほどな……有名選手が多いな」

「ダメでしたか？」

「ダメではないけど、この中でウチに来てくれそうな殆どいないぞ……それに私はあまり万能型は獲りたくないんだ」

相良や他にも拒否された例があり、有名選手は極力避けたい監督。

「万能型を獲りたくない理由ってなんですか？」

「センスだけでやってて、身体の使い方が下手な選手が多いんだよな……それよりは将来性のある一芸特化の選手を獲って化けさせたい」

「監督ってそういうの好きそうですね〜」

監督は自分が目をかけた選手が活躍すると、喜ぶタイプだ。

その喜びが大きいのは、活躍するのが当然と言われるスーパージョニア中学生よりも、一芸特化の素材型。

「けど今年はそうも言ってもらえないし、ある程度ネームバリューがある選手を獲ろうかと考えている」

「でしたらこの子とかはどうですか？」

「この選手は私も目を付けてたぞ、なら1人確定で」

まず1人スカウトする選手が見つかった。

残された人数はあと4人、じっくり考えて選ばなければならない。

「そうだ、ここちよつとチャレンジしてみたいんだ」

「この子は……確か、結構な有力選手ですよね？」

「ああ、けど結構面白い性格してるしもしかしたら来てくれるかも知れない」

面白い性格、という点に疑問を抱き千秋が問う。

「言葉にするのが難しいんだが、向上心とかが無い訳じゃないのにどこか飄々としてるというか……」

「掴み所が無い感じの子、ですか？」

「ざっくり言うとなんな感じだな、あと頭が良い」

千秋が用意したスカウト用の資料には推定偏差値60、と記されていた。

「自分で考えてプレーや練習をこなせる選手だ、ウチにピッタリの選手だろ？」

「ウチは結構自主性を大事にしてますよね」

「まあそのせいで入学希望者減ってるんだけど……」

自主性を大事に、と言えば聞こえはいい。

しかしそのせいで髪色や服装が派手で、何度も言うがそれを嫌う保護者世代も少なくない。

「とりあえず投手は欲しいからここのも確定、あとは三塁か……」

「なら良い子がいますよ！ この子です！」

「強豪ガールズの1番か……良いな」

和歌山の強豪ガールズの1番を張る2人。

あまり知名度はないが、だからこそ狙い目だ。

「あとはセカンドも一応欲しいな、この辺りはどうだ？」

「地元出身ですね、良いんじゃないですか？」

神奈川在住のセカンドも候補に挙がった。

これで投手1人と一塁と二塁、そして三塁が出揃った。

「最後はこの選手を狙ってるんだ」

「えっ？ でもこの子のポジションって……」

「ああ……争ってもらう事になるな」

後釜を育てるという名目もあるし、何より監督には考えがあった。

ポジション争いをさせられる彼女のコンバートだ。

何回かに分けて行われたスカウト会議が終わり、本格的にスカウト活動の開始。

結局1回目の会議で決まった5人を、スカウトする事に決まった。

「じゃあ行ってくる、ちゃんと練習するんだぞー」

『はい』

「どこに行くんですか？」

「和歌山と滋賀」

せっかく関西圏に2人候補が居るのだから、纏めて行ってしまおう。

その為3日間学校には来れないが、練習はするようにと釘を刺した。

「じゃあ皆張り切って練習するよー！ 帰ってきた監督を驚かせちゃおう！」

『おー!!』

監督が居なくなっても千秋と鈴井がいる限り、サボる事は許されない。だからこそ監督も安心してスカウトに出かけられる。

2時間以上をかけ神奈川から滋賀に辿り着く。

以前にも試合を観戦してきたが、それはもう3ヶ月も前の話。

久しぶりの滋賀の地に胸の高鳴りを抑えられないが、今は仕事が優先だ。

(よしっ、今日は練習試合があった筈だ……観に行こう)

駅から近くの高校で練習試合が行われる。

その高校に向かい、身分証を見せて校内に入る。

念のため持ってきていたスピードガンと、カメラを手に試合を眺める。

(滋賀の名門チーム……流石に動きが良いな)

攻守に渡り基礎が鍛えられている動きをする。

このチームは毎年スタメンのほぼ全員が強豪校にスカウトされる、いわば有力選手の集まりだ。

(守備範囲はちよつと狭いか? けど範囲内での安定感は素晴らしい、それにさつきはタイムリー打つてたし打撃も良さそうだ)

試合は彼女のタイムリーが決勝点となり、勝利で終わった。

他のスカウトに混じって監督と声を掛けに行く。

「今時間いいかな? 至誠の監督の灰原です」

「至誠……! 鈴井さんがいる高校ですね!」

「あ、ああ……鈴井のファンだと聞いた事があるけど、本当だったんだね」

記念すべき1人目のスカウト選手は上林真希^{かんばやしまき}。

滋賀の守備職人と呼ばれる程守備に定評がある遊撃手、そして三好と伊藤に次ぐ3人目の鈴井ファンだ。

「えーつと、育成プランとか色々話したいんだけど、時間はある?」

「はいっ! あと出来れば鈴井さんのお話も聞かせて貰えませんか!」

「……気の済むまで聞かせてあげようか?」

「よろしくお願ひします!」

結果予定を大幅に超える時間が掛かった。

しかし手応えは十分、上林は恐らく入学してくれるだろう。

(上林は来てくれると思ってた……次は和歌山だ)

観光する間もなく次は和歌山に向かう。

和歌山に着く頃には夜になっており、ホテルに着いてすぐ監督は眠りについた。

翌日は和歌山の強豪、板屋ガールズの練習試合を観戦する。

スピードガンは持たずカメラで映像を撮る事だけに集中。

(やっぱり名門チームの選手はフィジカルが強いな……けど私の目的は1人だ)

三塁を守っている彼女に目を向ける。

線は細いが堅実な守備と、和歌山のヒットメーカーと呼ばれる選手。

試合は彼女の所属するチームの勝利で終わった。

片付けを終えた選手達に他校のスカウトが群がる。

しかし監督達が目を付けた彼女は、誰からも声を掛けられる事はなくグラブの手入れをしていた。

「少し良いですか？ スカウトのお話をしたいんですけど」

「ああ……誰ですか？ 呼んできますよ」

「いや、君だよ」

そう言われるとキョトンとした顔で自分を指差す。

監督が頷いてもまだ信じられないといった表情だ。

「本当に私ですか？ 人違いじゃ……」

「人違いなんかじゃないさ、私がスカウトしたのは川端渚かわぼたなぎささんだ」

「……失礼なことを言いますが、物好きですね」

わざわざ他の人じゃなくて私を選ぶなんて、と川端は言う。

「和歌山のヒットメーカーと呼ばれ、守備も上手くて脚も中々……この選手を見逃す方がおかしいよ」

「ありがとうございます……」

川端は褒められた事に照れ、頬が少し赤く色付いた。

「それで今は時間あるかな？ 少し説明したい事があるんだけど」

「はい、大丈夫です」

「なら良かった、3年間の育成プランに施設の紹介、それに起用法について話すから2」

3時間はかかるけど」

「い、育成プラン……時間は平気です」

流石に育成プランを説明されるのは予想していなかった様子。

それもその筈、彼女のチームメイトに育成プランを話されたと言っていた選手は1人もいなかった。

たつぷりと3時間話し合い、川端のスカウトは終わった。

監督は今回のスカウトに手応えを感じていた。

(川端は後日連絡するって言ってたけど来てくれそうだったな……だけどまだ安心は出
来ない)

この2人が来ても、まだ一塁が埋まっていない。

善は急げとの言葉通り、監督はこのスカウトが終わった3日後に愛知に向かった。

(愛知か……来たのは修学旅行以来かな)

愛知県に降り立った監督は、早速弥富ガールズの練習場所へ向かう。

そこでは30人前後の選手が元気良く練習をしていた。

「これはこれは灰原監督、スカウトですか?」

「ご無沙汰しております、そうですね……栗原さんを見たいんですけど」

「栗原ですか、いい所に目を付けましたねえ」

このチームは以前、神奈川に練習試合をしに来た事がある。その時に注目したのが栗原だ。

「では呼んでくれますので少々お待ちを……」

「いえ、練習している姿を見させて頂きます」

「そうでしたか、ではごゆっくり」

見やすい位置で栗原の動きを観察する。

(にしても、あの^ご高齢でまだ監督が出来るとは……私も見習わないと)

弥富の監督は今年で60歳を迎えた。

だが今も元気に指導をしている元気なお婆さんだ。

1時間じつくりと見てから、ついに声を掛ける。

「栗原美央^{くりはらみお}さん、だよね? 少しいいかな」

「はい? えーつと、お姉さんは……」

「お姉さんって年齢では無いよ……至誠の監督をやっています、灰原です」

「至誠って……確か神奈川の?」

栗原は至誠の存在を知ってはいるが、詳しくは無い様子だ。

「そこだね、それで早速なんだけど至誠に来る気はないかい？」

「本当ですか!? 嬉しいです！」

「……君の実力なら、獲るところは他にもあると思うけど」

「県外から来たのは初めてなんです！」

いくら4番とはいえ中堅レベルのチーム、あまり県外からの注目は集めていなかったであろう。

「あつ、でも至誠つてレベル高いんじゃない……私守備下手だし……」

「ちゃんとウチで鍛えるから安心して欲しい、それに君には打撃を期待しているんだ」

「そこまで確実性も無いですよ？」

「そんなのウチにいくらでも居たよ、けど君は得点圏に強い……最終的には4番を争える逸材だと思ってるよ」

逸材と4番という言葉に反応したのか、満面の笑みを浮かべる。

「だから是非来て欲しいと思ってるんだけど……」

「行きます!!」

「……あの、ちゃんと話は最後まで聞いてね? 色々話す事はあるから……」

「はいっ、すみません！」

(……なんか、悪い奴に騙されそうだな)

嫌なビジョンを想像してしまい頭を抱える監督。

そんな監督を知ってか知らずか、栗原は話を楽しみにしている。

栗原との話は比較的短い時間で終わった。

これで一塁と三塁という、1番埋めなくてはならないポジションが埋まった。

(次は埼玉……埼玉は初めて行くな)

監督は愛知から直接向かおうと、千秋にあと数日は練習に参加できないと連絡を入れる。

無事に既読もついたので監督は埼玉へと向かった。

(ここが埼玉か……地理とか全然分からないけど、まあ迷わないだろ)

見知らぬ土地でも地図アプリがある、それを頼りに監督はグラウンドへと歩く。

「いたいた……牧野さん」

「はい、何でしょうか」

「神奈川の至誠高校で監督やってます、灰原と申します」

「ああ、灰原監督ですね！ スカウトでしょうか？」

流石に対応に慣れているな、そう感じた監督。

彼女は牧野湧まきのゆう、埼玉のサブマリンと呼ばれる投手だ。

「慣れてるね、スカウトは他にも来てる感じ？」

「そうですね……10校以上来てます」

「ならそこにウチも追加で」

これで牧野の元には15校目のスカウトが来た。

恐らくどこに進学するか迷っているだろう。

「私を選んだ理由って何か、聞いてもよろしいですか？」

「普通に投手が居ないからだね、洲崎と浜矢が先発やるとしても、リリースが神宮1人だと心許ないし」

神宮は安定感が無い、それにいくらスタミナがあると云っても極力連投は避けたい。

「あとは今までウチに居なかったタイプの投手だから、相手も対応しづらいと思って」

「なるほど……至誠が1番私が活躍できる場だと」

「まあそうなるね、育成プランだつて立ててきたし」

「へえ……面白そうですね、色々お話を聞かせて下さい」

監督の予想通り育成プランに食い付いた。

頭が良くデータをみるのが趣味だと言っていた彼女、ここをアピールすれば好印象が貰えると知っていた。

「私をエースにしようと考えてらっしやるんですね？」

「うん、その為には左打者を克服する必要がある……アンダースローの宿命だね」

アンダースロー投手は、左打者には球筋が見やすくなってしまう。

その為左打者には滅法弱いというのが定説だ。

「牧野さんは制球が中学トップクラスに良い、四隅を突く投球をすれば抑えられるだろうね」

「ですが球は遅いです、それだけだと打たれます」

「制球だけじゃない、変化球だって一級品なのは知っているよ、それに変化球も完璧にコントロール出来ることもね」

制球を褒められる事が多かった彼女は、変化球の質まで褒められた事に少し驚いていた。

「それに左が抑えられないんだったら、最悪対左のスペシャリストとか連れてくるし」

「灰原監督は投手の酷使を嫌いますよね……勝利と投手の命、どちらか選ばなければな

らないとなったらどちらを選びますか？」

「そんなの考えるまでもなく投手の命だね、大人のエゴで若い才能の芽を摘むのはしたくない」

監督がそう伝えると、どこか作り笑いのようだった牧野はようやく本気で笑った。

「それを聞いて安心しました……正直、今酷使され気味なんですよね」

「知っているよ、先発中継ぎ抑え全部やってるって」

「ええ、ですから酷使しない高校に進学したいと考えていた所なんです」

「ウチは基本分業制だから安心してくれ、君は多分抑えが1番向いている」

その言葉を聞くと牧野はニツと笑った。

「私自身もそう感じていたんですよ、至誠……入ります」

「君が入ってくれば投手陣は安泰だろうな、感謝するよ」

固い握手を交わし4人目のスカウト成功。

残るスカウト候補はあと1人だ。

(さて、最後は神奈川だ……気合入れていくか！)

3日振りに神奈川に戻るが、まだスカウトは終わらない。

向かったのはグラウンドではなくとある施設。

「すみません、至誠高校の灰原ですが茶谷さんはいらっしゃいますか？」
「ええ、居ますよ……少々お待ちください」

10数秒を待ち出てきたのは最後のスカウト候補。

ちやたにかなり
茶谷佳奈利、強打の二塁手だ。

「灰原監督に直接お声を掛けて貰えるなんて、嬉しいです」

「君の事情は知っている、この条件でどうだい？」

「そう言つて監督は、特待生入学生は入学金全額免除、授業料減額」と書かれた紙を見せる。

「……良いですね、この条件飲みますよ」

「ありがとう、君が活躍してくれる事を楽しみにしているよ」

「至誠つて髪は自由なんでしたっけ？」

「ああ、髪色髪型服装全て自由だ」

それを聞くと、茶谷は少し嬉しそうにしていた。

校則の緩さで入ってくる生徒は多いが、彼女の場合は事情が少し違う。

「本当に何色でも良いんですか？」

「紫とか緑とかもいるよ」

「それは……高校としてどうなんすか」

「まあ授業は真面目に受けてるし」

何はともあれ茶谷も入学決定。

これで5人の上限に達したので、スカウトは終了。

あとは一般入部に託すしかなかった。

第3球 最後のピース

今日も今日とて、部員達は汗を流しながら練習をこなしていた。

内外野はノックを、投手と捕手は投球練習をしている。

「石川いいよ、その調子！ 次センター！」

「ノーいつ！」

岡田が落下地点に素早く移動し捕球、その後バックホーム。

いつも通りの安定した守備を見せる。

「三好いくぞー！」

「ハッ！」

一瞬反応が遅れたが、正確に落下地点に移動し捕球する。

バックホームはレーザービーム、という程ではないがノーバウンドでホームまで届いた。

「オツケー、このまま慣れていこうな！」

「はい！」

最近始めたばかりのレフトの守備。

まだ慣れていないがそれでも着実に上手くなっている。

内野のノッカーは監督に代わり千秋が務める。

サードから時計回りにノックをしていく。

——渚ちゃんなんでも正面で捕ろうとする癖がある、佳奈利ちゃんは送球がちよつと雑、美央ちゃんは単純に守備力が低い……真希ちゃんは範囲が狭いのだけ勿体無いか
な

新入生の守備力を正確に把握しようと、様々なコースに強弱をつけて打ち続けた。

その甲斐もあり千秋の新入生データは更に豊富になった。

「二遊間ゲッツーいくよー」

二遊間に強い打球を放ち上林がグラブの先で捕球。

そのまま茶谷にトスしたのだが、彼女は上林を避けずに一塁へと送球。

上林がギリギリの所で避けたので衝突はしなかったが。

「っ、危ないんやけど」

「あつそう？ こめんこめん」

ニヤリとした笑顔のまま悪びれた様子もなく言い放つ。

「わざとやつとるやないか？」

「別にー？ 私そんな守備上手くないからさ」

「……そう」

この場はここで話を切り上げたが、上林は不服そうな表情。その様子を遠くから見つめていた存在が1つ。

——……佳奈利ちゃんって、もしかして

ノックが終わった直後上林はベンチへ向かう。

「監督！ 佳奈利の事なんですけど！」

「その事なんだけど、もう少しだけ耐えてくれないか？」

「知ってたんですか？ あんな性格だって」

「ああ……更生って言い方は悪いけど、こっちであの性格は直させるつもりだ」

監督も千秋も、茶谷の本質を分かかっていてスカウトした。

性格こそかなり悪いが、それを持ってしてもスカウトをする価値があると判断されたからだ。

「私は嫌ですよ、あんなのと二遊間組むなんて！」

「意外と良いコンピになると思ってるんだけどな、まあこっちもなるべく早く手は打つ

よ」

「ちゃんと対策は考えておいてあるから！」

「……よろしく願います」

上林が苛立ちを隠せないまま立ち去ると、監督は息を吐く。

「茶谷なあ……まさかここまでとはな」

「生い立ちを考えたらあの性格になるのは分かりますが、味方にラフプレーするとは思いませんでしたね」

「とはいえ私には多分心開いてくれないだろうし、誰かに頼むしかないな」

「誰かいますかね？」

2人して唸りながら、茶谷を更生させられそうな人物を思い浮かべる。

「……白崎？ とか」

「確かに杏紗ちゃんも似たような感じですよね」

「性格こそ違うけど、多分奥底の部分では似てると思うんだ」

「これは憶測ですけど、もしかしたら杏紗ちゃんも佳奈利ちゃんと同じような理由であなつたんじゃ……」

白崎の過去について考えていると、最終下校のチャイムが鳴り響く。

これ以上の事は本人から話してもらうしかない、そう結論を出し解散となった。

「佳奈利、もつと真面目にやってや！ 出来るんやろ!？」

「……めんどくさ、これでも真面目だよー」

「嘘つかんといてよ、アンタがもつと守備上手いのは知つとるよー」

翌日の練習でも茶谷が危険なプレーをし、その被害を浴びかけた上林が怒っている。その様子を見て深いため息を吐く監督。

「茶谷あいな……」

「げっ、真希ごめんね？ 次からは気を付けるから!」

「はっ？ ちよつと……!」

「……逃げられたか」

監督が近寄るときさつきまでの凶悪そうな表情はどうしたのか、猫を被った笑顔で謝罪をして逃げ出す。

「監督、このままだったらいつか怪我します」

「だよな……茶谷が良くなるまで二遊間でのプレーはやめるか」

「そうして下さると嬉しいです、アイツのせいで怪我なんてしたくないですから」

茶谷を含んだ二遊間での連携プレーは、しばらく中止という処置がなされた。

思った以上に手強い相手に、あの監督すらも頭を悩ませている。

「小林先生、助けて下さい……」

「灰原監督が弱音を吐くなんて珍しいですね……そうですね、まずは茶谷さんの心に忍び込めるような人を用意するのが良いかと思えます」

「茶谷の心に……やっぱり白崎か」

茶谷と似た雰囲気を持つ白崎が候補に挙げられた。

「その為にはまず白崎さんのケアもしないと、ですよね」

「ですね……考えなきやいけない事が多すぎるな」

「佳奈利ちゃんは事情が分かっているからいいですけど、杏紗ちゃんはどこに地雷があるか分からないですからね」

「慎重に行かないといけないけど、時間もそこまで無い……」

「完全に行き詰まったかのように思われたが、その会話に混じってくる者が1人。」

「平気ですか？ 茶谷のこと……」

「浜矢！ ……は、あんまり期待出来そうにないな」

「ちよつと?! いきなり酷くないですか?」

「ごめんごめん、けど浜矢は無理そうなんだよな」

——家庭事情を考えれば浜矢も結構重いけど、茶谷には及ばないか……。それに浜矢は明るくて友人も多い、茶谷の嫌いなタイプだろうな。

「……あつ」

「監督？ どうしたんですか？」

「白崎の事は浜矢に任せればいいんじゃないのか？」

「なるほど……確かに伊吹ちゃんなら、杏紗ちゃんの心を開かせられそうー」

茶谷を更生させる為に白崎に心を開いてもらおう、その役割は浜矢が適任だと考えられた。

「な、なんで私なんですか？ 私そんなカウンセリング的な出来ませんよ!」

「浜矢はちゃんと周りを見てるし、それに雰囲気的に白崎から見ても怖くない……:~:~と思っう」

浜矢は明るい性格ではあるが、ただ一方的に話すだけでなくちゃんと聞き手側にも回るタイプだ。

それに周囲の変化や違和感にも気付く事ができる、白崎の相手には丁度いいだろう。

「この話題は地雷とか浜矢なら分かるだろ？」

「まあ何となくですけど」

「じゃあ杏紗ちゃんは任せたまよ！ 頑張つてね！」

「ちよつ、千秋!? いきなりだなあ……」

浜矢からすれば、3人を心配して会話に混ぜたのにいきなり巻き込まれた形だ。

「じゃあその代わりに、監督達を知ってる白崎の情報を教えてくれませんか？」

「私達もあまり知らないが、そうだなまず……」

野球の話題について触れると辛そうな顔をする、特に中学時代については絶対に話さない等の情報を共有した。

話を聞いた浜矢は早速白崎の元へと向かう。

グラウンドの裏側の人気の無い場所で白崎は佇んでいた。

「白崎ー!!」

「はっ、浜矢先輩……」

声を掛けられた瞬間体を跳ね上がらせる。

「驚かせてごめん！」

「い、いえ……別に……」

「ねえ、白崎ってさ……野球楽しい？」

「えっ……」

恐らく地雷とされている話題に初めから触れていく浜矢。

白崎は目が泳ぎ額から汗が流れている、明らかに動揺しているようだった。

「あんま楽しくなさそうっていうか……辛い？」

「……そんな、ことは……」

「辛かったら辛かったでいいんだよ？ 誰だって嫌な事とかはあるしさ」

その性格や振る舞いから、周囲からは何も考えてないと思われるがちな浜矢。

しかしその実誰よりも周囲の変化には敏感で、最悪の状況にはならないような立ち振る舞いをする。

「もちろん、今のこれが嫌だったら答えなくたっていいし」

「……………」

「けどいつでもいいんだ、いつか本当の白崎が知りたいな」

「本当の、私……」

「そう！ 至誠は個性を尊重する学校だからさ、どんなのだったってどんとこい！」

浜矢はそう言ってドヤ顔をしながら胸を拳で叩く。

そんな姿がおかしかったのか、白崎からは笑みが溢れていた。

「おっ、笑った！ 白崎は笑顔の方がいいよ！」

「……浜矢先輩、私のこと……好きですか？」

「当然！ 大事な仲間だし、それに白崎って優しいし！」

「へっ……？」

鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする白崎。

「いつも気付かれないように片付けてたり、次の人がやりやすいように配置とか整えたりするじゃん」

「そ、それは……嫌われたくないからで……」

「でもそういう事出来るのって凄くいいと思う！ だから私は白崎の事大好きだよ」

「……ここまで面と向かって好きと言われると恥ずかしいのか、白崎は帽子を深く被り顔を隠す。」

——浜矢先輩は優しい……こんな私の事褒めてくれるし、言葉だって選んでくれてるし……多分、この人になら言っても平気なはず。

「……………あの、私」

「うん、ゆっくりでいいからな」

浜矢はなるべく優しい声色を意識して喋る。

「私、中学の時……その、いじめ、られてて……」

——なるほどなあ……そりゃこんな引つ込み思案にもなるか。てか最低だな。

白崎の事情を初めて耳にした浜矢は、彼女を虐めた人間に対し憤りを感じていた。

虐められた理由こそ知らないが、白崎が他人に対して怒らせるような事をするとは思

えなかったからだ。

理由を聞きたい、だが急かすような真似はしてはいけない。

次に白崎が声を発するまで浜矢はじっと待ち続けた。

「ウチのチーム、そこまで強くはなくて……それが良くて入ったん、ですけど」

「うんうん」

「けど、私は打撃が得意で……4番も打ってたんです」

「まあ白崎のあのバッティング見たら納得だな」

そこまで言つて白崎は口を閉ざす。

体が少し震えて目には涙が滲んでいる。

浜矢は黙つて彼女の背中をさすり、頭をポンポンと撫でる。

5分後によくやく落ち着いた白崎が、続きを話し出す。

「だから嫌われ、ちゃって……それから誰も練習に付き合っつて、くれなくて」
「そっか……練習つて守備練とか？」

「……はい」

浜矢は白崎の守備の動きが悪い事を納得した。

守備というのは協力してくれる人がいて、初めてまともに練習が出来る。

その相手がいなければどんどんと下手になるのは当然の事だ。

「監督は何か言わなかったの？ 4番にするくらい評価してくれたんでしょ？」

「……チームの雰囲気が悪くなるからって……代打で、使われるようになりました……」

「監督も大変だったんだろうなあ……1番大変なのは白崎だったんだらうけど」

白崎は勿論のこと、そんなチームを纏めていた監督の心労もかなりの物だったらう。

「私が打つと、みんなが陰口を言うんです……だから、本当は打ちたくないし、1人で
バッセン行ってるだけでよかったです……」

「じゃあ何でウチに入部してくれたの？ 確かに白崎は気が弱いけど、入部を断ること
くらい出来たと思う」

「それは……」

そんな理由なんて分かりきっている。

「野球は、どうしても嫌いになれなかったんだよね？」

「……………はい」

「それが聞けてよかったよ！ それなら打ちまくっていいじゃん！」

「えっ…………？」

白崎は何故そうなるのかが分からず、しかし先輩の発言に反論するなど性格上出来ず、ただ戸惑っていた。

「至誠には野球好きしかないから！ 同じ野球好きの相手が打ったら嬉しいじゃん！」

「……………そういう、もの、なんですか？」

「そういうものだよー！ それにさ、ウチは強いから皆精神的に余裕がある」

かつてのチームメイトは嫉妬心から白崎を虐げた。

しかし至誠には白崎並みの選手は多くおり、守備力も考慮すれば白崎以上の選手だっている。

それに加え、至誠の目標は全国制覇ただ一つ。

その目標を達成するのに必要なのは打力、それを埋められるピースである白崎の事を妬む人間なんて居ない。

「だから心配する事なんてないよ、もしなんか言われたら監督に言えばあの人凄い怒ると思うよ」

「それは……怖そう、ですね」

「まあ監督が本気で怒ったところ見た事ないんだけど、多分めっちゃ怖い」

想像しただけで背筋がゾツとする程の恐怖を感じる2人。

同じ行動をした事に対して、2人は顔を見合わせて笑った。

「それ手抜いたりなんてしたら、千秋まで怒っちゃおうよ？ 千秋はマジで怒らせちゃいけない」

「そ、そんなに……」

いつも笑顔な浜矢が真顔で忠告するほど、それだけ怒った千秋は怖いのだ。

「次の日曜試合あるっしょ？ そこで思いつきり打っちゃいなよ！」

「……大丈夫、ですかね」

「平気平気！ さつきも言ったけど何かあれば私達がいるから！」

「ありがとう、ごごいます……！」

白崎はついに本格的に泣いてしまった。

ここまで優しい言葉を掛けられたのは久しぶりだったから、それが傷付いた心に沁み
たから。

「実はお願いがあるんだけど……それは白崎自身の問題を解決してからだな！」

「はい……打ってみます、久しぶりに……全力で」

「その意気だ！ そしたら私が一番最初にハイタッチするー！」

ニツと白い歯を見せながら笑う浜矢に、軽く微笑みを返す白崎。

今年度初の練習試合まで、あと3日。

第4球 過去を乗り越えて

4月下旬のこの日は今年度初の練習試合の日。

相手は相模中央高校、2年前にも初陣として戦った相手だ。

「相模中央って確か守備型のチームだったけ？」

「そうだね、そして強打のチームには大量失点することもある……」

「つまり、今の打力を図るにはもってこいの相手だったことだね」

浜矢達は2年前の初陣をはっきりと覚えていた。

相模中央は守備力が売りのチームで、ロースコアの試合が多いが強打のチームには大量失点をする。

つまりこの試合、何点取れるかで今の打力が分かると言ってもいい。

「みんな、スタメン発表するよー！」

千秋から本日のスタメンが発表された。

1番 荒波友海（右）

2番 三好耀（左）

3番 上林真希（遊）

4番 茶谷佳奈利(二)

5番 鈴木美希(捕)

6番 栗原美央(一)

7番 川端渚(三)

8番 浜谷伊吹(投)

9番 岡田早希(中)

「慣れない打順の奴もいるだろうけど、まあ練習試合だし気負わずにいいこうな」

「監督の言う通り！ とにかく楽しんでプレーしようね！」

『はいっ！』

川端や鈴木、栗原は今まで任された事の無い打順。

慣れない打順での仕事は苦戦するだろうが、これはあくまで練習試合。

結果を出すよりも自分の成長のきっかけとして欲しい、監督達はそんな思いを持っていた。

「伊吹ちゃん、初回ビシッと抑えてきてね！」

「任せろ！ 3人で抑えてきてやるよ」

「気合が空回りしないようにね」

千秋に見送られながら、鈴井と共にグラウンドへ向かう。

利き足である右足でラインを跨ぎ、マウンドに上がったらロジンを付けてから一呼吸。

これが浜矢の投球前のルーティンである。

まずは7割ほどの力でストレートを4球投げ、そこから本気で変化球を各2球ずつ。最後に全力のストレートを投じて投球練習を終える。

——今日はスライダーが良さそうだし、久しぶりに決め球として使おうかな。

最近の浜矢の決め球といえば、もっぱらストレートかフォーク。

しかし元々はスライダーで三振を取っていくタイプだった彼女、久しぶりの相手というのもあるし良い機会だと鈴井は考えた。

「皆、後ろは任せたぞー！」

「シヨートは打たせていいですからね」

「センター打たせてくださーい！」

「じゃあライトも！」

緊張している1年生も多いだろうしと、浜矢が率先して声を掛ける。

試合開始のコールがされ、全員気合の入った表情になる。

——さて、初球は思いっきり投げてやる！

今年度初の投球はやっぱりストレート。

ノビがあり球速以上の速さを感じる良い球だ。

2球目はツーシームを引つ掛けさせようとするが外れる。

次は外角へのボール球のカーブを振らせて追い込んだ。

ラストは決め球として使うと決めたスライダー。

先程の球と似たコースだが、今度はストライクゾーンに収まるように投げる。

外れると思った打者は反応が遅れ見逃しの三振。

「よしっ」

浜矢の調子は良さそうで、子供のように楽しそうに投げている。

だが投げている球はプロ顔負けで、相手打線を力でねじ伏せていく。

「宣言通り三凡したよー」

「偉い偉い、伊吹ちゃんはやっぱり安心感があるね」

「へへー、もっと褒めて！」

しかし背後からの鈴井の冷たい視線を感じ、浜矢は勢いよく千秋から離れる。

「後輩の前でよくそんな事できるね……」

「鈴井もやればいいのに」

「別に嫉妬してる訳じゃないから」

2人きりの時、鈴井は千秋に甘えるということを知っている2人は、無言ではあつたが暖かい笑みを浮かべていた。

「……何？」

「いやーなんでも？」

「気にしないで良いよ？」

2人の白々しい態度にムツとしながらも、鈴井はベンチに座り次の守備の準備を始めた。

——粘るのは三好に任せるから、荒波は積極的に振ってけよ。

荒波はベンチからのサインを受け取り、打席で構える。

相手の先発投手は左、荒波は左投手に少し苦手意識を持っている。

初球の外角のスライダーには全くタイミングが合わず空振り。

ストリートには合わせるが、まだズレていてファールとなる。

——やっぱ左は打ちにくい……けど、私も先輩で1番なんだ。チームも打線も、引つ

張っていかなきゃいけないんだ！

彼女の昨年の成績は、手放しで褒められたものでは無い。

それを本人も分かっているからこそ、成長したいと考えている。

相手先発の決め球であるチェンジアップ。

それを荒波は一度足で地面を叩き、タイミングを合わせて弾き返す。

「おつ、良いバッティング」

「あの打撃が出来るなら1番は任せてよさそうですね」

——荒波を1番に起用したのは賭けだったけど、思ったより機能しそうだな。脚も速いし打率さえ上がればかなり嫌な打者になれる。

監督は荒波の持つポテンシャルを評価していた。

それを生かす為に、少し荒療治ではあるがいきなり1番として起用した。

「今のはヒットだからここ押して、打球はライト方向だからライトって所タップしてね」

「便利ですね……スコアブックは紙だと思っていました」

「紙でもいいけど、間違えたり見逃した時が面倒だからねえ……」

来年からマネージャーは春宮1人になる為、スコアブックの付け方を千秋が教えてい

た。

千秋がいつも使っているタブレットで、デジタルのスコアブックを付けている。

「まあ公式戦は紙なんだけどね、練習試合くらいは楽しよう！」

「ですよー……いつか公式戦でもデジタルになる日は来るんですかね〜」

「時代はデジタルだからね、もしかしたら近いうちに来るかも？」

いつか来ればマネージャーとしては嬉しい、そんな日を想像しながら2人はスコアを付ける。

回は進んで4回、未だ両チーム無得点の接戦。

浜矢の制球がいきなり乱れ出し、二連続で四球を出す。

「伊吹ちゃん平気？」

「ごめん、次はちゃんと投げる」

「打たれる心配なんてしなくていいんだから、思い切り投げてね」

「分かった」

——浜矢先輩はここから、立ち直れる。

ベンチで投球を見ていた洲寄は、それを確信した。

浜矢は神宮程のメンタルの持ち主では無いが、それでも強い方ではある。

一度間を取ったことにより、冷静さを取り戻した浜矢はここから三振と内野フライ、また三振で無失点で切り抜ける。

「あぶねー！」

「伊吹ちゃんはたまにこういう事あるよね」

「急に制球効かなくなるのは投手あるあるだと思っ」

しかしそこで修正出来るのが浜矢の強みだ。

ピンチを凌いだ良い流れのまま4回裏の攻撃に移る。

——三好はとにかく粘ってくれ、この回か次で降ろしたいし。

初球のスライダーは見送って1ボール、ストレートを2球続けられ2ストライクと追いつまれる。

——そこまで球も速くないし、粘れはする。

スプリットとスライダーを投げられるが、三好は難なくカットする。

その後も3球を粘りフルカウントとしてからの9球目。

「ボールフォア！」

「よしっ！ ナイセー」

最後はコースギリギリの球をしつかり見送って四球。三好の良さが出た打席だった。

「さて、この回で降ろすなら仕掛けましょうか」

「だな、上林頼んだぞ……」

三好と上林はサインにそれぞれ頷いた。

打球モーションに入ると同時に三好は走り出し、それに動揺した投手は真ん中付近に失投をする。

——もらった！

上林はその絶好球を逃さず打ち返す。

ヒットエンドランが成功しノーアウト一・三塁。

「よしよし、上林も意外と打てるな」

「何だかんだ打率4割超えですからね」

滋賀の魔術師と呼ばれた上林は、打撃も良かった。

中学3年の打率は4割を超え本塁打も二桁と、注目を集めるには十分な活躍を見せた。

「チツ……」

4番に座っている茶谷は内野フライに終わり、チャンスを活かすことは出来なかった。

「やっぱり佳奈利ちゃんは得点圏ですかね」

「長打力は本物なだけだなあ……」

守備も上手く、長打も多い茶谷の大きな弱点は得点圏打率。

中学での打率は4割3分だったが、得点圏での打率は2割台だった。

「まあ後ろに鈴井が居るから、別に決められなくても平気だな」

「美希ちゃんが後ろにいると楽に打てますよね」

「それで得点圏打率が改善されてくれればいいんだけど」

なぜ得点圏に弱い茶谷を4番に置いたのか、それは弱点を克服する為だ。

5番には打率が高く、どんな場面でも打てる鈴井がいる。

彼女の存在により茶谷が気を張らずに打てるようになって欲しい、2人はそう思っている。

「おっ、打った!」

「噂をすればってやつですね」

鈴井がスライダーを完璧に捉え、タイムリーツーベース。

上林は三塁でストップしランナーは二・三塁。

「真希ちゃんって意外と脚遅いですよね」

「イメージ的には速そうなんだけどな」

鈍足というほどでは無いが、決して速くも無い。

今までの至誠の部員の中で言えば、青羽以上鈴木未満といった位置。

「とにかくこれで先制！ それにここで回ってくるのは得点圏に強い美央ちゃん……」

「こういう場面好きそうだよな」

金属の甲高い音が響き渡り、外野は一步も動かず打球を見送る。

栗原の追撃となるスリーランが出てこれで4点差。

「美央ちゃんないばっちー！」

「サンキュー栗原！」

「イエーイ！ チャンスは任せて下さいよ！」

高校初試合でホームラン、そんな勝負強さを見せた栗原に手荒い祝福を浴びせる。

その次の瞬間にも打球音が響き、グラウンドの方を見ると川端がヒットを放っていた。

「渚ちゃんを7番に置いた理由はやっぱり……」

「ああ、下位打線からでもチャンスメイクが出来るからだな」

「とはいっても、ウチの8番と9番考えたらちよつと悪手ですよな?」

「それは言うな、岡田だつてたまには打つから」

しかし浜矢と岡田は連続で打ち取られ3アウト。

「早紀ちゃんは2割打てればいいんですけどね」

「本当に2割打てればこつちとしては満足なんだよ……」

「えっ? なんで2割で良いんですか?」

春宮はなぜ岡田は低打率で許されるのか、わからなかった。

「あまり野球見てない春宮には分かりにくいかも知れないけど、岡田の守備と走塁はプロの一軍クラスだからな」

「あれだけの守備があれば多少打撃が悪くても、スタメンで使う価値はあるんだよ」

「へえ……岡田先輩って凄いんですね」

純粹な目で岡田の方を見る春宮。

プロ野球の世界でも、守備がずば抜けて良い選手や負担の大きい捕手は2割5分打てれば万々歳と言われている。

「まあ岡田は元々違う競技出身だし、慣れるまではまだ時間かかるか」

「確か陸上部でしたっけ？」

「そう、結構有名な選手だったらしい」

岡田の話をしている間に5回表の守備が始まる。

先頭打者に投じたスライドフォークがすっぽ抜け、センターに運ばれるが。

「オーライ！ 任せて！」

「はい！」

岡田が声を出して自分が捕るとアピールする。

上林は岡田に任せ動きを止め、打球の行方を目で追う。

——え、この打球をセンターの先輩が？

「よっ、とー！」

「おお……ナイスプレーです」

「へへっ、まあ打てないんだからこれくらいはやらないとー！」

上林が間に合わないのでは無いか、そう思ったが岡田は足から滑り込んで華麗に捕球した。

「あの守備があるからなあ……打撃悪くても強く言えないんだよなあ」
「相変わらず上手いですね」

「でもあれくらい、センターの人ならできるんじゃないんですか？」

春宮の発言に、監督と千秋……果てには小林まで啞然とする。

「いやいや、今の捕れるのは凄いいんだって！」

「そうだよ!? 普通なら追いつけないんだよ！」

「そうですね、岡田さんレベルの選手でないと捕れません」

「勢いがすごい……けど、なんか簡単そうに見えました」

それは岡田の守備が上手すぎるからそう見えるのであって、実際にやってみればかなりの難易度の打球だと監督は言う。

「守備が上手い奴って、高難度のプレーでも簡単そうにやるから……」

「分かります、それに早紀ちゃん見た後だと他の選手のプレーが物足りなくなりました」
その後も岡田の凄さを語り合う2人に、話には付いていけないがちやんと聞きはする春宮であった。

6回も無失点で切り抜け攻撃を迎える。

打席は荒波からであったが、ここで監督が動いた。

「白崎、代打行くぞ！」

「はっ、はい……」

白崎はバットを持ちベンチからおずおずと出てくる。

——監督は、私を信じて送り出してくれた。浜矢先輩だつて私を受け入れてくれた……。

打席に立つと纏っている雰囲気は豹変し、今までの臆病そうな白崎の姿はなかった。

そこに居たのはただ貪欲に全てを喰らい尽くす、獣のような顔をした強打者だ。

初球はインハイにストレートが投じられる。

強打者には内角攻め、それが野球においては大事な事だが。

——この恩は、ここで打って返す！

白崎の1番得意な球は、インハイのストレート。

大好きな球を易々と見逃す訳がなく、打球は一瞬にして外野のフェンスに突き刺さる。

「相変わらずエグい打球だな……」

「あれで1年生ですもんね……」

「白崎さんは普段とのギャップがありますね……」

監督、千秋、小林の口にする事は違うが思った事は同じ。

白崎の打球速度はチームでもトップクラス、そんな打球がああ彼女から放たれているとは未だに思えなかった。

——つい打っちゃった……本当によかったのかな。

ダイヤモンドを一周しながら白崎は、自分の打撃に後悔していた。

中学時代、打ちまくった事により孤立した彼女はまた同じ過ちをしてしまったのでは
と思っていたからだ。

「杏紗——！ ナイバッチ！」

「杏紗すごいかったよ！ プロの人みたい！」

「……………優維ちゃん、夏輝ちゃん……」

——ベンチで迎えて貰えるってこんなに嬉しい事だったんだ。私、すっかり忘れ
ちゃってんだ。

「あつ、杏紗!?! 大丈夫……?」

「えっ?」

「な、泣かないで〜！ 変な事言ったなら謝るから！」

「泣いて…………？」

無意識のうちに白崎は涙を流していた。

ずっと周囲から蔑まれていた自分がやっと肯定された、それがどれだけ嬉しい事なのか。

それは白崎にしか分からない事だった。

「白崎、いいバッティングだったよ」

「浜矢先輩…………色々と、ありがとうございました…………」

「私はきっかけしか作ってないよ！ 実際に行動に移したのは白崎、な？」

「……………はい！」

一度俯いてから頭を上げた白崎の表情には、少し自信の色が混ざっていた。

いずれ至誠の最強打者となる素材を持つ彼女が、今この時過去と決別した。

「よしっ、最終回！ 完封狙うぞー」

「フラグかな」

「フラグじゃねーし！ ちゃんと抑えるもん！」

最終回まで無失点で抑えている浜矢に、辛辣な言葉を投げかける鈴井。

しかし彼女の言う通り、良いピッチングを継続している選手に対し、その事を告げると打たれるというジンクスは存在する。

「フラグクラッシュャー浜矢を舐めるな！」

「なにそれ……バカなこと言つてないで行くよ」

「あはは……伊吹ちゃん頑張つてね、それと灯ちゃんも」

「はーい！ しつかり守つてきます！」

完封を賭け浜矢が最終回のマウンドに上がる。

白崎の代わりに石川が登場しセンターは荒波、石川はライトに入る。

この時点で5点差、相手側は少し諦めムードが漂っている。

——高校野球なんて何があるか分からないだし、まだ諦めない方がいいのになあ。

浜矢はそんな事を考えながら、淡々と投げていく。

1人目は高めの釣りの球のストレートで空振り三振、2人目はフォークを引つ掛けさせショートゴロ。

「あと1人つすよ！ 三振取っちゃいましょ！」

「サードに打たれても捕りますよ！」

「せっかくなんでライトにお願いしまーす！」

——やっぱ至誠の雰囲気っていいなあ、声掛けあつて先輩後輩関係無く仲が良くて。

白崎はグラウンドの様子を眺めながら、そんな事を考えていた。

浜矢が最後の一球、渾身のストレートを投げた。

バットの先に当てられた打球は、力無い打球となり石川のグラブに収まる。

「よっしゃ、完封！」

「伊吹ちゃんナイピ！」

「ホントにライトに打たせてくれてあざっす！」

「いやそれはまぐれ」

マウンドに集まり完封勝利を飾ったエースを讃える。

「……えと、ナイスピッチ、でした……」

「白崎もありがとね！ 打ってくれて助かったよ」

「杏紗には負けてらんないな」

「先輩なのに、後輩より打てないとか笑い事じゃないからね……」

白崎が浜矢に声を掛けると、荒波や岡田も寄ってくる。

「後輩にライバル出来ちゃったな！」

「……………ライ、バル」

「おう！ まあ私らは打てなさすぎるから目標みたいなもんだけどね」

——私も向き合ってくれる、ライバルだって言ってくれる。……ああ、本当に至誠に入って良かった。

「どうだ？ 良いチームだろ？」

「監督……………はい、最高のチームです」

過去と決別し、最高のチームと出会いスッキリした顔をする白崎。

「……………」

しかし、そんな彼女を面白く無さそうな顔で見る者が1人いた。

第5球 君と私の同族嫌悪

相模中央との試合が終わってから数日が経った。

初陣を白星で飾れた事に満足はせず、彼女達は今日も厳しい練習を続けている。

「5—4—3のゲッツーいくよー！」

「しゃーんーいー！」

川端の左側に向かって緩い打球が打たれる。

がっちりと捕球して二塁に送り、茶谷が受け取って一塁に鋭い送球をする。

「渚ちゃん捕つてから遅いよ！ 佳奈利ちゃんはまだ少し正確に！」

「はいっ！」

「はいー！」

——こうして見る分には、普通なんやけどな。

上林は自分に対しての態度と、それ以外の人への態度の違いに納得がいつていなかった。

「二遊間ゲッツーねー！」

「あ、はい！」

上林が捕球し二塁の茶谷へグラブトス、ボールを受け取った茶谷がジャンピングスローで一塁へ送球。

今までの経験で学習した上林は、茶谷の動きを読んで華麗に避ける。

「つたく……相変わらず人の邪魔しようと思死なんやな」

「これくらいで邪魔なんて思うんだー？」

「ほんまに腹立つな……ま、他の人にはやらんといてや」

あしらわれた事が不満な茶谷の顔は、初対面の時の爽やかな雰囲気は全く無い。

ただただ上林を不機嫌そうに睨み付けている。

——佳奈利ちゃん……。

そんな2人の様子を心配そうに見守る者が。

「か、監督……」

「白崎？ どうした」

「えと……佳奈利、ちゃんの事で相談が……」

白崎からその名が告げられた瞬間、監督は周囲を見回す。

茶谷が居ないと確認してから白崎に話を伺う。

「その、佳奈利ちゃん、って……な、何かあったんですか……?」

「……白崎には、教えといってもいいかもな」

「そう、なんですか……?」

「まあ今の茶谷をどうにか出来るのは、白崎くらいだと思うし」

監督は千秋に事情を説明してから部室に入る。

白崎も入室してから鍵を閉め、ゆっくりと話し出す。

「まず初めに……アイツは孤児だ」

「えっ……」

「家族が騙されたか何かでアイツの事を養えなくなつて、それで結果としては施設に預けられたらしい……私もあまり詳しくはないんだ」

——だから、他の人にあんな態度を……。

今までの茶谷の行動も、この理由なら納得出来た。

「それが原因で人間不信になつたんだって」

「……………そう、なんですね」

「実力は十分あるのに、どこか他人を信じ切れない……だから周りを蹴落とそうとしてるのかもな」

「佳奈利ちゃんは、蹴落とそうとは思って、ないと思います……」

白崎がいつもよりハッキリとものを言い、それに驚いた監督の目が少し開く。

「それが分かつてるなら、やっぱり適任は白崎だな」

「私が、佳奈利ちゃんを……?」

「任せてもいいか? 無理そうなら誰かに頼むし」

——多分、監督の言う通り私が適任なんだ。だったら……。

「分かりました……私が、やります」

「白崎……ありがとう、頼んだよ」

「き、期待はしないで、ください……」

茶谷の本音を引き出し、また心を開いてもらうようにする役目は白崎が請け負った。

翌日の練習後、グラウンドの裏で休憩している茶谷に接触する。

「あの、佳奈利ちゃん……」

「んー? 杏紗なに?」

人の良さそうな笑顔で対応してくる茶谷。

だがそこには胡散臭さが滲み出していた。

「その、佳奈利ちゃんって、他人が嫌い……なんだよね？」

「……はっ？」

一瞬にして茶谷から笑顔が消えた。

そんな彼女を見て白崎は自分の体から嫌な汗が出るのを感じる。

——完全に言葉のチョイス間違えた……！　こんな事になるなら、もうちよつと頑張つて人とコミュニケーション取っておけば良かった……！

「えっと、違くて、そのっ……！」

「……嫌いだよ、というか好きになる必要なんてあるか？　誰も信用出来ないのに？」

「それは……」

茶谷は初めて本当の顔を見せた。

目は鋭くつり上がり喋り方もキツく、声が低くなる。

「お前みたいなのが一番嫌いなんだよ！　いつもウジウジして、そのくせチャホヤされたら他人と仲良くして？　そんな奴に私の何が分かるんだよ！」

「っ、……分かるよ！」

普段は声が極端に小さい白崎が、喉を締めるようにして叫んだ。

その姿に茶谷は目を見開くが、白崎は構わず勢いそのまま喋り続ける。

「確かに、私は孤児ではないから佳奈利ちゃんの気持ちを完全には分からない……！
けど、皆に自分を否定されたり、ただ罵られたり大切な人に裏切られたりする哀しみは、
分かるよ……！」

「……………」

そう言い切った白崎は肩で息をしながら、茶谷の顔を見る。

白崎には辛そうで苦しそうな、それでいて寂しそうな表情をしているように映った。

「佳奈利ちゃんは、怖いんだよね……？」

「……………怖くはない」

「本当の自分を嫌われるのが怖くて、それで最初から嫌われるような態度をとってる
……………」

「っ！ 違う……！」

口では否定していたが、明らかに動揺していた。

本音を引き出すなら今しかない、白崎はそう確信した。

「……………けど、佳奈利ちゃんは本当は優しい」

「そんな事ない！ 私は、私は……………」

「だって、本当に真希ちゃんのこと、怪我させようとしてなかったし……それに、チームを崩壊させようとしなかった……」

——真希ちゃんの事を本気で嫌ってるなら、多分本当に怪我させていた筈。でも佳奈利ちゃんはやんと避けられるような動きをしていた。

「……ここなら本当の自分でも平気だよ、誰も否定する人なんていないよ……」

「何でそんな簡単に言えんだよ！ お前は、私と同じだと思ってたのに……！」
「同じだよ……今でも、そう思ってる」

白崎は絶対に退かないと決めた。

茶谷を救い出せるのは自分しかない、そう考えていたから。

「確かに、最初は誰も信じられなかった……他人が怖かった、けどね、その生き方が息苦しかったんだ……佳奈利ちゃんも、きつとそうでしょ？」

「っ……！」

何も言えないでいる茶谷の手を、白崎は優しく包み込む。

自分が千秋にされたのと同じように、優しく。

「変わるう？ 私も佳奈利ちゃんも……その、いきなりは無理かもだけど……」

「ハア……」

白崎の最後の言葉に、ため息を返す茶谷。

「最後の最後で自信無くすなよ……ったく」

「ご、ごめんね……なんか、上からだったなって……思ってた」

「ほんとだよ……なんか冷めたわ」

「うう……ごめんね」

先程まで背筋を伸ばして茶谷をしつかりと見つめていた彼女だったが、今は普段通り猫背で目を合わせなくなってしまった。

——いつも自信無さそうでウザかったけど、意外と度胸あんだな。……たまには人を信じてバチは当たらないよな。

「なあ、私の話……聞いてくれるか？」

「えっ……いい、の？」

「面白くはねーぞ」

「……聞かせて！」

茶谷が地面に座り、それに続いて白崎も座る。

深呼吸を1回、2回。そして茶谷は語り出す。

「私の家族さ、騙されて借金背負ったんだ」

「……………うん」

「それで私を育てきれなくて、そんで施設に入れられた」

——監督の言つてた事は正しかったんだ。

「私の親は借金背負わされてからおかしくなつてき、少しだけ私に暴力も振るうようになつた……………」

「だから他人が……………」

「ああ、まあ施設での暮らしは不満ないけどな」

グラウンドのフェンスに寄りかかり、空を見上げながら言う。

「な？　面白くなかつたろ？」

「ま、まあ面白くはないよね……………」

「杏紗の話も聞かせろよ、私だけ是不公平だ」

「えつ、私の話も面白く、ないよ……………」

いいから聞かせろという茶谷に負け、白崎は自身の過去を語る。

中学時代のチームは強くなかつた事、自身は4番を打っていた事、その為周りから孤立した事を全部。

「ただの逆恨み……てか嫉妬じゃねえか」

「あはは……けど、私の態度も問題だったと思う、よ」

「そうなのか？」

「うん……あの頃の私は、褒められたら喜んでたから……他の子の気持ちも考えずに」

茶谷はその発言に、あからさまな嫌悪感を出す。

「褒められたら喜んでいいに決まってるだろ！ お前ほんとそいつらに悪い意味で影響

されてんじゃねえよー！」

「えっ、えと……」

「大体、打てる奴が褒められんのは当たり前だろ！ それを勝手に外野がグチグチ言い

やがって……」

——なんか、佳奈利ちゃんのキャラ変わった？ いや、これが本当の佳奈利ちゃん

……なのかな。

「……………ふふっ」

「あ？ 急に笑ってどうした？」

「いや……なんか、こっちの佳奈利ちゃんの方が、好きだなあって」

「お前変わってんな……」

まさか本当の自分を好きと言われるとは思わず、茶谷は怪訝な顔をする。

「そうやってキツパリ言ってくれるの、嬉しいよ?」

「あー……まあ、人間裏で何考えてんのか分からねえもんな」

「うん、だからこれくらいが良いな」

その言葉を聞き、茶谷はニヤツと笑う。

悪戯を思い付いた子供のような顔をしていた。

「でも正面から嫌いって言われたらお前泣くだろ」

「そ、それは当たり前だよ……」

「それでこっちの私好きって……」

「……佳奈利ちゃんは、そういうこと言わない、から」

えへへ、とはにかんで茶谷の方を見る。

その笑顔を見て顔を赤くした彼女は、見られないように顔を背ける。

「何でそんな事言えるんだか……まだ本性隠してる可能性はあるんだぞ?」

「……今まで、人の顔色伺う事が多かったから……大体分かっちゃうんだ」

「ああ……」

心当たりがありすぎる2人は揃って遠い目をする。

愛想笑いを浮かべ、顔色を伺い続けた2人は、大体ではあるがその人の本心を読むことが出来る。

「まっ、何はともあれ……ありがとな、私と向き合ってくれて」

「……ううん、これはただの自己満足だよ」

「けど私はお前に助けられたよ」

茶谷が立ち上がり手を差し出す。

手を出したり引つ込めたりしたが、意を決して白崎は彼女の手を握る。

「これからは本心出して過ごしてみろわ、楽だし」

「うん……でも、その前にやる事、あるよね？」

「えっ？ 何かあったか……あつ」

——上林の事か……。

「……ちやんと、上林には謝るから」

「うんっ！ もしそこで喧嘩しても、私が止めに入るからね」

「お前本当は私の事信用してないよな??」

「逆に、信用してるよ……?」

「白崎お前え！」

軽口を叩かれた茶谷は白崎を追いかける。

怒った口調をしているが、ほんとうに怒っている訳ではない。

だからこそ白崎も追いかけれながら笑っている。

そこには、彼女達がずっと理想としていた友人像があった。

翌日、宣言通り上林に謝罪しようと決めた茶谷。

彼女はベンチに座っており、いつでも声を掛けられる状態。しかし茶谷は一向に声を掛けに行かない。

——いや、何て言えばいいんだよ。今までの行動から許してもらえる確率低くね？

「佳奈利ちゃん……」

「いや、ちゃんと謝るから……ホントこういう時、ちゃんとコミュニケーション取ってなかったの後悔するわ」

「！……わ、分かるよ、その気持ち……！」

「言つとくけど私は会話はしてたからな」

白崎と話した事により覚悟が出来たのか、上林の元は歩いていく。

「……あのさ」

「なに？」

「その、今まで……悪かったな、危ないプレーとかして……」

上林は大きく目を見開いて唾然としていた。

それもそうだろう、つい先日まで自分に突っかかってきた彼女がいきなり謝罪してきたのだから。

「……別人？」

「ちげーよ！ くそっ……もうあんなプレーはしないし突っかかんねえ！ はい話は終わり！」

「ちよつ、まだ状況が……！」

上林が呼び止めるが、そんなのは知らないと言わんばかりに茶谷は去った。

それと入れ替わるように白崎が近づく。

「あれね、本気で謝ってるから……許してあげて欲しい、な」

「杏紗まで……何かあったの？」

「私からは言えないかなあ……」

「分かった、行ってくる」

自分であの行動の真意を確かめようと、上林は茶谷を追う。

「佳奈利！ 全く……自分だけ言いたい事言つてどっか行かんといてや」
「うっせ……」

「杏紗から佳奈利の事は本人から聞けつて言われてんけど……」

「杏紗のやつ……」

観念した茶谷は自身の事情を全て話した。

「そんな事があつたんや……大変やつたね」

「別に、これくらい平気だけど」

「……ごめん！ 私も色々酷いこと言うてしもて……」

「私が最初に煽つたんだから、謝んなよ」

それでも納得がいけないといった表情を浮かべる上林に、呆れた顔をする茶谷。

「本人が良いつて言つてんだからいいんだよ！」

「それは……そうやけどさ」

「お前はもう怒つてないんだろ？ 私もお前の事嫌いじゃない！ それでこの話は終わり」

「……ありがとう、佳奈利」

——素直やないなあ。

上林はそんな事を考えながら、黙って茶谷と共にグラウンドへ向かった。

遠慮の無くなったこの2人が至誠の二遊間を守る、それはチームにとつて大きな戦力アップとなるだろう。

第6球 弱点を克服せよ

今年もまたGW合宿が始まった。

監督と千秋は指導を、小林と春宮はドリントクの準備をしている。

「川端は三塁線の打球捕る時に、正面に入るの直そうな」

「けどずっとそうやって教わってきたんですけど……」

「中学と高校じゃ打球の強さは違う、三塁線の打球は全部逆シングルで捕るくらいの意識でやらないと」

「監督が言うならそうなんですね」

プロで三塁手を守った経験のある監督。

その彼女が言うのであれば、間違っではないだろうと判断した。

「そもそも正面に入ると捕りにくいだろ、体で止めたとしてもそれで怪我したら意味ないし」

「まあそうですね、実際それでアウトに出来なかつた事もありますし」

「ウチではどんなやり方でもいいから、とにかくアウトを取ることを重視してるからな」

茶谷のような派手なプレーでもいい、上林のような基本に忠実なやり方でもいい。

とにかく取れるアウトを逃さなければ何でもいい、それが監督の守備に対する考え方だ。

「だからベアハンドだつてやっていいんだぞ、てかそれじゃなきや間に合わないのだから迷わずやってくれ」

「ジャンピングスローもいいんですよね、至誠つて自由ですよね……」

「基本が出来ているのが前提ではあるけどな」

基本に忠実すぎるのも良くないが、難しい派手なプレーばかりするのも好ましくない。

状況に応じて最適なプレーが出来る選手を求めている、と監督は言う。

「そういう点では、鈴井とか上林辺りを見習うといいかもな」

「確かに……真希つて時々大胆なプレーする時ありますしね」

「ああ、あれはその動きじゃないとアウトに出来ないつて分かつてるからだな」

上林のプレーこそ、監督が理想としているものだ。

それを川端に教え込むべく、付きつきりで練習をする。

「ボールを捕る前の左足は力を入れて、捕った後は右足に力を入れて……そうそう！

それで姿勢を低くしたまま切り返して一塁送球」

「こうですか?」

「上手いじゃん、毎日続けていけばもっと上手くなるぞ」

「……ありがとうございます」

川端は赤面しながら、恥ずかしそうにクラブを弄る。

同じ三塁手である監督に褒められた事は、彼女にとってもかなり嬉しい事だったのだらう。

「基礎は十分すぎるほど出来てるから、応用もサラッと出来るんだな」

「そうなんですかね……あまり自覚は無いです」

「このままいけば、私の現役時代より上手くなれると思うぞ」

「そ、それは流石に言い過ぎじゃ……」

怪我で肩こそ弱かったものの、守備の安定感流石と言ったところだった。

恐らくフルシーズン出ているればGG賞も夢ではなかっただろう。

監督が熱心な指導を仰いでいる側で、千秋も外野陣に練習指示を出していた。

「2年生4人はこれね!」

「何ですかこれ?」

「中上さん達が寄付してくれたピッチングマシン！ 変化球も対応してるから4人には
ぴったりだと思っようよ」

「おお……！ これでもいいでも打撃が鍛えられますね！」

投手が4人いるとはいえ、人である以上1日に投げられる球数には限度がある。

更に全球種を投げられる訳ではないので、自分の苦手な球種を投げられる投手がいな
かった場合は対策が出来ない。

このマシンはそんな悩みを解決してくれる。

「球速もかなりの速さまで対応してるよ」

「完璧じゃないですか！ よーし、バリバリ打つぞー！」

「私も私も！」

「落ち着きなよ……私がやる時間取つといてよ！」

4人とも大興奮でマシン打撃に近寄る。

荒波は外角の変化球を、石川は内角の速球を、三好は速球を、岡田は変化球も速球も
全て対応出来るように打ち込む。

川端の指導が終わった監督は、栗原と茶谷に狙いを定めた。

「さてと、魔の一二塁間をどうにかしなくちゃな」

「何ですかその呼び方——！」

「監督がそんな事言っちゃいけないんだ——」

魔の一二塁間、と呼ばれご立腹な2人。

そんな2人の反論は気に求めず監督は話を続ける。

「栗原は一塁つてことを考えたらエラー多いし、茶谷は送球雑だし……魔の一二塁間だろ」

「まあ打撃型つてことで……」

「だとしても許容出来ないから守備練やります」

監督の指導からは逃れる事は出来なかつた。

栗原は守備力の底上げを、茶谷は送球の精度を上げる為練習を始める。

——栗原はとにかくノックだな……川端とは逆で基礎をしっかりとこなさないと。茶谷は壁当てでもしてもらうかな、地味だけど精度は上がるだろ。

「茶谷は壁当てな」

「えー、地味っす」

「ただ呆然と当てるんじゃないやなくて、的を作つてそこを狙つて投げてくれ」

「はい」

渋々とだが、言う事は聞いて壁当てを始める。

普通に当てて返つてきたボールを掴みまた投げ返す。

それだけではなく、ノックを打つてもらい実際の打球を捕つてからのに当てる練習もする。

「栗原は……意外と強い打球は捕れるんだよな」

「イレギュラーとかワンバンが苦手です……」

「とにかくバウンドする打球が苦手と……一塁でそれつて致命的だぞ」

「ですよー……ウチの内野肩強い人少ないから、皆結構ワンバン送球してきますし」

川端と上林は肩があまり強くはない。

平均程度はあるが、強肩かと言われればそうではない。

その為難しい打球を捕つた際はワンバウンドでの送球が主となる。

「イレギュラーとハーフバウンドは捕れなくても仕方ない！　けどワンバンは絶対合宿中に捕れるようにするぞ！」

「はいっ！　いくらでも練習しますっ！」

その宣言通り一時間にも渡るノックが行われたが、栗原は弱音を吐く事なく打球を受け続けた。

「よしっ、終わり！ 飲み込み早いなー、偉い偉い」

「えへへっ、伸び代はまだありますよ！」

「なら監督の私がそれを伸ばしてやらないとな」

敵しいノックの後に褒められてご満悦の様子。

ノックを受ける前と後では、バウンドした球への対応力が見違えるように上手くなっていた。

「投手の皆さん、ドリンクはここに置いておきますね」

「あざっす！ じゃあ春宮タイム頼んだよ」

「任せてください！ まずは3分間ストライク投げっぱなしで！」

「了解、いつでも良いよ」

室内練習場では、投手陣と捕手でインターバルピッチングを行っていた。捕手の人数不足によりまずは浜矢と牧野の2人から行う。

「マツキーはコントロール良いね」

「けど球威は無さそうかな……浜矢先輩は凄いね、風を切る音が聞こえてくる」

「シューって音するよね！ でもコントロールはあんまり……」

——空よりかはマシって言いたいな……。

「今私よりはマシって思ったでしょ！」

「バレた？」

「いやまあ自覚してるしね……」

そう言つて項垂れる神宮の頬を突く洲崎。

「やわらかい……正月太りまだ残ってる？」

「元からですー！ 体重はもう元通りだもん！」

そんな風に2人が戯れている間に、3分間の投球は終わり春宮が終了の笛を鳴らす。

「浜矢先輩お疲れ様です」

「ありがとう」

「マツキーお疲れ！」

「ありがとうございます」

浜矢には春宮が、牧野には神宮がドリンクを手渡す。小林と洲崎がタオルを渡し2人は汗を拭く。

「えー、2分休んで1分で肩作つて、今度は3分で外のストレート！ 18球投げて下さいね」

「りょーかい」

全て3分間の投球ではあるが、指示は毎回違う。

最初はどの球種でも良いのでストライクを投げ、今回は外角のストレートののみ。しかも時間内での球数指定もある。

「みなさんこんな練習やられてたんですね」

「良い練習でしょ？ 実戦の感覚掴めるし」

「ですね、普通の投げ込みより効果ありそうな感じがします」

牧野と浜矢がこの練習について話していると、春宮から2分経過の合図がされた。

「よしっ、肩作って外の直球か」

「18球投げて下さいね」

「了解」

1分で肩を作り外角へと投げ込む。

捕手はスコアカウンターでストライクとボールの割合を測る。

「終わりです！ また2分休んで1分で肩作って、今度は内角のストレート！」

「ふいー、キッツイ……」

「伊吹ちゃん11球しかストライク入ってなかったよ、せめて13球はストライク投げ

て貰わないと」

「あれ、そんなもんだった？ 次から気を付ける」

何球ストライクが投げられるかの基準も決められている。

浜矢とは対称的に、牧野は18球中15球ストライクを投げていた。

「はい、休憩終わりです！ 内角のストレート18球！」

「もう終わりか……頑張ろ」

「意外としんどいですね、これ……」

休憩が挟まれる度に、また肩を作り直さなければならぬ。

その為疲労がどんどん蓄積されていき、より実戦に近い感覚を掴める。

「内角投げられるようになれば、投球の幅も広がるもんね」

「空はノーコンなのに内角バンバン投げるから怖いんだよね」

「でもそこまで当ててないよ？」

「そのメンタルが羨ましいよ……」

メンタルが強すぎて何事にも動じないというのは、投手としては良い事なのかも知れない。

「終わった……疲れた……」

「さ、最後は外に変化球です……15球」

「3分で15球か、ゆっくり投げられるね」

直球を3回投げ終わり最後は外角の変化球。

疲れている時こそ変化球をミスせず投げられるかが大事になってくる。

休憩を終え肩を作り、3分で15球の変化球を投げ続けた。

「伊吹ちゃんは10球ストライク、まあ及第点かな」

「湧は12球ストライク、凄いね」

「まあコントロール命だし」

2人はストライクの割合を確認しているが、かなりくたびれている様子だった。

「2人ともお疲れ様でした、おにぎりもあるので食べながら休んで下さい」

「先生く！ありがとうございます……」

「お言葉に甘えて、いただきます」

牧野と浜矢は休憩し、その間に神宮と洲崎がインターバルピッチングを開始する。

洲崎が基準をクリア出来たのに対して、神宮は基準を下回る結果となった。

「去年よりはマシかな」

「だよね！ だからセーフ！」

「セーフではない、もつと制球磨くよ」

「はい……」

洲崎は疲労困憊といった様子だが、神宮はまだ余裕がありそうだった。

——このスタミナがあるんだから、本当に制球さえどうにかなればエース級なんだけどな……。

「……なんか悪口考えてた？」

「考えてないよ、本当に制球さえ良くなればって思ってただけ」

「うう、夏までには頑張るから……！」

リリース投手としても制球は良い方がいい。

投手陣は夏までの課題が明確となった。

打撃練習を終えた上林が、監督にメニューを尋ねにくる。

「私は何をすればいいですか？」

「あー……じゃあ守備練するか」

「私の扱い雑やないですか？」

「いや、上林って弱点らしい弱点がないから」

——まあその分、飛び抜けて凄い能力も無いけど……チームとしてはバランス型が1番助かるんだよな。

「強いて言うなら守備範囲かな……ちよつと狭いよな」

「それは自分でも分かっています、何をすれば広く出来ますか？」

「打者を観察する事だな、その打席でのタイミングの取り方や打ち方、そもその打撃傾向……それらを観察してどこに打球が来るのかを予測するんだ」

それが分かれば一歩目が速くなり、結果的に守備範囲が広がると監督は教える。

「あとは守備の時の構え方かな……姿勢とかも自分のスタート切りやすい格好でいいぞ」

「低くしないでいいんですか？」

「私は現役時代高くしてたな、その方が動き出しやすかったし」

自分は外野手のように、中腰で構えていたと言う。

「まあ私のアドバイスを全部受け入れる必要はないぞ、あくまで参考程度で！ 自分のやりやすいやり方が1番だ」

「はい、早速ノック打って貰ってもいいですか？」

「もちろん」

まずは基本の動きをさせる為に、正面への打球を。

段々と難しくしていき、終盤は飛び込まなければ捕れないような打球まで打つ。

「よしよし、これなら夏には間に合いそうだな」

「ありがとうございます！」

——さて、あとはあの2人か……。つて、もう千秋がやってきてるな。

ベンチで白崎と佐野、そして千秋が話している。

「2人には外野も守ってもらいます！ 杏紗ちゃんはレフト、夏輝ちゃんはライトね」

「センターは無理として、両方守れた方が良くないですか？」

「2人の利き手かな、左利きはライトの方が守りやすいって聞くし」

「なんでですか？」

選手ではないから詳しい事は分からない、と千秋が意味ありげに笑いながら言う。

視線は近くにいた白崎に向いていることから、彼女に理由を言ってもらおうように頼んだのだろう。

その視線を受けて白崎が小さな声で話します。

「えっと、ライトはセカンド方向に投げる事が多い、から……左利きだと動きに無駄がない、らしいよ……」

「んー? ……なるほど! 杏紗は物知りだな」

「そ、そんな事ないよ……」

言葉で言われただけでは分からなかったが、実際に送球の動きをしてみるとライトの方が投げやすい事に気付いた。

「利き手で守りやすいとかあるんだ……」

その会話を聞いていた春宮がぽつりと呟く。

「あるよ、内野だと左利きはファーストぐらいしか守れないし」

「そうなんですか? えっと、一塁の方投げるんだから……あつ、確かに左利きはやりにくいですね!」

「でしょ? まあアマチュアだとたまくに左投げの内野とかもいるけど、本当に稀だからね」

左投げの内野は話題になりやすいが、大成する事は殆どない。

右投げに比べ左投げは、一塁に送球するのに時間が掛かる。

プロの世界でその少しの差は致命傷だ、だから取らない。

「まずは軽くノックから入ろうね! 内野のフライとはまた違う打球だからゆっくり慣れてこう!」

「はいー」

「……はい」

外野フライは内野フライに比べスピンの掛かっている事が多い。その為逃げていくような軌道にもなり、それを捕るのは難しい。

——慣れてる分杏紗ちゃんの方がフライの追い方は上手いけど、やっぱり内野から外野って大変だよね……。思った以上に時間はかかるかな。

「そっちはどうだ？」

「監督！ うーん……思ったより時間はかかりそうですね」

「そうか、千秋がいる間にはしておきたいな」

「そうですね……今年で卒業ですから」

浜矢と鈴井、そして千秋は今年で卒業する。

投手と捕手1人ずつしか居なくならないので、大幅な戦力ダウンにはならない。

しかし浜矢のチームを引っ張る力、鈴井のリード力、千秋の分析力と指導力が無くなるのは痛い。

「千秋がいなくなると忙しくなるな」

「コーチさんとか雇われないんですか？」

「私が要望出しても届くかな……それに」

「？」

「……いや、何でもない」

——千秋と比べるかも知れない、なんて言えないよなあ。

そんな事を口にしてしまったら、この子は自分の為に進路を変えてしまうかも知れない。

それだけは絶対にして欲しくないと監督は思っていた。

「今日の練習はこれで終わり！ 自主トレしてもいいけど、明日以降の練習に支障がない程度にな」

『ありがとうございました！』

「しゃーしたー」

濃密な合宿初日は終わった。

疲労を見せているものが殆どだが、3年生は流石にまだ余裕がありそうな表情。

弱点は分かりその対策も練ることも出来た、有意義な1日となった。

第7球 勝利の方程式

それぞれの課題をこなして合宿は最終日を迎えた。

最終日ということもあり疲労は溜まっているが、それでも練習は終わらない。

「今日はダブルヘッダーやるぞー！ 1試合目は浜矢と牧野、2試合目は洲崎と神宮の継投でいくぞー！」

「ワク頼んだぞー！」

「はい、必ず抑えます」

監督は違うタイプの投手を継投させようと考えていた。

本格派の浜矢の次にはアンダースローで技巧派の牧野を、左の変化球投手洲崎の次には右のサイドスローで速球派の神宮を投げさせる。

「人数増えるところという継投考えられるのいいよな……」

「本格的にプロ球団みたいな投手運用になつてきましたね」

話し込んでいると試合開始の時間がやってきた。

じゃんけんにより先攻を手にした至誠の攻撃が始まる。

——さて荒波は……鋭いスイング意識してけ。

——了解。練習の成果見せてやる！

荒波は初球から強く振っていきファール。

2球で追い込まれたものの、3球目の甘く入ったカーブを捉えツーベース。

「ナイバツチ荒波！」

「次は耀ちゃんですね！ どうしますか？」

「うーん……バントさせてもいいけど、せっかくだし打たせるか」

ヒッティングのサインを出し、三好はそれに頷きを返す。

コースを突いた難しい球はたとえストライクであろうと見逃す。

——追い込まれたら粘る……そして焦ったくなつて勝負を急いだ時の球を、打つ！

5球粘った後のストライクを取りに来た球を打ち返す。

一・二塁間を破った打球はライトに捕球される。

「友海、ゴー！」

「OK！」

しかし荒波は三塁で止まらずホームに突っ込む。

それを見たライトは助走をつけてバックホーム。

——タイミングは同時、けどタッチされなきや私の勝ちだ！
荒波はタッチを掻い潜るように体を振りながらホームベースへ滑り込む。

「セーフ！」

「よっし！ 1てーん！」

好走塁により初回から1点を先制した。

「ヒヤヒヤする走塁するなー」

「だって空が走れって言ったんですもん」

「あいつ……まあセーフだから良いか」

少しタイミングがズレれば、荒波の走塁が上手くなければ完全にアウトだった。

三塁コーチャーは人を選ばなければならぬと感じた監督だった。

その後は抑えられ追加点は無しで、裏の守備を迎える。

「今日はストリート中心に投げようか」

「おっけ、無失点目指すぞー！」

——少し前までは何失点までなら平気、とか言ってたのに今じゃ無失点狙いか。……
成長したね、伊吹ちゃん。

相方となる浜矢の成長を感じながら、鈴木はデータをもとに配球を組み立てる。

最高の信頼関係が築かれた2人だ、サインに首を振る事は無く投げていき宣言通り5回まで無失点の好投をする。

「疲れたー、ワク後は頼んだよ!」

「任せて下さい」

ここで浜矢は牧野にバトンタッチ。

6回表の攻撃は3番に入った茶谷から。

——まだホームラン無しとか笑えねえ、杏紗も美央も打ったんだ……私が打たないでどうすんだよ!

同い年2人に先を越されたのが悔しかった茶谷は、フルスイングで打球を捉える。

打球は一直線にレフトスタンドに向かっていき、フェンスに当たり地面に落ちる。

「佳奈利ー、ナイスホームラン!」

「はっ、お前らには負けないからな!」

「言ったなー!?! 私のが打つもんね!」

「わ、私はスタメンじゃ、ないし……」

白崎は守備力の低さによりベンチスタート。

佐野も同様の理由で控えとなり、2人とも出場するとすれば代打の切り札としてだ。

「湧、今日の調子はどう?」

「スライダーがあまり曲がらないですけど、チェンジアップは良さそうです」

「そっか、じゃあ決め球はチェンジアップにするからすっぽ抜けないようにね」

「分かました」

圧倒的な制球力を誇る牧野は、四隅を突く投球で2イニングを完璧な投球で抑える。ダブルヘッターの初戦は3対0と、完封リレーで勝利した。

「第二戦は洲崎と神宮の継投、頑張れよ」

「真理、私達の継投だよ! もっとテンション上げてよ!」

「はいはい」

「もー! 彗も何か言ってあげて!」

「はいはい、浮かれてコントロールミスらないでね」

伊藤にも同じようにあしらわれ、拗ねた顔でベンチに座る神宮。

「ほっぺ膨らんでる、押してやる!」

「ははっ、空気出た! かわい」

「私のほっぺはおもちやじやないー!」

拗ねて膨らませた神宮の頬を、荒波がつついて空気を出させる。

その様子を見て楽しそうに笑う岡田に、それに対してまた拗ねる神宮。

「友美! そんなに楽しそうにしていいのかな? ……私がレギュラー獲るぜ!」

「何?!? そうはさせないからな!」

「私のが危ないと思つてたけど、意外とセーフなんだなあ」

今日は荒波の代わりにライトで出場する石川が、荒波を煽る。

それに乗っかりはしやぐ2人を見て、自分はレギュラー争いに巻き込まれない事に安堵する岡田がいた。

「……………」

「真理、行こう……私達も巻き込まれるから」

「うん」

アレに巻き込まれたら絶対面倒な事になる、そう直感した2人はそそくさとグラウンドに向かう。

「今日は何中心に投げる?」

「……アレの具合を確かめたい」

「ああアレね、分かった」

何回か言葉を交わして2人は別々の場所で構える。

試合開始のホイッスルが鳴り、ダブルヘッダー二戦目が始まった。

——早速アレから頼むよ。

——いきなりか……まあいいけど。さて、この球がどれくらい通用するかなっ！

投げられたのはストレートに近い軌道の球。

初球から積極的に振ってきた打者は、ヒットを確信したが打球は思ったよりも飛ばずセンターフライ。

詰まるような感覚を覚えた打者は不思議そうな顔をしてベンチに戻っていく。

ベンチでも浜矢が初めて見た球種に驚きの表情を浮かべていた。

「監督、せんしゅー、今のは？」

「いや、私も見た事ないんだけど……ストレート系だよな」

「ツーシームでは無さそうでしたね」

「……ムービングボールか？」

——よしっ、ムービングは意外と良さそう。金属だから飛ばされはするけど、飛距離

は抑えられてる。

洲寄が投げたのはムービングファストボール、いわゆる癖玉と呼ばれる物。

投げ方は様々なものがあり、ストレートと同じ握りでリリースだけ変えたり、わざと縫い目にかけてずに投げたりなど。

小さく鋭い変化をする事から、主に木製バットを相手に猛威を振るう球種だ。

「けどなんでムービング？ 金属なのに……」

「まあストレートと同じ腕の振りで投げられるからな、負担は少ないだろう」
「それにあの変化量なら金属相手でも少しは効果ある……かも」

ムービングの弱点は洲寄も分かっている。

だから少しでも変化量を大きくして、芯を外せるような球に進化させた。

新たな武器を手に初回を3人で抑えた洲寄がベンチに戻ってくる。

「ナイピ！ あれはムービング？」

「はい、ウチの守備……特に外野なら打たせて取る戦法が使えますからね」

「確かななあ……ウチの外野はアマチュアレベルじゃないもん」

驚異的な守備範囲と打球判断能力を持つ岡田がセンターに居て、彼女には及ばないが守備の上手い荒波と三好も両翼にいる。

至誠の外野陣はもはやプロレベルと言っても過言では無かった。

《1番 サード川端さん》

——私が1番になったっていうことは、求められているのはただ一つ……チャンスメイク。

初球、内角の難しい変化球をしっかりと打ち返し右中間を破るツーベースヒットを放つ。

「川端1番も良いよなあ」

「耀ちゃんはどうしますか？」

「そうだな……ここは送ってもらおうか」

三好は高めの球を上手く一塁線に転がし、送りバント成功。

1アウトランナー三塁、犠牲フライでも一点の場面。

——ほら栗原、お膳立てはしたぞ……ここで結果を出せ。

——了解！ ここまでしてもらって打てない私じゃないですよ！

栗原はバットを投手に向け、ただ集中する。

普段は上がっている口角も下がり、キツとした目つきをしている。

ストレートとカーブ、2球続けて見送る。

1球ボールを挟んで4球目が投げられる。

——ここまでスライダ―は投げてない、だから投げるならここだよね！

外角のスライダ―をおつけて打ち、打球はレフトの前にポトリと落ちる。

それを見て川端はホームに突入して1点先制。

「よし、栗原ナイス！」

「渚ちゃんもナイスランだよ」

「ありがとうございます」

川端、三好、栗原が自分に求められている役割を全うした。

その結果先制という最高の結果を生み出した。

ムービングを主体とした洲崎は、何度かピンチを作りながらも踏ん張り5回1失点で切り抜ける。

「真理ナイピ！メンタル強くなったね！」

「空と、皆のおかげだよ……ありがとう」

「真理の為ならいくらでも手伝うから！」

——ずっと避け続けてきたんだもん、それくらいはしなきゃ。それに……真理の事好

きだから。

自身の過去の行動に負い目があったのも理由だが、1番の理由は洲寄と一緒にいる時間を増やしたいからだ。

しかしそれは口にせず、神宮は洲寄に寄り添う。

「よし、代打佐野！」

「はい、打ってきまーす！」

6回表の洲寄の打席で代打佐野が告げられる。

やる気に満ち溢れた彼女は胸を張りながら歩いていき、何度か素振りをして打席に入る。

——球種はチェンジアップにスライダー、私が待つのはストレートのみ！ チェンジアップに釣られないように気を付けないと。

いきなりチェンジアップを投げられたが、佐野はピクリとも反応せず見逃して1ストライク。

内角に外れるスライダーも見送って1ボール1ストライクとなり、3球目だった。

——きた、ストレート！

鍛え抜かれた腕に操られたバットは、ボールを完璧に捉えた。

バットにボールが当たった感触を感じた佐野は、下半身を上手く使いフルスイングをする。

背中にバットが当たりそうな程振り抜いた後、反動でライトの方向へバットが向く。

「イエー！ 初ホームラン！」

「夏輝おめでとー！」

「……夏輝ちゃん、おめでとー……」

「ありがと！ いやー、ホームランって気持ちいいね！」

春宮、白崎とハイタッチを交わしてベンチに座る。

その後は神宮が登板し2回を無失点に抑え、4対1でダブルヘッダー2連勝。

「お疲れ様、最高の試合結果で合宿を終える事が出来たな！ 再来週からはテストだし部活は無くなるぞ」

「うへえ……テストやだ……」

「赤点取ったら試合出さないから、死に物狂いで頑張れ！」

「そうそう、赤点取らなきゃいくら低くてもいいんだから」

——いや、別に低くても良くはないけど……。

石川の発言にそう思った伊藤は、勉強会をしようと決意した。

1年生の中で頂垂れているのは栗原、佐野、春宮の3人。

「え、待つてはるみーと夏輝は頭悪いの?」

「はは……実は……」

「あ、赤点は回避できますよ! 多分……」

「いがーい、2人とも頭良さそうな見た目してんのに」

その様子を神宮に指摘され、苦笑いで答える2人。

佐野は道場の娘で黒髪ロングと、見た目だけなら優等生。

春宮も見た目は少し派手だが頭脳明晰そうな雰囲気は出ている。

「白崎はどうなの? 2人とも同じクラスっしょ?」

「わ、私は平気です……」

「そうですよ浜矢先輩! 杏紗は学年トップなんですから!」

「トップ!?!」

春宮曰く、入試での点数が1年生の中でトップだったとのこと。

「あれ、じゃあ入学式とかで挨拶すんじゃないの?」

「……断りました……」

「ああ……人前で話すとか無理そうだなもんな」

通常入試での得点がトップの生徒が、新入生代表として挨拶をする。

しかし白崎は人前で話せないとの理由でそれを辞退した。

「まあそこまで心配無さそうで良かったよ、白崎には悪いけど2人に教えてやってくれ……栗原は川端にでも」

「まあ同じ部屋ですさかい、何となくそうなるとは思ってましたよ」

「ありがとう渚く！ 一生尊敬する……！」

「大袈裟やって」

少し呆れた顔で栗原を見ながらも、勉強会を少し楽しそうに思っている川端。

「てか茶谷は？」

「施設の人に教えて貰えるんで」

「……だったらDクラスに入ってたくない？」

「今までは面倒だったから教わって無かったんすよ」

養護施設には当然スタッフの大人がいる。

その人達に教えて貰う予定だと茶谷は言ったが、彼女のクラスはDクラス。

体育科で1番成績の悪い生徒が入るクラスだ。

「それに頭いいクラス入ってついて行けなかったらヤじゃないっすか」

「確かに……自主トレの時間も少なくなるしな」

「そういう事！ だから私はそこそこの点は取りますんで」

——要領は良いのにやらないタイプか……。

茶谷の性格を勿体無く思いながらも、自身も高校時代は似たタイプだった為何も言えない監督。

「まあ、とにかく全員赤点さえ回避してくれば良いから！ それで気持ち良く練習再開しよう！」

『ハイッ！』

第8球 名選手

今年もまた抽選会の時期がやってきた。

2018年度の高校野球神奈川県予選抽選会場、そこには神奈川の名選手が勢揃いしている。

「……ここにいるの、皆私と同じ年以下なんだよな」

「今更どうしたの?」

「いや、なんか3年間早かったなって」

「まだ始まってもないのにその台詞はどうなの?」

2年前は名選手が揃っているこの場で浮かれていた浜矢。

しかし今は自分がそう見られる立場になった、その実感がいまいち湧いていないようだ。

「とにかく会場入るか! どんな奴がいるのか楽しみ〜!」

「やっぱり蒼海大の人は目立つね、みんな体格が良いし」

「あつちは市大で、向こうは藤蔭か……あ、京王もいる」

「伊吹ちゃんもだいぶ制服で分かるようになったよねえ」

流石に何回も戦えば覚えるよと返す浜矢。

2年前では想像出来ないような姿があった。

「京王義塾のエース村田さん……それに横浜隼天はやての安打製造機宮崎さんに、藤光学園の正遊撃手内山さん！」

「相変わらず凄い情報網だな……どっから仕入れてくんの」

「普通に調べたり試合を観たりしてるだけだよ？」

——練習付き合っつてメニュー立ててるのに、どこにそんな時間があるんだ……。

有力選手や注目の高校を話している内に、抽選の時間はやってきた。

至誠からは鈴井が代表でクジを引く。

「頼むぞ……できれば弱いところで」

「それだと強いところと当たった時大変だよ？」

「それもそうか……3回戦で蒼海大とか以外なら何でもいいや」

だいたいハードルを下げて祈るように見守る浜矢。

鈴井がクジを引き、トーナメント表に番号が書かれる。

その後も各校のキャプテンがクジを引いていき、表が埋まっていく。

「さて！ 今年の初戦はおそらく藤光学園だよ！」

「蒼海大は今年も決勝か……なんの因果？」

「けど決勝以外で当たってもつまらないでしょ」

「それはそうだけどさ……」

今年も蒼海大とは決勝まで当たらる事はない。

気分的にはその方が良いのだが、観客からすれば3年連続同じカードになる可能性がある。
ある。

それは楽しいのかと浜矢は思っていた。

「藤光学園で1番警戒するのは、4番の内山さん！ 走攻守三拍子揃った遊撃手で、チャンスメイクが出来る選手だよ」

「まあ守備に関しては際立って上手いって訳ではないし、得点圏もそこまで強くはないから」

「なのに4番なのは、やっぱり長打力ですか？」

「だな、凄いパワーを誇るぞ」

チャンスメイクが得意な4番打者の内山。

しかしパワーは圧倒的な物を持ち、当たればスタンドに一瞬でボールが消えていく。

「エースは藤枝さん！ シュートとシンカー、フォークを投げる本格派投手だよ」
「尻上がり調子を上げるタイプだから、早めに攻略したいな」

「とにかく今日は帰って練習しよう！ みんなも練習したそうな顔してるしね！」

円陣を組んで声を出し、至誠ナインは学校へ戻った。

そして学校に着くと同時に全員が準備をし、息つく暇もなく練習を開始する。

「藤光戦の先発は伊吹ちゃんだからね、任せたよ」

「えっ、私？」

「うん！ だから、みんなとフリー打撃してきてね」

「……おう、全員抑えてやるぞ！ かかってこーい！」

大事な初戦の先発を告げられた浜矢は、その勢いに乗った投球を見せほぼ全員を打ち取った。

浜矢からヒットを打てたのは鈴木と白崎、外野まで飛ばせたのは茶谷と上林のみという庄巻のピッチングだった。

「内野と投手は集まってー！」

「外野は室内でノックするからこっちこーい」

監督の呼びかけで外野陣は室内練習場へと向かい、内野と投手は千秋の方へと向かう。

「藤枝さん対策するよー！ シュートは空ちゃん、フォークは伊吹ちゃんに投げて貰うよー！」

「シンカーは？」

「……………湧ちゃん、投げられないかな？」

「精度が低いので良ければ投げられますよ」

ただし変化量には期待しないで欲しい、と何回も念を押す。

しかしそれでも良いと千秋が返し、シンカー対策は牧野の役目となった。

藤枝はどの変化球も一級品だが、中でも素晴らしいのが高速シュート。

右腕から放たれるその変化球で、数多の右打者を苦しませてきた。

「というわけで、空ちゃん頼んだよ！」

「お任せあれー！ さあどんどん来てくださいよー！」

「じゃあ私からいい？」

「どうぞどうぞー！」

鈴井が1番乗りで打席に入る。

実は神宮と鈴井はあまり対戦した事がなく、お互い内心ワクワクしている。

そして鈴井が打席に立つならと、伊藤が捕手を務める。

——美希先輩かあ……どこ投げてでも打たれるってイメージだけど。

——確か高めに強かった筈だから、丁寧に低めを投げさせよう。

2人が選んだ初球は、藤枝の切り札であるシュート。

内角に鋭く切り込んでくる球に、鈴井は思わず体を引く。

「相変わらずキレがすごいね……」

「これで制球が良ければ文句無しなんですけどね」

「最近のマシになったし、来年には文句無いんじゃない？」

「そうなってくれると嬉しいですね」

伊藤と楽しそうに談笑したが、神宮と向き合うと一瞬にして真面目な表情になる。

2球目はストリートが高めに外れ1ボール。

続くスライダーは見逃して1ボール2ストライクとなる。

——ワン・ツーからの彗の配球は……。

4球目は外角のボールからストライクになるシュート、鈴井はそれをしっかり流しラ

イト前に運ぶ。

「うわっ……今の打つんですね」

「捰って外角の次は内角、とかその逆もやりがちだよね」

「えっ、そうですか？」

「私が見てる範囲ではそう感じたかな」

直した方がいいよ、と言い残し鈴井は打席を後にする。

「……空ごめんね」

「へ？ 別に平気だよ、配球読まれてても打たれない球投げれば良いんだし！」

「それは……確かに理想だけど、そこまでしなくてもいいように私も頑張るから」

「まあ秋から正捕手だもんね、じゃあ頼むよ捰！」

——そうだ、秋からは鈴井先輩も千秋先輩もいない……。もつと投手に信頼されるよ
うな捕手になりたい。

新たな決意を胸に、伊藤はまた構え直して次の打者を迎え撃つ。

神宮が終わると牧野、そして最後は浜矢が投げ藤枝対策を終える。

片付けも終わり解散となるが、千秋と監督、小林の3人はまだ残っていた。

会議室で夏の大会の事について話し合いをしている。

「藤枝対策はどうだった？」

「美希ちゃんと杏紗ちゃんは問題無しです、確実性は低いですけど何回かやれば打てそうなのは美央ちゃんと佳奈利ちゃんでした」

「上林と川端は？」

「真希ちゃんはフォーク、渚ちゃんはシンカーを打ちにくそうにしましたよ」

千秋の言葉を全てメモしていく監督、このメモが試合本番で活躍することだろう。

「外野の守備……特に杏紗ちゃんと夏輝ちゃんはどんな感じでしたか？」

「まだまだだな、代打からそのまま守備は難しそうだ」

「なら灯ちゃんに頑張つて貰うことになりそうですね」

白崎と佐野の守備はまだ人並み程度にもなれていない。

打力は十分評価出来るが、そのまま守備出場は任せられないと2人は判断した。

「三好は結構上手いな、レフトは任せられそう」

「良かったです、耀ちゃんが2番じゃないと攻略が厳しい相手もいますからね」

「あの対応力とカット技術はチーム内でもトップだからな」

三好が上位で粘る事により、それ以降の打者が球筋を見極めやすくなるというメリックがある。

それに加え球数を稼げ、先発を早く降ろすことも出来る。彼女は今の至誠には無くてはならない存在だ。

「春宮さんも、スコアの付け方覚ええましたよ」

「間に合いましたか！ これで千秋が試合に集中できるな」

「先生もありがとうございます、助かります」

「いえ、私はただ覚えた事を教えたかっただけですから」

初めの頃は千秋の役目だったが、暫く経つと小林がスコアの付け方を教えていた。

同じ野球を知らない者同士何か手伝ってあげたいと思つたようで、自分から教え役を名乗り出た。

「監督、投手陣の調子はどう見えましたか？」

「洲崎もメンタル良くなってきてるし、神宮も制球が改善されてきた……牧野は1年とは思えないくらい安定してるな」

「あの制球力とフォーム、それに加えて多彩な変化球がありますからね！ ……それで伊吹ちゃんは？」

千秋がその名を出すと、監督は一瞬黙る。

何かまずい事を聞いたのか、千秋がそう考えていると監督はニツと笑い話し出す。

「アイツは一番いいな……ストレートのノビが上がってきてるし、フォークも十分に操れている」

「ツーシームもそこそこ使えてますし、打撃の方も良くなってきましたよね！」

「走塁とスライディングとバントは今も苦手な様子でしたね」

浜矢の成長は3人も目を見張るものがあった。

走塁関連の技術はまだまだ未熟なものの、打てるようになりスタメンによつては中軸を任せられることも。

「それで監督、今年は……」

「ああ、もう決めているぞ……多分予想通りだけだな」

「浜矢さんがまさかこんなに頼りになるとは、2年前は思いもありませんでしたね」
「ですね、小林先生はずつと担任でしたし余計にそう思いますよね」

1年生の頃の浜矢は、周りに支えられていた印象が大きかった。

それが今では周りを支え、頼もしい姿を見せるようになった。

監督は一度息を吐き2人の方を真剣な表情で見、こう言った。

「去年の投球を見て目が覚めましたよ……背番号^エ1^スは、浜矢です」
「ですよね！」

「ふふ、ここまで長かったですね」

背番号1という栄光を手にしたのは、初心者から成り上がった浜矢伊吹だった。

第9球 エース

梅雨の時期真っ只中だったが、今日は運良く快晴。

連日の抑圧された練習の鬱憤を晴らすかのように、部員達は全力で練習を行っていた。

「湧ちゃんは左は苦手なんだっけ？」

「はい、まあアンダーってそういうものですよね」

「球の出どころが見やすいからね……」

アンダースローの弱点は左に弱い事。

また、そのフォームにより一巡目は抑えやすいが、目が慣れた二巡目以降は球の遅さも相まって打たれやすくなる。

「……他にも苦手な人は2人いるんですよ、どれだけ対策しても抑えられなかった人が」

「それって右？ 左？」

「2人とも右です、1つ上の先輩なんですけどね」

「へえ……私も知ってるかな？」

「知ってると思いますよ、強豪校で今年はレギュラーみたいですし」

最後まで名前が出さなかったが、埼玉出身という事と今は東京の高校に在ることを伝えた。

彼女達のいるチームは必ず全国まで勝ち上がってくる、その時に答え合わせをしよう
と告げた。

「佐野いくぞー」

「はいっ！」

「おー……飛んだな、ナイスバッティング」

「最近はやつとボールに当てられるようになりましたよ！」

佐野はトスバッティングで快音を響かせ続けている。

初めの頃は狙って当てる事が出来なかった彼女も、今はそんな過去が嘘のように打ちまくっている。

——守備がアレだから今年はスタメンで使えないけど、代打くらいは出すかな。佐野を出せば守備だけとはいえ石川も出番が増えるし。

監督は出来る事なら全員を使って勝ちたい、という考えの持ち主だ。

1年でスカウト出来る上限はあるが、それ以外で殆ど声を掛けないのも出番を与えら

れないから。

「佐野はいい選手になるな」

「ほんとですか!?! じゃあもつと頑張りますね!」

「そうだな、もつと頑張つて全員抜く勢いで成長しような」

「はいっ!」

普段の振る舞いからは想像出来ないが、佐野は忍耐強く練習好きだ。タイプとしては野手版の浜矢と監督は称している。

「灰原監督! きましたよ」

「おつ、本当か! 今行くよ」

小林が段ボールを両手で抱えながら、グラウンドに現れる。
トス役を千秋に代わつてもらい確認に行く。

「……………よし、全員分ありますね」

「全員集合! ほら走つて走つて!」

この集合の時間もトレーニングとして使えるよう、監督は毎回走るように命じる。
外野から全力疾走で来た部員は息が切れている。

全員が集まったのを確認して監督は話を切り出す。

「背番号が届いたので、今から配るぞ！」

「やったー！ 何番かな？」

「部員少ないからベンチ入りは確約されているの気が楽で良いね」

栗原も牧野も、ベンチ入りの心配はせず背番号を楽しみにしている。

部員が上限よりも少ない至誠だからこそその会話だ。

ざわつきが収まってから、監督は1番のゼッケンを取り出す。

「……背番号1、浜矢！」

「えっ？ わ、私ですか!？」

「当然！ ほら、早く受け取りな……エース！」

「はっ、はい！ ……本当に、1番だ」

今にも泣きそうな顔で背番号1を手に持つ浜矢。

ずっと憧れ続けた背番号、それがついに自分の物になったのだ。

「おめでと、伊吹ちゃん」

「おめでとう！ エースの伊吹ちゃん！」

「2人ともありがとう!!」

「ちよつ、引つ付かないで……」

口ではそう言いながらも、引き剥がす素振りはない鈴井。浜矢が1番を手にした事が彼女も嬉しいのだろう。

「2番は変わらず鈴井で、3番栗原！」

「はいっ！ やったーレギュラー！」

「得点圏でのバッティング、期待してるからな」

「もちろん打ちまくりますよ！」

栗原が大喜びでゼツケンを受け取る。

得点圏での強さは鈴井に次ぐチーム2位だ。

「4番、茶谷！」

「はーい」

「攻守に渡って活躍してくれ」

「まっ、私なら余裕つすよ」

いつもの猫を被った笑顔とは違い、本当に嬉しそうに受け取る。

「5番川端」

「はい」

「どの打順でもチャンスメイクは頼んだぞ」

「分かりました」

1年生からの一桁に、口元が緩んでいる川端。

彼女の役目はどの打順でも変わらずチャンスメイクをする事だ。

「6番、上林」

「はい！」

「……至誠の要だから頑張ってくれ」

「一瞬の間が気になりましたけど、わかりました」

バランスが良すぎて何を言えればいいのかわからなかった監督。

だが上林が要である事には間違いない。

「7番三好！」

「はい」

「守備といつも通りの粘り強さ、楽しみにしてるぞ」

「去年より活躍してみせます」

背番号は1つ後ろに下がったが、レギュラーというのは変わらない。

昨年を超えた自分を見せられるよう決意する彼女だった。

「8番から10番は変わらないから、11番洲崎！」

「はい」

「11番だけど左のエースだからな」

「……わかりました、全力で投げ切ります」

昨年の1番から大きく番号を下げた洲崎。

しかし先発であり、浜矢とダブルエースという扱いではある。

「伊藤と石川も変わらなくて、13番佐野！」

「はいっ！ ファーストなんですね？」

「だな、代打で起用するからな」

「代打の切り札頑張りますっ！」

守備力を考えるとスタメンで起用するのは難しいが、あの打力があれば他校を脅かす代打になれる。

「15番、白崎」

「は、はい……」

「白崎も代打起用するから、心の準備はしっかりとな」

「……頑張り、ます」

佐野と白崎の左右の代打コンビは、おそらく全国に名を知らしめるだろう。

「16番、牧野！」

「はい」

「守護神は任せました！」

「完璧に抑えて試合を締めますよ」

彼女の対左の被打率と、適正により抑えでの起用となる。

前に登板していた投手との落差は大きいだろう。

「最後……17番、千秋」

「ありがとうございます！」

「今年も参謀よろしくな」

「こちらこそ、よろしく願います！」

ベンチ入りできる記録員は1人だけ。

春宮と千秋をベンチに居させるのであれば、どちらかを選手登録しなければならなかった。

「今年は攻守でバランスが良いチームになったと思う、今年こそ全国制覇するぞ！」
『オオーツ!!』

背番号が配れられた興奮のまま、最終下校の時間まで練習を続ける。

大会までの最後の追い込みとして、弱点を克服しようと奮起した者、得意分野を伸ばす者に分かれた。

片付けも終わり空はすっかり闇に包まれている。

そんな中残っている3人の部員がいた。

最上級生で今年が最後の夏になる浜矢と鈴井、そして千秋だ。

「ねっ、キャッチボールしようよ」

「美月ちゃんから言い出すなんて珍しいね、私はいいよ」

「今8時か……うん、30分くらいなら付き合えるよ」

「2人もありがとう、特に伊吹ちゃん」

帰宅したら夕食や洗濯をしなくてはいけない浜矢だが、30分だけなら付き合えると残ってくれた。

連日の雨で少し濡れているグラウンドに、3人は一定の距離を置いて立つ。

「じゃあいくよー」

「こい！ ……うん、ナイスボール！」

「美月ちゃんっていい回転の球投げるよね、投手向いてるんじゃない？」

2人に褒めちぎられ恥ずかしそうにする千秋。

「それはさすがに……伊吹ちゃんの方が凄いわん」

「本職投手で初心者に負けてたらヤバいでしょ」

「……それに、伊吹ちゃんは高校トップクラスだからね」

鈴井の発言に目を見開いて驚く浜矢。

頬をつねったり千秋に現実か確認したりと、実感が湧いていない様子だ。

「す、鈴井が私の事をそんな風に……！」

「試合中は褒めてるでしょ」

「私の調子を上げる為だと思ってたし！」

試合中以外で鈴井が浜矢を褒めるのは珍しい。

しかもここまでの高評価はなかなか無い。

「……それに、伊吹ちゃんの事そこそこ好きだし」

「せんしゅー聞いた!? 私の事好きだつて〜！」

「よかったね伊吹ちゃん！」

「そこそこって言ってるでしょ！」

小声で呟いた言葉を大声で復唱され、流石に赤面する鈴井。だが表情を見るに楽しそうだ。

ひとときしりはしやぎ終わると、千秋が何か考え込むような顔で遠くを見つめている。

「せんしゅー？ どうしたの？」

「ううん、ただ最後なんだなあって……高校生活も、2人と一緒に居れるのも」

「3年間早かったな」

「まだ3年経ってないけどね」

浜矢と鈴井はプロ入りを希望しているが千秋は違う。

そもそも選手ではないのだから当然だが、進路は2人と変わってくる。

「……わがまま、言ってもいい？」

蚊の鳴くような声で呟いたその言葉は、2人の耳には届かなかった。

むしろ届かせようとしなかった、というのが正しい。

「ごよ」

「えっ……? 聞こえてた?」

「もちろん」

「せんしゅーの声を聞き流すわけないだろ」

最初に反応したのは鈴井だった。

誰も聞き取れないような言葉を、この2人は聞き逃さなかった。

千秋がこういう場面では遠慮するのを知っていて、耳を澄ませていたのだ。

「ほれほれ、なんでも言ってみろ? あつ、でも出来れば叶えられることね!」

「台無しだよ……遠慮しないでいいから」

「……………優勝したいな、神奈川も、全国も」

その言葉を聞くと、2人は顔を見合わせてから笑った。

「ええ!? ふ、2人ともなんで笑うのお……?」

「いやー、だって当たり前のこと過ぎてさ!」

「そうだよ、全国制覇なんて当たり前じゃん」

「うう……じゃあ何か別のこと……」

1分近く頭を悩ませた彼女は、何か閃いたようで目を輝かせる。

「全国制覇した時ね、2人がマウンドにいて欲しい!」

「それだけ？」

「それだけじゃないよ！　だって3年間一緒だった2人でさ、努力してる姿も全部知ってるんだよ？　そんな2人が全国の頂点に立った瞬間を見れるなんて、野球ファン名前に尽きるよ!!」

浜矢の発言に早口かつ大きな声で反論する千秋。

2人は少し後ずさるものの、この言葉をしっかりと受け止めていた。

「分かったよ、最後のマウンドは誰にも譲らない」

「だから美月ちゃんも、私達から絶対に目を逸らさないでね」

「……うん！」

初めて会った時から随分と大人びた2人。

そんな2人の笑顔はまさに、チームを引っ張る最上級生と呼ぶに相応しいものだった。

誰が思い付いたか、3人は手を重ね合う。

浜矢が1番下でその上が鈴井、1番上は千秋。

「私達の最後の夏、有終の美を飾って終わろう！」

『おー！』

夏の夜空に、輝かしい未来を見据える少女達の声が木霊した。

第10球 最後の夏

2018年7月14日金曜日、2回戦の日。

優勝候補である至誠と藤光の試合を観に、多くの観客が会場に集まっている。

「相手は予想通り藤光だったね！ 藤枝さんは初戦温存されてたからスタミナは十分

……気を引き締めていこう！」

『オー！』

監督から本日のスタメンが発表された。

1番 荒波友海（右）

2番 三好耀（左）

3番 上林真希（遊）

4番 茶谷佳奈利（二）

5番 鈴井美希（捕）

6番 浜矢伊吹（投）

7番 栗原美央（一）

8番 川端渚（三）

9番 岡田早紀（中）

「初回の上位打線は大事だよ！ 藤枝さんは終盤から調子が上がるタイプだから、初回から積極的に打っていきこう！」

「任せましたー！」

「分かりました」

「しつかり役目は果たします」

——じっくり見てから攻めるのも良いけど、相手は藤枝さん……。終盤手が付けられなくなったら困るからね。

《1番右翼手 荒波さん》

藤枝の右腕から投じられた初球は高速シュート。

体に向かってきたボールはベースの手前で曲がり、ミットへと収まる。

「ストライク！」

——今のがシュートか……。空のより変化はありそうかな。気合入れて打たなきゃ。

続く2球目はフォーク。バットをしっかりと止めてボールとなる。

1球高めのストリートでカウントを整えてからの4球目だった。

——つ、シンカー！ 当ててみせる！

「……ストライク、バッターアウト！」

「くそう……当てられたのに」

高速シンカーに対ししっかりと反応したが、打球はファウルチップとなり三振に終わる。

「でも意外と当てられたな」

「ストリート狙えば良かったかもです……ノビ無さそうでしたし」

球速こそ速いが、それ以上には感じない球。

それを補うために多彩な変化球を覚えたのだろう。

「なら三好にはストリート狙い……って、アイツ速球苦手か」

「けどノビが無いならいけるんじゃないですか？ 試すだけ試してみましようよ」

「……そうだな、試してみるか」

三好は監督の直球狙いのサインに頷き、藤枝と向き合う。

積極的に打ちにいくタイプではない三好は、この打席も初球は見送る。

——変化球は結構良さそう……けど当てられんって程やなかか。

当てる技術だけなら鈴井にも劣らない三好は、早速2球目からカット打法で立ち向かう。

並行カウントにしてからの6球目。

低めに投げられたストレートを打つも、引っ掛けてしまいセカンドゴロに終わる。

「ドンマイ、惜しかったな」

「多分次からは打てます」

「了解、さて次は上林……確かフォークは苦手なんだっけ」

「そうです、ですが藤枝さんは第二の決め球としてフォークを使う……つまり、追い込まれる前に打てば平気だと思います」

今度は千秋が積極打法のサインを出す。

投げられたストレートを、狙いを澄まして上林は打ち返す。

「よしっ！……なっ」

「アウトー！」

センターに抜けそうな打球を、ショートを守る内山がジャンプして捕球する。

「普通に上手くないですか？」

「まあ内山って身長あるからな……縦には強いな」

「横の打球は捕りにくそうにしてみましたよね」

打力だけでスタメンになっているのであれば、確実にシヨートからはコンバートされていた。

そうなっていない理由は、最低限の守備力と縦の打球への強さがあるから。

「切り替えて守備いこう！ 伊吹ちゃん、こっちも3人で抑えちゃおう！」

「おーっす！」

大事な初戦で先発を任された浜矢は、嬉々としてマウンドへと駆けて行き投球練習を始める。

——フオークが良さそうだけど、雨降りそうだしな……。

鈴井が不安そうに上空を見上げる。

空は灰色の雲に覆われ、今にも雨が降り出しそうな雰囲気。

「今日はストレート要求するから、失投には気を付けてね」

「オツケー！」

2人が構え、打者が打席に入りサイレンが鳴り響く。浜矢達の最後の夏が、今はじまった。

——内山はチャンスに強くないから、ランナー有りでもいいのは気が楽だけど……。伊吹ちゃんなら全員抑えたいよね。

記念すべき初球は、やはり浜矢が誇るストレート。

雨が降る前特有の生暖かい空気を裂き、重い音を鳴らしてミットへ決まる。

「ストライクッ！」

「豪速球いいよー！」

「ナイスストレート！」

1球投げるとグラウンド内からの声が飛び交う。

明るい性格の選手が多い2年生を中心に、全員が声を掛け合っている。

カーブが外れて1ボールとなり、外角のボールからストライクになるツーシームでストライクを取り1ー2。

——さあいくよ、伊吹ちゃん。

——心配はしてないけど、絶対逸らすなよ！

投げられたのはスライドフォーク。

なんとかバットを止めて見送ろうとしたが、鈴井が塁審にハーフスイングの判定を要求する。

「スイング、バッターアウト！」

「よしっ！」

スイングしたと判定され空振り三振。

自分の魔球が未だ通用する事に、浜矢は小さくガッツポーズする。

良いスタートが切れたのが幸いし、次の打者はセカンドゴロ、最後はまた三振で抑えた。

「ナイピ」

「そつちこそ良いリードだったよ」

「当然でしょ？ 至誠の正捕手なんだから」

「……そうだよな！」

グラブタッチを交わしながらベンチへと戻る2人。

2回の攻撃は4番に入った茶谷の打席から。

「佳奈利ちゃんは直球に強いですから、変化球は捨てさせますか？」

「けど藤枝は5回あたりからギアを上げてくるぞ？ まあそれまでに2打席目は回ってくるけど……」

「うーん……どうしましょうか」

ベンチでどんな作戦で攻めるか考え込む2人。

それを早くしろと言わんばかりの目で見える茶谷。

「……よし、シンカーとストレート狙いだ」

「シユートはストレートと見分け付きにくいですもんね、良いと思います」
たつぷりと時間をかけ、ようやくサインが出される。

——つたく、おせーよ。来た球打てばいいだけだろ？ 簡単じゃん。

シユートに手が出そうになったが、なんとかバットを止めて見送る。

続くフォークは完璧に見送り2ボール。

——うちってツーボールからでも打っていいんだっけ。

「ん？ 茶谷こっち見てるけど」

「このカウントから打っていいか悩んでるんじゃないですか？ ダメなところはダメですし」

「そっか、うちは全然平気だけどな」

流石にツーボールからも打っていい、というサインは無く代わりにヒツティングのサインを出す。

意図は伝わったようで茶谷はすぐに構え直す。

そして投じられた3球目、ストレートを力強く打ち返すがセンター正面の打球にな

る。

「くっそ……」

「惜しかったし、気にせんでええで」

「へいへい」

「なにその反応……まあいいや、鈴木先輩打ってくださいーい！」

上林の声に対抗するかのように三好も声を出す。

客席よりもベンチからの方が歓声が飛ぶ事に、鈴木は若干の苦笑いを浮かべながら打席に入る。

——さて、鈴木ね。この中で一番注意しなければならぬ相手……。正直何処に投げても打たれそうな気はするけど、弱気じゃいられないわ。

——確かこいつは長打力は無かったはず、外野前進な。

今の鈴井の打撃スタイルを知らない藤光側は、外野を前進させた。それを彼女が見落とす訳がなかった。

——外野が前に出た……。まあ練習試合なんて観てないよね。けど悪いね……。今の私は、外野の頭を越せるんだよ！

内に食い込む高速シンカーの軌道を読み、着弾点目掛けてバットを出す。

芯で捉えられた打球はライナーとなり、外野の遥か頭上を超えていく。

「ナイバッチー！」

「ナイスツーベース！」

結果はフェンス直撃のツーベースヒット。

1アウトからチャンスの場面を迎え、打席には浜矢。

「伊吹ちゃんは最近調子良いですし、打たせましよう！」

「だな、アイツはフォークに釣られやすいからそこが心配だけど」

言っている側からフォークに釣られ1ストライク。

2球続けてフォークを投げられるが、今度は手を出さず1ボール。

——フォーク2連続か……鈴井だったら、多分次は惑わせるためにストレート投げさせそうだな。

彼女の読み通り、ストレートが投げられた。

いくら打撃練習に割いている時間が野手より短いとはいえ、ヤマが当たれば反応出来る。

バットが捉えた白球は、またしても強いライナーとなり右中間を破る。

「キャプテン、ゴールです！」

「了解！」

打球が野手の間を抜けたのを見て、三塁コーチャーの岡田が鈴井にホーム突入の指示を出す。

ライトが捕球し、送球する体勢になった頃にはホームに辿り着いていた。

「ナイススラーン！」

「ありがと……って、なんで伊吹ちゃんあの当たりで一塁なの？」

「単純な走力もさる事ながら、走り出すまでが遅いんだよな」

「今の当たりで一塁行けないのはおかしいって……」

浜矢はお世辞にも走塁が上手いとは言えない。

スライディングは危ないし、塁を蹴る時に膨らみやすい。

そもそも打ってバットを放り出してから走るまでに掛かる時間が長いのだ。

「まあ一点入ったからいいか……伊吹ちゃん！ ナイバッチー！」

「イェーイ!!」

「うるさっ」

一塁からベンチはそれなりの距離が離れているが、それを抜きにしても浜矢の返事は大きかった。

この勢いに乗って大量得点といきたかったが、藤枝もエースだ。

先制された事を引きずるのではなく、気合を入れ直す機会だと考える。

内角へとビシビシと決めていき、栗原と川端は打ち取られた。

「ドンマイ、たった1点だし気にしないで」

「美香……私はこれくらいで凹むような人間じゃないわ」

「ふふっ、だよね！ 援護するから待ってて」

「期待してるわよ」

藤光ベンチでは、失点した藤枝を内山が励ましていた。

援護をすると誓った内山が鋭い素振りをしながら、打席に向かう。

——内山美香……チャンスメイクが得意でチームのムードメーカーでもあるキャプテ

ン。しかも脚が速くて盗塁も上手い、塁には出したくない。

鈴井が選択した球種は外角のスライダー。

内山はそれをフルスイングで打ちにいくが、大飛球のファールに終わる。

——今のをあんな強い打球にするんだ、内山って凄いんだなあ。まっ、それくらいの

相手のが燃えるよな！

——伊吹ちゃんは全く怯んでない……私だって！

次に要求したのはインハイのストレート。

それを待っていたかのようにバットを振るが、ボールに当たる事はなかった。

「ストライク！」

空振ってしまった内山は、驚きつつも不思議そうな表情。

——空振り……？　今のは打てたと思った、予想以上のノビがある。

まさか自分がストレートを空振るとは思わなかった、そんな考えの内山は一度足元を
ならして浜矢と向き合う。

ストレートを高め釣りの釣球として使うが、空振りは奪えず1ボール。

——まあ内山程の打者が釣られるとは思ってなかったけど。……スライダーにスト
レート2球、ここでいこう。

一度浜矢が首を振り、鈴木は新しいサインを出す。

それに再度首を横に振る浜矢。

——2回も首を振った？　という事は自信のある……フオークか。

3度目の正直で頷いた浜矢は、右腕を振り下ろす。

人差し指と中指で抜くように投げられるフォーク、内山はそう思っていた。

——カーブ!? くっ、タイミングが……!!

タイミングを外された彼女の打球は、力無く三塁前へ転がる。

「サード! 急いで!」

「はいっ!」

「アウトツ!」

川端が全力でチャージをかけ、素手で掴んで一塁へ送球。

ランナーとの競争になったが何とか勝った。

「今の動き良いな」

「監督の教えが活かされていますね! 今までの渚ちゃんだったらグラブで捕ってたでしょうし」

あの川端渚がベアハントで捕った、そう伝えれば驚く人は多くいるだろう。

それ程までに彼女にしては珍しいプレーだ。

4番を打ち取った浜矢を攻略できる選手はおらず、5番と6番も凡打にし2回の守備を終える。

「調子良さそうだね」

「1巡目は多分パーフェクトいけるわ」

「言うと思った、油断だけはしないでね」

「はい」

3 回表の攻撃は岡田から。

内野と外野は共に前進して守っている。

「どうします？ フルスイング戦法もありますけど……」

「アレは藤光には通用しないだろうな、普通に打たせるぞ」

最初は低めのストレートが決まりーストライク。

——悔しいけど、私は相手からしたら安牌……多分次も入れてくる。

——だから、そこを狙うのがお前の役目だ！

岡田相手には打たれないと慢心していたのだろう、またしてもストレートでストライクを取りに来た。

2球続けて同じ球を投げられて、反撃出来ない岡田ではない。

しつかりと弾き返した打球はサードを襲うが。

「……アウト！」

「はっ!? くっそー！」

サードが背面ジャンプでがっちりと捕球する。

本来であればヒットになっていた打球、それを防がれたのが悔しいようで岡田は不貞腐れた顔でベンチに帰ってくる。

「まあまあ、たまにはこういう事もあるって！」

「公式戦初打席で打ちたかったのにー！」

「その気持ちはめっちゃ分かるよ！」

荒波と神宮に励まされる岡田。

しかし今の打球は昨年までの岡田からは想像出来ないほど速かった。

彼女も確実に成長しているのだ。

その後は荒波が三振、三好はサードゴロに終わり3アウトとなる。

「もう3回かー、今日はサクサクだな」

「エース同士の投げ合いなんてこんなもんでしょ……なに？」

鈴井の発言を聞いた浜矢は、グラブで顔を隠してはいるものの目元がニヤけていた。

「いやー？ やっと鈴井が私の事をエースって認めてくれたな〜って」

「……別に、前から認めてるけど？ ほら！ 一巡目はパーフェクトでいくんでしょ？」

「おう！ ビシッと抑えてやるぞ！」

宣言通り浜矢は下位打線にもヒットを許さず、1巡目をパーフェクトピッチで終えた。

3回まで終わって1対0の接戦、まだまだ投手戦が予想される。

空にはどんどんと黒い雲が現れ、今にも泣き出しそうな不穏な色を描いている。

第11球 雨の中で

4回表の攻撃は3番の上林からだだったが、ここも3人で完璧に抑えられてしまう。段々とキレが増してきた変化球、そして忘れた頃に投げられる直球。

その組み合わせに固い守備も相まり、内野を抜く事さえ叶わなかった。

「1点取れてて良かったですね」

「だな、今日の浜矢なら完封いけそうだし」

調子の上がり始めた藤枝について話し合う、監督と千秋に対し。

「調子が良いとかって、見て分かるものなんですか？」

「浜矢さんでしたらストレートのノビですね、日によつて明らかに違うので面白いです

よ」

投手の調子を見分ける方法を春宮が問い、それに対し小林が回答していた。

「ここも3人で抑えるぞー！」

「内山つてランナー無しの方が怖いんだけどね」

「まあ不安要素は少ない方が良いじゃん？」

「そうだね、この回もちゃんと抑えよう」

浜矢はロジンバックを手の平で2回跳ねさせ、地面に叩きつけるようにして置く。

余分な粉は息を吹きかけて落とし、投げる準備は万端。

1番打者には甘く入ったカーブを右中間に運ばれてしまう。

「やばっ、岡田！…にる……い」

右中間を破られると思った浜矢が指示を出そうとするが、岡田は既に二塁へ送球するところだった。

——今の打球捕れるんだ……相変わらず凄いな。

「サンキュー岡田！…助かった！」

「……はいっ！」

自分としては普通のプレーをしていたので、何故お礼を言われているのか分からない。岡田は一瞬間を開けてから返事をした。

——早紀に助けられた……ここはゲッツー欲しいな。ゲッツーシフト敷きつつ、バンとも警戒ね。

内野陣は鈴井から出されたサインの通り、ゲッツーシフトを敷く。

——右打者だし、外角にストレートが一番良いかな。伊吹ちゃんの球は速いし、打ち

損じたとしてもそこその打球速度になるはず。

ランナー一塁での打者心理としては、右方向へと打ちランナーを一つでも信頼させたいと思うもの。

それを踏まえて内角へ詰まらせるような球を投げさせるのは多いが、それをするとポテボテの打球となり1つしかアウトが取れない事がある。

一・二塁間を抜かれる可能性はあるが、外角に投げた方がゲッツーを取りやすいと鈴井は判断した。

まず内角へのカーブで緩い速度に慣れさせる。

そして次にアウトローへのストレートを投げる。

少し反応は遅れるが、流し打ちがしやすくなる為この打者は狙ってきた。

しかしその反応の遅れは大きく、バッテリーの狙い通りセカンドへの痛烈なゴロとなる。

「ほらっ、一塁投げろ！」

「オツケー！」

茶谷が軽快に捌きまず二塁で1アウト、送球を受け取った上林が落ち着いて一塁へ投げ2アウト。

「よしっ！ ナイス二遊間！」

「ナイスゲッツー！」

要求通りの完璧なダブルプレーに、ベンチで全員がガッツポーズ。

こうなると相手側は流れが悪くなり、3番も三振に切り取られる。

「ナイピ」

「2巡目もパーフェクトいけるかもな」

「また調子乗る……完封だけ目指してれば良いの！」

この回の攻撃も3人で封じ込まれ無得点。

好調の藤枝を前に攻めあぐねている。

気持ちを切り替えてマウンドに向かう浜矢が、違和感に気づいたようで空を見上げる。

「……………雨」

ぽつり、ぽつりと小さな雨粒が落ちてくる。

幸い大雨にはならなさそうな感じではあるが、やりにくい事は確かだろう。

「伊吹ちゃん平気？ 確か雨の中で投げた事ないよね」

「うん……どうしよっか」

「仕方ない、フォークは封印しようか」

「すっぱ抜けたら怖いもんな」

雨の日での投球は指が滑りやすくなり、失投が多くなる。

そして彼女の決め球であるフォークは特別滑りやすい。封印してしまうのも作戦の一つだ。

《4番遊撃手 内山さん》

内山が今までで一番気合の入った表情で、バッターボックスの前方に立つ。

——打たせたくないな……ストレートのから入ろう。

外角高めに要求したボール、それを内山は狙い澄まし弾き返す。

打球は一瞬にして外野へと到達し、それを見た内山は二塁まで駆ける。

「まだ点取られてないから、落ち着いて投げて！」

「そうそう！ 後ろは私達がいいますから！」

「打たせてくれて構わないっすよ！」

それらの言葉に笑顔を返す浜矢だったが、どこかぎこちなかった。

5番に入るのは投手である藤枝、彼女は打撃も得意だ。

初めに投げたスライダーは大きく外れ、ボール。

次に要求したストレートも地面に叩きつけられたが、鈴井がなんとか捕球した。

「タイム！ ……伊吹ちゃん平気？」

「いやー、雨の日ってこんな投げにくいんだな」

「極力ボールは濡らさないで、手とかもズボンで拭いて」

「了解、次からはしっかり投げるよ」

鈴井がキャッチャースボックスに戻るのを見送りながら、ロジンバツクを触ろうとしたが。

——そうじゃん、雨だとロジンも使えないんだ。想像以上にムズいんだな、雨の日の投球って。

一度ロジンを手に取り、すぐまた元の位置に戻す。

少しでも手についた水分を取り除く為に、ユニフォームに強く手を擦り付ける。

——フォークは無理だし、カーブも抜くような球だから難しいかな。……なら、ストレート頼むよ。

今度は冷静にストレートを投げる浜矢。

内角低めに上手くコントロールされた球だったが、藤枝は難なく打ち返す。

「つ、三好！ ホーム！」

「はいっ！」

三遊間を抜けた打球、捕球した三好が急いでバックホーム。

内山は際どいタイミングだった。が全速力でホームに突っ込む。

ノーバウンドで届いたボールを受け取り、迫ってくる内山にタッチする。

「セーフ！」

「よっしゃー！」

——速すぎるでしょ、それに掻い潜り方も上手かった。

少し窮屈な体勢でタッチが難しかったというのもあるが、上手い具合にタッチを掻い潜られた。

試合終盤で同点に追い付かれてしまい、尚もノーアウト一塁。

「……タイム！ 千秋、伝令頼まれてくれるか？」

「もちろんです！」

監督からの言葉を授かった千秋がマウンドに駆け寄り、内野に加え外野も集めた。

「まず伊吹ちゃんと美希ちゃん、これからは打たせて取る投球でいこう」

「それはそうだよね、2球種封じられてるし」

「地面はぬかるんで踏ん張りにくいと思うから、足の裏全体を地面につけてね」

踵やつま先だけで踏ん張ると、余計に滑りやすくなる。地面に触れる面積を増やす事で防ぐのだ。

「分かっているとは思うけど、土ではバウンドが小さいから少し前に出て構えてね。外野は速度が落ちないで滑るような打球になるから気をつけて」

『はいっ』

内野と外野が一齐に戻り、マウンドには3年生しか残っていない。

「ここで一番踏ん張らなきゃいけないのは伊吹ちゃんだよ、絶対失点しないでね！」

……つて監督が」

「こりや失点したら怒られそうだな……オツケ！ もうこんな情けないピッチングなんてしないよ」

「藤枝さんもフォークは封じられているからね、反撃のチャンスはいくらでもあるけど……良い流れを作れるのは伊吹ちゃんだけだよ！」

最後にハイタッチをして千秋はベンチに戻っていく。

先程まで投げにくくて、難しい表情をしていた浜矢はもう居ない。

——前髪も鬱陶しいな……よし、これで完璧！

前髪から微妙に水滴が落ちてきて、集中力を奪われていた。

それを腕でグツとかき上げ帽子の中に入れる。

未だノーアウトのランナーがいるのは変わりないが、選手一人一人の意識は違う。

浜矢は少し踏み込みを小さくし、安定したフォームで投げ込んだ。

藤枝に打たれた球は握りが甘くて球速が遅かったが、今は本来の速度だ。

まず1人、サードゴロでランナーをアウトにし1アウト。

2人目はセンターフライに打ち取って2アウト。

そして最後は高めのストレートを振らせて空振り三振。

「よっし！ なーんとか同点で乗り切った……」

「おつかれ、アンシヤ着替えてきたら？」

「そうするく、めっちゃ水分吸ってて重いし」

浜矢がベンチ裏で着替えている間にも、試合は進んでいる。

この回の先頭はノーヒットの岡田からだ。

——まだ打ってないし、守備でも良いとこ全然ない！ 今年はずいぶん試合に1回は活

躍するんだ！

バットを短く持った彼女は粘り続ける。

フォークを投げなくなつて変化球の見極めが容易になり、更に制球が乱れ始めてきた。

「制球が乱れてきたな」

「やっぱり雨の影響は大きいですね、あまり慣れてないでしょうし」

「プロなら雨でも試合するけど、高校だとあんま梅雨時に練習試合組まないしな」

雨が降る事が多いので室内で基礎練習、そのような選択を取る学校は多い。

強豪校のエースでも雨には慣れていない事は稀にある。

「ボールフォア！」

「やった！」

白熱したこの勝負は岡田の粘り勝ちだった。

ノーアウトから俊足のランナーが出塁した、ならば取る行動は一つ。

「走った！」

——陸上やってた頃は雨でも走ってた、私が走る事で失敗するなんてあっちゃいけな

いんだ!

グラウンドがぬかるんでいるのにも関わらず、岡田は普段と変わらないスピードで盗塁を決める。

これで得点圏にランナーが進み、荒波の打席。

「よく走れたな……」

「恐ろしいくらい速かったですね」

——さて、ここからどうするかな……。荒波はいいとしても、三好は得点圏に強くない。決めるならここだ。

しかし監督の願いは届かず、セカンドへの進塁打となる。

「いや、でも1アウトからならいけるだろ」

「外野にさえ飛ばせば勝ちですもんね!」

左打者が得意な藤枝に対し、右打席に入る三好。

——ここで一点取らな、浜矢先輩があと何回持つか分かん。決めんと……!

——ガチガチね、これなら打ち取れるわ。

真ん中付近に投げられた球に、バットを出していく三好。

しかしその球は手元で変化し出した、シュートだ。

——シュートか！ くそつ、勝負を急ぎすぎた……！

セカンド後方へ打球がふらふらつと上がる。

至誠側の誰もが落胆の声を出しているが、捕球した次の瞬間だった。

「ホーム！ タッチアップしてる！」

「えっ!? は、はい！」

ただの内野フライで岡田はタッチアップ。

まさかそんなプレーををするとは思わなかったセカンドは、投げるまでに時間がかかった。

一瞬たりとも速度を落とさず、鋭いスライディングでホームベースを通過する岡田。

球審は両腕を大きく、地面と平行に開く。

「セーフ！」

そのコールがされた瞬間、大きな歓声があちこちから飛ぶ。

セカンドフライでホーム生還という、珍しいプレーが見れたのだから当然だろう。

「岡田く！ よく還ってこれたな！」

「イエーイ、ナイスラン！」

「最高だよ早紀！」

「へへー、もつと褒めて！」

ベンチでは好走塁を見せた岡田がもみくちやにされている。

落ち着いた頃合いを見て、監督が話を聞き出す。

「でもよく還ってこれたよな、狙ってたのか？」

「や、なんかあのセカンド捕ってから遅いなーって思ってた」

「ああ……確かに無駄な動作多いよな」

今のプレーだってそうだった。

指示が出てすぐに投げれば良かったものを、一度ボールでグラブを叩いてから投げた。

あの動きが無ければ結果は分からなかった。

「それにセカンドが捕ってくれたんで、ライトが捕ってたら走りませんでしたよ」

「そういうところまでちゃんと考えてプレーしてたんだ……やっぱり走塁のスペシャリストだな」

「走塁なら全国の誰にも負けませんよ！」

フフン、と胸を張りドヤ顔をする岡田。
今ばかりは監督も彼女を褒め倒す。

「……打てない」

「あら……上林はちよつと今日ダメだな」

「次の試合は打ちますから！」

「いや、別にスタメン落ちさせるとは言っていないけど……」

縋るような顔で、いや実際に監督に縋りながら言っていた。

そんな上林にスタメン落ちはないと告げ安心させる。

「これで佳奈利が打ったら嫌なんやけど……」

「……フラグ回収おめでとう」

「くそーっ！ 佳奈利の奴っ!!」

——味方が打って、こんなに悔しがってる奴初めて見たな。

上林の不安は的中し、茶谷はツーベースを放つ。

それを見てベンチの中で荒れに荒れる上林。

「真希ってもっとクールだと思ってたんだけど」

「分かる！ 見た目がクールだよね」

「……関西のひと、だからなの、かな……？」

彼女の荒れっぷりを春宮、佐野、白崎の3組トリオが意外そうな目で眺めていた。

見た目は冷静沈着で大人びていそうな印象を与える上林だが、実際はそうでもない。

「鈴井せんぱーい！ 私の無念を晴らして下さい！」

ベンチからの声に気付いた鈴井は、こちらを振り向いて頷いた。

親指をグツと立て、おまけにウインクも。

「っ……………」

「監督ー、真希と耀先輩が試合以外で死にそうです」

「余韻に浸しといてやれ」

「はーい、てか人間の喉からこんな声出るんだ」

三好と上林は声にならない声をあげていた、しかも高音で。

「……………聴き覚えあると思ったら、イルカだ。」

白崎はそう思ったが絶対に言葉を漏らすことは無かった。

ベンチ内でこんなドタバタが行われている事は知らず、鈴井はただ藤枝と向かい合っていた。

雨がヘルメットをつたって落ちてくるのにも関わらず、目の前の相手をどう打ち砕くかを考えている。

——私に対してフォークは投げってくる？ いやでもきつきよりも雨足が強い……この状況でいきなり投げるとは考えにくい、ならシユートとストレート狙い……いや、シンカーもある。

考えている間に初球が投げられる。

内角高めですっぽ抜けたストレートを見送り1ボール。

2球目は外角のシユートをファールにして1ボール1ストライク。

次はワンバウンドするシンカーをしつかり見送り2ボール。

——内角、外角、そしてまた内角……。私は高めが得意だからここで高めに投げるとは考えられないし、ここでストレートを投げるとも思えない。

藤枝は左脚を引いてから大きく上げ、右腕を素早く振り下ろす。

——ワンバンしたら同じ球種を要求しない、私ならそうする。けど、私のその癖を知っていたとすればここは……ストライクのシンカー！

彼女の読みは的中した。

内角へ食い込んでくるシンカー上手くバットに乗せて運ぶ。

打球が飛んだ瞬間ヒットを確信した茶谷は走り出す。レフト線ギリギリの打球がポトリと落ちる。

「フェア！」

「ゴーゴー！」

打球の処理にモタついている間に、茶谷はホームイン。この場面で2点差に突き放した。

「茶谷ナイラン、鈴井もナイバッチャー！」

「まつ、あれくらい出来て当然つすよ」

「そうだな、これからも頼むぞ！」

「……フン」

茶谷は顔を背けるが、その耳はほんのり赤く色づいていた。

その勢いに乗りたい浜矢は三遊間を襲う打球を放ったが、雨でバウンドが変わり凡打になってしまう。

「ドンマイ、でもあとは抑えるだけだよ」

「せっかく鈴井が3点目取ってくれたんだもん！」

2点差が付いて精神的に余裕になった浜矢は、6回にヒットを許すものの無失点で切

り抜ける。

しかし藤枝もようやく雨に慣れてきたのか7回を3人で抑える。

「よしつ、牧野いくぞー！」

「はい」

最終回のマウンドには牧野が送られる。

「まだ投げられるのに……」

「もう110球超えてるし、それに牧野は雨での登板慣れてるって言ってたからな」

「……そうですけど」

ここでの降板に浜矢は不満そうだった。

理由を聞いて納得自体はしているが、それはそれとして投げたいようだ。

「それにエースは大切にしたいからな」

「そ、そうですね！ 私はエースですもんね……って、騙されませんよ」

「乗ってくれないか、まあ牧野にも投げる機会与えたいって事で」

「……それなら仕方ないですね」

自分の為と言われても納得しないが、後輩の為と言われれば大人しく引き下がる。

監督は既に浜矢の扱い方を熟知していた。

そんな彼女に代わってマウンドに登る牧野は、発言通り雨でもその制球が乱れる事は無かった。

それに加えて浜矢との球速差に独特なフォーム。

全ての要素が打者を翻弄して3人で試合を締め括った。

雨の中の熱戦は、3対1で幕を閉じた。

第12球 駆け抜けろ！

今年の至誠は、投打がガツチリ噛み合った快進撃を続けていた。

3回戦は左のエース洲崎が先発し6回を1失点、牧野が1回を無失点。

しかし打線は2点しか援護出来ず、しかもその2点も7回で入ったもの。

2対1といきなり危ない試合から始まった。

4回戦は京王義塾との試合。

浜矢が先発し6回を無失点、神宮が1回を無失点に抑える好投を見せると、栗原、茶谷、鈴井の3名のホームランも出て6点を奪い快勝する。

5回戦は洲崎が5回と1／3を2失点、神宮が1回と2／3を無失点。

この日は鈴井が大暴れし、4打点を挙げ結果6対2で勝利した。

6回戦は浜谷の先発で7回を1失点に抑え完投勝利。

5点の援護もあり試合も快勝し、準決勝へと駒を進めたのだった。

「さて！ 準決勝の相手は横浜隼天です、警戒すべきは1番の宮崎さん」

「神奈川の安打製造機と呼ばれるアベレージヒッターで、変化球に強い」

「だから本当は伊吹ちゃんに先発してもらいたんだけど……決勝でも投げてもらおうから真理ちゃんに任せるよ」

相性は悪いが今の洲崎なら抑えられない相手ではない、そう判断して先発を任せた。任されたのならば必ず役目を果たす、洲崎の目には強い意志が灯っていた。

「宮崎さんだけじゃなく、横浜隼天にはアベレージ型の選手が多く揃っています」

「チーム打率は.384で本塁打は10本、総得点数は48点だ」

「強打のチームだけどその反面守備は粗い部分が見えます、そこを突きましょう!」

強豪だった頃は守備も良かったが、最近は低迷しなりふり構ってはいられなくなつた。

その為守備を多少捨ててでも打力重視のオーダーを組み、ここまで打ち勝ってきた。

「ウチは逆に守りのチーム……相手に釣られてエラーしないようにね!」

「なんでこっち見るんですか!?!」

千秋からの視線を感じた栗原がそう叫ぶ。

目を逸らして関係無いフリをしているが、茶谷もターゲットだ。

「だって2人が心配だから……スパルタノックするよ！」

「だと思いましたよ……あーめんど」

「んー？ 佳奈利ちゃん100本ノックやりたいって言った？」

「一球一球魂込めて捕るんで、その半分で平気です！」

珍しく焦った表情で情けを乞う茶谷。

千秋は笑って誤魔化しているが、最初から100本打つつもりでいる。

「投手陣は投球練習もいいけど、しっかり休んでね？ 捕手陣と配球確認してもいいし」

「私は明日試合で投げないからどうしよっかな」

「伊吹ちゃんは打撃練習してて、私は真理と練習するから」

鈴井に振られた浜矢は絶望の顔をするが、周囲に励まされ何とか立ち直った。

そして2年生と共にトス打撃を行う事になり、浜矢は石川とペアを組む。

「ハマ先輩って打撃意外といいですよね」

「神田とか佐久間ほどじゃ無いぞ」

「流石にあそこと比べるのは……本当に初心者だったんですか？」

「ホントにホント、まあ小学校の時2年だけやってたけど」

——けど殆どフォームとか感覚とか忘れてたし、初心者って言っても合ってるよな？

定義的には微妙だが、本人がそう言っているのであればそうなのだろう。

事実彼女は入学当初セカンドの守り方を一切覚えていなかった。

「てか先輩元々セカンドだったってマジですか？」

「マジマジ、鈍足で下手だったけどね」

「ハマ先輩脚速そうなた目してるのにな」

「それ何回も言われてるよ、てか一般人に混ざったら速いからな？」

あくまで野球選手のカテゴリー内では遅いだけであって、クラスや学年の中では速い方だ。

そこを誤解されるのが一番嫌だと浜矢は思っている。

「また決勝まで行きたいですね」

「決勝まででいいのか？ 優勝しようぜ」

「その為には横浜隼天に勝たないとですよね……平気かな」

「守備がアレならイケると思うけど」

野球では守備の乱れから流れを持っていかれる事は多々ある。

守乱のチームの隙を狙っていけば、勝てない相手ではないと浜矢は言う。

「横浜隼天ですけど、やっぱ蒼海大にリベンジしたいですね」

「……ああ、それに神田にだってまだ勝ってない」

「ライバルなんでしたっけ？」

「ライバルというかなんと言うか……そんな感じだけど」

この2人をライバルと呼ぶかは微妙なライン。

神田は浜矢の事を下に見ているし、浜矢は神田にムカつくと思っただけ。

浜矢から神田への感情はライバルに対するものと捉えていいが、神田から浜矢へはライバルの感情は無い。

「デীবバとも戦いたいな」

「確か厨二病のチーム、でしたっけ」

「そう、けど皆いい奴だったよ」

厨二病なだけで性格に問題は一切無い。

それに加え野球の実力もあり成績良好な飛鷹こそ、デীবバという学校を象徴する生徒だろう。

「ハマ先輩って低め得意ですよね」

「いきなり話変わるな……なんか打ちやすくない？ 高めは苦手だわ」

「私は高さはあんま考えた事ないですね、インコースが苦手です」

「三振する時、いつもインローのストレートのイメージあるわ」

石川は高さで得意不得意は無いが、インコースの球に滅法弱い。

俊足なので転がせば内野安打になる事もあるが、弱点が明確すぎるのは考えもの。

「じゃあ交代!」

「はい、んじゃ内角お願いしまーす!」

「言われなくてもそのつもりだったよ」

浜矢は石川の内角を目掛けてトスを出す。

最初の数球は窮屈なスイングだったが、最後の方になると滑らかな動きで打ち返せていた。

「2人ともー、終わりだよ! 片付けしてー」

「ウィツス! 私はボール片付けるので、先輩はバットお願いしますね!」

「りょーかい、ゆっくりでいいからな」

そんな事を口にしながらも、2人は素早く片付けをして解散する。

明日は遂に準決勝、因縁の蒼海大まであと1つ。

第13球 安打製造機

準決勝、横浜隼天との試合当日。

太陽の熱気に負けない程の暑さが、横浜スタジアムの観客席・ベンチから溢れている。

「準決勝だよー！ ここを勝てば蒼海大、絶対勝とうねー！」

蒼海大は一足先に勝利を決めていた。

市大藤沢相手に10対3のリード勝ちという、打撃力の高さを見せつけた。

「打順を発表するよー！」

千秋から待望の打順が発表される。

1番 川端渚(三)

2番 三好耀(左)

3番 上林真希(遊)

4番 鈴井美希(捕)

5番 石川灯(二)

6番 栗原美央(一)

7番 荒波友海(右)

8番 洲寄真理（投）

9番 岡田早紀（中）

スタメンは昨日の時点で知らされていたが、打順はまだ決まっていなかった。

「結構弄りましたね」

「安打製造機対決ってことと、適正打順の1番で使ってあげようかなって思ってた」

「宮崎さんとの対決ですか……頑張ります」

神奈川の安打製造機・宮崎と、和歌山の安打製造機・川端のトップバッター対決。

——渚ちゃんはこれまで期待を下回る成績……これで何か触発されれば良いんだけど。

川端は5試合で2安打と、安打製造機という異名に相応しくない成績。

宮崎と同じ打順にする事で、覚醒を期待したのだ。

「つかかなんで私ベンチなんですかー？」

「相手先発の汐屋さんが左打者苦手だからだよ」

「だから私スタメンだったんですね……けど5番って」

「灯ちゃん得点圏強いでしょ？ それに左投手は苦手だけど、汐屋さんは右だから平気

かなって」

茶谷が悪態をついたり石川が自身の打順に疑問を抱くが、それに理由を答える千秋。「汐屋さんが降りたら佳奈利ちゃんに交代するよ、それまで我慢して待っててね」

「……うつす」

茶谷もあまり千秋には強く出られない。

あのスパルタノックがだいぶトラウマになっているようだ。

「汐屋さんは軟投派投手……惑わされないようにしっかり引きつけて打とうね！」

「軟投派ってあんま三振取らないイメージあるんですけど、隼天の守備でそれってヤバくないですか？」

「実際ヤバイよ？ 失点は8点だけど自責は4点だし」

「ええ……かわいそうですね」

防御率には反映されないから良いものの、自責点の倍の失点を味方のミスによって失ってしまったている。

「まあ打たせて貰えるならいっぱい打って、守備の乱れが出たらそこを徹底的に責め立てよう！」

『おう！』

——せんしゅーも中々悪役じみた事言うようになったなあ……。

浜矢はしみじみと千秋の変化を受け入れていた。

このような発言するのは、今までであれば主に監督だった。

彼女に影響されたのかも知れない。

《1番^{セカンド}墨手 宮崎さん》

試合は横浜隼天の先攻となり、宮崎が打席で構える。

——宮崎さんは引つ張り方向への強い打球が多い、内野はレフト寄りで外野は少し後退させよう。

引つ張り警戒のシフトを敷き、三塁線への痛烈な打球に備える。

洲寄はロジンバックを手に馴染ませ、優しく地面に置く。

初球は様子見の外角へのパームボール。

宮崎も1打席目は見ていくタイプなので、見送って1ストライク。

2球目は低めのスラップがワンバウンドしてボール。

——伊吹ちゃん程ではないけど、真理もストレートにノビあるし試してみよう。

3球目は外角高めにストレートを投じるが、宮崎はそれを綺麗なスイングで打ち返

す。

「ライト！」

「任せてー！ よつと」

荒波が落下地点に一直線に走り、最後は脚から滑り込む。

「アウト！」

「ナイスプレー友海く！」

「真理ー、もつと打たせて良いからね」

いきなりファインプレーが飛び出し、場内は盛り上がる。

——本当、ウチの外野は頼りになるな。打たせていこう。

鈴井は今日は打たせて取る配球にしようと考えた。

隼天とは違い守備力の高い至誠だからこそ出来る配球だ。

2番は三遊間を抜けるかという打球を打つが、上林が追いついてアウトにする。

「真希ナイスー！」

「ツーダーン！」

3番にはムービングを打たせてセカンドフライ。

初回は三者凡退と、最高の立ち上がりを見せた。

「鈴井どうだ？」

「シフト敷いても逆をつかれてる感じですね」

「なら定位置でも良いかもな、長打警戒とかの指示だけは出して」

上位3人にはシフトを敷いたが、全員その逆をつくような打球を放った。

とりあえずは1巡目はシフトを敷いて、2巡目から色々考えようと監督は付け足した。

「さあ渚ちゃん、頑張つてね！」

「はい……」

至誠の安打製造機、川端が自信無さげな様子で左打席に立つ。

内角のスライダーを見逃して1ストライク。

外いっぱいサークルチェンジを流すも、サードライナーに終わる。

「ドンマイ！ 良い当たりだったから次はヒットになるよ」

「……はい」

川端は浮かない表情でベンチに座る。

声出しも忘れて落ち込んでいる様子だ。

——せっかく監督達が信じて1番で起用してくれたのに、打てんかった……。川端は自身の成績に対し不甲斐なさを感じている。

せっかく中学と同じ打順にして貰ったのに、それでも結果を残せない自分が情け無く思えてくるのだ。

「監督、渚ちゃんどう思いますか？」

「自信の無さが不調に繋がってるんだろうな」

「けど中学の時はそれでも打ててましたよね？」

「まあ投手のレベルが違うからな……それにウチは全国から凄い奴ら集めてきてるし、余計に比べちゃうのかもな」

中学と高校では投手のレベルが全く違う。

それに加え元々の自信の無さがスイングを乱し、凡打を生み出している。

いつも通り2番に据わった三好は、粘り勝ちをして四球を選ぶ。

「やっぱり耀ちゃんは2番が良いですね」

「あれだけ粘れて選球眼も良いんじゃないや、勿体無くて下位には置けないしな」

3番上林は初球を引っ張るがファールとなる。

ここまで安定した成績を残している彼女には、この打席でも大きな期待が寄せられている。

「鈴井に繋げー！」

——そうや、私の後ろは鈴井先輩……！　ここで打てば好感度上がるのは間違いあらへんやん！

低めの難しい変化球を巧く掬い上げてヒット。

上林は鈴井の方をじつと見つめている。

——なんか凄い見られてる……まあ頑張ったし。

鈴井は上林の方へ拳を突き出す。

それを見た彼女は、打った時よりも嬉しそうにしている。

「さて、一・二塁で鈴井か……ここは1点は取れそうだな」

「美希ちゃんはどうな場面、どんな投手でも打てますからね！」

集中した顔で打席に立ち、マウンド上を睨みつける。

——汐屋の持ち球はスライダー、サークルチェンジ、ナックルカーブ……狙うのは、変化の少ないサークルチェンジ一択。

3球続けて見逃した後の4球目、内角低めに狙っていた球が来た。

彼女はそれを捉えてレフト線を破る長打を放つ。

「耀、ゴーゴー！」

「分かつとーばい！」

ランナーコーチの神宮の言葉に、ニヤツと笑いながらそんな事を返す。

鈴井のヒットで生還できるのが嬉しいのだろう。

「よし先制！」

「幸先良いですね」

三好はハイタツチを交わしベンチに座る。

しかしこの後は続かず、石川はインローのストレートで三振、栗原もファーストゴロに終わった。

援護を貰った洲崎は初回の完璧な立ち上がりを維持し、4回まで無失点ピッチ。

対する汐屋も初回の失点以降は無失点に抑え、4回終了時点で1対0と試合は膠着状こうちやく態。

5回表、横浜隼天の攻撃は下位打線から。

先頭の7番にヒットを許すと、8番にも粘られる。

スラップ、パーム、スクリュー全てをカットされ、少しでも外せば見送られる。

——8番とは思えない選球眼……ならボール半個分くらい外して。

洲寄はストレートを外角低めに投げ込むと、鈴井は少しミットを動かして捕球した。

「ボールフォア」

——フレーミングが通用しない審判だったか、失敗したな。

鈴井の得意とするフレーミングも、今日の球審には通用せず四球と判断された。

9番は送りバントでランナー二・三塁となり打席には。

《1番二塁手 宮崎さん》

この場面で宮崎に回ってしまい、内野はマウンドに集まる。

「一塁空いてるし敬遠しても良いんだけど、どうする?」

「……勝負します、ここで逃げたらエースなんて名乗れません」

「分かった、強烈な打球来ると思うから内野は一瞬も気抜かないでね!」

『はい!』

キャプテンらしく、気を引き締めるよう後輩達に檄を飛ばす。

だが守備シフトは自分では判断せずに、ベンチに指示を促す。

「どうしますか?」

「前進守備か中間守備……前進だと宮崎には抜かれそうで怖いけど、かと言ってこの状況で中間はなあ……」

「1点取られても同点ですし、ここは中間守備でも良い気はしますけど……」

千秋、監督、小林がシフトについて議論を交わし合う。

「守備シフトって色々あるんだね」

「うん……1点もやれない場面だと、内野は前進して、内野ゴロでの失点を防ぐ……よ」

「中間守備は逆に1点はやるけど、アウトを多く取るためのシフトだっけ？」

「そうだよ……それに、宮崎さんの打球は速いから……前進守備だと、抜かれると監督達は思ってるみたい……」

ランナーは二・三塁、強い打球で内野を抜かれれば最悪逆転されるだろう。

ならば1点をやっても良いから、内野で打球を捌くのを選びたい。

しかしこの場面で追いつかれていいのかと、3人は悩んでいた。

「決めた！ ここは前進守備だ、同点は防ぐぞ」

「まあ定石通りではありませんよね」

「なんとか内野で食い止められればいいんですけど……」

かなり長い時間悩んだ末、監督は前進守備を選んだ。サインを確認して鈴井は野手陣

に指示を出す。

——慎重に攻めはするけど、カウントは悪くしないように投げさせよう。

最初は外いっぱいスクリーンを投げ1ストライク。続く2球目はストレートが外れて1ボール。

3球目、内角のスラップは引つ張られるがファールに。

——カウントは1—2。ここでボール球を投げても勝負を先延ばしにするだけなのは分かってる、攻めるよ。

初めに投げたのと同じコースに、今度はバームを投げ込む。

しかし鈴井の視界には、鋭く振り抜かれたバットが白球を叩き潰す様子が見えた。

「ライトー！」

「オーライー！」

フェンスギリギリという高さ、荒波ならば捕れるかも知れない。

前進していた彼女は後ろを振り向く事なく、フェンスに向かって走り続けた。

しかし、無常にも白球はライトスタンドに吸い込まれていった。

「マジか……！」

「……ここで打てるのは、流石の宮崎さんですね」

「一気に2点差ですか……少し厳しいですね」

ベンチには重く暗い雰囲気が漂っている。

鈴木は投手を交代するかどうかベンチの判断を仰ぐ。

——本塁打は狙ってないと思って、勝負を焦りすぎた……。真理は悪くない。

「……まだいけません、寧ろランナー居なくなつて吹っ切れましたよ」

「そう？　ならこれ以降は無失点、いやノーヒットで抑えよう」

「はい」

……ここで投手交代はせず、洲崎を続投させる。

——逆転されたんだ、あと2アウトくらい取つてから交代してやる。

本塁打のショックを引きずらず、洲崎は2番と3番を封じ込めマウンドを降りる。

「お疲れ、横浜隼天相手に5回3失点は立派だよ」

「そうだよ！　ありがとうね真理ちゃん」

「本当は抑えたかつたんですけどね……まだまだですね」

額から流れ出る汗を拭いながら、洲崎は水分を補給する。

「次の回からは神宮行くぞ、2イニングだ」

「マジですか!? やった、彗手伝って!」

「逆転された直後なのに元気だね……」

「暗い顔してても状況は変わんないじゃん! なら元気に行こーよ!」

神宮はそう言い残し、伊藤を引き連れて肩を作り始める。

今の言葉に自分達が諦めかけていた事に気づき、監督達は顔を見合わせる。

「空ちゃんの言う通りですね、まだ試合は終わってません」

「最後まで選手を信じて指示を出すのが私達の仕事だしな」

「逆転されたのなら、逆転し返せばいいですからね」

選手達は誰も諦めてはいない。

ならば首脳陣が絶対に諦める訳にはいかない。

ここからの反撃までのプランを、監督は脳内で描き始める。

第14球 大胆不適なサイン

5回裏の攻撃はまだノーヒットの岡田から。

何回か素振りをしてから打席に入る前に、ベンチの方を見てサインを確認する。

——普通に打たせれば多分打てないだろう。だから、ここはギャンブルだ。

監督は反撃へと繋がるそのサインを出した。

——相手の守備は少しだけしか前進してないし、それに下手らしいし。

ヘルメットを触り、岡田はこのサインを受け取る。

——ここで試すしかない！

2人の考えている事は一緒だった。

初球のスライダー、ギリギリまで引きつけてからバットを出す。

「セーフティーだ！ ボール一つ！」

「はい。」

三塁線に上手く転がしてから、岡田は強く地面を踏み駆け出す。

しなやかに力強く駆ける岡田は、ただベースの先だけを見据えて走っていた。

「セーフ！」

「よし！ 岡田ナイス！」

「早紀ちゃん最高だよー！」

サードの握り替えがもたつき、楽々セーフ。

岡田の脚と走塁・盗塁技術の高さは全国トップクラス。

だから常にグリーンライトのサインが出ているが。

「ここは走らせるの怖いな……牽制上手いし」

「けど攻めたいですよね」

「どうしましょうか」

どうにかして大量点を取りたいが、失敗した時のリスクが大きい。

監督はどちらかと言うとリスクを恐れる傾向にある。

「あのー……」

「春宮？ どうした？」

頭を悩ませている3人に恐る恐る声を掛ける春宮。

「エンドランっていうのしちやダメなんですか？」

彼女のこの発言に、3人は言葉を失った。

春宮も変な事を言つたかと次の言葉が出ず、ただ無音の時間が流れる。

「……ちなみに、そう思つた理由は？」

「だつて岡田先輩つて走塁判断？ つての上手いんですよね、で渚は打つのが上手い……いけるじゃないですか！」

「そういう簡単な話じゃないんだよ……けど、アリかもな」

「本当ですか!？」

監督が意見を肯定すると、春宮は目をキラキラと輝かせて喜ぶ。

そしてエンドランをするか否かでまた3人は話し合う。

「川端は結構気合入つてるし、ゲッツーにならないように打つてくれそうだよな」
「こういう場面に強そうですね」

「それに、発破を掛けるという意味でも良いと思います」

意見は一致した、エンドランを決行する。

そのサインを見た川端と岡田の2名は、驚きをなんとかヘルメットで隠した。

——ここでエンドラン……監督達は、まだ私の事を見捨ててなかつた。いや、これがラストチャンスかも知れない。

——これを失敗したら渚は自分を責める、そんな事させないように走塁はミスれない。

両名は顔を上げ、決意が固まった表情を見せた。

岡田に盗塁のサインが出たのだと考えた汐屋は、何度も一塁へ牽制する。

何度牽制されてもリードの大きさは変えない。

そして遂に投球モーションに入った時、岡田は走り出した。

「走った!」

「いけ……い……川端!」

川端は外の変化球をおっつけて打ち返し、三遊間を破るヒットを放つ。

流石にレフト方向への打球では進塁出来ず、岡田は二塁ストップ。

「エンドラン成功!」

「渚すごい!」

「凄いのは春宮の作戦だよ、よくこの場面でエンドランとか思い付いたな」

監督にそう言われた春宮は不思議そうな顔をしている。

「だってこの2人の組み合わせか、キャプテンだったら成功しそうじゃないですか?」

「確かにそうだけど……失敗した時怖いだろ、そういうのは考えなかったのか？」
「渚ならやってくれるって信じてましたから！」

——選手を信じる采配、か……。リスクを嫌ってこういうサインは控えていたけど、少しずつやってみるか。

リスクの大きさが実感出来ていない春宮だからこそ出せた、大胆不適なサイン。

「よし、この回で追いつくぞー！」

『おー！』

このチャンスの場面で回ってくるのは三好。

しかしここでも岡田への牽制が挟まれる。

——2回牽制を挟んだ、そろそろ打者と勝負したいはず。それにさつき気付いたけど、この人サークルチェンジ投げる時は気持ち長く持つ気がする。

そして今まさに、投球モーションに入るまで長い。

岡田の眼は見逃さず、三塁に向かって駆け出した。

「三盗だー！」

「なっ、岡田……!?!」

投手の癖を完全に掴んだ岡田は、一度ボールの現在位置を確認してから三塁に右脚か

ら滑り込む。

三塁審判はタッチプレーを見守った後、両腕を地面と平行に上げる。

「セーフ、セーフ！」

「いえっす！」

三塁上で手を叩く岡田を見て、監督は心臓を押さえている。

「ヒヤヒヤした……」

「グリーンライトですけど、まさか三盗するとは……」

「けど成功したから何も言えませぬね」

これで一塁・三塁となり犠牲フライでも1点だ。

期待に応えたい三好だったが、セカンドへのフライで1アウト。

——流石にこれじゃ帰れないってばー、ピカ！

——ごめん。

申し訳無さそうに謝り、ベンチに戻る三好。

だがまだ至誠の攻撃は終わっていない、次は今日当たっている上林だ。

2球続けて見送って1ボール1ストライク。

上林は狙い球を絞り、それ以外の球には反応していない。狙い球が投げられたのは3球目だった。

——サークルチェンジきたっ！

外角低めの緩い球に合わせ、ライト方向へ流す。

岡田は余裕で生還し尚も一・二塁のチャンスで鈴井。

どんなコースに何が来てもカットして粘り、フルカウントとしてからの7球目。

「っ！」

「アウト！」

詰まった当たりはキャッチャーフライとなり、2アウト。ランナーは変わらず一・二塁のまま。

「珍しいな」

「すみません、クイックの速さ変えられました」

クイックの速さを変える事により、ボールが到達するまでの時間をずらした。

それにより打ち損じてしまったのだ。

「まあ鈴井で無理なら仕方ない……石川—— お前が決めるよ！」

「灯、代わりに頼んだよ！」

石川が緊張した雰囲気のまま左打席に立つ。

5回裏、2アウト1点差。打ち損じれば終わりかも知れない。

——監督は左に強いって理由で私を起用したんだから、打たないと。

しかし2球であつという間に追い込まれ、1球ボールを挟んでカウント1—2。

これはバッテリーが勝負に来るカウントだ。

投じられた4球目は内角低めへのストレート、石川は最も苦手としているコースと球種。

——ハマ先輩と練習したんだ、ここで打つことくらい私にだつて出来るはず！

肘を畳んで、身体を回転させてボールを捉える。

打球は鋭く一二塁間を抜け、ライトの前に運ばれる。

「川端突つ込めー！」

監督の怒号にも近い叫び声が響き、川端は三塁を蹴りホームへ突つ込む。

ライトもそれを見てバックホームをし、最後の要である捕手に託す。

川端が滑り込んで片手でホームベースをタッチするのとほぼ同時に、捕手もミットで

川端をタッチする。

「……セーフ!!」

「川端ナイスラン!」

僅かに川端のタッチの方が速かったと判定され、これで振り出しに戻した。

「監督も結構大胆な指示出しますよね……」

「あいつ地味に走塁上手いからな、いけると思ったんだ」

「なるほど」

川端は送球も走塁も平均よりは上手い。

高い打率に目が行きがちで、この点はあまり注目されてこなかったようだ。

「さあ栗原逆転だ! 得点圏は好きだろ?」

「まっかせてください!」

フルスイングの素振りをしてから打席に入り、バットを構える。

普通ならばプレッシャーを感じる状況だが、栗原は笑っている。

——確か引つ張りが多いタイプだったな、警戒で。

横浜隼天は引つ張り警戒のシフトを敷く。

これで逆をつければ良いのだが、栗原には狙ってそんな事を出来る技術は持ち合わせ

ていない。

その初球だった。外角のスライダーを鋭く弾き返して流す。

本来であればセカンド真正面の打球だが、シフトにより誰も居ない。

——私は、横浜^私隼^{たち}天は負ける訳にはいかないんだ！

宮崎が横つ飛びで打球に喰らい付く。

泥を飛び散らせながら地面に飛び込み、グラブを審判に見せる。

「アウトー!!」

アウトコールが響くと球場が沸いた。

負けられないと意地を見せるキャプテン宮崎のプレーに、至誠側の応援席からも思わず出た拍手の音がかすかに聞こえる。

「悔しいく!!」

「今のは宮崎じゃなかったら抜けてたな、ドンマイ」

「実質ヒットだから、ね？」

「ぐぬぬ……守備行つてきます」

固く閉ざされた口元に悔しさが滲んでいるが、それを拭うように一塁へと歩く。

宮崎は横浜隼天の選手には珍しく守備も良い。
その守備力の高さがこの大事な場面で出てきた。

「神宮いくぞー」

「はいっ！ 調子は最高ですよ、もう6人で終わらせちゃいます」

「……6回を？」

「違いますよ！ 2イニングですよ!!」

信頼されているのかどうなのか分からないやり取りをして、神宮は怒りながらマウンドに向かう。

——あの真理がホームラン打たれてからも引きずらなかつたんだ。その成長の日を私がおち壊す訳にはいかないんだ！

先程の発言通り、調子は絶好調の模様。

鋭く曲がるスライダーとシュート、ブレーキの効いたカーブ。

そしてストライクゾーン内で荒れるストレートが、洲崎とのギャップを与え3人で6回を終える。

「ナイピ、次の回もその投球頼むよ」

「余裕ですよ！」

「なんでフラグ立てるかな……」

自信满满かつフラグ満載な神宮に、苦笑いを返す監督。

6回裏が始まる前に横浜隼天のベンチが動いた。

投手交代のアナウンスがされ、汐屋がベンチに下がる。

「お、汐屋下がったか」

「私の出番つすか〜?」

「だな、代打の準備しておいてくれ」

「はい」

投手が変わったという事は、約束通り石川と茶谷が交代となる。

投球練習が終わり荒波が構える。

今日はまだノーヒットで、守備でも目立った活躍は無い。

初球はストレートを見逃して1ストライク。

汐屋とは打って変わって速球派の投手だ。

平行カウントとしてからの5球目。

外角高めにストレートが投げられる。

——確かに球は速いけど、伊吹先輩と比べたらノビはない。

高めの球に上手く合わせてレフト方向へ流してヒット。岡田は送りバントで1アウト二塁に。

続く川端は今までの試合とは違い、本来の打力を取り戻していた。

際どい球はカットして粘り、外れれば迷わず見送る。

和歌山の安打製造機と呼ばれていた頃の川端だ。

「ボールフォア！」

「よし、完璧」

「これぞ渚ちゃん、ですねー！」

しかし三好は速球に押されてしまい、セカンドゴロに終わる。

荒波は三塁に進んで2アウト三塁、最高のチャンスを作り出した。

「上林頼むぞー」

「真希って速球打ちはどうなんですか？」

「得意でも苦手でも無かったと思うが」

「バランス型だなあ……」

得意でも苦手でもない、そんな要素が大半を占めている上林。

しかしそんな評価をひっくり返すかのように、初球を打ち返してレフトの前に落とす。

「勝ち越し！ 今日の上林良いな！」

「最高の結果ですね……！」

鈴木が続くもその後は代打の茶谷が三振して3アウト。

迎えた7回の守備、ここを抑えれば勝利となる。

マウンドに上がったのは、6回からリリーフ出場している神宮。

横浜隼天は下位打線からの攻撃だったが、代打攻勢に出る。

それでも神宮を捉える事は出来ず7番をセカンドフライ、8番をショートゴロに仕留める。

「本当に6人で抑えそうだな」

「監督、そんな事言っちゃうと……」

この発言が引き金となってしまったのか、急に制球が乱れ四球を出す。

1発出れば逆転の状況で、今日1本打っている宮崎。

「失投だけはやめろよ神宮……」

「なんか既に胃が痛いんですけど……」

胃がキリキリとするのを感じながらも、グラウンドの戦いからは目を逸らさない。

最初はスライダーで空振り、次はボール球のシュートに釣られずボール。

3球目もカーブが外れてカウント2―1からの4球目。

やけくそ気味に投げた内角のストレート、それを宮崎は打ち上げ打球はファールグラウンドに。

「あれは無理か？」

「風で流されてますね」

捕球を諦めていないのが1人居た、三好だ。

オーライ、と声を出しながら打球に突っ込み、最後はフェンスにぶつかりながら捕球を試みる。

「アウト！」

「おいおい、三好大丈夫か？」

ゲームセットのコールがされても、三好はうずくまったまま立ち上がらない。

「三好先輩、立てますか？」

「つ……平気、整列するよ」

「はい……」

心配そうな目で見つめている上林には気付かず、三好は列に並ぶ。握手を交わし応援席にも挨拶をしてから、監督は三好を呼び止める。

「小林先生は怪我とかにも詳しいから、少し診てもらえ」

「別に平気ですよ」

「コールドスプレーとかもして貰うし、監督の命令には従え」

「……はい」

普段は絶対服従な環境ではないが、今は別だ。

怪我しているかも知れない選手を放っておけない。

三好は渋々と小林の後を追って医務室へ入り、ユニフォームを脱いでアンダーシャツ姿になる。

「見せて下さいね、左肩付近でしたよね」

「はい」

「少し触りますね……痛いですか？」

「痛くないです」

触ったり動かしたりして、痛みが無いかを確認する。

「これなら平気そうですね、一応湿布は貼っておきましょう」

「大袈裟ですよ……」

「こうしないと、私が監督に怒られてしまいますから。監督は皆さんの事を大事にされていますからね」

そう言われると反論も何も出来ず、大人しく湿布を貼られる。

最後にもう一度痛みを確認してユニフォームを着る。

「そういえば、なぜあのようなプレーをされたんですか？ 普段の三好さんなら無理矢理には捕りに行かない打球でしたけど……」

三好は無茶はせず、自身の範囲内の打球を正確に捌く選手。

あのような打球をぶつかりながら捕るのは、明らかにおかしい。

「……………真希は凄い活躍してたのに、私は全然だったから」

「ふふっ」

「なっ、何かおかしいんですか？」

「いえ、ただ素敵なライバル関係だと思ひまして」

ライバルと思われるのが恥ずかしいのか、顔を赤くして俯く。

「はあ……………意識してあんなプレーするとかって笑われてそうで憂鬱です」

「貴女の中の上林さんはどんな人なんですか……………それに、上林さんは三好さんの事好き

ですよ」

「はっ?」

すると医務室の扉がノックされ、小林は微笑みながら入室の許可を出す。扉を開いた先には噂の人物が立っている。

「上林……」

「あの、三好先輩……怪我とかは大丈夫ですか?」

「あれくらいのもプレーで怪我とかしないよ」

「……良かったです」

心底安心した様子で微笑む上林。

それを見て本当に嫌われていないと、ようやく実感した三好。

「こちらの片付けはやっておきますから、2人は先にバスに戻っていて下さい」
「分かりました、ありがとうございます」

上林と三好の2人は、小林に礼をし医務室を後にする。

「あれ、私の荷物は?」

「それならもうバスに積みましたよ」

「……ありがとう」

「流石にぶつけた人に荷物持たせませんよ」

それは流石に過保護じゃないか、と思う三好。

だが上林は心の底から彼女を心配していたのだ。

「……心配してくれてありがとうな」

「気にしないで良いですよ、私先輩のこと好きですし」

上林の言葉にあからさまに動揺する三好。

——落ち着け、別にそんな意味じゃない。そうだ私にも上林にも、鈴木先輩がいる。違う絶対にそうじゃない。

「先輩？」

「……ふんっ！」

「いった!! 何するんですか!？」

照れ隠しで上林の頭を引つ叩く。

上林からは三好の顔は見えていないので、何が起こったのか分からないだろう。

三好の顔は熱が出たように真っ赤だ。

「……バスまで競争するぞー！」

「いきなり!? まあいいや、負けませんよ!」

三好はぶつかったのなんて嘘のように走る。

それを追いかける上林、2人の顔には笑顔が浮かんでいた。

「……ん?」

——なんだ、やっぱり2人とも仲良いじゃん。

バスの中からその様子を見つけた監督は、やれやれと言った笑顔だった。

「脚遅いぞ!」

「うるさいですよ! こっちは気にしてるんです!」

ライバルではあるが仲は悪くない、遊撃手コンビ。

2人の仲は今日だけでもかなり縮まった事だろう。

至誠高校、3年連続の決勝進出。

第15球 不穏な始まり

神奈川の高校野球好きはこの日を待ち望んでいた。

至誠高校対蒼海大相模高校による決勝戦。

3年連続同カードのこの決勝の対決記録は、互いに1勝1敗。

どちらが勝ち越すのかを楽しみにしているファンもいる。

——あつつ……。自販機でなんか買おうかな、お金勿体無いけど。

35度を越す猛暑日での試合となり、浜矢はこの暑さにやられていた。

自宅から持ってきていた水筒の中身はほぼ0に等しく、自動販売機で輝く飲料がいつもより美味しそうに見える。

——うん、買おう。熱中症になったらまずいから、そう。熱中症は危険だからね。

自分しか居ないというのに、言い訳をして自動販売機の前に立つ。

色とりどりの飲料を前に悩んでいると。

「よっ」

浜矢の隣に立つのは、蒼海大の1番を背負った佐久間。

「わっ!?　なんだ佐久間かく、おすすめなんかある?」

「お前らも決勝まで勝ち残って来たんだな……私はこのオレンジジュースが好きだな」

「蒼海大にリベンジしなきゃだからな……じゃあこれ買おう」

「……2つの話を同時進行させるのやめないか?」

いい加減佐久間が突っ込むと、浜矢はケラケラと笑いながら謝る。

他校でライバル同士だというのに、2人は仲が良い。

「1つだけ聞かせろ、今日は絶対先発だよな?」

「そんな庄かけんなよ……心配しなくても先発だよ」

浜矢の顔に近づいてそう質問した佐久間は、浜矢の返答に安心したようで距離を取る。

「ようやくエース同士の投げ合いだな、最後まで降りるんじゃないぞ」

「言われなくても、佐久間より先に降りる訳ないだろ」

「私だって降りないさ、決着が付くまでは」

別れる際に、何も言わずとも拳と拳をぶつけ合い互いの健闘を祈る。

佐久間は三塁側へ、浜矢は一塁側へと歩き出す。

「戻ったよー」

「伊吹ちゃん、なんか嬉しそうだね」

「んー、佐久間とぼったり会ったから話してた」

「一応これから戦う相手なんだけど……」

今からまさに戦う相手と、仲睦まじく会話するなど鈴井には理解出来なかった。

これには千秋も同感なようで、愛想笑いを浮かべている。

「これおすすめなんだって」

「オレンジジュース？ ……佐久間もこういうの飲んだね」

「ワイルドなの飲んでるイメージあったわ」

「ワイルドな飲み物って何？」

浜矢の適当な言葉一つ一つにツツコミを入れる鈴井。

暑さのせいかわ決勝戦でテンションが上がっているのか、今日の浜矢はボケに回っている。

「伊吹ちゃん平気……？」

「せんしゅーのガチ心配は結構落ち込むからやめよう？ 平気だって」

「ならよかった！」

千秋に不安そうな顔をされたら、浜矢といつも通りになるしかない。

暫く佐久間について話していると、蒼海大の選手が三塁側から入場し始めた。

「佐久間の隣にいる奴デカくね？」

「捕手の相川さんだね、確か170くらいあった気がするよ」

佐久間の身長は168cm、それよりも縦に高く体格も良い。

一般人が想像する捕手のイメージと一致した選手だ。

「縦にも横にもデカいじゃん……こわ」

「まあ高校No.1キャッチャーは私だけけど」

「いきなりマウント取るじゃん……そーういや孤塚と鈴井って捕手としてはどっちのが凄

いの?」

「私だけ?」

——最近結構素直だったから忘れてたけど、こいつプライド高かったな。

少なくとも同級生の捕手の中では、絶対に自分が一番と信じて疑わない鈴井。

しかしその自信に違わぬ実力の持ち主である。

「みんなしゆうごーうー!」

そんな話をしている横で千秋が、ストレッチをしていたり素振りをしていた部員を集める。

「蒼海大は全国でもトップクラスの打力を誇るチーム、何点差あつても安心は出来ないからね！」

「まあ浜矢が先発だから、そこまでの失点は無さそうだけだな」

「佐久間さんはコントロールが悪いから、甘い球以外は全部見逃そうね！」

蒼海大のエースである彼女の弱点は、やはり制球力。我慢して見逃せば、1試合に5個は四球を出す。

「あいつまだノーコンなのか……球速は？」

「相変わらずの県内最速だよ」

「自分のスタイルを貫くのはカッコいいよな」

3年間一貫して速球派を貫いた佐久間。

成績こそ圧倒的では無いが、そのプレースタイルと信念には感服せざるを得ない。

「さあ、この試合も勝って甲子園へ行こう！」

『おぉー！』

神奈川県最後の試合のサイレンが、今鳴り響く。

至誠が先攻、左打席に入るは打撃の成長した荒波。

最初に投げられたのはやはりストレート。

風を切る豪速球は、重い音を立ててミットに収まる。

「相変わらず速いな……」

「けど変化球は増えてませんし、多分打てると思います」

「速球は浜矢でいつも練習してるしな」

——やっぱり速い……。けど、ハマ先輩と違ってノビは無い。当てるくらいなら出来る。そう。

球の質なら浜矢の方が何段階も上、速いだけの佐久間の球は至誠の選手なら当てられる。荒波はストレートを続けられても全てカットする。

——フン、ストレートには対応できるようになったか。……なら、これはどうだ？

高速スライダー。ストレートの球速と大差ない速度で投げられる変化球。

通常のスライダーに比べれば変化量は少ないが、速球派投手が投げればかなり厄介な球種だ。

「ストライク、バッターアウト！」

これには対応出来ずに空振り三振に終わる。

「……伊吹ちゃん、あれ見て」

「はっ？ 私の最速と同じなんだけど……」

電光掲示板に表示された球速、それは浜矢の最速と同じだった。

「伊吹ちゃんのマックスと同じの変化球とか……」

「打てる気しね……」

「けど佐久間さんって、勝負所はストレートばかり投げてるし……」

「ほんとワイルドだな」

直球勝負を好む佐久間は、決め球に変化球をあまり投げない。

それさえ無ければもう少し良い成績を残せた筈なので、もったいないと述べる解説者も多くいる。

三好も豪速球からのフォークの組み合わせにやられて三振。

上林はスライダーを捉えるものの、セカンドライナーに終わる。

「伊吹ちゃん相手の時は生き生きしてるよね」

「まあライバルだからね……けど、こっちも準備万端だよ？」

浜矢は気合十分といった表情でマウンドに上がり、鈴井が来るのを今か今かと待ち望

んでいる。

その様子は飼い主に遊んで貰いたくて待っている、犬のようだった。

「はあ……伊吹ちゃんは犬か何か？」

「大型犬だねえ」

「2人って意外と似てるのかもね」

呆れた口調でそう吐き捨てながらも、駆け足で浜矢の元へと向かう鈴井。
その姿をくすくすとき笑いながら見送る千秋。

「今日の調子はどう？」

「バツチリ！ 今までで1番調子良いよ！」

「なら良かった……決め球何投げたい？」

「全部調子良いから何でもいいよ！」

本当かどうか気になるが、ここまで言うなら恐らく本当だと判断して配球を脳内で組み立てる鈴井。

他にも制球はどうか、投げたくないコースなどはあるかを確認して2人は自分の守備位置につく。

「しまつていっハー！」

『おー!』

鈴井の一声で全員の気が引き締まる。

蒼海大打線は強打者揃い、一瞬も油断は出来ない。

「プレイ!」

1回裏の始まりを告げられ、浜矢も佐久間に対抗するようにストリートから入る。空気を切り裂きながら進んだボールは、いい音を響かせてミットに。

「佐久間も浜矢もいいよー!」

「どっちが勝つと思う?」

「私は蒼海大かなー」

「私は至誠!」

このカードは神奈川屈指の人気カード。

それに加えてエース2人の投げ合いとなると、観客も楽しまずにはられない。勝敗予想や2人への声援などが各地から聞こえる。

「ストライク、バッターアウト!」

決め球のスライドフォークが炸裂し、空振り三振。

2番、3番にもストレートを振らせてこちらも三者凡退で終わらせる。

「ナイピ」

「なっ? 言った通りだったろ?」

「そうだね、良い球投げてるよ」

調子が最高と言ったのは間違いでは無かった。

鈴木も受けるのが楽しいと感じている様子だ。

2回表は4番に入った茶谷から。

初球はストレートを弾き返すも、ポール際のファール。

スライダーを見逃して2ストライク、そして3球目のフォークにバットが出てしま
三振。

——狙いはストレートだけど、甘い球があまり来ない。初球打ちも考えた方がいいか
な。

浜矢との投げ合いで調子が良い佐久間は、これまで失投らしい失投はしていない。

お互いが先発するとお互い調子を上げる、これぞライバルだ。

——やっぱりストレートだ。狙いは……右中間!

狙いを研ぎ澄まして流し打つが、ライトの正面。少し球威に押された形となった。

「ドンマイ」

「意外と手強いね」

「まあ多分、それはお互い様だけど」

今日は6番に入った浜矢が打席で構える。

直接対決の場面でお互い不敵な笑みを浮かべている。

——2年前お前に打たれたホームラン、まだ忘れてないからな。これでもくらえ！

コントロールを度外視した、ど真ん中へのストリート。浜矢は反応したが僅かに振り遅れて空振り。

次の高速スライダーには手が出ず2ストライク。

そして勝負球はやはりストリート。

今度はタイミングを合わせて振り抜くが、これも野手の正面。

「うーん、打てない！」

「佐久間さんが崩れるのを待つしかないね」

「回が進めば四球連発するかもだしね」

自滅を待つしかないのがもどかしいが、それしか作戦は無い。それまでに点を取られないようにするのだ。

《4番投手^{ピッチャー} 佐久間さん》

エースで4番、しかも蒼海大という名門校で。

佐久間はそれほど素晴らしい打力の持ち主という事だ。

——さあ、私のストレートを味わえよ！

アウトローにズバツと決まるストレート。

そのノビと球速に、関心したと言わんばかりの表情。

2球目は身体に迫ってくるスライダーが、僅かに外れてボール。

そして3球目、決め球であるスライドフォークを打たせる。セカンドにボテボテの打球が向かう。

「一塁！」

「オーケー！」

——あ、やばっ……握り替えが。

一塁への送球は高く、更に横に逸れていく。

栗原は咄嗟の出来事に対処出来なかった。

「玲、二塁！」

「おう！」

それを見た佐久間はすかさず二塁を狙う。

栗原もその肩をフル稼働して送球するが、間に合わずなかった。

「嫌な場面でエラー出たな……」

「次は相川さんですよ、敬遠しますか？」

「……いや、^{アイツ}浜矢なら平気だろ」

監督は浜矢の実力を信頼していた。

たとえ捕手の中で屈指の打力を誇る相川でも、浜矢なら抑えられると信じている。

——相川は速球に強い……。カーブでカウント取って、スライダーで決めるよ。

——了解、こんな序盤で失点はしないからな。

作戦通りカーブでカウントを取り、2球目。

外へ逃げていくスライダーを引っ掛けさせようとしたが、思ったよりも打球の勢いが強い。

「ファースト！」

「はいー！」

しかし一塁正面、打球の強さもありランナーも進塁はギリギリだろう。

だが栗原はほんの一瞬、ランナーの動きを見る為に打球から目を逸らした。

「っ、しまった！」

「一塁エラーした！ 佐久間ゴー！」

目線を打球に合わせた時には、もう目の前まで迫っていた。

グラブで追いかけたが土手の部分で弾いてしまい、ライトまで転がる。

「荒波ー！ バックホーム！」

「りょーかい！」

佐久間が三塁を回っているのを見て、荒波が矢のような送球をする。

だが鈴井のミットにボールが届く時には、佐久間はホームに到達していた。

「セーフ！」

「うわあ……最悪」

「エラーとタイムリーエラーですか……」

「これが魔の一・二塁間……」

ベンチでは監督達がそれぞれの反応をしていたが、全員揃って苦い顔をしている。

流石にこれは流れが悪すぎると、鈴井は一旦タイムを取りマウンドへ。

——鈴井……。凄い心配そうな顔してくれてる、平気なのに。

だがマウンドに到着するや否や、ニヤけながら言う。

「自責点0で失点した気分はどう？」

「最悪だよちくしょう!!」

まさかの女房役からの煽りに、地団駄を踏んで怒る浜矢。

しかしこれは鈴井なりの励ましたという事を、彼女は知っている。

「元氣そうで良かった、後続は切れるよね？」

「あつたりまえだ！……2人に凹んで欲しくないし」

浜矢が目を向けると、茶谷も栗原もバツの悪そうな顔をして目を逸らす。

2人ともかなり罪悪感を感じているようだ。

「なら完璧に抑えるよ！　こんな所で流れ渡したくないし」

「分かってる！　全力で行くぞー！」

浜矢は後輩を落ち込ませない為に躍動した。

6番は三振に切って仕留め、7番もショートゴロ。

最後はセンターフライに打ち取り、最少失点で切り抜けた。

「すみません……」

「……すみません」

「気にしないで良いって！ たった1点だし」

ベンチに戻るとすぐに、2人とも浜矢に謝罪をする。

そんな2人に浜矢は明るく励ましの言葉を送る。

「ほらほら！ 落ち込んでる暇があるなら打撃で取り返せ！」

「監督の言う通り！ 2人は長打あるんだからさ、1発頼むぜ？」

「……はい！」

「うっす」

そんな話をしている間に、本来の調子を取り戻した川端が出塁。

早速ミスを取り返せる好機が回ってきた栗原。

——さっきのエラーした奴か……纏っている空気がダメだ。そんなんしや私は打てないぜ。

ストレートとフォークで追い込んだあと、1球ボールを挟む。

最後は内角に切り込む高速スライダー、内角が得意な栗原はそれを思い切り引つ張る

が。

「シヨート！」

「オーケー、セカン！ ランナー脚遅いよ」

「はいよー」

シヨート正面の打球となり、6―4―3のダブルプレー成立。

先程よりも落ち込んだ様子でベンチに戻る栗原。

「み、美央……今のは仕方ないって！」

「そ、そうだよ、捕ったのを褒めよう？」

春宮と佐野が慰めるが、栗原の表情は浮かばれないまま。

「……そうだよね、私は捕れなかったもんね」

「いや、そういう意味で言っただんじや……！」

普段の栗原からは想像出来ない低いトーン。

これには言葉が出てこなくなる。

「栗原、ミスを引きずるのは良くないぞ？ お前はそんな事で躓く選手じゃない、もっと

活躍出来るんだ」

「……監督」

「それにまだチャンスはある、そこで取り戻そう！」

「……本当に、私で良いんですか？」

監督の必死の説得も栗原には通じず、いまだネガティブな発言をする。

「伊藤先輩の方が上手いじゃないですか……本職じゃないのに」

「そんな事言うなよ、交代されたいのか？」

栗原はこの言葉に、肯定も否定もしなかった。

——交代した方がチームには良い、けど……迷惑ばかりかけて下がるも嫌だ。

複雑な思いが頭の中を巡っている。

そんな栗原に対して、監督が出した決断は。

「なら伊藤、準備だけはしておいてくれ」

「えっ？」

「次の打席で打てなかったら交代だ」

「……分かり、ました」

巻き込まれた伊藤は居心地が悪そうだ。

それもその筈、本来なら自分は一切関係無かったのだから。

「彗も大変だね……」

「まあ大変なのは灯で慣れてるけど」

「最近はそのままでじゃないよね？　ねっ？」

少しでも空気を明るくしようと、2人は軽口を叩き合う。

しかし空気を重くしている張本人の様子は変わらないまま。

「美央、監督もチャンスくれたんだから頑張ろ？」

「そーそー！　いきなり交代とかされなくて良かったじゃん！」

「私は……美央ちゃんのヒット……見たい、な」

「美央が活躍しないと、私達も寂しいよ！」

ベンチに居たメンバーが必死で励ます。

だが復活までにはまだ時間がかかりそうだ。

何とかして栗原を元に戻したい、そう奮闘している場所に鋭く切り込む声が。

「放っておいていいんじゃないの？」

「湧……？　言っつていい事と悪い事が……」

「夏輝にはありがたい事なんじゃない？　ライバルが勝手に潰れてくれるんだし」

「っ、湧ー！」

今にも掴みかかりそうな佐野を、春宮と白崎が止める。牧野を守る為に石川と伊藤も間に入る。

「それに美央は交代したそうな顔してるし？ 一人にさせておきなよ、あんなプレーした後に慰められるのって惨めじゃん」

「湧……！ 絶対許さないから」

「なんで本人以外が怒ってるのか、私には分からないね」

佐野と牧野の間に、嫌な空気が流れる。

ただでさえ重かった雰囲気更に悪くなった。

「もうこっちの攻撃も終わったよ！ 美央ちゃん一塁行こう？」

「はい……」

この空気を変えるように、いつもと同じ声で千秋が栗原を呼ぶ。少しだけ空気が和らいだ気がする。

たった一人、ベンチで孤立して座っている牧野に白崎が近づく。

「湧ちゃん……」

「なに杏紗？ 私は謝らないよ」

「うん……分かってるよ、湧ちゃんの本当の気持ち」

「……杏紗には敵わないね、これ絶対誰にも伝えないでね」

牧野の言葉に分かったよ、と返す白崎。

2人の間に秘密の協定が結ばれた。

第16球 吹き飛ばせ!

不穏な空気が至誠も纏っている中、3回裏の蒼海大の攻撃が始まる。

「向こうは何やら仲間割れしているようだ、その隙に叩きのめしてやろうぜ!」

『オオ!』

空気の悪さは向こうにも伝わったようで、ここで心を折る為に猛攻を仕掛けるようだ。

だが至誠もただやられるだけにはいかない。

——今日は調子が良い、蒼海大相手にも楽に投げられてる。

絶好調の浜矢は9番から2番を、完璧に封じ込めてこの回を終える。

打ち気満々な打者に対して、内外への変化球で打ち取った。

「いやー、やつばそんな楽にはいかないか」

「流石は浜矢だな……私達も負けてられないぞ」

「オツケ、いい投球頼むよ」

「誰に言ってるんだ? 私は蒼海大のエースだぞ」

”蒼海大のエース”その肩書きは飾りではない。

四球こそ出したものの、メンタルの強さと圧倒的な速度を誇る変化球で無失点。

「少し荒れ始めましたね……6回辺りが勝負ですかね」

「かもな、それまでに更に更に失点するのは防ぎたい」

「こればかりは伊吹ちゃん頼りですね」

4回表になっても、浜矢は調子を落とす事はなかった。3番は3球で三振に仕留め、佐久間の打席。

——外野は長打警戒、内野も少し下がろうか。

長打に備え外野はフェンスギリギリまで後退する。

初球はスライドフォークを打ち損じてファール。

続くカーブは見送って1ボールとなり、3球目。

——スライダーか、打ってやる！

しかし佐久間のバットは空を切り、空振り三振。

真ん中付近に投げられた球が、ストライクゾーンの外まで変化した。

絶好調な今日だからこそ投げられた球だ。

「伊吹ちゃん、ナイピーー！」

「まだまだいけるぜー」

その言葉通り、相川もそのスライダーで三振に切り取る。

お互い安定した投球で4回まで接戦で終える。

ここでグラウンド整備の時間となり、作戦会議。

「そろそろ荒れてくると思うから、全員待球するよ！ もちろん失投がくれば初球でも仕留めてね！」

『はい！』

——まさか佐久間さんがここまで手強いとはね……当たり前前だけど、この3年間で成長している。

3年間ずっと成長を見てきたのは、浜矢と鈴井だけではない。

毎年決勝で戦ってきた佐久間の成長も、千秋は見てきた。

5回裏の攻撃、先頭の茶谷は失投を待つ。

2球続けてボール球を投げてからの3球目、真ん中から曲がる高速スライダー。

それをストレートと間違ひ、引つ掛けてしまいファーストゴロ。

「くっそー」

「今のは仕方ないよ、よく当てられたね」

「……どもつす」

先輩に褒められると、どうもいつも通りの反応が出来ない茶谷。特に鈴井と千秋には滅法弱い様子だ。

《5番捕手 鈴井さん》
キャッチャー

鈴井はヒットにするコースを狙う。

流し打ちが多い打球傾向から、内野はライト寄りのシフト。

——だったら、無理矢理引つ張って頭を越す！

内角に切り込むスライダーを捉えるも、サードの守備範囲内。

2打席連続で凡退と、鈴井にしては珍しい成績だ。

「ごめんね」

「私が打つから見てろって！」

浜矢はそう意気込んで打席に入ったが、結果はショートゴロ。

こちらは引つ張り警戒のシフトを敷かれ、まんまとそれにハマった形になった。

「……伊吹ちゃん？」

「び、ピッチングはちやんとするから……」

しかし動揺したのか佐久間の速球に手が痺れたのか、先頭にヒットを与えてしまう。

「伊吹ちゃん、本当に平気なんだね?」

「いけるいける、今ので落ち着いたから」

「手投げになつてたよ、腕振つて投げてきて」

「気をつけるわ」

鈴井と会話をした事で落ち着いた浜矢は、7番から三振を奪う。

8番はライトフライ、そして9番も三振に仕留めて無失点ピッチ。

6回表の攻撃が始まる前、打席に向かう川端に監督が小声で耳打ちする。

「川端、頼むから塁に出てくれ」

「分かりました、必ず出ます」

——多分今のは美央のお膳立てをしろつて事……その仕事、しっかりと遂行しますよ。

際どいコースはカットして粘り、外れれば見送つてじわじわとカウントを整える。

そして迎えた8球目だった。

「ボールフォア!」

「よしっ」

「最高の結果！ 川端に任せて良かったよ」

《8番一塁手 ファースト 栗原さん》

6回表、1点ビハインドの場面。

ここで打たなければ負けが近づくという状況で、彼女は打席に入る。

——ここで打たないと交代……。先輩に迷惑かけて、チームの雰囲気も悪くしたまま。そんなのは嫌だ！

しかし思いは空回りし、初球の甘く入ったストロートを空振ってしまふ。次はいつくるか分からない程の絶好球だった。

——どうしよう、これじゃ足手まといのままだ。なんとかしなきゃ……！

「美央ー！ かつ飛ばせー！」

「……いい、スイングだったよ」

「ホームラン打ってやれー！」

栗原の不安を振り払うかのように、元気のいい声がベンチから飛ぶ。

1年生を中心に飛ばされた応援の声、それに応えなければならぬ。

だが栗原の視線は、ある一点に集中していた。

——湧……さっきは結構助かったよ、実際ミス連発した時は1人にして欲しかったし。それに湧だつて言いたくてあんな事言つたんじやないよね。今だつてずっと私の事見ててくれるし。

牧野は打席の栗原から、一瞬を目を離さなかつた。それどころか祈るのような顔でこちらを見ているのだ。

——正直言い過ぎだと思つてる。発破を掛けるだけならあそこまで言わなくても良かった。けど、これから先も同じような場面は何度も来る。その度にあんなに落ち込んでる訳にはいかないでしょ。だからさ……。

「打ちなよ！ 今までの鬱憤、全部吹き飛ばしなよ！」

「……うんー」

牧野の大声での激励を受け、栗原はもう一度マウンド上の佐久間と向き合う。

そして放たれたフォークボール、それを掬い上げて引つ張る。

白球は蒼穹に高々と舞い上がり綺麗な放物線を描いて、ライトスタンドへと向かつていく。

「行つたか!？」

「越えろー！」

声援を乗せた打球は突き刺さるように、スタンドへ到達した。

6回表で逆転のツーランホームラン、栗原の復活だ。

「よっしゃー！ 栗原、信じてたぞ！」

「美央ちゃん、ナイスバツティング！」

満面の笑みでダイヤモンドを一周した栗原は、その笑顔のまま全員とハイタッチを交わす。

「湧、ありがとうね！」

「別に私はなにも……打ったのは美央の実力だよ」

「けど立ち直らせてくれたのは湧だから！ ほんつとにありがとう！」

「大袈裟だよ、それより今日はもうエラーしないでね」

最後の最後に冗談を言うが、栗原はそれを笑い飛ばせるくらいには回復した。

「……あのさ」

満足そうな顔でベンチに座ろうとした牧野に、佐野がおずおずと声を掛ける。

「ごめん……私、湧のこと分かってなくて……」

「あそこまで言わなくても良かったんだよ、私もやりすぎた」

彼女は意外と辛辣な事を思っている時が多い。

その間にマウンドでは、相川と佐久間が会話を交わしていた。

「玲……」

「なんて顔してんだよ、まだ1点差だろ？　ウチの打線なら取り返せる、そうだろ？」

「……ああ、そうだなー」

佐久間は打たれた事なんて引きずらなかつた。

後続の岡田と荒波を三振に仕留め、三好には粘られた末に四球を与えたが上林は抑え込んだ。

6回裏の蒼海大の攻撃は1番からの好打順だったが、1番と2番は三振に仕留められる。

しかし3番には甘く入ったフォークをライト前に運ばれ、佐久間の打席を迎える。

——佐久間ってあんま苦手なコースとか無いんだよね。強いのはストレートだから、ストレートは投げさせないけど。

初球はフォークから入るが外れてボール。

2球目のスライダーは引つ張られるが、ファールとなり1ストライク。

次はカーブが外れて2―1となるが、スライダーでカウントを整えて並行カウント。

——フォーク投げれば三振取れるかな。

鈴木はフォークのサインを出すのが、浜矢は首を横に振る。

スライダーのサインにも、ツーシームのサインにも首を横に振る。

——まさか直球勝負したいの? ……そっか、勝負したいよね。向こうだつて直球勝負してきたんだから、伊吹ちゃんもやりたいよね。

ストレートのサインを出すと、浜矢は満足そうに頷く。投げられたのは内角高めへのノビのある直球。

佐久間も待ち望んでいたその球に、ジャストミートさせる。

「……いったか」

「まさか打たれるとは……」

打球は一直線にレフトスタンドへ、弾丸のように突き刺さる。

これで3対2となり、再び蒼海大がリードを奪う。

「伊吹ちゃんドンマイ」

「いやー、今の打たれるとか堪ったもんじゃないよ」

「けど今の少し甘かったよ？ 相川さんには打たれないでよね」

「佐久間以外に打たれる気は無し！」

浜矢は宣言通り相川を2球で追い込んだ後、フオークで三振に仕留めた。

3対2という接戦のまま最終回の攻撃を迎える。

第17球 伏兵、再び

7回の攻撃、ここで無得点なら至誠の夏は終わり。

そう奮起する至誠ナインを嘲笑うかのように、佐久間はギアを上げた投球で茶谷を打ち取る。

「ノーヒットとか信じらんねえ……」

「今日の佐久間が良すぎただけだ、普段はこんなじゃないから」

《5番捕手 鈴井さん》

彼女の名前がコールされると、球場が歓声で大きく揺れた。

この劣勢を打開出来るのは彼女しかない、誰もがそう思っているからだ。

——確かに7回までその球速を維持出来ているのは凄いなと思うよ、けど制球が疎かになつてるよ。

一度も振らずに3ボール1ストライクとした後の5球目だった。

佐久間が投球モーションに入ると、鈴井はセーフティーの構えを見せる。

——セーフティー？ くそつ、考慮してなかった。

「ボールフォア！」

この構えに動揺し、手元が僅かに狂った佐久間は四球を出してしまう。

1アウト一塁、打席に入るのは今日6番の浜矢。

——まあいい、待ってたぞ浜矢。お前の打席を！

いきなり自己最速を更新するストレートで、1つ目のストライクを取る。

最終回で最速更新、球場は大盛り上がりだ。

この試合を観に来ていたスカウトも、スピードガンを驚愕の表情で見つめる。

高速スライダーでファールにして2ストライク。

フォークは見送って1ボールとなり4球目。

——これが私の全力投球だ！ 前に飛ばすか、空振りか……お前が選べ！

——私だって楽しみにしていたんだよ……お前の球を、スタンドにぶち込むのを！

ど真ん中に全力のストレートが投げられ、浜矢はフルスイングでその白球を捉えた。

手に、腕に重くのしかかる打球の勢いに負けず振り抜くと、打球はスライスしながらスタンドへ一直線。

「入れー！」

「曲がるな！ 落ちろっ！」

白い放物線が蒼穹の背景に良く映える。

最後までスライスし続けた打球は、ポール間際のスタンド席に落ち、三塁審は頭上で手を回す。

エース同士のホームランが炸裂し、またしても試合はひっくり返る。

4対3、最終回1点差のリードを至誠が得た。

「ナイバッチ」

「ハマ先輩流石っす！」

「だろー？ この為にずっと速球打ちの練習してたし〜」

佐久間も浜矢対策をしていたが、その逆も行われていた。

自身の球を打席で見える事の出来ない浜矢は、1人黙々とマシン打撃をしていた。

「玲、まだいけるよね？」

「当然！ 蒼海大は負けやしない！」

「流石エース、頼りにしてるよ」

逆転されたのに佐久間は楽しそうにしている。

その勢いのまま川端、栗原、岡田を仕留めてマウンドを降りる。

「さあ、代打攻勢だ！ 私達に打席が回る前に決めてしまっても良いぞ！」
「ほら行け！ 打ってこいよ！」

蒼海大の代打には打力重視の選手が揃っている。

しかし浜矢はそれにも屈しない。

最初の打者はストレートの下を振らせて空振り三振、続く打者も外へ逃げるスライダーを振らせて三振。

この回3度目の代打が告げられた。

浜矢はストレート、ツーシーム、カーブを投げるが全て当てられる。

それも全てが特大ファールだ。

——フォーク行くよ、最高の変化を頼むよ。

——ああ……逸らすなよ！

左脚を引き、ゆつくりと上げる。

宙に上げた脚にグラブを一回当て、右腕を素早く振り下ろす。

指先から離れたボールは、真つ直ぐに打者に向かい——斜めに曲がりながら落ちる。

「ストライク！」

「鈴木、一塁！」

「OK！」

ワンバウンドした球を見るや否や、振り逃げを狙う打者。

落ち着いて捕球した鈴木は、丁寧な送球を一塁に送る。

「……アウト！」

この瞬間、至誠3度目の神奈川制覇が決まった。

部員達がエースの好投を讃える為に、マウンドに駆け寄る。

だが、1番最初にその役目を果たすのは正捕手だ。

「伊吹ちゃん、本当に良いピッチングだったよ！ ありがとう！」

「そっちこそ最高のリードありがとうな！」

マウンド上で神奈川一のバッテリーが抱き合うと、それを皮切りにもみくちやになる。

スタメンの半分近くは1年生、そんな中で優勝出来た事により、1年生は全員大粒の涙を流している。

「佳奈利も泣いとるやん、意外」

「うるせ！ ……これは流石に嬉しいだろ」

「分かるで、まさか優勝出来るなんて思うてへんかったし」

一二遊間を守る彼女達も、現実を受け止めきれないまま泣いている。

歓喜の涙を流す者がいる一方、悔しさの涙を流す者も当然いる。

蒼海大ベンチではうずくまって泣いている選手もいる中、佐久間は普段通りだった。

寧ろ、良い戦いを出来た事に満足感を得ているようだった。

「全員顔を上げろ！ ……確かに蒼海大は準優勝という結果に終わってしまったが、お前達は悪くない。悪いのは4失点もしたエースの私だ、だからお前達は胸を張って学校へ帰るんだ」

「佐久間さん……！ 佐久間さんも堂々と帰りましょうよお！」

誰がこんな事を言ったのかは分からない。

だがこの発言から佐久間に部員達が集まり、何故か胴上げを始めた。

「……なんで負けたのに胴上げてんの向こう」

「さあ……まあ蒼海大っぽいっちゃほくない？」

「確かにね、それに楽しそうだね」

涙こそ流しているが、それでも悔いは残っていないような、清々しい顔をしていた。「ちよつ、降ろせ！　なんで至誠より目立ってんだよ！」

佐久間のツツコミは最もで、優勝した至誠よりも目立っている。彼女に言われては誰も反対出来ず、胴上げは終わった。

「ほら、整列するぞ！」

『はい！』

至誠ナインと蒼海大ナインは、暑く固い握手を交わす。

佐久間は浜矢と、鈴井は相川の握手をする。

「浜矢、これ持っていけ」

「これ……バット？」

浜矢に手渡されたのは、佐久間の黒いバツティンググローブ。

手のひらにこびり付いた汚れは、彼女の努力を示していた。

「お前の打撃はまだ未完成だ……だから私のそれを付けて、全国の奴らを打ち砕いてこい」

「……ありがとな！　絶対全国でもホームラン打ってくる！」

エース同士が熱い約束を交わしている一方、ベンチでは。

「あの2人は、本当にライバルだったんだな……」

「どうしたんですか監督？ そんなの当たり前じゃ……」

「これ見ろよ」

監督が千秋に見せたのは、2人の昨日までの投球成績。

被本塁打の欄に書かれていた数字は、2つとも0だった。今日の分を更新すると、両方に1が記される。

「お互い、ホームランを打たれたのは1人だけか……」

「凄いですね、2人とも他には誰にも打たれなくなりましたかね」

「と言うより……アイツらの球をスタンドに運べるのなんて、あの2人くらいしかないんじゃないか？」

ライバル意識が強かった2人だから、どうやって打つのか考えた。その結果が2人揃ってのホームランだ。

監督達もグラウンドに出て、神奈川県制覇を果たした部員を見渡す。

「優勝おめでとう！ この勢いで全国も制覇するぞ！」

『オオー!!』

拳を空に突き上げて声を出すと、観客から大きな拍手が飛ぶ。

その拍手に応え手を振ると、更に大きな拍手が返ってくる。

「……キリが無いから、程々にしろよ」

「はい、なんか芸能人みたい」

「プロになったらこんなの幾らでもする事になるんだけどね」

「予行練習つてやつよ!」

浜矢は完投した疲れなんてないように、笑顔で客席に手を振る。

5分近くそうしていたので、痺れを切らした鈴井に引つ張られて退場する。

「じゃあインタビューしてくるわ、鈴井と浜矢も準備しとけよ」

「はいっ!」

「分かりました」

監督はインタビュアーに呼ばれ、優勝インタビューを受ける。

「まずは県予選優勝、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「2回に2つのエラーで先制をされてしまいました、その時はどんなお気持ちでした」

か?」

「浜矢なら絶対に抑えてくれると信じていたので、心配もしてませんでしたね」

まず聞かれるのは、当然あのエラーの事。

だが浜矢を信じていた監督は、伝令を伝える事もしなかった。

「あの後少しベンチでいざこざがあったようですが、あれは何があったのでしょうか?」
「ただ部員同士で発破を掛けていただけです、仲違いなどはありませんでしたよ」

次に聞かれるのは、佐野と牧野のあの言い争い。

だが結果としては良い方向に転んだので、何事もなかったと伝える。

「6回まではロースコアでした、その辺りの心境はどうでしたか?」

「正直本当に打てるのか不安でしたね、佐久間選手の球をヒットにした事があるのは、鈴木井と浜矢だけでしたし」

2年生の中で速球に強い選手がない以上、クリーンナップでどうにか点を取らなければならなかった。

「そんな中6回、1点差の場面で栗原選手のホームランが出ました。あれは何か監督からアドバイスをされたのですか?」

「いえ、その役目は部員達がやってくれました。ウチの部員は優秀なので」

しかし実際に得点を挙げたのは、6番の浜矢と8番の栗原。

「その裏、佐久間選手にホームランを打たれて逆転されましたが、その辺りはどうでしたか？」

「まあ佐久間選手なら打つだろうなとは思っていましたし、表の攻撃は鈴井からだったので……また逆転出来るって信じてました」

逆転されても誰も悲観的になっっていなかったのは、攻撃が鈴井から始まるから。

「では最後に、全国への意気込みをお願いします」

「この勢いで必ず全国でも優勝してみせます」

「全国大会出場を決めた至誠高校灰原監督でした、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

続いてキャプテンである鈴井と、勝利投手である浜矢2人のインタビューが行われる。

「まずはキャプテン、優勝を決めた今の気持ちを教えて下さい」

「3年生が3人しかおらず、相手があの蒼海大という事もあり少し不安だったのですが

……無事優勝できて嬉しいです」

「浜矢選手はどうですか？」

「蒼海大の佐久間選手は初めてのライバルなので……昨年のリベンジが出来て良かったです」

鈴井は落ち着いた様子で、浜矢は緊張から少し声がうわずっている。

「下級生だらけのチームで、負担や期待も相当大きかったのではないですか？」

「確かに頼りにされる事もあったりしましたが、負担ではなかったですね。寧ろそれが力になりました」

堂々と、そして笑顔でそう答える浜矢。

エースとしての風格が出ている。

「キャプテンから見て、今年の至誠はどんなチームですか？」

「投打共にバランスの取れたチームで、何より投手力が高いチームという印象ですね。先発2人は言わずもがな、リリーフの2人も安定したピッチングを見せてくれています」

一瞬ベンチの方を見てから回答する鈴井。

「聞いた？ 私ら褒められてるよ〜！」

「先輩がこう言ってくれるのって嬉しいよね」

「これからも抑えないといけませんね」

表立って褒められた事により、ドヤ顔になっている投手陣。

全国を前にさらに気合いが入った事だろう。

「2年ぶりの全国です、意気込みをお願いします」

「今年は投手を中心に実力のある選手が揃っていますし、結束力も高いと思っています。優勝は十分狙えるチームだと思っていますので、しっかりと練習して全国に備えます」

「全国大会出場を決めた至誠高校の鈴木選手と浜矢選手でした、ありがとうございます
た」

『ありがとうございます』

マイクにはこの声は乗らなかったが、しっかりと礼をする2人。

インタビューが終わると、浜矢は全身から力が抜けたようだ。

「2人ともお疲れ様ー！」

「あー、疲れた……」

「全国優勝したらもう一回あるからね、覚悟しなよ」

「そーいやそーうか……今度はもつと喋れるように頑張るわ」

2人はインタビューで話した内容や、緊張していた姿を後輩達にからかわれながらバスに乗り込む。

全国大会出場を決めたのは、至誠だけでは無い。

祥雲とディーバも、一足早く県大会優勝を決めていた。

第18球 祝勝!

神奈川県内のある焼肉屋、ここはコスパが良いと評判の店だ。

「えー、では県大会優勝を祝って……乾杯!」

『かんぱーい!』

至誠ナインが県大会の打ち上げ、もとい祝勝会を開催していた。

内野全員が1年生かつ3年生の選手が2人しか居ない中で、神奈川の頂点に立つ。

それがどれだけ難しい事か。その健闘を讃えての祝勝会だ。

「遠慮しないで、どんどん食べろよー」

「……マジでいいんすか?」

周りが一斉に肉を食らう中、茶谷は箸に手をつけていなかった。

「大丈夫だ、金ならある」

「うわあ……でも引退してるんすよね」

「私立の野球強豪校の監督の給料、舐めるなよ?」

かつてない程のドヤ顔で、焼き上がった肉を掴む監督。それを呆れた顔で眺める茶

谷。

「まあもし施設の子に遠慮してるんだったら、テイクアウトもできるからな」

「流石にそこまでは……自分だけ特別扱いってのも」

「まあとにかく！ 今日遠慮なんてしないでいいんだよ、ご褒美なんだから」

「……うつつ」

まだ遠慮がちだが、一口食べるとブレーキが無くなった様子。

周りと同じかそれ以上のペースで食べる彼女を見て、安堵した笑顔を浮かべる監督。

「食べないの？」

「いや……体重がちよつと……」

大量の肉の前に、中々食べる手を進めない春宮。

女子高生というのはいつだって体重を気にしているものだ。

「優維全然細かいじゃん、食べなよ」

「くう……食べたいけど……」

「……アイスも、3種類の味あるよ？ 3人で分けたい……な？」

「食べるうー!!」

白崎のお願いには耐えられずに、春宮は体重の事なんて気にせず食べ出した。

——大丈夫、野球部のマネージャーなんて肉体労働なんだから。いくらでも痩せられる!

「てか2人ともよく食べるね、知ってたけど」

「まあ体が資本だからね」

「……動くから、普通の人と同じ量じゃ、足りないんだ」

佐野と白崎……特に白崎は、同年代の子と比べるとよく食べる方だ。

それは野球部という運動量の多い部活にいるからだが、それを抜きにしても2人は食べる方だった。

「1年の中じゃ1番食べてるんじゃない?」

「てかみんなが食べなすぎなんだよ」

「これ普通の量、だよ……?」

「普通が全然普通じゃないんだけど」

至誠の1年生の中でも2人の食事は多い。

2人に次いで食べるのが栗原、上林、茶谷の3人。

そこより少ないが一般人よりは食べるのが、川端と牧野だ。

「いやー、勝ってよかったね！」

「私達の出番無かったけどね」

「まあそれは言わない約束！」

石川と伊藤の幼馴染コンビは、いつも通り仲睦まじく向かい合って食事をしている。

「彗は来年になったら出番増えるっしょ」

「……灯は？」

「打撃が改善されれば、ワンチャンスカンド併用かレギュラーかも？」

「確かにそうだね」

——佳奈利と違って得点圏には強い。三振するのはどつちも同じだから、もう少し率を残せるようになればあり得るかな。

「正直、鈴木先輩の後とかプレッシャーある」

「だろうね、けど私もなんか手伝える事あるならやるから！」

「ありがとう、まあ投手に信頼されるような捕手になるよ」

——空や真理とはよく組むけど、湧とは組んだ事ないし。アンダースローとか今は上手く捕れる自信が無いし。

アンダースロー投手は、捕手から見ても軌道が独特で捕球が難しい。

牧野とはまだ試合で1度も組んだ事がない伊藤、逸らさずにしっかりと捕球出来るかが信頼への鍵となる。

「とにかく頑張ろう! そのためにもっと肉食うよー!」

「……食べ過ぎて動けなくなっても知らないよ、お正月もそうなたてたじゃん」

「あ、あれは彗のお母さんの料理が美味し過ぎたから……!」

「ウチの母親のせいにならないの」

この2人の家は、正月を一緒に過ごす程仲が良い。

可愛い娘の友達には沢山食べて欲しいという伊藤の母と、出された食事は残したく無い石川の組み合わせだった。

「来年の正月も初詣一緒に行く?」

「勿論! 彗と一緒に出かけるの楽しいからすきー」

「……別にいつでも会えるよね?」

「会うのと出かけるのは違うよ!」

——家だと家族いるけど、出かけなら2人つきりだし。

「これからもよろしくね!」

「今その挨拶する? まあいいや……よろしく」

伊藤が軽く吹き出して笑うと、釣られて石川も笑う。幼馴染2人の仲は、これからも続いていく。

その隣のテーブルで、3年生は全国大会について話していた。

「せんしゅー、今年の優勝候補ってどこ？」

「大阪桐葉にデーバ、それか祥雲かな」

「至誠の名前はないかあ」

「そりゃスタメンの学年考えたらね」

スタメン9人のうち4人が1年生、3人が2年生という低年齢のスタメンだ。

そもそも3年生が3人しかいないので当然だが、今年の全国出場校の中で一番平均年齢が低い。

「祥雲は確か留学生が居るんだっけ？」

「そうだね、アメリカ出身の人が居るよ」

「確か名前はクリスタ・ルイスだっけ？」

アメリカからやってきた野球留学生ルイス。

祥雲は留学生も積極的に獲っており、他の部活にも留学生が存在する。

「高いアベレージ、日本人にはないパワー、そして脚……祥雲では一番厄介なバッターだね」

「去年の秋からレギュラーだったけ？ もっと早く使っとけばよかったのに」

「日本に慣れるまで少し時間が掛かっちゃったみたいだよ」

日本食や気温、日本のボールやバットに慣れるまで2年の年月を費やした。

その分慣れてからの活躍は爆発的なものがある。

「でも今でも神田が4番なんだよね」

「信頼されてんな……神田の成績は？」

「28イニングを投げて3失点、防御率は0.75……打率も.421で本塁打3本、1

0打点と大暴れだよ」

「相変わらずの化け物っぷりだな……」

投手としても野手としても超一流。

たとえ野球留学生が相手だとしても、4番の座は譲らなかつた。

「デীবバの方はどんな感じ？」

「大驚さんが覚醒したね、30イニングで5失点、防御率1.16……打率.304の1本塁打5打点」

「神田と比べるとアレだけど、こっちも化け物だよな」

「まあ斑鳩と飛鷹が凄すぎてチーム内でも霞んでるけどね」

まず斑鳩は打率・458で4本塁打15打点、飛鷹は打率・520で2本塁打9打点と2人共並外れた打力を見せてつけている。

「化け物しか居ないのかこの世代は……：そーいや孤塚は？」

「そもそも黄金世代だからね……：孤塚さんは打率は3割ちようど、1本塁打3打点」
「打撃改善されてんじやん、こりや勝つのは大変そうだ」

打撃が課題とされていた孤塚も、3割に乗せ打線に厚みを出していた。

「けど2人も凄いやね、美希ちゃんは結局打率5割超えてるし」

「打率犠牲に長打取るとか言ってなかった？」

「長打力上げたら、打率も一緒に上がったよね」

鈴井は結果としては昨年よりも打率を上げ、本塁打と打点も増加。
別人のような成績を残していた。

「てか伊吹ちゃんもおかしいでしょ、これで野球初心者？」

「もう初心者卒業していいだろ、3年目だし」

「3年目とは思えない成績してるよねえ」

浜矢は26イニングを投げ4失点、防御率は1.04。

打席数こそ少なかったものの、打率は4割を超え1本塁打を放った。

「てかチーム防御率1.29だっけ? 全国1じゃね?」

「違うよ? 2位だよ」

「1位どこだよ……」

「えーつとね、福岡の小倉北高校ってところ」

その高校名に聞き覚えのなかった鈴井と浜矢は、キョトンとした顔をしている。

「普通の公立高校だから、知らなくても無理ないかもね」

「公立か……てことは1人で投げ切ったとか?」

「そう、海崎終さん……県大会35イニングを1人で投げ切って、失点はたったの4」

「防御率0点台じゃん……」

防御率0.80、WHIP0.91、奪三振率11.6の大エース。そんな選手が福

岡の公立校に居るのだ。

「あと小倉北といえば、6割打者の内川優奈さんもいるね」

「6割かあ……その2人が引つ張った感じ?」

「うん、寧ろこの2人以外打率2割以下……というか1割台もいるからね」

海崎は打率・ 375と高打率を残している。

だが内川と海崎以外の打線には、2割台が5人と1割台が3人だ。

「けど、その分公立とは思えない程守備が良い」

「打撃に回せる奴は回して、残りは守備を極めさせたつて事か？」

「おそらくはね、だから当たったら意外と厄介かも」

「見てみたいなく、海崎と内川！」

まだ見ぬ強大な相手に、興奮を抑えきれない浜矢。

口には出さないが、それは千秋と鈴井も同じだった。

全国大会まで残り2週間。

第19球 新たな強敵

全国大会の抽選会、ここには県大会を勝ち上がってきた強者以外は居ない。

和やかに話している至誠の彼女達も、その強者だ。

「どこと当たるかな」

「別に、どこと当たっても勝つんだから気にしなくてよくない？」

「相変わらず鈴井は強気だなく、確かに負けるつもりはないけど」

たとえどんな強豪校と当たっても、勝利以外は見えていない。

そんな強い思いが鈴井と浜矢にはあった。

「でもいきなり祥雲とかはなんか違うじゃん？」

「まあそれは分かるけど……って前！」

「えっ？ うわっ！ す、すみません！」

曲がり角の先を見ておらず、誰かとぶつかってしまいう浜矢。即座に謝り相手の反応を

伺う。

「いえ、こちらこそ注意不足でした。すみません」

「あれ……その制服、デイベア？」

浜矢はその独特な制服に見覚えがあった。

2年前熱い試合をした、デイベア学園だ。

——なんか、誰かに似てるような……。

「そちらは至誠ですね、姉からお話は聞いてます」

「姉……まさか飛鷹？」

「はい、妹の飛鷹風華ふうかと言います」

飛鷹とは違い、黒髪を後ろで一つに纏めているが目元や眼の色は全く同じだ。

姉妹と言われれば誰もが納得するだろう。

「風華……どしたの？」

「雉鳥さん、こちら至誠の方です」

「至誠の！ あっ、私は雉鳥時雨きじとりしぐれって言います」

柔らかい髪質の茶髪を無造作ショートにしている、琥珀色の瞳の少女。

「2人とも何年生？」

「私は1年生です」

「2年です！」

風華は1年生、雉鳥は2年生だ。

「フツ……我と血を分けし愛し命を追っていたら、宿敵と邂逅することになるとは」
「げっ、この喋り方は……飛鷹！」

「ご明察だ、我が宿敵浜矢！」

制服のマントを手で翻し、誇らしげな笑みで近づいて来る飛鷹。

「私達もいるよー」

「……久しいな」

「出たよ厨二病トリオ……そういや2人はそうでもないの？」

浜矢が風華と雉鳥にそう聞くと、風華は苦笑いをしながら。

雉鳥は頭の後ろで腕を組みながら平然と言う。

「……姉を見て育つとはいえ、参考にする部分としない部分はあるので……」

「私はただ強いからディーバ入っただけですもん」

「あっ、そうなんだ」

あまりにも苦い顔をしている風華に、かなりの苦労があつたのだろうと察する浜矢。

「我等が再び刃を交わし合う時が訪れるのを、愉しみにしているよ」

「お、おう……ありがとう」

「ではさらばだ！」

「そこは普通なんだな」

「伊吹ちゃん、今の時代にさらばとか言うのは普通じゃないよ」

彼女達の発言に毒されすぎて、少し変わった言葉くらいでは変とは思わなくなつてしまつた。

「なんか疲れた……」

「というか、よく飛鷹の言つてること分かるね」

「まあまだ簡単な方だし……」

この発言から、彼女が患つていた頃にはこれより難しい単語を考えていた事が分かつてしまう。

だがそんな事は気にもせず、疲れを癒す為に会場に入りすぐさま椅子に腰掛ける。

各校のキャプテンが次々とクジを引いていき、トーナメント表が埋まっていく。

「祥雲もデীবアも初戦で当たらなくて良かった」

「どっちと当たつても、疲労が溜まるのは分かつてるもんね」

強打を誇るデীবアに、堅い守備力を誇る祥雲。

長い試合時間になる前者と、時間は短いながらも常に気を張る展開になる事が予想される後者。

どちらも初戦から当たりたい相手ではない。

県大会で理解した自分の課題。

それを克服する為の練習をこなし、開会式の日を迎えた。

入場の時間を待っている浜矢達の元に、見慣れない2人が駆け寄ってくる。

「すみませーん、このユニフォーム着た人達見ませんでしたか？」

「ん？ そのユニフォームは……って、祥雲！」

「あー！ 至誠の人！ しかもエース！」

「……紫音、声大きい」

2人の胸元には、祥雲の二文字が記されていた。

あの神田と同じ高校の選手、3年生組は少し警戒した様子。

「……うわ、兎川さんと鹿瀬さん」

「うわってなんだよー！ 私たちは湧のこと大好きなのに！」

「私は貴女たちの事苦手ですからね？ いつも打ってくるし」

「久しぶりの再会だつていうのに冷たいね」

会話に混じってきたのは牧野。

どうやら彼女達とは知り合いのようで、臆せずに話している。だがこの態度から千秋は何かを感じ取った。

「もしかして、湧ちゃんが言つてた苦手な相手つて……!」

「そうです、このお二人です」

「苦手とは酷いなー、ちよつと打つてただけじゃん」

「私の時だけ打率7割越えなのは許しません」

——そんなに打たれてたんだ……。祥雲戦で湧ちゃんは出せないかな。

「鹿瀬と兎川か……」

「はい! 私はショートの兎川とがわしおん紫音です!」

「サードの鹿瀬かせしろな白奈です、よろしくお願いします」

「よろしくー」

兎川は茶髪で外ハネのミディアムヘア、鹿瀬は茶髪の肩までのロブ。

瞳の色は兎川が紫で、鹿瀬は白色だ。

「……なあ、神田ってどんな先輩？」

浜矢はどうしても気になってしまい、この質問をした。

後輩と自分に対する態度が違うのかどうかを知りたかったのだ。

「クールだけど優しいですよ、打撃のコツとか教わってます」

「初めは少し近寄りがかかったよね、けど聞けば教えてくれるので好きです」

「……そっか、いきなり聞いてごめん！」

——神田は私達に対してだけこんな態度なのか？ いや、けど後輩の洲寄にも冷た

かったんだよね……。

「あ、そうだ！ 祥雲の奴ならあっちの方にいたよ」

「ありがとうございます！ けど勝負する時は手加減しませんからね！」

「こんな事くらいで手加減されても困るよ……」

「すみません、助かりました」

兎川と鹿瀬は手を繋いで、仲良さそうに祥雲の部員が集まる場所に歩いて行った。

浜矢は笑顔で手を振って見送り、2人の姿が見えなくなると真剣な表情になる。

「……どう思うっ？」

「あの2人が嘘をついてるようには見えなかったし、多分本当じゃない?」

「けど真理ちゃんにはあの態度だったんだよね? それなのにあの2人には優しいって

……」

「同じ高校だから? それとも今は態度が緩和されたのか?」

3人は自分の仮定を挙げていくが、どれも納得が出来なかった。

それに本人が居ないのだから、答えを知ろうにもそれは出来ない。

モヤモヤとした感情を抱えながら開会式が始まる。

観客の大きな拍手に見送られ入場する、全国の強者達。

自信のある顔つき、不安がない顔、楽しみで仕方ないといった顔。

様々な色を持つ彼女達が今年の夏を盛り上げてくれる。

学校に戻り早速全国へ向けて練習を始める。

「美央ちゃん、佳奈利ちゃん、杏紗ちゃんおいで」

「はい、なんですか?」

「3人には伊吹ちゃんとフリー打撃して貰います!」

「マジっすか? じゃあサクッと打ちちゃいますか!」

——3人にとっては全国レベルの投手と対戦できて、伊吹ちゃんにとっては強打者と対戦できる絶好の練習……。これでチームの打力を底上げ出来ればいいんだけど。

まず1人目は打つ気満々の茶谷。

だが彼女が打席で構えた瞬間、何か違うオーラを感じ取った。

——神田に飛鷹、斑鳩に大鷲……。それだけじゃない、全国にはこのレベルの打者なんて幾らでもいるんだ。だったら後輩に打たれる訳にはいかない。

威圧感。そう呼ぶに相応しいオーラを放ち初球を投げる浜矢。

アウトローに投げられたストレート、それに全く手が出ず見逃す。

「速っ……いつもこんなんでしたっけ？」

「流石にこれ程の質の球は投げてないよ、覚醒したかな」

「……まだ強くなるんすか」

「ライバルと会って気合入ったんじゃない？」

——だからといって、この球はおかしいだろ。こんなん打てる気が……。

「ストライク」

「くっそ、当たんねえ……」

続く内角へのスライダーも空振りして2ストライク。

速球が得意な茶谷が、こうも簡単に追い込まれた。

最後に投げられたのはスライドフォーク。

決め球を打ってやろう、そう思った茶谷がバットを出すが。

「ストライク、バッターアウト！」

「変化エグツ……」

バットは空を切り空振り三振に終わる。

茶谷の言うように変化量は上がっていた。

「伊吹ちゃんナイピ！ これなら全国でも通用するよ」

「ホントか？ よーし、どんどんこい！」

「じゃあ次私いきまーす！」

次に打席に入ったのは栗原。

県大会では得点圏以外では全くと言っていいほど打てなかった彼女だが、持っている

打力は本物だ。

「うわっ、カーブも良いですね」

「今日はたまたまだよ、いつもはもっと変化小さいから」

今日は全体的に調子が良いようで、あのカーブすらも空振りを取れる球種になっていた。

スライドフォークで追い込んでからは、ストレートをカットされて粘られる。

——一応確認したいし、これ頼むよ。

サインに頷いて浜矢は右腕を振り下ろす。

投げられたのは外角へのスライダー、それに手が出てしまうがバットは届かず空振り三振。

「スライダーやばいですね！ ギュンって曲がりましたよ！」

「今日はめっちゃ調子良いわ！ さあ白崎もかかってこい！」

「は、はい……」

おずおずと打席に歩いてくるが、バットを構える時には強打者の顔つきになる。それに反応するように浜矢も真剣な顔に。

初球はスライドフォークを投げ、白崎は最初からそれを捉える。

「……ファール！」

「いやー、飛ばすねー」

「これが持ち味なので……次、お願いします」

——白崎ってほんと、打席に立つと人変わるよな。普段のオドオドした感じはどこ行っただなか。

ヘルメットを直しながら次の球を催促する白崎に、そんな事を思う浜矢。
練習とは思えない程の真剣勝負に、他の部員も練習の手を止めて観戦する。

——杏紗に直球を決め球として使うのは怖い。だからここで使おう。

アウトハイへのストレート、白崎はそれにも反応して弾き返す。

鋭く大きく打球が舞い上がるが、これもファールとなる。

「杏紗凄いね、浜矢先輩に食らいついでる」

「むしろセンパイのが杏紗に食らいついでるというか……」

「どっちもハイレベルだよ！ 2人が至誠に居てくれてよかった〜」

三振に終わった2人がこの戦いを呆然と眺めている横で、千秋は大変興奮している。
神奈川を防御率1点台で戦い抜いた浜矢に、代打で結果を出した白崎。

この2人が他校にいたら、優勝は出来なかつただろう。

バッテリーは3球勝負はしなかったが、あわよくば引つ掛けさせようとボール1個分

外れる球を投げる。しかしそれには釣られずに見送られる。

——カーブは通用しないし、確かスライダーも打てる。ならフォークしかないよね。だが浜矢はそのサインに首を横に振る。

——まさか……ストレート？

鈴井がストレートのサインを出すと、ニコニコしながら頷く。

なんだかんだ直球勝負を好む彼女に呆れながらも、外角低めに構える。

そして投げられた4球目、ノビのあるストレートがミット目掛けて一直線。

——ストレート……打てる！

「右中間！……アウ、ト？」

「いやー、流石に今の高さは厳しいです」

「完璧に捉えられたよ……ホームランで！」

打球はライトのフェンスに直撃し、荒波に捕れるかどうかを確認。

荒波は捕れないと言い、浜矢本人もホームランと認めた。

「今の打たれるとは思わなかったよ、やっぱ白崎って凄いな！」

「……ストレート、以外が来てたら……無理でし、た」

「それにウチは両翼狭いからね、甲子園ならライトフライだったよ」
「そっか！　なら良かったー」

それを知れて満足した浜矢は、次のメニューを聞いて練習に励む。

——全国レベルの打者にも、私のストレートは通用した。でももつと鍛えないとダメだよな！

全国でも県大会と同等の成績を残せるように。

そして神田に勝つ為に、浜矢は厳しい基礎トレーニングを行う。

第20球 全国無双

至誠は全国大会でも快進撃を見せた。

1回戦はエース浜矢が先発し、6回を2失点の好投を見せる。

後を継いだ牧野も連続無失点記録を伸ばし、チームは4対2で勝利。

2回戦には洲崎が登板し、5回1失点で降板。

神宮が1失点をしてしまうが、最終回を締める守護神牧野は無失点。

投手陣の不調を補うかのように打線が援護し、5対2で勝利。

3回戦は浜矢が5回無失点、奪三振12という圧巻の投球を見せる。

だが球数が嵩んだことにより神宮にバトンタッチ、その神宮は2イニングを無失点に抑える好投を見せた。チームも2対0の接戦を制した。

4回戦は強打の大阪桐葉を相手に洲崎が先発し、6回を2失点に抑えるピッチングをする。

バトンを受け継いだ神宮は1回を無失点に抑える。

打線は少し攻略に苦戦したが、鈴井の逆転タイムリーも出て3対2でギリギリ勝利。

この快進撃を目にしたメディアは、「深紅の旋風」や「至誠の奇跡」などと囁し立てるが、当の本人達は目もくれていなかった。

「準決勝の相手はディーバ！ とにかく打ちまくるチームだけど、エースの伊吹ちゃんに抑えてもらうしかないね」

「外野が飛鷹姉妹に雉鳥と、守備が良いのが特徴的だな」

涼風の方は言わずもがな、その背中を見て育った風華の守備も良い。

雉鳥は捕球精度に難はあるが、その俊足を生かした広い守備範囲が光る。

「先発は大鷲さんだと予想されるよ！ 豪快なフォームから繰り出される、制球重視の投球に惑わされないでね！」

「確か持ち球はチェンジアップとスラップだっけ」

「それに加えてサークルチェンジもあるよ」

フォームと投球スタイルが一致しない大鷲。

チェンジアップ系統を2種と、キレのあるスラップを武器に多くの三振を奪ってきた。

「打線で警戒すべきは全員だけど、中でもクリーンナップ……大鷲さん、飛鷹さん、斑鳩

さんだね」

「大鷲はまだ長打力ない方だが、斑鳩と飛鷹は警戒しろよ」

「特に飛鷹さんの方ね」

飛鷹は巧打力、長打力、そして走力を兼ね備えたプレイヤー。

高校最高の打者とメディアも騒いでいる。

「すごいや風華の方はどうなんだ？ 打撃は」

「デীবバの中では癒し粹だよ、デীবバの中では」

「打率・292だからな、あの中なら打てない方だ」

——3割弱で打てない方ってなんだよ……。

「大鷲さんからは意外と打てそうな気はするんだよね、防御率は良いけど球の軽さは変わらないみたいだし」

「だから失点を抑えられるかどうかが肝なんだが……いけるな？」

「もちろんですよ！ 斑鳩だろうが飛鷹だろうが抑えますよ！」

「頼もしい限りだ」

デীবバのような強打のチームを前にしても、浜矢は怯えない。

ここに居るのは野球初心者ではなく、至誠高校のエース浜矢伊吹だ。

「監督！ 野手陣はノックしましょうか、打球は絶対強いでしょうし」

「ああ、内野と外野は散れ！ デイリーバの打球速度に対応出来るようにしてやる！」

野手陣は自分の守備位置に散って行き、デイリーバ対策を始める。

ノックを受けている間に投手陣はインターバルピッチングを行う。

それが終わると野手はトス打撃、マシン打撃、フリー打撃を。

投手陣は的当て、実戦形式での投げ込み、下半身中心の基礎トレーニングを行った。

日が暮れて練習が終わる頃には、監督を含め全員がくたびれていた。

「解散！ ……千秋と先生は残って下さい」

「分かりました」

「皆さん、試合までゆっくり体を休めて下さいね」

『はい！』

21時に練習終了となり、それぞれが帰路につく。

試合は明後日だ、それまでに疲れは取っておかなければならない。

自分達以外の全員が帰ったのを確認して、3人は部室に移動する。

「さて……明後日のスタメンを組みましょう」

「まずバッテリーはあの2人だとして、他はどうしますか？」

「粘れる三好は勿論、上林もキーだと思っっているんだ」

上林は対応力が高く長打と巧打のバランスが取れていることから、大鷲に対しても苦
手意識を持って打てるのではないかと監督は言った。

「なるほど……じゃあ3番ですかね？」

「だな、あとは球が軽いから当たれば飛ぶ茶谷と栗原も」

「川端さんも調子が上がってきてますし、また1番に置くのはどうでしょうか？」

「それも良いですね」

様々な案を出しながらスタメンと、打順を決めていく。

「打球速度を考えると、外野は変えられませんよね」

「だな、あとは代打で白崎と佐野のどちらかを使いたいな」

「ですが浜矢さんは完投させるつもりなんですよね？」

「だったら外野以外の子の中で打てなかった子に、代打を出すのはどうですか？ その

後の守備は灯ちゃんを信じましょう」

勝利を掴む為には情のある采配ばかりはしてられない。

多少の残酷な采配を取らざるを得ない時はある。

「でしたら、最終的なスタメンはこんな感じですか？」

そう言つて千秋が、今までの意見をまとめたスタメン表を見せる。

1番 川端渚(三)

2番 三好耀(左)

3番 上林真希(遊)

4番 鈴井美希(捕)

5番 茶谷佳奈利(二)

6番 栗原美央(一)

7番 浜矢伊吹(投)

8番 荒波友海(右)

9番 岡田早紀(中)

「メンツは代わり映えしないが、これで良いと思うぞ」

「今思ったのですが、白崎さんと佐野さんを同じ試合で代打として使えるんでしょうか？」

「そーいや石川は1人でしたね……栗原に代打出さないと出来ないですね」

入学当初よりはマシンになったとはいえ、まだまだ不安の残る守備力の2人。

石川と伊藤以外に野手の控えはいいないが、伊藤は捕手と一塁手しか守れない。

2人を代打として使うのであれば、少なくとも栗原のところで代打を出さざるを得ない。

「栗原が打てたら佐野は無し、栗原が打てなかったら2人代打って事で」

「意外と代打2人が試合を決めたりするかもですね!」

「そうなたらドラマはあるけど、つまりスタメンが打てないって事だからな……そういう状況にはならないでほしいな」

代打が試合を決めるという事は、試合終盤までリードを奪えていないのと同義。

それだけはどうしても避けたい監督だった。

「守りの方は……まあ浜矢なら安心か」

「ピンチに強いのは本当に助かりますね」

「伊吹ちゃんは正真正銘のエースですからね! ディーバ相手にもやってくれますよ!」

自分のクラスメイトであり友人である浜矢が褒められ、自分の事のように喜んでいる千秋。

その様子を微笑ましそうに見守る2人。

「デーバに勝ったら祥雲だろうし、疲労は溜めたくないな」

「特に投手陣ですよ、野手に関しては神田さんからは元から打てないでしょうし」

「全国大会でも神田さんは好投してますからね……万全のコンディションでも、2点取れるかどうか……」

神田はこれまで3試合に登板し3失点。

それでも強打を誇るチームを相手にしてだ。

今年でも凄かったが、今年は更に実力を付けているのがわかる。

「まあ今から祥雲戦の心配しても良くないですよ、まずはデーバをどうするか」

「やはり最後は鈴井さんと浜矢さん頼りになってしまいますね」

「けど3年生ってそういうものですよ、最後の最後で頼りになるのがこの学年ですから」

これまでの経験を持ってチームを救う存在、それが最上級生である3年生だ。

浜矢と鈴井はその役目を十分に果たしていると言っている。

「とりあえずこのデータ配っておくので、明後日までに各自作戦を立てておきましょう。」

それを踏まえて当日はサインを出します」

「わあ、データがこんなにたくさん……!!」

「私も考えてしまっているのですか？」

「切り口は多い方がいいですからね」

3人集まれば文殊の知恵、そう監督は言った。

「でしたら私も色々な作戦を考えてきますね」

「ありがとうございます、必ず準決勝も勝って決勝へ進みましょう！」

『おー!』

第21球 臥竜鳳雛

全国大会準決勝。ここまで勝ち上がってきた高校は4校。

うち3校は至誠、ディーバ、祥雲と2年前に対戦したカードの面子だ。

ディーバは至誠に、至誠は祥雲にリベンジを果たすべく調子を整えてきた。

「てかずつと気になってたんだけど、ディーバの校名変わってない？」

「神聖鳳雛ディーバ学園になったねえ」

「鳳雛ね……まあ意味的には良いんじゃない？」

「だとしても、提案したのも案を通したのもどうかと思う……」

鳳雛とは伝説上の霊鳥である鳳凰の雛のこと。

将来が有望な若者を諭える時に使う言葉だ。

「HPにはディーバに入学した子の才能を伸ばして、誰もが将来的に活躍出来るようになって意味を込めたって書いてあったよ」

「めっちゃ良い理由じゃん……厨二だけど」

「本当、学校全体で厨二病じゃなきゃ理想の学校なんだよね」

實際、厨二病ではないという理由で入学を取り消す中学生も多くいる。

在校生や他の入学生という言葉が理解出来ない、というケースがあるからだ。

「至誠もなんかそういうのなの？」

「至誠は極めて誠実って意味だね」

「そういう人間になれって事？」

「多分そうだと思うよ」

自分はそんな人間になれているのか、そもそもそういう教育を受けた覚えが無い。

そのような話をしていると、デイベアの部員が入場してきた。

「相変わらず歓声凄いな」

「主に飛鷹さん宛てだね、物凄い人気なんだよ？」

「まああの顔と実力だからなあ」

飛鷹は様々な野球雑誌において、美形と紹介される程の顔の持ち主。

それに加え全国すらも圧倒する野球の実力を持ち、色々な層のファンが存在する。

「せんしゅー、何失点までなら許される？」

「2点から4点の間かな、けどデイベア相手に2点は結構難しいと……」

「オツケ！ なら2失点以内に抑えてくるわ！」

「伊吹ちゃん……!」

あのデীবバを2失点以内に抑えてくる。

堂々とそう宣言しマウンドへ向かう浜矢に、千秋は圧倒された様子だった。

「今の伊吹ちゃんなら出来ると思うよ」

「美希ちゃん……」

「それに、私が正捕手だよ？　そう簡単に失点なんかさせないし」

「……そうだね、2人なら安心だよ!」

正反対だが相性は最高のバッテリー。

そんな2人を信頼してマウンドに送り出す千秋は、晴れやかな顔をしていた。

「とにかく、クリーンナップの前にはランナー溜めないようにしましょう」

「分かってるって!　ランナーありで飛鷹とか嫌だし」

「斑鳩も警戒しなきゃダメだからね、初回から内角突いていくよ」

「りよーかい!」

デীবバの1番打者は俊足巧打のライト、雉鳥。

彼女への1投目はノビのあるストレート。

高めのボール球で空振りを奪う。

続くスライダーでも空振りを奪い、決め球はスライドフォーク。

——ワンバンする程低い位置に投げられるが、それでも振ってしまうキレの良さ……。流石は浜矢だ。

ベンチでそれを眺めていた涼風は、腕を組みながら満足そうに頷く。

2番打者にも追い込んでからアウトローのストレートを見逃させ、三振に切り取る。迎えた3番打者はエースの大鷲だ。

——大鷲はフォームとは裏腹に意外とミート力がある。後ろの2人程のパワーは無いけど、慎重に攻めよう。

浜矢は外に逃げていくスライダーを投げる。

大鷲は途中までバットを出す、しっかり止めて1ボール。

——選球眼良いタイプでは無いはずだけど……マグレかな。次も制球ミスらないでね。

——内角のツーシームか、分かった。

内角低めへのツーシーム。

それを体を仰げ反らせて避けるが、判定はしっかりとストライク。

——今のはツーシームかあ。球は速いしノビはあるし、変化球もそこそこ多い。ホント厄介な相手だね。

大鷲は一度打席の外に出て、気合を入れ直してから再び打席に入る。

投げられたスライドフォーク、それを上手く掬ってセンター方向に運ぶが。

「セカン！」

「オーケー！」

定位置より後ろで構えていた茶谷が、普通ならセンター前に落ちる打球をキャッチ。デীবバの上位打線にヒットを一本も許さずに、1回の守備を終えた。

「大鷲さんはチェンジアップ系を決め球としているけど、ストレートとの球速差はあまり無いから、予想と違う球が来ても当てるくらいなら出来るはずだよ！」

「という訳で、粘り打ちは任せたぞ川端」

「分かりました」

本日の至誠の1番打者は、高い巧打力の持ち主である川端。

大鷲のフォームとチェンジアップに惑わされず、粘って出塁が出来るかと信頼されてこの打順だ。

マウンドに登って投球練習を終えた大鷲と、バッターボックス手前で素振りを終えた

川端が相対する。

大きく振りかぶって投げられた1球目はストレート。それを見逃して1ストライクとなる。

——確かに、球速自体はそこまででもない。けどあのフォームからこの遅さはタイムング崩されるなあ。

2球目は変化の大きいスラープだったが、川端はそれをカットする。

「よし、カットは出来そうだな」

「渚ちゃんと耀ちゃんが出て、真希ちゃんと美希ちゃんが還す！　これが1番確實そうでしたもんね」

その後も何度か体勢を崩しながらも粘り、投げられた5球目。

決め球であるチェンジアップが投げられ、川端は打ち返すが詰まった当たりの内野ゴロ。

「どうだった？」

「チェンジアップのブレーキがすごく効いています、全然ボールが来ないです」

「なるほどな……意外と苦戦しそうかな」

監督の予想は的中し、三好も6球粘るがファーストゴロ。
上林も強い当たりを放つものの野手の正面。

「まあ初回三凡は正直予想してたからな」

「ですね、本番は大驚さんに慣れてきた2巡目以降ですから」

「そこまでに浜矢さんが失点するかどうか、それが勝敗を分けそうですね」

そんな浜矢が抑えなければならぬ相手は、4番の斑鳩と5番の飛鷹。

全国でもトップクラスの打力を持つ彼女達を抑えなければ、至誠の勝利は無い。

——斑鳩は課題を克服して4番に座ってんだ。私だって課題を克服してエースになったんだ、絶対に負けないぞ。

投げられたのはスライドフォーク。

斑鳩はバットを止めるが、ハーフスイングの判定に。

——これが千晴を打ち取った球か……敵ながら良い球だな。

斑鳩は負けられないといった表情で、浜矢と向き合う。

投げられた2球目は外角へのカーブ。これを流して痛烈なファールにする。

——相変わらずパワーは凄いけど、外角は少し苦手な感じがする。もう1球外攻める

よ。

——ライトは荒波だもんな、信頼してるぜ！

外角に良い回転のストレートが投げられ、斑鳩はそれを弾き返す。

ライナー性の打球がライト線を襲うが、荒波が追いついてアアウト。

「サンキュー荒波ー！」

「ライトならどこ飛ばしても良いっすよー！」

「センターにもじゃんじゃん打たせちやつてくださいー！」

「信じてるぞー！」

外野に飛ばさせれば誰かが捕ってくれる。

そう信じている浜矢は、どんなに強い当たりを外野に飛ばされても動じる事は無い。

斑鳩を打ち取ってもまだ油断はできない。

打席には5番の飛鷹涼風が入る。

——やっぱオーラが違うんだよな……こつちが本命だろ。

間違いない、バッテリは警戒していた。

だがそれでも、ボール球を弾き返せるだけの技術が飛鷹にはあった。

ストライクからボールになる、内に食い込むスライダー。

それを飛鷹は簡単に打ち返し、ライト前に運んだ。

「はー……マジか」

口から漏れ出た声は浜矢の物だ。

こんな簡単に打たれるとは思っても見なかったから。

だが浜矢もやられっぱなしではいられない。

セツトポジションから投球モーションに移る……と思いきや一塁に牽制を入れる。

「セーフ」

——牽制の名手でもあったか……要警戒だな。

浜矢の牽制を気にして、少しリードが小さくなる。

こうなれば鈴井の肩と浜矢のクイックでも、直球なら飛鷹を刺す事ができる。

——ここからは打者集中！ 飛鷹より凄い打者なんて居ないんだし、抑えてよね。

6番は力強いストレートを打たせてセカンドゴロ、7番はカーブでタイミングを外させサードゴロに仕留める。

俊足のランナーが出てても動揺しない、それが浜矢と鈴井の強みだ。

「私はどうすればいい?」

「うーん……美希ちゃんは自由に打つていいよ! もちろん狙えたらホームランも狙っちゃって!」

「了解、とにかく出塁するね」

鈴井は宣言通り、初球のスラップを流してヒット。

ライト線に落ちる打球となったが、彼女は一塁を蹴る。

「ライト! 一塁急いで!」

「はい!」

雉鳥も急いで二塁へ送球するが、鈴井の方が速かった。

単打を無理やりツーベースにしてしまう技術と、走塁意識の高さ。

彼女がクリーンナップを打つのは、そういう面が評価されているからでもある。

——こつちも相変わらずミート力あるなあ……。まっ、ここから抑えちゃうもんね!

大鷲はピンチの場面でギアを上げられる選手。

茶谷はチェンジアップで三振、栗原にはセンターフライに終わるが、鈴井はタッチアップして三塁へ。

2アウト三塁と絶好のチャンスだったが、大鷲は踏ん張った。

キレのあるスラップで浜矢を三振に切り、この回も無失点で終える。

「映像を見たから知っていたが、やはり2年前とは違うな」

「単純な変化量の増加もありますが、キレや勝負所での度胸が鍛えられていますね」

この投球を見た浜矢にも火がついた。

8番を見逃し三振に仕留めると、9番の飛鷹風華をレフトフライ、1番雉鳥もショートゴロに切って取る。

「意外と投手戦になりそうな感じですね」

「もう少し荒れると思っただけだな……まあその方がやりやすいが」

「どちらが先に崩れるか、ですかね」

どちらも一歩も譲らないからこそ、先に崩れた方が不利になる。

熱い投手戦の始まりが予想されていた。

第22球 伏竜鳳雛

3回裏の攻撃は岡田からだだったが、大鷲の抜群の制球力と多彩な変化球にやられて三振に終わる。

最近好調の川端が打席に入る。

最初に投げられたのはスラップ。

内に切れ込む変化球に対し、川端はカットして対応する。

続くストレート、チェンジアップも同じ対応で粘る。

4球目は外角へのサークルチェンジだった。

——打てる……いや、遠い！

「ボール」

「あちゃー、今の見送るかあ」

——1年生なのによくやるなあ、でもこれはどうかかな？

明らかに外れたボール球だった。

しかし白球はホームベースの手前で曲がりだし、ストライクゾーンへと向かってく

る。

——つ、スラップか。けど私ならカットできる！

「ファール！」

「おお……今のよく当てましたね」

「あれが川端の本来のプレースタイルですからね」

際どい球は粘って好球必打。

それが中学時代の高打率の要因だ。

その後も3球を見送ってフルカウントとなり、勝負の8球目。

内角を挟るスラップ。川端は腰を引いて見送る。

「ストライク、バッターアウト！」

——今の入ったか……してやられちゃったな。

「ドンマイ、よく粘ったよ」

「最後の最後でギリギリの内角攻め出来るなんて、メンタル強いですね」

「大驚はそういう選手だからな、時々ヤケになつてど真ん中に直球投げたりしてるぞ」

「それは……度胸がある、つてことなんですかね？」

「プロでもそういう選手はたまにいるし」

続く三好もチェンジアップにタイミングを合わせて弾き返すが、野手の正面。

長打力が無いのを見越して、外野が前進していたせいでヒットゾーンが狭くなっていた。

4回の表、デーバの攻撃は2番からだった。

この打者を浜矢はストレートで難なく抑え、迎えた3番大鷲。

彼女はスライダーもフォークもカットし、並行カウントまで粘る。

——気持ちの良い直球頼むよ！

浜矢は小さく頷いて、内角低めへ直球を投じる。

インコースの球を引っ張る為に、大鷲はタイミングを早めてスイングをするが、バットは空を切る。

「ストライク、バッターアウト！」

「ナイピ」

クリーンナップは一瞬たりとも油断出来ない。

斑鳩への初球は内角高めへのストレートだった。

打ち損じたが痛烈な打球がサードを襲う。

——前に……いや、意外と速い！

一瞬の迷いが命取りであった。

グラブで追うように合わせた結果、打球を弾いてしまう。

2アウトからエラーのランナーが出てしまう。

「しゃーない！ 次、次！」

「すみません……」

浜矢は明るい声で川端を鼓舞し、川端も謝つてからは気を取り直した。

「珍しいですね、渚ちゃんのエラーなんて」

「打球が強すぎたんだよ、あれを捕るのは難しいだろうな」

「斑鳩さんのパワーで金属バットですからね……」

サードには一番強い打球が飛んできやすい。

それに加えパワーのある斑鳩の打球。

想像以上の打球の速さだったのは間違いない。

——飛鷹は変な感じするんだよね。強打者特有のオーラはあるけど、意外と怖くない

みたいなの……違和感がある。

「飛鷹さん！ 決めちゃって下さい！」

「涼風ー、私の代わりに打ってー！」

——ベンチからの声もそうだ。決めてくれって言うよりは、何がなんでも飛鷹が決めるって感じがする。

鈴井は一度感じた違和感を拭えず、サインを出せずにいた。

マウンドで浜矢がサインを催促しているのを見て、気持ちを試合に引き戻した。

——まあ、今から考えてても仕方ないか。

ストレート、カーブ、スライダーと攻めていく浜矢に対し、飛鷹はそれを難なくカットする。

フルカウントとされてからの7球目だった。

——しまった、甘い！

フォークの失投が真ん中に入ってしまう。

彼女程の打者であれば、それは絶対に見逃さない。

しなやかに、かつ力強く振り抜かれたバットが白球を捉える。

打った瞬間それと分かる当たり。

浜矢も鈴木も打球の行方を見ず、外野手も一歩も動かなかつた。先制ツーランを放った飛鷹がダイヤモンドを一周した後、内野陣がマウンドに集まる。

千秋も飲み物を持ってベンチから出てくる。

「ごめん、失投した」

「失点を引きずつても仕方ないよ、まだ2点だし気持ち切り替えよう」

「そうそう！ それに3失点以内ならセーフって言ったよね？」

「千秋……ありがとな！ あとアウト1つだし、次は抑えるぞー！」

浜矢がそう宣言し、マウンドに集まっていた全員が散る。

踏み荒らされた足元をならし、浜矢は今一度打者と真剣に向き合う。

——とはいえ、ここでの失点はまずかつた。自分の尻拭いは自分でするんだ！

今度はしっかりと落ちたフォークで打ち取り、なんとか2失点で切り抜けた。

「……私のエラーがあつたから、自責0ですよね？」

「そーいやそーじやん」

「本当にすみません！」

「気にすんなって！ ホームラン打たれたのは私の責任だし」

川端の背中を優しく叩いて、明るく励ます浜矢。
そのやり取りが行われている間に、上林がヒットを放つ。

「鈴井やっちまえー!」

「鈴井先輩打つてください!」

ベンチからの声を聞き、そちらの方を一瞥してからマウンドを睨みつける。

——伊吹ちゃんは凄いよ、デーバ相手に4回2失点なんてさ。

初球はアウトローへのストレート。

完璧にコントロールされた良い球だが、バットがそれを捉えようと振り抜かれる。

——私だって負けてられないんだよね!

白球は放物線を描いてライトスタンドへ一直線。

先制点を取られてからの裏の攻撃、4番の一振りですごい試合を振り出しに戻した。

「美希ちゃん……やっぱり凄いですね」

「あれが今年のウチの最高打者だ」

「鈴井さんにはいつも助けられていますからね」

クールにハイタッチを交わしてベンチに座る鈴井。

そんな彼女の元に、浜矢が近づく。

「なにー？ 私のために打ってくれたの？」

「当たり前じゃん、負けたくないんだよこっちだつて」

「そうだけどさー、そこはもうちよつと愛情込めて言つて欲しかったな……」

「知らないよ……」

——そんなの、わざわざ口にしなくても分かるでしょ。

ほんのり頬を赤く色付けた鈴井は、その顔を見られないようにそつぽを向いた。

逆転をしたい至誠だったが、反撃はここまで。

ホームランを打たれたが精神面で崩れていない大鷲が、茶谷と栗原を打ち取つた。

「大鷲さん打ちづらいですー！」

「まあ見てなつて！ 私が打つてくるから！」

そう意気込んで打席に入るのは浜矢。

2球目だった、内角に緩いサークルチェンジが向かつてくる。

それを迷わず弾き返して三塁線を破るヒットにした。

「おお……！ 浜矢先輩つて意外と打ちますよね！」

「つーか野手やらせりやいいじゃないっすか、高校ならそんな珍しくないっしょ？」

栗原が浜矢のバッティングに目を輝かせ、茶谷が監督に二刀流をさせない理由を聞く。

「……アイツ、ライナー性の打球は上手いけどフライ苦手なんだよ」

「1年の時から変わってないですよ、アレ」

「あれ？ でもピッチャーフライは平気そうでしたよ？」

「外野でのあの守備がな……こつちとしてもトラウマみたいなものになってんだよ」

遠い目をする監督、千秋、小林の様子を見て栗原達は何かを察した。

詳しい事は分からないが、反応からするに嫌な出来事があったのだと推測できてしまったのだ。

そんな話がされている間に、荒波が打ち取られ攻守交代。

浜矢が5回のマウンドに上がり、7番と8番を三振に切る。

《9番左翼手 飛鷹風華さん》

飛鷹の妹である風華が先頭打者。

似ている姉妹だが打席でのフォームは全く違う。

——涼風とは違って、風華は打力はそこまで無い……。力で押しつけていく。力強いストレートで押ししていく。

その初球は外角のストレートだったが、上手く流されてしまいツーベースヒット。

《2番右翼手 雉鳥さん》

——雉鳥は引つ張り方向の打球が多い、外角を引つ掛けさせよう。

外角のスライダーにスライドフォークで追い込む。

1球ボールとなるカーブを挟んでからの4球目。

外角低めへのストレート、それを雉鳥は体勢を崩しながらもレフトへ運ぶ。

「三好ホームー！」

「はいっー！」

——意外と脚速かね、けど諦めん！

三好は全身をフル稼働させ、ホームへ普段よりも鋭い返球をする。

風華が足から滑り込むのと同時に、鈴木も掻い潜ろうとする彼女をタッチ。

「セーフー！」

「はっ？ 今んアウトやろー！」

三好が判定に抗議するように叫ぶ。

しかしその声が球審に届く事はなく、試合は進められる。

「今のは微妙でしたね」

「アウトっぽいけどな……高校野球にもリクエスト欲しいよ」

「そういえばプロは今年からリクエストあるんだったっけ」

審判の判定に意義がある場合、監督がリプレー検証を求める事が出来るリクエスト制度。

しかしそれはプロの話であって、高校野球では対応していない。

たとえ判定が間違っていると思っても、黙っている事しかできないのだ。

「運が悪かったね、次からはこうはいかないよ」

「分かっている、しっかり抑えるぞ」

「全力で投げてきてね」

——パワーが無くとも、金属だからタイミングさえ合えばある程度は飛ぶ……。今の2本はそういう打球だった、伊吹ちゃんが悪くない。

もし木製バットであったなら、確実に打ち取っていた当たりだった。

それがヒットになってしまるのが高校野球と、割り切るしかないと鈴木は考えていた。

——当てられたら飛ぶんなら、当てさせなきゃいい！

——だよな、鈴木！

ここから浜矢の投球が大きく変わった。

変化球は変化量とキレが増し、ストリートは更にノビが良くなった。

2番打者と大鷲は連続三振に仕留めて、4番の斑鳩。

最初に選ばれたのはスライドフォーク。

キレの増したその変化球に、ついバットが出てしまう。

「スイング！」

——ここにきてまだ上げてくるか……未恐ろしい投手だ。

浜矢のオーラと投球に威圧されたようで、斑鳩は引き攣った笑顔を浮かべる。

2球目は決るような内角へのスライダー。

これには腰を引いて避けるが、判定はストライク。

最後に投げられたのは、もちろんストリート。

浮き上がるような球質を誇るこの球に、斑鳩はバットを掠らせる事も叶わなかった。

「ストライク！ バッターアウト！」

——今のストリート……間違いなく過去最高。

フツと笑いながらベンチに戻る斑鳩とは対照に、受けたボールの衝撃に驚きながらも嬉しそうな鈴井。

「伊吹ちゃん！ 今の球最高だったよ、次の回も投げてよ！」

「任せとけ！ 鈴井が捕り損ねるようなボール投げてやるよ」

「私が逸らすと思ってるの？ 伊吹ちゃんの球ならどんな球でも捕るよ」

お互い不敵な笑みで軽口を叩き合う。

相方の成長が自分の喜びなのは、2人とも同じだ。

「さあ5回裏1点差、まだまだ諦めるなよ！」

「幸い上位からだし、チャンスはあるからね！」

至誠ベンチは誰一人として諦めている者はいない。

全員が再びの逆転を目指して、互いを鼓舞し合い気合を入れ直している。

第23球 鱗子鳳雛

1点を追う5回裏の攻撃、先頭打者は岡田。

長打力が極めて無く、セーフティーの可能性がある彼女の打席では内野は前進している。

——無理やりセーフティー狙わない、私だって成長してるんだ。内野を越す打球くらい打てる！

2球目の外角のチェンジアップを力任せに弾き返し、右中間に大きな打球が飛ぶ。

「まさか……！」

「外野への長打?!」

初めてとも言える長打が生まれるのか、至誠の全員の視線が打球に釘付けになる。

——私の守備範囲テリトリー内に侵入しておきながら気を緩めるとは……見るがいい！

飛鷹が後ろ向きのまま落下地点へと駆け、飛ぶように打球へと飛び付く。

審判がさかさず確認に向かい、打球の行方を見る。

「アウト……！」

「くっそー……長打かもしれないよ」

「ドンマイ、今の捕られたら仕方ないよ」

——飛鷹さんの守備範囲を忘れてた。攻守に渡ってチームを引っ張ってきたキャプテンなんだ、そう簡単には抜かせないよね。

一流選手の本領を目の前で見せつけられ、千秋は息を呑む。

しかしその顔には強敵へ対する、賛美の笑みも浮かんでいた。

1番の川端は、サークルチェンジの後のストレートに惑わされず流し打ち。

鋭く伸びていく打球は三塁線を襲う。

——千晴の為にも負けたくないんだ、涼風がやったのなら私だってやってやるさ。

守備が苦手な斑鳩が打球に横っ飛びで食らいつく。

2者連続のファインプレーで2アウトとされる。

「流れが悪いな……」

「チームが一丸となって勝利を目指す……理想のチームですね」

「ディーバの皆さんは結束力がありますね」

——我らはその性質癖二病から、孤独と寄り添って生きてきた者が多い……。だからこそ同じ性質を持つ者同士、固き絆で結ばれている。

三好も続け様に打ち取られ、この回はランナーを出す事すら叶わなかった。

「せんしゅー、確か3点まではセーフだったんだっけ？」

「え？ うん……そうだけど」

「なら私が必ず抑える！ だから打線は最低でも同点にしてくれよ！」

『はい！』

——伊吹ちゃんのスタミナと今の球数を考えると、3イニング投げられるかどうか……。8回までには試合を決めないと。

エースとして、そして3年生として。

後輩に希望を与えられる投球をしなければならぬという責任を持って、浜矢はマウンドで誰よりも輝ける。

同じ輝きを纏っているのは飛鷹涼風。

キャプテンとしてチームの精神的支柱となっている。

だがその彼女でも、ギアを上げた浜矢には敵わなかった。

ストレートとフォークで追い詰められると、内を挟むスライダーに詰まらされファーストゴロに終わる。

デーバの最強打者を打ち取った浜矢に、もう恐れる相手はいない。

6番と7番も3球で打ち取り、この回を無失点で終える。

「さあ上林頼んだぞ！」

「はい、必ず打ってきます」

上林は2回頬を叩いてから打席に向かった。

気合の入った表情だが、緊張している様子は無い。

この勝負師とも呼べる顔は、1年生とは思えない。

——私に対してはスラープは多投せん、スライダー系が得意なのがバレてるさかい。

やから私が狙うのは、このチェンジアップ！

低めのチェンジアップを掬い上げ、レフト方向に引つ張る。

ふらふらと上がった打球は外野の前に落ちると思われた。

だが風華が姉譲りの守備力を見せるかのように、スライディングキャッチ。

またしてもヒットを防がれてしまった。

「風華の方も守備上手かったんだったな」

「将来的には飛鷹さんみたいなタイプになりそうですね」

「そうだったらウチとしては困りますね……」

この好プレーには至誠側も拍手をするしかない。

落ち込む上林を励まして、次の打者へと期待をかける。

「さあ鈴木！ この流れを壊してやれ！」

「かつ飛ばせ鈴木——！」

脅威の集中力を見せている彼女には、ベンチからの声援など聴こえていない。

ただ目の前の相手をどう攻略するか、それ以外の事象に興味は無かった。

並行カウントとしてからの5球目、外角低めへのスラップ。

鈴木はそれをおつつけて打ち返しライトオーバーの長打を放つ。

「よしよし、ナイバッチ！」

「さすが美希ちゃん！」

「アウトランナー二塁、ここで監督が動いた。」

「白崎と佐野、代打いくぞ！ 石川と伊藤は守備の準備！」

『はこー！』

「は、はこ……」

茶谷の打席で代打に送られたのは佐野。

左打席に入り、試合に出られた喜びが強いのか笑顔で構える。

——全国大会準決勝……こんな場面で代打！ めっちゃ楽しい！

「あいつ笑ってるぞ」

「さ、流石は元剣道家……メンタルが強い」

武道で鍛え抜かれた精神力は、今この大舞台でも健在だった。

普通の1年生なら怯むような場面でも、彼女には類稀な精神の強さがあった。

——確か彼女は初心者だっけ？ けど力はあつたはず……変化球中心で攻めてけば

打たれないでしょ！

スラップ、チェンジアップ、そしてサークルチェンジ。3球種を使ってカウントを

2—1とした。

「佐野集中！ 打てるぞー！」

勝負の球は、彼女が自信を持つチェンジアップ。

その軌道を見た瞬間、佐野はニヤツと笑った。

——チェンジアップなら湧相手に練習した、これなら打てる！

芯を少し外されたが、その持ち前のパワーで力強い打球を放つ。

ライト線を破る打球はあつという間にフェンスに到達した。

「鈴木ノースライ！」

「夏輝はストップ」

鈴木がホームに生還して同点、佐野は一塁でストップ。

まだチャンスが続いている最中の代打攻勢、次は白崎だ。

——また代打か、この子はかなり警戒しないと。それと念の為……。

サインに頷いてから、すぐさま一塁に牽制を入れる。佐野は反応が遅れたが何とか帰塁成功。

「……代走出しとくか、石川行ってこい」

「はい！ 盗塁はありますか？」

「もちろんアリ、走れるなら走ってこい」

「りようかいです」

代走が告げられ石川と佐野が入れ替わる。

ヘルメットを被り直し、一塁上で大鷲を観察する石川。

——牽制はまあまあ上手いって感じかな、けど球は遅いし変化球も遅いのばっか……

いける！

交代してからの1球目で走り出す。

一瞬ホームを見てボールの位置を確認し、そこからは前だけを見て走り続ける。

キャッチャーが二塁へと送球するが、タイムミングは余裕でセーフ。

「よし、チャンス拡大！ あとは白崎に任せよう」

「得点圏での杏紗ちゃんは怖いですからね、何もサインはいらないですね」

ベンチからのサインは出ず、白崎に全てが託された。

だがそんな状況だからこそ彼女は実力を発揮できる。

——この人の球は軽いから当てれば飛ぶ、ここは本塁打よりもヒット狙いの方がいいかな。

初球のチェンジアップは見逃してストライク。

続く外角へのスライダーも見送り、1ボールストライク。

2球続けてコーナーを突かれるがカットしてカウントはそのまま。

内角高めに外れるストライクで仰け反る。

勝負を決める5球目は外角へのサークルチェンジ。

「内角の速球で仰け反らせてからの、外角への緩い球……普通の打者なら打てないだろ

うな」

——普通の打者なら、な。

フルスイングで振り抜かれたバットは白球を捉え、またしてもライトに痛烈な打球が飛ぶ。

それを見た石川はダイヤモンドを駆け、悠々とホームイン。

「ナイバツチナイスラン！」

「石川、さっきの良い盗塁だったぞ」

「灯お疲れ、最高だったよ」

「へへー、もつと褒めて！」

もみくちゃにされながら、笑顔でベンチに戻る石川。

その一方、マウンドではディーバのスタメン全員が集まっていた。

「ごめん、逆転されちゃった……」

「……気にするな、また打てばいい」

「そうだ千晴、運命を共にした我らが打ちのめしてみせよう」

「2人とも……ありがとう、信じてるよ！」

話を終えた彼女達がグラウンドに散り散りになる。

大鷲の眼から光はまだ失われていない、気を抜けばまた逆転されるだろう。

斑鳩と飛鷹からの励ましを受け取った大鷲は、キレのある変化球とストレートの緩急で後続を断つ。

3対4、一点差で7回を迎えた。

「1点差か……まさかデীবバをここまで抑え込めるとはね」

「伊吹ちゃん頑張つて！ あと1イニングだよ！」

「エースを信じて待つてな、必ず勝つて決勝進出だ！」

「だから何でそうフラグ立てるかな……」

浜矢と鈴井が走つてそれぞれのポジションへ向かう。

まだ試合の行方は分からない、この熱戦を誰もが楽しんでいる。

いくらデীবバの打者とはいえ下位打線、浜矢の敵ではない。

8番は三振に切り取つて、飛鷹風華を相手にする。

——風華は当てるのが上手いけど、パワーは無い、ストレートでゴリ押しだ！

2球続けてストレート、それなのに風華は前に飛ばすことすらままならなかった。

——球が速い上に、勢いがある……！　姉さんはこんな球をホームランにしてたんだ……。

ワンバウンドするフォークには釣られず、その次の外に外れるカーブも見送って並行カウント。

4球目は再び力のあるストレートを内角に。

だが風華もそう簡単に打ち取られる訳にはいかなかった。

文武両道の優れた姉を持った彼女は、幼い頃から姉と比べられる事が少なからずあった。

その度に護ってくれた姉を尊敬してデীবを選んだ。恩返しをしたいとずっと願っていたのだ。

——姉さんが打って私が打てないなんて事があっちゃいけない。必ず打って、姉さんの為に決勝に進むんだ！

強く振り抜いて打球はセンターを襲う。

センターの前に落ちるかという打球となる。

「オーライ！」

「早紀任せた!」

「うん! ……イデッ!」

落ちるかどうかの打球に、飛び込んでキャッチ。

だが捕球の瞬間に痛みを訴え、今も立ち上がらない。

「ちよ、早紀怪我? 嘘でしょ……?」

「……………顎打った」

「なんだよもー! 心配して損した」

神妙な顔でそう言う彼女だったが、心配が必要無いのは言葉の後にしたウインクを見れば一目瞭然だった。

「でもリラックスできたっしょ?」

「元から緊張してませんー! ほら早くボール返して」

「ごめんごめん、あとアウト1つー!」

人差し指を立てて浜矢にボールを返すと、浜矢も人差し指を立て返す。

10年ぶりの決勝進出まで、残ったアウトは1つ。

《1番右翼手 雉鳥さん》

先程の代打の2人とは違い、こちらは緊張している様子。

だがそうなってしまうのも無理もない。

先程の代打は6回の1アウトの場面、それに対して今は7回2アウトの場面。次があるかこれで終わりか、その大きな違いがあるのだから。

そんな彼女を見たからか、飛鷹はタイムを取って打席に向かう。

「落ち着け、時雨の実力なら大丈夫だ。繋いでくれれば私達が還す、だから安心して打つてこい！」

「……はい！」

——時雨はまだ2年生だ。ここで打つても打てなくても、良い経験になるのは違いがない。

——だけど、打てるんなら打ちたい！

初球の内角へのスライダー、それを思い切り引っ張ってライトへ運ぶ。

ライナー性の打球はライト線を破るかと思われた。

——私も打ててないのに、早紀は守備で活躍した。私だつて！

2本もヒットを防がれ、誤審もされた分のツキがようやく回ってきたのか。

荒波の守備範囲内を襲ってきた打球は、僅かに伸びずグラブの先に収まった。

「ゲームセット！」

瞬間、勝者と敗者に分かれる。

勝者である至誠はマウンドに集まり、互いを讃え合う。

敗者であるディーバは、慰め合う事もできず蹲つて泣き喚く。

「決勝進出か」

「神田にリベンジできるんだ、勝たないとね」

「もちろん！　そんであの発言を謝らせる！」

「私も賛成」

因縁のある彼女と、2年越しの直接対決が出来る。

それが楽しみで仕方がないといった顔だ。

一方でディーバのベンチは、引き上げようにもまだ立ち直れていない選手が大勢いるようだ。

そんな仲間達を見て、飛鷹が仁王立ちで話し始める。

「全員顔を上げろ！　……誰もが全力を尽くした素晴らしい戦いだつた、今日の事は今後我らの誇りとなるだろう」

その言葉を聞いて、斑鳩と大鷲も部員達の前に出る。

「……ベンチ入りしたメンバーの中には、下級生も多い。来年こそ頂点に立つてみせるんだ」

「私達も卒業までに出来る事はするから、全員でまた強くなるうー!」

『ハイ!!』

ディーバの3年生は彼女達だけ。

弱小高校を準決勝まで連れて来た彼女達を責められる者は、誰もいない。

話を終えたディーバの3年生は、至誠の3年生の元に歩いていく。

「浜矢、良き戦いだった」

「ありがと、優勝してくるぜ!」

「そうしてくれると助かる、私達が善戦したのを証明出来るからな」

浜矢は飛鷹と、斑鳩は鈴井と、大鷲は千秋と握手を交わす。

「これを我が盟友である、浜矢に渡そう」

彼女が浜矢に差し出したのは、自身のバッティンググローブ。

だがこれを見た浜矢の反応は芳しくない。

「うっ、そのー……大変申し上げにくいのですが……」

佐久間からもバッティンググローブを貰ったことを告げると、飛鷹は高笑いをする。

「成程、であれば鈴井に渡そうじゃないか」

「いいの？ ならありがたく頂くよ……打ってくるね」

「当然！ 我らが認めた宿敵なのだからな！」

「祥雲は強いけど頑張ってるね」

活躍を誓って両校の3年生は別れる。

デীবアの想いと蒼海大の想い、彼女達はそれを抱いて決勝を勝ち抜くと心に決めた。

試合から数時間が経過し、デীবア校内では打ち上げが行われていた。

ここまで勝ち上がった事と、部員の疲れを癒す目的だ。

「秘密の花園へと赴くとするかな」

「普通にお手洗いって言えばいいのに……慣れたけど」

会の途中で飛鷹が抜け出し、大鷲と斑鳩が顔を見合わせ領き合う。

「ごめん、私たちもいく」

「えっ、先輩達もですか？」

「……三位一体だ」

「どういう理由ですか……」

飛鷹に気付かれないよう、足音を立てないでトイレへと向かう。

そして目的地に着いた彼女達が目にしたのは、今まで気丈に振る舞っていたキャプテンの泣く姿。

「……涼風」

「っ！ ど、どうした？ 共に行動とは仲が良いな」

「これはいつものことですよ……私たちには隠さないですよ」

「後輩には見せられなくとも、私達は3年間を共にした最高の仲間だろ？」

2人の言葉を聞いて、飛鷹は堪えていたものが崩壊した。

言葉を発せないほどに泣きじやくる彼女は、間違いなく高校生だ。

——キャプテンとして頼もしかったし、尊敬していた。けど、こんな時まで抑え込めんじやないよ。

——涼風とこうして接する事が出来るのは、私達と風華だけ。気が済むまで泣かせてやろう。

10分という長い時を経て、飛鷹はやつと喋れるようになるまで回復した。

その間に大鷲と斑鳩も泣くというハプニングはあったが。

何と言いついて部屋に戻るか、そんな話をしながら部屋へと向かう。

「今しがた帰還したぞ！」

「姉さんおかえり」

——先輩達の目が赤い……泣いてきたんだろな。

——けどこつちから言うわけにもいかないよね。

後輩達が気を遣っていつも通り接していると、それを壊す声か。

「先輩達泣いてきたんですか？」

「雉鳥さん……なんで言っちゃうんですか」

「……ククツ、ハツハツハツ！ 面白い、その遠慮の無さと観察眼……次期主将に相応しい！」

「いや見れば分かる……というか、え？ キャプテンですか？」

周囲もこれには賛成なのか、大きな拍手をして次期キャプテンの誕生を祝う。

「……もー！ 私がキャプテンになったからには、優勝以外は認めないからね！ 覚悟してよー！」

「どんなに厳しくてもついでいきますよ、キャプテン」
「風華からかつてるでしよー！」

惜しくも準決勝で敗退となった彼女達だったが、着実に次の大会への準備が進められていた。

もしまた戦う機会があるのであれば、今年と同じかそれ以上の強敵として立ちほだけるだろう。

第24球 決戦を前に

前日の熱戦を見事制した至誠ナインは、甲子園球場近くのホテルでミーティングを行っていた。

「明日の対戦相手は祥雲学院……高い守備力とエースの神田さんの組み合わせは、数々の強打のチームを苦戦させてきたよ」

「翠嵐……神田は全てが高い水準で纏まった好投手で、打者としての評価も高く4番を任されている」

対戦相手である祥雲学院は、とにかく固い守備が売りのチームだ。

センターラインは勿論、内野陣を始めとして攻守の選手が揃っている。

そんな守備の中で投げる神田自身も、高校No.1投手と呼ばれる名投手だ。

「1点を争う試合になるの明らかだから、守備のミスは絶対に無くそうね!」

「今日は軽く守備練したら、明日に備えて休んでくれ」

守備型のチームではあるが、ミスをしたらそこに付け入れる打力も持ち合わせている。

守備も攻撃も、一瞬たりとも気を緩められない相手だ。

右打者の監督と、両打ちの千秋による内野ノック。

伊藤と小林によるペッパーに、鈴井による外野ノック。

その他にも投手陣は軽く何十球か投げ込みをし、捕手もそれを受けた。

練習を終えて入浴をして汗を流した後、浜矢が鈴井と洲崎を引き連れて千秋の元へ向かう。

「せんしゅー、聞き忘れてたけど明日の先発は？」

「明日は真理ちゃんだよ、伊吹ちゃんは5回から」

「私も投げていいの？ やった！」

「エースだし神田さんと因縁あるからね……ただ昨日の試合で投げ過ぎたからリリースなんだ」

昨日は120球を超える投球をした浜矢。

彼女のスタミナであれば110球前後がギリギリのライン、よく壊れずに投げ切ったものだ。

「さつきも言ったけど明日は1点を争う試合展開になる……2人とも頼んだよ」

「完璧に封じ込んでやるよー！」

「……私も、神田さんには負けません」

「ならそれをリードする私も頑張らないとね」

それぞれ神田に因縁のある3人、明日の試合に向け誰よりも気合が入っている。

夜、皆が寝静まった時間に目が覚めた鈴井。

寝転がったまま横に目線を向けるが、そのベッドはもぬけの殻だった。

——……伊吹ちゃんが居ない。

近くの部屋で眠る皆を起こさないように、静かに部屋を出る。

足音を立てないようにしながら、周囲を探索する。

しかしどこを探しても目当ての人物の姿は無かった。

——もしかして外にいるのかな。

ホテルのフロントに話を聞くと、浜矢が外に出たと伝えられた。

髪を手櫛で整えてから鈴井も外へ出る。

暖かい風が彼女の長い茶髪を靡かせる。

月夜に照らされた目の前の彼女は、鈴井の探していた人物だ。

浜矢はじつと空を見上げて動かない。

「伊吹ちゃん」

「鈴井か、びつくりした」

「それはこつちのセリフだよ……眠れないの？」

「うん……なんかね」

そつと浜矢の隣に立つ鈴井に、浜矢は優しく微笑みかける。

普段は最上級生として明るく振る舞っている浜矢だが、鈴井と2人きりの時は意外と大人だ。

「緊張してるの？ それとも不安？」

「それもあるけど、楽しみとかソワソワとか……なんか色々混じってる」

「少しだけその気持ち分かるよ、私も同じだし」

近くのベンチに腰掛けて、星空を見上げながら語り合う2人。

「神田には色々言われたけどさ、兎川とかの言葉聞いてたらほんとに悪い奴なのかなって」

「……それは明日になれば分かる事だよ」

「そうだな、勝って全部聞き出そう」

——神田が本気で悪い奴だとは思わない。けど伊吹ちゃんを馬鹿にしたり真理に冷たくしたのは事実だし、痛い目は見てもらわないと。

2人の間に無言の時間が流れる。

だが気まずい時間だという認識は、2人にはない。

信頼した相手と2人きりの空間、それはとても嬉しい時間だろう。

暫くすると、浜矢の様子が変わった。

チラチラと鈴井の方を見たかと思えば、いざ目が合うと逸らす。

何かを言おうとして口を開いても、その口から言葉が紡がれる事は無い。

「……………すっごくいい気になるんだけど、なに？」

「あのさ……………その……………」

——伊吹ちゃんがこんなに躊躇ってるの、珍しいな。

鈴井の思っている通り、浜矢のこんな姿は珍しい。

気を遣うタイプではあるが、言いたい事はズバツと言える彼女だ。

何かとんでもない事を言い出すのでは無いかと、鈴井も少し緊張していた。

「私さ、鈴井のこと！ す……………」

「……………うん」

ここまで言つて、また次の言葉が出てこない。

鈴井はじつと浜矢を見つめ続けるが、段々と浜矢の顔が赤くなつていく。

「す……………凄いキャッチャーだと思つてる！　こんなキャッチャーと組めるなんて誇らしいし、めっちゃ嬉しい！」

「……………そっか、私も伊吹ちゃんみたいな投手と組めて嬉しいよ」

「あ、ありがとう！　鈴井つてキャッチング上手いしリードも良いし、何より受けてもらうと安心するんだよね」

焦りで声の上擦つていたり、暑さで出るのは違う汗が流れていたりする浜矢。

それを知つてか知らずか普段通りに接する鈴井。

「明日頑張つて、絶対優勝しような！　鈴井が全国最強のキャッチャーだつて皆に知らしめるんだ！」

「なら私はウチの投手陣が最強だつて事を、世間に教えなきゃね」

「鈴井が県内の話題をかつさらうのは予想出来るな」

2人は明日の試合についての話や、神田についての話を30分程した。

語り合う彼女達は楽しそうだったが、やはり浜矢にどこか違和感がある。

「もう11時じゃん、そろそろ戻るか」

「伊吹ちゃん、明日絶対勝とうね」

「……おう！ 最強エースに任せとけ！」

「はいはい、期待してるよ最強エースさん」

鈴井の言葉に怒った口調で反論しながら、エレベーターのボタンを押す浜矢。

その背中を見つめながら一言呟いた。

「……へタレ」

「んあ？ 鈴井なんか言ったー？」

「別に何でもないよ、空回らないでって言っただけ」

「その発言後悔させてやるからな！」

——最強エースなら私の気持ちも察してよ。というか後悔するのはどっちなんだか。というか、伊吹ちゃんってこういう時はへタレなんだね。

呆れたようにため息を一つ吐き、エレベーターに乗り込む鈴井。

彼女達が想いを伝え合う日が来るのは、一体いつになるのか。

翌日、遂に迎えた決勝戦当日。

鈴井と洲寄、そして浜矢が一緒に球場入りをする。

三塁側のベンチへ歩いていると、それを待っていた人影がこちらに向かってくる。

「3人ともおはよう」

「孤塚!?　なんでここに……祥雲は一塁側だぞ?」

「3人に話があつて待つてたんだ、翠嵐のこと」

その名前を聞いた3人は、目を見開いて驚く。

そして顔を見合わせてから頷き、座つて孤塚の話聴く。

「まず、3人が知つてる翠嵐つてどんな子?」

「実力はあるけどムカつくし人を見下す奴」

「鈴井とほぼ同じかな……」

「……本当は、きつと優しい人なんだろうとは思いますが」

昔の神田を知っている洲寄だけがそう答えた。

3人それぞれの答えを聞いて、孤塚は悲しそうな顔を浮かべる。

「やっぱりそうだよね……仕方のない事だとは思うけど」

「教えてくれ、本当の神田ってどんな奴なんだ？」

「それは私も知りたい、誤解してるんだったら嫌だし」

「私にも教えて下さい」

3人が真剣な表情でそう訴えると、孤塚は両手の指を擦り合わせながらぼつぼつと語りだす。

「……元々ね、翠嵐は凄く良い子だったんだ。運動神経は良いし、頭も良いのにそれを鼻にかけない子でね」

「今とは全然違うな……」

「私が翠嵐と釣り合わないって言われた時は、誰よりも怒って反論してくれたりもしたんだ」

——あの時の翠嵐はカッコよかったな、ああやっていつも助けてくれた。

「……そんなに性格良かったのに、何があつたの？」

「それは……周りのせい、かな」

「周り？ 家族とか友達とか？」

「うん……翠嵐の家ってご両親が医師で、お姉さんが現役のプロ野球界のレジェンドでしょ？ だから翠嵐もかなり期待されてたんだ」

”周りのせい”かなり期待されていた”この2つの言葉を聞いた3人は嫌な予感がした。

「だからずっと色々言われ続けてたんだ。出来たら神田家の人間だから当たり前、出来なかつたら神田家の人間なのにそんな事も出来ないのかつて」

「……そうだとは思ったけど、胸糞悪いな」

「それって小学生とか中学生の時の話でしょ？ 酷い話だね、子供にそんな言葉掛けて
「や」

。流石にこれには気分が悪くなった浜矢と鈴井は、自分の思った事を口にした。

周りに誰も居ないからどんな事でも口に出来る。

「……まさか、神田さんは」

「真理が異変に気付いたのは中学2年とか、そのくらいの時だったよね」

「は、はい……」

この話をしている孤塚自身も、苦しそうに言葉を紡ぐ。

「あの頃だったんだよね、翠嵐の心が壊れたのは。ずっと正当に評価されてこないで生きてきて、ずっと我慢してたけどそれが決壊した」

「……………そっか」

「だから周りにも自分がされたのと同じ態度を取るようになった。出来たら名門チームの選手だから当然、出来なかつたら名門チームの選手なのに出来ないのかつて」

孤塚の話聞いても、誰も言葉を発せずいた。

神田の気持ちを考えて辛そうな顔をしていたり、周囲に対する怒りを必死に抑えていたり。

「だから至誠で勝つて欲しいんだ」

「それって八百長……………」

「という訳ではないけどね、でも負けなきや翠嵐はきつとこのままだから……………」

泣きそうな顔をして言葉を絞り出す孤塚。

その声は震えていた。

「……………孤塚はそれで良いの?」

「良くないけど、翠嵐が大事なんだよ」

次の瞬間、浜矢は勢いよく立ち上がる。

「絶対手抜くなよ! そんな事したら私達だつてわざと負けてやる!」

「何で八百長仕掛けてるの……………けど私も同じ意見だよ、手を抜いた相手に勝つても嬉し

くないから」

「……分かった、本気でいかせてもらおうよ」

孤塚は自分の荷物を持って立ち上がる。

一塁側へ歩いて行こうとする孤塚を、浜矢が引き止める。

「高校に入ってからからの神田ってどうなんだ？ 兎川とかは優しい先輩だって言ってたけ

と……」

「紫音と話したんだ、そうだね……前よりかは丸くなった、かな」

「なら良かったよ、今日必ず昔の神田に戻してやるからな！」

「正々堂々、全力を出し切って勝負しよう」

今度こそ孤塚は自軍の方へと歩き出す。

その後ろ姿を見送った後、3人は今日の勝利を誓い合った。

第25球 真紅に燃える

試合前、最後の作戦会議が行われた。

内容は昨日とほぼ変わらないが、改めて選手達の意識を高める目的で行われる。

「打てないことよりも守備のミスが1番痛い、丁寧に守っていこう！」

『ハイ！』

「じゃあ改めてスタメン発表するよ〜」

大事な決勝戦のスタメンはこうなった。

1番 荒波友海（右）

2番 三好耀（左）

3番 上林真希（遊）

4番 茶谷佳奈利（二）

5番 鈴井美希（捕）

6番 洲崎真理（投）

7番 栗原美央（一）

8番 川端渚（三）

9番 岡田早紀（中）

「……私が6番なのはなぜですか？」

「伊吹ちゃんが出た時に6番にいて欲しいのと、美希ちゃんと繋いでおいていっぱいお話しして欲しいからかな」

その方が抑えられる確率上がりそうだから、と付け足す。

洲寄は理由に納得したようで、これ以上問う事は無かった。

「さあ攻撃開始だ、とにかく粘って球数投げさせるんだ！」

「つしゃー！ やったるぞー！」

「力み過ぎないでよね、その尻拭いするのは私なんだから」

「へーい」

今日は先攻なので至誠の攻撃から。

荒波が左打席に入り、バットで地面を撫でてから構える。

——至誠か……決勝まで残るといふ事は、多少はマシになったんだらうな。

つまらなさそうにマウンド上に立つ神田。

その初球は彼女が自信を持つストレートだった。

「ストライク！」

「速い……これは1点取れますかね？」

「鈴木と浜矢は翠嵐から打ったことあるし、あの2人を頼るしかないか」

「それが1番確実そうですね」

追い込まれてからの3球目はスプリット。

バットが止まらず空振り三振を喫してしまう。

「当たる気配すら無いんですけど……」

「相手が相手だから仕方ないよ、守備頑張ってくればいいから！」

「はい！ ライトは抜かせませんよ！」

不動の2番打者三好は、変化球には何とか食らいつくがストレートには合わせられずこちらも三振。

続く上林に期待が寄せられる。

——真希ちゃんも変化球には強い……耀ちゃんと比べてパワーがある分、こっちの方が期待できるかも。

千秋の予想通り、上林は低めのスプリットを掬い上げる。

しかしその打球は、シヨートを守る兎川のジャンピングキャッチにより防がれる。

「兎川さんは良い動きしますよね」

「祥雲で2年でレギュラーだからな、下手な訳が無いよな」

「鹿瀬さんも結構上手いですし、内野を抜くのは難しそうですね」

三者凡退で初回の攻撃が終わり、今度は守備。

洲寄が決勝のマウンドに上がる。

——この大事な試合で私が発……去年のような失態はしたくない。

「落ち着いて投げてね、真理の球なら神田以外には打たれそうにないから」

「神田さんも抑えられたら良いんですけどね……」

「伊吹ちゃんでも厳しそうだし、最悪敬遠かな」

「分かりました」

鈴井がキャッチャースボックスで構え、1番の兎川を迎える。

——兎川は長打は無いけど当てるのはそこそこ上手い。塁に出しても面倒だから、しつかり抑えるよ。

兎川に対する初球は外へのスクリュー。

逆らわず右へ打ち返すが、これはファールになる。

2球目の内角のスラープは空振りで追い込んだ。

しかしここからの2球は粘られ、カウント2―1。

最後の勝負球として投げられたのはバーム。

緩く落ちていく変化球には対応出来ず、サードゴロに打ち取る。

「変化球は多分全部見れた気がする、コース突いてくるから気をつけて」

「分かった」

兎川が洲寄の投球を、次の打者の鹿瀬に伝える。

その言葉を頭に入れて右打席に入る。

——鹿瀬は脚はそこまでだけど、打力はこっちの方が上。インコースが得意だから外中心に攻めようか。

外角高めへのストレートは見逃して1ストライク。

次のボール球のスラープは見送り、これで1―1。

3球目は外角低めへのスクリーンが選ばれた。

鹿瀬はそれを右方向へ流すが、力の無い打球となりファーストライナー。

3番はキャッチャーの孤塚。

以前の対戦の時には9番を打っていた彼女も、今ではクリーンナップ。彼女もこの3年で成長してきたのだ。

——孤塚は固め打ちするタイプ、調子に乗らせない為にもこの打席は絶対抑えよう。まずは内角高めへのクロスファイヤー。

次はバームをストライクからボールになるように投げるが、見送られてボールとなる。

スクリューも低めに外れるが、孤塚はバットを止めて見送る。

——そういえば選球眼良かったっけ。左投手が得意だから慎重にいきたかったけど、ゾーン内で勝負するかな。

内角に食い込むスラップで腰を引かせて3ボール。

次の内角に投げたムービングボールを打たせ、ショートゴロに打ち取った。

「ナイピ、良いコントロールだったよ」

「ありがとうございます、もっと良いピッチング出来るように頑張ります」

鈴井と洲寄がグラブタッチをしてベンチに帰る。

2回表の攻撃は4番の茶谷だったが、ストレートとスプリットの組み合わせにまんまとやられて三振。

「鈴木頑張れー！ 打ってやれー！」

「美希ちゃん頼んだよー！」

——私が打てるかどうか、それが勝敗に大きく関わっているのはわかってる。

初球のスプリットは見送ってボール。

続く高めのストリートには空振ってしまふ。

——チームに希望を持たせる為にも、ここで打つ！

3球目のスライダーを流して一・二塁間を抜けるヒットを放つ。

高校最高投手を相手に、1打席目から完璧なヒットを打った。

——鈴木は中々やるようだな、まあそれ以外は全員安牌だ。

高い実力を持つ神田からすれば、至誠など全員格下に見えるだろう。

それは間違いではなく、洲崎と栗原は打ち取られこの回を終える。

「投手戦になりそうですね」

「予想はしてましたよ……どこで点の取り合いが発生するかな」

「神田さんが疲れ始める5回前後じゃないですか？ けどその頃にはこっちは伊吹ちゃ

んに交代している……勝機はありますよ」

監督達が話をしていると、客席から大きな声援が送られる。

祥雲学院の4番エースを務める神田の打席に、観客が沸いているのだ。

「鈴木先輩、どうしますか？ 私はどっちでもいいんですけど……」

「色々考えたけど、真理だつてアイツを見返したいでしょ？ 勝負しよう」

「はい……少し緊張しますね」

神主打法で構える彼女からは、圧倒的な強打者のオーラを感じる。

デীবバをはじめとして、強打の打者とは何度も対戦してきた。

だがその彼女達を遥かに上回る威圧感だ。

——相変わらず凄い人なのに変わりはなくて良かったです。けど、私も貴女に認めてもらえるような投手になれたと思っています。

因縁の対決を開始する初球はパーム。

それを強く流して、フェンスに突き刺さるファールにする。

「……頑張れ」

「神宮的にはやっぱ神田の事は許せない？」

「真理は神田さんの事好きですから、なんかちよつと複雑な気持ちです……」

「なるほどな、まあ一緒に見守ろう」

両手を握り合わせて祈りながら、この対決を見守る神宮。

そんな彼女の緊張感をほぐしながらも、自身も少し表情が引き締まっている浜矢。

2球目はムービングボールが外れ、次は内角のスクリュー。

一度浮き上がってから曲がるその球は、逆方向のカーブとも呼ばれる。

それすらも簡単に弾き返されるが、ラインを割ってファールとなる。

——神田を追い込んだ……。けどここからが本番、コイツはそう易々と打ち取られてくれない。

内角高めにストレートを投げて仰け反らせ、低めに少し外れるスラップを要求する。

要求通りのコースに投げられたが、神田は難なく流してツーベースにしてしまう。

「今の打たれたら仕方ないよ、次抑えよう」

「はい……本当に打者としても凄いですね、今のは打たれると思ってませんでした」

「悔しいけど打者としても一流だからね……クリーンナップ越えれば楽になるから、ここは集中しよう」

神田を終えてもまだ化け物級の打者が1人いる。

アメリカからの来訪者、クリスタ・ルイス。

並外れたパワーと走力の持ち主である彼女が5番に座っている。

——外国人打者はインハイ苦手な選手が多いけど、この人もその例に漏れない。攻めていくよ。

腕が長く内角へ対応するのが難しく、更に向こうでは外角は大きく取るが内角は取らない球審も多くいる。

その為投手もわざわざ内角攻めせず、打者も内角に慣れていないのだ。

内角高めのムービングボールを空振りさせる。

だがこの1球だけでも、スイングスピードが桁外れなのが分かった。

——怖いけど、やっぱり内角苦手だ。どんどん投げるよ、ぶつけないようにね。

次も内角に食い込むスラップでストライク。

追い込んでからは1球外に外れるスクリーンを投げ、最後は内角高めのストレート。

金属音が響き渡り、打球は真上に上がる。

「キャッチャー後ろ！」

「オーケー！」

タイミングは完璧だったが、僅かに下を叩いてキャッチャーフライ。

「真理ナイス！ この調子でいくよー！」

「はー！」

怖い打者を抑えて自信が付いたのか、洲寄は先程よりも変化球の精度が上がった。

6番には打たれるも、後続は打ち取ってこのピンチを無失点で切り抜ける。

「お疲れ洲寄ー！ ナイスピッチ！」

「ありがとうございます、浜矢先輩も頑張ってくださいね」

「もちろん！ 後輩には負けてられないっつーの！」

浜矢に頭をペシペシと叩かれ、好投を褒められる洲寄。

その後監督に呼ばれたのでそちらに向かう。

「強くなったな、今までの洲寄だったらあのままズルズル打たれてただろ？」

「そうですね……自分でも成長は実感出来ました」

「あと2イニング無失点ピッチ見せてくれよ？」

「当然です、誰が相手でも抑えてみせます」

その頃祥雲ベンチでは、神田が不機嫌そうに次の回の準備をしていた。

——洲寄もやるようにはなったが、まだ未熟な投手だ。それを打ち損じた？ ……次

の打席は覚えておけよ。

ボールを思い切りグラブに投げつけて、大きな音を鳴らす。

それが神田の不機嫌な時の癖だということを知っている孤塚は、引き攣った顔をしながらグラウンドに向かう。

第26球 空色の羽ばたき

3回表の攻撃、打席には最近好調の川端。

和歌山の安打製造機は、もう不調の心配は必要無さそうだ。

「そうだ、空ちゃんと伊吹ちゃんは肩作っておいて」

「うん、神宮行くぞー」

「はーい」

2人が肩を作り始める一方で、川端は神田を相手に善戦していた。

4球投げさせてカウントは2―2、厳しいコースを突かれてもカットしている。

——凄い投手とは今まで何人とも対戦してきた。けどその中でも神田さんは図抜けている……。

だからといって諦める彼女ではない。

粘りに粘って、7球目で遂に四球をもぎ取った。

「ナイセー」

「バットが止まってくれて良かったです」

——鈴木以外にもまともな奴はいたんだな……まあ、だからどうしたという話だが。四球を出した事に苛ついているのか、球速が上がった。

だが球速だけ上がって制球や変化球が悪くなる、という訳ではない。

これが神田が常に好成績を残せている理由だ。

岡田に荒波が続け様に打ち取られ、三好はヒットで出塁するも上林は凡退に終わってしまふ。

3回裏の祥雲の攻撃は下位打線からだった。

9番には寄せ付けない投球を見せて空振り三振を奪う。

——さて、兎川か……。ランナー無しの際の打率が高いし、慎重にね。

大事な初球はパームから入るが、それを上手く捌かれてセンター前に運ばれてしまふ。

「盗塁はありますかね」

「鹿瀬が2番にいるって事は攻撃的なオーダー……おそらくあるな」

バッテリーももちろん盗塁を警戒して、2回牽制を入れる。

最後に1回一塁の方を見て、投球をする。

「走ったー！」

「真理伏せてー！」

高めのムービングボールを立ち上がりながら捕り、そのまま流れるような動きで二塁へ送球する。

だが兎川も走り出してからスピードを落とさず、鋭いスライディングで二塁へと滑り込む。

「セーフ」

「これで1アウト二塁……鹿瀬は打つてくるよな」

「孤塚さんと神田さんも控えていますし、ここは抑えてもらいたいですね」

——鹿瀬は本来ならクリーンナップを打てるだけの實力はある。それが2番ということは、速攻で決めようとしているんだらうな。

実際今も得点圏を作り絶好のチャンスを迎えている。この打順は間違つてなかったようだ。

鹿瀬に対する初球は内角へのストレート。

これは見逃して1ストライクとなり、2球目はスラーブ。

ボールからストライクになる球だったが、鹿瀬は迷わず振り抜く。

ライト方向に運ばれた打球は荒波の前に落ちる。

——あのライトめつちや肩強かつたよね、先輩達もいるし止まるところ。

一旦三塁を蹴るも、荒波の肩を思い出しストップ。

1アウト・三塁の場面で迎えるのは孤塚。

彼女は気合が入っているようだったが、洲崎も打たれる訳にはいかなかった。

ムービングボールとパームで追い込んだ後の、3球目のスラップ。

ストライクからボールになる、今までは全く違うキレのその球で空振り三振を奪う。

——問題はここ……神田をどう抑えるか。

左打席でオーラを放つ彼女は、暑さを全く感じさせない冷たい眼をしていた。

誰にも、何にも興味が無さそうな眼。

背中に一筋の冷や汗が流れるが、それを振り切るようにして得意球であるパームを低めに投げる。

だが神田はこれを易々と外野の最奥部まで運んでしまう。

兎川は勿論生還、鹿瀬も全力で飛ばし一塁からホームまで駆け抜けた。

ここでの2点という大きな失点、更にはまだピンチが続いている状況。たまたらず鈴木がタイムを取り洲崎に駆け寄る。

「真理……」

「まだまだいけます」

鈴木が励ましの言葉を掛けようとする前に、洲崎自身が強い意志を持ってそう告げた。

「……ならよし、完璧に抑えようね」

「はい」

洲崎の言葉から普段の冷静さを感じ取りながらも、それ以上の熱さを感じた。それを信じて鈴木はまた構え直す。

打席には強打を誇る5番のルイス。

神田にも負けず劣らずのオーラを放ち、外国人特有のクローズドスタンスでバットを構えている。

——インコースが苦手なのは分かってる、だからといってインばかり攻めていても打たれる。

「美希ちゃん悩んでますね」

「外国人打者って打席での考え方とかも日本人とは違うし、やりにくいだろうな……」

一度鈴井に声を掛けようかと思っただが、彼女は決断したようだ。

野手陣に流し打ちと長打警戒のサインを出す。

このサインを見て内野はライト寄りに、外野はフェンス手前まで後退する。

スラップとスクリューを続けて外角に投げる。

3球目は内角でワンバウンドするムービングボールで2—1。

——外を多めに見せて、低めの球も投げた。だから最後はインハイ、制球ミスだけはしないですね！

そのサインを見た直後、洲崎は笑った。

——鈴井先輩は私を信じてこのサインを出してくれた。ならその期待に応えるのが良い投手つてものだ。

投げられた4球目はルイスの顔面目掛けて放たれる。

流星にこれには驚いた様子で、ルイスは避けようとする。

しかしボールはホームベース手前で曲がり始め、鈴井の構えるミットに吸い込まれる

ようにして収まった。

「ストライク、バッターアウト！」

「ナイスピッチ洲崎！」

「美希ちゃんらしいリードですね……びっくりしたあ」

彼女があの場合で要求したのは、インハイへのスラップ。

少しでもコントロールが乱れば、あのまま顔面直撃となっていただろう。

そうならなかったのは、2人の日頃の努力と信頼関係のお陰だ。

「2点は大きいが、最後まで諦めなければ必ずチャンスは来る！ 絶対逆転するぞ！」

『オオー！』

——チャンスなんか来ないさ。

祥雲学院のエース、そして今年の高校野球界が誇る最高投手。

神田翠嵐という投手の壁は、余りにも高くて厚かった。

手始めに茶谷を三振に仕留める。

至誠の頼みの綱である鈴木はヒットを放つが、洲崎と栗原は打ち取られて無得点。

「……マジか」

「やっぱり実力が桁違いですよね……」

「どうでしょうか、これ……」

——4回が終わって無得点どころか、ヒットすら殆ど出ていない。どうする、どうすれば翠嵐から打てるんだ。

「……空ちゃん和伊吹ちゃんは引き続き肩作ってね」

「分かりました！」

「任せろ、出番が来たら流れを引き戻してやる！」

——多分この回が勝負の分かれ目……。ここを無失点に抑えれば、完全には主導権を渡さずにすむはず。

そんな千秋の願いは、今にも打ち砕かれてしまいそうな状況だ。

6番と7番に連続でヒットを許し、8番にはバントで送られてしまう。

1アウトランナー二・三塁の大ピンチで、上位打線を抑えなければならぬのだ。

「灰原監督、どうしますか？」

「……千秋ありがとうな、ずっとあの2人に肩を作らせ続けてくれて」

「一応作らせてただけですが……まさか」

——この場面で投げられるような度胸のある奴は、ウチには2人しかいない。浜矢と

……もう一人。

「神宮行くぞ」

「へっ？ 伊吹先輩じゃあ……」

「アウト2つ取ってくれば良いだけの簡単な仕事だ、神宮なら出来るな？」

「……もちろんですよ！ 完璧な仕事ぶりをお見せしますよ！」

——頼んだぞ……回の途中から投げる事に慣れてるのは、浜矢じゃなくてお前だ。

《選手の交代をお知らせいたします。投手^{ピッチャー}洲寄さんに代わりまして……投手^{ピッチャー}神宮さん
背番号11》

「空ごめんね、こんな場面で譲っちゃって」

「平気平気！ 抑える代わりに、私の投球から目を離さないでよね！」

「言われなくてもそうするつもりだったから安心して……お願い」

「うん！」

洲寄からボールを手渡され、そのままマウンドをならす神宮。

絶体絶命の場面だというのに、彼女はいつも通り笑顔だった。

「この場面で笑えるの、メンタルおかしいだろ……」

「あれが空ちゃんの良いところだからね」

「アイツはこういう場面には慣れてるんだ、良い采配だったぞ千秋」

「あはは……ありがとうございませす」

——何かあつた時の為に肩作らせてただけで、投げさせようとは思つてなかつたんだけどなあ……。

自分の想定してない事態となり褒められはしたが、複雑な表情を浮かべる千秋。

だが監督の言う通り、浜矢は回の途中からの登板経験は殆どない。

反面神宮は中学時代からこういういった場面で投げる事も多く、1番抑えらると判断された。

「余計な事考えないで思い切り腕振つて投げてね、そういう事を考えるのは私^{キャッチャー}達の役目だから」

「分かりました！ 真理の仇を取りますよ！」

一通りの変化球を投げて投球練習を終え、迎えた9番の打席。

まずは大きく曲がるスライダーで空振りを取り、2球目は内に食い込むシュートで見逃し。

——さあ空、良い球を頼むよ。

内角高めに大きく外れるストリートで仰け反らせ、4球目。

外角低めへの緩いカーブでタイムイングを外す。

打者も何とか当てようとするが、バットは空を切り空振り三振。

「神宮……！ 油断するなよ、絶対次も抑えろよ！」

「神宮頼むぞー！」

次は今日ヒットを打っている兎川。

この打席も警戒しなければならぬ相手だ。

——初球打ちをするタイプだから……釣るよ。

鈴井は野手陣に流し打ち警戒のサインを出し、それに合わせたシフトを敷く。

甘めに投げられたスライダー、兎川はそれに手を出してしまった。

本来であればヒットになっていた打球だったが、シフトの影響もあり茶谷の真正面。しっかりと捕球してこのピンチを0で抑え切った。

「空ありがとう、カッコよかったよ」

「ほんと!? えへへ、そこまで褒められると照れるな〜」

「本当にカツコよかった……空と同じチームで良かった」

「へ……わ、私も同じ気持ちだよー！ 真理すきー！」

抱き合つて喜ぶ洲崎と神宮を尻目に、千秋は浜矢に話しかける。

「次の回から投げてもらおうよ、準備は万端？」

「当たり前、てか早く投げたすぎて落ち着かない」

「もうちよつと待っててね」

最大のピンチを乗り切つた至誠だが、まだ神田という強大な相手は疲れを見せていない。
い。

ここからが本当に苦しい勝負の始まりだ。

第27球 群青エース

何とか反撃の兆しを見せたい至誠。

チャンスは作ったものの、結果は無得点に封じ込まれてしまう。

折り返しとなる5回裏のマウンドには、浜矢が上がる。

「伊吹ちゃんどう？ 緊張してる？」

「んな訳ないって！ ずっと投げたかったからさ、とつととアイツと戦いたい！」

「心配しないでも3人目だからね」

「……絶対抑えるぞ」

浜矢が1番最初に対戦するのは鹿瀬。

まずは気持ち良く投げさせるために、ストレートを要求。

低めに決まったその球に、鹿瀬は大きく振り遅れる。

——なんてストレート……神田さんと同じかそれ以上。こんな球を投げられるのは神田さんだけだと思ってた。

2球目は同じコースにツーシームを投げ、これは見送られて1ボール。

——手が出なかった……この人って確か高校から野球始めたんだよね？ 何この成長速度……。

浜矢の投げる球に驚いている鹿瀬だが、そんなの気にも留めず浜矢は投げ続ける。スライダーで空振りを取って、決め球はスライドフォーク。

——ここから曲がりながら落ちる……っ！ こんなの、分かっても打てないって。

鹿瀬はボールの軌道を予測してバットを出すが、そのバットにボールが触れることは無かった。

まず1人目は空振り三振で仕留め、最高のスタートを切る。

次に対戦するのは孤塚。今日はまだノーヒットだ。

最初に投げたのは低めへのカーブだが、これはカットされる。

——体勢が崩れてたし、緩急付ければ簡単に抑えられそう。ストレートいくよ。次は内角高めへのストレートで見逃し。

孤塚はその速さに驚き、バットが出せなかった様子だ。

——凄いノビ……あの時と全然違う。そりやそうだよ、もう2年も経ってるんだから。

2年前の印象が残っており、少し油断していた気持ちは孤塚にあった。

ストレートを見た事によりそれは悪い事だと分かり、気合を入れ直す。

——伊吹ちゃんの決め球はストレートだけじゃないんだよ。

鹿瀬に対して投げたのと同様に、孤塚に対しても決め球にはスライドフォークを選んだ。

孤塚もバットは出せたものの、当てる事は叶わなかった。

「浜矢の投球は安心して見てられるな」

「まさかここまで頼りになる投手になってくれるとは、1年生の頃は思いませんでしたよ」

「そうか? ……ってそうだな、千秋は入学式の日の浜矢の投球を見てなかったのか」

自分の知らない話を2年越しに聞かされ、千秋は驚愕の表情を浮かべる。

「入学式の投球!? なんですかそれ!」

「投球といってもアレだぞ、全力でストレート投げろってだけ」

「そ、それでどうだったんですか?」

「あの頃からストレートは明らかに優れていた、だから私はアイツを投手の道に誘ったんだからな」

あの頃から監督は、浜矢の事をダイヤモンドの原石と評価していた。

でなければ投手なんて大変なポジションをさせないと、そう伝えた。

「ということは、監督の想定内だったんですね」

「……まあ、ここまでの投球が出来るとは思わなかったけど。良くて県で通用するくらいだと考えてたし」

「それが全国の決勝で投げている……最高の掘り出し物ですね！」

その浜矢が一方的にライバルと認定しているのは、今打席に入った神田。姉の朱里そっくりの神主打法で構える。

——神田に対して伊吹ちゃんがどこまで投げられるか、試してみたい。

——敬遠は無しか、なら最初から本気でいくぜ！

今まで決め球として使っていたフォークを、神田に対しては最初に投げる。だが彼女はこの球にも当ててきて、痛烈なファールにする。

——まあ神田なら当ててくると思ってたよ、まだまだいくよ。

2球目は内に切れ込むスライダー。

これは腰を引いて見送られて1ボール。

また同じコースに投げるが、今度はツーシーム。

しかし神田は惑わされず、強く振り抜いて白球を弾き返す。

「ライトー！」

「オーライ！」

荒波が全力疾走で落下地点まで走り、楽々とキャッチ。普通のライトであれば落ちていた打球だ。

「ナイス三凡」

「あんがと、次は打つぞー！」

茶谷から始まった攻撃だが、茶谷はまたしても打ち取られてしまう。

全てがハイレベルな神田の前に、手も足も出ないといった様子だ。

——私が打つしかないよね、伊吹ちゃんも後ろにいるわけだし。

鈴井がバットを神田の方に向けてから構える。

初球のアウトローのストレートの手を出さず1ストライク。

2球目のカーブも見送り、1ボール1ストライク。

——スプリット以外なら振っていく！

次に投げられたのはストレートと同じ軌道のボール。

——ストレート……いや、スプリット！

僅かな違いからスプリットと判断してバットを止める。

鈴井の思った通りの球で、ボールはワンバウンドしてから孤塚のミットに収まった。

——カウントは2—1……ここで打つ。

投げられた内角へのスライダー、そらを鈴井は巧く打ち返す。

打球はショートの頭上を越え、レフトの前にポトリと落ちた。

「ナイバッチです」

「ありがと」

塁上で三好とグータッチを交わす鈴井。

その光景を恨めしそうに見ているのは、ベンチに座る上林。

「さてと……打つてやるぜ！」

出番が回ってきて嬉しいいのか、いつもより大きく素振りをして打席に入る。

それまでは笑顔だったが、神田と相對すると途端に真剣な表情に変わった。

——神田は私の事舐めてるだろうし、ある意味では打ちやすいかも知れない。ストレートが来たら迷わず振る！

そう意気込んでいた浜矢の元に、初球からストレートが放られる。

宣言通り迷わず振り抜いた浜矢。

打球は三遊間を強く破るヒットとなる。

「ナイバッチー」

「よっしやみんな続けー!」

孤塚からボールを受け取った神田は、明らかに苛立っていた。

何度も強くマウンドを踏み、グラブにボールを叩きつけている。

——アイツらに打たれるとはな……舐めすぎていたみたいだな。アイツらはまだマシな実力があつたようだ。

これでも未だ他の部員の事は下に見ている。

だが神田はギアを少し上げ、川端と栗原、岡田から三振を奪う。

監督達は最後の攻撃に向けての会議をする。

「……もう攻撃1回しか残ってないんだが」

「想像していたより苦戦してますね」

「ですが希望はありますよ、鈴木さんと浜矢さんは打てそうです」

「上位に出てもらって、あの2人に繋ぐ……これしかないですね」

具体的な作戦は無いのと同義だが、神田という投手はそれほど隙が無い。鈴木と浜矢に繋げる事が出来なければ終わりだ。

6回裏の攻撃はクリスタ・ルイスから。

バツテリーは初球からストレートで押ししていくが、相手はアメリカ人。

速球には強く浜矢の球でさえ打ち返されてしまう。

——次はバントの構え、1つアウト貰おう。

領いてストライクゾーンに投げ込む。

だがルイスは投げたのと同時に走り出した。

「エンドラン……！」

甘く入ってしまった球を弾き返され、ベースカバーで開いたスペースに打球が飛ばされてエンドラン成功。

——タイム取ろう……いや、平気か。今話しかけたら伊吹ちゃんの集中力が切れる。

マウンド上の浜矢は、一切動揺していなかった。

それどころか早く次の打者を相手に投げたいという、戦闘狂に似たオーラを放っている。

「あと3人で抑えるよー!」

『オー!』

鈴井の声出しにグラウンドだけではなく、ベンチからも声が飛ぶ。

その声を聞いた浜矢は一瞬だけ笑った。

そこからの浜矢の投球は、圧巻の一言だった。

7番はフォークで空振り三振、8番はスライダーで見逃し三振、9番にはストレートで空振り三振を奪った。

「ピンチからの三者連続三振……恐ろしい奴だな」

「ピンチの場面にも動じないメンタルの強さ……あれこそエースですね」

6回終了時点で2対0の接戦。

ヒットはそこそこ出始めているが、未だ得点には結び付いていない。

「この回で同点、いや逆転するぞ! 必ず勝利を掴み取るんだ!」

「神田さんも少し疲れが見え始めている、決めるなら今しかないよ!」

『ハイッ!!』

7回の攻撃は1番からの好打順、荒波が左打席に入る。

——私が出なきやいけないんだ……絶対に。

ガチガチに緊張した様子の荒波は、普段より動きが硬い。

それを近くで見ている孤塚が見落とす筈もなく、それを踏まえた配球を組み立てられる。

初球は外角低めに外れる球を投げさせ、次は内角高め。わざと少し甘いコースに要求して打たせる。

硬い動きではいつも通りのバツテイングが出来ず、キャッチャーフライ。

「1アウト……」

「三好粘れ——」

監督からの声を聞き、三好はどんな球にも手を出す。

明らかなボール球でもカットをして、9球を投げさせる。

——チマチマ当ててきてウザいな、これで三振しろ！

10球目のスプリットも三好は無理やり当てるが、力の無い打球となりサードゴロに終わる。

いよいよあと1人というところまで追い詰められた。

ベンチにも重い空気が流れ出している。

「野球は9回2アウトからだろ！ 諦めるな！」

「……高校なんで7回ですね」

「とにかく！ 最後のアウトが宣告されるまで諦めるな！ それでも決勝まで勝ち上がってきたチームか!?!」

監督がそう言っても、ベンチからはあまり良い反応は返ってこない。

だがそんな空気の中で、表情が違うのが3人いた。

その1人が今打席に立っている上林だ。

初球のカーブは微動だにせず見送る。

「ストライク！」

——三好先輩が粘ってくれたおかげで、球が遅なってきた。これなら……!!

緩急を付けるために投げられたストレート、上林は低めのその球を強く引つ張って打つ。

打球はショートを守る兎川の左。

「抜けろっ！」

兎川が打球に飛びついて、グラブにボールが触れる。

だがそのグラブにボールが収まる事はなく、弾かれてグラウンド内に落ちる。

「くそっ……………」

「紫音ドンマイ、追いつけただけで凄いいよ」

「うん……………」

下を向いて落ち込む兎川を、優しく励ます鹿瀬。

兎川からすれば、今の打球を捕れなかったのは相当悔しかったのだろう。

「上林ナイス！ まだ終わっちゃいないんだ……………」

「佳奈利ちゃんにはどうします？」

「……………アイツを信じる」

茶谷は今日まだノーヒットだ。

それでも監督が信じて送り出したのは、彼女の持つ反骨心の強さを評価しているから。

——前の試合は代打出されるわ、今日は打てないわ…………。これ以上恥を晒したくねえんだよ。

茶谷は猫を被っていたのが嘘のように、神田を睨みつける。

今日打てていない茶谷を挑発するかのよう、初球から内角低めにストレート。

——確か神田サンは良い育ちなんだっけ？ そりゃあ羨ましい……………アンタみたいな

温室育ちから打つのが、一番楽しいんだよ！

バットにボールが当たった感触を感じた瞬間、茶谷は全身でフルスイングをする。振り抜いた直後に体を持っていかれ、バットが地面に叩きつけられる。

しかし白球だけは、前へ前へと進んで行く。

「超えろっ……!!」

「入れー!!」

「いけっ、落ちるな!!」

白球は勢いを落とさず伸びていき——満員のレフトスタンドへ突き刺さった。

「ど、同点……?」

「入った……んだよね?」

「多分……」

誰も事態を把握出来ていない中、スコアボードに2の文字が点灯した。それを見てようやく実感が湧いたのか、ベンチが盛り上がる。

先輩や後輩など関係なく、近くにいた人と手当たり次第にハイタッチ。

中には頭を思い切り叩き合う者もいた。

「ほらよ、4番の私が打ってやったぜ！」

「佳奈利ー！ 最高だよ！ 至誠に来てくれてありがとう!!」

「うわきったね！ 涙拭いてからこい！」

涙を流しながら佐野が茶谷に抱き着く。

それを引き剥がそうとしながらも、茶谷は楽しそうだ。

一方マウンドでは、孤塚が神田と話し合っていた。

「翠嵐……今のは事故だよ、まだ同点だしがんば……」

「私を誰だと思ってるんだ……これくらいで潰れるようなヤワな人間ではない」

「……そうだね、これ以上は打たせないように頑張ろう」

——気のせいかな、一瞬昔の翠嵐に戻ったような……。

祥雲側としても、至誠側としてもまだ気は緩められない。

だが至誠側には大きなチャンスだ、鈴井が打つのだから。

——兎川さんと鹿瀬さんの存在や対左の事を考えると、湧ちゃんは持つて1、2イニング……。伊吹ちゃんも回復量やスタミナを考慮すると、2、3イニングしか持たない。

「……この回で決めるしかないですね」

「鈴井と浜矢に託すしかないな」

鈴井は凄まじい集中力を見せている。

大歓声を浴びているというのに、ただ神田だけを見つめて表情が変わらない。

初球のツーシームを見送ってストライクになっても、何も感じていないような顔をす
る。

——ツーシームは相変わらず曲がり大きいな……けど私が狙ってるのはこれじゃない。
い。

続くカーブも見送って追い込まれた。

だが彼女に焦っている様子は無い。

「鈴井打て！ 私に繋げ！」

——言われなくても分かっているよ……きた、これだ！

3球目は失投気味の曲がりの小さいスプリット。

狙いを澄ましてバットを出し、掬い上げる。

打球は左中間を破る長打コースに。

「よし、ツーベース！」

「これで伊吹ちゃんに回った……！」

——力を借りるぜ、佐久間。

浜矢は今まで使ってこなかった佐久間の黒のバッティンググローブを、ここで初めて装着した。

《6番投手 浜矢さん》

浜矢も鈴井に負けず劣らずの集中力を発揮していた。

打席の後方に立って変化球を見極めやすくし、スプリット等の見分けが難しい球にも対応している。

ボール球のスプリットとスライダーを見極め3球目。内角のカーブは手を出さず1ストライク。

——浜矢にだけは打たれる訳にはいかない。絶対に抑えてやる。

ツーシームを外角に決めて並行カウントに。

どちらが勝ってもおかしくないこの勝負を、会場全体が息を呑んで見守る。

それは千秋も同じで、両手を握り締めて懇願するような顔で試合を見ている。

「伊吹ちゃんお願い、打ってー!」

「……了解」

ベンチからは聴こえてきた千秋の声。

それに小さく呟き返して、浜矢の口角が上がった。

投げられたのは高めのストレート、浜矢は肘を畳んで弾き返す。

打球はセンター前に落ち、誰もがタイムリーではないと確信した。

「鈴木突っ込めー!」

「美希ちゃん走って!」

この打球での生還を諦めていないのが3人居た。

浜矢と千秋の合図を聞く前から三塁を蹴っていた鈴木は、一瞬たりとも走る足を緩めずホームを狙う。

「寄越せ!」

「は、はい!」

神田が中継に入りセンターからの返球を受け取る。

回転してホームの方向を見る。

——お前らにだけは、負けたくないんだよ!

ピッチャーらしい鋭くて低く、そして正確な送球。

ホームで構える孤塚のミットに寸分変わらず収まり、ホームに突っ込んでくる鈴木との

クロスプレーになる。

静寂だった時間は1秒も無かっただろう。

だがプレーをしている彼女達や、それを観ている観客達には何分もの時間に感じた。

「……セーフ、セーフ！」

「つゝゝ！ よっしやあ!!」

「美希ちゃん……!!」

常に冷静で落ち着いている鈴井が、今は感情を爆発させて喜んでいる。

その行動は、この1つのプレーにどれだけの気力を注いでいたかが分かる。

逆転を許してしまった祥雲は、マウンドに集まっている。

「翠嵐……」

「まだ1点だ、ここを抑えればいいんだ」

「そうだね、必ず次は抑えよう！」

「私達も絶対に守りますから！」

お互いの頭を撫でたり背中を優しく叩いたりして、ナインはグラウンドに散っていく。

神田はまだ勝利を諦めていなかった。

——鈴井より凄い打者は至誠にはいないと油断していた。先程の4番もそうだ……私の油断が招いた逆転、私を取り返すんだ。

まだ終われない、神田は栗原を三振に切つてこの回を終える。

諦めていない相手の怖さは至誠側も知っている。

今この場に、一人として気を緩めている者はいない。

第28球 翡翠の輝き

7回裏の攻撃が始まる前に、神田は部員を集めてベンチの前で語り出す。

「すまなかつた、こうなったのは私のミスだ」

「そんな事言わないで下さいよ、ここまで引つ張つてきてくれたのは神田さんですから！」

「そうですよ、必ず優勝しましょう！」

「……そうだな、まだ試合は終わっていない！ この試合の勝者は祥雲だ！」

祥雲もこの回は1番から始まる好打順。

歯を食いしばって緊張を誤魔化している、兔川が構える。

——神田さんは自分のせいだって言ってたけど、そもそも私があのだ打球を捕れてたら試合は終わってたんだ。私が打たないと……！！

内角低めへのストロークを兔川は打ちにくる。

だが打球は後方へのファールとなり1ストライク。

2球目のツーシームはしっかり見送って1ボール。

——意外と見てくるな、冷静さは欠いてないってことね。

次に投げられたのはスライドフォーク。

この球の性質上、低めにしか投げられないのは周知の事実。

兎川もそれを狙って掬い上げて打つ。

「ショート！」

「はい！」

上林が後ろ向きにダッシュし、最後は飛び込んでキャッチ。

「ごめん……」

「今のは運が悪かっただから大丈夫だよ」

「うん……」

兎川にはそう言ったものの、自身に掛かるプレッシャーの重さは増した。

険しい表情を見るに、彼女もかなり緊張している。

——兎川も鹿瀬もまだ2年生だもんね、こういう場面では力を発揮できないか。……

遠慮は要らないよ。

鈴井のサインに頷いて浜矢はツーシームを投げる。

内角を挟る良い球でストライク。

——引つ張り警戒で外野は少し下がってもらおう。

鈴井のサインに従って野手はシフトを敷く。

そして投げられた2球目は、同じコースへのスライダ―。

インコースが得意な鹿瀬はそれをしつかり弾き返すが、シフトに掛かっている。

「ボール1つ!」

「はい! 美央頼んだよ」

「アウト!」

川端から栗原にボールが送られ、2アウト。

10年ぶりの全国制覇まであとアウト1つ。

《3番捕手 キャッチャー 孤塚さん》

孤塚もまだ今日はノーヒットの選手、1番油断をしてはいけない相手。

バッテリーは油断せず、ストレートとスライドフォークであっさり追い込む。

1球ボールを挟んでからの4球目は、ツーシーム。

外角低めにコントロールされた完璧な球。

——試合前はあんな事言っただけ、やっぱり私もこのメンバーと……翠嵐と一緒に頂

点に立ちたいんだ！

当てるだけのバッティングとなったが、良い具合に反発してライトに強い打球が飛ぶ。

孤塚は一塁に到達しても止まらず、二塁に突っ込む。

「荒波二塁！」

「はい！」

荒波がクツションボールを上手く処理し、二塁に送球する。

土埃が舞う二塁上で、塁審が下した判定は。

「セーフ！」

「よしっ……い！」

——任せたよ、翠嵐……！

瞳にうつすらと涙を浮かべながら、神田の方へ拳を突き出す孤塚。

野球は最終回2アウトから、それは祥雲にも言える事だった。

《4番投手 ピッチャー 神田さん》

大歓声の中ゆつくりと歩いて打席に入る、高校最高の選手。

祥雲学院の誇りと彼女自身のプライド、そして勝利への執着を背負ってバットを構える。

ここで鈴井がタイムを取り、浜矢の元へ向かう。

そして浜矢の右手を優しく握り言った。

「好きだよ……伊吹ちゃんの投球」

「……私も鈴井のキャッチング好きだよ」

「だからこそ負けたくない、私の大好きな投手が負ける姿は見たくない」

「それも同じ気持ち！」

一瞬だけ強く浜矢の手を握り締め、パツと離す。

「だから私が一番好きな、伊吹ちゃんの最高の球で締めた」

「そう言うと思ったよ……絶対勝つぞ」

「私を信じて投げてきてね」

「鈴井を信じなかったことなんて、今までないよ」

マウンドの上で2人は笑い合う。

笑いが収まってから、言葉も無く頷き合ってそれぞれのポジションに戻る。

——名門祥雲の誇り……確かにそれもあるが、それ以上に私は自己的な感情で勝ちた

いと思っっている。

初球は内角低めへのスライドフォークだが、これは強く引つ張られて一塁線へのファールとなる。

——打球はつや……少し後退しといった方がいいかな。

栗原は反応する事もできず、打球が顔の横を通った。

恐ろしい程の打球速度に怯えてはいるが、それへの対策を自分で考えている。

——怖いけど少し力んでる。神田だって人の子なんだ、この場面では緊張くらいするよね。

2球目は外角高めへのスライダー。

これも当てられるが痛烈なファールとなり追い込んだ。

——いつもなら打てるのに、まさか私が力んでいる？ まあいい……次で決める。

神田は一度バッターボックスから出て間を取り、息を一つ吐いて打席に戻る。

先程までは少しだけ焦りの色が見えていたが、今はそんな物は微塵も感じさせない。

——さあ伊吹ちゃん、私が一番好きな球を頼むよ。

——神田……お前は今まで戦った中でも一番苦戦した相手だったよ。確かに私一人

の力だったら絶対勝てなかった。でも私には仲間が……千秋と鈴井大好きな人がいるんだ！

最後の勝負球として選ばれたのは、浜矢の代名詞とも言えるインハイへのストレー
ト。

ノビのあるこの球は空気を切り裂き、ただ真つ直ぐに伸びていく。

——ストレートだと、舐めるな！ 私は……負けない！

だが神田は彼女達を一步上回った。

狙っていたのかもしれない、そう感じさせる綺麗なスイングで白球を捉える。

白球は雲一つない夏の青空に高く舞い上がり、白い放物線を描く。

ゆっくり、だが確実にその飛距離は伸びていく。

センターを守る岡田は地面を駆けて打球を追う。

誰もが白球の行方を見届けて無言になる。

静寂が支配するこの球場で、聞こえるのは足音だけ。

そしてその足音の1つ、岡田の足音が消えた。

立ち止まってグラブを高く掲げ、そのグラブの中に——白球が捕らえられた。

「アウト！ ゲームセット！」

「……………勝った？」

「伊吹ちゃん！ やったんだよ私達！」

アウトコールが響いても、実感の湧いていない浜矢は鈴井に促されスコアボードに目をやる。

そこには確かに3対2と記されていた。

「…………勝ったんだー!! 優勝だー！」

「ハマせんぱーい！ ナイスピッチでした！」

「これウイニングボールです！」

「ちよ、投げんなよー！」

浜矢が叫んだのと同時に背後から7人、そしてベンチから7人が抱き着きに来る。

誰が誰に抱き着いているのか分からないくらい揉みくちやになりながら、今年の勝者は優勝を喜んだ。

ベンチから出てこない千秋、監督、そして小林。

この3人も勝利の余韻に浸っている。

「やっぱり最高だよ、2人とも……!」

「ほら千秋、その2人が待ってるぞ」

「……はい!」

千秋が駆け出して行ったのはグラウンド。

そこでは鈴井と浜矢が両手を広げて待っていた。

千秋が近くまで来たのを確認して、3人は涙を流しながら抱き合った。

未だベンチに残っている監督は泣きそうで、それでいて嬉しそうな顔をしていた。

「……10年前、ベンチからはこう見えていたんだなあ」

「灰原監督、優勝おめでとうございます! ……顧問になれて良かったです」

「いつも生徒達に優しく接してくれてありがとうございます、私達も行きましょう」

「はい」

監督と小林がベンチから歩き出し、歓喜の輪の元へと向かう。

その一方で敗者となつてしまった神田は、独りスコアボードを眺めていた。

——打ち損じたか……。最後の最後で情けないな、私は。

「翠嵐、惜しかったね……」

「……………だが、楽しかった」

「えっ?」

「さあ行こう、整列だ」

そうやって移動する神田だったが、孤塚の目にはしつかり映っていた。微笑んでいる神田の横顔が。

一列に並んでお互いの健闘を称え合う。

浜矢は神田に手を差し出すが、2年前とは違い手を払われない。

「……………良い球だった、悪かったな今まで」

「えっ……………その、ありがとう?」

「鈴井も素晴らしいバッティングだったぞ、それに真理も……………暫く見ない間に強くなつたな」

「神田さん……………! ありがとうございます!」

今までの印象とは全く違う、優しい顔と声色で話す神田に、浜矢と鈴井は困惑していた。

一番長く、一緒にいた孤塚でさえも現実か疑っている。

「高校最後の試合の相手が、至誠で良かった。お前達に負けるのであれば納得できる」
「……へへっ！ 私達の実力に気付くのが少し遅かったんじゃないの？」

「それは本当に反省している……良い試合をありがとう浜矢、鈴井、そして真理」
「どういたしまして」

初対面の印象は最悪だった彼女達だったが、今この瞬間は笑顔で話している。

これも野球というスポーツのなせる技なのかもしれない。

「敗者はとつとと去るぞ……行こう、志黄」

「うん……へっ？ 翠嵐いま……」

「聞こえなかったのか？ 志黄」

恥ずかしそうに頬を赤らめながら、神田は孤塚の名前を呼ぶ。

一体何年ぶりの名前呼びだったのか、孤塚は負けた時には流さなかった涙を流す。

「……遅いよもう！ 私ずつと待ってたんだよ……？」

「志黄には今まで苦労と心配をかけてしまったな、本当に悪かったと思っている」

「ううん、良いんだよ。また翠嵐と一緒に居られるなら！」

「何年も待たせてしまったな。これからはもう離れないからな、志黄」

ずつとすれ違い続けていた2人が、今日ついに向き合えた。

「……あの2人、良かったな」

「そうだね、心はずつと離れ離れだったんだもんね」

「凄く幸せそうですね」

神田と孤塚は、誰よりも幸せそうに微笑み合っていた。その姿を見た3人も嬉しそう
だ。

だが祥雲ベンチに戻ると、空気は一変する。

優勝確実と言われた祥雲が決勝で敗退、しかも1点差。

誰しもが悔しさに顔を滲ませている中で、神田はキャプテンとして皆の前に立つ。

「キャプテン、私が……！ 私のせい……！」

「誰も兎川のせいだなんて言っている奴はいない、ずっとチームを支えてくれていた
じゃないか」

「でも、捕れなくて……、打てなくて！」

「鹿瀬も言っていたが、あの打球に追い付けたただけで凄いいんだ。……それでも納得い
かないのであれば、来年リベンジしよう」

兎川が驚いて顔を上げると、優しくも凛々しい顔をした神田が視界に映った。

彼女はベンチ入りした部員と、応援席に座る下級生に向かって語る。

「こんな場所で負けて悔しいだろう？　ならその気持ちをバネに、来年優勝旗を奪い返してやれ！　祥雲の生徒だ……それくらいは出来るだろう？」

『ハイ！』

——翠嵐……変わったね。いや、戻ったというのが正しいかな。

”それくらい出来る”この言葉に神田は悩まされ続けていた。

その呪いの言葉を、今は明るい意味で使っている。

間違いなく過去を振り切り、成長した証だ。

「という訳だ、キャプテンは頼んだぞ兎川」

「えっ!?　な、なんで私が……」

「一番悔しがっていたからな、それ程感情を剥き出しにするキャプテンの方が面白い。それに補佐として鹿瀬もいるからな」

キャプテンに指名され、幼馴染の名前も出されて断れる度胸は兎川には無い。

「……やりますよ！　来年こそ絶対優勝しますよー!」

「祥雲を頼んだぞ……紫音」

神田がその名を呼んだ次の瞬間、祥雲ベンチが一瞬にして静かになる。

——な、何か変な事を言ってしまったか？

「か、神田さんに名前で呼ばれるなんてずるい！ 私の事も名前で呼んでください！」

「え……し、白奈？」

「ありがとうございます！」

「抜け駆けは卑怯だよ、私も！」

それに便乗するように他の部員達も名乗り出て、一気に会話が混雑する。

神田はこの事態に慌てながらも、楽しそうに部員達の名前を呼んでいく。

「ふう……疲れた」

「ねえ翠嵐、私の名前は？」

「もう何回も……いや、今までずっと我慢させていたんだもんな。志黄」

「ふふ、ありがとう翠嵐」

——やっぱり翠嵐から呼ばれるのが一番好きだな。

勝者である至誠も、敗者である祥雲も。

どちらも幸せそうに笑いながら試合を終えた。

この不思議な光景は、この先何年も語り継がれる事になる。

第29球 次のステージへ

「皆のお陰で全国制覇を果たせた！ 今日は無礼講だ、乾杯！」

『乾杯！』

全国制覇を記念して、校内にある通称パーティー部屋でお祝い。

小林や千秋の作った大量の料理や、買い込んだ飲み物等盛りだくさん。

「いやー、まさか勝てるとは」

「MVPは茶谷かな」

「空も凄かったですよ」

「いつでも鈴木先輩が1番です！」

祥雲戦のMVPは誰だったのか、自分が思ったMVPを主張し合う部員達。

「……けど、繋いだのは真希ちゃん、だよね……」

「危なかったけどなあ、少しタイミングずれとったらアウトやったし」

「それでも……かっこよかったよ」

「ほんま？ ありがとう」

「決めたのは茶谷と浜矢だが、最後の最後で繋いだのは上林。

彼女が打たなければあのまま試合は終わっていたのだ。

「まあ誰が一番とかそんなのはいいんだ！ 全員が活躍したからこそ優勝できた……全員が MVP だ！」

「いえーい！」

「私そんな活躍してないけど……」

「いや夏輝初心者じゃん、来年からが本番でしょ」

楽しく話しながら食べ進めていく彼女達。

流石は野球部といったところか、山盛りの料理がどんどんと無くなっていく。

「まあ来年の話も出たところで本題な、来年のキャプテン決めだ」

「現キャプテンの鈴井さんから見て、推薦したい方はいますか？」

「私ですか？ ……悩みますね」

「それ本気で言ってる？ キャプテン出来そうなのなんてだいぶ絞られてるぞ……」

浜矢の発言に、2年生の一部……神宮、岡田、荒波辺りが反論しだす。

「私達の何が不満だっていうんですか!?!」

「いやだってさあ……その3人は引つ張っていくより、後輩と仲良くはしやぎたい夕

「イブでしょ」

「それはもちろん！」

「じゃああんまキャプテン向いてない気がするわ」

キャプテンというのは周りを見渡すもの、はしやぎがちな3人には向いてないと浜矢は言う。

「三好と洲崎もあんまキャプテンって感じしないよな」

「そもそも私は自分の事で精一杯です」

「同じく……エースとキャプテンの両立は難しそうです」

「となると灯か彗になる訳だけど……まあ私は彗を推薦するよ」

——というか元からそのつもりだったし。

鈴井は初めから伊藤を推薦する予定だった。

控え捕手から正捕手に抜擢され、三好と同様自分の事で手一杯な筈の彼女だが。

「まさか捕手キャプテンの系譜か？ 別にそれは継承しないでいいぞ」

「そういうつもりじゃないですよ……単に、彗に私の後を継いでほしいだけです」

「えっ……」

「うわっ」

鈴井の発言に驚きと喜びが混じった顔をする伊藤に対し、その横で死んだ目をしてい
る上林と三好。

それを見て少し引く荒波など、情報が渋滞を起こしていた。

「本人が良いって言えばの話ですけどね」

「……憧れの先輩に指名されて、断る後輩なんていないと思いますよ」

「なら任せたよ、正捕手とキャプテン」

「はい！」

鈴井からキャプテンマークを受け取り、決意に満ち溢れた表情を浮かべる彼女。

来年の至誠も心配はいらないかも知れない。

「まあまだ鈴井の仕事は終わらないけどな、U-18と国体あるし」

「そうだU-18！ メンバーとかどうなるんだらうな」

「私達は確定じゃない？ 全国制覇バッテリーだし」

「そこはまあ追々、な？」

この時の監督が妙に笑顔だった理由を、彼女達は後日知ることになる。

楽しい時間はすぐに過ぎ去るもので、もう終焉ムード。

全員で片付けをしている最中、鈴井が伊藤の方に目をやる。

——やっぱりまだ浮かない顔してるな……よし。

「曄、はいこれ」

「え？ これって……ノート？」

「私が配球で気を付けてる事とか、有力選手のデータとか纏めてあるから。まあ1、2年のデータは少ないけど……」

「……ありがとうございます！ これを参考に頑張ります！」

——参考に、か。そう言ってくれて良かった。

全部真似をするのではなく、あくまで参考程度に留めておき自分の考えをベースにプレーをする。

そうでなければ伊藤の良さは出せない、鈴木はそう思っていた。

「美希ちゃん、ありがとうね？ 本当は私がデータ渡そうと思ってたけど……同じポジションの方がいいよね」

「別に美月ちゃんのも渡していいと思うけどね……来年も楽しみだね」

「そうだね……真理ちゃんと曄ちゃんのバッテリーに、一切メンツが変わらない内野陣！ これは高いアドバンテージだよ」

至誠の強みは新チームの顔ぶれの変化の無さ。

そもそも選手で卒業するのが2人だけという、他校ではあり得ないような少なさだ。

「私達も最後まで頑張らないとね」

「そうだよ！ 2人はまだスカウトへのアピールの舞台もあるし」

「U—18？ あんな事言った手前なんだけど、選ばれるか不安だな」

「優勝バッテリーだよ？ それに成績だって文句無し……絶対選ばれるよ！」

千秋は必ず2人が選ばれると確信していた。

鈴井は全国での打率・476、2本塁打、7打点。

浜矢は21イニングを投げ防御率1.33、WHIP0.95、奪三振率9.86。

両者共に全国でも好成績を残した選手だからだ。

「監督って誰になるんだろうね？ いつ決まるんだっけ」

「もうそろそろじゃないかな」

U—18の監督は今年4月には既に決まっていた。

しかしここになってその監督が辞退を言い出し、急遽代わりの監督を見つける事に。

未だその代わりの監督は発表されていない。

「鈴井先輩！」

「彗どうしたの？」

「いえ……ただ、キャプテンとしてどういう事に気を付けていたのか聞きたくて」

伊藤の質問に鈴井は一瞬悩むそぶりを見せ、話し出す。

「まず最初に言っておくよ、キャプテンに正解はないからね。たとえ頼りないキャプテンであっても、その結果チームが纏まれば成功だから」

「……あのメンバーを引つ張っていける自信が無いんですよね」

「それは私にだって無いよ、私はどちらかというプレーで示すタイプだったと思うから」

「分かるよ、苦しい時にいつも打ってくれてたもん」

どちらかと言えば鈴井も引つ張っていくタイプではない。

そういうのは浜矢の方が得意だ。

それでも鈴井が立派にキャプテンを務め上げられたのは、その実力の高さにある。

チームが苦しんでいる時に颯爽と打つ。

悪い流れになりそうだと感じれば、なるべく積極的に声を掛ける。

その2点がチームを団結させてきた。

「彗は真面目だから色々悩むことはあるだろうけど、そういう時こそ幼馴染の出番じゃ

ない?」

「灯ですか?」

「あの子は元気だけど、意外と周りを見てるし冷静だから……助けてもらいなよ」

「灯に頼る……分かりました、ありがとうございます」

話を聞いた伊藤は、清々しい顔で石川へ駆け寄る。

それを見る千秋と鈴井は優しい目をしていた。

「秋は難しいかもだけど、夏はいけそうだねえ」

「自分で言うのも何だけど、彗に求められているハードルは上がつてると思うしね」

「前任が美希ちゃんだからね……けど、彗ちゃんなら上手くやつてくれるよ」

「だね」

至誠の明るい未来を想像する2人。

そこには自分達はもう居ないが、後輩達ならきつと結果を出してくれるだろうと信じている。

U—18編

第30球 英傑集合

激闘の決勝戦から2日が経った。

代わりとなる監督の発表と、世界と戦うメンバー18人の発表。

会場には大勢の記者が集まり、発表を今か今かと待ち望んでいる。

《お待たせ致しました、只今よりBFAU18選手権のメンバー発表を開始いたします》

まずは本来の監督の代行者の発表。

その人が姿を見せた途端、会場は湧いた。

「今年度のU18監督を務めさせて頂きます、至誠高校の灰原です。金メダルを目指して選手達を指導していきます」

優勝校である至誠の監督ならば、誰も文句は言うまい。その考えで指名されたのが彼女だ。

「では選手を発表します。まずは投手から……浜矢伊吹、神田翠嵐、大鷲千晴、佐久間玲、

海崎柊、奥川沙英、山田真由、渡邊董」

各校のエースの名前が続々と呼ばれていく。

8名の内3名は全国ベスト4に入った高校のエース、知名度の高さは抜群だ。

「続いて捕手は鈴井美希と、孤塚志黄」

決勝で熱い試合を作り出した捕手である、鈴井と孤塚。彼女達以外に勝てる捕手は居ないだろう。

「次に内野手……野元彩香、坂入椎奈、内川優奈、宮崎瑠衣、内山美香、斑鳩雪風」

主に強打を誇る大型内野手が選ばれた。

守備力に不安は残るが、打撃の爆発力はある筈だ。

「最後に外野手は飛鷹涼風、雉鳥時雨」

外野はまさかのディーバの2人かつ、2年生である雉鳥の選出。

しかし今年度は外野手の有力選手が少なく、妥当な判断と言える。

「以上18名で世界の頂点を目指して戦います」

会見が終わってすぐに各メディアから記事になる。

それから数日後、選出された18人は東京都内のグラウンドに集合した。

「おお……凄いいメンツだな」

「流石は黄金世代って感じだね。けど監督、選出校偏りすぎじゃないですか？」

「それに関しては選考委員の方も、有力選手が特定の高校に集まり過ぎてるって言うってぞで」

特にデーバとか、と監督は付け足す。

その言葉に納得した2人は、それ以上この話題を口にするには無かった。

「外野2人でいいんですか？」

「ああ、それはな……」

「私が外野を守るんだよ」

「お前は……佐久間！」

監督と浜矢の会話に混じってきたのは佐久間だった。

「プロや大学からスカウトが複数来たが、評価されたのは野手として……もう投手はやめたんだ」

「マジかよ……ロマンあつたのになあ」

「プロはロマンだけでやれる場所ではないからな」

——どうしよう、言いくいがすれ違いがあっても嫌だし言うしかないか。

「佐久間は基本DHでの起用だぞ……」

「な、なんでですか!？」

「守備が不安すぎるからだよ、神田が登板の時は任せるかもだけど」

「ということは普段の外野って……」

浜矢、鈴井、佐久間の3人が神田の方を見る。

そしてもう一度監督の方を見ると、彼女は頷いた。

「まあ神田守備上手いもんな……」

「それに打撃も良いし」

「……アイツなら文句は無いが、悔しいな」

「ならそれをモチベに練習頑張ってくれ」

4人で話していると集合時間になった。

監督は選手全員を集めて挨拶をする。

「今年度のU18の監督、至誠の灰原だ。今年は過去数年で見ても最高のメンバーが揃っていると思う、必ず優勝しよう」

『はいー!』

夏の大会を終えた3年生が中心ということで、荒波を乗り越えてきた顔付きをしている。

だが集まって楽しそうに話す様子は、高校生なのだ実感させてくれる。

「いやー……まさか私が選ばれるとは」

「そう？　時雨活躍してたじゃん」

「ですけどまだ2年ですよ？　3年に良い外野いないんですか？」

「3年がダメというか、時雨が良すぎただけだからね」

雉鳥はまだ自分が選考されたことを不思議に思っている。

有力選手が少ないとはいえ、2年の自分よりは良い動きをするのではないかと感じているからだ。

「志黄はどんな投手をリードするのが得意なの？」

「私は本格派と速球派かな、美希は？」

「私も同じかも……軟投派とかも受けられるけど」

「そつちには真理がいるもんね」

孤塚と鈴井は捕手トークを繰り広げていた。

受けていて楽しい投手の特徴は何か、苦手なタイプはどんな選手か等々。

「浜矢に鈴井、これを受け取ってくれ」

「これなに？ ……マツサージローション？」

「今までの詫びだ」

神田が頭を下げながらそう言うと、浜矢は慌てる。

「別に平気だよ！ ていうかその事なら解決したじゃん」

「私の気持ちも晴れないんだ、だから貰ってくれ。それに浜矢の家庭事情は知っている……こういう類の物を使ったことがないだろう？ そのせいでライバルが潰れたら困るからな」

「……そういう事なら」

神田があまりにも必死に頼み込んでいるのに加え、ライバルと認定して貰えた喜びが勝った。

鈴井にも同じものが手渡され、2人目という事でこちらは断らなかつた。

「真理にも渡しておいてくれ」

「オーケー……ん？ なんか私らのと違うね？」

「グラブのメンテナンス用品だ、真理は手入れに力を入れているからな」

「そーいやグラブとか念入りに磨いてたっけ……じゃあ渡しとくわ」

洲寄の分の紙袋を受け取った。

この3人の間に和やかな空気が流れている瞬間を、孤塚は微笑みながら眺めていた。

「そうだ集合、キャプテン発表するぞ」

「誰になるんだろうな？」

「色々考えたんだが、飛鷹に頼みたいと思う」

「私ですか？ ……黄金世代の総てを束ねるのは、自分の役目になる定めだったか……」

——相変わらずの厨二病だなあ……。

飛鷹のこれを知っているメンバーは苦笑いを浮かべていたり、何も反応をしなかったり。

だが初対面のメンバーは驚きの表情だ。

「我に宿命を与えしそのワケは？」

「この世代キャラ濃いし、だったら一番濃いやつが良いかなと……飛鷹キャプテンの経験あるし」

「涼風って意外とまともですしね」

大鷲も監督の意見には賛成の意を示した。

キャラが濃くて纏めるのが難しいのであれば、いつその事一番キャラが濃い彼女を

キャプテンにする。

これでキャプテンの難易度は大きく下がっただろう。

「じゃあ練習するぞ！ ユニフォームに着替えてグラウンド集合な」

「はーい！」

「私が1番乗りだー！」

「フライングは卑怯だぞー！」

——うーん、若いと元気だなあ。

ロッカールームに駆けていく若者達を見て、監督は自分も鍛え直そうと決意した。

「おお……背番号18！ エースの証！」

「納得いかないんだが？ 成績なら私の方が良いんだぞ」

「私も気になって監督に聞いたけど、最後まで悩んだからどっちもエース名乗っていいって」

「左右のエースってことで解決だな」

監督は最後の最後まで18番をどちらにするか悩んでいた。

結果としては浜矢に譲ったが、正直どちらがエースでも良いとのこと。

各々が背ネーム入りの、自分だけのユニフォームを身につけてグラウンドに集まった。

「打者は私が指導するから集合、投手と捕手は順番に投げ込みな」

『はい！』

投手はブルペンに向かい、監督は野手陣の指導を始める。

木製バットを手に持って野手陣の前に立つ。

「まずU18では木製バットを使用する、でだ！ 木製の芯つてどこだと思う？」

「……小さいって事しか知らないです」

「だろ？ だから耳元にバット近づけて……上から指で叩いていけ」

監督の指示通り、バットを指で軽く叩いていく。

すると違和感に気付いたのが何人かいた。

「ここだけ音が違いますね……低い？」

「そう、そこが芯だ」

「ちっさ！ こんだけのスポットで打たないといけないんですか？」

「そうぞー、因みに芯外すと緩い変化球でもバット折れるからな」

確かにそういう光景を見た事があると、選手達は口々に言う。

芯を外せばスローカーブやチェンジアップのような、緩い球でもバットは折れてしま
う。

「だからまずはトスバツティングとかティーバツティングから！ ある程度芯に当てる
感覚を掴んでからマシとかフリーな！ てことでペア作ってトスバツティング！」

「……涼風」

「フツ、当然だ我が盟友！」

斑鳩と飛鷹が早々にペアを組んでしまい、周囲を不安そうに見渡す雉鳥。

——知らない人ばかりだし、全員先輩なんすけど……。やりづらいなあ。

「雉鳥さんだっけ？」

「はい？ えーつと……内川さんですよね」

「うん、よければ組まん？ 私も相方おらんくて」

「私でよければお願いします！」

2年生という事で遠慮していた雉鳥と、野手唯一の公立校出身という事で引け目を感じ
ていた内川。

この2人には似たような感情があった。

「ここが芯やけん……こうか！ あれ、意外とむずいな」

「少し下叩いてた気がしますよ」

「振った時ん感覚も少し違うなあ」

初めて手にする木製バットに苦戦しながらも、黙々と練習を続けていく野手陣。

その頃ブルペンでは、投手陣の投げ込みが行われていた。

「ねえねえ、伊吹のフォークってどうやって投げてるの？」

「こう握ってストリートと同じ腕の振りで、抜くように投げる感じ」

「こんな握りだったんだ……私もなんか欲しいな」

「オリジナルの変化球？ 大鷲ならチェンジアップかね」

大鷲といえばチェンジアップ。そのイメージがある浜矢は、チェンジアップのオリジナル変化球を提案した。

本人もそれに乗り気で、大会前までには完成させようと意気込んでいる。

「よし、んじゃ私が一番最初に投げるぞ」

「私も投げるぞ、志黄よろしく」

浜矢は鈴井と、神田は孤塚と組んで投げ込む。

まずはストリートを中心に20球をバラけさせて投げる。

続いて変化球を全球種満遍なく投げ、2人は休憩して次の投手に場所を明け渡す予定だったが。

「いやー、やっぱ鈴木は投げやすいな」

「は？ 志黄の方が投げやすいのだから？」

「はあ〜？ 私の鈴井のが凄いいけど!？」

「なら志黄と組んでみる！ その発言を撤回させてやる！」

自分と組んでいる捕手の方が凄いいとお互い譲らず、何故か捕手を交代して2人がマウンドを譲らない。

「順番あるから1球だけだよ」

「十分！ 孤塚の実力とやらを見極めてやるぜ！」

「私の球を完璧に捕ってくれるのは志黄だけだ……」

お互い自分の相方が1番と信じて疑わず、やれやれと言った様子で渾身の1球を投げる。

神田の投げたワンバンするスプリットを鈴木は受け止め、浜矢の投げた高めのストリートを孤塚はフレーミングをしながら捕球する。

「……ま、まあ凄いいんじゃない？ 鈴木よりはアレだけど……」

「そ、そうだな！ 志黄には及ばないが鈴井も投げやすいと思うぞ？」

——意外と投げやすかったな……。

明らかに動揺して、目を合わせずに話す2人を呆れた顔で見つめる鈴井。

それに対してなぜか笑顔でいる孤塚。

「なんでそんな嬉しそうなの？」

「だって翠嵐が私の事信じてくれてるんだなって、ここ数年はこういう事言われなかったし……」

「なるほどね……神田！ 志黄のこと大事にしないとぶつ飛ばすからね」

「えっ、お、おう……？ 当然だが？」

あまりにも嬉しそうにしている孤塚を見て、ずっと孤塚に寂しい思いをさせていた神田に対する苛立ちが湧いてきたようだ。

「ほら2人ともどいて、次の子の球受けるから」

「はいよー、ごめんねずっと投げてて」

「いえ……参考になりました」

続いては海崎が孤塚と、大鷲が鈴井と組んで投げ込みを開始する。

初めて組む相手に最初は4人とも戸惑っていたが、終盤になるにつれて噛み合ってい

た。

今まで組んだ事のない相手、慣れない木製バット。

自国の選手とはまた違う考え方の外国チームとの対戦。

それらを乗り越えて優勝するのは、一体どの国になるのか。

第31球 魔球完成！

大学選抜との壮行試合は4対6で敗れたものの、神田と浜矢はそれぞれ1イニングを無失点。

打者でも斑鳩にホームランが出て、大会に向けての大きな収穫もあった。

大会本番まで残り1週間となったこの日、グラウンドでは実戦形式のバッティングが行われていた。

「さあ佐久間！ 打てるもんなら打ってみろ！」

「当然打つてやる！ 決勝戦の借りを返させてもらおう！」

佐久間と浜矢の2人が真っ先に対決を始めた。

決勝戦でもホームランを打った相手同士の対決に、カメラマンが大勢集まる。

——佐久間にストレートは禁物、初球からフォークでいくよ。

鈴井のサインに頷いた浜矢は、内角低めにコントロールされたフォークを投げる。

これにはバットを出さず見送ったが、判定はストライク。

2球目はカーブがすっぽ抜けてボールとなり3球目。

外角にやや浮いたスライダーを捉えられ右中間。

しかしこれには雉鳥が追いつきライトフライとなる。

「打てたと思っただがな」

「危なかった……流石は佐久間だな！」

「まあお前に負けてからは、ずっと打撃練習をしていたからな」

——打撃よりも守備の方が問題じゃ……。

鈴井はそう思ったが口を閉ざした。

それは佐久間本人も今は分かっているだろうから、自分が口を出すことではないと考えたから。

「にしてもあの2年は上手いな」

「雉鳥良いよなー、まあウチの外野のが上手いけどな！ 打撃はともかく……」

「お前んとこの外野固すぎんだよ、1人寄せ」

「嫌に決まってるじゃん」

雉鳥は2年生で唯一選ばれ選手、攻守に渡って他の3年生よりも活躍出来ると信頼されて召集された。

その期待が嬉しいのか、練習にも試合にも誰よりも気合が入っている様子だ。

「私らも負けてらんないぞ！ もっと対戦しようぜ」

「当然！ 今度はホームラン打たせてもらおうぞ」

「言ったなー!? じゃあ私は三振奪う！」

佐久間と浜矢がまた対決を始めている最中、ブルペンでは大鷲が孤塚のミットに向かって投げ込んでいた。

チェンジアップのような軌道をした妙な球。

大鷲本人は納得がいかないようで、何度も手中のボールを見ては唸っている。

「うむむ……なんか違う」

「握りを少し変えてみたら？ 指の位置をずらすとか、間隔を変えるとか」

「色々試してるけどダメなんだよー、どうしよう?」

「どうしようって聞かれても……そもそも何投げてるか分からないし」

チェンジアップ系統の新球種を作る、そうとしか聞かされていない孤塚はアドバイスのしようが無かった。

——ただ受けてるだけでは埒が明かないよね。

孤塚は立ち上がって大鷲の近くに行く。

そして今まで試した握りを見せてもらう。

「フオークみたいな握りだよ、変化もそんな感じだし……」

「んー……フオークとの差別化が課題っぽい」

「なら薬指もボールに添えてみたら？ 今までの握りを見た感じ、薬指は変えてないみたいだし」

この提案に目を輝かせた彼女は、すぐに孤塚を座らせる。

そしてまた何度かボールを見つめてじっくりくる握りを探して、良い握りが出来たら構える。

「じゃあいくよ……スプリットチェンジ！」

——スプリットチェンジ……どんな軌道？ スプリットみたいなチェンジアップかな。とにかく捕る！」

スプリットのように鋭く沈むが、ブレーキは効いている。

この変化球を孤塚はミットを流されながらも捕球した。

「どう!?! めっちゃいい球だった気がするんだけど!」

「すごい……来ると思っても中々来なかった、球速は速いのに変な感じ」

「これなら打たれないかな?」

「かなり打ちにくいと思うよ、このままもつと精度上げていこう」

褒められて上機嫌な大鷲は、このまま30分近くスプリットチェンジを投げ込んだ。練習が終わる頃にはある程度の制球が付けられるようになり、本番への期待が膨らむ。

片付けも終えて、本番前最後のミーティングが行われる。

「一応BFAのルールを説明するな。そもそもこれはU-18ワールドカップの出場権を争う大会だ」

「確か3位までが出場権を得られるんですよ?」

「その通り、だが狙うは優勝ただ1つだ! いいな!?!」

『オオツ!!』

オープンングラウンド3戦、スーパーラウンド2戦、そして決勝の計6戦。

1敗でもすれば優勝の可能性は危うくなる、可能であれば全戦全勝を目指したい。

「それと今年から球数制限が出来たから改めてそれも説明な、最大は105球! ここに達したら中4日必要になると、50球に達したら中1日って事をコーチ陣も頭に入れておいて下さい」

それに加えて、球数に関わらず4連投は認められない。

プロと同じ9回制になった影響がどう出てくるのか、これが見所だろう。

「初戦の先発はエースに任せようと思ったけど、香港相手だしな……」

「正直レベルの差がかなりありますからね、韓国戦に向けて温存した方がいいのでは？」

「私もそう考えているので……海崎、頼めるか？」

「えっ、私ですか？」

まさか自分が指名されるとは思っていなかった海崎は、驚いた顔で監督の方を見る。

間違いではないと監督が改めて伝える。

「……分かりました、先発します」

「緊張もあると思うし、球数の上限前に降ろすかも知れないからそこはよろしくな」

「はい」

「それに色んな選手使いたいしな」

たったの18人、投手だけで言えば8人。

それでも起用に偏りがある場合も多く、監督はそれを避けたいと考えている。

「じゃあスタメン発表！」

大事な初戦となる香港戦のスタメンはこうなった。

1番 雉鳥時雨（右）

- 2番 野元彩香（一）
- 3番 神田翠嵐（左）
- 4番 斑鳩雪風（三）
- 5番 飛鷹涼風（中）
- 6番 佐久間玲（DH）
- 7番 内山美香（遊）
- 8番 内川優奈（二）
- 9番 孤塚志黄（捕）

俊足の雉鳥を1番に、その後は高いミート力を誇る2人を繋げてチャンス拡大。それを斑鳩、飛鷹、佐久間の3人で還す攻撃的な打順だ。

試合での注意点などを伝えられて解散となるが、浜矢と鈴井の至誠コンビだけは残って監督と打順について語り合う。

「正直打線組むの悩んだんだよな。もつとバランス良く選考したかった、というか私が選びたかった」

「監督に権利無かったんですね……まあ俊足巧打の選手が少ないですよね」

「だから上位打線組むの難しかったわ、どこからでもホームランは出そうだけど繋がら

なさそうな打順になっちまった」

斑鳩や佐久間に代表されるが、一発はあるがミート力に不安のある選手が多い。

その為一発攻勢になってしまい、打線の繋がりは無いのではないかと心配している。

「まあ8番、9番、1番は良さそうじゃないですか？　そこは繋がりそうですよ」

「だよな？　この3人がいてくれて助かったよ……2人は初戦は休みだけど、試合を見て学んでおけよ」

「分かりました！　3勝してスーパーラウンド行きましょう！」

「どこのチームにも負けられないよね、黄金世代だし」

”黄金世代”中学生の頃からこう呼ばれてきた彼女達は、U18の時期になって更にその呼び方が定着した。

この世代で優勝出来なければ数年は優勝出来ない、最低でも決勝までは進めるメンバーと評価されている。

世間からは重い期待を掛けられているが、誰1人としてその重圧に負けそうな選手はいない。

全員が自分の役割や弱点を把握して、それを他の誰かが補う。

そんな良いチームワークが生まれてきている。

「世界でも監督を胴上げするぞー！」

「おー」

「……まあ開催国日本だし、参加国はアジアだけだけどな」

今年のBFAは宮崎県で開催される。

ホームで戦えるので多少は有利になるが、油断は出来ない。

浜矢と鈴井、そして監督は2連覇を目指して気合を入れ直した。

第3 2球 最高のスタートダッシュ

当日に迎えた香港戦の試合前練習、ブルペンで海崎と孤塚バッテリーが投げ込みをし
ていた。

「終の決め球はスクリューだよね？」

「うん、けどパームも得意やけん要求してね」

「分かった、内角にも投げられるよね？」

「内角低めはちよつと苦手かもしれん」

孤塚は海崎の得意なコースや苦手なコース、得意な球種や投げたい球は何かを頭に入
れていく。

今まで違う高校で3年間を過ごしてきた相手、分からない事しかないだろう。

「じゃあ基本は外角中心で、大事な時はインハイとか要求する配球でいいかな？」

「それでよかよ、というか志黄に任せるばい」

「そう？ 分かった」

一言二言会話を交わし、また投げ込みを再開する。

そうして迎えた18時、ついにプレイボールだ。

「ここで負けてたら優勝なんて夢のまた夢だ！ 5回でコールド決めてやろう！」

『オーツ！』

緊張した面持ちでマウンドに上がる海崎。

慣れないマウンドを何度も踏んでならし、香港打線と向き合う。

その頃ベンチでは、至誠の3人が今日の試合について話していた。

「5回コールドって15点差でしたっけ？」

「そう、7回が10点差」

「これだけの選手が揃ってれば、15点くらい取れそうですね」

「投手も良いのが揃ってるからな……海崎頼んだぞ」

——伊吹や神田さんが控えとーんば考えたら、私は嘯ませ的な存在。やけん打たれる訳にはいかん。

注目の第一球は制球しやすいストレート。

これで空振りを取りーストライクとなる。

「やっぱタイミング合ってないな」

「これなら抑えられそうですかね？」

「余程のことがない限りはな……昨日はああ言ったけど完投目指してもらおうか」

次に投げられたのはスライダー、これも見逃しで追い込んだ。

決め球として選ばれたのは、試合前に話していたスクリュー。

ボール球ではあつたがバットが止まらず三振。

「ナイピ」

「ナイスボール！」

——意外と抑えられそうやね、こんままノーヒット狙おう。

2番はバームで空振り三振、3番にはストレートを当てられるがセカンドフライに打ち取った。

緊張の初回の守備は、誰にもヒットを許さず終えた。

「ナイピ、完投も視野に入れていこう」

「分かりました」

「さあ初回の攻撃だ、縮こまらず振ってけ！」

「はい！」

1番打者として構えるのは雉鳥。

初球から積極的に振っていく彼女には、打線を勢い付ける一打が望まれている。そして投げられた初球は高めへのストリート。

これにはタイミングが狂わされファール。

——おっそ！ 逆に打てないよ……。

「100キロも出でないんじゃ……」

「逆に打てないんですけど、アレ」

「これが五輪から野球が外された理由だよなあ、代表戦でここまでの差があるんだから」
レベルの差がありすぎれば、見ている方は当然面白くない。

野球が再び五輪にその名を載せるのは、一体いつになるのか。

タイミングを外されまくった雉鳥は三振、野元も当てはしたがファーストゴロ、神田も飛ばしたがセンターフライに終わってしまう。

「まさか三者凡退するとは……」

「けどこれで相手の球種や球速は分かっただろ？ 次の回から打ちまくればいいさ」

良い流れを作る為にもこの守備は大事になる。

初回は少し表情が固かった海崎も、今はだいぶ落ち着いている。

——初戦を落とす訳にはいかん、私がしっかり抑えんと。

まず4番に対してはストリートとスライダーで追い込む。

1球内角で仰け反らせてからの4球目は、外角低めへのスクリュー。

「ストライク、バッターアウト！」

「おお、良いコントロール」

「海崎良いですよね、なんで公立校に行ったんですかね？」

「元々ポテンシャルはあったけど実力は高くなかったらしいぞ、2年の時に監督が変わって芽が出たみたいだ」

小倉北は強い部活動など特にならない、至って普通の高校だった。

そんな高校の野球部の監督が変わり、それからチームは実力を付けていった。

そして迎えた今年、念願の県大会優勝を果たしたのだ。

その小倉北のエースとして君臨していた海崎は、この回も15球で相手の攻撃を終わらせた。

未だノーヒットピッチを見せる彼女は、まだまだ余裕そうだ。

「初回は振らせたけど、ここからは際どい球は見送ってけ。けど初球でも甘いと思った

ら打っていいからな」

「斑鳩さん打ってきて下さ〜い」

「……任せろ」

後輩の雉鳥の声援を背に受け、4番の斑鳩が打席に立つ。

夏大の頃よりも体が大きくなった彼女は、かなりの圧を放っている。

初球のスライダーは見送ってストライク。

——確かに慣れないうちはこれを打つのは難しいだろうな……だが。

2球目のストリートを弾き返して、打球はフェンスに一直線。

右中間を真つ二つに割るツーベースでチャンスメイク。

続く飛鷹は初球の甘いカーブを引つ張り、一塁線を破る長打にした。

「ライトもたついている、行け行け！」

一塁、二塁を蹴って更に加速していく。

中継から三塁にボールが送られるが、飛鷹の脚の方が速かった。

タイムリースリーベースで先制点を奪取した。

「さて、ここうなったら後は任せるか」

「そうですね、もう打てそうですし」

選手達を信じた監督の判断は正しかった。

続く佐久間が2ランホームランを放つと、内山がツーベースを放つ。

内川は進塁打に終わったが、この回打者2巡の猛攻を見せ一挙10得点。

7回コールドの条件は満たしたが、5回コールドまではあと5点必要だ。

「メツタ打ちですね……」

「浜矢何回か欠伸してただろ、見てたぞ」

「げっ、バレてる……だってベンチだから暇なんですもん」

「カメラに抜かれる可能性もあるから、やるならバレないようにな」

10点の援護を貰った海崎も、どこか疲れた顔をしていた。

それもそのはず。攻撃中は一切出番がない上に、いつ守備を迎えるのか分からず何回も肩を作り直さなければならぬのだから。

「海崎疲れたか？」

「少し。肩作り直すのが面倒だったと言いますか」

「なら4回で降ろすか、他の投手も使いたいし」

「分かりました」

——なら残り2イニング、0で抑えんと。

スカウトへのアピールの為にも、海崎は気合を入れ直した。

先頭にはヒットを許してしまうものの、後続は3人で切つて3回も無失点。

「さあ3回裏、上位だしこの回で5点取るぞ！」

『ハイ！』

——さてと、私は投手の準備をしておくか。

監督はベンチにある電話を手に取り、ブルペンに電話を掛ける。

出たのは日本代表の投手コーチ。

「調子良さそうなのは誰ですか？」

「山田と渡邊が良さそうですよ」

「じゃあその2人に肩作らせておいて下さい」

「了解」

山田と渡邊のどちらかが5回のマウンドを締める事になる。

打線はまず先頭の雉鳥が本日の3打席目を迎え、2球目を捉えてツーベース。

続く野元が一塁線を破るヒットを放ち1点追加。

ノーアウト一塁の場面で打席には、今日マルチ安打の神田。

——高めに浮いたスライダー、絶好球だ！

迷わず振り抜いたバットは白球を高く飛ばした。

ダメ押しの一ランホームランで13点目、ワールド成立まであと2点。

まだまだ攻撃の手を緩めたくない日本の4番は斑鳩。

2球続けて見送りカウントは1—1。

投げられた3球目は内角低めへのストリート。

それをフルスイングで捉え、白球は無常にもレフトスタンドに突き刺さる。

その後も飛鷹が続き単打からの盗塁、佐久間は打ち取られるが進塁打を放つ。

1アウトランナー三塁の場面で内山、初球のスライダーを捉えてツーランを放った。

「よし16点目！ あとは抑えれば勝ちだ」

「なんか申し訳なくりますね」

「けどこれが勝負だからな……仕方ない事だ」

16点をリードした4回表、海崎はこの回も安定したピッチングを見せた。

1人目は変化球で翻弄して空振り三振、2人目は追い込んでからのアウトローのスト

リートで見逃し。

最後はスライダーを打たせてショートゴロに仕留めた。

「海崎ナイピー、それとお疲れ」

「ありがとうございます」

ベンチに戻ってきた海崎とハイタッチを交わし、再び監督はブルペンに電話を掛ける。

「5回は山田に任せます」

「分かりました、山田5回行くぞ！」

4回裏の攻撃はチャンスを作ったものの無得点に終わり、16点差のまま5回を迎えた。

ここを1点以内に抑えればコールド勝ちだ。

「さあ山田行っていい！」

「はっ」

高丘工科の山田が5回のマウンドに上がる。

豪速球と多彩な変化球が持ち味の投手だ。

球速よりも制球を重視する海崎とは、投球スタイルも利き手も真逆。

その変わりように対応出来なかった香港打線は、3人で仕留められて試合終了となった

た。

「よし白星スタート！ 最高の滑り出しだったな！」

「おつおつー、私も早く投げてー！」

「伊吹ちゃんは韓国戦でしょ」

「分かつてるけどさ〜……」

初戦をコールド勝ちにし、野手と投手の負担を軽減する良いスタートだった。

海崎の球数は50球を余裕で越しているの、中1日を空けなければ投げられないことになる。

「次の相手はどこですか？」

「次はスリランカ！ 去年は西アジア野球選手権で世界ランク27位のパキスタンを破って優勝、結構強いと思うぞ」

「おお！ てかパキスタンって結構強いんですね……」

「私も調べて初めて知ったよ」

——一応10年前の日本代表だった人だよな？ けど確かパキスタンとは戦ってなかったから仕方ないか。

スリランカはここ最近で実力を付けてきているチーム、油断は出来ない。

打線こそ良い成績を残していたが、あくまで球速が遅い投手との対戦だったから。

オーブニングラウンドを1位で通過する為にも、1つも落とす訳にはいかないのだ。

「スタメンは明日発表するけど、先発は今教えるからな！　そこそこ実力のあるスリランカって事を考慮して……大鷲！　任せたぞ」

「私ですか!?　やったー!」

「完投目指して頑張れよ、勿論打線も狙えたらコールだ!」

『オー!!』

第二戦の先発には大鷲が選ばれた。

これでもまだ日本は神田と浜矢を温存している、アジア内で見ても投手層はかなり厚いチームだろう。

第33球 投手リレー

「さあスリランカ戦だ！ 今日も勝って良い流れを作ろう！」

『オオー！』

スリランカ戦のスタメンはこうなった。

- 1番 宮崎瑠衣（二）
- 2番 雉鳥時雨（右）
- 3番 飛鷹涼風（中）
- 4番 神田翠嵐（左）
- 5番 斑鳩雪風（三）
- 6番 佐久間玲（DH）
- 7番 内山美香（遊）
- 8番 坂入椎奈（一）
- 9番 孤塚志黄（補）

このスタメンが発表された時、ベンチでは浜矢が落ち込んだ様子を見せていた。

「今日も私ら出番無しっすか……」

「明日はフル出場だから安心しろ」

「それに相手に簡単に手の内を明かすわけにはいかないでしょ」

「そういう事か！　なら仕方ないな！」

——チヨロいなあ……。まあ、出番が無くて悔しいのは私も一緒だけど。

浜矢ほどではないが、鈴木も2戦連続で出番がない事に悔しさを感じていた。優勝バッテリーが2戦続けて温存、この采配が吉と出るか凶と出るか。

今日は先攻なので日本の攻撃から始まる。

打席に立つのはスタメンに入った宮崎。

初球は球筋や球速を見る為、見送って1ストライク。

「昨日よりは球速いね、それでもまだ遅いけど」

「130前後つてとこかね？　私でも打てそう」

「佐久間の球ホームランにしてるんだからそりゃ打てるだろ……」

浜矢はそれもそうだと笑い、試合を眺める。

それは宮崎が2球目をライト前に運んだ瞬間だった。

「ライト零した、ゴーゴー！」

高くバウンドした打球をライトが弾き、その間に宮崎は二塁に進む。

続く2番の雉鳥に対しての初球だった。

ピッチャーが投げた球がホームベース手前でワンバウンドし、キャッチャー後方のフェンスまで届いた。それを見て宮崎が三塁に進塁。

「わあ、なんか凄い事になってる」

「まあいきなり1ヒット1エラーだからな、動揺はするか」

「けどここで優しさを見せてはいけませんよね」

「そこは雉鳥なら平気、あいつダメ押し打とかよく打つから」

監督直々に容赦が無いと認められた雉鳥は、2球目を打ち上げてライトフライ。

だがこの当たりで宮崎が生還し、犠牲フライで1点。

「1ヒットで1点か」

「今日もコールドいけそうですね」

「その方が投手運用的にはありがたいな」

その後は飛鷹が四球を選んで出塁し、神田が右中間に打球を運んでランナーは一塁から生還。

斑鳩はファーストゴロに終わったものの、佐久間が左中間を破るツーベースで3点目。

——バッテリーこつち見てないな……いける！

投球モーションに入る直前に佐久間が走り出し、不意を突かれた投手は動揺してすっぽ抜ける。

余裕のタイミングで三塁に到達し盗塁成功。

だがまだここで終わらない。

「キャッチャー逸らした、いける！」

「おう！」

キャッチャーがボールを逸らしたと見るや、一気にホームに駆け込む。

タイミングはかなり僅差であったものの、佐久間の方が早いと判定された。

「ナイスラン佐久間——！」

「まあ鈍足のお前とは違うからな」

「うっせ！」

力強く佐久間の手を叩く浜矢。

3年連続で戦った相手だ、他校の生徒とは思えないほど仲睦まじい。

更に内山がツーベースで続くも、坂入はファーストゴロに打ち取られチェンジ。

しかし初回で4点を先制する良いスタートだった。

流れは完全に日本側の1回裏、マウンドに登りロジンバッグを触っているのは大驚。

——この試合もコールドを狙うなら、最初に相手に嫌な印象を植え付けないと。

初球はサークルチェンジから入った。

豪快なフォームから放たれる緩い変化球、この落差には打者もタイミングを大幅に崩される。

次にストレートを内角高めに決め、勝負の3球目。

U—18に召集されてから生み出した変化球、スプリットチェンジ。

初めて見るこの変化球には対応出来ず空振り三振。

「おお、良い変化球」

「スプリットチェンジって言うらしいですよ」

「あんなの投げられるようになったんだな」

続く打者にはカウント1—2からのスラップを引つ掛けさせ、キャッチャーゴロに。

3番には2ストライクに追い込んでからの、アウトローのストレートで見逃し三振。「ナイピ、最高の制球だったぞ」

「夏終わってからも鍛えてましたからね!」

「そつか……私よりも練習時間はあつたんだもんな」

デীবアの夏は準決勝で終わった。

そこから猛特訓をした彼女は、夏以上の制球力を身に付けていた。

2回表はノーヒットで終わり、迎えた裏の守備。

大鷲は4番をサークルチェンジで空振り三振に仕留める。

このまま抑えたかった大鷲だったが。

「ボール!」

——この人は選球眼良いなあ……フルカンか、どう攻めよう?

——千晴は確かスラップが得意って言ってたし、スラップで。

サインに頷いて外角目掛けてスラップを放る。

しかしボールは大きく曲がり、ミットを大きく動かしながら捕球する。

「ボールフォア」

「やっちゃった……」

投げた本人からしてみても、この変化量は予想していなかったものだったようだ。曲がりすぎてしまい四球を出し、6番打者。

——三塁はちよつと守備怪しいし、一・二塁方向に打たせる！

左打者に対しての挟り込むスラップ。

これを詰まらせて狙い通りファースト方向へのゴロに。

「ゲッツーとるよー！」

「OK！」

一塁の坂入からショートの内山に送られて2アウト。

強肩の内山からカバーに入った大鷲にボールが送られ、ゲッツー。

「ナイスプレー2人とも！」

「大鷲も良い球だったよー！」

「最高の位置に打たせてくれたな」

3人がグラブタッチを交わしながらベンチに戻ってくる。

コールド成立まではあと11点が必要、その為にもこの回で点を取らなければならぬ。

「さあ飛鷹頼んだぞ！」

「言われなくとも……必ず出塁しますね」

「監督相手には普通に喋るんだな……」

飛鷹は今回選ばれた選手の中でも凶抜けた実力を持つ選手。

それに加えて体格も良くて威圧感があるのか、この打席も四球で出塁する。

神田は並行カウントになってからの、外角のボールを打ち返すがセンターフライ。

「急に良い球が来たぞ」

「全力で投げてる感じがあるな、そろそろ降板か？」

全力のピッチングで斑鳩も打ち取られここで投手交代。ここで抑えられて流れを渡す訳にはいかない。

——クイツクは遅い……これなら！

この場面で飛鷹が二盗を決めてチャンス拡大。

回の途中で登板や、いきなりのピンチに動揺したのか佐久間にも四球を出す。

「内山決めてやれ！」

「神奈川勢の意地見せろ——！」

—— 神奈川出身って訳じゃないのだけど……でも声援には応えないとね。外角のスライダーを逆らわず流し、右中間を破る長打コース。

飛鷹は悠々と生還し、佐久間も勢いよくホームにスライディング。

「これで6点目！ あと9点だ！」

「ナイススラーン」

「おーっす」

佐久間がハイタッチを交わしている間に、乾いた打球音が響く。

振り向いてそちらを向くと、坂入がセンター前へのヒットを放っていた。

「はい生還っどー！」

「内山もナイススラーン」

「ありがとうございます」

この当たりで内山が生還して7点目。

続く孤塚はショートゴロに打ち取られチェンジ。

「んじや大鷲、この回がラストだから気合入れてけよ」

「分かりましたー！ 最高の結果を見せますね！」

「期待してるぞ」

まず1人目に対してはサークルチェンジとスプリットチェンジで追い込み、最後は高めのストレートで空振り三振。

2人目はスラープを外と内に投げ分けて2ストライクを取り、3球目のスプリットチェンジチェンジでまたも空振り三振。

——よし、これで最後の1人だ。ノーヒットで次に繋いでやる。

初球は外角のスラープで空振りを奪う。

外に意識が向いた所を、サークルチェンジで内角を突いて追い込む。

——ここは絶対3球勝負。勿論1番得意なコースに！

外角低めにノビのあるストレートが投げられる。

バッターは見逃し、捕手はミットをピクリとも動かさない。

「ストライク、バッターアウト！」

「よっし！ ノーヒットピッチャー！」

「大驚ナイピ！ 最高の投球ありがとうな」

「これでも準決勝まで行った高校のエースですからね、それなりの活躍はしますよ！」

4回表は1番の宮崎からの打順だった。

初球を打ち上げてしまったが、レフトがそれを落球。

このミスを逃さず雉鳥、飛鷹と続いてレフト前に弾き返す。

雉鳥のヒットで宮崎は生還し、飛鷹のヒットでノーアウト二・三塁。

ここで神田が四球を選び満塁のチャンスで斑鳩。

——四球を出した後の投手は……ストライクを入れてくる。そこを叩くんだ。

ゾーン内に投げられたボールを逃さず捉えたものの、打球速度が速すぎて雉鳥しか生還出来なかった。

しかしまだチャンスは続いている、次は佐久間の打席だ。

2球を見送ってツーナツシング。

カウントを取りに来たカーブ、それを逃さず狙い打った。

打球は一塁線を破るヒットとなり、走者一掃のタイムリーツーベース。

まだまだ続きたい日本打線だったが、内山、坂入、孤塚が続けて打ち取られ3アウトに。

4回裏のマウンドには浦和学園の渡邊が送られる。

速球とスプリットの組み合わせで三振を量産する投手。そのプレースタイルに違わず、ここを三者連続三振に仕留めて終わらせる。

「あと3点、まずは先頭が出るのが大事！ どんな形でも良いから塁に出てくれよ」
「はい」

先頭打者の宮崎が打席で構える。

初球のカーブをしつかりと仕留めて、二遊間を破るヒットにした。

まだまだ点を取りたい5回の表、打席には2番の雉鳥。

——おっ、甘い！ ……やばっ。

甘く入ってきたと思ったボールは、シュートだった。

投げていく変化球にまんまと釣られ、打球はシュートに向かう。

「キジ走れ！ つーか飛べ！」

「セーフ！」

一二塁はフォースアウトになったが、雉鳥が全力疾走をしたお陰でゲッツーは免れた。

「ふいー危な……てか飛べって言ったの誰？」

「ごめん、伊吹ちゃん」

「なるほどですね」

——確かに名前に鳥って入ってるけど……一瞬ヘツスラしろって言われてるのかと思つた。

後続の飛鷹は惜しくもレフトフライに打ち取られたが、4番に座つた神田がタイムリースリーベースを放ち1点追加。

斑鳩は三振に終わり、この回でのコールドは無くなった。

5回も続投の渡邊はこの回をセンターフライ、ピッチャーゴロ、そして最後は見逃し三振に仕留めノーヒットピッチ継続。

「さあ2点取つてやれ！ コールド勝ちすれば野手も投手も疲労が溜まらずに済むぞ！」

「ハイ！」

疲れて制球が乱れたのか、佐久間と内山に連続で四球を出す。

押し切りたかつたが、坂入と孤塚は打ち取られてしまう。

「宮崎いけー、神奈川の安打製造機の実力見せてやれ！」

「そうだそうだー！ 長打も打てるだろー！」

——なんで私は味方に野次られてるんだ……けど、おかげで楽に打てるよ。

初球の甘いスライダーを逃さず、センター方向へ大きな打球を放つ。

クツションボールの処理に手間取っている間に、佐久間と内山は生還。

そして宮崎自身も三塁に到達。

「これで15点目！ やっぱり宮崎は最高だな」

「対戦した時には苦しめられましたからね……味方になるとこんなに心強いんですね」
至誠の3人は宮崎の実力を知っている。

攻守に渡って苦しめられた相手が、今では心強い味方に。

これこそU—18の醍醐味とも言えるだろう。

雉鳥はセカンドゴロに終わりチェンジ。

コールドを決める大事な場面に送られたのは、星竜高校の奥川。

豪速球を軸に三者連続三振に仕留めてゲームセット。

「……あれ？ もしかしてノーノーリレー？」

「浜矢お前、気付いてなかったのか……」

「大鷲が四球出したから、なんかノーヒット感が無くて」

「えー、私のせい?」

何はともあれこれでワールドで2連勝。

良い流れが出来ているといっても過言ではない。

「次の相手は韓国! 去年のワールドカップでは負けてるし、1年越しのリベンジを果たしてやろう」

「先発は勿論私ですよね!」

「前から言ってたしな、浜矢が先発だ。もしリリーフ出すのであれば神田だから、心の準備はしておけよ」

「浜矢と神田の継投という、高校野球ファンからしたら堪らないリレーが見れるかもしれない。」

「この2人を投入しなければならない程、韓国は今までの相手とはレベルが違うと言う証明でもある。」

「韓国戦も勝って、オープニングラウンドを1位で通過しよう!」

『オオッ!!』

第34球 大事な一戦

本日の韓国戦は、オープニングラウンド最終戦。

お互い2勝0敗で迎えたこの試合、勝った方が1位通過を決める。

1位で通過すればこの後のスーパースラウンドが楽になる為、何としてでも勝ち星を上げたい試合だ。

「韓国は今までの2チームとはレベルが段違いだ、一瞬たりとも気を緩めるなよ！」
『ハイッ!!』

大事な一戦のスタメンはこうなった。

- 1番 宮崎瑠衣(二)
- 2番 雉鳥時雨(右)
- 3番 飛鷹涼風(中)
- 4番 斑鳩雪風(三)
- 5番 佐久間玲(左)
- 6番 鈴井美希(捕)
- 7番 内山美香(遊)

8番 野元彩香(DH)

9番 坂入椎奈(一)

今日は日本の後攻となるので、守備からスタート。

先発のマウンドを踏むのは背番号18、浜矢。

その球を受けるのは当然鈴木井の役目だ。

「韓国ってそんな強いのか？」

「私達より木製には慣れてるだろうけど、まあ伊吹ちゃんの実力ならそんな打たれないと思うよ」

「そっか！ ならいつも通り全力で投げるぜ！」

慣れ親しんだ2人だが、身に纏っているユニフォームは見慣れない。

日本代表の舞台でも変わらないピッチングを見せて欲しい。

試合開始のサイレンが鳴り響き、一気に表情が引き締まる。

——韓国打線は手強い、まずは初回をゼロで抑えよう。

始まりを告げる1球目はストレート。

内角高めのノビのある球で見逃し。

——調子は良さそう、このまま力でねじ伏せるよ。

2球目はツーシームを同じコースに投げ込んでファールにさせ、最後はスライドフォークで空振り三振に仕留めた。

「見慣れた良い投球だ」

「私は準決勝のトラウマが……」

「浜矢に抑えられたんだもん、そりゃトラウマにもなるか」

ベンチで大鷲が苦笑いをしながら浜矢のピッチングを眺める。

それを知らない彼女は、2番と3番も打ち取りノーヒットで初回を終えた。

「ナイピ、最高だったぞ」

「立ち上がりはやっぱ緊張しますね〜」

「あれで緊張してたのか……」

そうとは思えない投球だった浜矢。

あれでも多少は緊張していたと主張している。

「初回は相手の球を見ていけ、好球必打が試合の鍵になるぞ」

「宮崎いけー!」

「安打の製造頼んだよー」

ミート力があり粘れる宮崎が今日も1番に置かれた。

韓国の先発は左腕のキム・ハユン。

独特なフォームが特徴の投手だ。

初球のシュートは見送って1ストライク。

2球目のチェンジアップも見送って1ボールとし、3球目。

縦に大きく割れるカーブに手を出して引つ掛け、ファーストゴロに終わる。

「宮崎どうだった？」

「フォームも独特ですし、それにあのカーブ……かなり打ちにくさを感じました」

「ドロップカーブかナックルカーブかな、曲がりが大きいいし捨てた方が良いのかもな」

フォームとカーブに翻弄され、日本打線も三者凡退からのスタートとなる。

「今日の試合は1点に左右される事が予想される、引つ張りたいからなるべく球数少なめに頼むぞ」

「分かりました！ 3球勝負で決めてきますよ！」

「三振大量に奪ってこいよー」

監督から今日の作戦を告げられ、笑顔のままグラウンドの白線を飛び越える浜矢。

——アイツの投球なら、3球勝負しても抑えられるはず。どこまで浜矢を引つ張れるかが鍵だな……。

4番のキム・ダビンが右打席で構える。

豪快なスイングからホームランを連発する、韓国を代表するスラッガーだ。

彼女に対しての初球はストレート。

決して簡単な球ではなかったが、彼女は力強く弾き返す。

打球はセンターの前に落ちるシングルヒットとなった。

——追い込まれたらフォークを投げられるのが分かってるから、早いカウントから振ってきたのかな。なら配球を変えよう。

5番に対しての初球はフォーク。

それもストライクになるボールで、打者は手が出なかった。

次のスライダーで追い込み、最後はインハイへのストレート。この球で空振り三振を奪った。

——打ち気はありそうだったし、3球勝負は悪くなさそうだな。

その後も変化球を中心に組み立てて、最後は直球というスタンダードな配球で韓国打

線を抑え込む。

「ナイピ、鈴井も良いリードだったぞ」

「ありがとうございます」

「このまま3球勝負でいってくれ」

「了解ですっ!」

球の出どころが分かりにくい左腕と、単純に高い実力を持つ右腕。

両者の気合の入った投げ合いにより、試合は膠着状態のまま3回を終えた。

お互いヒットは1本ずつという熱い投手戦。

先に点を取った方が流れを掴めるだろう。

「浜矢は今32球か、良いペースだ」

「105球までいきますか?」

「いや、流石に中4日はキツイからそれより前には降ろすぞ」

「てことは6回くらいまでですかね」

105球を越してしまつたら、決勝で浜矢を登板させる事が出来なくなる。

エースをまた登板させる為にも、この球数だけは越さないようにしたい。

4 回表の攻撃は 4 番のキム・ダビンから。

先程ヒットを放っている彼女相手には、慎重に攻めたい。

——ストレートには強いみたいだし、ここは変化球で攻めようかな。

まずは真ん中付近のカーブでカウントを取る。

2 球目は外のツーシームで様子を見るが、キムは釣られずボールに。

続くスライダーは強く引つ張られファールにされる。

だがこれで追い込み投手有利のカウントに。

——さあ、打てるもんなら打ってみろ！

投げられた 4 球目はスライドフォーク。

他に投げる投手が居ないであろう軌道の球に、キムのバットは空を切った。

「よしっ、三振！」

「ナイスボール！」

この三振で勢い付いたのか、5 番と 6 番も連続三振に切り取り 4 回も無失点に抑えた。

1 点が欲しい 4 回の裏、飛鷹の打順から始まる。

——この^{独特なフォーム}異端なる動作にも目が慣れた……打てる！

甘く入ったチェンジアップを弾き返しツーベース。

このまま彼女に続きたい打線だったが、斑鳩は空振り三振。

佐久間は見逃しの三振、鈴井は完璧に捉えるも飛鷹が還つてこれる打球ではなかった。

結果後続の内山が打ち取られ、チャンスを生かすことはできなかった。

5回の表に入り、浜矢もだいぶ球数が増えてきた。

6回まで投げるのであれば、1イニングを10球程度に抑えないと厳しいだろう。

——ストレートを狙っているのであれば、敢えて投げて打たせる。伊吹ちゃんの球なら、あの4番以外は打てないでしょ。

——信じるぞ、鈴井。

7番に対しての初球は高めへのストレート。

思惑通り初球打ちをしてくるが、これはセンターフライ。

——次も長打力はないし、これで決めちゃおう。

内角の甘いコースにストレート……ではなくツーシーム。

木製バットを相手にする時は、このような動かさず球種がよく効く。

詰まらせてセカンドゴロに仕留めたと思われたが。

「あつ、しまつ……!」

「落ち着いて!」

セカンドの宮崎が打球を弾いてしまい、エラーのランナーが出る。

——あの動きは疲労が溜まつてる感じだったな。まあ大会明けてからそんな時間も経ってないしな、疲れは完全に取りれてないよな。

——あのランナーは確か脚はそこそこだったと思う。敢えて牽制は入れず……。

浜矢は一度も一塁の方を見る事なく投げる。

それを見たランナーは当然盗塁を仕掛ける。

「走った!」

——狙い通り!

だが、これはバッテリーが読んでいた。

浜矢はストレートを外角高めに外し、鈴井が捕球して流れるような動きで二塁に送球する。

低めの弾道で投げられたそのボールは、二塁ベース上で構えた内山のミットに正確に収まった。

「アウトー!!」

「しゃー! 鈴木ナイス!」

1点を奪い合うこの試合展開で、この盗塁死はあまりにも大きかった。

浜矢は9番も打ち取って5回まで無失点の好投を見せる。

「凄いコントロールだったよ」

「ありがたい、肩が強くないから精度で勝負しなきゃいけないだけなんだけどね」

「それでもあの制球は凄いよ、構えた所に来たのは初めて」

ベンチで内山が鈴井の送球を褒め称える。

彼女の送球の精度は高校内トップクラスを誇る、他校の生徒が見て驚くのも無理はない。
い。

「さてと、この回は下位打線からか……何とか1点取ってくれよ」

「任せて下さい! てかいい加減ヒット打ちしたいんで」

「それなら、早く1本打ちたい」

頬を何回も叩いて自身に喝を入れ、野元が打席に入る。

チェンジアップとストレートの緩急差で追い込まれてからの3球目。

——ゲツ……これは例のカーブ。当てるくらいなら……!

力強く弾き返したが、惜しくもセカンドゴロに終わってしまった。

先頭が出塁出来なかったのが影響したのか、坂入もカーブで空振り三振。宮崎も打ち返しはしたものの、ショートゴロに仕留められた。

「当たつてはいるんだけどなあ……」

「まあ向こうもそろそろ降板でしょうし、次の投手を打てば良いんですよ」

「それもそうだな、という事で浜矢は失点しないようにな」

「はい」

中盤を過ぎても俄然試合は動かない。

どちらが先制点を奪い、有利な状況を手にするのか。

第35球 無援護エース

お互いそろそろ1点を取りたい6回の表、韓国は1番からの好打順。

初球のカウント取りのカーブ、これを引つ掛けさせてショートへのゴロに。

「っ、急げ！ ランナー俊足だ！」

「オツケ！」

三遊間の深くに運ばれた打球を内山が逆シングルで捕球する。

そのまま踏ん張ってワンバウンドで強い送球を送る。

「セーフ」

「間に合わなかったか……」

「……今のが間に合わなければ仕方ない、次だ」

「そうだよ、気にし過ぎてもしょうがないよね」

——今のは仕方ないが、この場面でランナーが出たか……。

監督は何やら嫌な予感がしていた。

だかそれを知ってか知らずが、浜矢は次の打者を空振り三振に仕留める。

——3番、4番と嫌な打者が続くな。ここを抑えれば最悪4番は敬遠できる、しつかり抑えよう。

浜矢は手始めにストレートでファーストストライクを取る。

大きく曲がったスライダーが外れ1ボールになり3球目。

——しまった、すつぽ抜け……！

スライドフォークがすつぽ抜けて真ん中へ。

クリーンナップを張る選手が、こんな絶好球を打ち逃すはずもない。

力強く叩き潰された白球は、左中間を破った。

「やばい、レフトは佐久間だ！ アイツ確かクッションボールの処理……」

ずっと投手としてプレーしてきた彼女。

元々守備能力には不安があり、その為今までもDHで起用してきた。

今日は神田をリリーフ起用する予定だったからレフトにつかせたが、それがまずかった。

クッションボールの目測を誤り、打球の処理に時間がかかりすぎている。

その間にもランナーは三塁を蹴っていた。

「佐久間バックホーム！」

「オラアッ!!」

県内最速のストリートを投げられる佐久間だが、大きな欠点があった。

それはコントロール。その欠点は送球にも現れてしまう。

僅かに逸れた送球を捕りに行っている間に、ランナーは滑り込んでホームイン。

バッターランナーも三塁まで進んでしまった。

「1点先制されて、ノーアウト三塁か」

「か、監督……どうするんですか?」

「タイム!」

ここで監督がタイムを取りマウンドに向かう。

内野陣は集まらず、浜矢と鈴木と3人だけの会話だ。

「監督、105球まであと何球ですか?」

「えっ? 確か15球だったと思うけど」

「分かりました、14球以内で抑えます」

「……そうか、信じてるぞ」

——励まそうと思ったのに、あんな顔見せられたらな……。信じるしかなくなるじゃ

ないか。

浜矢は全く落ち込んでないなかった。

寧ろ瞳の輝きは増して、次の打者を待ち望んでいるよう。

「伊吹ちゃん、3人で切り抜けよう！」

「当然！」

ここで立ちほだかるはキム・ダビン。

初球のスライダーを捉えられ、センター方向に運ばれる。

「犠牲フライになるか？」

「いえ、センターは涼風ですよ？」

「……それもそうだな」

飛鷹が捕球すると同時に三塁ランナーがタッチアップ。

それを見て飛鷹はセンターからホームまで、弾丸のような送球を放つ。

低い弾道かつ正確な位置への送球。

鈴井が捕球してランナーを待ち構え、タッチプレー。

「アウト！」

「飛鷹ありがとー!!」

「フツ……礼には及ぼん」

「それ多分向こうには聞こえてないですよ」

雉鳥の冷静なツツコミが冴え渡るが、これで2アウトを同時に取りランナーも居なくなつた。

ここで打たれる浜矢ではなく、最後は見逃しの三振で切つて終わらせた。

「お疲れー、韓国相手に6回1失点なら上出来だ」

「……それに、殆ど私のエラーみたいなものだからな」

「気にすんなつて! でも援護はくれ、勝ち投手になりたい!」

「フツ……無論そのつもりだ」

不敵に笑つて前髪をかき上げる飛鷹に、苦笑いを向けながら打席に向かう雉鳥。

——点差的に私は勝ちを付けられないけど、負けを消すくらいはしなくちゃね。

だがここで韓国のピッチャーが交代する。

速球派右腕、ソ・ジウオンだ。

「ゲッ、よりにもよつてアイツかよ」

「凄い投手なんですか？」

「韓国代表のエース、今までとは比べ物にならないくらい球が速い」

監督の言う通り、投球練習から庄巻の速球を見せつけている。

今まで球速の遅い投手としか対戦してこなかった日本、タイミングを狂わされるかも知れない。

雉鳥への初球はジウオン自慢のストレート。

低めにコントロールされた速球がミットに突き刺さる。

——速い……けど、別にこのくらいなら見慣れてるな。

そう、いくら速いと言え日本には浜矢や神田、ましてや佐久間がいる。

彼女達の球に慣れている代表のメンバーなら、この程度の球速が1番打ち慣れている。

——スプリットもーらい！

低めのスプリットを拾い、センター方向へのヒットにする。

ここで打席に入るのは飛鷹だが、ベンチからサインが出る。

——雉鳥、盗塁よろしく。

——了解つと。

出されたのは盗塁のサイン。

監督はここがターニングポイントだと分かっていた。

「速球派相手に盗塁つて結構ギャンブルじゃないですか？」

「それでもないぞ、ジウオンはクイツクが苦手で捕手もそこまで肩が強くない……雉鳥の脚なら行けるはずだ」

モーシオンを完璧に盗んで走り出し、ジウオンもそれを見てボールを外す。

捕手から二塁へ送球されるが、そのボールの弾道はあまりにも高かった。

「セーフ！」

「よしよし、ナイスランナー！」

——後は飛鷹に任せよう。逆転ツーラン打ってくれるかもだし。

肩をバットでトントンと叩きながらタイミングを取る、彼女の特徴的なフォーム。

初球のスライダーを見逃してからの2球目のストレート。

それをバットを立てて大きく足を上げ、しなやかなスイングで捉える。

白球はライトの前に落ち、二塁ランナーの雉鳥は一瞬も足を緩めずホームに生還する。

「ナイバツチャー！」

「キジ、ナイスラン」

「あざっす！」

明るく盛り上がるベンチの中で、監督は顎に手をやりながら考え込んでいる。

——さっきの球、飛鷹だったらホームランに出来たよな。あのスイング……いや、飛鷹が手を抜いていたとは考えにくい。

監督がそう考えているのと同時刻、ブルペンでも同じ事を考えている者が1人いた。

この回で逆転したかった日本だが、ジウオンの前にあと1本が出ず追加点は奪えなかった。

そして迎えた7回の表、日本のマウンドに送られたのは。

《ピッチャー代わりまして、海崎さん。背番号12》

第1戦でも先発のマウンドに上がった海崎。

本格派右腕の次は技巧派左腕で惑わせる、そんな作戦だ。

この采配は的中し、下位打線から始まった韓国をノーヒットに封じ込める。

「内川、一応代打の準備もしておけ」

「えっ？ はい、分かりました」

「その後は守備にもついてもらうから、軽くキャッチボールもな」

「……はい！」

内川は内外野どのポジションでも守ることが出来る。

その為誰の打順で出すかはまだ決まっていない。

それは試合の流れを見て判断するようだ。

下位打線から始まった7回裏の攻撃、内山と野元が5球で打ち取られ早くも2アウトとなる。

「坂入が打ったら出てもらうからな」

「は、はい！」

監督は、宮崎の打順で内川を代打に出すと決めた。

今日の宮崎は1失策とノーヒット、代打を出されても仕方ないだろう。

「良かったね、出番貰えて」

「うん、結果を出せるように頑張るばい」

海崎と内川が話している間に、坂入が四球で出塁。

ここで代打・内川が告げられた。

「……ごめん、頼んだよ」

「任せて」

悔しそうに顔を歪ませながらも、内川へこの場面を託す宮崎。

それを見て内川は一層気を引き締める。

——柊は凄かよ、世界を相手に大活躍してしもうて。私なんか全然打てとらんし、そもそも出番もあんまり無か……。

ベンチで声援を送っている海崎に視線をやる。

自分と同じ高校出身で、いわばチームメイトでありライバル。

そんな彼女はこれまで5イニングを投げ無失点。

それに対して自分は3打席ノーヒット、出場も初戦の香港戦以外無しという有様。

——悔しか、悔しかばい。でもそれ以上に頑張つとー柊を援護したかつて気持ちもある。伊吹には本当に悪いけど……私が柊に勝ちば付ける。

初球のスプリットは見送ってボール。

選球眼の良さも彼女が6割を打てた要因の一つだ。

そして投げられた2球目だった、スライダーがすっぽ抜けて真ん中へ。

——このチームが勝つ為に、そして柊が勝つ為に……ここで私が打つしかなかやろ！

鋭いスイングで白球を捉えて、全身を回転させてその勢いで弾き返す。

白球は秋の夜空に高々と舞い上がり、そのままライトスタンドに落ちた。

「勝ち越しツーラン！ 代打成功！」

「うっちーナイス！」

「優奈……！」

——今までもホームランは何本も打ってきた。けど……今こん瞬間が、一番嬉しか！

内川はダイヤモンドを一周しながらベンチの方を、海崎の方を見て小さく手を振る。

それを見た海崎は、恥ずかしそうに小さく手を振り返す。

「しゅーう！ これで勝ち投手は終んもんばい！」

「ありがとう……ただ、伊吹が」

「なんで6回1失点で勝ちつかないんだよ……くそう」

抱き合って喜ぶ2人の横で、浜矢が恨めしそうにグラブを弄っていた。

だが隣に2人がいるのに気がつく、浜矢は笑顔になる。

「けど海崎おめでと！ 海崎が頑張つて抑えたから勝ちがついたんだもん！」

「そっちの方が頑張つたと思うけど……」

「まあ失点した私の責任だし？ それに海崎が抑えたから内川も打てたんだと思うから」

「あはは……」

——伊吹つて意外と鋭かねえ。

雉鳥は抑えられたが、これで2点リードで8回に。

残り2イニングを1失点以内に抑えれば勝利だ。

大事な8回のマウンドには、高丘工科の山田が送られた。

彼女は1番をファーストゴロに打ち取ると、次を空振り三振、最後までファーストゴロの三者凡退で終わらせた。

8回裏もソ・ジウオンが続投だったが、捉えきれずに4人で封じ込められ無得点。

2点リードのまま迎えた9回の表、守護神として登場したのは神田。

「孤塚行つてこーい」

「はい、3人で終わらせてきます」

神田が投手なので、鈴木と交代で孤塚が捕手に。
この2人も慣れ親しんだ組み合わせだ。

——調子良さそうだし攻めていこう。

先頭バッターへの初球はツーシーム。

大きく曲がるその球で、打者の内角を抉る。

続いてストリートでカウントを取り、最後の勝負球はスプリット。

切れ味抜群の変化球にバットは空を切る。

——この人は初球打ちしてくるし、打たせて取ろうか。

孤塚は内野に少し後退するように指示を出す。

そしてスライダーをわざと甘いコースに投げ、強く引っ張らせた。

「セカン！」

「オーケー！」

だがそこは好守を誇る内川の守備範囲内。

ガツチリと捕球し一塁転送、2アウト。

——最後の人は選球眼良いからゾーン内で勝負しよう。

初球はカーブを真ん中に投げてカウントを取り、2球目も小さく落ちるスプリットで空振り。

3球勝負の3球目として選ばれたのは、アウトローへのストリート。

先程のスプリットと同じコースに投げられ、一瞬反応が遅れ空振り三振。

これで日本はオーブニングラウンドを無傷の3連勝、1位通過を決めた。

第36球 束の間のお休み

U—18はオープニングラウンドを終え、1日だけの休養日を迎えた。

休養日とは言っても練習はあり、選手達は疲れを見せながらも元気に練習に励んでいた。

「外野守れる奴集合ー！」

この監督の呼びかけに飛鷹、雉鳥、内川、神田、佐久間が集まった。

「外野はアメリカンノックやるぞ」

「うへー、疲れるやつだー……」

「これと打撃練習だけで終わりだから頑張れ！」

アメリカンノックとは受け手をライト又はレフトから走らせつつ、進行方向にフライを打ち捕球させる練習。

脚力や持久力の強化を目的に行われる。

「ライトの奴はレフトからスタート、レフトの奴はライトからスタートな」

「センターはどうすればいいですか？」

「好きな方で、内川は……も好きな方からスタートして良いぞ」
「やった！　ありがとうございます」

内川はどのポジションでも守れるが、一応センターの経験が多いという事でスタート地点を選ぶことに。

「じゃあまずは飛鷹！　真ん中着いたら合図してくれ」

「分かりました」

まずは一番外野守備に慣れている飛鷹から。

ライトから走っていき、センターに到達した時点で声を出す。

その地点と飛鷹の脚力を考慮し、捕れるか捕れないかの境目を目掛けてノック。

「うわっ、完璧なノック」

「打球速……さすがは元プロ」

「元プロでもノック下手な人はいるらしいけど、灰原さんは上手いな」

飛鷹は全力疾走で落下地点に向かい、最後は立ち止まってキャッチ。

——安心感のある守備だな、センターを守っているだけはある。

「次、雉鳥！」

「はーい！」

雉鳥はライトの位置で捕球する為に、レフトからスタートする。

センターに到達して少してから合図を出し、監督はライン上を狙って打球を放つ。

「はー……上手かねえ、あんな上手かノック初めて見た」

「灰原さんは現役の頃からノック上手かったからな」

「神田さんは昔の監督知つとーと？」

「姉の同級生だからな、時々相手をして貰っていたんだ」

——神田さんが守備も打撃も一流な理由が分かったかも。

雉鳥は最後は飛びついてキャッチし、最後まで諦めない粘り強さと球際の強さをアピールした。

「それと、神田さん呼びはやめてくれ。同年だろ？」

「住んどー世界が違うというか、格が違いすぎる人やけん……なんか呼び捨てにしづらうって」

「私はお前にホームラン打たれたんだぞ、格下だ」

「いやそれは無か」

神田がホームランを打たれたのは、内川と茶谷相手にだけ。

公立校の選手が優勝候補校のエースからホームランを打つ、それがどれだけ凄い事か。

「……凄い選手だと思ってくれているのは嬉しい、だが私はそれで昔から同い年の友達が少なかったんだ」

「えっ」

「だから友達になつてくれると嬉しいんだが……」

「す、翠嵐！ 私も友達でよかと!?!」

——よし、作戦通り。同い年の友達が少なかったのは事実だし、許されるだろ。

「ふふ、ありがとうな。志黄以外の同級生と落ち着いて話せる日が来るとはな……」

「大丈夫！ 代表の皆はもう友達ばい！」

「ほらそこー！ 次は内川いくぞー！」

「あつ、はい！」

佐久間はとつくにノックを終えていた。

かなりギリギリの捕球と危ない追い方ではあったが、何とかキャッチを成功してみせた。

——さてと、話してた罰だ。ちょっと難しい打球にしてやろう。

内川が駆け出して合図を出すと、監督はフェンスに直撃する打球になるように打つ。

——わざと難しい打球打たれてるなあ……でも捕るよ！

走った勢いそのままに、フェンス際でジャンプしてナイスキャッチ。

内川は本職では無い外野でも、高い守備力を持っている。

「よし良いぞ、神田！」

「はー！」

神田にも回転のかかった難しい打球を放つが、彼女はそれを難なくキャッチした。

日本の外野陣はそれなりの安定感があるのが分かる。

打線の爆発力を増す為にも、練習の殆どをシート打撃に費やす事となった。

マウンドに上がるのは奥川、渡邊、山田の3人の予定だったが、打席を終えた佐久間が監督に近づいた。

「あの……私も投げたいんですけど」

「見てると投げたくなってるよな、よし行ってこい！ 捕手は……鈴井は空いてないから孤塚で」

「よっしゃ！ 全員抑えてやるぜ、かかってこい！」

許可が降りた途端表情が明るくなり、投手用グラブを着用し走ってマウンドに向か

う。

「神奈川の最速投手と組めるなんて光栄だよ」

「先に言っとくけど、私はノーコンだからな」

「それは美希から聞いてるよ、私なら捕れるから思い切り投げて良いからね」

「ほう、頼りになるな」

簡単なサインを作り、2人はそれぞれのポジションで構える。

佐久間と対戦したいと申し出たのは、内川だった。

「優奈が勝負事に名乗り出るんは意外やな」

「せっかく代表に選ばれたやけん、対戦せな損ばい」

彼女達の小倉北は、全国大会の初戦で祥雲に敗退した。

県内の凄い投手とは何人とも対戦したが、全国の投手とは神田以外対戦した事がない。

「さあいつでもいいよー！」

「なら遠慮なく行かせてもらおうぞー！」

佐久間が投げたストリートは、高めに大きく外れた。

制球の悪さは夏から変わっていない、それどころか投手の練習を全くしていなかった

ので悪くなっている可能性もある。

「速かね、これが神奈川ん最速かあ……」

「まだまだいくぜ」

次に投げられたのは高速スライダー。

相変わらずの速さで、その球速は浜矢の最速と同じ。

「この速さの変化球は反則やろ」

「受けてる私もちよつと手が痛いよ……」

3球目はフォークを落としてワンバウンドし、内川はそれを見送った。

そして勝負の4球目、投げられたのは勿論ストレート。

内川はタイミングをしつかり合わせ、強く弾き返す。

「……セカンドフライだな」

「手ばり痺れとーつちやけど」

「楽しかったぜ、ありがとな」

「(こちらこそ)」

——初見の相手にこうも簡単に変化球を見極められるとはな……やはり投手は諦めて正解だったか。

佐久間は少し悲しそうな、でもどこか清々しい表情で自身の右手を見つめていた。

守備と軽めの打撃や投球だけで今日の練習は終わった。

時間にして約3時間の短い練習を終えた彼女達は、宮崎にある焼肉店に来ていた。

「食事会を兼ねた決起集会だ！ スーパーラウンド前に気合いいれるぞー！」

スーパーラウンドを翌日に控えている彼女達に、少しでも体を癒して欲しいとの目的で組まれた食事会。

ホテルと球場の往復の毎日だった彼女達にとって、初めての楽しいイベントだ。

浜矢は焼かれた肉と米を頬張り、幸せそうな笑顔になる。

「あー……体の疲れが引いていく感覚が」

「だろ？ U-18では毎年この日に外食をするのが伝統なんだ」

「数少ない休養日ですからね、それに疲労も溜まってますし」

たった1日しか無い休養日、それがスーパーラウンド前日ともなれば疲れは極限まで溜まっているだろう。

そう考え食事会をした時から、これはU-18の伝統行事となっている。

「てかここの結構高くないですか？ 良いんですかこんなどこで食事しちゃって」

「……神田とか飛鷹の口に合わせてるんだよ」

「なるほど」

神田や孤塚、飛鷹といった所謂お嬢様組。

そこの3人の口に合った食事でなければ、3人は楽しめないと考えた。

「まあ高くしすぎたらしすぎたで、逆に浜矢の口に合わなさそうだし……ちようど良い店を見つけたのは苦労したぞ」

「本当にありがとうございます」

「礼は要らないからどんどん食え！」

「はーい！」

——浜矢は食べる量が増えたな。翠風や飛鷹や斑鳩も、やつぱかなり食べるな。ワシワシと胃袋に食事を詰めていく選手達を眺め、各々の食事を頭に入れる。

「監督、スーパーラウンドの相手はどこなんですか？」

「中国とチャイニーズ・タイペイだ」

「強いですか？」

「まあまあかな、正直韓国のが強いと思う」

台湾も韓国も共に極端な打高投低。

日本の良い投手を相手には打てないと監督は考える。

「しても2、3失点かな、だから野手に全てが掛かってるけど……韓国戦で3得点しかしてないのが気になるな」

「ここにきて貧打になってきてますからね、打順とか色々変えた方が良いんじゃないですか？」

「そうするつもりだ」

打順を変えたとしても、強打の持ち主を集めた代表メンバーなら多少は打てるはず。

そう信じてスタメンや打順を組み替えなければならぬ。

「先発はどうするんですか？」

「悩んでるけど、神田や浜矢は温存したいし……大鷲とかかな」

「初見で大鷲打つのはむずそうですしね、良いと思いますよ」

大鷲のあのギャップのある投球は、彼女を見慣れていない他国チームからすれば脅威だろう。

大会で投球している姿を見せてしまったが、まだまだ通用すると監督は考えている。

「決勝は神田と浜矢の2人でいこうと思ってるし」

「本当ですか!? やったー!」

「決勝で投げ合った2人だし、そういう場面には慣れてそうだからな」

注目を浴びている大会の決勝戦。

そのマウンドに上がるのは想像以上の緊張や重圧がある。

これに耐えられるのは、全国の決勝戦に立った浜矢と神田しかいないと判断された。

「だから浜矢はスーパードラウンドは出番無し! 決勝は先発かりりーフかは分からないけど、球数の上限まで投げて貰うからな」

「任せてください! どこが相手でも抑えちゃいますよ」

それ程までに信頼されていると分かれば、俄然やる気も出る。

まずは食事でスタミナを付ける為に、浜矢は普段の倍近くの食事を摂った。

結果集会が終わり、宿舎でミーティングを始めた。

「明日は中国戦。正直韓国より楽な相手だが、油断は禁物だ。という訳でスタメンを発表するぞ」

中国戦のスタメンはこうなった。

1番 内川優奈(二)

2番 佐久間玲(DH)

3番 神田翠嵐（左）

4番 飛鷹涼風（中）

5番 斑鳩雪風（三）

6番 雉鳥時雨（右）

7番 坂入椎奈（一）

8番 内山美香（遊）

9番 鈴井美希（捕）

前日の試合から大きく打順を変えたオーダーに、選手達も驚きの顔をしている。

「先発は大鷲、リリーフは奥川と渡邊を予定している。3人とも頼むぞ」

『はい』

ミーティングはこれで終わり、解散となったが監督はある2人を呼び止めた。

「2人とも残ってくれてありがとう」

「いえ、もしかして話って……」

「……ああ、飛鷹の事だ」

この場に残ったのは、飛鷹と仲の良い大鷲と斑鳩の2人。

「単刀直入に聞こう、あいつは手を抜いてるのか？」

「抜こうと思つて抜いてるんじゃないやなくて、多分無意識のうちにだと思ひます」

「てことは夏からずっとそうだったのか」

「はい。本来なら涼風が決められる場面でも、ホームランを打たない事が多かったです。わざと私をお膳立てしているような……」

「そう語つたのは斑鳩。彼女は飛鷹の後ろを打つていたので、彼女の打席での違和感を一番感じていた。」

「多分涼風つて優しいから、私達に活躍の場を与えてくれてるんだと思ひますよ」

「……それが嬉しいかどうかは、監督なら分かりますよね」

「全く嬉しくないな！ というか変なプレッシャー掛けるなつて思ひうわ」

「私も同じ意見です」

「……だがそうなると、無意識のうちに手加減してあの成績つて訳か。知れば知るほど恐ろしい奴だな。」

手を抜いても5割前後の打率を叩き出す、本物の天才。

だからこそその性格が勿体無いと言える。

「一度4番に置いて反応というか、打撃の傾向は見ておく。飛鷹は4番を打てる逸材

……というか打たなきやならないんだよ」

「……私より涼風の方がよっぽど4番に向いている、それを本人に教えてあげましょう」
このU—18で更に一皮剥けて欲しい。

そう願う3人の奮闘が始まった。

が、この会話を聞いていた者が1人いた。

彼女は悔しそうに拳を握り締め、足跡を立てずにその場を去っていく。

第37球 立ち止まるものか

無傷の3連勝でオープニングラウンドを通過した日本代表の、スーパーラウンド初戦の相手は中国。

中国はグループBを2勝1敗で2位通過したチーム、油断は出来ない。勝敗が決勝進出に大きな影響を与える試合、ここで負ける訳にはいかない。

この大事な試合は日本の先攻となった。

今日の先頭打者は内川。

まず初球は見送って様子見をする。

——球は結構速いし、変化球良さそう。けど翠嵐とか見慣れてるから、まだ打てそうに感じる。

際どいコースはカットして粘り、外れたら自信を持って見送る。

結局6球を粘った末に四球を選んだ。

——まだ私の仕事は終わつたらん、ここだ！

投手の癖を見抜いた内川は、スタートを切る。

完全に盗まれたバッテリー側は刺す事が出来ず、無事盗塁成功。

2番佐久間という攻撃的なオーダー。

それは得点を増やす為に行われた作戦だったが、佐久間は一塁に強いゴロを放つてしまふ。

だがこの当たりで内川が進塁し1アウト三塁。

続く神田がライトへの犠牲フライを放ち、1点先制。

そして初めて4番に入った飛鷹の打席。

最初のストレートを見逃し、続くナックルカーブを叩くがこれはショートフライに。

——自分で決める気は無しか……。とはいえまだ1打席目、様子見の段階だ。

「大驚行つてこい、しっかり抑えろよ」

「行つてきます」

大事な試合の先発を任されたのは大鷲。

肩を温めてから、初球のストレートを内角に投じる。

だがこれは簡単に打ち返されレフト前に落ちた。

「ドンマイ、まだ1人だ」

「ゲッツーゲッツー！」

——左打者相手にゲッツーを取るには、三塁方向への強い打球か……ピッチャーゴロ！

初球はスラップを外に放り、2球目のサークルチェンジを詰まらせた。狙い通りのピッチャーゴロになり、大驚は急いで二塁に送球する。

シヨートの内山から一塁に送られたが、ここは打者の俊足が勝った。

——ランナーは変わらないけど、アウトは一つ増えた。楽に投げよう。

だが迎えた3番への3球目、ストレートをレフトに運ばれランナーは一・二塁。

ここで迎えるのは4番打者。

スプリットチェンジとサークルチェンジで追い込み、スラップを外してカウントは2—1。

勝負球は外角低めにコントロールされたストレート。

だがこれを完璧に合わせられ、センターオーバーの打球となる。

二塁ランナーは余裕の生還で同点。

「飛鷹中継！」

一塁ランナーも三塁を蹴っているのを見て、飛鷹から内山へ鋭い送球。そしてその内山がホームまで矢のような送球を放つ。

「ホームプレーは鈴井の得意分野、頼むぞ！」

鈴井はホームでのタッチプレーは得意、この場面もアウトを取ること期待が掛かる。

「……アウト！」

「よし、これで2アウト！」

一塁ランナーの生還は阻止し、同点で食い止めた。だが未だピンチは継続中である事には変わらない。

ここで鈴井がタイムを取り大鷲の元へ。

「ごめん、私の配球ミスだ……決め球はスプリットチェンジでいい？」

「打たれるような球投げる私の方が悪いから……それでいいよ」

「ここは抑えようね」

「うん」

——ストレートの狙われている。球が速くないから、慣れたらフォームとのギャップがあっても打たれる。ここからは変化球中心で投げさせよう。

サークルチェンジを内と外で投げ分け、最後はスプリットチェンジ。これは見逃し三振となり勝ち越しは許さなかった。

リードしたい2回の表だったが、斑鳩と雉鳥が立て続けに打ち取られあっさりと2アウト。

しかしここで坂入が四球を選び出塁し、内山もヒットで続いて一気にチャンスに。

「鈴井打ってくれよ……」

「そういえば、なんで鈴井を9番にしたんですか？」

「上位に繋いでくれる9番が良いと思ってな、鈴井みたいなのが9番にいたら投手としては嫌だろ？」

「確かに……」

ミート力が高く、長打力と脚もそこそこ、何より選球眼のある選手。

こんな打者が9番にいると投手は下位打線でも休めず、ずっと気を張りっぱなしだ。

初球のフォークにはバットを止めて見送る。

次の高めのストレートも見送り、2ボールとなる。

——ナツクルカーブ……甘い！

真ん中付近のナツクルカーブを打ち返し、センター前に上手く落とす。

これで坂入が生還し、尚も一・三塁となり内川。

最初の頃の貧打はなんだったのか、鈴井に続いてタイムリーヒットを放つ。

「2点差！ 今日は大量得点出来そうだな」

「よし、次の回からは抑えるぞ！」

中国はここで投手が変わり、そこで流れも変わり佐久間はライトフライ。

2点リードのまま2回裏を迎えた。

——こんなに援護を貰ったんだ、不甲斐ない投球は出来ないししたくない。

援護を貰い勢いに乗った大鷲は、先頭を三振に打ち取ると次もファーストゴロ、最後も空振り三振でこの回を締めた。

3回表も日本の勢いは止まらない。

先頭の神田が四球で出塁すると、飛鷹がレフトへのツーベースヒット。

更に斑鳩が四球を選んでノーアウト満塁。

雉鳥は2球で追い込まれてからも粘り、並行カウント。

最後に投げられたのは低めへのナツクルカーブだった。

——ボール? ……いや、入ってる!

慌てて打ち返すものの引っ掛けてしまい、ショートゴロ。

ゲッツーだけは避けようと雉鳥は俊足を飛ばし、二塁だけがアウトになった。

「併殺崩れでも1点は1点ですな」

「本当は打って欲しかったけど、意外とノーアウト満塁から点が入らない事を考えると上出来かな」

続く坂入もセカンドゴロを打つも、これを二塁手が弾いてタイムリーエラー。

この波に乗った内山が四球を選んだが、鈴井が珍しくゲッツーになる打球を打ってしまい3アウト。

「すみません」

「鈴井がゲッツーなんて珍しいな、調子でも悪いのか?」

「いえ、ヤマが外れました」

「そっか、なら安心したよ」

2人しかいない捕手の1人が不調となれば、チームとしてはかなりの損害となる。

そうではないと分かり、監督は胸を撫で下ろす。

3回裏の中国の攻撃は9番から。

打力の高い選手でも無いので、ストレートから入ったが。

——セーフティー!? しかも三塁方向……。

「雪風、一塁!」

「……ああ!」

斑鳩が必死に体を動かして打球を処理するも、ランナーが一塁に到達する方が速かった。

——雪風の守備が悪いのを知ってて試したな。これはやられたなあ。

だがこれを引きずる程メンタルは弱くない。

次の打者をセカンドゴロに仕留めて1アウト、そこから二者連続で空振り三振を奪いチャンスは作らせなかった。

「大鷲は5回までよろしくな」

「分かりました!」

——大鷲も105球未満で降ろせば、決勝で何かあった時に登板させられる。海崎もいるが大鷲の方が度胸はあるからな……。

コールドを狙う日本打線はまだまだ止まらない。

内川がピッチャーへの内野安打を放つと、佐久間がレフトへのツーベースを打つ。

ここで中国は3人目の投手を登板させた。

——左腕か、だがうちの左打者は左には弱くないぞ。

神田は初球を見送って1ボール。

——球が荒れてるな、見ていくか。

明らかなボール球となったのを見て、制球が悪い投手だと察した神田は打ちにいいかな。
い。

それが功を成し2打席連続の四球で出塁。

——さあ飛鷹の打席だ。さっきはヒットは打ったがやはり違和感があった。
初球から振っていくが強烈なファールとなる。

これから2球連続で見送りバツテイングカウント。

4球目に投げられたのは内に入ってくるスライダー。

飛鷹程の強打者であれば打ち頃の球だが、これを引っ掛けてセカンドゴロ。

内川が生還したが監督やディーバ組は複雑そうな表情。

「やつぱり打てないか」

「周りに気を遣ってるんですかね」

「そんな事気にせず、打っていいのになあ」

こんな会話が行われている事を知らない飛鷹は、盗塁を成功させて二・三塁とする。

——本当はこれは涼風の役目なんだが……代わりに打つか。

呆れた顔で斑鳩がセンターへのヒットを放ち2点追加。後ろは続けなかったが、これで7点差。

これだけ点差が付けば投手は楽に投げられる。

——無理に三振は狙わずに、打たせて取るよ。

——了解つと。

甘めのスラップやスプリットチェンジを打たせ、この回は3人全員をゴロに打ち取った。

大驚もやつとギアが上がってきた様子だ。

5回は内山の四球、鈴井の進塁打、内川のタイムリーで更に1点を奪った。

これで8点差となりコールドまであと2点。

「これが最後のイニングだ、気合入れてけよ！」

「はい！ しつかり抑えてきます！」

大鷲がこの日最後のマウンドに上がる。

まず先頭打者をスプリットチェンジでセカンドゴロに仕留めると、次をファーストへのファウルフライでアウト。

最後は緩い変化球で追い込んでからの、高めのストレートで空振り三振に切った。

「7回コールドまであと2点！ この回に点を奪ってやれ！」

『オー！』

この回の先頭打者は飛鷹。監督達の視線が集まる中見事なツーベースを打った。

——ランナーがいないと普通に打つんだよな。本当に厄介な奴だ。

今度は斑鳩が打ち取られてしまうが、雉鳥のセカンドへのゴロで飛鷹は生還。

坂入が四球を選び、中国は今日4人目の投手に交代。

だがこれで流れが滞る日本打線ではない。

内山も粘って四球を選んでチャンスメイクをし、鈴井のツーベースで2点追加。

ワールドが成立する点差だがまだ安心出来ない。
それは選手達も感じており、内川がメンタルの弱った投手から四球を選んだ。

2アウト一・三塁の場面で打席には佐久間。

スライダーを見送つてからの高めへのカーブ、これを逃さず捉えた。

白球は鋭い弾丸となりライトへ到達し、内川は生還。

鈴井も二塁を蹴つて三塁に向かうが。

「ゴーゴー… 行けるよ！」

——嘘でしょ？ これでアウトになっても私は悪くないからね。

ベンチからのサインで三塁も蹴つてホームに突っ込む。

ライトからのバックホームを受け、ホームでのタッチプレー。タイミングは同時に見

えたが。

「セーフ！」

「危なかった……ギリギリじゃないですか」

「鈴井なら行けると信じてたからな」

「全く……」

これが14点目の得点となり、13点差。

安心出来る点差となり気が緩んだのか、後続は打ち取られチェンジ。

だが6回に登板した奥川、7回に登板した山田もしっかり無失点に抑えてゲームセット。

14対1と、香港戦やスリランカ戦でも見せた打線の強さが戻ってきた。

これで無傷の連勝記録を4に伸ばした。

ここまで来たのだから無敗で大会を制したい、全員が同じ気持ちを抱いていた。

だが翌日にハプニングが起きた。

大雨により試合が出来ないという知らせが届き、スーパーラウンド第2戦は延期になると思われた。

「えー……今大会の委員会より連絡があり、スーパーラウンドは打ち切りとなったそう
だ」

「打ち切りって……なんでですか？」

「そもそも第2戦の相手はチャイニーズ・タイペイだったんだが、そこは決勝でも当たる。同じカードを2試合連続でやっても意味が無いという事で、決勝だけ行おうらしい

ぞ」

グループBを1位通過したチームはチャイニーズ・タイペイ。

スーパーラウンドでも勝利しており、日本との決勝は確実だった。

なので同じカード2連戦では無く、決勝だけを行う運びとなってしまうた。

「今日と、多分明日も試合は出来ない。明後日に備えてとことん練習するぞ！」

『オオー！』

大会は唯一の予備日である9月10日まで延期となった。

10日には日本とチャイニーズ・タイペイの決勝戦と、中国と韓国の3位決定戦が行われる。

第38球 頂点へ

2日の延期を経て、遂に行われる決勝戦。

チャイニーズ・タイペイと日本の頂上決戦だ。

この大事なマウンドに送られたのは、左のエース神田。

——頼むぞ翠嵐……お前に掛かってるんだ。

高校最高投手と呼ばれた彼女に、初回から付け入る隙など無い。

先頭打者をツーシームでファーストゴロに討ち取ると、次もスプリットで空振り三振。

最後までカーブで見逃し三振を奪う、最高の滑り出しを見せた。

「初回からガンガン攻めていけ！ お前達の力を見せつける！」

『オオッ!!』

最終決戦のスタメンはこうなった。

1番 内川優奈（二）

2番 雉鳥時雨（右）

3番 佐久間玲（左）

4番 飛鷹涼風（中）

5番 斑鳩雪風（三）

6番 鈴井美希（遊）

7番 野元彩香（一）

8番 宮崎瑠衣（DH）

9番 孤塚志黄（捕）

鈴井が2年ぶりの遊撃手でスタメン。

まだ最低限は守れるとの判定されたからだ。

チャイニーズ・タイペイの先発はエースのワン・イージョン。

本格派右腕として多くの三振を奪ってきた選手だ。

内川はまず2球を見送ってワンの調子を見る。

——制球は良し、球速もそこそこ。変化球も良さそうだし隙が無さそうかな。

3球目のスライダーを弾き返すも、セカンド正面へのライナーとなった。

再び2番に戻った雉鳥は、初球から積極的に振っていくもフォークを引っ掛けてピッ

チャーゴロ。

今日はレフトに入った佐久間も、シユートに詰まらされシユートゴロに終わった。

「良い投手だな」

「そうですね……私の方が良い投手ですけどね」

「そうだな、最高の投球を見せてくれよ」

「当然です」

監督とグータッチを交わしてから、神田はマウンドに向かって走り出す。

長距離砲の4番リン・ヤーティンを相手に、神田は初球から得意球のスプリットを投じる。

リンはボールの上を叩き、シユートへの痛烈なゴロを放つ。

この難しい打球を鈴井は簡単に処理してアウトを取る。

——シユートをやっていたのは確か1年の時まで。それでここまで守れるのか、流石だな。

神田はグラブを鈴井の方に向け、良い守備を讃える。

彼女は最低限どころでは無く、本職シユートとしても戦えるだけの守備力があつただ。

後ろの守備に心配が無いと分かった神田は、後続もきっちり抑えて2回もノーヒットピッチ。

日本の2回裏の攻撃は4番の飛鷹から。

3球目まで手を出さず、2—1のバッティングカウント。投じられた4球目は甘いスライダー。

——甘い！……が、雪風に結果を託さねば。

この迷いがスイングを崩させたのか、レフトへのファールフライとなり1アウト。

この打球を見て、やはり監督達は苦い顔をする。

「飛鷹」

「む……神田？ どうしたんだ？」

「お前はそんなんで良いのか？ 今のままじゃ4番としても、野球選手としても失格だぞ」

「……………」

それだけ言つて神田は飛鷹から離れ、ベンチの前でキャッチボールを始める。残された飛鷹は苦笑いを浮かべながら俯く。

——自覚が無いことはないが……まさか付き合いの短い神田に指摘されるとはな。無自覚に染み付いたスタイルを変える事は困難だ。

——それでも……お前なら、飛鷹ならやれるだろ。この世代の最強打者なんだからさ。

この話をしている間に斑鳩が四球で出塁するも、後ろは打ち取られこの回も得点は無かった。

3回も神田は完璧な投球を見せた。

ストリートとスプリットを軸にした投球で、三者連続の空振り三振を奪った。

ベンチに腰掛ける神田の元に、大鷲と斑鳩がやってくる。

「どうして翠嵐は知ってたの？ 涼風のことを……」

「……あの休養日に、灰原監督と3人で話していただろ。偶然あれを聞いてしまったんだ」

「なるほどな」

偶然にも会話を聞いてしまった神田。

理由を話す彼女の顔には、悔しさや怒りが滲み出ていた。

「あんな奴に4番を渡してしまふとはな……私も、斑鳩も」

「その言い方はちよつと……涼風はこの中で1番凄い打者だよ?」

「そんな事は分かつてる。だが、今のアイツを見てもそう言えるか?」

「それは……ちよつと無理かな」

確かに持つている実力は素晴らしいが、それを実戦で發揮出来なければ意味が無い。本来の実力を出せていない打者に4番を渡した、それが神田にとつては屈辱だった。

「あのままじゃアイツはある程度の打者で終わる、それは私としても嫌だ。だから何とかしてでも、今日アイツの目を覚ましてやるんだ」

「面白そうだね、乗ったよ!」

「……涼風に、試合を決めて貰うとしよう」

このままでは飛鷹は言うほど大したことのない打者として終わってしまう。

自分達の世代最強打者に対して、そんな評価をされるのは3人だつて嫌だ。

だからこそ飛鷹の心の奥底に眠つた、熱い気持ちを引き出させようと決意した。

3回裏、この回も日本打線は得点が出来なかつた。

それどころか三者凡退に抑えられ、悪い流れが出来てしまつている。

試合が動いたのは4回の表だった。

先頭のリンをレフトフライに打ち取ったが、その次からだ。

5番打者に対しての初球は外角へのスライダー、これを流される。

「打ち取ったか？」

「いや……面白いところ」

打球は佐久間の前にポトリと落ち、不幸なヒットとなってしまう。

——次はバントか、落ち着いて2つ目のアウトを貰おう。

ここはピッチャー前へのバントを成功させられ、2アウトでランナー二塁とされる。

——レフト方向に打球を飛ばさせるものか、何とか内角だけで抑えるぞ。

だが内角はどんなに厳しくてもカットされ、外に外しても見送られる。

——クソツ、これで空振りしろ！

「ボールフォア！」

最後に力んでしまいボールが外れた。

2アウトながらランナーは一・二塁のピンチを迎える。

「翠嵐、相手は下位打線！ 落ち着いて投げよう」

「シヨートに飛ばしてくれれば抑えるから」

「セカンドでもよかよー」

前後からの励ましを受け、神田は今一度立ち直る。

日本を代表する投手としてここは負けたくない、そう意気込んで投げた初球だった。

ストレートに振り遅れレフトへのフライが上がる。

誰もが打ち取ったと思える打球だろう。

——これは……前か！ 間に合えっ！

佐久間はまだ守備に慣れていない。

ましてや元々守備に苦手意識を持っていた彼女だ、打球判断は得意ではない。

その為反応が遅れ、本来アウトに出来るはずの打球が落ちてしまいランナーが生還した。

試合の均衡が遂に破れた。

ここでタイムを取り内野陣がマウンドに集まる。

外野の佐久間も駆け寄ってくる。

「すまない、2度も私のミスで……」

「慣れてないんだろ？ なら仕方ないさ、私が抑えるから見ている」

「悪いな、任せた」

もう1点もやるわけにはいかないが、どうにも流れが悪い。

三振に切り取って終わらせたいと願う神田だったが、そう上手くはいかない。

次の打者にも内角を粘られ、三振を奪う為に外角に投げる。

そうすると流されてサード方向への打球となる。

「斑鳩っ！……落ち着け、一塁！」

斑鳩は強い打球を前に弾いてしまい、神田の指示で急いで一塁に送球するもセーフ。

内野安打で更に1点を追加されてしまう。

「うちの左側の守備が酷いのを知っててやりやがったな」

「まあ狙いますよねー、というか雪風これで狙われるの2回目じゃん……」

「レフト方向に飛ばされたらほぼ終わりだな」

次の打者にもサードへのゴロを打たれる。

——またこつちに……舐めやがって。私はそこまで壊滅的な守備じゃない！

普段のクールさはどこへ行ったのか、苛立った様子の斑鳩が打球を処理する。

「2点はアカイな……翠風どうだ？ まだ投げられそうか？」

「余裕です、何なら完投も出来そうです」

「それやると浜矢の出番が無くなるからやめてくれ、世間が色々うるさいから」

エースが1試合しか登板しないと、高校野球ファンも黙ってはいないだろう。

勝利とは別に浜矢を登板させなければならぬという、別のミッションも存在している。

——雉鳥は俊足の左打者。ここは一発やってみるか。

監督からのサインを受け取り、雉鳥は大きく素振りをする。

彼女はパンチ力のある打撃が売りの打者、警戒して内野が少し後退する。

——内野は後退、そして初球はストリート……決める！

セーフティーバントを試みて、三塁側にボールを転がす。

ファールラインの手前で止まった打球を投手が掴み、一塁へ投げるが雉鳥の方が早い。

「よしセーフティー成功！ ナイスバント！」

「時雨は送りバントは苦手なんですけど、セーフティーは結構得意なんですよ……よく知ってましたね？」

「そういう奴がウチにもいるからな」

監督が言ったのは岡田の事だ。

彼女も送りバントは出来ないが、セーフティーの精度はかなり高い。

ここはヒットで繋ぎたかった佐久間だが、セカンドへのゴロを打ってしまった。

幸い併殺にはならなかったが、一塁上で悔しそうにしている。

1点でも奪いたい日本打線、ここで打席を迎えるは飛鷹。

彼女の顔にはまだ迷いがある。

——我が手で決着を付けてもいい。だがそれでは……。

迷いはあるが来た球にはしっかり反応し、バットを強く振り抜く。

右中間を真つ二つに破るツーベースとなり、二・三塁の大チャンス。

——まだ涼風は悩んでいる、ここで私が打つたら多分ずつとあのスタイルを貫くだろう。……けど、敗退行為は出来ない。

飛鷹の事を思つて自分は決めたくないが、そうしたら日本は負けるかもしれない。

斑鳩もまた悩んでいたのだ。

結局勝利を選んだ斑鳩は、レフトへ犠牲フライを放つ。これでようやく日本にも1点が入った。

「お前も大変だな」

「神田……まあ、慣れている」

「飛鷹の事を考えたら打ちたくないが打たないとまずい……アイツは、自分のやり方で誰かが悩んでるなんて知らないんだろうな」

「……そうだな」

——それを教えてやればアイツは変わるのかもな。だけど、そんな消極的な理由で本当に殻を破れるのか？ アイツの意思で打たせてやりたい。

神田も飛鷹の為に頭を働かせていた。

援護が結局1点止まりだったのも気に留めず、5回表のマウンドに上がる。

殻を破れない飛鷹に対する怒りなのか、今までよりも球速が上がった。

タイプイは2番からの好打順だったが、先頭はレフトフライ。

——レフト方向に打たせたくないが、外一辺倒だと普通にヒットにされる……なら！内角の少し甘めのコースへのスライダー。

これは強く弾き返され、痛烈な打球は三遊間を襲う。

「鈴井！」

「任せて」

この打球に鈴井が飛びつき食い止める。

「助かったぞ鈴井」

「シヨートは抑えるつて言ったでしょ、もっと打たせて良いから」

「……信用してるぞ」

互いにフツと笑い合い、背を向け合う。

ライバルだった2人が今は互いを信じ合っている。

最後は空振り三振に仕留めてこの回は無失点。

——残り4イニングで2点か、厳しいな。やはり飛鷹が覚醒してくれれば……。

ベンチで指揮を取る監督も頭を悩ませている。

どうすれば飛鷹を覚醒させられるのか。

だがそれに気を取られてこのまま点が取れなかったらどうするのか、様々な可能性を想定している。

第39球 試合を決めるのは

5回裏、2アウトから孤塚がヒットを放つも内川は続けず無得点。

試合の終わりが刻一刻と近づいてくる中で、未だ状況を打開出来ない状態だ。

「このままいけばギリギリ8回まで投げられる、頼んだぞ」

「打たせて取りたいのに、それが難しいのが嫌ですね」

「ライト方向に打球集中させられれば平気なだけだな」

——普通に三振狙った方が楽だな、スカウトからの評価も上がると思うし。

二者連続で見逃しの三振を奪い、最後は内角のスライダーを詰まらせてセカンドフライに打ち取った。

日本が勝ちたいと強く思うのと同じように、タイペイの選手だって負けるつもりはない。
い。

エースのワンの球数はまだ60球を超えた程度。

最後までマウンドを降りる気はないようだ。

気合の入ったワンはノビのあるストレートと変化の大きいスライダー、落差のある

フオークでここも日本打線を4人で抑える。

——向こうのエースからは気迫を感じられる、私も負ける訳にはいかない。

対する神田も右打者へのクロスファイヤーや鋭く落ちるスプリット、タイミングを外すカーブを武器に次々と三振を奪う。

エース同士の白熱した投げ合いに、球場のボルテージはじわじわと高まっていく。

7回裏、8回表も点は動かず2対1のまま。

8回裏は1番から始まる好打順、ここで決めなければならぬ。

「ワンの球が高めに浮くことが増えてきた、内川は高めが得意だろ？ 追い込まれるまで低めは全部捨てて打っていけ」

「分かりました」

監督の言う通り、初球が高めに外れて1ボール。

2球目は低めの難しいコースに投げられたが、手を出さず1ストライク。次も外に大きく外れてバツティングカウント。

投げられたのは高めへのスライダー、内川が得意としているコースだ。

——絶好球！ ……いや、少し曲がりがつ!?

想定よりも変化したスライダーに、バットを止めるがスイングと判定され三振に終わる。

雉鳥は内野がセーフテイーを警戒して若干前に出ているのを見て、長打を意識したスイングをする。

だがそのせいでコンタクトが上手くいかず、打ち上げてしまい2アウト。

この場面でタイムを取り作戦を伝える。

「佐久間、お前は何も考えるな。チームの為だとか国を背負ってとか、そんなのはどうでも良い。自分の為の野球をしてこい！」

「はい！」

右打席に入った佐久間は、ヘルメットを触りながらバットでホームベースを3回叩く。

——自分の為の野球か……そんなの決まってる、ここで同点ホームランを打つ事だ！
誰よりも活躍したい、目立ちたい。

そんな理由で投手の道を選んだ彼女が、今は野手として日本代表にいる。

拙い守備で失点を許しても、彼女は絶対に落ち込まない。

沈んだ心でホームランを打つ事が出来ないと知っているから。

彼女に向かって投げられたスプリット。

真ん中からストライクゾーンの際に落ちるように投げられたが、佐久間という選手はゾーン内の球には滅法強い。

——甘いんだよ！

高校生離れた体格から生み出される、強烈なスイング。

基礎なんて固まっていけないようなめちやくちやなスイングだが、彼女にはそれが合っていた。

芯で捉えた感触を両手に感じ、腕を素早く振り抜く。

勢いの強すぎるスイングは自分の体を泳がせ、打席に片膝をつく。

白球は左中間を貫いていき、100m先にある高さ1.5mのフェンスに直撃する。

膝をついたあとすぐに立ち上がり、走り出した彼女は二塁に到達した。

——打ち損じたか、あと少してホームランだったのによ。

佐久間は知らないうちにお膳立てをしていたのだ。

4番に座りながらも未だ打点を上げていない、殻を破る前の彼女の。

《4番^{センター}中堅手 飛鷹涼風》

一発逆転のチャンスで観客からの大歓声を背に、ネクストバッターズサークルから歩き出す飛鷹。

打席に入る前にベンチの方を見て、サインを確認する。

——飛鷹に出すサインなんて、たった1つに決まってるだろ。

出されたサインは当然『強振』。

監督の出すこのサインは、ホームラン狙いを意味する。

——ホームラン狙いか……だが我が背中を預けるは雪風。

このサインが出されてもまだ、周囲を活躍させる事を考えている飛鷹。迷っているというのは、ベンチにも伝わっている。

ベンチに座っていた者が、大きな音を立てて立ち上がる。

そしてベンチのフェンスに手を掛け、怒りと信頼の混ざった声でぶつける。

「飛鷹！ お前が決めろ!!」

「……………」

声を上げたのは神田だった。

強豪校で4番を打っていた彼女からすれば、飛鷹のやり方は気に食わない。だから彼女は鼓舞しているのだ。

「……そうですよ涼風さん！ 貴女が決めて下さい！ 私が打てなかったんで……」
「ホームラン打っちゃえ！」

更にベンチから飛び出す勢いで前のめりになっている、雉鳥と大鷲からも声援がぶ。

飛鷹は思わず後ろを振り向いて、助けを求めるように斑鳩の方を見る。

「……私は決めない、4番は涼風だからだ」

最後の砦だった斑鳩にも背中を押され、観念したように飛鷹は前を向く。

——あの反応を見るに、随分と周囲に心配と迷惑を掛けていたようだな。……そんな事にも気付けないでキャプテンか、自分で決められなくて4番か。

飛鷹の今までの打撃を見て、ホームランは無いと判断したか。

初球からストレートをゾーン内に入れてくる。

内角低めのその球は、一般的に絶好球と言われる球だ。

——私は日本代表の4番だ。ここで私が打たないで……誰が打つんだ！
右足を大きく上げるが、軸足は揺らがない。

バットをしならせてボールの軌道に合わせ、インパクトの瞬間。

これまで全くブレていなかった上半身を回転させ、全身で振り抜いた。

「行けっ……！」

「超えろー！」

「切れるな、入れー！」

白球はライトのポール際に向かって飛んでいく。

切れるか切らないか、その境界線を打球が襲っている。

歓声で埋め尽くされた球場内に、何かにボールがぶつかった音が響く。

ポールに当たった打球がグラウンド内に落ちる。

「逆転ホームラン！」

「涼風ー！ ナイバッチー！」

「……全く、世話かけやがって」

逆境でのホームランにベンチ内は大盛り上がりだが、神田は一人やれやれと言った表

情。

だがその口元は緩んでいた。

ゆっくりとダイヤモンドを一周した飛鷹は、斑鳩とハイタツチを交わす。

日本代表に招集されてから初のホームラン、初のハイタツチだ。

「雪風ありがとう……それと今まで悪かった、ずっとプレッシャーをかけ続けていて」「やつと気付いたのか、私はそこまでメンタル強くないんだよ!」

「イテツ、本当にすまなかった」

本気で背中を叩かれて、叩かれ箇所をさすりながらベンチに戻ってくる。

大鷲と雉鳥には飛びつかれ、神田とは小さくハイタツチ。

「飛鷹良くやった、お前はやつぱりはこの世代最高の打者だよ」

「監督も今まですみませんでした、私のせいでこんなに苦戦してしまいましたし」

「本当だよ! ……まっ、これからはお膳立てなんか考えず、決められる所は決めろよ」

「はい、必ず」

逆転されたとはいえまだ1点差、ここを諦めなければ必ずチャンスは迎えられるはず。

そう信じるワンは斑鳩を意地で抑え、8回を締めた。

9回表に入る前に選手交代のアナウンスが流れる。

アナウンスが流れ出すと、監督だけではなく神田や飛鷹もニヤツと笑う。

——さあ最後は頼んだぞ……背番号18エース！

《投手代わりまして浜矢伊吹 背番号18》

日本のエースナンバーを背負った浜矢が、決勝戦の最後のマウンドに登る。

そしてそれと同時に、彼女の相棒である鈴木も途中出場。

「さあ伊吹ちゃん、ここを抑えれば一面飾れるよ」

「マジか!? なら2人で一面飾っちゃおうぜ!」

台湾は2番からの好打順で攻撃を迎える。

ここでヒットを許せば4番のリンに還される可能性がある。

試合の展開としても浜矢の気持ち的にも、何としても3人で締めたい。

——最初はやっぱりストレートからね。

決勝の舞台で最初に投げたのはストレート。

球速は佐久間や神田には劣るが、浜矢が凄いのはそのノビ。

本来の球速以上に感じるこの球で、数々の強打者を三振に仕留めてきた。

2球目はタイミングを外す目的でインハイにカーブを投げ、次の外角のスライダーを見逃させ追い込んだ。

——私の魔球……打てるもんなら打ってみな！

4球目はアウトローへのスライドフォーク。

ストレートとほぼ同じ軌道から曲がりながら落ちるこの球には、バットは空を切り三振。

ワンバウンドしたボールを鈴井はしっかりと受け止め、振り逃げも許さない。

2人目は3番に入ったり・ピンユウ。

右の巧打者である彼女には、力で押ししていくと言わんばかりにストレートを連投する。

カウントを1—2としてからの4球目はカーブ。

外角に外れる球には釣られず並行カウントになる。

——ずっと速球で攻めたのにカーブに釣られない、良い打者だね。けど次のこの球はどうかな？

内角の身体近くに投げられた球。

ピンユウは反射的に仰け反ったが、ボールはそこから斜めに曲がり鈴井のミットに収まる。

「ストライク！ バッターアウト！」

勝負球として選ばれたのはスライダー。

外のカーブで距離感を惑わしてからの身体付近の球。打者は当たると感じて避けてしまう。

3対2の接戦で、2アウトでの打者として迎えるのは4番リン。

外のスライダーでまずは空振りを取り、1ストライク。内角を挟むツーシームは見送られ1ボール。

次はスライドフォークに当てられるが、キャッチャー後方へのファーストなり2ストライク。

——この人は低めは得意、最後は高めに投げてね。コントロールミスらないでよ。

鈴井がサインを出して高めに構える。

——私を誰だと思ってるんだ、やる時はやるぜ？

浜矢はマウンドで浮かべた不敵な笑みを、グラブで隠す。

——それにこんな面白い状況、浜矢が燃えない筈がないよな。

ベンチで腕を組んで試合を眺める監督は、既に勝利を確信したかのようだ。

いつもより長く間を取ってから左脚を引き、素早く上げる。

左膝をグラブで一度優しく叩き、大きくテイクバックを取る。

——これが、最後の1球だ！

振り下ろされた右腕から投げられるストレート。

他の投手と比べ初速と終速が殆ど変わらず、全く落ちないストレート。

その違いが打者の感覚を狂わせボールの下を振らせる。

高めに投げられれば余計に見極めは難しいだろう。

リンのバットが空気を裂きながらスイングされ、その直後。ミットにボールが収まる

音が響き渡った。

「ストライク！ バッターアウト!!」

「うっし！ 優勝だー!!」

最後のアウトが宣告され、浜矢は両腕を天に掲げる。

鈴井が真っ先に駆け出して浜矢に抱きつき、それに続くようにグラウンドからチーム

メイトが集結する。

BFA史上初となる同一国による連覇。

その快挙をこの黄金世代は成し遂げてしまった。

「へへっ、どうよ？ 私の投球は！」

「相変わらず恐ろしいストレートとフォークだったよ、流星は私のライバルだ」

「だろー？」

「私もライバルに混ぜろー！」

浜矢と神田がお互いの健闘を称えていると、大鷲が乱入してくる。

そこから他の投手陣も集まってきて、まさにお祭り騒ぎだ。

楽しい時間はすぐに終わるもので、翌日の解団式も終わり別れの時を迎えた。

選手達は大会初日とは比べ物にならない程、顔が大人びた。

「黄金世代って前評判はその通りだったみたいで安心したよ。これは全員で掴んだ優勝だ、誰一人欠けてもこの結果は無かっただろう」

監督はそう言うと、全員の顔をゆっくりと見渡す。

全員の顔を見終わってから満面の笑みで言った。

「最高の景色を見せてくれてありがとう！ お前達が歴代最強の世代だ！」

この言葉に選手達の表情が緩んだ。

グータッチを交わして最後の別れを告げる者や、道具の交換をする者もいる。

「じゃあ解散！ 次は多分、プロの舞台で再会することになるだろうな」

「ドラフトで最多競合してやるぜ」

「それをするのは私なんだがな」

「フツ……数多の注目を浴びし者は、この飛鷹涼風以外にありえない」

誰がドラフトで一番指名を集めるのか対決しよう。

プロ志望届をだすメンバーはそう約束し、今度こそ解散する。

飛鷹達、ディーバのメンバーと神田と孤塚は東京へ。

内川と海崎は福岡へ。

鈴木と浜矢と監督は、地元神奈川へ帰る道を歩き出した。

最終章

第40球 自分の道を選んで

日本代表がアジアを制したU—18決勝戦から3日。

久しぶりに至誠に戻ってきた3人は、懐かしさを感じながら校舎内を歩く。

「おっはよー!」

「ハマせんばーい! 決勝かつこ良かったです!」

「ありがとー! ……なんか安心するなあ」

見慣れた顔と見慣れたグラウンド。

浜矢達は至誠独特のこの空気に、安心感を覚えた。

「私達がいけない間もちゃんと練習やってたか?」

「私が見張っていたので平気ですよ」

「それに私もいますから」

「そういえばそうでしたね」

監督が居なくとも、千秋と小林がいる。

2人がいる限り部員はサボる事など出来ない。

「1・2年は秋があるからな、まだまだ練習頑張るぞ！」

『おー！』

監督達が帰ってきてきて気合十分な1・2年生は、大きな声で返事をする。

「私達は何してよっか？」

「各メディアが注目してるだろうし、2人で室内で練習してれば喜ばれるぞ」

「客寄せパンダってこういう事なのかな……」

「どちらかと言うと動物園の動物だよな」

下級生の練習の邪魔にならないよう、鈴井と浜矢は2人で室内練習場を使って練習をする。

ネットを設置して浜矢が軽く投げ、それを木製バットで鈴井が打ち返す簡単な打撃練習から行う。

「鈴井は木製でも簡単そうに打つよな」

「まあU—18で慣れたからね」

「これならプロでも通用するんじゃないかね？」

「そんな上手くないかないよ。球の質だって違うし、何より体力がフルシーズンもたない

だろうし」

コントロールも直球の質も、変化球の精度も高校とはまるで違う。

そんなプロの舞台で、高卒ルーキーの野手が活躍出来た例は少ない。

2割打つのがやっとではないか、鈴木はそう言った。

「投手の方が通用しやすいし、伊吹ちゃんはそこそこいけるんじゃない？」

「防御率3点台前半目標にしようかな」

「目標としてちょうど良いと思うし、伊吹ちゃんなら達成出来る気がするよ」

カゴ1つ分のボールを打った鈴木。

その片付けをしてから、ふと疑問を持ったようだ。

「そういえば伊吹ちゃんって、木製での打撃練習そんなにしてないよね？」

「いやー、だって野手として起用しないって言われたし……」

「ふーん……プロ野球は12球団中6球団がDH無いのは知ってるよね？ ……伊吹

ちゃんも打てるようになるよ！」

「やっぱりこうなるのか……」

今度は鈴井のトスで浜矢が打つ事になった。

少しでもスイングが乱れれば指摘され、ラストがなかなかこないスパルタ指導。

浜矢はカゴ2つ分のボールを打たされ疲れ切っている。

「形にはなつたんじやない？ まだまだだけどね」

「鬼かよ……」

「エースたるもの自分で打たなきや駄目でしょ、打線弱いチームに行く可能性だつてあるんだし」

「その通りです……」

——至誠はそこそこ打線強かつたし、これに慣れてたら苦労しそうだよなあ。

プロ入団後の無援護を想像し、ゾツとする浜矢。

そんな悪い考えを断ち切るように2人は練習を続けた。

翌日の放課後、教室では千秋が1枚の紙を眺めて唸っている。

「せーんしゅつ、まだ進路決まらないのー？」

「伊吹ちゃん……そうなんだよね、やりたい事はあるんだけど候補が多すぎて……」

「何やりたいの？」

「高校の教員か調理師、もしくはスポーツインストラクター……」

浜矢が進路希望の書かれた紙を覗くと、確かにその3つが書かれていた。

「最後以外野球関係なくない？ 意外だね」

「高校の教員になって監督か顧問したいし、プロ野球チームの調理師になりたいの！」

「あ、そういうこと……」

——やっぱせんしゅーと野球は離せない存在なんだな。

「せんしゅーならどれも出来そうなのが厄介だな」

「そうなんだよ！ 明らかに無理なら諦めるけど、どれも実現出来そうなんだもん……」

「なるほどね、まあ自分が一番やりたい事をやればいいと思うけど」

それが出来たら苦労しないと聞いたげな顔の千秋。

浜矢も流石に人の進路に口出しは出来ず、曖昧な笑いしか返せない。

「美希ちゃんと伊吹ちゃんはいいなあ、進路決まってる」

「指名されなきゃ大変な事になるけどな」

「優勝投手だよ？ 指名されるに決まってるよ」

「だと良いんだけど」

高卒で指名されなければ野球を辞めて働く。

家庭の事情的に浜矢はそのような進路になってしまう。

一番大金を稼げて、尚且つ得意分野である野球。

ここで稼ぎたいと本人も強く願っている。

「千秋さん、少し良いですか？」

「はい」

担任の小林に呼び出された千秋は、とぼとぼと歩いていく。

あまり人通りの多く無い廊下の一室に2人は入室する。

「千秋さん、進路の事なんですけど……」

「やっぱりそうですね、まだちよつと悩んでます」

「一応希望はこの3つですよね？　千秋さんならどの道を進んでも大丈夫そうですね」

「だから悩んでるんですよ……どこも目指せるからどこも諦められなくて……」

——思ったより深刻そうですね。ですが全部目指せば良い、なんて無責任な事は言えませんし……。

進路選択に悩む高校3年生はとても繊細。

下手な事を言えば自身の信頼にも繋がる。

「教員って難しいですか？」

「千秋さんであれば平気だとは思いますが、もし至誠の教員になりたいのであればその道はお勧めしませんね。確実に狙った高校に就ける方法なんてありませんから」

「ですよー、うーん……どうしよう」

この日はたっぷり2時間ほど話し合ったが、それでも結論は出ずお開きとなった。何でもこなせる千秋だからこそ悩んでしまう。

学校から5分歩いた所にある千秋の自宅。

家の中からは夕食のいい香りが漂っている。

「ただいま……」

「おかえり、つてどうしたの?」

「進路が決まらないよお」

「あらあら」

先程まで料理をしていたのか、エプロンを着用した母親に抱き着く千秋。

学校での様子からは想像出来ない姿だ。

「教員と調理師とインストラクターだっけ?」

「そう……どれも楽しそうだし、やりたいから迷っちゃって」

——お母さんなら何とかできるかなって思ったけど、流石にもう高校生だし自分で決

めた方が良いよね。けどやっぱり話しておきたいし……。

「……美月は昔から、ゲームで自分が大切に育てたキャラが活躍する時が一番嬉しそうにしていたわよね」

「へっ？ 多分そうだけど……」

「なら、それが答えなんじゃないかしら？」

「そっか……そっか！ ありがとうお母さん！」

通学用のリュックから進路希望の用紙を取り出し、一心不乱に書き始める。

——私が一番好きな事、私が一番嬉しい事は……これ！

「うん、良いんじゃないかしら？ お母さん達にも何か手伝える事があれば言ってね」

「わかった、何かあったら言うね！ 何も無いのが一番だけど……」

「美月は普段甘えてこないんだから、こういう時くらいは遠慮しないで良いのよ」

「あはは……」

何となく気恥ずかしさを感じ、照れ笑いをする千秋。

だがその次の瞬間には、覚悟を決めた表情に変わった。

翌日の部活の時間、千秋はいつにもなくソワソワしていた。

「せんしゅーどしたん？ めっちゃ落ち着きないよ」

「監督と早く話したいんだ！ 進路の事で」

「なんか進捗あった？」

「進路決まったよ！ それで監督にアドバイス貰おうとしてるんだ」

千秋がずっと悩んでいた事を知っている浜矢は、おめでとうと伝える。

その時、千秋のお目当ての人物がグラウンドにやって来た。

「監督！ おはようございますっ！」

「おはよう……なんか今日元気だな」

「進路決まったのでアドバイスを聞きたくて……」

「おっ、決まったのか。何にしたんだ？」

監督にそう聞かれて、待つてましたと言わんばかりのドヤ顔を見せる。

浜矢と監督、そして遅れてやって来た鈴井と小林が期待の籠った目で見つめる。

「高校野球のコーチを目指す事にしました！」

「コーチか……千秋なら出来そうだな」

「スカウトしてもよし、ノックしてもよし、戦術を考えてもよし……監督でも良いと思うけど」

「実はね？ 今度はコーチとして至誠に戻って来たいなーって思ってた……」

千秋がこう発言すると、4人揃って大きな拍手を送る。

コーチとして至誠に戻ってくると言った時の千秋の瞳が、余りにも輝いて見えたからだ。

「ですから監督、どこかお勧めの大学とかあったら教えていただけませんか？」

「私大学行ってないからなあ……あつ！ 現役時代のチームメイトも通ってた大学なんだけど、そこ結構良いって言ってたな」

「私でも入学出来ますかね？」

「勉強を全くしてこなかった野球選手が入れるんだ、千秋なら余裕だよ。今度資料持つてくるな」

だが1つだけ懸念材料があると監督は言う。

「そこ体育大学なんだよ、だから体育の授業必修だし厳しいかもな」

「大丈夫です！ 寧ろこれから先コーチをやる事を考えると、大学で体を鍛えるべきだと思いますから！」

「そうか？ まあ千秋も3年間練習に付き合ってたからな……いけるか！」

「はい！」

方向性は完全に固まり、3年生全員の進路は決まった。

あとは浜矢と鈴井がドラフトで指名されるのを待つだけだ。

ドラフトまではあと2週間。黄金世代である彼女達がどの球団に入るのか、世間からの大きな注目を集めている。

第41球 選ばれし者

10月25日。

未来ある若者達の運命が決まる日。

2018年度のドラフト会議は、例年よりも注目を浴びていた。

大学・社会人は不作ながら、高校生は10年に1度と呼ばれるほどの豊作の年。

若くて伸び代のある選手達が、どの球団に指名されるのか。

今年の高校生は投手も野手も豊作の奇跡の世代。

高い総合力と人気を誇る神田を始めとし、ノビのある直球と独特の軌道を描くフォー
クが武器の浜矢。

球速は遅いが繊細なコントロールと緩急を生かした投球をする大鷲、公立高校の星で
スクリューが決め球の海崎。

野手は三拍子揃った天才・飛鷹に、チャンスに強いスラッガーの斑鳩。

安打製造機かつ守備力も高い鈴井に、強肩巧打の名捕手孤塚。

守備はイマイチだが脚のある長距離砲の佐久間に、6割打者で守備も良い内川までい

る。

神奈川の安打製造機といえは宮崎もいるが、彼女はプロ志望届を提出しないで大学進学
の道を選んだ。

坂入や野元、内山も同じ選択をした。

「さあ始まるよ」

「どこに指名されるかなー」

至誠高校の特設会場には、大勢の記者やカメラマンが集まっている。

全国大会を制したバッテリーの進路に、興味深々というわけだ。

今季は柳谷の属する福岡スナイパーズが日本一に輝いた。

その為1巡目の指名順はパ・リーグからとなる。

『第一巡選択希望選手 福岡スナイパーズ』

神田翠嵐 投手 祥雲学院』

「いきなり神田か」

「まあ妥当ではあるよね」

ライバルとして争った神田の1位指名は、何も驚くものではない。

寧ろ彼女が1位指名を受けなければ、誰が指名されるのかというレベル。

『第一巡選択希望選手 広島レッドテールズ』

神田翠嵐 投手 祥雲学院』

いきなりの競合指名に、会場のざわめきが収まらない。

収まらないのはざわめきだけでは無い、神田の指名もだ。

埼玉ホワイトパンサーズは今井を指名したものの、東京ギガンテス、宮城ファルコンズ、名古屋サーペンツも神田を指名した。

「5球団競合って……」

「予想してたけど、まさかここまでとはね」

誰もが予想していたとはいえ、実現するとは思っていなかった。

神田翠嵐という選手の凄さが分かる。

『第一巡選択希望選手 大阪オーロックス』

神田翠嵐 投手 祥雲学院』

「あつ、オーロックスも指名した」

「姉妹共々獲る気だな」

翠嵐の姉である朱里が所属しているチーム。

球界最高と呼ばれた野手の姉と、高校最高と呼ばれた投手の妹。その2人が揃えばチームは躍進するだろう。

関西ジャガーズも指名を終えた次の事だった。

『第一巡選択希望選手 北海道フェンサーズ

飛鷹涼風 外野手 神聖鳳雛デューバ学園』

ここで高校最高野手の飛鷹が指名された。

指名権が残っているのは残り3球団、恐らく一本釣りとなるだろう。

テレビに映るフェンサーズの監督は、しめしめと言いそうな程のドヤ顔だ。

東京クレモリツが奥川を指名した、彼女もきつと一本釣りだろう。

だがここから更にドラフトは波乱の展開を見せる。

『第一巡選択希望選手 千葉マリンシーガルズ

斑鳩雪風 内野手 神聖鳳雛デューバ学園』

今季は貧打が響きパ・リーグ最下位に沈んだシーガルズが、打線のテコ入れにスラッガーの斑鳩を指名した。

そして一巡目の最後の指名が行われる。

『第一巡選択希望選手 横浜ブルーススターズ』

浜矢伊吹 投手 至誠高校』

「……へっ? 私?」

「伊吹ちゃん、ドローだよ!」

「マジか!?! しかも地元じゃん! やった!」

信じられないという顔をしていた彼女だったが、会場の大歓声と鈴井の言葉により現実を受け止めた。

高校から本格的に野球を始めた初心者が、地元球団のドラフト1位選手になったのだ。

「てか飛鷹達も一本釣りか」

「シーガルズとフェンサーズは良いドラフトしたね、あの2人は本来なら競合するような選手だよ」

飛鷹も斑鳩も圧倒的な打撃成績を誇っていた。

例年であれば4球団以上の競合は堅かった選手。

ドラフト会議の会場では、神田の交渉権を巡って抽選が行われる。長い沈黙を破り、くじを掴んだその腕を掲げたのはオーロックス。

姉妹揃っての同球団が今ここで実現した。

「うわ、オーロックスかよ」

「パ・リーグでよかったじゃん、あんなチーム同リーグだったら嫌だよ」

「確かにそれはそうだな」

外れを引いた他の5球団が1位指名をし、栄光のドラフトに輝いた選手達へのインタビューが始まる。

「神田選手！ まずは今のお気持ちをお聞かせください！」

「他にも素晴らしい選手がいる中で、こんなに沢山の球団に評価をして貰えた事がなにより嬉しいです」

「お姉様である朱里さんと同じチームになりましたが、その点はいかがですか？」

「実は私達は、歳の差もあり同じチームでプレーした事は無いんです。だからようやく願いが叶ったなという気持ちです」

模範的な回答をした神田を、番組のコメンテーターも絶賛する。

「飛鷹選手！ フェンサーズが一本釣りをしましたが、今のお気持ちはいかがですか？」
「輝きを放つ数多の星達に目を奪われず、私という存在が選ばれた……嬉しいですよ」

最初こそ普段通りに話していたが、流石にテレビで放送されるとなると恥ずかしいのか最後は厨二病の話し方はしなかった。

「プロでの目標は？」

「1年目からレギュラーを奪い、北海道の方々の心を奪ってみせます」

最後にウインクを決める飛鷹らしさも見せた、個性的なインタビューだった。

「斑鳩選手、今の心境は？」

「……自分がここまでの評価をされて嬉しいですよ」

「シーガルズの印象は？」

「12球団でトップの応援だと思うので、その中でプレーするのが楽しみです」

表情が変わらないままのクールな会見に、翌日の朝刊やネットニュースで指名拒否をするのではないかと騒がれたのは別の話だ。

「浜矢選手！ 今の心境をお聞かせください！」

「地元のチームですし、まさか1位指名されるとは思っていなかったの……喜びより

も驚きの方が大きいです」

「ブルースターズの印象は如何ですか？」

「……やっぱり地元ですし、昔から中継を見ていたチームなので馴染み深いチームですね」

——流石に、最近低迷しているチームとは言えないよなあ。

印象を聞かれて言葉に詰まった浜矢。

ブルースターズはここ最近最下位争いしかしていない、暗黒真つ只中のチームだ。

正直にこの事を言う浜矢ではなく、曖昧な言葉を記者には返した。

波乱の一巡目指名が終わり、二巡目の指名が行われる。

指名はセ・リーグ6位のブルースターズからだ。

『第二巡選択希望選手 横浜ブルースターズ

鈴木美希 捕手 至誠高校』

「私も同じチームだよ、伊吹ちゃん」

「もうちよつと喜べよ……」

「私の中では喜んでる方だから」

確かに普段より少しだけ表情が柔らかい。

高校を卒業してからも、浜矢と同じチームに居られることが嬉しいようだ。

二巡目の指名は社会人や大学の選手が多い中、このチームが動いた。

『第二巡選択希望選手 宮城ファルコンズ』

大鷲千晴 投手 神聖鳳雛デューバ学園』

この高い順位で指名されるとは思わなかったのか、大鷲は驚愕の表情を浮かべている瞬間をカメラに抜かれてしまった。

「おめでとう千晴」

「……ドツキリ？」

「そんな訳あるまい！ これは千晴の実力で勝ち取った栄光……堂々とするがいい」
斑鳩と飛鷹に確認を取っても、まだ実感が湧いていない様子。

「大鷲選手、今のお気持ちは？」

「えつと……とにかく嬉しいです、こんな高い順位で指名していただいて……」

「かなり驚いた顔をされましたが、この順位は予想されていなかった？」

「はい、指名されても下位かなと思っていたので。まだ実感が湧かないです」

インタビューを受けていくうちに受け止められたのか、徐々に凜とした表情になって

いく。

三巡目は高校の選手が多く指名されていく中で、この選手達も指名された。

『第三巡選択希望選手 福岡スナイパーズ』

内川優奈 内野手 小倉北高校』

「えっ3位!? 本気で言いよー!? ドッキリやなか!?!」

「ドッキリな訳なか落ち着いて、それとおめでどう」

「ありがと終!」

公立高校から3位指名という高順位。

内川は思わず立ち上がって言葉を叫んでしまい、隣に座る海崎に鎮められる。

『第三巡選択希望選手 関西ジャガーズ』

孤塚志黄 捕手 祥雲学院』

「志黄おめでどう」

「ありがとう、同じ関西のチームだね」

神田は大阪、孤塚は兵庫のチームに入団する。

名バツテリーが離れ離れになるが、これが普通だ。

浜矢と鈴井のケースがレアすぎるだけだ。

黄金世代の注目選手の殆どが指名されていく中、複数の球団が更に仕掛ける。

『第四巡選択希望選手 埼玉ホワイトパンサーズ』

海崎 投手 小倉北高校』

「柘も呼ばれたやん！」

「同じリーグやな、負けんばい」

「絶対打つからね！」

『第五巡選択希望選手 関西ジャガーズ』

佐久間玲 外野手 蒼海大相模高校』

「佐久間じゃん、意外と低いな」

「身体能力だけで野球やってる感あるしね……それに野手転向したばっかだし」

「守備が酷いからな……下手すりゃU-18で評価下げたんじゃ」

浜矢と鈴井がこんな会話をしているとは知らずに、佐久間は堂々とした佇まいでインタビュウを受ける。

野手転向したての不安なども微塵も感じさせない話しっぷり。

『第五巡選択希望選手 広島レッドテールズ』

菊池悠河 内野手 栃木ゴールデンエンジェルス』

「菊池先輩！ そっか、独立だと1年で指名されるって言ってたな」

「高卒1年目の指名とか久しぶりじゃない？ 確か滅多に居なかった気がする」

鈴井の言う通り、高卒1年目の独立リーグの選手がドラフトで指名されたのは滅多に無い。

その中で支配下選手として指名されたのは、12年も前の事だ。

ドラフト会議が終わっても会場は大盛り上がり。

ブルースターズの帽子を被り胴上げをされる浜矢と鈴井は、全国制覇を決めた瞬間と同じ位の笑顔を見せていた。

「2人ともおめでとう！ 涼香……八神と同じチームだな」

「そうだ八神さん！ ピッチングの事とか教えてもらおう」

「監督から見てブルースターズってどうなんですか？」

「あー……正直やばい」

頬を掻き、苦笑いでそう答える監督。

だがこう答えられるのは予想していたのか、浜矢と鈴井も口を揃えて“やっぱり”と

顔が赤く染まる浜矢を気にせず、鈴井はじつとその眼を見つめる。

「伊吹ちゃん、私に何か言うことあるんじゃない？」

「な、なんのことでしょうか……」

「……全国大会の決勝戦の前日」

「ウツ」

痛いところを突かれた浜矢は、うめき声のようなものを上げる。離れたたくても鈴井がその手を強く掴んでいる為、逃げられない。

やがて観念したように、真つ赤な顔のまま息を吐く。

「……………鈴井の事が、好きです」

「目を見て言つてよ」

「やっぱり鬼じゃ……ん」

鈴井の顔を見た瞬間、浜矢は目を見開いた。

ずつと冷静で自分をリードしてきた彼女が、自分と同じかそれ以上に顔を赤く染めていたから。

——嘘でしょ、鈴井がめっちゃ可愛いんだけど。いやいつも可愛いけどそれとは違うというか。

「鈴井……」

「何？ 私だって……好きだったんだよ」

「ほ、本当に？ いつから？」

「……2年の夏から、もっと具体的に言うとか蒼海大戦から」

あの時の浜矢の姿に惚れたのだと告げると、浜矢の顔が更に赤くなる。

「私だけ言うのは不公平なんだけど、伊吹ちゃんはいつなの？」

「………最初から」

「えっ」

「一目惚れでした……」

またしても2人は無言になる。

——一目惚れとか聞いてないんだけど、てかそんなそぶり今まで見せなかったじゃん。本当になんなの。

「とういか！ なんであの時告白してくれなかったの!？」

「だ、だって……別のチームになったら嫌だし……」

「そんな理由で!？ 別に、違うチームになっても好きなままだよ……」

「はっ!? ちよつ、不意打ちやめろ!」

お互いの言葉がお互いの心にクリティカルヒットし合う。

照れながら言い合っていると、扉の方から物音が聞こえた。

「まさか……」

「……2人ともごめんね?」

「私達もタイミング悪かったけど、場所を考えろよ……」

「か、監督……せんしゅ……それに小林先生まで」

誰も居ないと思って話していたというより、誰かが聞いている、なんて考えが頭に無かった2人。

揃って今日1番に顔が赤くなってしまう。

「まあなんだ……おめでどう」

「2人ともまだ付き合ってたんだね」

「長かったですね」

「からかってません!?!」

浜矢の悲痛な叫びが教室にこだまする。

何も言えない鈴井と、何か喋らずには平常心を保ってられない浜矢。

「先輩として言わせてもらおうけど、意外と遠距離でも長続きはするぞ」

「ん？ 先輩……？」

「あれ、言ってなかったか？ 八神と付き合ってるんだが」

「なんで3年間言ってくれなかったんですかー!!」

監督の更なる爆弾投下に、今までで1番の大声を出す浜矢。

大笑いする監督に笑いを堪えきれない千秋と小林、ようやく顔の赤みが引いた浜矢と鈴井。

何はともあれ、浜矢と鈴井の名バッテリーはこの日を境に無事お付き合いを始める事になった。

最終球 君色の栄冠

今年もまたこの季節がやってきた。

桜の花びらが舞い散る別れの季節が。

普段は禍々しい話し方をする生徒が多いデューバでも、今日ばかりは本来の話し方を
出している。

「遂に卒業か」

「早かったねー、あつという間！」

「そうだな……2人はこの3年間、楽しかったか？」

飛鷹の問いかけに大鷲は満面の笑みで、斑鳩は口角を少し上げて答える。

「もちろん！ 毎年全国出られたしね」

「……日本代表にも選ばれ、とても充実した3年間だった」

「だと思っただけ、私も同じ気持ちだからな」

飛鷹が空を見上げると、2人も続いて上を向く。

「私達全員。パ・リーグだし、プロに入ってからはいっぱい対戦できるね」

「……負けないぞ」

「打ち取られる訳にはいかないな」

プロに入ったら何がしたい、メディアに言わなかった本当の目標は何か。

キャンプで感じたチームの雰囲気はどうかなど、色々なことを話していると。

「せーんぱい！ 何話してるんですかー？」

「時雨！ プロに入ったら何しよつかなーって」

「そんなの全員タイトルホルダーに決まってるじゃないですか！ そしたらディーバの誇りですよ！」

「姉さんは最低でも2つはタイトル獲ってよね、三拍子揃ってるんだから」

後輩2人がやってくる、途端に賑やかになる。

厨二病もそうでない者も楽しそうに話している、これこそがディーバという学園が求めていた姿だ。

「……私さ、ディーバに入学して良かったよ」

唐突にぽつりと大鷲が呟く。

突然の言葉に皆が困惑している中、飛鷹と斑鳩は頷いていた。

「ディーバに入学した奴の中には、厨二病が多いからな」

「我が性質を受容できぬ者は世に多く存在する、その為孤独と付き合い続けた生徒も多い……」

「うん……けど、ディーバではありのままの自分が受け入れられるんだ、だから凄く楽しかった!」

飛鷹と斑鳩は普段のキャラとしてでは無く、心の底からの笑顔で大鷲を抱きしめた。

それを見た風華と雉鳥も、顔を見合わせて微笑み合う。

飛鷹、斑鳩、大鷲はこの学校に救われたんだ。

周囲の目を気にせず涙を流す者は、何処にでもいる。名門祥雲学院でも例外ではない。

「……っ! 先輩たち、っ卒業しないでください……!」

「泣くな紫音、もうキャプテンなんだぞ?」

鼻をすすって泣きじやくる兎川の瞳を、神田がハンカチで優しく拭く。

「でも……っ! 先輩たちいないとっ、不安で……!」

「バッテリーとクリーンナップが居なくなるもんね……けど、私達が居なくなつて奮起している2年生もいる。その子達がきつと祥雲を支えてくれるよ」

「孤塚せんばい……」

3年生が居なくなった事により、周りには同い年以下しか居なくなる。その絶好のチャンスを活かそうと奮起する者は多く存在する。

「今の2年は実戦経験はほぼ無いからな……紫音が引つ張ってやってくれ」「つ……はい！」

神田の言葉にずっと流れていた涙を拭い、決意と覚悟の籠った凛々しい顔をする。毎年のように優勝候補として祭り上げられる祥雲のキャプテン。

それは想像よりも遥かに苦勞の多い地位だろう。

だが兎川には鹿瀬という頼りになる幼馴染や、ずっと凌ぎを交わしてきた同級生が付いている。

恐らく今年の祥雲も強くなるであろう。

同じ頃の至誠では、泣いている者は1人も見当たらなかった。

それどころか全員が前を向き、次に向けての決意を決めた顔をしている。

「連覇目指して頑張ってくれよー！ 春はもう出られないの決定しちゃったけど……」「私達しか居なくならないんだし、他校よりは戦力の減少が少ないしね」

至誠の秋は準決勝敗退という結果に終わった。

だが鈴井と浜矢と千秋抜きでも、試合をしつかりこなせたのは大きな収穫。貧打も徐々に改善されていき、夏への期待が掛かる。

「自主トレの時期になったら戻ってきて下さいよー！」

「それは当然、活躍して戻ってくるよ」

岡田の要望を快く受け入れる浜矢。

彼女は既に、プロでの活躍すらも約束していた。

「千秋もいつでも帰ってきていいんだからな？ 事前に連絡くれれば」

「コーチになるまで来ないつもりだったんですけど……そう言われたら来ちゃいますね
！」

「大歓迎だ！ 気になった事とかあったら指導してくれてもいいし、というかこつちと
しても助かるから」

選手ではない彼女もまた、指導者としての帰還を誓った。

灰原監督と顧問の小林、そしてコーチの千秋という体制になる日が待ち遠しい。

祥雲では既に解散の時間を迎えていた。

神田と孤塚は、最後に祥雲のグラウンドに向かう。

「……静かだな」

「静かなグラウンドってなんか不思議だよね」

いつもは明るく大きな声が飛び交っているグラウンド。

今はそんな姿を微塵も見せず、静寂のみが支配している。

「私達はリーグは違うけど場所は近いから会いやすいね」

「だな……志黄、今までありがとう。プロに入ってからからは敵同士になるが、手加減はしないからな」

「それはこっちの台詞だよ、翠嵐の球は私が1番見てきてる……打ってみせるよ」

2人は顔を見合わせて小さく笑い合う。

笑い声が収まり再び静かになった時、神田の左手が孤塚の右手を優しく包み込んだ。

「……本当にありがとう、志黄は私の最高の相棒だ」

「それもこっちの台詞、翠嵐とずっと一緒にいられて良かった……祥雲を選んで良かったよ」

「長い間苦勞はかけてしまったがな……愛想を尽かさなくて助かったよ」

「私が翠嵐から離れるなんてありえないからね」

神田は愛おしげに孤塚を見つめ、その右手の甲に口付けをする。

手の甲への口付けは、相手への敬愛を意味する。

その意味を知っている孤塚は、恥ずかしそうに。だがとても嬉しそうにはにかむ。

「翠嵐、好きだよ」

「……私もだ」

お返しとして孤塚もまた、神田の手の甲に口付けをする。

その唇の感触があつた箇所を眺めて、感慨に浸っている。

至誠でも別れの時間はやってくるがその前に3人は動いた。

浜矢、鈴井、千秋は3人だけでグラウンドに向かう。

「遂に卒業か……プロでもバリバリ活躍してやるぜ！」

「目指せ1億円プレイヤー！」

「いいなそれ！　鈴井も一緒に目指そー」

「言われなくても目指すつもりだったよ」

年俸1億円、それはプロ野球界における一流の証。

ここを超えてこそ一流への道を歩き出したと言える、いわば大台。

「2人のコンビならプロでも名コンビになれるね、横浜を引っ張って行ってよ！」

「目指せ最下位脱出！」

「ハードルひく……くないか、その段階からだもんね」

「大変だとは思うけど、私達ならきつと大丈夫！」

横浜ブルースターズは、今世紀中の最下位脱出は不可能と言われたチーム。

彼女達の入団と親会社と監督の変化によって、チーム全体がどう変わるのか。

プロ野球界では密かに注目を集めている。

「それにしても……2人があの時まで付き合ってたにはビックリしたな」

「その話掘り返すか……」

「あれは伊吹ちゃんがヘタレたせいだから」

「てか鈴井だって自覚した時点で告れば良かったのに！ 私一人のせいにするな——」

——本当に、なんで今年まで付き合ってたんだらう。お似合いだと思ってたのに。

追いかけてくをする浜矢と鈴井を、微笑ましそうに見る千秋。

「まあでも、野球界最強のカップルとして名を馳せてやるぜ！」

「神田と志黄がいるから厳しくない？」

「それ言われると……いや、諦めてはいけない！ 神田も孤塚も越えてこそ、至誠の最強

バッテリーだろ!!」

——至誠最強バッテリーは監督と八神さんなんだけど……まあいいか。

「はいはい、ベストバッテリー賞でも獲る？」

「良いじゃんそれ、名実ともに最強バッテリーだ！」

「ふふつ、がんばれ2人とも！」

右腕を天に突き上げてそう宣言する浜矢に、クールながらも賛同する鈴井。

そしてそれを嬉しそうな笑顔で見守る千秋。

何があつても3年間変わらなかつた姿だ。

「せんばーい！ 写真撮りますよー！」

「今行くー！」

神宮が遠くから呼びかけ、浜矢が返事をする。

浜矢は無言のまま鈴井と千秋の方を見て、2人もまた無言のまま頷き返す。

そして誰が言う訳でもなく、目的地向かって走り出す。

「おつ、来たな……ほら真ん中集まって」

「監督も映りましようよ！」

「当たり前だ、タイマー起動させるんだよ」

「なるほど」

3年生が真ん中に寄り、その近くには2年生。

そしてその後ろに1年生と、監督に小林。

自動でシャッターが切られ、この空間が写真として切り取られる。

「ありがとうございました！」

「まだ動くな、3人だけで写真撮るから」

「……そういや3人だけの写真ってあんま無いな」

「女子高生っぽい事とかしてなかったもんね……お願いします」

3人だけで写真を撮ることになった。

センターを張った浜矢は、両サイドの2人の肩に腕を回す。

鈴井と千秋はそれぞれ片手に卒業証書を持ち、もう片方の手で浜矢の腰に手を回す。

「はい、チーズ！」

3年間過ごして初めて3人だけで撮った写真。

これからの人生で、ずっと心に残り続ける宝物となるだろう。

おまけ

短編集

『プレゼント大作戦!』

10月22日は私と鈴井にとつての一大イベント。

そのイベントとはそう、せんしゅーの誕生日。

「さあ鈴井! 今年もプレゼントを選ぼうじゃないか!」

「落ち着いてよ……で? 何か候補はあるの?」

「それが実は何も決まっておなくて……」

「それでよく選ぼうとか言えたね……まあ、私も決まっておないけど」

去年まではプロ野球の限定グッズだとか、日本シリーズのチケットだとか。

野球関連のレアな物をプレゼントしていたけど、今年は何となく別の物にしたい気分なんだ。

「なんとにかさー、女子高生っぽい物あげたい!」

「……三年間野球に費やして、女子高生らしい事を何もしてこなかった私たちが? 女

子力の塊みたいな美月ちゃんに？」

「いや、それはそうだけど……現実を突き付けないで」

せんしゅーはとにかく可愛い。可愛いのか。

オシャレだとかそんな事してこなかった私達が、せんしゅーの好みどストライクな物を贈れるかって聞かれたら……うん。

「鈴井もなんか案出してー！」

「無茶振り……無難にコスメとかは？」

「最近の流行りとか何も分からないし、鈴井はせんしゅーの好みの色とか知ってるの？」

「……ごめん、知らない」
ここうして振り返ってみると、せんしゅーって自分の事あんま話してくれなかったんだな。

私達というか、野球選手の事を聞いて喜んでたからなあ。

「本当はさ、別々に渡してどっちのがセンスあるか勝負したかったんだよ」

「伊吹ちゃんのセンスじゃ無理でしょ」

「はー？ 私は二年連続でせんしゅーと同じクラスだったんだけど？」

「練習中は私の方が一緒にいる時間長かったし、観察眼なら私の方が上だよ？」

だったらせんしゅーの好きな色くらい分かるだろ。

そう反論しようとしたけど、同じ言葉を返されるのは分かってたから黙っておく。

「……しようがない、やっぱ二人で一つ渡すか」

「そういえば美月ちゃんこの前、小林先生と手荒れについて話してたよね」

「そんな事あつたな……って、手荒れ？」

「うん、手荒れ」

この時私達の思考回路は一致してたと思う。

絶対にそう言い切れる自信はある。

「ハンドクリーム!!」

お互いを指差しあつて叫び合った。

手荒れに悩んでいる+女子高生っぽい物と言ったら、もうハンドクリームしかない。

「明日部活休みだっけ!」

「うん、明日すぐ行こう」

「現地集合でいい? 予算は?」

他にも見る店の候補を挙げたりして、この日の作戦会議は終わった。

そして迎えたプレゼント選び当日。

鈴井と一緒にショッピングモールに来ただけだ。

「人多つ……それにオシャレな人ばっかだ」

「まあ休日のショッピングモールだしね……とはいえ、これはなかなかの光景だね」

「鈴井もあんまこういうところは来ないの？」

「うん……普段はスポーツショップか本屋しか行かない」

女子高生とは思えない発言出たな。

いやまあ私も基本、スーパーとスポーツショップくらいしか行かないけどさ。

「じゃあとりあえず色々回ってみようぜ！ 実物見るのが一番！」

「だね、ここ限定の物とかもあるかも知れないし」

事前にメモしておいた店を回り、色々な商品を見た。

見たんだよ、何時間も似たような商品を見。

「ぜんっぜん分かんねえ……」

「どれが良いのかとか、全然知らないからね……」

もう少し高校生らしい事をしとけばよかった。

化粧はどうせ試合中に落ちるからしないとしても、化粧品とかはもつと調べておけば

よかった。

「……あのー、何かお探しですか？」

「て、店員さん！ 実は……」

あまりにも落ち込んでいたからなのか、店員さんが気を遣って声を掛けてきてくれた。

手荒れに悩んでいる子への誕生日プレゼントである事、何が良いのか全然分からない事を伝えた。

「その友人の方の、好きな匂いとかはご存知ですか？」

「せんしゅーの好きな匂い……？ 鈴井」

「えっ、そこは伊吹ちゃん知ってる流れでしょ。同じクラスなんでしょ？」

「いやいやお前ノックの時にめっちゃ近くにいるじゃん、知っておきなさいよ」

キャッチャーなんだから、目と鼻の先にせんしゅーいるでしょ。

てか私も同じクラスなのに何で知らないんだ。

「あつ、でも柑橘系の匂いしてることも多くない？」

「え、フローラルな方が多い気がするんだけど」

「あー……どっちもあるな」

「どっちの方が好きなんだろうね」

またしてもお互いの意見をぶつけ合って、結局結論が出ずに項垂れていると店員さんが何かを持ってきた。

「でしたらこちらの商品はいかがですか？」

「ハンドクリーム二本と……タオル？」

「ケア商品って事ですね」

「はい、そしてこちらのハンドクリームなんですが……一本がホワイトフローラル、もう一本がシトラスオレンジの香りとなっております」

まさかのどっちも揃っているセットが出てきた。

それだけこの二つの匂いは人気って事なのかな。

「試しに付けてみますか？」

「あ、お願いします」

店員さんがへらみたいなので少し掬って、手に付けてくれた。

ホワイトフローラルの方は、甘すぎずって感じでいい匂いだ。

「鈴井ー、そっちはどう？」

「凄く良い匂い、伊吹ちゃんも気に入っていると思うよ」

「どれどれ……あっほんとだ！ 自分用にも欲しいなー」

「伊吹ちゃん家事するもんね」

二本とも良い匂いがするし、きつとせんしゅーも喜んでくれるはず。

このセットの購入を決めて私達は堂々と店から出る。

今年の10月22日が月曜日で助かった。

去年だったら日曜日だから、部活も学校も休みの可能性があったんだよな。

「伊吹ちゃんおはよう……ってあれ？ 美希ちゃん？」

「せんしゅーおはよ！ そして誕生日おめでとー！」

「おめでとう、これプレゼントだよ」

「わっ……これ今話題のやつだよ！ 嬉しい〜！」

そんな事全く知らずに買ってたわ。

もしかして店員さんに乗せられていた可能性が？

「せんしゅー部活で水仕事とかよくやってるし、ハンドクリームが良いかなって……」

「今までは野球関連の物が多かったし、高校最後くらいは高校生っぽい物を渡したいっ

て思ってたね」

「……二人とも、本当にありがとう！ すっごく嬉しいよ！」

プレゼント大作戦は無事に成功し、せんしゅーはとつても喜んでくれた。

タオルだって普段から使ってくれてるみたいだし。

ただ一つだけ問題があるとすれば……。

「お、今日もそのタオル使ってるのか」

「はい！ 二人が選んでくれた物ですから〜」

「やっぱり先輩達仲良いですね！」

「……うん」

部活の時にも堂々と使つて、周りに見せびらかすのはやめて欲しい。

栗原とかが凄いい純粋な目で見てくるの、なんか恥ずかしくなるんだから。

『名前を弄るな！』

お正月は毎年鈴井とせんしゅーと一緒に初詣に行くのが、いつからか恒例となつていた。

今年も例に漏れず三人で神社まで来た。

「あつ、伊吹ちゃん売ってる」

「ほんとだー」

「……破魔矢じゃねーか」

この名前だからたまーに言われるけど、まさか鈴井が言うとは思つてなかつた。

普段はこういうボケをするタイプじゃないのに。

「伊吹ちゃん縁起物だったんだ」

「だから全国制覇出来たのかな？ なむなむ……」

「なむなむって……てか全国制覇は実力だけど？」

何で私は正月早々拜まれてるんだ、神様じゃないぞ。

神様仏様浜矢様って呼ばれるような選手にはなりたいけどさ、連投はNGだけど。

「せんばーい！」

「ん？ 石川！ 伊藤！」

「二人もこの辺りに住んでるんだったね、あけましておめでとう」

「あけおめですー！」

プレゼントの件で仲の良さを弄られたけど、この二人も仲良いよなあ。

というか私達より長い年数一緒にいるんだよな。

「鈴木先輩は何持ってるんですか？」

「これ？ 伊吹ちゃん」

「へっ？」

「ああ、破魔矢……」

伊藤は私達が今まで何の話をしていたのか察したのか、私の方に憐れみの目線をくれた。
た。

本当に伊藤は良い後輩だなあ、その先輩はこんなだけど。

「私もハマ先輩買おつかない」

「正月から不穏な話しないで？ 人身売買みたいになつてるから」

「ハマ先輩今日はツツコミますね！」

「誰かさんのせいだけだな……」

鈴井の方を若干の恨みを込めて見ると、すぐに目を逸らされた。

つーか石川も乗るなよ。

「てか揃いも揃つてボケ倒すなよ！」

「これが本当の正月ボケってね」

「やかましいわ」

今日の鈴井本当に大丈夫か、別人みたいになつてるけど。

今までの正月でこんなにボケてるとこ見た事ないぞ。

「おー、綺麗にオチつきましたね！」

「私の心は落ち着いてないよ」

「浜矢先輩意外とノリノリですね……」

「一度やったら最後までやり切るのが筋だろ？」

「伊吹ちゃんって変なところで律儀だよ」

変なのは今日の鈴井だよって言いたいけど、せつかく收拾つきそうな話が長引きそう

だから言わないでおく。

「そういえば破魔矢って……先輩の方じゃないですよ！　最後はどうなるんですか？　返すところまでは知ってるんですけど」

「お焚き上げするんだよ」

「えっ……ハマ先輩……」

「いや私が焼かれるわけじゃないから、というか人の名前を弄るな!!」

『バレンティン戦争』

2月14日は戦争だ。そう、チョコの獲得数という名の。

私浜矢伊吹は昨年夏の優勝投手かつ最上級生。

つまり多くのチョコを貰える可能性は高い。

「浜矢先輩！　これどうぞ、お返しはいらないので……!」

「ありがとう、嬉しいよ!」

「せ、先輩……私からも……」

「ふふ、本当にありがとう!」

予想通り校門に着いた時点で大人気だ。

可愛い後輩達に囲まれてチョココを渡されまくってる。これがドラァー投手のモテ具合か……。

「なにデレデレしてんの」

「げっ、鈴井！ さあ貰った数で勝負……!?!」

「残念だったね伊吹ちゃん、私は伊吹ちゃんより貰ってる自信があるよ」

何で一般的にカッコいいと思われる投手よりも、地味なイメージのある捕手の方が貰ってるんだ。

顔か？ 結局は顔なのか？

「ほら行くよ、美月ちゃんも待ってるでしょ」

「ちよっ、引つ張るなよ……もしかして嫉妬してる？」

「はっ!?! 別に!?! 今のどこに嫉妬する要素があるのか分からないんだけど」

私と鈴井は付き合ってる。

自分の彼女が不特定多数の女子からチョココ貰って、デレデレしてたら嫉妬するとかイライラするよな。私だって鈴井のそんな姿見たらムツとする。

「私も同じ立場だったら同じ気持ちになってたと思う、ごめん」

「別に気にしないでいいよ……はいこれ」

「え？ あっ、チョココ！」

「……一応、本命だから……じゃあね！」

何なんだよあれ、可愛すぎるだろ。

渡す時も目合わせてなかったし、顔真っ赤にして走ってたし。

何だったら今の私だって顔めっちゃ赤い気がする。

「あー……くそ、今のはズルいって」

悪夢のような現実

今日から初めての春季キャンプが始まる。

高校とプロでは全然レベルが違うだろうし、先輩たちに技術的な事を色々聞きたいな。

「緊張するなあ……」

「プロで通用する為にも、キャンプをしつかりこなさないとね」

「おうー！」

鈴井が居るだけで安心感が違うな。

やっぱり知り合いが同じチームにいるのは嬉しい。

「集合！ えー、私が今年度よりこのチームの監督を務める事になった、中山清美だ！」

なかやまきよみ

これからよろしくお願いします！」

「よろしくお願いします！」

「……しゃーす」

え、先輩達の声ちっさ。

一軍の人達とルーキーは声出してたけど、二軍選手の声全然聞こえなかったんだけ

ど。

「声が小さいぞー、もっと元気出していこう！」

「はいっ！」

「……………」

今度はガン無視かよ、しかもなんだこの雰囲気。

監督の言葉が無視するのが当たり前みたいな感じがある。

「……プロ以前に、社会人として挨拶が出来ないのとはどうかと思うぞ！　まずは大きな

声を出して、気持ち切り替えてプレーしないと！」

プロってこんな所から指導されるの？

いやそんな事は絶対に無い、ブルースターズがおかしいだけだ。

「まあいい！　ルーキー、指名順に挨拶してくれ」

「はっ、はい！　えーつと……至誠高校から来ました投手の浜矢伊吹です！　まだまだ

未熟ですが、皆さんに追い付けるように頑張ります！」

うーん、声だけじゃなく拍手すらも小さいな。

私以外が挨拶してもこんな感じだったし、もうチーム全体に染み付いてるのか。

「浜矢は今日ブルペン入れそうな状態か？」

「はい、大丈夫です」

「なら鈴井と一緒に入ってくれ」

「ルーキーって初日からブルペン入りしないイメージがあったんですけど……」

私が疑問を口にする、中山監督はニツと笑った。

「メデイアとファンへのサービスみたいなものだ、浜矢のおかげで今年は記者が沢山来てるからな」

「ああ……いつも少ないですもんね」

ブルースターズは現在暗黒真っ只中のチーム。

最下位が当たり前前で、シーズン終盤まで5位争いに食い込めたらファンが驚くレベル。

そんなチームに全国優勝投手が入団したら、まあ注目は浴びるよな。

「ただ初日から飛ばし過ぎるなよ、変化球は一球だけなら許そう」

「分かりました、鈴井行こうぜ！」

「うん」

ブルペンに移動しようとする、記者がほぼ全員付いてくる。

ずっとシャッター切られてるし気になっちゃう。

「こんなに注目されるとは……」

「ドラーだしね、まあいずれ慣れるでしょ」

ただ移動するのすらも緊張感があつたけど、何とかブルペンまで移動する。

軽いストレッチとキャッチボールから始め、立ち投げをしていよいよ投球練習開始だ。

私がマウンドに立って、鈴井が座つて構える。

今から投球練習が始まると分かつた記者は、一斉にカメラを構え出した。

記念すべき初球はど真ん中へのストレート。

投げる瞬間にシャッターを連続で切る音が聞こえて少しビビつた。

なんか集中出来ないけど、プロは常にこんな状況でプレーしてるんだ。

飛ばし過ぎないように、かつ本番を意識して30球投げ込んだ。

監督が一球だけなら変化球も良いって言つたのは、多分だけこういう意味だと思
う。

「ラスト！ スライドフォーク！」

「オーケー！」

フォークの握りを鈴井の方に向けると、今まで以上にカメラを向けられる。

この一球はここに来てくれる記者さんと、ファンの人達へのサービスだ。

冬の間は投げてなかったから、制球が定まらずワンバウンド。

だけど変化量は問題無いしこれから上げていけば平気だ。

「鈴木サンキュ！ 今日も投げやすかったよ」

「当たり前でしょ、受け続けてきたんだから」

「へへっ、そうだな！」

こんなチーム状況だし、鈴木が居なかったらおかしくなつてたと思う。

これに関してはブルースターズに感謝しないと。

ブルペン投球が終わつたら次は連携守備。

投手と捕手の間に転がるバントを想定して、連携を取り合う練習だ。

「じゃあ次浜矢ー！」

「はいっ！」

バントの処理はそこまで苦手でも無い、というか得意な方。

肩は強いから上手く転がされてもアウトに出来ることが多いし。

「よしっ、ナイス！ 良い動きしてるなー」

「あざーっす！」

鈴木も二塁送球やら何やらをノーミスでこなしてた。

けど意外だったのは、鈴木はプロの中では全然肩が強くない部類に入るって事。送球の弾道が正捕手の西森さんと全然違かった。

「鈴木はどうだった？」

「プロの壁を感じたよね……というより西森さんの肩が強すぎる」

「流石は正捕手だなあ」

西森さんは高卒でプロ入りした捕手。

高校時代から強肩強打の名捕手と呼ばれてて、プロでもその力を発揮している人。

ただ怠慢走塁が時々目立つのが玉に瑕。

「二人とも良い動きしてるな、流石は至誠出身だ」

「至誠出身ってだけでそんなに褒められるんですね……」

「けど実際ウチの卒業生って全員活躍してるしね」

ブルースターズでいうと八神さんがそうだ。

八神さんだって先発の二番手として、毎年のように二桁勝利を挙げている名投手だから。

「ねえあのルーキー二人さあ……気合い入り過ぎじゃない？」

「分かる、そんなにアピールしたいのかって思う」

監督との話が終わると、そんな会話が聞こえてきた。話していたのは二人とも二軍の選手だ。

「……アピールするのなんて、当たり前じゃないのかよ」

「ごめんな、ウチの失礼な奴らが」

「わっ！ って……西森さん！」

後ろから話しかけてきたのは西森さん。

髪を金色に染めていて見た目はちよつと怖い。

「たまーにだけど、二軍にはああいう奴もいるんだよ。大体がやつかみだと思うから気にするなよ、お前らのがあんなのより実力はあるんだから」

「はあ……あの、ブルースターズの二軍ってどんな感じなんですか？」

「二軍？ 地獄だよ」

そんなキツパリと言い切っちゃうのか。

いやでも少し分かるんだよな、あんな人達が居るんだから。

「なんだかんだプロで活躍してる先輩からのアドバイスだ……二軍にだけは絶対落ちるなよ」

「は、はい……」

「肝に銘じておきます」

二軍に落ちたら今以上にやる気の無い人しか居ないはず。そんなところに居てモチベーションを維持し続けられる自信なんて、私には無い。

キャンプ初日の練習は終わり、ホテルに戻る。

唯一信用できる鈴井とは常に行動を共にしている。

「いやー、ヤバかったな……あれがプロの姿か？」

「アマチュアレベル……はアマチュアに失礼だよね」

「そこまで言うか……分かるけど」

「小学生の方が返事もできる分まだマシだよ」

小学生と比べられるプロ野球選手って何だよ。

地元だし八神さんも居るから嬉しかったけど、やばいチームに入っちゃったな。

「こんなチームで大丈夫かなあ……」

「あはは、やっぱりそうなるよねー」

「ひっ、ごめんなさい!!」

あの先輩達に聞かれたのかと思って、謝りながら振り向くとそこには。

「や、八神さんに神浦さん！」

「おつかれー、大変だったでしょ？ 主にやる気の無さが」

「……まあ、そうですね」

「私達も同じ気持ちだから、気にしないでいいからな」

八神さんと神浦さんは同期入団した選手だ。

高校卒業後からブルースターズ一筋10年。

一体このチームの何に惹かれたんだろう。

「あの……お二人は、どうしてチームに残られたんですか？ 確かFAもしてましたよね？」

この二人はFA権を取得した年に行使した。

だけど結局は宣言残留したんだけど、二人なら引く手数多だったはず。

「ファン感でファンに止められちゃってね、他球団に行かないで“って”」

「あれ聞いちゃったら残るしかないよね……それに、私は優勝を見るから」

ブルースターズは一応、1960年と1998年にリーグ優勝と日本一を達成している。

後にも先にもこの二回だけだって言われてるけど。

「強かった頃の横浜が忘れられなくて、ずっと未練タラタラで残ってる」

「それにあんまこういう事は言いたく無いけどさ、横浜にいると活躍のハードルが低くなるから楽なんだよね」

「活躍のハードルが？ ……って、どういう事ですか？」

この二人は球界でも屈指の成績を残している人だ。

だから余計に言葉の意味が分からない。

「ほら、横浜って弱いじゃん？ という事は成績を残せている選手が少ないってわけ
……」

「投手は特にね。だから防御率3点台後半とかでもエース扱いされるんだ」

「そういう意味でしたか……」

時々野手でも投手でも凄い人は現れるけど、そういう時は周りがあまりにも酷すぎるってパターンが殆ど。

だから常に結果を残している二人は、横浜内では神のような存在になっている。

「だから伊吹も気楽にね、3点台なんてやったらもう浜矢フィーバーだよ」

「2点台目標なんですけど……」

「うちでそんな成績残したら、一瞬でエース扱いされるよ」

「そーいや横浜の2点台って全投手合わせても、確か三人くらいしかいなかった記憶が。」

4点台とかが普通にローテ入りするような投手陣なんだった。

「そーだ、私達からのアドバイス！」

「二軍には落ちるなよ……」

「それ先程、西森さんにも言われました」

鈴井がそう返すと、神浦さんは悠理なら言いそうと賛同する。

てか二軍がヤバイのは共通認識なんだ。

けど気合い入れて挑めば意外といけそうな気はするけどな、ライバルは少なそうだし。

「気合があれば二軍落ちても平気だと思った？」

「な、何で分かるんですか!？」

「そう言つて二軍で腐つていく選手を、私達は見えてきてるんだよ……」

神浦さんが凄く遠い目をして、八神さんが何度も頷いてる。

二軍つてそんなに酷い環境なのか。

「色々見てきたよ……すつごいウキウキでFAで出て行く選手とか」

「逆にトレードでうちに来た瞬間、ムードメーカーつて呼ばれてた選手から笑顔が消えたりとかね」

「うわあ……」

他にも練習中にサッカーしたり、そもそも靴を履いて来なかつたり。

試合中に全員がベンチにいる方が珍しいだとか、練習しちやいけない空気が流れてい

るだとかの話が聞かされる。

……拝啓監督、お元気ですか？

胸の高鳴りを感じながらプロへの扉を開いたら、悪夢のような現実がそこには待っていました。

ここで自分がずっと腐らずに居られるか、今から心配で仕方ないです。

短編集②

『最後の約束』

私の家族のことを知っている奴は少ないと思う。

至誠の中ですら鈴井とせんしゅー、それに監督くらいしか知らないはずだ。

けどどこかのインタビューでポロッと溢してしまったことがあるから調べれば出てくることだ。

ただまあ、自分からわざわざ離す内容でもない。

だけど一年の内のこの日は、若干の寂しさを心の隅で感じる。

「お墓参り行くの?」

「……んー、今年はちゃんと当日に行けそうだし」

「6日だっけ」

「そうそう」

9月6日がもう一人の母さんの命日だ。

去年はなんで行けなかったんだっけな……そうだ、確か秋大と被ってたんだ。

「私たちも行くよ」

「えっ」

「何？ 都合悪かった？」

「いや……別に」

私「たち」ってことは、せんしゅーも来るんだよな。

今までそんな事言っただけでなかったのに、何で今年になつて突然。

「……三年間も一緒にいたのに、一度も挨拶に行かないのは薄情かなって」

「そんな事無いだろ、それが普通だって」

「とにかく、今年は私達も行くから」

「りょーかい」

でも二人が来たなら母さんも喜ぶか。

最高の友達だって自慢してやろつと。

「年忌は？」

「そういうのは平気、9年目だから」

「……そうなんだ」

母さんが亡くなったのは私が10歳の時。

あれから生活が一変して、暮らしても苦しくなった。

何だかんだ高校卒業まで健康に生きられたのはラッキーだったな。

9月6日、亡くなった母さんの命日に私と鈴井、そしてせんしゅーは墓地に来ていた……訳ではない。

U—18の日程と被ってしまっているので、その数日前に来ている。

「作法とか調べたけど……あんまり自信無いなあ」

「自分で全部やる、はダメだからね」

「……じゃあその辺の落ち葉掃除よろしく」

「うん」

いつまで経っても鈴井には敵わないなあ。

一回墓前で合掌して、墓石に水をかけて雑巾で汚れを落としていく。

私以外の人が来たのも半年くらい前だし、だいぶ汚れちやつてる。

汚れを拭き取ったら打ち水をして、墓石を清める。

あとは母さんの好きだった花と、お供物を置く。

「伊吹ちゃん、こつちも終わったよ」

「サンキュ、後は線香だけだから」

ライターはマナー違反らしいから、ろうそくでお線香にまとめて火をつける。

右手で仰いで火を消し、せんしゅーと鈴井に一本ずつ渡す。

あとは香炉に立てて置いて置いて終わり。

「……お母さん、恵さんっていうんだ」

「そういや言つてなかったけ」

「初めて聞いた」

浜矢恵、それが亡くなったのは母さんの名前だ。

現在もご存命の方は明日香っていうんだけど、これも鈴井達は知らないか。

「……お母さん。伊吹ちゃんと出逢わせてくれてありがとうございます」

「えっ」

「私も……伊吹ちゃんがいたから、全国優勝が出来たと思つています。いつも伊吹ちゃんのことを見守つてくれてありがとうございます」

なんだなんだ、急にどうしたんだ二人とも。

いつもそんな事言つてくれないじゃんか。

「……てか、自己紹介が先じゃね？」

なんて、ツツコむ所がおかしいツツコミを入れてしまった。

「それもそうだね……伊吹ちゃんとバッテリーを組んでる鈴井美希です」

「マナージャーの千秋美月です」

むず痒いというか何というか。

自分の母親に友達が挨拶する時って、何でこう居心地が悪いんだろう。

「伊吹ちゃんも何か近況報告したら?」

「そうだな……母さん、やっと全国制覇出来たよ。U-18にも選ばれて、アジアと戦ってくるから……最後に、もう一度だけ試合を見て欲しいな」

今までで一番長く合掌をし、天国まで届くように想いを込める。

私がアジアの頂点に立つ瞬間を見届けて欲しいんだ。

「……私も捕手として選ばれました。必ず伊吹ちゃんをアジアの頂点まで導いてきます」

「鈴井……」

せんしゅーは何も言わなかったけど、誰よりも手に力を込めて合掌していた。

きつと、いや絶対私達の想いは母さんに届いているはず。

「……よし、帰るか」

「必ずアジアの頂点に立つよ、お母様の為にも」

「ああ、当然だ!」

「テレビの前で応援してるからね!」

この後本当にU—18で優勝し、私とその瞬間にマウンドに立っていたのはまた別の話。

『美しき姉妹愛?』

「さあオーロックスだ! 神田だー!」

「煩い……神田を打ち崩したいのは分かるけど」

今日はオーロックスとのオープン戦。

神田が先発してくるらしいから、決勝の再現という事で客も記者も大勢。

「あつ、神田いたよ」

「マジか! 煽りに行こーつと」

「私も宣戦布告しようかな」

鈴井も大概物騒なこと言うよな。

いや人のこと言えないんだだけどさ。

「神田ー……つて、ああ!」

「だから煩い、どうしたの? ……神田さんだ」

翠嵐の方じゃない、朱里さんの方だ。

最強姉妹が仲良さげに話している姿は、なんかこう……美しい。

「あれ？ 君たちは……」

「浜矢と鈴井、決勝で戦った相手だよ」

うわ、神田が凄い優しい顔してる。

やっぱり朱里さんの前だと本来の神田が出てくるって感じなのかな。

「初めまして、神田朱里です。翠嵐から話は聞いているよ……実は戦えるのを、ずっと楽しみにしていたんだ」

「じゅ、朱里さんと戦えるなんて光栄です……！」

「……初めてプレーを見た時からずっと尊敬していましたが、お会いできて嬉しいです」

緊張で心臓バクバク言ってるんだけど、鈴井も意外と興奮してる。

鈴井がこんなに嬉しそう顔してるのって珍しいな。

「甲子園のスターにそう言ってもらえて嬉しいよ……けど、オープン戦とはいえ真剣勝負だ。負けないよ」

「はっ、はい！」

「絶対負けません！」

「ふふっ……じゃあまた、試合で」

朱里さんは手を振りながら去っていった。

手の振り方だけでもスマートで、生きてる世界が違うって感じ。

こんな人と話しちゃって、私明日死なないかな。

「浜矢、鈴井……今度こそ負けないからな」

「上等！ 朱里さんも神田も、全員抑えてや……朱里さんは無理かな」

「締まらないな……まあ賢明な判断だと思うぞ、姉さんをそう簡単に打ち取れると思うなよ」

「球界の生きるレジェンドをそう簡単に打ち取れるとは思ってないって」

というか姉さんって呼んでるんだ。

10個も離れてたら意外と距離あるのかと思ってたけど、全然そんな事無いんだなあ。

「朱里さんは無理かも知らないけど、神田は抑えるし打つからね」

「言うじゃないか……良いだろう、その勝負受けて立つぞ！」

「最強姉妹がなんだ！ 優勝バッテリーがやってやらあー！」

この後の試合で、朱里さんに2打数2安打4打点とボッコボコにされた挙句、神田にも5イニングでチーム全体で2本しかヒットを打てなかったなど、完全に格の違いを見せつけられて負けました。

『二人の高卒ルーキー』

室内練習場に木製バットの乾いた打球音が響く。

豪快なスイングで痛烈な打球を放つ背番号55は、蒼海大相模からドラフト5位で関西ジャガーズに入団した佐久間玲。

鍛え抜かれた肉体とスイングの鋭さは、高卒の下位指名ルーキーだとは思えない。

「ナイスバツティング」

「孤塚……私は打撃でしかアピール出来ないしな」

「脚もあるでしょ」

同じくドラフト3位で指名された孤塚志黄は、隣のケージに入ってバツティングを始める。

佐久間とは対照的に、孤塚はまだ木製バットの感覚には慣れていないようで詰まった当たりを連発していた。

「やっぱり打撃に関しては玲の方が何倍も良いね、羨ましい」

「二軍に上がるには打撃でアピールするのが一番だが、最終的には守備も上手い奴が使われるんだ。それにお前は捕手だろ？ 守備が重視されるポジションだぞ」

「そうなんだけどね……」

——流石にここまで打てないのは厳しいって。

既にオーブン戦を10試合こなした。

彼女達ルーキーは積極的に起用され、全試合出場を果たしていた。

成績は佐久間が23打数6安打、261、1本塁打5打点。

孤塚は25打数5安打、200、打点2。

佐久間の方は高卒ルーキーとして考えた時に上出来と言えるが、孤塚の方は満足いく結果とは呼べない。今のところ一軍昇格は佐久間の方が近い。

「お前のスイングは縮こまりすぎなんだ、もつと振り抜け」

「それやるとただでさえ低い打率が更に落ちそうで……」

「……お前は、私と違ってミート力があるだろ。多少強く振ったところで劇的に変わるものか、むしろ強いスイングが出来る分打球は飛ぶぞ」

「そういうものなのかな……次の試合から試してみる」

佐久間のアドバイスが彼女にハマったのか、孤塚はここから連続試合安打を放ち始める。

それに負けじと佐久間も安打を増やしていき、開幕には球団史上初となる高卒ルーキー二名の一軍入りが決まったのであった。